黙阿弥全集

第十巻

解説

慶應の頃、江戸の粋士、通人、墨客の間に、繪合せといふものが流行した。續いてその前後ずつと後までも「惡摺り」といふ樂屋落式の、一種の諷刺畫が盛んに作られた。興畫會といふ繪合せ連中の間にも惡摺りがよく作られた。玆に出したのはその興畫會連中の一人であつた默阿彌の惡摺りである。其の頃柴田是眞が李龍眠の十六羅漢を購つたことが評判であつたのを早速趣向の種にして、會の中の領袖株十六人を落合芳幾が畫漢（羅漢のシャレ）像に見立てゝ描き、一人を一幅づゝの掛軸に仕立て、ある時の會に會衆をアッと言はせたことがある。後にそれを縮摸して、左の如き戲文の略傳を附し、「興畫山案景寺什寶、戲遊民筆、十六畫漢之摸寫縮像、並に惡緣起、完」と題した小冊子が成つた。これは、默阿彌に關した「畫漢像」（左）と「摸寫縮像並に惡緣起」（右）である。

新羅婆袈選者は舞臺山に新狂戲別傳を說法し給へば歌舞の菩薩耳を傾け許多の見佛凡眼を驚かせり筆頭の妙智力神通自在にして目前を變る事釋迦八相を一ト目に見るが如し業法の間には興畫國に來り畫漢の中に列れどもあせりて景品を得る事を要せず唯披口說法を勤行として惡羅漢達の惡意に組せず近く交りて遠く退き劍呑經は開く事なき勤身堅固の大畫漢なり。（假名垣魯文の筆と傳ふ。）

解説

慶應の頃、江戸の粋士、通人、墨客の間に、繪合せといふものが流行した。續いてその前後少しく後までも「悪摺り」といふ樂屋落ちの、一種の諷刺畫が盛んに作られた。興畫會といふ繪合せは連中の間にも悪摺りがよく作られた。茲に出したのはその興畫會連中の一人であった默阿彌の悪摺りである。其の頃柴田是眞が李龍眠の十六羅漢を擬したことが評判であったのを早速趣向の種にして、會の中の領袖株十六人を寄合芳幾が畫漢（羅漢のシャレ）像に見立てゝ描き、一人が一幅づゝの掛軸に仕立て、ある席の會に會衆をアッと言はせたことがある。後にそれを縮模して、左の如き戯文の略傳を附し、「興畫山參景寺什寶、戯遊尽筆、十六畫漢之模寫縮像、並に悪業起、完」と題した小冊子が成った。これは、默阿彌に關した「畫漢像」（左）と「模寫縮像並に悪業起」（右）である。

新羅漢發起者は舞臺山に新狂言を説法し給へば歌舞の菩薩耳を傾け許多の見物凡眼を驚かせ筆頭の妙智力神通自在にして目前を變る事釋迦八相を一々目に見るが如し業法の間には興畫圖に來る畫漢の中に列なりたるもあせりて景品を得る事を要せず雅號口説法を勤行して悪羅漢達の悪意に組せず近へ交りて遠へ退き劍呑經は聞く事なき別身堅固の大畫漢なり　（假名垣魯文の筆と傳ふ。）

第十六新羅婆架選者

新羅婆架選者ハ舞臺山ニ新狂戯別傳を説法あへバ欲深の菩薩耳を傾け許多の見佛凡眼を驚かせり筆頭の妙智力神通自在ニして目前に変る変化釈迦八相を下国ニ見すがやし業法の間ニ具画圖ニ来り画漢の中ニ別且とあわせて業品と撰ミと要せむ唯披口説法と動行きて悪羅漢達の聖志ニ組せむ近く来りて遠く退き剣香経の開く宜ふべき動身世国の大画漢なり

十六画漢霊験起草

豊原国周筆
吉備大臣公
市川團十郎
安禄山
関三十郎
呉懐賓
市川権十郎
河竹其水

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第十卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集 第十卷目次

挿繪目次

ざゞんざう　和田義盛大寄比ちやうど三日三　新暦賀酒宴の榮
たふ濱松に　　夜にあたつて
ハテ珍らしい　譽田忠勝が待請に　鳥井忠基が新參年男
對面は　山縣昌景が取持に　馬場信房更名年禮
駿州の　岡部賤機暴命の應接　曾我に准へて
花澤に　文明に競ふ姉妹の身代　親族の記念送
遠州の　鳴瀬鳥井が確執の議論　曾我に准へて
濱名に　開化に結ぶ兄弟の契約　戰場の十番切

扨大將の命により櫓へのぼり見わたせば名におふ雲霞の甲州勢味方は小勢に軍帥も百計盡きて打死とすでに覺悟を四天王十六將をはじめとして必死をきはめし其折柄隣國小田の加勢を得第一番より二番目までそなへを立て押しいだせば所詮およばぬいりまめに花咲く春の初芝居しかも追儺の一戰にさいさき祝ふ福はうち

御贔屓楯大敵對

太鼓音智勇三略

「酒井の太鼓」は明治六年三月、作者五十八歳の時、村山座に於て書卸された。作中濱松城内太鼓櫓の一場は、後に新歌舞伎十八番の內に加へられたほどで、九世團十郎(其當時は權之助)の當り藝となり大好評であつた。團十郎も其の頃の境遇上、無人芝居でもあり、特別の努力を拂ひ、又不和であつた菊五郎と一座し、鳴瀨東藏、鳥井四郎左衞門に扮して、舞臺上に和解の實を示して當て込み、特に「開化を知らぬは愚でござつた」と、双方刀槍を收めるの件は、その頃頻りに唱へられた文明開化等の新熟語を驅使した點に於て喝采を博した。篇中億川は德川をもじつたものであること、言ふまでもない。此時團十郎の句に「節分や太鼓にあたる豆の音」といふのがあつた。

書下しの時の役割は、河原崎權之助(鳥井四郎左衞門、億川善三郎、酒井左衞門尉忠織)、尾上菊五郎(鳴瀨東藏正員)、市川門之助(鳥井の妻松江、忠織の姉伏屋)、關三十郎(鳥井の若黨逸平、馬場美濃守信房)、坂東家橘(櫻井庄司、駒井右京、億川家康)、中村時藏(鳴瀨の若黨三平、鳥井彥右衞門忠基)、河原崎國太郎(鳴瀨の妻小笹)、中村歌六(億川の御臺常磐井)、中村壽藏(山縣三郎兵衞)、尾上榮三郎(鳴瀨の下女お民、本田の妹梅ヶ枝)等であつた。

挿畫にしたのは、國周筆團十郎の酒井と、五世菊五郎の彥右衞門の舞臺寫眞とである。

大正十四年四月

校訂者

市川團十郎
演藝百番

太鼓音智勇三略（新歌舞伎十八番の内、酒井の太鼓――四幕）

序幕

濱松五社明神の場

〔役名――鳴瀨の若黨三平、鳥居の若黨逸平、甲州浪人繩無理之助、同宮田鄕右衞門、同望月甚八、同石坂甚平、茶見世亭主權兵衞、酒屋丁稚長松。鳴瀧の妻小笹、同下女お民。〕

（五社明神鳥居先の場）――本舞臺三間の間、正面石の鳥居、左右同じく玉垣、後本社、廊下を見たる一面の遠見。上下梅林、日覆より同じく釣枝、下の方に葭簀張りの出茶屋、總て濱松五社明神鳥居先の體。床几二脚ほど並べ、こゝに○△□◎の百姓四人床几に掛り、權兵衞出茶屋の亭主にて茶を運んで居る、此の見得大拍子にて幕明く。

○　時に田子作や、やうく穩かになつていゝかと思つたら、又今度、甲州と此遠州との大戰が始まるといふことぢやが、何と困つたものではないか。

△　そりやあ何にしろ困つたものぢや、全體甲州の信玄といふ人は、心掛けのよくない人で、小さい時分に現在の親を殺した人でなしぢや。

□　その上自分の娘の緣者、駿州の今川家の義元公が討死をして、氏實樣の代となると、其領分を橫

領するとは、面の憎い奴ではないか。
◎　まだ其外に遠州から、三州一圓攻め取らうと、戰を仕掛けに來るさうぢやが、亂世の時分には、何でも人は強い者勝ちぢや。
○　掛け構ひのないこちとらは、どつちが勝たうが負けようが、構はぬとはいふものゝ、そこが何とやらも釣り方でなう。
△　さうとも〳〵、殊に長年御領分で、御恩澤を蒙つて居れば、御領主樣は親も同然
□　今に戰が始まつたら、おとし穴でもこしらへて、甲州勢をおびき込み、
◎　竹槍の一本づゝも、お見舞ひ申してやらうではないか。
三人　それがいゝ〳〵。（トこれを聞き、亭主權兵衞前へ出て、）
權兵　もし〳〵皆さん、そんなに甲州の事を惡く言はつしやると、大きな目に逢ひますぞ。
四人　はゝあ、そりや又なぜに。
權兵　此頃この濱松へ、甲州浪人が三百人程乘込んで來て居りまして、何が甲州浪人だといつて御城下近くを暴れ廻り、亂暴をして歩きますから、もしそいつらに聞かれたら、大きな目に逢ひますぞ。
○　はゝあ、そんなら甲州から三百人ほど、浪人者が來て居るとか。

△　そりやあ丁度幸ひぢや、思入れ惡く言つて喧嘩をこしらへ、
□　百姓仲間が一致しても、千人位は集まるから、
◎　鉦と太鼓で追ひ散らし、懲り〳〵させてやらうではないか。
權兵　はて、それが下々の口元了簡ぢや、向うは何でも喧嘩賣はうと賣りに來て居る亂暴人、もしもそれにかゝらかへば、直に國へ取つて返し戰を始める下心、所がこつちの御領主樣は御仁心が深いゆゑ、戰を始める其時は下々が難儀をするから、甲州の浪人者に決して手出しをしてはならぬと、其の儘にしてお置きなされば、向うはそれをよい事にして段々惡さが強くなり、此頃では仕度い三昧、何と面の憎い奴等ではござらぬか。
○　はゝあ、それぢやあこつちの見世などへも、定めて毎日來るであらうの。
權兵　いやもう參りますとも〳〵、日には幾度も參りまして、茶は飮みたふす菓子は喰ひ倒す、錢はいつでも拂ひませぬが、拂つて行くのは大言ばかりでござります。
□　それは何にしろけんのんぢや。
△　そんな奴等に出逢はぬうち、
◎　少しも早く歸りませうか。

權兵　それがよろしうございます。
四人　そんなら御亭主、
權兵　お早くお歸りなされませ。
四人　さあ、行きませう。（百姓四人上手へはひる。此時花道の揚幕にて）
皆々　うしやあがれ〳〵。（ト權兵衞これを聞き、向うを見て、）
權兵　そりやこそな〳〵、噂をすれば影とやら、又暴れ者がやつて來たぞ。どれ、菓子箱でも片附けておかうか。
ト權兵衞そこらを片附けて葭簀の蔭へはひる。大拍子になり、花道より繩無理之助、宮田鄕右衞門、望月甚八、石坂甚平、何れも着附、馬乘袴、大小下駄がけ、浪人者のこしらへにて、長松酒屋の丁稚にて二升樽を提げたるを引摺りながら出で、花道にて、
長松　もしお侍樣、どうぞ堪忍して下さりませ。
無理　いゝや、了簡罷りならぬ。武士たる者に樽を打ちつけ、其分にて濟まうと思ふか。
鄕右　左樣とも〳〵、狹いやうでも廣いといふ、此の濱松の城下の通り、
甚八　横に車の二升樽、あとに續いた我々まで、

甚平　いかに酒屋の素丁稚とて、呑んでかゝつた致し方、

無理　きり〳〵あれまで、

四人　うしやあがれ。（ト右の鳴物にて皆々舞臺へ來り、敵役四人長松をよろしく引摺ゑる。）

長松　もし〳〵お侍様、使ひに行くのが遲くなると、旦那さんに叱られます、どうぞ堪忍して下さりませ。

無理　いゝや、了簡相成らぬ、われ〳〵共は明日が日にも、いで戰爭と申す時は、命を的に働く身分。

郷右　それに何ぞや町人風情が、斯く白晝に酒を喰ひ、ふざけ廻るは不埒千萬。

甚八　おのれのやうな丁稚めが、酒を持つて行けばこそ、又呑むやつもあるといふもの。

甚平　斯樣なやつは以後の見せしめ、天誅に行ひませうか。

無理　何さま、それがよくござる。それへ直れ、眞ッ二つにいたす。

ト刀の柄へ手を掛ける、こゝへ葭簀の蔭より以前の權兵衞出て、よろしく留め、

權兵　まあ〳〵、お待ち下さりませ。

郷右　わりやあ、馴染の茶見店の亭主、

甚八　何ゆゑあつて、

四人　妨げいたす。
權右　いえ、妨げはいたしませぬが、何を申すも相手が子供、お詫言をいたしませうと。
甚八　然らばそちに任せるから、われ〳〵共へ趣意を立てろ。
權兵　へい〳〵よろしうござりまする。（ト此内長松めそ〳〵泣いて居るゆゑ權兵衞側へ來り、）これ〳〵長松、どうしたものだ、貴樣もあゝいふお侍樣に出ツくはしたら仕方がねえ、其の樽をおいて早く逃げろ。いやさ、酒を出してお詫びをしろ。（トいへども長松かぶりを振るゆゑ、）えゝ、いゝ、さけ〳〵呑込みの惡いやつだ。（ト氣を揉むことよろしく。）
長松　それでも樽を取られると、家へ歸つて叱られる。
權兵　はて、そこはおれが一緒に行つて、旦那に譯を話してやるから、まあ〳〵己に任せておけ〳〵。（ト樽を持つてこちらへ來り、）へい〳〵皆樣へ申し上げます、何かあれなる長松が不調法をいたしたとのこと、定めてお腹も立ちませうが、何を申すにも子供の事ゆゑ御勘辨下さりまして、是れなる御酒を御機嫌直しに、召しあがつて下さりませうなれば、へい〳〵有難うござりまする。
　　　トよろしく詫びる。これにて四人顏見合せ思入あつて、態と堅くなり、
無理　やあ默らう、こやつ酒さへ出して詫びをいたせば、事が濟むと思ひ居るか。

郷右　われ〳〵共を見下げた計らひ、いよ〳〵以て了簡ならぬぞ。素丁稚めを、
無理　郷右　それへ出せ。（トきつとなるを甚八留めて、）
甚八　何さま、貴殿の御立腹は御尤もでござるなれど、毎日來ては厄介に相成る、茶見世の主人が扱ひ
なれば、
甚平　彼に免じて了簡いたすも、肴の工面を、いやさ、酒屋の丁稚が無禮の段は、亭主に免じてお免し
なされい。
無理　何れもの仰せがなくば、了簡ならぬ奴なれど、
郷右　今日は差許す。以後をきつと愼み居らうぞ。
權兵　それは早速のお聞き濟み、有難うござりまする。これ長松、御勘辨を願つたから、お禮を申して
早く行きやれ。
長松　それでも、あれをおいて行つては。
權兵　はてまあ、一緒に來いといふに。（ト權兵衛長松を無理に引張つて下手へはひる。四人思入あつて、）
無理　先づ、酒は首尾よく召上げました。
郷右　此の上は亭主に言附け、燗をさせて呑みませう。

甚八　こりや、亭主は居ぬか、亭主々々。（ト呼べど、居ぬゆゑ、）
甚平　いや、あの亭主め、小僧をかこつけに逃げ居つたと相見える。
無理　われ〳〵共を見世へおき、寄附かぬとは憎き奴。
郷右　此の返報には、見世にある道具でも損じさせ、懲り〳〵させてやりませう。
　　ト甚八茶釜へ手を當て見て、
甚八　いや、火まで消して行き居つたか、茶釜の湯が冷たうござる。
甚平　然らば燗をいたさずに、冷で呑むといたしませう。
無理　然し、そこらに何ぞ肴が。（ト是れにて郷右衛門葭簀の蔭より、皿に載せたる鯣を持出で、）
郷右　肴は、これに鯣がござる。
甚八　いや、鯣とは好もしいな。
甚平　酒に鯣の肴では、品よく呑めませう。
無理　酒が出來て肴が出來、成らうことなら此上に、酌が一人欲しうござるな。
郷右　左樣々々、何でも酒には別品が、交つて居ねば浮れませぬ。
甚八　いや、別品と申せば、只今城下の出口にて、ちらりと見掛けし女連れ。

甚平　何れの家中の女房なるか、供に連れたる女まで、なか〱あく〱の脱けたる別品。

無理　何でも是れなる明神へ參詣の樣子ゆゑ、やがて是れへ參るでござらう。

鄕右　此の所へ參つたら、否應なしに側へ引附け、酒の相手をさせませう。

甚八　それも素面では何とやら、先づ兎も角も始めませうか。

甚平　何さま、それがよくござらう。どれ、お酌をいたさうか。

トこれにて皆々茶見世の筒茶碗へ樽の酒をつぎ、捨ぜりふにて酒盛りになる、三味線入り大拍子になり、花道より小笹丸翁屋敷女房のこしらへ雪駄にて出る、跡よりお民同じく召仕へのこしらへにて、附添ひ出來り、花道にて、

小笹　とかうする內もう向うは、明神さまのお社なるが、さうしてあの三平は、まだ跡から見えぬかいなう。

お民　さあ、あなた樣がお百度をお上げなさると承はり、緡を求めに參りましたが、未だに以て見えませぬ。

小笹　さあ、今日あれなる明神さまへお百度を上げるのも、夫の武運を祈りの爲め、このたび當家と甲州の武田との戰爭は、相手の敵が大軍ゆゑ、どうぞ御勝利あるやうにとお願ひ申す神詣で。

お民　殊には父私も、今日のお供はいたしますれど、久方振りの參詣ゆゑ、勝手わからぬ不束に何れもさまのお指圖を、きくの師匠を力草、此末ともに御贔屓を重ね扇のお引立て、偏に願ひ上げまする。(トよろしく見物へ辭儀をする。)

小笹　それに附けても三平は、もう見えさうなものぢやなあ。

お民　もう追附け參りませう、お宮へお越し遊ばしませ。

小笹　そんならお宮へ、お參り申して。

お民　さあ、お越し遊ばしませ。(ト右の鳴物にて兩人舞臺へ來る、四人これを見て)

四人　そりや、別品が參つた〳〵。(ト四人にて小笹お民を取卷く、兩人びつくりして)

小笹　何れのお方か存じませぬが、私共は參詣のもの。

お民　お通しなされて下さりませ。

無理　いや、其參詣は元より承知、さつき城下の出口にてちらりと姿を見受けたゆゑ、大方これへ參るであらうと、待受けをいたして居つた。

鄉右　こりや〳〵女中、斯うして男に取卷かれたら、どんな事でもされようかと、びつくりいたすであらうなれど、

甚八　甲州武士に限つては、女には別して優しく、手荒いことは決していたさぬ。
甚平　左樣々々、武道を磨くわれ〳〵なれど、世俗で申す酌は髱。
無理　女でなければ、夜も日も明けぬ、酒の相手を、
四人　いたしてくりやれ。
小笹　左樣でもござりませうが、私共は心願あつて、明神さまへ七日の間鹽斷ちをいたして居ります
れば、
お民　折角のお賴みながら、御酒のお相手は出來ませぬ、お許しなされて下さりませ。
鄕右　いや〳〵、假令鹽斷ちをして居らうとも、酌をするのに仔細はあるまい、是非とも相手をいたし
てくりやれ。
小笹　いえ〳〵、それでは、
小笹
お民　明神さまへ。
甚八　只今宮田がいふ通り、酒を呑めといふではなし、酌位いたしたとて滿更罸も當るまい。
甚平　こりや兎やかう申さうより、一人づゝ引附けませう。
三人　何さま、それがようござらう。

四人　さあ〳〵、こつちへ寄つたり〳〵。

卜無理之助鄕右衞門は小笹、甚八甚平はお民を引附け、無理に床几に掛けさせようとする。

小笹　こりやもう、いつそ跡へ戻つて。

無理 鄕右　どつこい、さうは逃さぬぞ。（卜抑へるを、）

小笹　え〻もう、お止しなされませ。

卜これより早めたる神樂になり、小笹振拂つて花道の方へ逃行く、無理之助鄕右衞門これを追ひ掛けて行く、お民も振拂つて行かうとするを、甚八甚平にて抑へ附ける。此時ばた〳〵になり、花道より三平ぶつ裂き羽織大少袴股立、若黨のこしらへにて出來り、花道にて無理之助鄕右衞門の兩人を支へ、小笹を後へ圍ひきつと見得、小笹お民三平を見て、

小笹　そなたは三平、よい所へ、

お民　よう來て下さんしたなあ。（卜是れにて四人の敵役思入あつて）

無理　さてはおのれは、此の女の、

鄕右　家來と見えて、支へだて、

甚八　道おつぴらいて、

四人　通しやあがれ。（卜きつと言ふ、是れより替つた鳴物になり）

三平　いゝや、さうはなるまい、何か樣子は白梅の浪花育ちも御贔屓の、絲を便りにやう〱と登る吾妻の大空に、身幅も狹き奴凧、そのお仕着も一枚か、二枚の紙で張交ぜが、風を含んでのす氣でも、竹の骨より細腕に、張りの弱身に輪を掛けて、うなりの音さへ通らざる、まだ御當地は初霞今日が絲目のお目見得も、幾筋となくお引立て、偏に願ひ上げまする。

トよろしく見物へ辭儀をする。敵役四人思入あつて、

無理　そんならわれは此の土地へ、昨日今日なる新參者。

鄕右　さう聞く上は、猶以て、あれへ引連れ一議論。

無理　きり〱あれへ、

無理
鄕右　歩びやあがれ。

ト是れにて皆々舞臺へ來り、甚八甚平もお民を放し、三平を敵役四人にて取卷き、

無理　こりや下郎、それへ出い。女ばかりと存ずるゆゑ、武士道磨く我々が相手になるも大人氣なく、

鄕右　荒き詞もやはらかく、酒の相手をいたしてくれと、酌を賴むに聞き入れなく、恥辱を與ふるのみならず、

甚八　假令下郎の分際でも、大小たばさむ侍が道を遮りわれ〱に、挨拶いたすは面白い。

甚平　察する所此の場にて、眞劍勝負をいたした上、一分立てる心底ならん、如何にも勝負を、

四人　いたしてくれん。

トきつとなる。是れにて小笹、お民、三平の袂を引き短氣を出すなといふこなし、三平呑込んでこちらへ來る。合方になり、

三平　これは〳〵何れも樣、只今あれにて私がお邪魔をいたしたそれ故に、武士の一分立たぬなどゝ、あなた方へお懸合ひを申すかとのお見込みは、御尤もではござりまするが、なか〳〵以て左樣な儀を申す心はござりませぬ。何をお隱し申しませう。これへお供をいたしましたは、私主人の奧樣にて、今日當所の明神樣へお參詣にお出での所、道にて後れお跡から、參る途中で今の御樣子見るに忍びず支へましたは、主人を大事に思ふゆゑ、御立腹もござりませうが、此場の事は此場ぎり、御勘辨下さりまして、お濟ましなされて下さらば有難うござりまする。

トよろしく詫びる、四人の敵役顏見合せ思入あつて、

無理　さては、汝は當國濱松の、

四人　家中なるか。

三平　各方の仰せの通り、如何にも手前は濱松の、

四人　こりや面白くなつて來たわえ。

三平　何とおつしやる。(ト合方きつばりとなり、)

無理　外の家中の者なれば、又勘辨もいたさうが、一旦結んだ和睦も破れ、敵となつたる濱松の家來とあれば面白い。

鄕右　假令又者なればとて、大小差せば侍分、今は互ひに戰爭と相成る時は敵味方。

甚八　其の攻口のこゝかしこ、地の利を測る其の爲めに、當所へ入込む甲州浪人、よも見脫してはおかれまい。

甚平　して、濱松の家中にて、何といふ名の侍の、おのれは下郎か其姓名、きり〳〵こゝで、

四人　ぬかしてしまへ。

三平　これは又迷惑千萬、假令今にも敵味方と相成るにせよ、それまでは相身互ひのお侍、其姓名を名乘る儀は、何卒只管御宥免。

無理　いゝや宥免相成らぬ、望みかゝつた其姓名。

四人　是非とも承知いたしたい。

三平　假令何やう仰せあるとも、其姓名を名乘る儀は。

郷右　然らば、われ〳〵四人の者が、是れにて姓名名乘つて聞かせん。
甚八　さすれば汝も姓名を、よも名乘らずには居られまい。
甚平　それでもわれは、名乘られぬか。
三平　あいや其のお名前は承はりますまい、御姓名を承知の上、名乘らぬ時は却つて失敬、先づ〳〵其儀は御宥免を。
無理　なぜ又左樣に姓名を、汝は申し、
四人　聞かされぬ。
三平　申されませぬ其の仔細は、今日主人へ内々にて、これにお出での奧樣を、お供いたしたそれゆゑにどうもあらはに姓名は。（ト是れにて敵役四人せゝら笑ひ、）
無理　不便や、こいつ腰が拔け、立合ひ負けがいたしたな。こりやよく承はれ、假令主人へ内々にて今日供をいたさうとも、名乘り掛けられ侍が後へ引くのは大きな恥辱、主人の名前を出されぬ程われ〳〵共が怖いのか、いやさ、其大小は犬脅しか、それでもわりやあ侍か。
ト三平の刀の柄を足にて蹴返す、これにて三平むつとして、
三平　こりや、侍の魂を。（トきつとなるを、小笹袂を押へ、）

小笹　こりや三平、たゞ何事も無念をこらへ、夫の詞はこゝちやぞや。
　　ト目まぜにて呑込ませる、是れにて三平餘儀なく控へる、郷右衛門これを見て、

郷右　何だ〳〵、今見て居りやあ目をむき出し、刀の柄へ手を掛けるは、われ〳〵共と立合ふ氣だな。面白い立上れ、此の場に於て勝負いたさう。さあ、其刀にて立上れ、えゝ張合のねえ腕なしめが。
　　ト、同じく三平の刀を足にて蹴るゆゑ、三平たまり兼ね、

三平　こりやもう、どうも。（ト立上らうとするを、お民縋り留め、）

お民　これ三平どの、必ずともに短氣なことを。（トよろしく留める、四人の敵役は顔見合せ、）

甚八　さて〳〵遠州侍は、意氣地がねえと噂に聞けど、よも是れ程ではあるめえと思つて居たが噂の通り、眼前敵の甲州武士に、惡口されて土足に掛けられ、

甚平　それで手出しが出來ねえとは、よく〳〵意氣地のねえ奴等だ、是れで大概遠州侍めらの相場は知れた。

甚八　見りやあ見るほど、

甚八
甚平　みじめな面わえ。
　　ト甚八甚平、三平の顔へ唾を吐き掛ける。三平無念を怺へきつと思入。小笹お民左右より縋つて宥め

る、此時上手より逸平ぶつ裂き羽織、大小袴股立の若黨にて出で、後に窺ひ居る、敵役四人は是れを知らず。

無理　然し、斯樣な腰拔けを、討果すも不便なれど、

鄉右　犬を切るより少しは增し、まことの武士の刀に掛け、

甚八　賽の目切りにいたしてくれう。

甚平　覺悟極めて、

四人　それへ直れ。

小笹　そんなら、是れ程になされても、

お民　まだ慊らで、三平どのを、

四人　刀の錆だ、覺悟いたせ。

ト四人刀を拔き切つて掛かる、こゝへ逸平出で、四人を投げ退け眞中にてきつと見得、三平、逸平を見て、

三平　や、そなたは、

小笹　よい所へ鳥居どの、、

お民　お前は若黨逸平どの。（ト是れにて四人起上り）

無理　さては、おのれも濱松の、

鄕右　同じ家中の二合半。

甚八　何で武士たるわれ〳〵を、

甚平　手籠めにいたして、

四人　これへ投げた。

逸平　見るに忍びず投げたのは、遠州武士はこんなものと思はれるが殘念ゆゑ、臆病者の名代に。

四人　何と。（ト是れより替つた合方になり）

逸平　此の濱松の領分は、産れ故鄕に由緣ある三階松も九年振り、丁度今年で十返りの松も昔と來て見れば、こゝやかしこへ大敵を受けて小勢の晴れ勝負、向ふ手段も身のしがに、どれから、さきと思ふ内松の名所の播磨屋と、屋上の松の新顏が殖えて幸ひ共々に、小松ながらも御贔屓を、小楯に根強く戰はうと悦ぶ矢先きへ枯ツ葉の、荒神松にあらされちやあ、見て見ぬ振りがならねえから、今日ぞ戰の門松に、こゝでわいらを〆子の松、張り殺すから覺悟しろ。

トきつと見得、こゝへ以前の權兵衞、下手より出來り後に窺ひ居て、

權兵　イヨ、尾張やァ。（トよろしく褒める。）
無理　こいつが〳〵、下司下郎の分際で、大きなことをまき出す奴。
鄕右　然し腰拔け同然なる、武士を相手にいたすより、こりやでがあつて面白い。
甚八　甲州武士の腕前は、おのれ如きはまだ知るまい。
甚平　いで、其儀ならわれ〳〵が、手並の程を見せてくれん。
逸平　其の御念にやあ及ばぬこと、一人二人は面倒だ。一度に掛つて、さあ來い〳〵。
四人　下郎め、觀念。

ト四人一度に切つてかゝる、逸平ちよつと立廻つて、きつと見得。これより誂への鳴物になり、逸平四人を相手に面白き立廻りよろしく、此内權兵衞の茶屋の亭主、手桶を持つて出て四人の敵役の天窓から水を掛ける可笑味よろしくあつて、トヾ逸平四人の刀を打落し峰打ちにて四人を散々打据ゑる。是れにて四人は上の方へ逃げて行き、兩手を合せて逸平を拜む、これにて逸平落ちある刀を拾ひ投げて遣る、四人これを拾ひやう〳〵に立ち上り、

無理　やい亭主、よくもわれ〳〵四人の者へ、冷たき水を掛け居つたな。
權兵　それでもあんまりぼん〳〵と、皆さんがお轉りなさるので、砂がたつて困ります。
四人　そのいけ口を。

逸平　どうしたと。
四人　覺えて居ろ。（ト早き大拍子にて敵役四人上手へ逃げてはひる。逸平跡を見送り、）
逸平　はて口程にもねえ、弱いやつらだ。（ト是れより合方になり、小笹お民前へ出で、）
小笹　常々夫がわれ〳〵へ御教訓ありしゆゑ、ぢつと無念を怺へるをよい事にして大勢が、寄つて掛つて三平を、手籠めにしたる面憎さ。
お民　側で見て居る私さへ、悔しうてなりませぬ所、お隣りの逸平どのが、よい所へ來なさんして思ふ存分意趣返し。
權兵　いやもう、あなた樣のお蔭にて、日頃の意趣を私まで腹一杯返しまして、こんなよい氣味なことはござりませぬ。
小笹　これ逸平、わがみはわしの伯父上に使はれて居る家來ゆゑ、其縁により我々が今日の難儀を救うてくれしか、何にも言はぬ嬉しいわいなう。
逸平　いえ其の御緣ゆゑ私は、此場の難儀は救ひませぬ。
小笹　何と言やる。（ト是れより合方きつぱりとなり、逸平床几へ掛け、）
逸平　さあ、只今あなたのおつしやる通り、手前主人の旦那樣とお前樣とは伯父と姪、御緣者ではござ

りますが、お連合の鳴瀬様と御主人とは常から確執、悪いお仲のお隣同士、善かれ悪しかれ家來の身は主人に附くが習ひゆゑ、假令そちらの三平が、ぶたれませうが殺されませうが、構ふことはござりませぬが、今後で聞いて居れば、遠州の侍はみんなこんな臆病者と、甲州武士のあいつらに言はれましたが此身に奇怪、如何にも無念と存ずるゆゑ、見るに忍びず逸平が手並を見せて遣りましたが、なに彼奴等が何百人一つに寄つて來ようとも、此の逸平はまことの武士、びくともするのぢやござりませぬ。（トこれを聞き權兵衞前へ出で、）

權兵　へえゝ、さてはそれゆゑお前様には、お腕前をお見せなされて、亂暴人をあのやうに、いや、失禮ながら、此權兵衞まことに感服いたしました。（ト是れにて逸平、三平へ當附けながら、）

逸平　これ御亭主、こゝに居る人達は同じ家中の侍だが、取るに足らねえ臆病侍、主が主なら家來も家來、こんな意氣地のねえ者が高祿を穢して居るから、お上の恥辱になるといふもの、はてさて見下げたものだなあ。（ト腰より煙草入を出し煙草を呑んで居る、是れを聞き三平むつとして、）

三平　これ逸平、わりや此の三平を、臆病者だとぬかしたな。

逸平　はて臆病者であるめえか、甲州武士に土足に掛けられ、手出しもせずに詫びるとは、言はずと知れた臆病侍、言つたがどうした何とした。（トきつと言ふ。是れにて三平無念の思入、小笹こなしあつて、）

小笹　成程側目で見たならば、臆病者とも思やらうが、是れには段々譯あること、仔細といふは甲州より當所へ來たる亂暴組は、戰の端を開かうと下心ある者ゆゑに、途中さんどで出逢うても、手出しをしては相成らぬと、家來のものに常々より、我が夫が堅い戒め。

お民　ほんに女子の私共にも、其通りおつしやり附け、それゆゑ無念に無念を怺へ、手出しもならぬ今日の仕儀。

逸平　さゝ、それが所謂臆病風、どうで戰をする心で喧嘩を賣りに來た侍、賣る喧嘩ならそれまでと、買はねばならぬが武士の意地、それをとやかうと理窟を附け、手出しをせぬは侍の道にあらざる卑怯者、さて／＼鳴瀨の御主人も、見りやあ立派な侍だが、取るに足らねえ臆病者だな。

三平　これ逸平、お家の掟を守るゆゑ、此の三平はどのやうに惡口されても厭はぬが、わりやあ御主人鳴瀨樣を臆病者だと吐かしたな。

逸平　おゝさ、お上の恥辱になることに、體よくも理窟を附け、手出しをしねえ腰拔けゆゑ、惡く言つたが何とした。

三平　ちえゝ、言はうやうねえ、おのれはなあ。（ト刀の柄へ手を掛け、無念の思入、）

逸平　何だ／＼、刀の柄へ手を掛けて、わりやあおれを切る氣だな。

三平　お主の詞を守るゆゑ、彼等に無念を怺へれど、日頃不和なるおのれには。

逸平　こりや面白え、切られよう。今一時此のおれが、此處へ來合せずば、われが其そッ首は胴に附いては居ねえ筈、それを救つた此のおれは、言はずと知れた命の親、切れるものなら切つて見ろ。

三平　其の舌の根を。（ト立ちかゝるを、小笹お民留める。）

小笹　これ、又しても短氣なことを、夫の武運を祈りの爲め、神詣でに來たわれ〳〵ゆゑ、もし過ちのある時は夫へ濟まず二つには、戰の前に味方の不吉、假令卑怯といはれても、心のまことは曇りなく、いつかは晴るゝ其の身の汚名、はやまる場合ではないわいなう。

三平　それぢやと申して。

お民　はて、奧樣があのやうに事を分けてのお頼みゆゑ、たゞ何事も胸に納めて、急く所ではないわいなう。

トよろしく留める、三平是非なきこなしにて、

三平　奧樣の御意がなくば、捨ておく奴ではなけれども、無念を忍ぶもお主の爲め。（ト逸平思入あつて、）

逸平　はて主人の留めるを幸ひに、手出しをしねえ腰拔けめが。

三平　何と。（ト又立ち掛かるを）

小笹　あこれ。(ト袖を引いて留める。)

逸平　えゝ、張合のねえ。

ト床几にある煙草盆を取つて三平の眉間を打つ、これにて三平眉間へ手を遣り、疵が附きしゆゑびつくりなし、

三平　こりやもう、どうも。

ト立ち掛かるを、小笹お民あゝこれとよろしく縋り留める、逸平思入あつて、

逸平　いや、臆病な奴だなあ。

ト唄になり、上手へはひる、三平兩人を振放し、

三平　さうだ。(ト跡追掛け行かうとするを、小笹お民留めて、)

小笹　これはしたり、どうしたものぢや、是れ程わしが留めるのに、そなたは詞を用ひぬか。

三平　それぢやと申して私は、無念でくなりませぬ。

お民　さあ、其の無念はお前より、側で見て居る奥樣やわたしも無念口惜しいが、何をいふにも御主人の堅い仰せは背かれず、今日此儘歸るとも、意趣はいつでも返せる程に、どうぞ怺へて下さりませ。

ト こゝへ權兵衞出て、

權兵　御領主樣の言ひ附けにて、亂暴組に構ふなと嚴しいお觸れの出た事は、誰でも存じて居りまする必ずあなたが臆病だと、思ふ者はござりませぬ、まあ〳〵お待ちなされませ。

ト よろしく宥める、これにて三平少し心の直りし思入にて、

三平　御亭主までが其のやうに、詞を添へてわしへの異見、今日の所は奧樣のお詞に隨ひまして、歸りまするでござりませう。

小笹　それでわしも落着いたわいなう。

お民　ほんに思はぬ禍ひにて、お宮へ參るもおそなはりました。さあ、又もや障りのなきうちに。

ト 小笹思入あつて、

小笹　最前といひ今といひ、二度まで障りのある上は、お參り申すも何とやら心に掛つてならぬゆゑ、今日は此儘戻らうわいなう。

權兵　それがよろしうござりまする。さつき逃げたる浪人が、まだうろついて居る樣子。どれ、わしも見世をばしまひませう。（ト葭簀の蔭へはひる。）

お民　左樣なれば、お宮へ參らず、

三平　とはいへ、どうも此の儘に。
小篠　はてまあ、わしに任しやいなう。

ト小篠先きにお民三平花道へかゝる。是れにて時の鐘、鶯笛になり、三人思入あつて、

とはいへ、今日は我が夫の、御武運祈る神詣でに、二度まで障りのあるといひ、
お民　神の社にふさはしき、經讀み鳥の興もなく、
三平　歸る道さへとつおいつ、迷ふ無常の鐘の音も、
小篠　心ならねど此の儘に、
お民　片時も早く、お屋敷へ。
三平　とはいへ、遺恨はこの胸に。（トこゝへ上手より以前の逸平出で、）
逸平　無念に思はゞ、いつでも來やれ。（ト三平・逸平を見て、）
三平　われは逸平。（ト跡へ歸らうとするを、小篠入れ替つて、）
小篠　あこれ。（ト隔てる。こゝへ上手より以前の甚平窺ひ出で、）
甚平　うぬ、さつきの返報。（ト逸平へ切つてかゝるを、ちよつと立廻つてよろしく引附け、）
逸平　はて意氣地のねえ。（ト花道を見ながら、甚平をぽんと轉すを木の頭、）奴ぢやなあ。

ト につたりと思入、此模様大拍子にてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、送り三重になり、三平は後へ歸らうとするを小笹お民支へながら、花道へはひる、あと宮神樂のつなぎにて直に引返す。

二幕目

濱松鳴瀬屋敷の場
同　三方ヶ原討死の場

〔役名〕——鳥居四郎左衛門忠廣、同若黨淺田逸平、大坪治右衛門、足輕杢內、立廻りの軍卒大勢、鳴瀬若黨植松三平、櫻井庄司、鳴瀬東藏正員。鳴瀬妻小笹、腰元お民等。〕

（鳴瀬屋敷の場）——本舞臺三間の間中足の二重本緣附、向う上手一間床の間好みの掛物、下手一面の石摺の襖。下の方一間玄關折廻し障子屋體。いつもの所庭入口の枝折戸、屋體まで四ッ目垣にて見切り、下の方一間本庇、式臺、向う紗綾形の襖、玄關の柱に鳴瀬東藏といふ表札、總て濱松曲輪內旗本屋敷の體。こゝにお民前幕の下女にて、針箱敷紙を廣げ白の肌着を縫つて居る、門口に杢內菖蒲革の袴股立一本差の足輕にて、六尺棒を持ち立掛り居る、常の唄にて幕明く。と合方彈き流しにて、

杢內　これお民どの、三平どのは內でござるか。

お民　あい、三平どのは今裏で、旦那樣がお浴びになる、水行の水を汲んで居るわいな。

杢内　此雪空の寒いのに、酒をお浴びなさるのなら、お相手でもしたいけれど、水をお浴びなさるのではお手傳ひも眞平だ。

お民　旦那樣には御心願で、暑さ寒さに拘はらず、毎日お浴びなされますわいな。

杢内　それはさうと、三平どのが、昨日五社明神前で、鳥居どのゝ御家來逸平どのと、喧嘩をして打たれたといふことだが、ほんまのことでござるかの。

お民　成程昨日三平どのが、旦那樣のことからして、つい喧嘩をしましたわいな。

杢内　道理で今日はそこゝで其の噂をして居ますが、逸平どのゝ方からして喧嘩を買つたといふことだが、何にしろ鳥居樣とは、旦那樣同士が日頃から、擦れもつれてござるゆゑ、大きな喧嘩にならねばよいと、側で心配して居ります。

お民　まだ旦那樣には其の事を、御存じではないけれど、お前方さへ其のやうに委しく知つて居るからは、旦那樣のお耳へも、きつと入つたに違ひない。

杢内　どうか早く二人を笑はせてしまひたいから、これから歸りに部屋頭を、賴んで口を利かせる氣だ。

お民　ほんにお前の言ふ通り、大きなことにならぬうち、早う濟ましてしまひたいわいな。

杢内　一廻り廻つて來ると、部屋頭と連立つて取扱ひに來る程に、三平どのへ其の事をようさう言つて

おいて下せえ。

お民　人の事は人さまの、お世話でなければいけぬもの、何分共によいやうにお賴み申しますわいな。

杢内　どうかならうから、案じなさんな。

お民　有難うござりますわいな。

杢内　それぢやあ、一廻り廻つて來ます。八つでござい〳〵。

ト言ひながら六尺棒を突き下手へはひる、合方にて奥より前幕の小笹出來り、

小笹　これ民や、今來たのはお足輕の、杢内とかいふ人ぢやの。

お民　はい左樣にござりまする、三平どのとは一つ在所で育つたとやら申すこと。いやそれはさうと、今の話しをお聞きなさつたでござりませうな。

小笹　おゝ、一間で聞いて居ましたが、昨日の喧嘩を其やうに、人が噂をするといへば、御殿で噂のあるは必定、旦那樣のお耳にも大方入つたであらうわいの。

お民　今にもお下り遊ばして、なぜそんな事があつたなら、早く言はぬとおつしやつて、お叱りなされませうわいな。

小笹　お叱り受けるも仕方がないが、今日御殿からの急お召しも、吉事にあらぬ戰の御評議、心に掛る

其の處へ、又もや一つ此の喧嘩、どうぞ旦那樣のお耳へ入らず、部屋頭とやらの扱ひで、早う濟ませたいものぢやわいな。

お民　いえ、物事は案じるより產むが安いと申しますれば、事なく今に濟みませうわいな。

小笹　どうぞ事なく濟ませたいが、喧嘩の相手の鳥居樣は、わたしが里と同家にてお父樣のお兄さま、五郎右衞門樣の御子息ゆゑ、此の小笹とは從兄妹同士、繋がる緣の中なれど、いつぞや戰に前後を爭ひ、それから遂には不和となり、近しく行きかひせぬ仲ゆゑ、一入わたしが氣扱ひ、それゆゑ今も明神さまへ、無事に喧嘩の濟みますやう、お願ひ申しましたわいの。

お民　あなた樣の御心配は、お察し申しますわいな。（ト時の鐘になり、）

小笹　もう旦那樣が御殿から、お下りなさるに間もあるまい、仕事は仕舞にしたがよい。

お民　はい、もう縫ひあげてしまひましたから、お掃除でもいたしませうわいな。

ト時の鐘を打ち上げ、床の淨瑠璃になる。

〽日も早や西へをちこちに、打つ寺々の時の鐘、鳴瀨は胸にとつおいつ、小首傾け立歸り。

ト此内花道より鳴瀨東藏正員好みの鬘、ぶつ裂き羽織襠高袴大小、武張りしこしらへにて、中間附添ひ出來り、花道にて東藏思入あつて、

東藏　こりや作助、其方は大儀ながら先刻申し附けし方へ、此の手紙を持參いたせ。

ト懷から手紙を出して渡す。

中間　はい、畏まりましてござりまする。

東藏　もう、よいから直ぐ參れ。

中間　左樣なら、御免下さりませ。

〽鳴瀨はしづ〳〵我が家の門、咳きなせば腰元が、

ト中間は花道へ引返してはひる、東藏はうなづき舞臺へ來り、庭口にて咳拂ひをする、お民見て、

お民　これは旦那樣、お下り遊ばしましたか。

小笹　大分お遲うござりましたな。

東藏　御家老方を始めとして、多人數の評議ゆゑ、思ひの外遲くなつた。

ト合方にてお民座蒲團を敷く、東藏此の上へ住ふ、お民煙草盆を出す。

小笹　お召物も最前から煖まつてをりますが、お召し替へなされまするか。

東藏　いや、まだちと用事もあれば、着替へずと此の儘でよい。

ト羽織を脫ぐ、お民これを疊む、小笹思入あつて、

小笹　して、今日の御評議は、戰の事でござりまするか。
東藏　如何にも、甲斐の信玄と、一戰に及ぶ御評議ぢや。
小笹　えゝ、すりや、いよ〳〵甲州と、近々戰が始まりまするか。
お民　厭な事でござりますなあ。
東藏　誰も好む者はないが、治世と違つて戰國に勤仕いたせば戰爭は、今日の勤めなるわ。
小笹　して、戰の始まりますは、いつ頃でござりますな。
東藏　いつといふ限りもないが、最早十日と過すまい、一旦結びし和睦破れ、又戰爭に及ぶのは駿遠參を信玄が豫て横領なさんたくみ、何がなあらばと思ふ折柄、大井川を巡檢せしに濫りに他境を探索なすは戰爭をなす下心と、亂暴組とか唱へる者、凡そ人員三百人程を當國へ入込ませ、町中在方何れとなく、右の者ども立入つて亂暴いたす由、これ兵端を開かん爲めの敵の策と存ぜしゆゑ、其のまゝに差おきしが、最早今日に迫りては、亂暴いたす者どもを悉く捕縛なし、信甲の境にて梟首に掛けて武威を見せ、押寄せ來らば其の時は、速かに一戰なさんと、事一決せし上は、今日にも敵國より押寄せ來らば奮發なし、直に出張いたす所存。
小笹　左樣なれば御城内より、今にもお知らせある時は。

東藏　おゝ、先鋒勤むる某ゆゑ、眞ツさきかけて出張なし、敵を討取る所存なれど、然し勝負は時の運、仕儀によれば、御馬前にて、討死なすまいものでもない。

小笹　すりや、討死をなされます、お心でござりまするか。

東藏　臆病者は知らぬこと、まことの武士は戰場へ赴く度に死す心、今日にも戰爭なし討死いたす其の時は、敵へ渡す我が首級、鬢のほつれは見苦しい、毛の下らぬやう撫附けてくりやれ。

小笹　畏まりました。櫛笥を持つておぢや。

お民　はツ。

〽はツと答へて一間より、取出す櫛笥鏡臺の鏡にうつる夫の顏、見れば心の曇りてか冴えぬ面を打ち案じ、いづのつま櫛はら〱と、落つる雫に振返り、

ト この内奥よりお民鏡臺を持つて出て、鏡を掛け東藏の前へ出す、東藏鏡に向ふ、小笹櫛にて鬢を撫附けながら、よろしく思入あつて涙を拭ふを東藏見て、

東藏　これ小笹、何でそなたは泣くのぢや。

小笹　いえ〱、泣きはいたしませぬ。

東藏　なに、泣かぬことがあるものか、襟へ冷たく落つるのは櫛の雫と思ひしが、鏡に寫るそなたの泣

顔。
小笹　さあ、つい思はず泣きましたは、今にも戰が始まりまして、御出陣なされますれば、君のお爲めにその場に迫り、もしお討死をなされたら、鏡に寫る此のお顔に再びお目に掛られますまいと、それが悲しうございまして、つい泣きましてござりますわいな。

東藏　あゝ日頃に似合ぬそちが未練、武士たる者は戰場にて討死なすが身の譽れ、夫が死なば其の妻は悦ぶべきにめろ〳〵と、泣くといふがあるものぞ。尤もそちが緣家たる鳥居四郎左衞門などは、やはり臆病未練の侍ゆゑ、戰場にて討死なす潔よい所存はない。繫がる緣とてそちなどは、未練なるか、以來はきつと嗜み居らう。（トきつと言ふ。）

〽袖を覆うて泣きければ、（ト小笹袖を顔に當て泣く、東藏思入あつて、）

小笹　はッ、つい女子の愚癡な氣に、よしない涙をこぼしましたが、此の後はきつと愼みますほどに、お許しなされて下さりませ。（ト手を突き詫び、）これ民や、櫛笥鏡臺片附けてくりやれ。

お民　畏まりました。

〽櫛笥鏡臺片附くる、折柄立出る三平が、それと見るより手をつかへ、

ト お民鏡臺を片附ける、奧より前幕の三平出來り、下手に手を突き、合方になり、

三平　これは旦那樣には、いつの間にお下りでござりましたか、お出迎ひも仕りませず、御免なされて下さりませ。

東藏　おゝ、今御殿より下りしまゝぢや。何か今朝は不快ぢやと申したが、心持はどうぢや。

三平　腹痛で難儀いたしましたが、もうよろしうござります。

東藏　見れば大分血色が惡いが、輕はずみをいたさぬがよいぞ。

三平　有難うござりまする。

お民　その顏色の惡いのは、慥に昨日の、

東藏　や。

三平　あいや、昨日棚から小箱が落ち、此の額を打ちましたが、ほんの些細なかすり疵、これしきの事を心に掛け、何の顏色の替りませうぞ。（ト小笹わざと話しを脇にし、）

小笹　そちは最前旦那樣へ、何かお願ひ申したい事があると言やつたが、丁度よい折、今こゝでお願ひ申したがよいわいの。

三平　拙者も左樣存じ、これへ出ましてござりまする。

東藏　なに、其の方が願ひとは。

三平　折入つて旦那樣へ、お願ひがござりまするが、お聞き濟み下さりませうや。
東藏　品に寄つたら聞き屆けんが、して、其願ひといふは。
三平　外の儀でもござりませぬが、どうか拙者に、お暇を、下しおかれますやう、お願ひ申し上げます。
小笹　え、こりや三平には、何ゆゑに。
お民　旦那樣へ差附けて、
東藏　暇をくれと申すのぢや。(ト誂への合方になり、)
三平　元私は百姓の家に生れし者なるが、何卒兩腰たばさみたく、御緣あつて御當家へ御奉公に上りましたが、急に侍が厭になり、やはり元へ歸り度く、それゆゑお願ひ申しまする。
東藏　むゝ、元百姓の悴ゆゑ、其の百姓に歸り度くば暇をやるまいものでもないが、今といつては遣られぬぞ。
三平　左樣でもござりませうが、今日私に、直にお暇を下さりませ。(トお民これを聞き兼ね、)
お民　これ〳〵三平どの、お前何を言はしやんすのぢや、譬にもいふ通り立つ鳥跡を濁さずと、一季半季のものでさへ、代りの者をおき附けて、それから願ふが當り前といへば、奉公人のお前は法を知らぬぞえ。

三平　その奉公人の入譯も知らぬではないけれど、急に在所へ歸り度く、それゆゑお願ひ申すのぢや。

東藏　むゝ、急に在所へ歸りたいとは。

三平　へい、承はれば甲州より大軍を以て當國へ、攻めて參ると申す噂、今にも戰が始りますれば、旦那樣は、御先陣ゆゑ、直に御出張なされませう、さすれば家來の私もお供致さにやなりませぬ、切ツつはツつの其中ゆゑ、殺されまいとも申されず、命が惜しうござりますから、それゆゑお願ひ申しまする。

〽言ふ三平が面色を、心得がたく打ち見やり、（ト東藏三平の顏を見て思入あつて、）

東藏　すりや、その方は命が惜しさに、暇を取ると申すのか。

三平　へい、左樣にござりまする。

東藏　命を惜しむは尤も、聞き届けてやりたいが、その方には相成らぬ。

三平　そりや、何ゆゑでござりまする。

東藏　命を惜しむが僞りゆゑ。

三平　何とおつしやります。

東藏　包みかくすな、その方は、命を捨つる心であらうが。

三平　え。（トぎつくり思入、合方きつぱりとなり）

東藏　昨日五社の明神にて、鳥居が家來逸平と口論に及び、面體へ疵を受けしは日頃から主人鳴瀨が臆病ゆゑ家來までも臆病と、鳥居が申し觸らせしが殿中一班の取沙汰に、恥辱を取りし我が無念、其遺恨を晴らさんと思ふ折柄、今そちが暇願ひは心得ず、見れば面色常に變り、決心なしたる其樣子は、唯今我れに暇を取り、鳥居が家來逸平を討果たす所存であらうが。

三平　え。

東藏　命を惜しむといふは僞り、捨つる心のその方ゆゑ、今日暇は遣はされぬぞ。

三平　〽星をさしたる一言に、今は三平是非なくも、（ト三平思入あつて、やはり合方にて、）斯く御推量の上からは、何をお隱し申しませう、日頃御不和の御中ゆゑ、此の身のお暇お願ひ申し、旦那樣に御苦勞の掛らぬやうにいたしまして、目指す敵の逸平を討つて捨て、遺恨を晴らし旦那樣の、御恥辱を雪ぐ所存でござりますゆゑ、何卒枉げて拙者めに、お暇下しおかれませう。

東藏　如何やうに申すとも、此の身の恥辱になる事ゆゑ、その方には暇はやらぬ。

三平　すりや、どうあつても。

東藏　そちにやらぬ其の代り、外に遣はす者がある。（トお民びつくりなし）

お民　えゝ、そんなら若しや私に。
東藏　氣遣ひいたすな、そちではない、奥小笹に暇を遣はす。
小笹　えゝ。
〽思ひがけなき夫の詞
東藏　そりや何ゆゑに、私へ。
五社明神の社頭にて、我が家來三平に恥辱を與へし逸平は、御身が一家の鳥居の家來、日頃不平に逸平に正しく言ひ附けおきしと見ゆる、家來の恥辱は主人の恥辱、これより鳥居と應接なし、仕儀に及ばゞ討つて捨て、武士の名義を立てる所存、それゆゑそちに暇を遣はし、鳥居一家の因を斷つのだ。
小笹　すりや、それゆゑに科もない、此の身にお暇下さりまするか。
東藏　暇をやるも武士の意地。
小笹　そりや、御尤もにはござりまするが。
〽一度嫁せば其の家より、死して出るより其外に、再び出ぬが女子の操、今は町人百姓も文に明るく、物の理を辨へ知らぬ者もなく。

小祿ながら私も、鳥居一家の家に產れ、

〽宿世嬉しき御緣にて、嫁して參りし上からは、親子の緣を斷ちましても、

鳴瀨のお家は出ませぬぞえ、それを斷つとおつしやれば、

〽死ぬより外の事なしと、口說き歎くぞ道理なる、側に附添ふ腰元も、

ト此間小笹よろしくこなしあつて、お民小笹の背中を擦りながら、

お民　おゝ、お道理でござります、お續き合ではあるけれど、旦那樣を憚つてつひに一度行きかひをなされたこともござりませねば、御緣のないも同じこと、どうぞ此の儘奥さまを、お里へお歸しなされまするを、

〽思ひ留つてたまはれと、共に淚に暮れければ、三平も座を進み、

トお民よろしく思入、三平もこなしあつて、

三平　この三平の事よりして、何越度もない奥樣にお暇が出ましては、家來の身として濟みませぬ、どうぞ此儀は旦那樣、御了簡なされて下さりませ。その代り私も最早お暇願ひませねば、又逸平に仕返しも、殘念にはござりまするが、此儘に了簡いたしまする。

東藏　いや、そちは了簡いたすとも、家來へ疵を附けられては、我が了簡ならぬわい。

小笹　そんならどうでも、旦那様には。
東藏　絶交なして四郎左衞門と、果し合ひをいたさにやおかぬ。
小笹　それでは此の身は、里方へ。
東藏　おゝ。離緣いたす所存なれど、たつて此家に居りたくば、親子の緣を切つて參れ、目指す敵の四郎左衞門と、他人となれば兎も角も、緣ありては妻にいたさぬ。
小笹　はあゝ。（ト泣き伏す。）
お民　これ三平どの、こりやまあ、どうしたらよからうぞいなあ。
三平　よしない事を言ひ出して、今更どうとも仕樣がない。
〽主從途方に暮れければ、鳴瀨は時刻に氣も急かれ、
　ト三平お民困りし思入、東藏こなしあつて、
東藏　さあ、離緣狀を持つて里へ歸るか、親子の緣を斷つて參るか、因循いたさず返答いたせ。
小笹　はッ、仰せに任せ親子の緣を、すつぱり切つて參りませう。
三平　そりや、奧樣には是れよりお里へ。
小笹　父上樣にお目にかゝり、緣を切つてお貰ひ申さん。

お民　左様なれば私が、お供いたして參りませうが、お召替へなされまするか。

小笹　此儘で行かうわいの。（ト小笹立上る。）

東藏　そちが親四郎左衞門も、片意地なる人ゆゑに緣を切らぬと申したら、

小笹　その時こそは身の覺悟、再びお目にかゝりませぬ。

東藏　おゝ、それでこそ我が女房。

小笹　三平跡を賴むぞよ。

三平　畏まりましてござります。

小笹　左様なれば、行てまゐります。

〽涙隱して立ち出でしが、（ト小笹お民附いて門口へ出て思入あつて、）

「散ればこそ、いとゞ櫻は目出たけれ。」

東藏　や、

小笹　目出度く後程、立ち歸りませう。

〽散るを惜しまぬ武士の、妻も覺悟に袖の露、打ちしをれてぞ出でゝ行く。

ト小笹門口で愁ひの思入よろしく、お民もこなしあつて悄々と花道へはひる。

〽跡見送りて東藏が、一腰拔いて早や㓦刃。

ト東藏跡を見送り、刀を拔いて鼻紙にて拭ひ、鞘へしやんと納める、三平心得ぬ思入。

東藏　三平、羽織持て。

三平　はツ。（ト合方にて側にある羽織を取つて東藏に着せながら、）どちらへぞ、お出でなされまするか。

東藏　むゝ、妙音寺の松原まで。

三平　何ぞ御用でござりまするか。

東藏　先刻鳥居四郎左衞門に果し狀を遣はしおけば、これよりかしこへ立ち越えて、昨日五社明神で逸平めに打たれたる、そちが恥辱を雪ぐのぢや。

三平　すりや、旦那樣には鳥居樣と、

東藏　果し合はねば武道が立たぬ。

三平　御尤もにはござりまするが、元の起りは拙者めゆゑ、どうぞ代りに拙者めを。

東藏　いや、その方が事ばかりでなく、遺恨重なる四郎左衞門、折があればと存ぜし所。

三平　左樣でもござりませうが、御奥樣はお留守なり、お供をいたして參らねば。

東藏　臆病未練と言はれし面晴れ。供には及ばぬ、一人で參る。

三平　すりや、どうあつても。

東藏　果し狀を遣はしたれば、是れより直に。

〽留むる三平振拂ひ、立ち出る門に聲あつて、

と東藏行かうとするを三平留める、此の以前下手より鳥居四郎左衞門好みの鬘ぶつ裂き羽織襠高袴大小のこしらへ、前幕の逸平附添ひ出來り、門口にて窺ひ居て、

四郎　いや、妙音寺まで出向くに及ばぬ、使ひによつて四郎左衞門、これまで推參いたしてござる。

三平　や、さてはこゝへ鳥居樣が。

東藏　こりや。

〽勢ひかゝるを目くばせなし、留むる折柄靜々と、入來る鳥居四郎左衞門、鳴瀨は態と座を下り、

ト三平立ち掛るを東藏目くばせなして留める。玄關より四郎左衞門逸平出來り、上手へ通る。東藏思入あつて

これは〳〵鳥居氏には、ようこそ御入來下された。

四郎　先刻は御書翰下され、委細承知いたしてござる。

東藏　お約束ゆゑ某も、只今出張する所。

四郎　妙音寺の松原に、お待ち申して居つたれど、餘りお出でが遲いゆゑ。

逸平　大方例の臆病で、お出でが遲いと思つたから、旦那樣をおすゝめ申し、是れまでお連れ申したのだ。(トこれを聞き三平きつとなるを、東藏押へて、)

東藏　お約定を申しながら、延刻せしは我が誤り、平に御容赦下されい。これお茶を上げぬか。

三平　はい。

〽主命ゆゑに是非なくも、無念を怺へ差出す茶碗、四郎左衞門手に取りて、

ト三平茶碗を茶臺へ載せ四郎左衞門へ出す、四郎左衞門これを取つて思入、合方になり、

四郎　いや、改め申すに及ばねど、昨日五社明神にて貴殿の奧方小笹どのが、かの甲州の亂暴組浪人共が取り卷いて、あらぬ所行をいたせしかど、召し連れられし御家來が、町人百姓同樣に大地に手を突き詫び入る臆病、相手は猶々附上り身を恥しめんと迫りしゆゑ、我が家來逸平が通り掛つて見るに忍びず、浪人共を打ち懲らし武勇を見せしは上への忠義、又朋友へ信とやいはん、難儀を助けし禮も言はず、兎やかういふゆゑ逸平が打擲に及びしを遺恨に思つて果し狀、何か噂を承はれば某でも申し附けしやうに思召さるゝさうなが、戰爭に出る度每に敵の欲しがる我が首ゆゑ

水を浴びてよく洗ひ、取られる覺悟で出る某、貴殿と違ひ其のやうな臆病未練なことはいたさぬ。

東藏　やゝともすると、某を臆病未練と云はるゝは、當春甲州勢と一言坂の戰爭に、拔掛けせんと勸めしを君の軍令相守り、同意なさぬを未練と罵り、拔掛けなして聊な手柄なせしを鼻に掛け、人もなげなる臆病呼はり、今日こそは此の場にて、家來の遺恨を幸ひに、眞劍を以て勝負なし、我が臆病を見せ申さん。

四郎　臆病なりとさみなせし、勇士の働き見せてくれん。

〽鍔許くつろげ立ち掛れば、（ト四郎左衞門東藏刀へ手を掛け立ちかゝる、逸平思入あつて）

逸平　あいや、暫くお待ち下され。

〽兩士の中へ割つて入り、（ト逸平眞中へ出て）

主人が此場の果し合ひも、元は我等が喧嘩ゆゑ、先づ前方に鳴瀨樣、わしから先へ切らつせえ。

東藏　何と。

逸平　昨日五社の明神で、これなる御家來三平が眉間を打つたは此の逸平、甲州武士に土足に掛けられあんまり意氣地がねえゆゑに、側で見る目も齒痒くなり、片ツ端から叩きしめ、懲らして遣つたばツかりで危ない命を助かつたのだ、其の大恩を打ち忘れ遺恨に思はゞ旦那より、わしから先へ

切らつせえ、ちつと骨が太いから未練な腕ぢやあ切りにくからうが、腕からなりと足からなりと勝手な所から切らつせえ。

東藏　いや、その方は相手にいたさぬ、一言坂の戰爭より遺恨重なる鳥居氏、それゆゑ此の場で勝負なすのだ。

逸平　それがやつぱり臆病未練、此逸平は切られめえ、口幅ツてえせりふだが三年立てば三ツになる、餓鬼も十年故鄕をはなれ、苦勞駿河や三州路、此身に緣ある尾張から加賀奧州の果てまでも、飛び歩いたる旅雀、チヨツチヨと親の音信に馴れた塒が戀しくなり、再び歸つた御當地で憎まれ口は利きたくねえが、親のしにせの敵役、丁度年さへ三十になるやならずの此の逸平、旦那がつかつた行水のあとで洗つた此の素ツ首、垢はねえから鳴瀨樣、すつぱり切つて下せえまし。

〽傍若無人に逸平が、身を摺り附けるを怺へかね、

ト逸平、東藏に身を摺り附ける、三平怺へかねて、

三平　其の意趣返しは旦那樣が、お手下されるまでもない、此の三平がしてくれう。

逸平　何と。

〽きのふの返報覺えよと、木刀取つて打ちつくれば、

ト三平木刀の脇差を取つて、逸平の眉間を打つ、
や、こりや、おれが額を。

三平　これで、昨日の喧嘩は五分〳〵。

逸平　また蒔き直して、此の場にて。

三平　おゝ、言ふにや及ぶ。

〽股立取つて立ちかゝれば、（ト逸平三平立ちかゝる。）

四郎　こりや〳〵待つた。

東藏　兩人控へい。

兩人　でも。

四郎
東藏　えゝ、控へいと申すに。（トきつと言ふ。）

兩人　へゝい。（ト是非なく控へる。）

四郎　さあ、家來同士は打ツつ打たれつ、是れで喧嘩は兩成敗、二人の疵も五分と五分。

東藏　これが水魚の交りなら、笑つて別るゝ所なれど、

四郎　日頃吳越の思ひをなし、不和になりたる鳴瀬、鳥居、

東藏　互に家來を打たれたる、
四郎　遺恨を晴らすは主と主、
東藏　何れが臆病未練なるか、
四郎　此場に於て、
東藏　勝負を、
兩人　決せん。
　〽羽織を取つて投げのくれば、（ト兩人羽織をぬいで投げ捨て、きつとなる。）
逸平　今御主人の果し合ひも、元の起りはわれ〳〵ゆゑ、
三平　及ばずながら二人共、旦那樣へ助太刀なさん。
東藏　いや、鳥居氏は兎も角も、未練と言はれし鳴瀨東藏、家來の助太刀頼まぬぞ。
四郎　おゝ、某とても同じこと、申し合せて參りしなどゝ言はれんことの口惜しく、手出しは一切相成らぬぞ。
三平　すりや、助太刀は、
逸平
三平　かなひませぬか。

東藏　若しも某運拙く、鳥居氏に討たれなば、其時こそは主人の仇、見事敵を討つてくれよ。

四郎　身共も時のへうりにて、鳴瀬殿に討たれなば、その折汝も敵を討て。

逸平　眼前主人の果し合ひを、

三平　主命ゆゑに、手出しもならぬか。

四郎　それにて勝負を、

東藏　見物いたせ。

兩人　はあ。

東藏　いざ、御用意よくば、

四郎　言ふにや及ぶ。

〽兩人一時に肌脱げば、下には用意の玉襷。

ト東藏四郎左衛門一時に肌を脱ぐ、下に襷を掛け居る、刀を持ち前へ出て、

四郎　いざ、

東藏　いざ、

兩人　いざ〳〵。

〽息を合して拔き合せ、上段下段に立ち別れ、丁々はツしと切結ぶ。

ト四郎左衞門東藏拔き合せ、ちよつと立廻つて白囃子になり立廻る、逸平三平これを見て慄へ乍れ肌を脫ぎ兩人立ちかゝるを、

東藏　こりや、助太刀は相成ならぬぞ。

四郎　手出しをなさば勘當なるぞ。

逸平　えゝ、此の手がむづく、

兩人　いたしまする。（ト東藏四郎左衞門立廻りながら、上手へはひる。）

逸平　こりや斯うしては。（ト行きかけるを、）

三平　どつこい、遣らぬぞ。

逸平　何を小癪な。（ト三味線入り白囃子になり、摑み合ひの立廻りよろしくあつて、）

〽組んづ解れつ兩人が、挑み合うてぞ。

ト兩人引張りの見得、三重にて道具廻る。

（庭内爭鬪の場）――本舞臺上手二間中足の二重、本庇本緣附き、前側障子建切り、眞中に誂への車

井戸・下手に厩の前側馬を繋ぎあり、向う小高き草土手埒を結びし馬場の書割、日覆より松の釣枝、三重
總て前の屋體裏手の模様、こゝに井戸を小栫にして上手に四郎左衞門下手に東藏ためらひ居る、三重
にて道具納る。

＼鳴瀬鳥居の兩人は、雲を起せば風を生じ、負けず劣らぬ勢ひは、實にも龍虎の如くなり。

トこれより誂への鳴物になり、四郎左衞門東藏太刀打ちの立廻り、井戸を遣ひよろしくあつて、東藏過つて井戸の中へ刀を落す、これへ四郎左衞門切つてかゝる、東藏釣瓶でこれを受け、繩をぐつと引く片々の釣瓶へ刀突ツ立ちて上る、東藏取らうとして取れぬ立廻り、逸平出來り、刀を取らうとする、三平是れを支へ刀を取つて投げる、東藏これを受けて直に四郎左衞門と立廻り、此中へ逸平三平はひるを、兩人叱る仕組の立廻りよろしくあつて、ト、四郎左衞門刀を振上げ、東藏差附け、兩人隙なくためらひ居る。

＼かゝる所へ城内より、宙を駈け來る大坪治右衞門。

トばた〳〵になり、花道より治右衞門、白の鉢巻、袴股立、大小にて走り出來り、

治右　御兩所、暫くお待ち下され。（ト言ひながら舞臺へ來る、是れにて兩人刀を後へ隱し）

東藏　や、貴殿は大坪、

兩人　治右衞門殿。

治右　我が君よりの上意でござる。
兩人　はッ。（ト兩人下に居て）して、御上意の趣きは。
治右　只今遠州掛川へ、出張なせし遠見の者より、早馬にて火急の注進。
四郎　して〳〵、それは、
兩人　何事なるぞ。
治右　かねて武田信玄が、駿遠三を横領なさんと、攻寄せ來ると聞きたれど、昨日今日とは思はざりしに、俄に三萬五千の人數で、本街道を押寄せ來れば、諸所の砦へ人數を配り防禦の手當肝要ゆゑ何れも物の具着用あつて、卽刻出張これあるやう、我が君よりの上意でござる。
東藏　さては信玄、當國へ、
四郎　早くも押寄せ、
四人　來るとや。
治右　拙者は是れより諸所への注進。片時も早く御兩所には、御出張下さるべし。
へ言ふより早く大坪は、袴の股立引き上げて、飛ぶが如くに駈けり行く。
ト治右衞門股立を引き上げ、ばた〳〵にて花道へ走りはひる。

〽跡には又も兩人が、刀を構へて立ち上れは、
ト兩人刀を先きの通りになし、きつと思入、逸平三平こなしあつて、

三平　して、御主人には、此の場の勝負を、

逸平　如何めさるゝ、

兩人　御所存でござる。

四郎
東藏　むゝ。

〽火花を散せし切尖きも、上意に鈍り兩人は暫し詞もなかりしが、鳴瀨は心にうなづきて、
トこれへ笙を冠せ、兩人はいかゞはせんと考へる思入、淨瑠璃の切れ、やはり笙の入りし合方、
東藏思入あつて、

東藏　いかに鳥居殿、貴殿はいかゞ思はるゝ。俄に武田の軍勢が、三萬五千の大軍にて當國間近く來りしゆゑ、砦の固めに出張せよと大坪殿が火急の注進。是れぞ御家の一大事、然るに是れにて私の遺恨に依つて一命果すは愚かと存ずるが、貴殿の所存は如何でござるな。
ト四郎左衞門も尤もといふ思入あつて、

四郎　身共も左樣存ずるところ、兩虎爭ふ其の時は必ず一虎死すの敎へ、今此の所で果し合ひなば、貴

殿か某が益なき事に一命果たさん、此の事變に一人たりとも、味方の滅ぶは御爲ならず、卑怯の汚名を蒙むらんかとて控へしが、實は一命生き延ばゝり、君恩謝するが臣下の道。

東藏　貴殿も同意でござるなら、此の場の勝負は此の儘に、戰場に於て敵を引き受け、君恩の爲めに、命を投ぜん。

四郞　それでこそまことの武士、元より死する覺悟ゆゑ、御馬前におき比類なき必死の働きなせし上、

東藏　討死いたす期に至らば、一つ所に打寄りて、

四郞　此の場で捨つる一命を、其の折見事に相果てん。

東藏　さすれば先祖の昔より、斯く今日のわれ〳〵まで、

四郞　御扶助を受けし我が君へ、忠義の道も立つ道理、

東藏　思へば臣下の分を忘れ、

四郞　私事で一命を、

東藏　捨てんとなせしは舊弊なり。

四郞　斯く文明の世の中に、

東藏　開化を知らぬは、

兩人　愚でござつた。

〽愚を悟る發明に、胸も白刃もしつくりと、納まる此の場の悦びに、

ト兩人刃を拭ひ鞘へ納め、襷を取つて、肌を入れる、逸平三平も思ひ入あつて、羽織を着せる。

逸平　お二人樣の御了簡承はつて私共も、まことに夢の覺めたる如く、

三平　よしない事をいたしましたが、向後ふッつり思ひ切り、

逸平　決して喧嘩は、

兩人　いたしませぬ。

四郞　おゝ、喧嘩をせぬとはよい了簡、是れまで兩家の確執も、

東藏　水に流して是れからは、眞の同胞同樣に、

四郞　水魚の交りいたすでござらう。

三平　左樣ござらば、奧樣も、

東藏　義絕に及ばぬ元の妻。

〽夫の許しに思はずも、小笹は小蔭を轉び出で、

ト下手より小笹、お民つかつかと出で、

小笹　その仰せにて最前からの、痞へも一度に下りました。えゝ有難うござります。
お民　案じるより產むが安いと、申した通りになりましたわいな。
四郎　是れまで不和で居つたのも、今日よりして水魚の友、そなたも嘸や嬉しからう。
小笹　お嬉しう存じますわいな。（ト時の鐘。）
四郎　いや、火急の命を蒙る上は、猶豫いたす所でない。
三平　左樣ござらば、是れより直に、
四郎　片時も早く出仕なさん。
東藏　拙者も是れより物の具着し、卽刻出仕いたすでござる。
四郎　然らば後刻殿中にて、
東藏　御面談いたすでござらう。
小笹　左樣ならば、鳥居さま。
四郎　お別れ申す。

〽禮儀正しく主從は、屋敷を指して急ぎ行く。（ト四郎左衞門逸平思入あつて花道へはひる。）

東藏　いで、此の上は猶豫ならず、物の具早く持て。

三平　畏つてござりまする。

〽はツとばかりに駈け入れば、（ト三平奥へはひる。）

小笹　すりや、あなたには是れより直に、

東藏　鳥居と必死の約定なせば、一世の晴れの出陣ゆゑ、杯の用意いたせ。

〽夫の詞に是非なくも、言ひたいことも得も言はで、打ち連れ奥へ入りにける。

ト小笹よろしく思ひ入れ、お民すゝめて奥へはひる、

〽程もあらせず三平が、用意の武器を携へ出で、

ト奥より三平、大きな服臺へ鎧、直垂、籠手、臑當、太刀、馬手差しなどをよろしく載せ持ち出來り

三平　はツ、持參いたしてござりまする。

逸平　おゝ、心得た。

〽心得たりと東藏が、上着脱ぎ捨て直垂を着する折柄本城より、駈け來る血氣の櫻井庄司、

トばた〳〵カケリにて、花道より櫻井庄司白の鉢卷鎧下、籠手、臑當、太刀、馬手差し、草鞋、締つた陣羽織、軍扇を持ち、走り出來り、直に舞臺へ來り、

庄司　鳴瀨氏おはするか。

東藏　左言ふは、櫻井庄司殿。
庄司　君の仰せを蒙つて、御注進に參つたり。
東藏　して〳〵、戰の樣子は如何に。
庄司　はツ。
〽上帶きつと締め直し、（ト庄司扇をくはへ、扱きを締めきつと見得）
されば、敵勢防禦の爲め、
〽東は見付、袋井宿、一叢茂る杉並木に續く山路のみかの坂、絕所を小楯に柴田殿。
五百餘人で屯なし、
〽西は要害堅固なる、波も荒井の入海に群ら立つ千鳥舞坂の、聳つ峯を境となし、敵に勝屋が五百餘騎、
引率なして警固なす、
〽南は名に負ふ遠州灘、七十五里の大難に、
船路を止むれば氣遣ひなし。
〽北は賴みの三方ヶ原、峩々たる山に砦を構へ、加藤天野が一千餘騎、二手に分けて出張

なし、
敵や遲しと待つ所へ、
〽天狗倒しの風諸共、秋葉の山の裏手より、雲立つ如く押寄せし、甲州勢の赤備へ。
先きに進みし大將は、地理に明るき穴山梅雪。
〽一萬餘騎の大勢に切り立てられしが、
踏み止まり、
〽峯より落つる谷川の、境に味方の若武者ども。
討つ、
〽討たれつ、
討たれつ、
〽討つ、
こゝを先途と戰ひしが、
〽或ひは突かれ或ひは討たれ、討死なす者澤なるゆゑ、
後詰なくては戰ひ難し、御川意よくば本城へ、早く出　張下さるべし。

〽息をもつかず物語るは、勇しかりける若者なり。

ト此内庄司よろしく陣扇を遣ひ、物語りやうの注進、東藏は二重にてこれを聞きながら、三平手傳ひ陣立てのこしらへになる。

東藏　甲に似げなき穴山が、憎くき蟹の赤備へ、今に某出張なし一泡吹かして目に物見せん。貴殿はお先きへお出で下され。

庄司　然らば御免。

〽然らば御免と櫻井は、砂を蹴立て駈けり行く。

トばた〳〵カケリにて庄司花道へはひる、跡床の合方にて東藏よろしくこしらへ出來、床几へ掛ける、三平長押の槍を取つて出し、

三平　拙者も御供仕らん。

東藏　いや、其の方は支度なし、跡より直に駈け附け參れ。

三平　はツ、畏つてござりまする。

東藏　奧は如何いたせしぞ。

三平　奧樣、御出陣でござりまする。

〽音なふ聲と諸共に、儀式の小四方携へ出で、

ト此内奥より小笹小四方へ土器を載せ、お民銚子を持ち出來り、二重に手をつかへて、

小笹　目出度くお祝ひ遊ばしませ。

東藏　おゝ、祝うて出陣いたすであらう。

ト之れより竹笛入り床の合方になり、東藏土器を取上げる、お民酌をする、東藏呑んで小笹へさす、小笹手先き顫へながらこれを受ける、お民酌をする、小笹これをやつと呑み肩で息をなし、

小笹　お目出度うござります。

ト土器を出さうとして取落し、がつくりとなる、此内東藏始終目を附け居る、三平心得ぬ思ひ入にて、

三平　やゝ、こりや奥樣には、如何遊ばしました。（ト東藏思入あつて、）

東藏　眼中どよみて面色變り、語音の調子狂ひしは、

小笹　鳥居殿とお約束にて、お討死と承はり、

東藏　むゝ、我が門出を祝せしか。

小笹　まツ此のやうに、（ト上着を脱ぐ、乳の下を搔き切り、血汐の染み居るを見て、）

東藏　おゝ、天晴出來した。

三平　流石は鳥居の御息女樣。
お民　立派なお覺悟遊ばしました。（トお民泣き伏す。）
東藏　これにて心殘りもなく、
小笹　彌陀の御國で、
東藏　對面するぞよ。
小笹　えゝ、お嬉しうござりまする。
〽言ふも苦しき息づかひ、折しも響く貝鐘太鼓、
ト小笹腹帶を取り、がつくりとなる。皆々愁ひの思入。この時花道の揚幕にて、遠寄せを打込む、東藏槍を突き、向うを見てきつと見得。
東藏　間近く聞ゆる貝鐘太鼓、
三平　敵か味方か分らねど、
東藏　猶豫いたさば此の身の不覺。
〽槍掻い込んで駈け出せば、
ト東藏槍を掻い込み、平舞臺下手へ行く、小笹立ちかゝるをお民介抱して、

お民　あゝもし、何か奥樣が。

〽これが別れと言ひたさも、早せぐり來る斷末魔、哀れを餘所に東藏が、

ト小笹物言ひたき思入、東藏涙を拭ひ愁ひの思入、又揚幕の内にて烈しく遠寄せを打つゆゑ思ひ切つてつか〳〵と花道へ行く、お民小笹を抱き上げる。

三平　あ、もし。

トこれを教へる、東藏も振返りよろしく思入、小笹ばつたりと落入る、これにて東藏きつとなつて、

〽勇み進んで、

ト東藏槍を掻い込み勢ひ込んで花道へはひる。三平は井戸の柱に取附き、延び上り見送る、お民は小笹に縋り泣く、此見得よろしく、どんちやん、カケリにて此の道具廻る。

(三方ヶ原討死の場)――本舞臺四間中足の二重、岩組の蹴込み、後遠山、谷川の遠見、上下岩組の張物にて見切り、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て遠州三方ヶ原山間の體。どんちやんにてよろしく道具留る。と、どんちやん、誂への鳴物になり、花道より四郎左衛門、鎧、籠手、臑當、太刀、馬手差し、好みの陣立て、手負のこしらへ拔身にて、陣立て拔身の軍兵四人と立廻りながら出來り、花道にてちよつと立廻り、舞臺にて四人を相手に二重を遣ひ、立廻りよろしくあつて左右へ切倒し、ほつと思入。

四郎　益なき日頃の確執より先刻一命捨つる所、生き延はつたばツかりに、侍らしく名を殘し討死なすは身の譽れ、鳴瀨氏は存命なるか、但しは魁けいたせしか、死を諸共に極めんと一旦約定せし上は、對面なして死にたいが、何れに居るか此の亂軍、(ト向うへ思入あつて、)鳴瀨氏やアい〱(ト上手へ向つて、)東藏殿やアい、(トこゝへ一人かゝるを見事に切倒し、)東藏殿やアい。

ト呼びながら上手へはひる。どんちやん、誂への合方にて、花道より、東藏手負ひにて、陣立て拔身の軍兵二人と槍にて立廻り乍ら出來り、二人叶はず花道へ逃げてはひる。東藏ひよろ〱として槍に縋りきつと留まる。本釣鐘誂への合方、息の切れし思入あつて、

東藏　かねて必死を極めしゆゑ、一命賭けて防戰なし、穴山の手は切破りしが、目にあまる大軍に數ケ所の手疵負ひたれば、所詮存命思ひも寄らず、討死なさんと思へども、死を一緒にと約定せし鳥居殿は、如何せしぞ、息ある內に逢ひたいものだ。鳥居殿やアい〱、(ト向うへ思入あつて、)四左郎衞門殿やアい〱。

ト槍に縋りよろめき〱舞臺へ來る、以前の二人に四人殖え、六人槍にて突いてかゝる。誂への鳴物になり、是れを相手に手負の立廻り、此內始終名を呼ぶことあつて、トゞ槍を捨て、太刀を拔き、六人を切倒し、疲れし思入にて、

鳥居殿やアい。

ト呼びながらうつとりとなり、どうと下に居る、こゝへ一人出で刀を振上げ切らうとする、此時上手より以前の三平、達附大小、籠手、臑當、襷、鉢卷にて出來り、後より振上げし手を捉へ、刀を捥ぎ取り、見事に切倒し、東藏を抱き起し、耳へ口をよせ、

三平　旦那樣、手疵は淺うござります、お氣を慥にお持ち下され。（ト是れにて東藏きつとなり、）

東藏　鳥居殿に逢ふまでは、死ぬことでない案じるな。

三平　あゝこれ、どうぞ少しも早く、お逢はせ申したいものぢやなう。

ト介抱なす、やはり誂への合方、かすめて遠寄せ、上手より以前の四郎左衞門を、逸平達附、臑當、籠手、襷、鉢卷、大小にて肩へ掛け出來り、上手にて、

逸平　旦那樣、お悅びなされませ、鳴瀨樣がござりまするぞ。

四郎　なに、東藏殿が。（トひよろ〳〵としてべつたり下に居る、東藏これを聞き、）

東藏　おゝ、鳥居氏か。

四郎　鳴瀨殿。（ト兩人這ひ寄り、手を取り交し、嬉しき思入、）

東藏　貴殿も深手を負はれしか。

四郎　最早存命思ひも寄らず、
東藏　某とても同じこと、
四郎　然らば、これにて、
兩人　最期を遂げん。
逸平　私共も殉死なし、
三平　冥土の御供仕らん。
東藏　いや其方共は介錯なし、
四郎　首級を敵に渡さぬやう。
逸平　ではござりまするが。
三平
四郎　え〻、主の詞を、
四郎　用ひぬか。
東藏
逸平　はッ。（ト是非なく控へる。本釣鐘。）
三平
四郎　いざ、東藏殿。
東藏　四郎左衛門殿。（ト兩人鎧を脱ぎ捨て）

四郎　あゝ無益に捨つる一命延はり、
東藏　討死なすは、武士の本懷、
四郎　目出度く笑つて、
東藏　最期を遂げん。
ト兩人馬手差しを拔き、逆手に持つ、逸平、三平是非なく後へ廻り、東藏、四郎左衞門は一時に腹へ突立て引廻して、兩人顏見合せ、
四郎　むゝ、
東藏　はゝ、
兩人　むゝ、はゝゝゝゝ、（ト手負ひの笑ひあつて、）いざ、介錯。（ト手を上げる。）
逸平 三平　はツ。（ト兩人、一時に刀を拔き、振上げるを木の頭、兩人馬手差しを拔き、）
四郎 東藏　はゝゝゝゝ。
ト手負ひの笑ひをきざみ、本釣鐘にてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕引附けると、ばたりと音して、跡シヤギリ。

三幕目

甲州黒澤獄屋の場
同　源氏獄捕物の場

〔役名――億川善三郎、土屋幸藏、鳶の者みばえの松、原田隼人、禮者龜屋萬次郎、番卒運藤、同兵藤、同權藤、同軍藤、丁稚三太、同長松、辻番彌平次、鳶の者浪の花の梅、駒木右京、禮者鶴屋千太郎。燗酒賣りお靜實は鳥居の妹梅ヶ枝。〕

(黒澤山中獄屋の場)――本舞臺上寄りに二間の獄屋、前側太き格子、此の前へ一間庇を張出し、下手に突棒刺股袖搦みを飾り、上下雪山の張物にて見切り、後一面に雪山、日覆より雪の積りし松の釣枝、舞臺花道とも一面に雪布を敷き、總て甲州黒澤の山中獄屋の體。こゝに運藤、兵藤、權藤、軍藤、水汲、達附、一本差し草鞋、番卒のこしらへ、庇の下にて焚火にあたり居る、此見得雪おろしにて幕明く。とやはり雪おろしにて、日覆より雪ちら／＼と降る。

運藤　何と、此の甲州も山國とはいひながら、豪氣に雪が降るぢやァねえか。

兵藤　僅かの内に野も山も、眞ツ白になつてしまつたが、これぢやあ今夜は積るだらう。

權藤　只せえ寒いに此の大雪、富士颪を背中へ受けて、獄屋の番は難儀な役だ。

軍藤　わしは此頃歩に當り、在から來たゆゑ何にも知らぬが、此の獄屋に居る人は、何の科で入れられたのだな。

運藤　ほんにこなたは新參だから、委しい譯を知るめえが、此の獄屋に居る善三郎殿は、元億川家の身

内の人で、遠州から甲州へ人質に來て居たのだが、一旦結んだ和睦が破れ、又候戰が始まつたので、それで獄屋へ入れられたのだ。

兵藤　それぢやあ此の善三郎殿は、人質に來た人であつたか。

權藤　たまがなければ吹きさらされて、獄屋の番もしまいのに。

兵藤　何にしろ此の寒いのに、ぐづ〳〵爰にして居ずと、逃げてゞもくれゝばいゝ。

軍藤　然し大事の囚人が、逃げたら祟りが來ませうぜ。

運藤　おゝ、來るともく、逃した日には首道具、こつちの番でない時に、こつそり逃げて貰ひたい。

兵藤　そりやアさうと、止めどもなく段々雪が降つて來るが、焚火位ぢやあ凌げねえ。

權藤　斯ういふ時は熱燗で、二三べいあほらにやあ、腹の中が溫まらねえ。

軍藤　こんなに降ると知つたらば、一升買つて來たものを、是れから麓の酒屋まで、半道あれば買ひには行かれず。

運藤　此頃こゝらへ賣りに來る、燗酒屋の女房も、此の大雪ぢやあ今日は來めえ。

兵藤　段々寒さが身に染みて、呑まずにや居られねえ。

權藤　斯ういふ所へ來てくれゝば、總仕舞ひにしてやるに。

軍藤　や、噂をすれば影とやら、向うから來る商人は、

運藤　成程、いつもの酒屋の女だ。

兵藤　こいつァ酒が、

四人　呑まれるわえ。

ト雪おろし合方になり、花道よりお靜手拭を冠り、やつし裝、裾を端折り蓑笠にて、燗酒の荷をかつぎ出來り、花道へ留り、思入あつて、

お靜　いかに富士が近いとて、此のやうに雪が降るものか、吹雪で鐘も聞えぬが、もう大方七つ半過ぎ、今登らねば夜に入つたら、しつかり雪が積るであらう、寒さで酒もよく賣れて、もう少しで仕舞ゆゑ、早う賣つて歸りませう。(トお靜舞臺へ來る。)

運藤　おゝ、酒賣りの姐エ。

四人　待つて居た〱。

お靜　此の大雪でいつもより、大きに遲うなりました。

兵藤　なんぼ稼ぐ姐エでも、今日は來まいと思つたに。

權藤　よく此の雪に出掛けて來た。

軍藤　さあ〳〵、爰へ來て當らつせえ〳〵。（トお靜下手へ荷をおろし、）

お靜　はい〳〵有難うございます、實の所道は惡し、どうしようかと存じましたが、不斷御贔屓になりますゆゑ、お寒さ凌ぎに皆さまへ、一杯づゝ上げませうと、存じまして參りました。

運藤　それは〳〵忝ない、此の通りの吹拂ひ一杯呑まねば凌げぬから、さつきから待つて居たのだ。

兵藤　さあ〳〵、早く燗をして、一杯づゝ呑ましてくりやれ。

お靜　はい〳〵、畏りましだ。（ト盆の上へ朝顏茶碗を四つ載せ、一升徳利を持ち出で、）お燗もつけて參りましたから、丁度よろしうございませう。

運藤　それは何より有難い。

兵藤　然し、ぐる〳〵廻りは面倒だ。

權藤　盛切り酒を呑むやうに、

軍藤　銘々茶碗を控へよう。

ト此内捨ぜりふにて四人茶碗を控へ、お靜徳利よりつぐ、四人酒を呑み、

運藤　あゝ、好い心持だ〳〵。此の雪風の寒いのも、姐エのお蔭で忘れてしまつた。

兵藤　疾うから聞かうと思つて居たが、おぬしは爰へ何處から來るのだ。

お靜　はい、私は此の麓の、馬籠村から參ります。

權藤　馬籠村ぢやあ、こゝから一里、よく此の雪に出掛けて來たな。

軍藤　さうして姐エは所の者か、但しはわきから來たものか。（トお靜思入あつて、）

お靜　はい、所の者でござりますが、四五年あとに人に誘はれ、上州邊から奥州掛け、蠶の仕附や絲の取りやう、久しく修業をいたしましたが、どこの國へ參りましても故鄕に勝る所はなく、少しも早く歸りたいと願ひに願つて去年の暮、お馴染の地へ歸りましたが、御覽の通りの不器用者、優しい事は何一つ出來ませぬゆゑ此やうな、女子の身にて恥かしい擔ぎ商ひをいたしまするも、間者とやらの御詮議で、女でなければ陣中へ參ることが出來ませぬゆゑ、男代りの燗酒賣り、斯うして商ひいたしまするも、何れもさまの皆お蔭、どうぞ是れから輪を掛けて、此の德利の一しやうがい、御贔屓お願ひ申しまする。（ト見物へ向ひ辭儀をなす。）

運藤　そりやあ、おぬしが頼まずとも、おら達四人は極く贔屓だ。

兵藤　何にしろ酒のお蔭で、こつちはすつかり温まつた。

權藤　姐エを一人ぼく〳〵と、歩かせるが氣の毒だな。

軍藤　寒い思ひはさせねえが、こゝへ泊つて行く氣はねえか。

お靜　さあ、わたしもさつきから、さう思うて居る所、もう入相に近ければ、是れから麓へ參りますると、途中でとつぷり暮れませう、夜に入りましては一人では氣味が惡うございます。

運藤　おゝ、惡いとも〳〵、えて雪降りには山奥から、猪が出るものだ。

兵藤　どんな難儀に逢はうも知れねえ、それよりこゝへ泊るがいゝ。

お靜　左樣なら皆樣の、お詞に甘えまして、御厄介になりませうか。

權藤　それぢやあ、姐ェは今夜泊るか。

軍藤　こりやあ、面白くなつて來た。

お靜　然し、見廻りのお役人樣が。

運藤　所が雪の降らねえ日さへ、見廻りに來ねえ役人、此の大雪になに來るものか。

兵藤　そこらは少しも案じずに、ゆつくり酌でもしてくりやれ。

ト此内始終酒を呑むこなし、お靜又一升徳利を出し、

お靜　さあ、もう一升つけましたから、たんと上つて下さりませ。

運藤　おらあもう豪氣に醉つた、酒より早く寐てえものだ。

お靜　それぢやあ是れを一杯づゝ、上つてお休みなされませ。

ト皆々の茶碗へつぎ、捨ぜりふにて是れを呑む。

兵藤　さあ〳〵、是れでおつもりだ〳〵。

運藤　さあ、姐エはおれと一緒に來ねえ。(トお靜の手を取るを。)

兵藤　これ〳〵、さうまんがちにしちやあいけねえ。

權藤　何ぼ手前が頭だつて、幅をきかせられちやあ癪にさはる。

軍藤　役向きなら知らねえこと、こりやあ新參古參はねえ。

運藤　えゝ、手前達の指圖を受けるものか。(ト立上り、ひよろ〳〵として、どうとなる。)

お靜　あゝもし危ない、どうしたぞいな。

權藤　跡の一杯を止せばいゝに。

軍藤　まんがちに、酒を呑むからだ。(ト運藤思入あつて、)

運藤　なに、酒に醉つたのぢやあねえ。

お靜　心持でも惡うござんすか。

運藤　おゝ、腹の中がひつくりかへるやうだ。

お靜　え。(ト思入、兵藤も苦しき思入にて、)

兵藤　さう言やあ今の間に、おれが手足が痺れて來た。
權藤　こいつァ、雪に凍えたせるか。
軍藤　胸苦しくッて怺へられねえ。
お靜　それぢやあ、お前方は苦しいかえ。
四人　おゝ、苦しい〳〵。（ト四人胸を押へて苦しき思入。）
お靜　てもまあ、よく利いたねえ。
四人　や、それぢやあもしや、今の酒に。
お靜　おゝ、痺れ藥を仕込んでおいた。
四人　えゝゝゝ。（ト四人びつくりなす。）
お靜　苦しからうがちつとの內、決して命に障りはないから、手足をもがゝず辛抱しなさい。
運藤　さてはおのれは、濱松から、
兵藤　間者にこゝへ、
四人　來たのだな。
　　ト時の鐘凄き合方になり、お靜手拭を取る、結び髮の鬘、きつとなつて、

お靜　そりやあ言はずと知れたこと、和睦が破れてそれからは、間者を恐れて川々から峠々へ關所が出來、男體した身の上では迂濶に來られぬ敵地ゆゑ、身延參りと僞つて東海道から山傳ひ、見るさへこはい富士川に、命を搦む藤橋を越えてやう〳〵忍び込み、善三郞樣を盜まんと、此の大雪を幸ひに、一杯呑ました燗酒は、五體のきかぬ痺れ藥、手足がきかねば銀山を呑んだ鼠も同じこと苦しからうがちつとの內、尻尾を挾んで辛抱しなせえ。

運藤　此の間から來る度に、地切を切つて賣る酒は、怪しい奴と思つたが、

兵藤　さては間者で、

四人　あつたるか。

お靜　推量の通り遠州から、姿をやつして間者に來たのだ。女でこそあれ濱松の、御內で何の某と、人に知られた勇士の妹、何と肝が潰れたらうね。

權藤　敵の間者と聞く上は、

軍藤　假令手足は痺るゝとも、此のまゝ汝を、

四人　歸さうか。(ト合方雪おろしにて、ひよろ〳〵と立上りてはどうとなる。)

お靜　手向ひなさば不便ながら、命がないぞ覺悟しや。

四人　何を、小癪な。

ト四人立ちかゝりてはどうとなり、體の利かぬ立廻りよろしくあつて、お靜荷の内より誂への一腰を出し、

お靜　此の短刀で、片時も早く。（ト獄屋の内へ入れる。）

運藤　南無三、刃物を入れられては。

ト組附くを、お靜振解く。此時格子の内より白刃出で運藤を貫く。運藤苦しむ、内より白刃を引く、運藤ぽんと躱る、此の途端格子二三本毀れる。

お靜　嬉しや、首尾よく。

ト軍藤組附くを投げのけ、きつと見得、知らせに附き此の前へ雪幕を振落し、此の人數を隱す、雪おろしにてつなぎ、後の道具出來次第、雪幕を切つて落す。

（源氏ヶ嶽捕物の場）‖本舞臺三間の間高二重の岩山、此の後に五尺程の二重同じく岩山。兩方とも足掛り附き、二重の上下谷間の切穴、杉の梢を見せ、後切出し雪山の遠見、後に旭の出ること、上下大臣の柱の際より雪山の張物にて見切る、此の前切破りの藪疊、日覆より雪の積りし杉の釣枝、舞臺花道とも一面雪布を敷き、總て駿甲の境源氏ヶ嶽の體よろしく。雪おろし時の鐘にて道具納まる。

ト時の鐘打上げ、大薩摩になる、

大薩摩〽それ巍々たる重山も、降り積む雪に埋もれて、樵夫の道も白妙の、吹雪烈しき源氏ヶ嶽、岩にせかるゝ谷川の水も凍りて音もなく、哀れ猿猴の啼く聲を、よすがに辿る九十九折。

ト誂への合方、谺、雪おろしにて兩花道へ雪降り、東の揚幕より土屋幸藏、黒繻子の四天、鉢卷、黒繻の股引白錦の挾帶、淺黄の扱き大小、草鞋、竹笠、本蓑にて短き手拭を持ち出る。東の揚幕より辻彌源次、同じこしらへにて手槍を持ち、兩人花道よき所に留り、やはり、誂への合方にて、

幸藏　まことや齊の管仲が、老馬を放ちて道を得し、其故事に異ならず、常見し山の枝折れさへ雪に埋もれ見え分かず、

彌源　こゝは所も駿州と我が甲州の國境、谷を望めば白旗に似たる流れも因みある、源氏ヶ嶽の小室越え、

幸藏　人跡絶えて鳥さへも、通はぬ峰に分け入つて、いゝはごを破りし落人の、塒を搜す雪の暮、

彌源　樹木の茂み竹藪や、小止まぬ雪の古宮を探索なせど手掛りも、嵐に空の吹き晴れて、

幸藏　木の間の月も西へ落ち、今宵も最早寅の刻、

彌源　千里も一里一飛びに、東をさして登りしも、

幸藏　松の一木に枯れ殘る、蔦の錦を身の晴れと、

彌源　飾る故郷に知る人も、廿歳過ぎて中村屋、

幸藏　月日の關のあらざれば、

彌源　昨日と過ぎて今日こゝへ、

幸藏　再び歸るお目見得も、

彌源　あるに甲斐なき、未熟の腕前、

幸藏　いつかは役にたつか弓、

彌源　石に立つ矢の一心に、

幸藏　勇士の數に加はるやう、

彌源　願ふは偏に、

兩人　神の加護。

〽まだ冬ながら春近く、朧に霞む月影は、風情ありける詠めかな。

トせりふの內、日覆より月をおろし、兩人よろしく舞臺へ來り、左右へ避け合ひ、大薩摩の切れ、笠へ手を掛け顏を透し見て、

彌源　貴殿は土屋幸藏殿か。
幸藏　さいふは、辻彌源次殿か。
彌源　雪中お役目、
兩人　御苦勞千萬、
彌源　して、貴殿には何れより、これへお越しなされしぞ。
幸藏　七面山の裏手より、西ヶ畑を廻つてござる。
彌源　未だ手掛りはござらぬかな。
幸藏　獵人共に申附け、此の近鄉を探索なせしが、手掛り知れぬは信州路へ、道をかへて落ちはせまいか。
彌源　いや翼があらば知らぬこと、此の大雪に信州路へ、山越しなしては行かれまい。
幸藏　して、其許には、是れより何れへ。
彌源　拙者は麓の堂宮に忍び居ると思ふゆゑ、一先づ是れより大島から、奧津邊を尋ぬる所存。
幸藏　然らば手前は峠の方を、今一應探索なさん。
彌源　もし手掛りがござつたら、

幸様　礫の狼煙で、合圖をなさん。
彌源　左樣ござらば土屋殿、
幸藏　辻氏、
兩人　お別れ申す。

トこだまの入りし誂への合方になり、彌源次は本花道、幸藏は東の假花道、兩人よき所まで行く、此の時風の音烈しく、二重上手の山の上より誂への雪の塊落ちてばつと散亂する、是れと一時に上手山の上より、億川善三郎、大百日、お納戸綸子の一つ着、白のしごき、以前の一腰を差し、辷り落ち心にて平舞臺へどつさり落ち、其の儘打伏になつて居る。花道の兩人此の音に振返り、槍を構へきつと見得。この時上手藪疊みを押分け、駒木右京、兩人と同じ黑四天のこしらへ、本蓑竹笠を翳し窺ふ。下手藪疊みを押分け、原田隼人、同じ黑四天のこしらへ、本蓑竹笠を翳し窺ひ、四人きつと見得。本釣鐘を打ち込み、善三郎顏を上げる。これを見て右京、隼人は藪の内へ引込む。彌源次、幸藏は竹笠にて顏を隱し、下に居て窺ふ。善三郎扨はといふ思入あつて立上り、しごきを締めきつと見得。是れをキツカケに月を引いて取り、本釣鐘、竹笛入りの凄き合方になり、幸藏彌源次窺ひながら舞臺へ來る、善三郎下手へ行かうとするを、彌源次槍を突掛ける。善三郎又上手へ行かうとする、幸藏槍を突き附けるに、身をかはしてちよつと立廻る。爰へ隼人、右京同じく手槍を持ち突いて掛り、立廻りあつて、善三郎後の二重へ上る。右京幸藏へ突き掛ける、隼人は彌源次に突き掛け、二人づゝ、

槍の立廻りあつて、四人共雪に辷りどうとなり、凍えし思入にて、槍を捨て息をつき、手を溫める思入。善三郎は此の內雪を取つて咽喉を潤し、二重から下りようとするを、隼人後から組附く。彌源次前から胸許を取る。これを振拂ひ、又幸藏、右京四人にて掛り、二段の岩山を遣ひ、雪に凍える面白き捕物の立廻りよろしくあつて、トヾ善三郎は上の二重、中の二重に右京、隼人、平舞臺にては幸藏、彌源次、四人一時に黑四天を引き拔き、見事なる錦の四天素綱になり、五人きつと見得。誂へのダンマリの鳴物になり、二重の上にて善三郎刀を拔き、ダンマリの立廻りよろしく、トヾ善三郎に切り立てられ、たぢ〳〵として二重の上下谷間の切穴へ二人づゝ辷り落ちる、雪の花ぱつと立ち、善三郎刀を持ち、左右を見返り、につたりと思入あつて、

善三　雪に辷つて四人とも、崖から谷へ落ちたるか、既に危き我が命、思ひがけなく助かつたは、未だ武運に盡きざるか。(ト鷄笛になり、)大院西に落ち果てゝ、白む東に太陽の、影もまばゆき雪の朝。

ト善三郎短刀をしごきで拭ふ。此內正面切出しの山の蔭へ紅絹張り灯入りの日輪出る、是れを見て、

はて、心地よき、(ト短刀をしやんと鞘へ納めるを木の頭。)詠めぢやなあ。

ト日の出を見る、烏笛、山おろし、カケリにてよろしく、

ひやうし幕

ト幕引附けると鳥追通り神樂になり、幕の內に道中双六寶船々々といふ聲して、よき程に、花道へ龜

屋萬次郎散切鬘上下、禮者のこしらへ、小僧三太股引尻端折りにて、年玉物を盆に載せたるを持ち、浪花の梅華羽織紺の腹掛け、股引、鳶の者のこしらへにて鋏箱を擔ぎ出ろ、是れと一時に東の假花道へ鶴屋千太郎上下禮者のこしらへ、小僧長松股引尻端折り、同じく年玉物を持ち、みばえの松毬栗鬘革羽織紺の腹掛け、股引、鳶の者のこしらへにて出で双方よろしく、

千太
萬次 はい、新年の御祝儀申しまする。
三太
長松 お目出度うござりまする。

ト雨桟敷土間の見物へ、年玉物を配りながら、右の鳴物にて花道へはひる。知らせに附き跡シヤギリ。

四幕目大詰

濱松天現寺の場
同 太鼓櫓の場
同 武田勢屯の場
同 場内廣間の場

〔役名〕――酒井左衞門忠織、德川家康公、馬場美濃守信房、鳥居彦右衞門忠恭、山形三郎兵衞昌景、渡邊半藏、柴田七九郎、同朋鉢阿彌、忠織姉伏屋、奥方常磐木御前、彦右衞門妹梅ヶ枝、其他。〕

(天現寺門前の場)――本舞臺眞中に雪の積りし大樹の松、上下雪山の張物にて見切り、日覆より雪の積りし松の釣枝、下手よき所に氷の張りし大きな池、人の出はひりあり、向う朱塗りの寺の門、右練塀雪の積りし樹木の書割り、舞臺花道とも雪布を敷き、總て濱松天現寺門前の體。こゝに渡邊半藏、柴

田七九郎鎧、籠手、臑當、附太刀、陣立のこしらへにて、立ちかゝり、下手に○△□◎百姓四人、蓑笠にて兵糧と記せし長持をおろし、休み居る、此の見得どんちやんにて幕明く。

半藏　こりや〳〵百姓、其の方どもはこゝへ何れより參つたぞ。

○　へい、私共は、三方ヶ原まで此の兵糧を運びまして、

△　これへ歸りましてござりまする。

七九　然らばこれへ參る途中で、君をお見受け申さゞるや。

□　御軍勢へ兵糧を、差上げまするると、跡をも見ず、

◎　逃歸りましてござりますから、戰の事は存じませぬ。

半藏　存ぜぬといふも尤もなるが、其の方共を軍中で、相手にいたす者はない。

七九　うろたへまはつて其のやうに逃歸らずともよいことを。

○　どうして逃げずに居られませう、鐵砲玉や矢の降る中、

△　まご〳〵いたした居りますと、命を捨てねばなりませぬ。

□　それゆゑ逃げて歸りましたが、大將らしいお方は、

◎　途中でお見受け申しませぬ。

半藏　然らば未だ我が君は、戰場においでと見ゆる。

七九　又もやこれより三方ケ原へ、引返してお尋ね申さん。

半藏　それとも先刻間道より、お引き揚げになつたるか。

七九　御城内の様子をば、誰ぞに聞きたいものでござる。

トばた〳〵になり、上手より梅ケ枝紅絹の襷、鉢卷、長刀を持ち、陣笠を翳し出來り。

梅枝　そこにおいでなされまするは、渡邊、柴田の御兩所なるか。

七九　誰かと思へば、鳥居氏の妹御。

半藏　梅ケ枝どのでござるか。

梅枝　只今これへお歸りありしは、君の御供めされしか。

半藏　いや今朝よりの亂軍に、われ〳〵二人は先手を勤め、君のお行方知れざるゆゑ、お尋ね申して居る所。

七九　かいくれお行方知れざるゆゑ、是れまで取つて返せしが、未だ御歸城なされぬか。

梅枝　いえ、我が君様を始めとして、どなたも御歸城ない所へ、味方の負けと度々の注進、御臺様にも殊の外、戰をお案じ遊ばして、途中まで行き見て參れと仰せゆゑに、私が、遠見がてら此處まで

參りましてござりまする。

半藏　それではいよく我が君には、戰場に極つた。

七九　是れより直にお迎ひに、三方ケ原へ取つて返さん。

○　わしらも早く家へ歸つて、ゆつくり足でも、

四人　延ばしませう。

七九　左樣ござらば、

兩人　梅ケ枝どの。

梅枝　御苦勞ながら少しも早く。

半藏　おゝ、今に御供。

兩人　いたすであらう。

ト又どんちやんになり、半藏七九郎花道へはひる、百姓四人は長持を擔ぎ上手へはひる、梅ケ枝向うへ思入あつて、

梅枝　又も聞ゆる貝鐘太鼓、間近く敵が來たと見える、女ながら武士の家に生れし此の梅ケ枝、せめて敵を一人でも討つて手柄を仕度いもの、お迎へがてら向うへ行つて、戰の樣子を見ませうか。

ト梅ケ枝しごきをしめ直し、身拵へする、誂への合方かすめて、遠寄せを冠せ、ばた〳〵になり、花道より億川家康緋縅の鎧、太刀、馬手差し、毛沓をはき、陣立、大將のこしらへ、此上へ雪の積りし本裝、竹笠を翳し、つか〳〵と出來り、花道よき所へ思ろ、跡を振返り竹笠を上げ、向うを見て思入あつて、

家康　本田忠勝が殿にて、虎口を脫れ引き揚げし、我を目掛けいたゞ一人追掛け來たる武田勢、既に危き其の所へ折よく出逢ふ渡邊、柴田。彼等に任せてこゝまで來たが、最早天現寺の門前なれば本城へは程近し、松の下にて休息なさん。

ト又笠をかざし舞臺へ來る、梅ケ枝敵と思ひ、長刀を搔い込みつか〳〵と側へ行き、石突きで足を搔かうとする、家康身を開き、笠を上げ、梅ケ枝を見て、

や、梅ケ枝ではないか。

梅枝　え、我が君樣でござりまするか。（トはつと手を突き、辭儀をなす。）

家康　亂軍の中へ女の身にて、何ゆゑ是れまで參りしぞ。

梅枝　はツ、御歸城遲きを御臺樣には殊の外お案じゆゑ、お出迎ひに此處まで、參りましてござりまする。

家康　おゝ、それは近頃大儀であつた。

梅枝　先つ我が君には御別條なく、お引き揚げ遊ばしまして、お目出度う存じまする。

家康　既に最前三方ヶ原にて、甲州勢に取り圍まれ、是れまでなりと思ひし所、譽田がそれと見るよりも、彼の蜻蛉切りの槍をもつて無二無三に突き崩し、見る間に一方切り破りしゆゑ、命を拾うて歸つたのぢや。

梅枝　それはお危ないことでござりました。して私の兄彦右衛門は、君のお供をいたしませぬか。

家康　おゝ、彦右衛門も供せしが、敵勢間近く來るゆゑ、殿なすと明神の森を小楯に控へ居つたが、今に引き揚げ參るであらう。

梅枝　何は兎もあれ御臺樣が、お案じ遊ばして居らせらるれば、少しく早く御城中へ。

家康　何さま、敵勢來らぬ内。

梅枝　さゝ、お越し遊ばしませ。

ト此時どんちやんばたばたになり、花道より山縣三郎兵衛、鎧、太刀、馬手差し陣立のこしらへ、誂への槍を持ち、以前の半藏、七九郎と立廻り出來り、花道にて、

三郎　やあやあ、それへ逃げたまふは大將軍と見受けたり、後を見するは卑怯卑怯。

家康　なに、卑怯とや。（ト又立廻つて、）
七九　こやつはわれ／＼打ち取れば、
半藏　君には早く、御城内へ、
三郎　我が目にかゝる上からは、やはか其の儘逃がさうや。
　　ト兩人を拂ひのけ、つか／＼と舞臺へ來る、梅ヶ枝家康を圍ふ、半藏、七九郎と立廻つて、
家康　やあ、我を討たんとたゞ一騎、追掛け來るは神妙ながら、名もなき端武者に討たれんや。
三郎　やあ、我を名もなき端武者とは、近頃以て奇怪なり、名乘り聞かせんよッく聞け、我こそは武田
　の身内にて、さる者ありと呼ばれたる、山縣三郎兵衞昌景なるぞ。
家康　さては山縣昌景なるか。
七九　敵に取つて不足なし。
半藏　いで、われ／＼が。
三郎　何を小癪な。
　　トどんちやんにて、三郎兵衞烈しき立廻りに、兩人あしらひ兼ね、雪に辷りてどうとなる、是れにて
　　家康へ突いて掛かる、梅ヶ枝立隔てるを石突にて拂ひのけ突きかゝる、家康太刀を拔き切り拂ふ、又

兩人かゝり、立廻る。ばた〳〵になり、花道より鳥居彦右衛門白の鉢卷、鎧、籠手、臑當、太刀、馬手差し陣立のこしらへにて、誂への槍を持ち、つか〳〵と出て、花道にて槍をしごいて舞臺へ來り、三郎兵衛に突いてかゝり、雙方きつとなり、

彦右　君には、是れに渡らせたまふか。

家康　おゝ、そちは鳥居彦右衛門。

半藏七九　よき所へ來られしぞ。

彦右　こゝは拙者にお任せあつて、君を守護なし片時も早く。

半藏七九　心得申した。

三郎　やあ、手に入る敵を逃がさうか。

彦右　小癪なことを。

ト彦右衛門支へる立廻り、此内兩人家康を圍ひ上手へはひる、梅ヶ枝兄を案じる心にて、

梅枝　兄上、怪我して下さるな。

彦右　えゝ、足手纏ひな、早く行かぬか。

梅枝　はあゝ。（ト梅ヶ枝上手へはひる。）

三郎　やあ、敵の大將討取つて、功名なさんと思ひしに、邪魔立てひろぐ彦右衛門、汝が首は貰つたぞ。

彦右　取り代へるは不足ながら、おのれが首を渡すなら、おれが首をくれてやらう。

三郎　憎き雜言、覺悟なせ。

彦右　何を小癪な。

ト大小入り、誂への鳴物になり、兩人掌を遣ひ槍合せの立廻り存分あつて、トヾ彦右衛門槍を捲落され、刀を拔かうとする所へ烈しく突いてかゝられ、たぢ〳〵と後へ下り過つて氷の張りし池の中へ落ちる。

三郎　南無三、討ち洩らせしか。(ト池の中へ槍を突き込み、)慥に手ごたへ、仕留めし樣子。(ト槍を引き拔きにつたりと思入り)討ち洩らしたる大將も、未だ二町と隔たざれば、跡追掛けて討取らん。

ト槍をしごいて上手へ行かうとする、こゝへ七九郎拔身にて出で、

七九　われを遣つては。(ト切つてかゝる。)

三郎　えゝ、邪魔立ていたすか。

ト又兩人立廻りあつて、三郎兵衛、石突きで七九郎の脇腹を突く、これにてウンと悶絶なしどうと下に居る、三郎兵衛きつとなつて上手へはひる、七九郎心附き跡追掛けてはひる。本釣鐘笛の入りたる

誂への合方になり、池の氷を毀し、以前の彦右衞門、水入りの鬘に替り、池より這ひ上り、耳へ入りし水をふるひ、歩かうとして股を突かれし槍疵の痛む思入あつて、

彦右　譬にもいふ多勢に無勢、我が君奇計を廻らしたまへど、三萬餘騎の敵勢に切立てられて味方の敗北、こゝぞ美名の殘し所と必死を極めて働きしが、數度の軍に身體疲れ、雪に手足の覺えはなく、思はぬ不覺を取つたるか。(ト鉢巻を取り疵口を結へ、落散りし槍を拾ひ、)高の知れたる此の槍疵何程のことあらん。(ト槍をしごいてきつとなり、足の痛む思入あつて、)たゞ殘念なは甲州で、勇士といはるゝ山縣を討漏らせしが一世の不覺、思へば／＼。(ト松の木を見て、)口惜しい。

トしごいたる槍で松の枝を突く、仕掛にて雪ばつと散り、彦右衞門にかゝるを振拂ふ、此の見得よろしく、どんちやんにて此道具廻る。

(城内太鼓櫓の場)――本舞臺三間の間中足の二重、本庇本縁附き、向う金襖松の畫、軒口に紺白布交の幕を張り、上の方九尺の太鼓櫓、裾通り石垣、櫓の内に誂への太鼓を釣り、正面にこれへ上る石段、下の方柵矢來、雨落ちより雪の積りし城廓の屋根を見せ、花道附際に切穴、是より出入りあり總て山上にある本城の體。眞中に以前の家康、鎧直垂にて褥の上に住ひ、小姓太刀を持ち、上手に常磐木御前打掛、奥方のこしらへにて控へ、梅ケ枝、一、二、三、四腰元にて居並び下手に半藏、七九郎控へ、よろしく琴唄の合方にて道具留る、と合方彈き流しにて、

常磐　御前様にはお恙なく、御機嫌よろしう御歸城遊ばし、

梅枝　御臺様を始めとして、お側に附添ふ此の梅ヶ枝、

一　數なりませぬ私共まで、

二　凋れし花の開きし如く、

三　此のやうなお嬉しい、

四　お目出度いことはござりませぬ。

梅枝　恐悦申し、

皆々　上げまする。

家康　名に負ふ武田の大軍に、馬場山縣が先鋒にて、敵し難き鋭き働き、既に先刻三方ヶ原にて、討死なさんと覺悟せしが、持つべきものは臣下なり、鸞田を始め忠義の勇士、比類なき防戰に九死を脫れ一生を得、恙なく歸城せしぞ。

常磐　御討死とお覺悟を遊ばす程の御難戰、お察し申し上げまする。今朝より城内へ櫛の齒を引く注進も、聞く度々に味方の敗軍、御機嫌よろしく御歸城あるやう。

梅枝　私共まで、神々へお願ひ申せし加護なるか、よくお脫れ遊ばしました。

半藏　これと申すも我君が、人に勝れし御軍略。
七九　且は世上で十二神の御化身なりと申し上ぐる、御高運のなす所。
家康　今日一命助かりしは、我のみならず臣下の者、一統高運なるゆゑぢや。
常磐　まことに左樣にござりまする。
家康　何にいたせ今朝より、ろく〳〵食事をいたさぬゆゑ、殊の外空腹ぢや、誰ぞ湯漬の用意いたせ。
腰元四人　はツ、畏まりましてござりまする。（ト四人奥へはひる。）
家康　予が歸城いたせしに、未だ是れへ參らぬか、今日留守居申し附けし左衞門は如何せしぞ。
梅枝　はツ、左衞門殿には、
家康　何れへぞ、參つたか。
梅枝　いえ、左樣ではござりませぬ。
家康　えゝ、何を猶豫いたすのぢや。
梅枝　はツ。
七九　如何なることか存ぜねど、包み隱さず我が君へ、
半藏　仔細を申し上げられよ。

常磐　只今君へ梅ケ枝が、左衛門が事申し兼ねしは、今日は年越しの祝ひとて、殊の外酒を過し、其儘

そこへ俯伏せに醉伏して居りますゆゑ。

梅枝　君の御機嫌憚りて、差し控へましてござりまする。（ト家康思入あつて、）

家康　すりや、左衛門には今日の、追儺を祝し熟醉せしとか。

常磐　此合戰を餘所になし、前後も知らず醉ひ伏すほど、酒を過すといふことが、武士の身にござりませうか。

半藏　御臺所の仰せの如く、此の合戰を餘所になし、

七九　熟醉なせし左衛門殿、こりや此儘にはいたされぬ。

家康　いや〳〵決して苦しうない、此の合戰を餘所になし、熟醉なすは大丈夫。

二人　え。

家康　いや、大事ない、寐かしておきやれ。

常磐　こりや、お叱りと思ひの外、

梅枝　却つて御意に入つたる御樣子、

家康　こりや、湯漬はまだか、早う持たぬか。

腰元四人　畏りました。

ト合方かすめて遠寄せを冠せ、奥より腰元四人結構なる掛盤の膳部、行器の飯櫃を持ち出來り、家康の前へ出す、此の時花道の切穴より以前の彦右衛門出來り、下手へ手を支へ、

彦右　ハツ、鳥居彦右衛門。只今凱陣いたしてござる。

家康　おゝ、彦右衛門歸りしか。

彦右　はツ。（ト辭儀をしようとして足の痛む思入）

半藏　見れば深手を負はれし樣子。

七九　急所にてはあらざるか。（ト梅ヶ枝前へ出で）

梅枝　餘程の事と見えまするが、どこをお怪我なされました。

彦右　先刻殿いたせし時、槍先き鋭き山縣に左の股を突かれしが、戰場往來なすものは、これらの疵は往々あることだ。

常磐　さぞ此の雪に痛むであらう。梅ヶ枝用意の藥を早う。

梅枝　はツ。

彦右　あいや、藥などには及びませぬ。（ト此内家康は箸を取り、湯漬を喰ひながら）

家康　先刻歸城いたせし折は、敵勢遙に隔たり居りしが、今何れまで押寄せしぞ。

彥右　今朝よりの勝に乘り、其の勢ひ破竹の如く、勝鬨揚げて三萬餘騎、御城外の並木まで、押寄せましてござりまする。

七九　すりや、敵勢には御城外の、

半藏　はや並木まで、押寄せしとか。

常磐　こりや、打捨てゝはおかれますまい。

ト皆々顏見合せ思入、家康これに構はず、湯漬を喰ひ居る。

梅枝　兄上、防ぎの御用意を。

彥右　おゝ、言ふまでもなく防ぎの用意に、今城中を見廻りしが、戰場より引き揚げしは、僅かの小勢ゆゑ、一時に敵に亂入されなば、防ぎ戰ふ人數はなく、落城なさんは瞬く內。

梅枝　え。(ト女形皆々驚く。)

彥右　君には如何思召すか、此彥右衞門が思ふには、大手の橋を切落し城門を堅く閉し、討入ることのならざるやう、御用意あつて然るべきかと、憚りながら存じまする。

ト此內家康やはり湯漬を喰ひながら、

家康　いや／＼決してそれには及ばぬ。大手の橋も其の儘に、城門を打ち開き、夜に入らば敵勢よりよく見ゆるやう、篝を焚きやれ。

彦右　御諚を背くは恐れ入れど、只今も申す如く、三萬餘騎の武田勢、ひた押しに亂入なさば、何を以て我が君には、敵をお防ぎなされまするぞ。

家康　尤もなる諫言ながら、無謀の軍をいたさぬ信玄、殊に先手に進みしは智勇勝れし馬場信房、城門を開きおくとも、容易に討ち入ることでない。

彦右　いえ、それは下世話の油斷大敵、その機に望み變化なす敵の所存測り難し、此儀は平に拙者めが詞をお用ひ下されて、防禦の御用意遊ばしませ。

家康　はて、其の方は大丈夫の、日頃の所存に似合ずして、甲州勢に恐怖なせしか。

ト是れにて彦右衛門むつとせし思ひ入れにて、

彦右　こは情なき御一言、是れまで數度の戰爭に赴く度毎討死なす、所存でござる彦右衛門、命惜しまぬ某が何ゆゑ恐怖いたしませうぞ、城門を打ち橋を落し、御用意あれとお勸め申すも、君の御身を思ふゆゑ、一時の防ぎいたすとも、叶はぬ時は潔よく、討死いたす所存でござる。

家康　その所存なら猶のこと、城門を閉すに及ばぬ。

彦右　でも、それでは敵勢が。
家康　はて、予が思ふ仔細もあれば、先づ其儘にいたしおけ。これ、給仕いたせ。(ト椀を出す。)
腰一　はツ。(ト腰元の一給仕をなす。)
常磐　自らなどの申し上げるも憚り多きことながら、只今彦右衛門が申せしこと一理あるやうに思はれますゆゑ、お取り用ひ遊ばしまして、宜しからうと存じられまする。
半藏　御臺所の仰せの如く、我々共も先刻より、鳥居氏の御諫言。
七九　御採用あつて然るべきかと、憚りながら存じまする。
家康　奥を初め其方共が左樣思ふも尤もながら、三萬餘騎の軍勢に一時に亂入いたされなば、假令橋を切落し城門を閉すとも、打ち破られんは瞬く內、斯かる時には勇よりも、智を以て計らねば敵の防禦はなりがたし。
常磐　左樣なれば我が君には、深き思召しござりまして。
家康　むゝ、鳥居が諫言用ひぬのぢや。
半藏
七九　恐れ入つてござりまする。
彦右　然し智を以て計りたまふとも、討手に向ふ戰將が、拙者の如き愚昧者なら、無二無三に攻め入ら

ん、さある時は我が君には、如何遊ばす御所存でござる。

家康　はて、其時は是非に及ばぬ。天命歸する期と悟り、潔よく死をいたすまで。

彦右　さすれば、君の御諚をもどき、城門打つに如くはなし。

ト槍を杖に立ち上る、梅ケ枝つか〳〵と行つて彦右衞門を留め、

梅枝　あゝもし兄上、お主の御意を背きては、家來の身にて濟みますまいぞ。

彦右　濟むの濟まぬは治世の時。

梅枝　それぢやというて、

彦右　えゝ、留め立ていたすな。（ト行かうとするを梅ケ枝留める、此時奥にて酒井左衞門の尉聲をかけ）

左衞　やあ〳〵鳥居氏、暫く待つた。

彦右　何と。（トこれより床の淨瑠璃になり、）

〽程もあらせず一間より、お留守番の忠繼が、銚子杯携へて、足もしどろに出來り、

ト奧より左衞門尉 袴一本差し、好みのこしらへにて、三方へ杯を載せ、銚子を持ち、生酔の思入
にて出來り、

左衞　委細は一間で承はつた、先づ彦右衞門殿。お待ち下され。

彥右　でも、火急の防禦ゆゑ。

左衞　はて左樣でもござらうが、先づ〳〵お待ち下されい。(トひよろ〳〵と仕ふ。)

彥右　ムウ。(ト思入、梅ケ枝留めて、)

梅枝　酒井樣がお留めなされば、先づ〳〵お待ちなされませ。

〽是非なく傍へ控へれば、忠繼重き頭を上げ、

ト彥右衞門下手へ控へる、左衞門尉顏を上げ、家康を見て、

左衞　これは〳〵、我が君には、只今御歸城遊ばしましたか。

家康　今日は留守居役、終日大儀でありしぞ。(ト膳部を片寄せる。)

左衞　御出陣遊ばしてより跡に忠繼たゞ一人、姉と話しも面白からず、餘り退屈いたせしゆゑ、戰場の樣子いかゞやと、これなる三重の御櫓より遠目鏡を以て遠見せしに、まことに味方の旗色惡く、御勝利氣遣はしく存ぜし折から、來る注進もよからぬ知らせ、こりや追腹を切ることかと恐怖いたして居つたる所、(ト是れまで生醉の思入、)先づ御機嫌のよい御尊顏を拜し、恐悅至極に存じ奉ります。

ト眞面目に辭儀をなす。

家康 既に先刻討死と、予も覺悟いたせしが、首尾よく戰場切拔けて、再び歸城いたせしは、未だ武運の盡きぬと見ゆる。

左衛 何しに御武運が盡きませうぞ、御家長久疑ひなし、拙者お請合ひ申しまする。

ト生醉のこなし、家康思ひ入あつて、

家康 忠繼には酒をまゐりしか、餘程酩酊の樣子ぢやな。

左衛 はツ、お目立ちまして恐れ入りまする。今日年越しの御祝儀に、折からの此の大雪、寒風膚を冒しますゆゑ、つい一獻くださりましたが、注ぎが惡いの替り目のと、何かと名を附け數獻重ね、熟醉いたしてござりまする。

家康 成程今年は年内立春、今日は節分であつたな。嘉例の柊赤鰯は、門口へさしたであらうな。

左衛 鹽鰯は兵糧に買ひ求めてありしゆゑ、早速間に合ひましたが、かの柊がござりませず、如何はいたさんと存じましたが、斯かる戰爭の其中で尋ね搜す暇なく、佛前にある樒をば是れ幸ひと、柊の代りにさしておきました。（トこれを聞き常磐木御前びつくりなし、）

常磐 なに、樒を門へさしたるとか、新年祝ふ年越しに、佛へ供へる樒をばさすといふがあるものか。

左衛 でも、柊がござりませぬゆゑ。

常磐　なぜ柊がないことなら、松でも笹でもさゝぬのぢや、常とは違ふ戰の中、樒をさすは忌はしい。腰元共取捨てゝしまや。

腰元
四人　畏りました。

〽御臺の詞に立ちかゝれば、(ト腰元立ちかゝるを、)

家康　あいや、取り捨てるに及ばぬ。其の儘にいたしておきや。

四人　はッ。

常磐　左樣ではござりまするが、樒は佛へ供へます、忌はしいものゆゑに。

家康　なに忌はしきことがあらうぞ、樒は四時色替らず、松にひとしき常磐木にて元榊の一種なり、流石は忠繼取敢へず、よくも樒を用ひしぞ。

半藏　すりや、我が君には此の儘に、

七九　樒をお用ひなされまするか。

家康　おゝ今日を初めとして、以來予が家の嘉例といたせ。

兩人　畏つてござりまする。

〽始終を側に聞き居る忠基、心も心ならざれば。

ト此内彦右衞門、何を無駄なことをいふといふ思入にて、

彦右　いやなに、酒井氏、敵勢間近く來りしゆゑ、城門を打ち橋を落し、防禦なさんと申せしを、君にはそれに及ばぬと、仰せあれど心許なく、某防禦に馳せ行く折柄、待てとお留めなされしが、貴殿の御所存如何でござる。

左衞　これは粗忽千萬、酩酊なしてとんと失念、敵勢防禦の一條は、やはり君の仰せ通り打捨ておくがよろしうござる。

彦右　すりや、其許も御同意とか。

左衞　はて、高の知れたる甲州勢、その御用意には及ばぬこと、もし又こゝへ亂入なさば、此大きな目玉を以て、只一睨みに睨み返さん、はゝゝゝゝ、必ずお案じなさるゝな。

〽酒に他愛もあらざれば、

彦右　いや、貴殿は醉うてござるゆゑ、高の知れたといはるゝが、當時天下に雷名轟く小田に續きし武田信玄、武勇鋭く臣下の者も、二十八將始めとして衆に勝れし勇士のみ、今朝よりの勝に乘り攻め入らんこと必定なり、既に先刻山縣が君を目掛けて追掛け來り、天現寺の並木にて鋭き彼れが槍先きに御大事と見たるゆゑ、宙を飛んで其の場へ駈け附け、君を落し參らせて暫し挑み戰ふう

ち、測らず受けし此の槍疵、拙者などは兎も角も、譽田大坪名ある勇士が未だ歸城いたさぬは、深手を負ひしか討死せしか所詮御勝利覺束なきゆゑ、防禦の御用意お勸め申せど、お用ひなくば是非に及ばぬ。敵兵來らば城門の楯となつて討死なし、末世へ鳥居の美名を殘さん。

〽必死を極めし勢ひに、忠繼はたと手を打ちて、

ト彦右衞門きつと思ひ入れ、左衞門尉手を打つて、

左衞　いや、天晴なるお心掛け、武士は斯くこそありたきもの、いや感心々々、（ト感心の思ひ入れあつて、銚子杯を出し）時に一獻、如何でござる。

彦右　身共は酒は嫌ひでござる。

左衞　はて、さう言はずときこしめせ。（ト杯をさす。）

彦右　えゝ、嫌ひだと申すに。（トきつと言ふ。）

左衞　天の美祿と賞す程の、酒を嫌ひと言はるゝは、さて〳〵野暮なことでござる、いや、お手前がきこしめさずば、某これできこしめさん。（ト杯を取り上げる、家康思ひ入れあつて、）

家康　いや、其の杯これへ。

左衞　すりや、我が君には。

家康　今朝よりの苦戰の疲れ、目出度くこれにて一獻汲まん。

左衛　左樣ござらば、

〽三方取つて差出せば、（ト左衛門尉杯を載せし三方を出す。）

常磐　お酌はわらはがいたしませう。

〽御臺所が酌なしたまへば、御大將は滿々と、受けたる杯呑みほして、

ト家康杯を取上げる、常磐木御前酌をなす、家康思入あつてぐつと呑み、

家康　忠繼、近う。

左衛　はツ。

家康　目出度くそちへ。

左衛　はツ。お流れ頂戴仕ります。

〽今にも敵勢討入りなば、これ今生のお別れと、いはぬ心を汲交す、主從三世の杯事。

ト左衛門尉杯を出す、半藏酌をなす、左衛門尉呑まうとして家康と顏見合せ、これが名殘にならうも知れぬと、氣味合ひの思入、常磐木御前も是れに目を附け、扨はといふこなし、左衛門尉呑み干し鼻紙で拭ひ、家康へ差出す、又家康呑み兩人よろしくあつて、左衛門尉氣を替へ。

いや酒ばかりは量りなし、いくら呑んでも憚らぬ、寄せ來る敵を肴となし、今宵は夜と共呑み明かし、酒と討死いたしませう。（トよろしく思ひ入、家康も醉ひたるこなしにて、）

家康　さて〳〵呑めぬといふものは、今の一獻で酩酊いたし今朝よりの疲れが出て、殊の外睡たうなつた、奥へ參つてまどろまん。

常磐　すりや、我が君には此の儘に、奥でお休み遊ばしますするか。

家康　おゝ、斯う睡うなつては我慢が出來ぬ。

常磐　左樣ではござりませうが、御城外には目に餘る、武田方のあの大軍。

梅枝　今にも知れぬ其の中で、御寢なり、

腰元四人　遊ばすとは。

家康　はて大事ない、氣遣ひいたすな、敵勢これへ來るまで、暫時の内も枕につき、休息なすが身の養生。

七九　左樣ござらば、

半藏七九　我が君には、

家康　奥へ參つてまどろめば、其方共は城門を八文字に押開き、篝の用意いたしてよからう。

半藏七九　畏つてござりまする。
家康　然らば忠繼。
左衞　我が君。（ト兩人顏見合せ思入）
家康　後刻對面。
常磐腰元　先づ入らせられませう。
〽山なす敵を事ともせず、深き心の奥の間へ、御臺も共に入りたまふ。
ト家康先きに、常磐木御前腰元四人附添ひ、奥へはひる。
半藏　いで我々は御諚に任せ、此れより大手へ出張なし、
七九　御門の警固、篝の用意、士卒の者へ申し附けん。
左衞　おゝ、御油斷なく、早う〳〵。（ト扇であふぎ立てる。）
半藏七九　然らば御免。
〽然らば御免と兩人は、城門さして急ぎ行く。
トばた〳〵にて半藏、七九郎花道の切穴へはひる。左衞門尉思入あつて、
左衞　君がお休みなされたら、某も先刻より酩酊なして睡ければ、どれ、お相伴をいたさうか。

へ膝を枕に左衛門が、其の儘そこへ打ち臥せば、

ト左衛門尉横になり、扇を顔へ當て寐る、此の内彦右衛門始終思入あつて、

彦右 最前からの此場の樣子、合點行かずと窺ひ居つたが、我が君といひ左衛門殿、三萬餘騎の大軍を目の前におきながら、足手を伸ばして寐るなどゝは、餘りといへば馬鹿らしい、斯かる事に成行くも御家の滅する時節なるか、もう此の上は是非に及ばぬ、討死なすより外はない。

梅枝 そんならお前は、今宵を過さず、討死なさんすお心なるか。

彦右 おゝぐづ〳〵なして臆病の、名を取らんより、死ぬるが增し。

梅枝 そのお覺悟も無理ならねど、是れには深き御所存のある事でござりませうから、譽田樣や大坪樣がお歸りあるまで討死を、どうぞお待ち下さりませ。

ト梅ケ枝彦右衛門を留める、彦右衛門思入あつて、

彦右 三ツ兒に淺瀨の世の譬、譽田殿や大坪殿も未だ生死が分らねば、そちが詞に隨つて沙汰のあるまで死を待たう。

梅枝 そんなら待つて下さりまするか、其のお心ならお二人樣を、お待ちなさるゝ其の間、疵の療治をなさりませ。

彦右　なに、これしきの槍疵に、療治などが入るものか。
梅枝　でも、お藥を附けたなら。
彦右　えゝ、今死ぬ體に無駄なことだ。
〽勢いこんで立ち上れど、痛みに足も運び兼ね、槍を力に兄妹は暫し小蔭へ、
ト彦右衞門立上りきつとなり、行かうとして足の痛む思入あつて、ひよろ〳〵となるを、梅ケ枝もーと介抱するを、彦右衞門拂ひのけ、槍をとんと突いてきつと見得、三重にて、槍を突き梅ケ枝附いて下手へはひる。時の鐘。
〽入りにける、跡はひつそと鳴る鐘も、耳にも入らず高鼾、始終を一間に窺ひし姉の伏屋は立ち出でゝ、四邊を忍び側へ寄り、
ト此内奥より伏屋打掛奥女中のこしらへにて出來り、四邊を窺ひ左衞門尉の側へ寄り、
伏屋　これ忠繼々々、これ忠繼。（と搖り起す。）
〽搖り起されて目をしばたゝき、（ト左衞門尉顏をあげ、伏屋を見て。）
左衞　これは姉上、何事でござるな。
伏屋　用事がある、起きてくりや。

左衛　何の御用か知らねども、まことに睡うてならぬゆゑ、暫時お許し下されい。（ト又寐るを引起し、）

伏屋　えゝ、起きよといふたら起きぬかいの。

左衛　へい、起きましてござりまする。

〽両手を突けば、顔打ちまもり。（ト笙の入りたる床の合方になり、伏屋思入あつて、）

伏屋　これ忠繼、そなたは如何なる了簡なるか、そも此度の合戰は名に負ふ甲斐の武田信玄、馬場山縣を先手として三萬餘騎の大敵ゆゑ、小田家の加勢あるにもせよ、所詮味方の小勢では御勝利あるは覺束なし、我が君一世の御難戰と、由井譽田大坪どの其外お側の人々が、如何はせんと打ち擧り、三度の食もろく／＼に成されぬ程の御心勞、取り分け今日は味方の敗軍、今にもこゝへ攻め入るかと、御臺樣を始めとして此の伏屋に至るまで、生きた心地はないわいの、それをそなたは餘所になし、如何に目出たい年越しとて、前後を忘却する程に醉ふといふは何事ぞ、今にも敵が攻め入りなば、足も利かぬ其の體で、どうして敵を防ぐ心ぢや、見下げ果てたることぢやなあ。

〽女ながらも奥殿を預る伏屋が諫言を、空吹く風に聞きなして、

ト伏屋詰寄りきつと言ふ、左衛門尉思入あつて、

左衛　何事の御用かと、存じましたら其の儀でござるか、假令武田の大軍が一時にこゝへ攻め入るとも

これを防ぐ計略は、忠繼が此處にござる、必ずともに御案じあるな。（ト胸を叩いて生醉のこなし、）

伏屋　いや／＼それは呑み込めぬ、諸葛孔明が計略でも、此の大軍が攻め入るを、たゞ一人で防ぎがならうか。

左衛　所が諸葛孔明はおろか、彼の張良楠が和漢の智慧を一つになすとも、此の忠繼が計略にはなかなか及ばぬ奇々妙々、やがて御覽に入れるであらう。

〽折しも烈しき貝鐘に、姉の伏屋は打ち驚き、

ト花道揚幕にて遠寄せを打ち込む、伏屋びつくりなして、

伏屋　やゝ、間近く聞ゆる貝鐘太鼓、はや城外まで押寄せしか。

〽胸に轟く物音に、案じ煩ひ兎や角と、延び上り見る其暇も、こなたは又も肱枕、

ト伏屋立上り、向ふを見てよろしく思入、左衛門尉又横になる、伏屋側へ來て、

これ／＼忠繼、お城間近く敵方が、慥に押寄せ來た樣子。（ト左衛門尉を搖り起す、左衛門尉寐てゐるゆゑ、）これ、あの貝鐘が聞えぬか、いやさ、あの物音は耳へ入らぬか。

〽胸元取つて引き起せば、（ト伏屋左衛門尉の胸づくしを取り引き起す、）

左衛　はて、ざわ／＼と其のやうに、お騷ぎなさるに及ばぬこと。（ト思入あつて、）酒で性根を失ふとも

命も惜しけりや名も惜し、今も申す韓信や又楠にも優つた計略、澤山仕入れてござるから、必ずともにお案じなさるな。

伏屋　ムウ、其計略がまことなら、姉に明かして安堵さしや。

左衛　いえ〳〵、是れは申されませぬ。

伏屋　言はぬといふは空言なるか。

左衛　なに空言を申さうぞ。

伏屋　そんならなぜに、明かさぬのぢや。（ト伏屋詰寄る。）

左衛　はて、謀は密なるをよしとするのが、即ち本文。

伏屋　それぢやというて。

左衛　はてさてしつこい、お許し下され。

〽又も其の儘横になり、鼾をかいて正體も泣きたき涙呑み込みて、

ト此以前より左衛門尉は睡き思入よろしくあつて、トヾ横になり鼾をかいて寐る、伏屋ちえゝと悔しき思入にて、立ちかゝらうとしてちつとこなし、やはり笙の入りし床の合方にて、

伏屋　いかなる天魔が魅入りしか、そも十五歳の初陣より是れまで數度の戰ひに、敵に後を見せしこと

なく、億川家の四天王と四つの指に折らるゝのは、家の面目そなたの譽れ、御殿を預かる此の姉も肩身を廣う勤めしが、今も今とて長局で女中達が寄りこぞり、酒井樣は臆病ゆゑお留守番を言附かり、今日のお供に省かれしと、

〽噂をされる口惜しさ、

いえ〳〵弟は其のやうなうつけでないと言ひたいにも、酒に性根を奪はれて現他愛もないゆゑに、聞き流しにする此の姉が、身の悔しさはどのやうぞ、生醉本性違はずば、天晴酒井忠繼は天下無雙の勇士なりと、末世へ美名を殘すやう、性根を据ゑて手柄せよ。

〽女でこそあれ此の姉は、今にも敵が攻め入りなば長刀取つて一働き、男に勝る働きなし、

ト伏屋よろしくこなしあつて、

酒井が姉と言はるゝ心。

〽言へど答へもあらざれば、今は伏屋も呆れ果て、

姉が意見も耳には入らぬか、空吹く風に高鼾、見下げ果てたる其の心底、最早弟と思はねばそなたも姉と思ふなよ。（ト又烈しく遠寄せを打つ。）敵も次第に近附く樣子、今にも是れへ攻め入りなば、見苦しき死をなされぬやう、御臺樣へ今生のお覺悟を申し上げん。

〽流石勇士の娘とて、男子に勝る心根に涙も見せず靜々と、奥殿さして入りにける。
ト伏屋よろしく思入あつて、左衞門尉の側へ寄らうとする、此時上手へ以前の彦右衞門出て、兩人顏見合せ、伏屋素知らぬ振にて奥へはひる。
〽始終窺ふ彦右衞門、さし足なして出來り、
ト時の鐘、床の合方にて、下手より彦右衞門槍を持ち窺ひ出で、平舞臺にて、

彦右　實の姉とて伏屋どのが、恥辱を思ふて異見なせしも、餘所に聞きなす高鼾、所在あつての空寐入りか、但しはまことの熟睡なるか、虚實を試すは、此の槍先き。
〽りう／＼はツしと打ち扱き、痛手の足を引きながら、石突ついて大音揚げ、
ト彦右衞門槍をしごき、きつと足を踏み出し痛き思入あつて、跛を引きながら二重へ上り、左衞門尉の側へ來り槍をとんと突いて、
やあ臆病未練の左衞門忠繼、君のお役に立たざれば、生しておくは無益ゆゑ、某命を貰うたぞ。
〽いふに左衞門頭を上げ、（ト左衞門尉寐たまゝ頭を上げ、）

左衞　こりや鳥居氏には、何とめさる。

彦右　かゝる大事の期に臨み、酒に性根を亂せし左衞門、今にも敵勢込入つて、斯く突掛けなば何とお

しやる。

〽胸元目掛けて突き掛くれば、其の身を躱して槍先きを、拂ひのくればたぢ／＼と、尻邊に倒るゝ彥右衞門、こなたは其の儘伸びをなし、事ともなさぬ大丈夫。

ト此の內彥右衞門、左衞門尉に突いてかゝる、左衞門尉起きかへり、身を躱して槍先きを取つて拂ひのける、彥右衞門足の痛む思入にて、たぢ／＼となりどうと下に居て、直立上り、槍を突いてきつと見得、左衞門尉は其儘手を廣げ伸びをなす、此の引張りよろしく、誂への大小の鳴物へかすめて遠寄せを冠せ、彥右衞門又突いてかゝるを、左衞門尉顏へ當てし扇を取つてこれをあしらふ、此の內跛と生醉面白き槍の立廻りあつて、左衞門尉しやんと居直り、扇を構へ生醉の思入、彥右衞門突かうとして突き兼ねるこなし、體に隙のなきを見て、感心の思入、立ち廻つて左衞門尉扇で槍を打落す。彥右衞門取りにかゝる手先を打つ、是れにて手先き痺れる思入、左衞門尉槍を取りひよろ／＼と生醉の思入にて、彥右衞門へ突いてかゝる、彥右衞門是れを受け兼ねる思入、ト左衞門尉石突で足を掻く、これにて彥右衞門どうと下に居て、息の切れる思入にて、

かほどの手の內持ちながら、

左衞　げえい。（ト生醉の思入にて手を叩き、）こりや、誰かある、水を一杯くりやれ。（ト奥にて、）

鈍阿　はゝあ。

〽はアと答へて同朋が、銀の茶碗へ滿々と、こぼるゝばかり汲み來れば、

左衛　卜奥より鈍阿彌茶道のこしらへにて、黒塗りの盆へ銀張の茶碗を載せ持ち出來る、左衛門尉その儘取つて一口呑み、

左衛　醉覺めの水、甘露々々。

卜此内彦右衛門はやはり息を切つて居る、左衛門尉これを見て、茶碗の緣を指で撫で彦右衛門へ出す、彦右衛門是れを取つて戴いて呑む。

〽折しも告ぐる六つの時計、（卜此時六つの時計鳴る、左衛門尉又生醉の思入にて）

や、あのお時計は、

彦右　最早、暮れ六つ。

鈍阿　こりや、お太鼓を打たねばならぬ。

〽言ひつゝ櫓へのぼりしが、見下す敵に打ち驚き、

と鈍阿彌櫓へ上り撥を取り、向うを見てびつくりなし、つか〳〵と下りぶる〳〵顫へ居る。

左衛　こりや鈍阿彌、如何せしぞ。

鈍阿　只今あれから見下しましたら、山のやうな武田勢、あれがこゝへ攻め入つたら、命を取られにやなりませぬ。（卜がた〳〵顫へ居る。）

左衛　はてさて、意氣地のない奴だ、戰場で死ぬは武士の本望、何惜しむことがあるものか、其の性根では太鼓は打てまい。どれ、おれが打つて遣らう。（ト鈍阿彌が持つて居る撥を引取る。）

鈍阿　いえ、私よりあなたこそ、其の御酩酊で、どうして太鼓が。

左衛　いくら呑んでも、大丈夫だ。

鈍阿　いえ〳〵、お危なうござります。

左衛　えゝ、やかましい、放せといふに。

〽とゞむる鈍阿彌振拂ひ、足もしどろに左衛門が、櫓へのぼる其折柄、

ト此内知らせなしに舞臺を斜に廻し、太鼓の櫓眞中へ來る、左衛門尉生醉の思入にてひよろ〳〵と櫓へ上る、彦右衛門息をつきながら樣子を窺ひ居る、下手より梅ケ枝三方へ豆の入りし桝を載せ、是れを持ち出來り、

梅枝　もし兄さん、お前は今日の年男、六つを打つたら豆撒きな。（ト三方を出す。）

彦右　おゝ、合點だ。

〽こなたはよろめき〳〵て、酒にすわりし目を見開き、城外間近く押寄せし甲州勢をはつたと睨み、

ト此内左衞門尉生酔の思入にて、ひよろ〳〵と櫓へ上り、ひよろ〳〵として柱に縋り、中眼より段々と目を見開き、敵を見たる思入にてきつと見得、彦右衞門は是れを見て目を放さず窺ひ居る。

〽撥も折れよと打ちければ、天地に響く太鼓の音。

ト左衞門尉きつと思入あつて、どんと太鼓を打つ、此の響きにて庇の雪ばつと散る。

彦右 やゝ、耳を貫く太鼓の響き。(ト左衞門尉中眼になり、生酔の思入にて)

左衞 何と性根を、御覽じたか。

彦右 まことに恐入つてござる。

左衞 むゝ。(ト又きつとなつて太鼓を打つ、)

梅枝 兄さん、お前も早う。

彦右 おゝ、さうぢや。(ト豆を撒き、)鬼は外〳〵。

ト是れへ時の太鼓の刻みを冠せ、引張りよろしく道具廻る。

(城外武田勢引揚の場)——本舞臺上下武田菱の紋附きし幕張り、此の後雪山にて見切り、日覆より雪持の松の釣枝、向ふ灯入りの篝、城門を開きし城の遠見、舞臺花道とも雪布を敷き、總て濱松城外の體。こゝに馬場美濃守好みの鎧、籠手、臑當、附太刀馬手差し、陣羽織、陣立のこしらへにて

床几に掛り、此傍に郎黨鎧装、美濃守の兜を持ち、軍兵大勢後に居並び、前の時の太鼓にて道具留る。

〽壕を隔てゝ屯なす先手の大將馬場信房、肝にこたゆる敵地の太鼓に計略ありと打ち驚き、

ト美濃守陣扇を構へ太鼓の音を聞き居る思入、さてはといふこなしあつて、

美濃　はて心得ぬ今の太鼓、撥音冴えしのみならず、肝に徹するあの響きは、敵地に勇氣滿ちし故。今朝よりの戰爭に、敗走なして士卒にも討死なせし者多きに、三萬五千の大軍を城外に引受けながら、恐怖なさゞる敵の大膽、智勇勝れし大將ゆゑ、計略あるに疑ひなし。

士卒　いや、仰せではございますが、城門開き篝を焚き、何の用意もあらざる樣子、あれでも計略ございますかな。

美濃　時の太鼓を打つ者すら、かゝる勇氣があるからは、迂濶に亂入なり難し。

〽敵地の樣子心得ず、窺ふ折柄山縣が、勝に乘つて馳せ來り、

トばた〳〵になり、花道より以前の山縣三郎兵衞、軍兵大勢を引連れ出來り、花道にてちよつと舞臺へ思入あつて、直に來て、

三郎　それにござるは、馬場氏か。

美濃　誰かと思へば山縣氏。

三郎　早速ながら信房殿、城中手薄と見ゆるゆゑ、猶豫いたさず短兵急に、是れより攻め入る所存でござるが、貴殿のお心如何でござるぞ。

美濃　今朝よりの戰爭に味方十分の勝利ゆゑ、此の虚に乘つて無二無三攻め入らんと存ぜしが、只今打ちし敵地の太鼓、定めてお聞きなされたでござらうな。

三郎　如何にも、只今承はつた。

美濃　あの太鼓の響きをば、貴殿はいかゞ思召すぞ。

三郎　よく鳴る太鼓と存じまする。

〽いふに信房打ちうなづき、（ト誂への合方になり）

美濃　某などがおこがましく、斯樣なことを申すのも傍痛きことながら、常々主君信玄公、軍事を諭すお物語りに、總て軍は敵陣の太鼓の音色に勝敗あり、味方手薄の其の時は自然に太鼓の音色衰へ、篝も高く上らぬものとぞ。今朝よりの敗軍に城外間近く押寄せられ、九死一生の場合をも事ともなさず、あれ見られよ、大手の橋も切り落さず城門を押開き、數ケ所へ炎々と篝を焚き敵を恐れぬ有樣は、計略あるに疑ひなし。（ト三郎兵衞是れを聞き、せゝら笑ひ、）

三郎　それは貴殿の思ひ過し、何計略がござらうぞ、よし又計略あればとて、高の知れたるあの小城、人數も慥に僅かなり、たゞ一揉みに攻め入らば落城なすは瞬く内、されば拙者は期を延ばさず、一時に攻め入る所存でござる。

美濃　御尤もにはござれども、昔を今に戰爭は、勇には勝てど智には勝たれず、既に元亨の戰ひに楠正成小勢にて、千早の城に立籠りしを、十萬餘騎の大軍にて足利勢攻め寄すれど、楠公奇計を回らせば容易に攻め入ること叶はず、殘念なりと押寄すれば、或ひは大木大石に打たれ、又は熱湯を注ぎ掛けられ、味方の死亡數知れず、これ小敵と見て侮りし大軍の過りなり。

三郎　其の講釋は改めて承はらずと承知でござるが、それは味方の軍勢が、臆病ゆゑに不覺を取つたり、假令大石大木を投げ出すとても限りあり、勇氣烈しく攻め立つれば、千早の城とて落つるは必定、それに劣りし此の小城、いかなる計略あるとても、落ちざることのあるべきや。

〽笠にかゝれば莞爾と打ち笑み、

美濃　いや、なかく以て左にあらず、彼の楠公にもをさく劣らぬ智仁勇兼備の名將、殊に隨ふ武士は四天王を始めとして他に勝れたる剛の者、感心なすは今朝より戰場にて討死せしもの、一命終つて倒るゝにさへ敵へ首を向けて死すは、これぞ勇士の心掛け、斯くまで士卒一致なす遠州勢は古

今の大敵、斯く敵勢の押寄するに、城門を開き篝を焚き、今日追儺の祝言に鬼は外と呼んだる一聲、肝にこたへる太鼓の響き、足輕小者に至るまで斯くまで勇氣滿ちたるは、實に一人當千にて小勢といへど城中は、百萬騎に向ふたり。

三郎 いや假令何と言はるゝとも、貴殿の如く聞き怯ぢして、今此城を攻め落さずば、隣國他國へ猛威を揮ひし信玄公の御名折れ、此儘やみ〳〵一戰なさずば小田北條の物笑ひ、御家の恥辱になることゆゑ、此の山縣が一手にて、是非とも今宵攻め入り申す。

美濃 ではござらうが先陣の、君より命を蒙りしは、斯くいふ馬場美濃守、我れを差しおき先陣あらば君の軍令に缺けまするぞ。

三郎 それも承知でござれども、貴殿が卑怯未練ゆゑ。

美濃 いゝや、拙者が容易に攻め入らぬは、君が恥辱を思ふゆゑ、それを其許軍令破り、先陣あらば味方とて、某こゝを通さうや。

三郎 何と。

美濃 君の御下知のござるまで、心せかずとお控へなされい。

三郎 でも、此儘に。

美濃　君命背きめさるゝか。
三郎　むゝ、もう此の上は。
〽用意の彈丸打ち附くれば空に響きし合圖の狼煙、すわ一戰と軍卒が潮の如く押寄すれば、
ト三郎兵衞鎧の隱くしより玉を出し打ち附ける、どんと本鐵砲の音して掛焔硝立つ、どんちやんばたばたになり花道より、陣立の士卒大勢、花道へ出來る、美濃守これを見て、きつとなり、
美濃　仰々しい控へぬか、未だ我が君の御下知なきに、先陣の命蒙りし此の信房を差しおいて、亂入なさば汝等は軍令背く無道人、其の分にはいたさぬぞ。
皆々　ぢやと申して。
美濃　すりや山縣と諸共に、軍令背くか。
皆々　全く以て。
美濃　然らば引かう。
皆々　でも。
美濃　えゝ、引かうといふに。
〽鶴の一聲小雀の、士卒はぱツと引き退く、折しも聞ゆる螺の音。

ト美濃守きつといふ、是れにて士卒大勢花道へ引返す。と揚幕にて竹螺を吹く。

三郎　やあ、何ゆゑ士卒を追ひ退けしぞ。

美濃　あれ聞かれよ昌景殿、御本陣の方に當つて、揚げ貝を吹かるゝは、御大將にも計略のあらんことを推察あつて、引揚げたまふと覺えたり。

三郎　すりや眼前の敵を此の儘。

美濃　兎も角も我が君のお下知を受けて事をなさん。

三郎　えゝ、返す〴〵も、

美濃　はて、急かずと一先づ、

三郎　むゝ、

美濃　お引きなされえ。

三郎　えゝ、勝手にさつせえ。

〽無念ながらも揚げ貝に、是非なく山形昌景は、雪を蹴立てゝ引返す、跡見送りて信房が敵地を遙に打ち臨み、

ト此内竹螺、ばた〳〵三郎兵衛無念の思入にて花道へ行く、今に見ろといふこなしあつてきつと見得、

カケリになり軍兵附いて花道へはひろ、美濃守跡を見送り、本釣鐘を打ち込み美濃守後の城を手を翳し見る、誂への合方になり。

美濃　今朝よりの敗軍に城中臆する色見えず、六つの太鼓の勇氣滿ちしは、古今無雙の名將なり、方今小田家の權勢に、旗下に屬せど年立てば、將軍職に登るは此の君。あゝ、智仁は人の。（ト道具替りの知らせ。）寶ぢやなあ。

〽指す敵ながら、天晴と感心なしてぞ。

ト美濃守感心の思入、三重、本釣鐘にて此道具廻る。

（城内奧殿の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、正面上下共金襖日覆より大欄間をおろし、總て城内奧殿の體、眞中に家康鎧直垂にて褥の上に住ひ、小姓刀を持ちて後に控へ、上手に常磐木御前の奧方、伏屋、梅ケ枝打掛裝、腰元四人控へ、下手に彥右衞門鎧下のこしらへ、半藏、七九郎同じく鎧下のこしらへ、此外大勢同じこしらへにて士卒後に控へ、眞中より少し下寄りに左衞門尉住ひ以前の桝を載せし三方をよき所に置いて、總て本城奧殿の體、三重にて道具留る。

〽さしも雲霞の武田勢、一時に引きし悅びに、祝ひさゞめく奧御殿、

ト合方になり、家康思入あつて、

家康　如何に方々、當城間近く押寄せしも甲州勢が攻めずして、俄に揚げ貝吹き立て、右往左往に引き揚げしは、心得難きことならずや。

半藏　はッ、御掟に任せわれ〳〵兩人、御門の警固いたせしゆゑ、間者のものを遣はして、敵地の樣子を窺はせしに、

七九　酒井殿の打たれたる太鼓の音のたゞならぬに、計略ありと押測り、攻め入らずして其の儘に、引き揚げしと申すこと。

彦右　まことに最前打たれたる、太鼓の音は天地に轟き、軒に積りし雪さへも、響きに落つる程のこと拙者も恐怖いたしてござる。

〇士卒　太鼓の音に驚きて、

△　俄に、敵勢引き揚げしは、

□　酒井氏の、

皆々　御手柄。(ト左衞門尉思入あつて)

左衞　先手に進みし馬場信房、衆に勝れて軍學あるゆゑ、計略ありと推量なし、一時に陣を引き揚げしは、下世話に申す力負け、我が手柄ではござらぬぞ。

彦右　これにて思ひ當りしは、最前拙者が小量に、大手の橋を切落し城門打つて防禦なさんと、再三お諫め申せしかど、更にお用ひこれなきは、此(ハ)御計略にてあつたるか。

家康　いかにも、橋を切落し又城門を打ちたりとて、三萬餘騎の軍勢で無二無三に攻められなば、何かは以て堪るべき、落城なすは瞬く内、それゆゑ開きおいたるは、敵を計る我が軍略。

左衛　拙者もそれと存ぜしゆゑ、酒に醉ひたる體にもてなし、敵を事とも思はぬやうに、大言吐きしは味方の者に、勇氣を附くる一つの手段。

〽聞くに伏屋は、座を進め、

伏屋　女子の身の淺慮にも、かゝる手段と知らざるゆゑ、姉顏なして忠繼へ異見なせしが面目ない、嘸やわしを思慮なき者と、心で思うて居たであらう、ても恥かしいことぢやわいの。

常磐　それもわらはが頼みに思ふ、忠繼までが此のやうに今日に限りて熟醉なし、前後も知らぬ有樣は御家の滅する時なるかと、案ぜしゆゑに其の異見。

梅枝　此のお悦びに引替へて、今の今まで御殿でも、御臺樣を始めとして、

一　お側に仕へる私共、

二　今にも敵が込み入りて、

三　命を捨つることとなるかと、
四　生きた心地は、
四人　ござりませなんだわいな。
彦右　かゝる明智の我が君へ、御諫言を申し上げ、又は賢者の忠繼殿へ槍突ッ掛けし拙者が麁忽、まことに面目次第もござらぬ。（ト辭儀をなす。）
半藏　無禮麁忽もその元は、君御大事と思ふゆゑ。
七九　粉骨碎身なすといへども、われ〳〵共は無智短才。
○　一方預かる武士は、
△　智勇なくては、
皆々　勤まり難し。
左衛　實に方々の言はるゝ如く、士卒を使ふ大將は、智仁勇の三德を兼備せざれば一國たりとも、平穩にはをさまり難し。
常磐　當時兼備の大將は、
伏屋　先づ誰人であらうぞや。

左衛　雷名四海に轟けど、小田春永は強將にて、仁勇あれど智少なし。
彥右　して、小田原の北條は、
左衛　仁はあれども智勇なし。
半藏　して、又甲斐の信玄は、
左衛　智勇あれども仁あらず。
七九　して、智仁勇兼備といふは、
左衛　恐れながら、我が君なり。
〽いふに大將につこと打ち笑み、
家康　いや、なか〳〵以て若將たる、某などが智仁勇、兼備などゝは思ひも寄らず、臣下の者の助けゆゑ、今日などの難戰も首尾よく虎口を脫れたり、既に先刻武田勢に、一時に亂入いたされなば、是れに居並ぶ者共も皆黃泉の客とならんに、測らず一命助かりしは正に神の加護なるべし。
左衛　此の大難を免れしも、皆我が君の御智略、橋を落さず城門を閉したまはぬ大丈夫、古今稀なる御大將。然しながら我が君が、味方の勇氣を落さぬやう、御寢なりし御心勞。
家康　敵勢間近く引受けて、忠繼そちが熟醉も、

左衞　恐れながら、君と御同意、
家康　實にその時の我が心中、
左衞　お察し申し上げまする。
家康　予も察し居るぞよ。
左衞　はツ。

〽明けて言はねど主從が、心を察し人々も、嬉し涙に暮れにける。

ト此内左衞門尉家康顔見合せ、落涙なす思入、皆々これを見て涙を拭ふ。

家康　奧を始め女子共の、氣を落させじと枕に附き、そら鼾をなしたるが、餘程切なきことであつた。

〽御機嫌さうにのたまへば、

常磐　わらはを始め女子共を、
伏屋　思召しての御心勞、
梅枝　冥加ない儀で、
女皆々　ござりまする。
彦右　然しながら我が君の、御計略圖に當り、

半藏　さしも大軍の武田勢、
七九　彌生に潮の引く如く、
○士卒　次第々々に、
皆々　引き退きしは、
左衞　全く君の御高運、
伏屋　恐悦申し、
皆々　上げまする。
家康　九死を出でゝ一生を得し、
左衞　今日は則ち追儺の節分、
家康　これにて我が身の厄拂ひ、
常磐　明くれば年も、
伏屋　新らしく、
彦右　吉事を迎うる、
立役皆々　お家の榮え、

左衛　目出度く祝して、

ト桝を載せし三方を持ち、ずつと立つを木の頭。

福は内、福は内。

ト上下へ豆を撒く、皆々勇ましき引張の見得、カケリにて、

ひやうし　幕

酒井の太鼓（終り）

月宴升毬栗

前座は眞書太功記後座の端物は
浮名の横櫛ほつれし髪をかきかへて
ざんぎりお富に坊主與三木更津かけて
七年越し放れぬお仲清七が二世の縁を
結び合ふ世界も二筋三筋には退れぬ中の
蝙蝠安觀音久次が男氣に多左衞門が
親身の異見義理にしがらむ世話講談

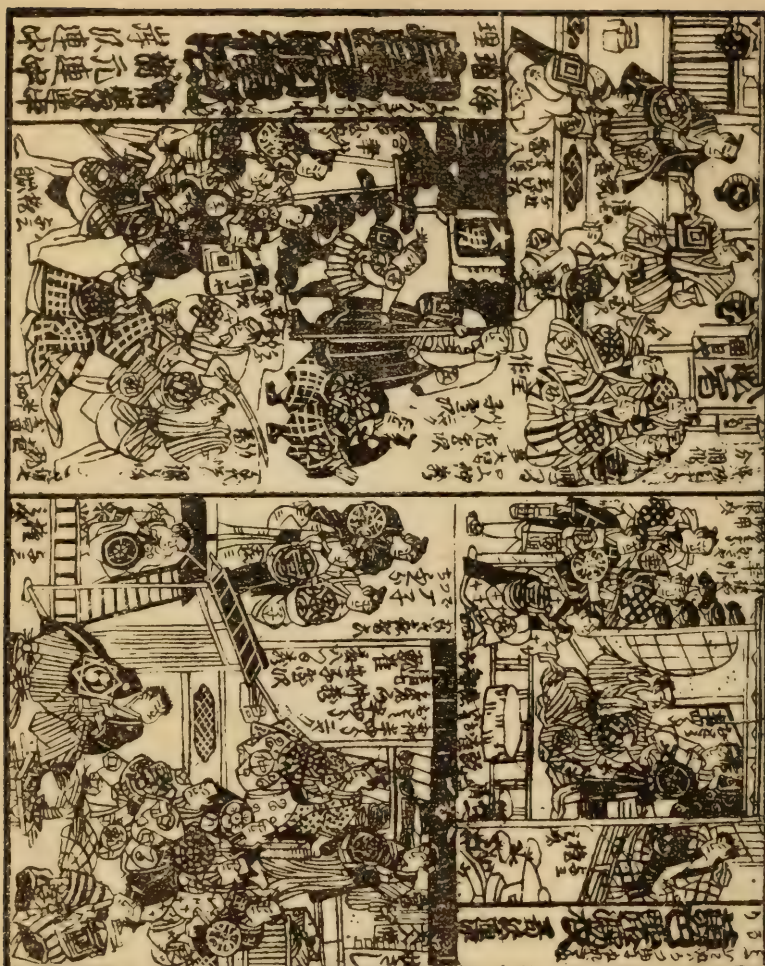
「散切お富と坊主與三」は明治五年十月守田座に書卸された作で、作者五十七歳の時のことである。「切られ與三」、「切られお富」と續けて、尙其の趣向を明治の新社會に適用し、飜作せんとしたものである。けれども、前二作ほどに傑れたものにはなり得なかつた。然し、輕い、サラリとした作であると同時に、哥澤を始めて劇場に使用した點に於て特異なる作とされてゐる。

書卸しの時の役割は、河原崎權之助卽ち後の九代目團十郎（塚越與三郎、後に坊主與三）、岩井半四郎（與三郎女房お富實は散切お富、淸七女房お仲）、中村翫雀（但馬屋淸七）、市川左團次（船宿觀音久次、大男詹五九）中村仲藏（但馬屋多左衞門、口上言熊藏）、市川子團次（鳶の者かうもり安、少人亞松金）中村鶴藏（但馬屋番頭藤八）、岩井粲松（お富母お咲）等であつた。

挿繪にしたのは、稿下當時の繪草紙である。

大正十四年四月

校訂者

華宅の場
呉服店の場
船宿の場
大切浄瑠璃の場
浄瑠理

月宴升毬栗（散切お富坊主與三――三幕）

序幕　玄冶店妾宅の場

（淨瑠璃）風に寄添男へし女郎花　黄色露濡衣　哥澤芝金連中

〔役名――坊主與三、大松屋清七、料理屋の若い者佐吉、酒屋の御用勘太、鰻屋の若い者久次。大店お山賓は與三の女房お富、下女お磯等。〕

（妾宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、本庇本椽附き、向う一間床の間縦物の掛物、置花活へ秋草を活け、其中茶壁、三尺角がらの入口、大塵の太鼓張り襖、下手一間上へ寄せて半戸棚、銀張り秋草の襖、此下板敷、三方茶壁、欄間、葭の下地窓、上の方三尺離して九尺の屋體、一間腰高障子三尺中塗り壁、常足土椽三尺の境、後へ下げて廊下の張物、兩方とも石の踏段、いつもの所枝折戸、屋體まで四つ目垣、此傍へ秋草の土手板、下の方三尺の路地口、續いて隣りの中二階、手摺附き伊豫簾をおろし、手摺下船板の羽目、總て妾宅好みの道具。門口の外に佐吉紺半纏三尺帶、草履、料理屋の若い者のこしらへにて岡持を持ち、久次同じく紺半纏草履、鰻屋の若い者にて鰻の箱と土

瓶を持ち、勘太酒屋の丁雅にて徳利を提げ、三人立ち掛り居る。此見得かつぽれの唄にて幕明く。

佐吉　久公、こゝの内の圍者を見たか。

久次　さつき出前を持つて行つた時、臺所からちよつと見たが、まるで半四郎そつくりだな。

佐吉　何處の旦那の圍者だか、安金ぢやあ圍へねえな。

久次　こう加島の小僧さん、お前なざア朝晩來るから、委しい事を知つてるだらう、爰の内の旦那は何者だ。

勘太　どんな旦那か知らないが、何でもいゝ所の隱居さんだといふ事だ。

佐吉　隱居と言やア、福祿壽か壽老人のやうな年寄りだらう、あんな辨天樣を圍ひ込むとは、羨しいことだな。

久次　そりやあどうせ、布袋のやうな腹ふくれに違えねえ。

勘太　何でも大黑樣の小槌同樣、言ふ目が出るといふことだ。

佐吉　道理でおらの所などへは、晝は惠比壽の鯛うしほ、晩にはあつさり毘沙門の虎鱚の蒲鉾を照燒にして持つて來いのと、好きな事をいつて來る。

久次　斯ういふ贅澤なお得意は、お互ひに福の神だ。

佐吉　今も内の女中から明日大勢お客があるから、會席にして持つて來いと註文書を寄越したが、おれにやあ何だかさつぱり讀めねえ。（ト懷より半切に書きし淨瑠璃觸を出す。）

久次　其園者が書いたのなら、ちよつと中を見てえものだ。（ト久次取つて開き見て、）成程こりやい〻手だが、おれにやあちつと讀み兼ねる。

勘太　先生が讀んでやらうか。

佐吉　何の御用に讀めるものか。

勘太　讀めねえといふがあるものか、文明開化の世の中だ、どんな本でもすら〱讀むのだ。

佐吉　そんなら是れを讀んで下ツし。

勘太　どれ〱おれが遣らう。（ト書物を開き見て、）淨瑠璃名題――（ト大夫連名役人替名を讀む。）

佐吉　こいつはをかしな註文書だ。

久次　大方哥澤の連中や、役者が客に來るのだらう。

勘太　それに違ひない〱。

ト右の合方にて、上手よりお磯前垂掛け、女中のこしらへにて、番手桶へ水打柄杓を入れ、是れを提げ出來り、

お磯　おゝ、魚吉の若い衆、今の書附は違つたよ。
佐吉　へい、違ひましてござりまするか。
お磯　今日お隣りの高砂町の、哥澤の連中が來て、新物の開きがあるので、連名書を下すつたのを、株でわたしがそゝツかしく、間違へて上げたのだよ。
佐吉　道理でおつだと思ひました。
お磯　これが明日の註文書だよ。(ト懐から書附を出し佐吉へ渡す。)
佐吉　畏りました、何れ後ほど親方を伺ひに上げます。
お磯　鰻屋さんも酒屋さんも、又明日來ておくれよ。
久次
勘太　はい／＼、畏りました。(ト三人思入あつて、)
佐吉　いよ／＼此所、哥澤淨瑠璃始まり。
久次　其爲め、小僧。(ト勘太を前へ出し、)
三人　左樣なら。(ト右の合方にて三人手へ這入る。)
お磯　ほんに後生樂な人達だ、もう今に芝金さんの端唄が、お隣りで始まるだらう、早くお庭へ水を打つてしまつて、聞き覺えに覺えたいものだ。(ト此時下手にて、)

○　さあ皆さん、芝金さんの端唄が始まりますよ。

お磯　おや、もう始まりますかね。

ト知らせに附き、下手二階家の伊豫簾を卷き揚げる、内に哥澤連中羽織袴にて居並び、

〽打水に殘る暑さも何處へやら、軒の簾に波うちて、暮れぬ先きから月影を、宿す小庭の庭たづみ。

ト此內お磯庭の秋草へ水を打ちながら是れを聞く思入、よき程に花道より淸七着流し下駄、商人のこしらへ、手に單羽織を持つて出來り、花道へ留る、合方にて、

淸七　凌ぎがたない殘暑の强さも、昨日の降りから陽氣も替り、今日は汗を忘れたやうだ、いや忘れるといへば長松が、森岡樣の臺所へ笠を忘れて來たゆゑに、取りに遣つたが歸つて來ぬは、此跡の曲り角を曲らず先きへ行きはせぬか、小僧を供に連れて出ると、氣の揉めてならぬものぢや。

〽誰を招くか招くか誰を、尾花の露のばら〳〵と、風に鳴子の木戸の口。

ト淸七跡へ思入あつて本舞臺へ來り、端唄を聞く思入あつて、

二階で唄ふあの端唄は、節といひ聲といひ哥澤連の衆と見える、爰等は意氣な家のみ多く、どこを見ても圍者や藝者衆の家ばかり、幸ひこゝの塀外で、二階の端唄を聞きながら、小僧の來るの

を待ちませう。

へ歸る燕に來る雁を、待つ夜は辛き鐘の聲、身に知る秋の村雨に、濡るゝも戀の縁の端。

と此内清七端唄に聞入り、手に持ちし羽織を落し、これを拾ひ砂を拂ひ袖疊みにたゝみ、懐へ入れるお磯は二重に腰を掛け聞いて居る、爰へ縫包の茶色の異國の犬出て來る、お磯此犬を撫でたり手を取つたりしてじやらして居る、唄の切れに件の犬お磯へ抱附き口を甜めに掛る、お磯突倒し、

お磯　えゝ、此洋犬め、巫山戯た事をしやあがる。

ト以前の手桶の水を掛ける、犬びつくりして門口へ逃げ出る、お磯犬に掛けようとして、ぞつぷり清七へ本水を掛ける、清七飛び退き、

清七　あゝ冷たい、何をするのだ。（トお磯びつくりして、）

お磯　おや、あなたへ掛りましたか、眞平御免なすつて下さいまし。

清七　掛つたどころぢやあない、是れ見なせえ、ずつぷり濡れた。

お磯　まことにお氣の毒な事をいたしました、犬が惡戯をしましたゆゑ、水を掛けてやらうと存じまして、つひあなたへ掛けましてござりまする。どうぞ御免なされて下さりませ。

清七　なに、お前が掛けたくつて掛けなすつた譯でもないから、兎や斯ういふ事もないが、何にしろび

しよ濡れで、こんな困つたことはない。
お磯　ちよつと拭いて上げますから、此方へお入りなすつて下さいまし。
清七　入つてもよいかね。
お磯　よいどころではござりませぬ。
清七　左樣なら、御免なさいまし。
〽いつしか空も吹き晴れて、雲間を洩れる月の影、ぞつと素肌に風涼し。
ト清七思入あつて切戸から内へ這入り、いゝ家だといふ思入、此内正面の口からおやま人柄のよき好みの鬘着流し、釣瓶形の桑の煙草盆を提げ出來り、月の影といふ件にて、兩人顏見合せ氣味合の思入あつて、
お山　これ磯や、どうしやつたのぢや。
お磯　おやまさま、飛んだ麁相をいたしました。
お山　何を麁相しやつたのぢや。
お磯　洋犬が惡戯をしましたから、水を掛けようといたしまして、あなたへこんなに掛けました。
お山　不斷言はない事ではない、氣を附けてすればよいのに。（ト清七へ向ひ、）何れのお方か存じませぬ

が、召使ひの此女子が麁相をいたしましたさうでござりますが、御免なされて下さりませ。
清七　いえも、ほんの出合頭でございますから、いたし方もござりませぬが、お得意様へ參りがけゆゑ、差當つて困ります。
お山　さぞお困りなさいませう。これ磯や、物干へよく日が當れば、干してお上げ申したがよい。
お磯　ほんに左樣いたしませう、此日では直に干ませうから、ちよつとお出しなさりませ。
清七　いえ〳〵、それには及びませぬ。（トおやま下手にある浴衣を取つて、）
お山　ちとお涼しいかは存じませぬが、浴衣が是れにござりますから、少しの間是れを召して干してお貰ひなされませ。
お磯　さあ〳〵お召替へなされませ。
清七　有難うはござりますが、お女中ばかりの此お家で。
お山　其御遠慮には及びませぬ、門口の札にもある通り、女子二人の此住居、外に男はござりませぬ。
清七　左樣なればお女中ばかり、たゞお二人で此所に。
お磯　御覽の通りかほそいお生れ、御病身ゆゑ御保養ながら、爰にお住ひなされまするも、申さば女の御隱居樣、おとつさまが時折においでなさいますより外、誰も參る者はござりませぬ。

清七　へゝえ、左様でござりまするか。（トおやまは清七を見て思入あつて、）

お山　これ磯や、どうも思ひ出せぬが、あなたは何處でかお見申したやうぢやわいの。

お磯　私もさう思つて居りまする。

清七　御存じかは存じませぬが、私は箱崎で呉服渡世をいたします、但馬屋清七と申します者でござりまする。

お山　それで思ひ出しました、古代模樣の飾つてある、綺麗なお店でござりますな。

清七　いえも、ほんの小店でござりますが、染物は念を入れて、仕入れておきますでござりまする。

お磯　何ぞ替つた染物か新織でも參りましたら、ちとお持ちなされませ。

清七　是れを御緣に御用向きを、お願ひ申し上げまする。

お磯　かうお馴染になりますれば、最う御遠慮はござりませぬ、ちよつとお脫ぎなさりませ。

清七　左樣なら、御厄介になりませうか。

〽今は隔ても中垣に、亂るゝ萩や女郎花、餘所目に言はぬ色見えて、

ト此内清七袷を脫ぎ浴衣を着る、おやまお磯に囁く、お磯うなづき袷を持つて奥へ這入る、おやまは清七に心ある思入あつて、

お山　あなた、お煙草はお嫌ひでござりますか。
清七　大好物でござりまするが、取急ぎまして煙草入を、失念いたして參りました。
お山　左樣なら、憚りながら。（ト煙草を吸附けて出す、淸七嬉しき思入にて、）
淸七　是れは有難うござります。（ト煙管を戴いて呑み、）あの端唄は、お隣りでござりますするか。
お山　はい、哥澤が參つて居りますが、高砂町の御弟子には、吳服屋さんや古着屋さんがたんとあると申すこと、あなたもお弟子でござりまするか。
淸七　どういたしまして私は、左樣な意氣な事は存じませぬ。
ト此時奥よりお磯、廣蓋へ二つ物、燗德利猪口を入れしすましの丼を載せ、これを持ち出で眞中へ置く、
お磯　召物の干ますうち、お一つお上りなされませ。
淸七　いえ、私は一向に、不調法でござります。
お磯　よく申す事でござりますが、召上る所では召上りませう、おいやでもござりませうが。
淸七　いえ、おいやどころではござりませぬが、斯樣な御心配に預りましては。
お山　なに御心配な事がござりませう、保養がてら私も、一口づゝたべますゆゑ、ほんの有合でござり

ます。(ト お磯猪口を取つて、)

お磯　先づお一つお上りなされませ。

清七　いえ〳〵、是れはあなたから。

お山　左樣なら私が、お燗を見て差上げませう。

〽思ふ心の梢まで、届かで葛の恨み勝ち、あした待たるゝ朝顏の、戀も莟も花なれや。

ト此内おやま猪口を取上げる、お磯酌をなし、おやま呑んで、憚りながらといふ思入にて出す、清七いたゞく、お磯酌をなし清七呑んで猪口をすまさうとするを、お磯引取つておやまへさす、おやま嬉しき思入にて又呑む。

お磯　おやまさま、御婚禮のやうでござりますな。

お山　ほんに是れがまことなら、嘸嬉しからうわいな。

清七　いえ、私のやうな野暮者に、勿體ないことおつしやります。

お山　いえ〳〵私の方で、勿體なうござります。(ト此時お磯わざと德利をひつくりかへし、)

お磯　おや、どういたしませう、又麁相をいたしました。(ト前垂で酒のこぼれしを拭く。)

お山　磯の麁相にも困るわいの。

お磯　どれ附直して參りませう。

〽忍ぶ其身に桐一葉、落ちて驚く胸の波。

トお磯徳利を持つて奥へ這入る、おやま奥を明けて見て清七へぢつと思入、此時下手より以前の犬出で、二重へ飛び上り肴を取る、おやまびつくりして、

お山　あれえ。(ト清七の膝へ取附く。)

清七　もし、どうなされました。

お山　何やら爰へ怖いものが。

清七　ありや犬でござりまする。

トおやまの背中へ手を掛け引寄せる、此時上手の障子屋體を明け、與三毬栗鬘好みのこしらへにて是れを窺ひ、

與三　え丶畜生め。(ト此聲に犬は上手へ逃げて這入る。)

清七　え。

ト清七、與三と顏見合せてびつくりする、與三障子をぴつしやりしめるを木の頭。

〽實に辛氣ぢやないかいな。

トおやまは膝に縋りしまゝ清七の顏を見上げにつこり、色氣を含みし思入、清七はとんだ事をしたと
いふこなし、端唄の切へ本釣鐘を打込み、よろしく、　　ひやうし幕

二幕目

箱崎但馬屋の場
本所朝日屋の場

〔役名──塚越與三郎、船宿觀音久次、鳶の者蝙蝠安、但馬屋の番頭藤八、但馬屋手代久兵衞、同與七、但馬屋丁稚岩松、同三太、但馬屋多左衞門、但馬屋清七。清七女房お仲、與三郎女房お富、お富の母お崎、みろくひのお磯其他。〕

(但馬屋見世の場)──本舞臺四間通し中足の二重、蹴込み風穴へ鐵網を張り、軒口に山形に多の字、但馬屋と染めし紺暖簾、上の方折廻し土藏、隅の方觀音開き出這入り、下の方一間中窓、千本格子腰通り板羽目、此下三尺路地口、二重正面暖簾口、上手二間織物の卷物を立掛け、棚の下小引出しの見世簞笥の書割、下手九尺三段に反物を積みし棚、此下小引出し、いつもの所門口。總て吳服屋但馬屋

の體。二重上手に帳場格子、爰に藤八着流し紺の前垂、番頭のこしらへにて住ひ、平舞臺上手に久兵衞、與七着流し前垂、手代にて、硯箱を控へ、下手に○△□◎の四人何れも派手なる裝三尺帶にて住ひ、下手二重に子役二人丁稚にて腰を掛け居る。この見得、合方、角兵衞獅子の鳴物にて幕明く。）

與七　子供や、お茶を上げろ。
岩松　はアい――。（ト茶臺へ茶碗を載せ持つて來る。）
久兵　子供や。
三太　はアい――。
久兵　藏へ行つて、お誂への品を持つて來い。
三太　はアい――。（ト上手の土藏の内へ這入る、藤八二重より下りて、）
藤八　これは皆さま、毎度御贔屓にあづかりまして、お誂へ物を有難うござりまする。
○　いつもながらこつちの家は、繁昌でようござりますね。
藤八　お蔭樣をもちまして、仕合せと繁昌いたします。
△　時にこつちの家のお上さんは、替りなさる事はねえかえ。

藤八　これもお蔭さまをもちまして、いつも達者でござりまする。
△　そりやァ何よりようござります。
□　今日はまた、評判のお上さんの顔が見えねえな。
◎　こんなに天氣が曇つたから、燒麩でもやらざあ顔を出すめえ。
□　龜井戸の緋鯉ぢやァあるめえし。
ト此内三太の小僧紙疊へ包みし、仕立上りし揃物を持ち出來り、
三吉　へい、持つて參りました。(ト藤八の前へ出す、藤八明けて見て)
藤八　もし皆さま、御覽下さりませ、外ならぬお得意さまゆゑ、別段念を入れて染上げさせましてござりまする。(ト疊紙より出して見せる、皆々手に取り)
○　成程こりやあよくなつた、是れぢやあ今年の祭りの揃ひも、外の町内に負けやあしねえ。
△　どこの祭りも近年は、滅法立派だ、負けねえやうに仕にやあならねえ。
□　こいつを揃つて着たところで、情婦の二三人もこしらへてえものだ。
◎　揃ひにやあ惚れるか知らねえが、手前に惚れるものがあるものか。
藤八　いや、皆さんの男前で、此お揃ひをお召しなされば、女の目に附くに違ひござりませぬ。いや、

目に附くといへばお上さんに、此染物の上りのよいのを、ちよと見せて上げたいものぢや。

○　こつちもどうかお上さんの、

△　顔を見て歸りてえものだ。

藤八　これ〳〵子供や、お上さんをお呼び申して來い。

岩松　はアい――。（ト奧へ這入る。）

久兵　何ぞといふと番頭どのは、お上さんを見世へ呼出し、をかしな目附をしてならぬ。

與七　ほんに只さへ馬鹿げた顔に、今にお上さんが出て來て見なさい、あの目尻が猶々下つて。

藤八　何ぢやと。

與七　いえ、こつちの符牒さ。

ト合方になり、奧より、お仲丸髷人柄のよい商人の女房のこしらへにて、小僧附き出來る。

藤八　もしお上さん、皆さま方は、本所の竪川通りのお若い衆、遠方から態々お買物においで下さるゆゑ、ちよつとお禮をおつしやつて下さりませ。

お仲　それはまあ遠方の處を、ようい らして下さります。有難うござりまする。（ト皆々へ辭儀をする。）

○　ろくな物も買ひませず、お禮で痛み入りまする。

藤八　手前物を褒めるやうだが、あんまりよく出來ましたから、ちよつとお目に掛けようと、それでお呼び申しました。（ト揃ひを取つて見せる。）

お仲　ほんに、見事に出來ましたな。

○　斯うして祭りの揃ひ物を、長い橋を越えて誂へに來るも、一つ目の久次親分の、皆わつちら子分ゆゑさ。

△　ちつとの物でも買物があるなら、こつちの家へ行けと親分の言附けゆゑ、それで斯うして來やすのさ。

お仲　左樣なら皆さまは、一つ目の久次さんのお續き合でござりますか、それはまあ御親切に、有難うござりまする。

□　成程揃ひもよく出來たが、お上さんも上出來だ。

◎　かう米公、染物へ涎が垂れらあ。

□　べらぼうめ、涎などを垂らすものか。（ト此内△煙草を呑みながら、お仲を見て居る。）

○　幸次や、雁首で火傷するな。

△　大きにお世話だ。（ト小僧茶を汲んで出し、）

岩松　お茶でもお上んなさい。
△　こいつアいゝ呼吸だ。
○　時に、此勘定は幾らになるか、殘らずどうぞ書附にして、御苦勞ながら、わつちらと一緒に來て下さいましな。
久兵　へいへ承知いたしました、お書附も此通り、ちやんと出來て居りまする。（ト書付を出して見せる。
與七　久兵衞どん、二つ目樣まで御用があるから、わたしが一緒にお供してお拂ひをお貰ひ申して來よう。
久兵　それぢやあどうぞさうして下さい。
藤八　三太、手前背負つて行きやれ。
三太　はいへ。
藤八　久兵衞どんは新富町へ、御註文を聞きに行つたかの。
久兵　まだ參りませぬ。
藤八　まだ參りませぬではない、直に行つて來さつしやい。
久兵　はいへ、畏りました。（ト此内小僧風呂敷へ揃ひものを包み背負ふ。）

○ さあ、支度がよくば出掛けよう。

與七 へい、お供いたしませう。

四人 そんならお上さん、

お仲 お靜かにお出でなさりませ。

四人 さあ行きやせう。

　　ト合方角兵衞獅子の鳴物にて、四人先きに、與七小僧花道へ這入る、久兵衞は上手へ這入る。

お仲 そんなら今のお若い衆は、久次さんの子分の衆か、旦那どのゝ里とはいへど、よう親切にお得意を引附けて下さんすなあ。(ト向うへ思入、藤八お仲へこなしあつて、小僧が邪魔になる思入あつて、)

藤八 こりや〳〵岩松、ちつとの間奥へ行け。

岩松 何ぞ用でもござりますか。

藤八 其用は、おゝさうだ、大旦那の所へ行つて、御用はないかと聞いて來い。

岩松 用があればお呼びなさるから、聞きに行かないでもようござります。

藤八 それだから氣に入らぬわ、無い用もござりませぬかと、ゝゝ、こまめにするのが小僧の役だ。

岩松 さういふ自分も、無精な癖に。

藤八 何ぢやと。

岩松 今行きますよ。（ト小僧奥へはひる。）

お仲 どれ、わたしも奥へ。（ト行かうとするを、）

藤八 あもし、お上さん、ちよつとお待ちなされませ。

お仲 待てとは何ぞわたしに用でも。

藤八 はて、其やうに堅くるしう眞顔になつておつしやらずと、まあ下においでなされませ。（トお仲の手を持つて下に坐らせる、是れより可笑味の合方になり、）愚痴をいふではござりませぬが、此番頭の藤八は大旦那が勤めて居た本町の本店から、客分で來た奉公人、それには引替へあなたの御亭主當時主人の清七どのは、一つ目の觀音久次朝日屋といふ船宿から、奉公に來た中年者、大阪生れといひますが、しかと身元も知れぬ者を、お前さまの氣に入りぢやとて、大旦那が養子になし、聟にするとは了簡違ひ、身分をいへば私は本家の主人が實の甥、筋目正しい此藤八、實の所はお前さまの聟になりたいばツかりに奉公に來た心中男、藤八五年も辛抱したら、望みも奇妙に叶ふかと、時折袖褄引いて見ても、けんもほろゝな御挨拶、今日は是非とも押し拳で、色よい返事を聞かねばならぬ。幸ひ四邊に人もなし、四五や二三とくどくは言はぬ、一拳勝負につひちよこち

お仲　よこ。若しお仲さん、どうぢやぞいな。（トいやらしき思入。）

藤八　此間から幾度となく、わたしを捉へて兎や斯うと、若い者なら知らぬこと、見世を預る番頭どのが。そんなみだらな事をいうて、それで濟まうと思やるか、ちと嗜んだがよいわいの。

お仲　いえ嗜んでは居られませぬ、斯ういふ首尾は又とない、あなたと二人差向ひ、差合で一挙つひちよこ〳〵。

藤八　えゝもう、しつこうしやると親仁さまに、此事を告げるぞや。

お仲　おゝ大旦那樣にお告げなされても、もう斯うなつては怺へられぬ。（ト捉へる。）

藤八　又そんな事しやるかいの。

ト振放さうとしても放れぬゆゑ、有合ふ硯箱の筆を取つて藤八の額へ墨を塗る、矢張り角兵衞獅子の鳴物にて、藤八お仲を追廻す、爰へ花道より清七羽織着流し雪駄にて出來り、内へはひる、藤八お仲と心得、清七を捉へる、此内お仲は帳場格子の内へ隱れる、清七藤八を突放し、

清七　えゝ藤八、何をするのだ。（ト藤八見てびつくりなし。）

藤八　や、間違つたか。（ト狼狽へて暖簾口へ逃込む。）

清七　いやはや。呆れたものだ。（ト合方になり、よき所へ住ふ、帳場格子の蔭よりお仲出で、）

お仲　こちの人、よい所へ戻つて下さんした。
清七　なに、よい所へ戻つたとは。
お仲　あの番頭の藤八が、わたしを捉へてじやらくと、あんな好かぬ奴はない、あのやうな者を家へおいては奉公人の爲にもならず、見世がみだらになりますゆゑ、此事を父さんにお話し申して藤八に、暇を出してお遣りなさりませ。
清七　そりやそなたが言はいでも、あの藤八の惡い事は知つて居れど、何を云ふにも本家の旦那の身寄りゆゑ、養子のわしが藤八に、どうも暇が出し難い、わるいと知りつゝ我慢して、遣つて居るも本家へ義理。
お仲　その義理ゆゑに父さんも、あの藤八が我儘を別に叱りもなさらぬを、好い事にして附け上り、假にも主人のわたしを捉へ、兎や斯ういやる面の憎さ。
清七　憎くもあらうが何事も、本家の世話に成り勝ちゆゑ、旦那へ了簡したがよい。
お仲　ほんに思へば世の義理は、切ないものでござんすなあ。
ト兩人よろしく思入、やはり角兵衛獅子の鳴物にて、下手より紺看板の中間二人臺附の鰹節、柳樽、白木の箱を釣臺へ載せ、これを擔ぎ出來り、門口へおろし、

中間　お頼み申します〳〵。
清七　はい〳〵、どちらからおいでなされました。
中間　但馬屋清七どのゝお宅は、こちらでござるかな。(ト是れにて清七下手へ來て、)
清七　へい、但馬屋清七は私でございまするが、何か御用でございまするか。
中間　用事といふは外でもござらぬ、今日は日柄もよきゆゑ、おしるしを差上げますると、手前主人申
されましてござりまする。(ト件の品々を内へ持込み並べるゆゑ、清七心得ぬ思入にて、)
清七　あゝもし、お待ち下さりませ、見れば立派な御結納物、斯やうな品を私方へ申し受ける覺えが
ござりませぬ。こりや大方、お門違ひでござりませう。
中間　いや〳〵門違ひではござらぬ、是れへ持參の目錄書に、お名前が記してござる。(ト目錄書を出す。)
清七　どれ、お見せ下さりませ。(ト清七目錄書を開き見て、)何さま「但馬屋清七どのへ、富」と記せし結
納書は。
お仲　えゝ、そんなら矢つ張りお前の所へ。
清七　いや〳〵、假令名前が記してあるとも、こちらに少しも覺えのないこと、して此結納を遣はされ
しは、何れのお方でござりますな。

ト此以前下手より與三郎、好みの鬘ぶつさき羽織、袴大小にて出で、門口に窺ひ居て、ト合方きつぱりとなり、與三郎ずつと内へ這入る、清七顔を見てぎつくり思入、與三郎は上手へ通り住ふ、お仲心得ぬ思入。

與三　あいや、其仔細申入れん。

お仲　見れば立派なお武家樣。

清七　つひぞお目に掛りませぬが。

與三　如何にも未だ清七どのに、面會はいたさぬが、手前ことは其以前、下總千葉家の藩なりしが、當今浮浪の身となつて玄冶店に町宅いたす、塚越與三郎と申す者。

清七　してあなた樣が何ゆゑに、斯かる品々御持參にて、私方へおいでありしか。

お仲　合點の參らぬ此結納、どういふ譯でござりまするか。

清七　仔細をお聞かせ下さりませ。

與三　いや別に仔細もござらぬが、かねぐ〵貴殿のお約定ゆゑ、吉日を選み結納の、印を持參いたしてござる。

清七　何とおつしやりまする。

與三　只今も申す如く、手前は御存じござるまいが、玄冶店と申したら、清七どのはお覺えのある筈、馴染重ねて二世までも、夫婦の契約いたされし、女が婚姻整へんと、今日最上吉日ゆゑ、取揃へたる此結納、幾久しく御受納下され。（ト是れを聞き、お仲扨はといふ思入にて、）

お仲　もしこちの人、ちよつと來て下さんせ。

清七　なに、其處へ來いとは。（ト下の方へ來る。）

お仲　えゝお前はなあ〳〵、何處の女中に其やうな、約束をしてござんしたか、脱れぬ譯でござんすなら、女房のわたしに斯う〳〵と、なぜ打ち明けて下さんせぬ、何ぼ足らはぬわたしでも、見返られては悔しいけれど、悋氣嫉妬は取置いて悪いやうにはせまいもの、譬にもいふ膝とも談合、相談かけて下さんせぬ、今この事が父さんのお耳へ入つたら何とせう、わたしやどうせう〳〵ぞいなあ。

ト清七を捉へ、よろしく思入。

清七　さう思ふのは無理ではないが、便りない身を親仁さまの、目鏡によつて聟となり、何が不足で餘所外へそんな約束しませうぞ、わしの氣質を不斷から、そなたも知つて居るではないか。

お仲　さあ、わたしもお前の心をば知らぬではないけれど、こつちに覺えのないものを、何でこの樣な

結納を、あなたがお持ちなされませう。
清七　假令結納持參せうとも、此身に覺えは更々ない。
お仲　いえ〳〵、無い事はござんすまい。
清七　はて扨しつこい、無いと言ふに。(ト兩人爭ふ。與三郎思入あつて、)
與三　いや清七どの、ちよつと是れへ。
清七　あの私に。
與三　如何にも。(ト是れにて清七上手へ來る。)只今是れにて承はれば、お手前は當家の聟にて、それに居らるゝ御家内といひ親御もある樣子、なぜ左樣な身分なら、女に前々申し含め、得心させてはおかれぬぞ。身不肖なれど手前も武士、一旦持參いたせし結納、此儘持つて歸られようか、此納りは如何めさるゝ。
清七　此身に覺えあることなら、如何やうともいたしませうが、聊か覺えもない事を、其やうにおつしやりましては、ほとんと迷惑いたしまする。
與三　いや覺えないとは申されまい、此方慥な證據あつて、結納持參いたせしぞ。
清七　すりや、證據の品がござりますとか。

お仲　如何なる品でござりまするか。
清七　お見せなされて下さりませ。
與三　如何にも、只今御覽に入れん。それ、持參の品を是れへ持て。
中間　はツ。（ト白木の箱を與三郎の前に置き、中間兩人は釣臺を擔ぎ下手へ這入る、）
與三　證據といふは則ち此箱、蓋取りのけて御覽下され。（ト清七前へ出で兩人思入あつて、）
お仲　内は何やら白木の箱。
清七　證據とあれど、（ト蓋を明け中より序幕の袷を出し、）やゝ、此袷は。（トびつくりなす。）
與三　何と覺えがござりませうな。（ト是れより合方替つて、清七思入あつて、）
清七　扨は此ほど清七が、得意廻りの歸りがけ、思はぬ事で此袷、置いて來たのが今日となり、身の濡衣となつたるか。
お仲　そんなら覺えがござんすか。
清七　見ず知らずの其家へ、長居をせしが我があやまり。
お仲　えゝ、情ないお前はなあ。
ト お仲は泣伏す、此時奥より以前の藤八顔に墨の附いたまゝ出來り、

藤八　もし／＼お上さん其お恨みは御尤も、嘸悔しうござりませう、此番頭のわしでさへ悔しくて／＼悔し涙がこぼれます。

ト有合ふ茶碗の水を目の縁へ附けてこするゆゑ、顔の墨流れ出して藤八の顔眞黒になる、清七思入あつて、

清七　證據とおつしやる此袷は、置いて參つた覺えはあれど、みだらな事は露ほども、身に覺えなき此清七、して其砌りお目に掛つた、二十三四のお女中は、お妹御でござりまするか。

奥三　いや、あの女は妹でない、斯くいふ身共が宿の妻。

清七　そんなら、あなたの。

清七 お仲　え〻〻〻〻。（ト兩人びつくりなす。）

藤八　扨はあなたの御新造さまと、間男をいたしましたか。こりや大事が始まつた。

お仲　こりやまあどうせう、どうせうぞいなあ。（トお仲案じ思入、奥より小僧出來り。）

小僧　もしお上さま、大旦那さまがお呼びなされまする、奥へお出でなさりませ。

お仲　何の御用か知らねども、今奥へ行かれぬわいの。

藤八　もし／＼お上さま、間男と名が附いては、先きの相手がお侍さま、どんな事にならうも知れま

せぬ、まあ〳〵奥へお出でなさりませ。

お仲　それぢやといふて、此儘爰を。

藤八　はて、爰においでなされては、却つてお為になりませぬ。

小僧　さあ〳〵、早くお出でなされませ。

ト藤八せり立て、小僧無理にお仲を連れて奥へ這入る、藤八こちらへ來り、

藤八　もし旦那、いやさ清七さま、人の女房を盗むとは、大それた事なされましたな、所詮只では濟みますまいが、何うするお氣でござりまする。

清七　はて間男ならば清七が、首にも拘はる大事ゆゑ、安閑としては居られねど女に掛けては大丈夫、大阪訛りも碌々に抜けぬ生れの無器用もの、人の女房を盗むなどゝ、何でそんな事をしませうぞ、是れは大方清七をお遊びなさるに違ひない、御常談なら旦那さま、よい加減にして下さりませ。

奥三　いや、何しにそちを遊ばうぞ、身共が妻と通じたる證據といふは其衣類、まだ其外に抜き差しのならぬ證據の此一品、此紙包を開いて見やれ。

ト奥三郎懐より水引を掛けたる紙包みを出して清七の前へ出す、清七取つて水引を解き、紙を開く

中に女の切髪あるゆゑ、心得ぬ思入にて、

清七　證據とおつしやる紙包み、開いて見れば女の切髪。

藤八　そんならもしや、相手の女中は。

與三　綠の如き黑髪を、根よりふッつと切つてござる。

清七　えゝゝゝ。（卜清七びつくりなす。合方きつぱりとなり）

與三　隱す事ほど顯はるゝと、道に背きし不義ゆゑに、其衣類より事顯はれ、面目なさに此の如く、髪まで切つて言譯いたせど、一旦身共の目を盜み心腐りし女ゆゑ、打果さんとは存ぜしが、左ある時にはぱつとなし、恥辱に恥辱を重ぬる道理、そこを存じて某もその切髪と諸共に、不義なす妻を思ひ切り、互ひに好き合ふ中ゆゑに、綺麗にこなたへ進ぜる氣で、持參なしたる結納に、此切髪は聟引出、斯かる證據のある上は、覺えないとは言はれまいがな。

卜きつといふ、清七思入あつて、

清七　假令何程おつしやつても、此身に覺えはござりませぬが、幾歲になつても女中の身では、誰しも惜しむ黑髪を、相手も知れぬに根元よりふッつり切るとはどういふ譯か、疑念晴らしに清七が其お女中にお目に掛り、密夫の明りを立てませう。どうぞお逢はせ下さりませ。

ト此以前下手より駕舁四つ手駕籠を擔ぎ、お磯の下女附添ひ出來り、門口に窺ひ居て、

お磯　なに、御新造さまにお逢ひなされ度くば、只今それへお連れ申しませう。

淸七　や、さういふ聲は。

藤八　さあ〳〵誰でも遠慮はない、さあ〳〵こつちへ這入らつしやい。（トお磯駕籠へ向ひ、）

お磯　もし御新造さま、あのお方のお店でござります。さあ〳〵こつちへお入りなされませ。

ト駕籠の垂を上げる、內にお富序幕のお山の裝、切髮好みのこしらへにて、駕籠に乘つて居て、

お富　これ磯や、何だかわたしや恥かしいわいな。

お磯　何のお恥かしいことがござりませう。思ひ思ふた淸七樣、早くお側へおいでなされませ。

トお磯お富の手を取り、駕籠より出す、藤八お富を見て、

藤八　成程天窓は散髮だが、さて〳〵ト一の代物だ。

お富　もしあなた、御免下さりませ。

ト合方なり、お磯附いてお富ずつと上へ通る、是れにて駕籠屋駕籠を擔いで下手へ這入る。淸七お富を見て、

淸七　や、こなたは。（ト思入。）

お富　替る姿でお目に掛るも、お恥しうござりますが、お前さんゆゑ私もこんな頭髪になりました。

ト清七の側へ住ふ。

與三　さあ斯かる姿になつたのも、こなたゆゑと今の一言、是れでは知らぬと言はれまいかな。

トきつといふ、清七扨はといふ思入あつて、

清七　むゝ、扨は夫婦馴合ひにて、こりや言ひ掛けをするのぢやな。

與三　なに、言ひ掛けとは、誰にいふのだ。

お富　今更何で其やうな、卑怯な事を言はしやんす。

清七　えゝ、わしを捉へて馴れ／＼しい、そつちへ退いて貰ひませう。

トお富を突き退ける、與三郎むゝと刀を持つて立掛る、三人顔見合せ氣味合の思入、誂への合方になり、

與三　町家に住めど千葉家の浪人、大小たばさむ某が連添ふ妻を盗まれては、武士の一分立たざるゆゑ、並べておいて密夫の成敗、いたさにやならぬ所なれど、斯かる開化の世の中に、目を抜かれたる我が越度を、人に知らすは愚なるゆゑ、恥辱を忍び女敵の、念をすつぱり切髪と、共に結納取り揃へ、祝儀にうたふ小謡の四海の波も穏かに胸を擦つて我が妻を、媒介なしてこなたへ送る

を、言ひ掛けなどゝは何のたはこと、事を好まぬ武士の情を仇で返さば最う是れまで、密夫の成敗二人とも此場に於て討果すが、それとも覺えないと申すか、但しは妻を引受けて行末長く添遂げるか、二つに一つが生死の境、性根を据ゑて返答いたせ。（トきつといふ、淸七思入あつて、

淸七　其御返事は知らぬといふより、外に詞はござりませぬ。

與三　何と。

淸七　さあ知らぬといふは此間、得意廻りに出た途中、通り掛つた新道の往來狹き庭口から、逃げ出る犬に水を掛けると、それなる女中が出合頭に、着物へぞつぷり水を掛け、是れは麁相と詫びるゆゑよくある事と拭ふうち、無理に引留め內へ入れ主人といはるゝ此女中が、下女が麁相を共に詫び濡れた着物を物干しで、ちよつと干してと親切に、浴衣を出して言はるゝを、誠と思つて賴みしが、此淸七が誤りにて、兎かくする內酒を出し馴れ〳〵しさに氣味惡く、生干でよいから濡れた着物を、下さりませといふ折柄、干した着物は盜まれしと又もや共々詫びるゆゑ、是れも此身の災難と借りた浴衣の其儘で、宅へ歸つて取敢へず直に浴衣を使ひで返し、それなり今日まで打ち過ぎしが、扨は其折盜まれしと言ひし袷を種になし、密夫といつてござつても、斯かる仕儀ゆゑ淸七が、身に取り覺えはござりませぬ。

お富　覺えがないとは淸七さん、そりやお情なうござんすぞえ。

淸七　なに、情ないとは。

お富　よくまあそんなに白々しく覺えがないと言はしやんす、磯が麁相で庭口から掛けたる水が濡れの端、袷の干る間も女子ゆゑ話しも盡きて有合す御酒を一口あげた所、初の内は物堅く澄ませし猪口も後々は互ひに醉つて口移し、最う〳〵呑めぬと肱枕、風でも引いては惡いと思ひ、搔卷出して後から掛ける其手を捉へられ、思案の外に怖さも忘れ、夫の顏へ泥を塗り、お前に此身を任せし時後の證據に此袷下さんしたぢやござんせぬか。わたしも武士の妻ゆゑに跡では後悔したれども、お前の姿が目先へちらつき片時胸に忘られず、待はねごとゝ古歌にも言ひし、ある夜夫と添伏の寢言にいつて事顯はれ、言譯なさに髮を切り、此身の詫びをいたせしに、寢言にまでもいふ程なら、添はして遣らうと勿體ない不義せしわたしを媒介なし、お前の女房に下さんすを、言ひ掛けなどゝは餘りな事、あの折家の女房を出し、此世は愚先の世まで、添はうと言うたぢやござんせぬか、今更それを知らぬとは、そりや御卑怯でござんすぞえ。

卜お富思入あつていふ、淸七悔しき思入。お磯前へ出て、

お磯　ほんに其折私はお臺所に居ましたが、話しの聲も途切れしゆゑ、そつと襖を明けてびつくり、枕

を並べておよつてゆゑ是れはしたりと思ふわたしへ、旦那へ知れゝば命づくどうぞ默つて居てくれと、お前さんもお富さんも手を合してお賴みゆゑ、何も後生と口を拭き知らぬ顏をして居ましたが、覺えがないと言はしやんすれば、何處が何處までわたしが證人、茶見世や矢場の女とは譯の違つた御新造さま、慰み放しに仕ようとは、見掛けに似合はぬ太え人だ。

ト清七是れを聞き腹の立つ思入にて、

清七　えゝ言はしておけばよい事と、よくもそんな僞り事を。(ト立掛るを藤八清七を引据ゑ)

藤八　これ旦那、いやさ清七どん、こなたはく\呆れた男だ、眞面目くさつた顏をして、よく太い事をさつしやつたな、人の女房と間男すれば、これ此首が飛びますぞ。(ト藤八清七の首を叩き、)以前は主人のお仲さま家の娘を女房にしながら、それを追出しおのれが好いた、女を內へ入れようなどゝは、不忠といはうか不義といはうか、言はうやうない人でなし、大旦那の名代に、此番頭が忠義の折檻、どせう骨にこたへるやう。

ト清七を引附け算盤を取つて打たうとする、此以前下手より蝙蝠の安藏廣袖、三尺帶、鳶の者のこしらへにて出來り、門口に窺ひ居て、此時內へ這入り、藤八の算盤を引つたくり投退ける、

あ、痛いく\、うぬ本店から來た番頭を、よく手籠めに投げ居つたな。(ト言ひながら起上り、蝙

安藏　蝠安を見て、）や、こりや鳶の者の蝙蝠安、店の抱へでありながら、番頭さんをなぜ投げた。いゝえ、投げやあしませぬが、旦那と名の附く清七樣を、お前さんが打たうとしたから、罰が當つて轉んだのだ。
藤八　いや〳〵投げたに違ひない。
安藏　これさ番頭さん、どうしたものだ、お見世を預かるお前さんが、わたしら風情にさう手輕く投げられていゝものかね。
藤八　えゝ、おつゥおれを嗜ませるな。（ト藤八下に居る、與三郎思入あつて、）
與三　こりや清七、すりやどうあつても其方は、密夫の覺えないと申し、われ〳〵夫婦が企みにて言ひ掛けいたすと申すのぢやな。
清七　此身に覺えない事を、おつしやりますゆゑ言ひ掛けと、申したは清七が、よも誤りではござりますまい。
與三　何と。
清七　それも達てと仰しやれば、水掛論ゆゑ出る所へ、出て御裁許を受けませう。
與三　むゝ。（トぎつくり思入。）

清七　假令何やう言ひ掛けをおつしやらうとも善悪は、一目で分る上と下、とても我が身にかく耻なら砂利の上で搔きませう。さあわしと一緒にござらつしやりませ。（ト是れにて與三郎思入あつて、）

與三　はて見掛けに寄らぬ太い奴、其耻辱を厭ふゆゑ、事穩便になすを附込み、裁許を受けんとは憎き奴、こりや此儘にいたされぬぞ。

清七　なに、この儘にいたさぬとは。

與三　妻を盜まれ侍が心外ならぬ事はなけれど、身分を思ひ耻辱を忍び綺麗にそちへ遣はさうと、持參いたせし此結納、受けざるのみか言ひ掛けと、身に惡名を附けられては、もう了簡がいたされぬ、主ある妻を盜むからは、清七そちも俎板に直せし鯉と同樣に、命を捨てるは覺悟であらう、事を好まぬ某なれど、庖刀ならぬ刀の手前、婚禮肴に引替へて酷い料理の生作り、白刄を染める紅は時に取つての色直し、脫れぬ所と覺悟なし、首差延べて是れへ出よ。

お富　斯ういふ情無心とも白髮に添へし松の魚、千歲を祝ふ結納の目錄書も反古となり、三々九度の杯より罪を重ね、不義の科、末を長柄と結んだる緣も夢の蝶花形、せめて夫の成敗に此場で逢ふが罪滅し、

與三　二人が首は尉と姥、島臺代りに飾つてくれう、覺悟極めてそれへ直れ。

清七　いや、此清七は直りますまい、我が身に覺えのない事を、何ぼあなたがお武家でも、罪なき者を無理無體、命を取つては濟みますまい。

與三　いゝや知らぬと言張つても、身共の方には慥な證據、そちの方にも知らぬといふに、何ぞ慥な證據があるか。

清七　さあ、其證據は。

お磯　證據がなければ水掛論、目串は拔けぬこなたは間男。

藤八　これ、首を切られても、證據がなければ仕方がない。

お富　それとも證據がござんすか。

清七　さあ、それは。

與三　證據がなくば、成敗受けるか。

清七　さあ。

藤八　言譯あるか。

清七　さあ。

與三　さあ。

皆々　さあ〳〵〳〵。

與三　いで存分にいたしてくれん。（ト刀の柄へ手を掛ける、爰へ蝙蝠安割つて入り）

安藏　あもしお侍様、まあ〳〵待つて下さりませ。

與三　やあ取るにも足らぬ青二才、邪魔立てせずと退いて居やれ。

安藏　いゝや退いちやあ居られませぬ、不斷店へ出入りをして抱への鳶と肩書が、附いてお世話になるからは、こんな喧嘩の仲人はいつでもござれと松川菱、仲へ這入つた鬼鳶の其もん〳〵は細腕でも、親の光りを御贔屓で氣は張りがねのてれがらふ、太い三筋の引張りが多くあるので便りとなり、當時流行の傘を杖と頼んだ蝙蝠安、身に降りかゝる大雨なら防ぎをするがわつちの役、旦那の代りにお侍わつちを相手になせえまし。

與三　いゝやわいらは相手にせぬ、身共は是非とも主人が一命、申し受けねば相成らぬ。

安藏　さう又こつちを見くびつて、相手にせずば腕づくでも、お前の相手にならにやならねえ。

與三　然らば汝が横合から、

安藏　おゝ、命をきりに喧嘩を買ふのだ。

ト蝙蝠安片肌脱ぎ鉢卷をして立掛る、此時奥より多左衞門羽織着流し、少し更けたるこしらへにて出

來り、蝙蝠安を抱き留め、

多左　これ〳〵安藏、靜にせぬか。（ト留めるもきかず、）

安藏　さあ、おれが相手だ、切れるものなら切つて見ろ。

多左　えゝ、待てといつたら待たぬかい。（トよろしく留める、蝙蝠安多左衛門を見てびつくりなし、）

安藏　やあ大旦那か、こいつアしまつた。（ト蝙蝠安下に居る、多左衛門見て、）

多左　何だ、見世先きで立ちはだかつて、肌でも入れぬか。

安藏　へい。（ト肌を入れる。）

多左　鉢巻を取らぬか。

安藏　へい。（ト鉢巻を取り、跡へ引込む、多左衛門よき所へ住ひ、）

多左　これは〳〵お武家樣、委細は奥にて逐一に承はりましてござりますが、言はうやうなき悴が不體裁、成敗なさうとおつしやりますは、御尤もにござりますが、何事をも私にお任せなされて下さりませ。

與三　すりや、そこ許は此家の。

多左　へい、多左衛門と申しまして、當家の隱居でござりまする。（ト合方きつぱりとなり、思入あつて、）

與三　委細を奥にて聞いたとあれば、改めて仔細は言はぬが、身が武士道が廢りしゆゑ、此場で密夫の成敗いたす、さう心得て貰ひたい。

多左　お武家樣の御身分では、御新造樣に不義があつては、御一分が立ちますまい、其相手の悴をば御成敗とおつしやりますは、こりや御尤でござりまするが、爰に一つの御相談は、あなた樣もお若いにお似合なされず世間を憚り事穩便になさらうと、結納諸共御新造樣を下さりまする御了簡感心いたしてござりまする。其御仁心を悴めが、兎や斯う申しましたゆゑ、定めてお腹も立ちましたらうが、是れも養子の身分ゆゑ私はじめ家附の娘の手前を存じまして、假令命を取らるゝとも、存じませぬと申しましたは、義理ある中の養子ゆゑ。（ト是れを淸七聞いて、）

淸七　あゝ申し親仁さま、あなたが左樣仰しやつては、此身に覺えがあるやうで。

多左　さあ覺えがあらうがあるまいが、親が惡いやうにはせぬ。

淸七　それぢやと申して。

多左　はて、わしに任しておいたがよい。（ト淸七を留め與三郎に向ひ、）右の譯ゆゑあなた樣へ、折入つてのお願ひは、近頃以て失禮ながら事を好まぬお心に、甘へて下世話で申しまする、首代金を差上げまするが、どうか償ひ金で御了簡を、なされましては下さりませぬか。（ト與三郎思入あつて、

與三　償ひ金で悴の一命助けてくれとのそちが頼み、了簡いたして遣りたいが金子に目がくれ武士道を、捨てしと後日に言はれなば、末代までの恥辱ゆゑ、そちが頼みは聞かれぬわい。

多左　すりや、首代の償ひ金では。

與三　如何にも了簡罷りならぬ。（トきつといふ、お磯思入あつて、）

お磯　もし、金といふならこゝいらで。（ト言ひかけるを、）

お富　あゝこれ入らぬ口出し、默つて居やいの。（ト目くばせをする、多左衞門思入あつて、）

多左　末代までの御恥辱ゆゑ、了簡ならぬとおつしやれば、是非もない儀でござりまするが、其武士道の表向きを飾るお召の羽二重も本場のやうにおつしやれど、それが家業と年の功、一目見るより唐糸の交る地合に水を入れ、洗つたならば糊も落ち、忽ち知れるが僞ひ織。

與三　や。

多左　地廻り物の機違ひ、喰せものをば合點で首代出して扱ふも、見世の暖簾が大事ゆゑ本場の積りで相場もよく、あなたのお氣にいるやうに言直でわしが買ひませう、高い仕入れと横合から邪魔の入らぬ其内に、爰らで手を打ちお武家さま、お歸りなさるがお割合かと、憚りながら存じまする。

（ト多左衞門思入あつていふ、與三郎もこなしあつて、

與三　流石は年頃見世賣りに馴れた亭主が商ひ上手、さう言はれては氣に入らぬ柄も承知で買はねばならぬ、其代り身共もまた、首代替り密通の證據に殘つた此袷、是れをこなたに賣りたいがよしや直段が算盤の、玉に合ずと直切らずに、言直でこれを買ふであらうな。

多左　言直でお貰ひ申しませうが、して此袷のお直段は。

與三　正札附きで百兩だ。

多左　すりや、あなたの言直は百兩。

藤八　こんな袷を百兩とは、扨々高い代物だ。

與三　高いとあれば賣らぬまで、密夫の成敗いたすが望み。

お富　思ふ男に嫌はれて、生き甲斐のないわたしの體、早う殺して下さんせ。（トお磯清七の側へ來て、）

お磯　もし旦那、此お見世で百兩位、早く出して事なく濟ませ、抱寐をなされた御新造を、助けてお上げなされませ。（ト清七思入あつて、）

清七　いや、金子は出さぬ間男の、此の身に成敗受けませう。

與三　何と。

清七　元より覺えはなけれども、養子親なり御主人なり、大恩受けし舅御へ、御損を掛けては濟まぬゆ

ゑ、残念ながら命を捨て。（ト與三郎へ體を差附ける。多左衛門清七を留めて、）

多左　えゝ又しても短氣な了簡、そちの命が百兩の金で買へれば安い物。（ト懐から百兩包を出し、）さあ、金改めて受取らつしやい。（ト與三郎の前へ出す、與三郎お富顔見合せ思入あつて、）

與三　然らばそちが詞に任せ、此首代で許してやらう。

ト金を取つてにつたり思入あつて、懐へ入れる。蝙蝠安これを見て、

安藏　えゝ薄々知れた衒めに、端た金でもあることか、百兩といふあの金を。

多左　又しても入らぬ事を、口出しせずと控へて居やれ。

安藏　それだといつて衒めに。

與三　えゝ喧しい、衒々と、今おれを知つたのか。

お富　浮世を知らない人達だねえ。

藤八　はあゝ、それぢやあお武家と思つた二人は、喰せものであつたのか。

與三　主人は流石老功に、おれを衒と悟つたが、番頭どのは目出てえ人だ。

藤八　如何にもおれは知らないが、こなたは何といふ人だ。（ト合方替つて與三郎お富思入あつて、）

與三　知らざあ言つて聞かせやせう、六年跡まで此娑婆で人に知られた與三郎、お富を玉に寺方へ身寄

りの法事と僞つて、僅か一分の香奠を餌に和尚を引つ掛けた、殺生戒の報いは忽ち、此世の地獄へ行く所。

お富　極樂水の知邊を便り、暫く隱れて居るうちに、人の噂も七十五日餘焔冷めて木更津へ、弘誓の船で突ッ走り、上總下總常陸をかけ宿場稼ぎに思はずも、彌陀の光りの金になり。

與三　迷つた亡者も浮み上り、丁度年忌の七年目姿を替へて坊主になり、産れ替つた了簡で歸つて來たが是れといふ、

お富　生業なしに又元の、仕馴れた業の筒持せ、此身に重い罪科は、

與三　夫婦馴合ひ差荷ひ、それも燒場の桶同樣、隱す惡事が割れかゝり、

お富　姿を替る其爲に、髮剃りならぬ剃刀で、

與三　ふッつり切つたざんぎりお富、

お富　亭主は坊主與三郎、

與三　どうで始終は鈴ヶ森、

お富　千住へ曝す二人が首、

與三　面を見知つて、

兩人　貰ひませう。（ト兩人思入あつて言ふ。）
清七　ても、ふて〲しい其詞。
安藏　いつその事に二人とも。（ト立ち掛るを、）
與三　む〻、惡事を訴へ二人とも、突き出すならば、さあ突き出せ。たつた一度の抱寐でも、目串は拔けねえ間男だ、女房を抱いた其代り、手前を一緒に抱いて行くぞ。
清七　假令此身も共々に、獄屋へ行くとも此儘に。（ト悔しき思入。）
お富　何だな、そんな怖い顏して、二人一緒に寐たやうに、につこり笑つてお見せなねえ。
ト煙管で清七の顏を突く、清七悔しき思入にて、
清七　まだ〲そんな、根なし事を。（ト清七立ち掛らうとするを、多左衞門留めて、）
多左　こりや〲清七、口數聞かば其身の耻、何にも言はず默つて居や。
安藏　言直で賣つたら言分あるめえ、もう〻い〻加減に歸らッし。
與三　お〻歸らねえでどうするものだ。さあ金を取つたら證據の袷、こりやあそつちへ返して遣るぞ。
ト袷を清七の前へ投り出す。
清七　こつちも邪魔な結納や、見るも悔しい女の切髮、とつと〻持つて行かつしやい。

お磯　下さるものなら夏もお小袖、わたしがお貰ひ申しませう。

トお磯件の切髪を懐へ入れ、結納の鰹節と柳樽を持ち門口へ出る、與三郎眞面目になり、

與三　然らば主人多左衛門どの。

多左　初めて逢うたお武家さま。

お富　どれわたしも一緒に。（ト與三郎お富門口へ出る。）

藤八　見すく\街を、

清七　此儘歸すは。（ト立ち掛るを多左衛門留めて、）

多左　あこれ、何んにも言ふな。（ト蝙蝠安門口へ來て、）

安藏　一昨日來い。

トぴつしやり門口をしめる、與三郎お富顔見合せ、につたり思入あつて、態と時代に、

與三　どりや、歸宅いたさうか。（ト唄になり、與三郎お富花道へ行き、）

お富　與三さん、

與三　お富、

お富　うまく行つたねえ。

與三　侍らしくごまかしたが、おれが口が重いから、長いせりふはだれこんだ。

お富　いえお前よりわたしこそ、不斷から重い口、實はもたれた役廻りさ。

ト此内お磯樽と鰹節を持ち花道へ來て、

お磯　誰が重いの重くないのと、わつちが一番もたれ役だ。（ト與三郎見て、）

與三　成程こりやあもたれたらう、おれが一肩すけて遣らう。

お富　それぢやあこつちの鰹節を。（ト是れにて與三郎臺附の鰹節を肩へ載せて擔ぐ、お富これを見て、）おい與三さん、お前の裝は判じ物だよ。

與三　どうでゆすりの引込みは。

お磯　どうしましたえ。

與三　とんちんかんはお定りだ。（ト新内の合方になり三人花道へはひる、藤八多左衞門の側へ行き、）

藤八　もし大旦那さま、さうして此場の納りは、どうお附けなさいますな。

多左　はて、どうといふて外にない、此清七は聟ゆゑに、里へ歸すまでの事ぢや。

安藏　そんなら旦那を今日から、

清七　此身に覺えはござりませねど、斯かる仕儀になる上は、其仰せは覺悟の前、承知いたしてござり

ますする。（トぢつと俯向く。）

藤八　いや、こりやさうなくては叶ひませぬ、さう御處置が極つたら、些とも早く出て行かつしやい。

トたち掛るを蝙蝠安留めて、

安藏　もし番頭さん、人の世話を燒かねえで、顏の墨でも落しなせえ。

藤八　なに、顏に墨が、（ト懷から自惚鏡を出し、多左衞門に知れぬやうに、顏を寫し見て、）あゝ、是れはしまつた。

ト藤八暖簾口へ逃げてはひる、此時花道より久次羽織着流し船宿の亭主のこしらへにて出來り花道にて、

久次　天神さまのお祭りで、先月から仲間の寄合、何やかやで但馬屋へ二月から無沙汰をしたゆゑ、ちよつと顏出して來たが、例ながら見世の混雜、長居をするも氣の毒ゆゑ、今日は是れから大旦那のお目に掛つて歸らうか。

ト舞臺へ來りちよつと門口で思入あつて下手路地口へはひる。多左衞門思案の思入あつて煙草盆を持ち、上手へ住ひ

多左　鼈どの、これへ。

清七　へい。（ト前へ出る、誂への合方になり。）

多左　世の譬にもいふ通り、瓜田に沓を入れずとやら、假令どのやうに衣類を濡らされたとて、麁相よあれば其儘歸ればよかつたに、女ばかりの家へ入り濡れた衣類を干して貰ひ、先方の浴衣を借りたのが拔き差しならぬそなたの越度、七分の弱身があるゆゑに十分な事を言はれ、强請と知りつつ百兩の金で事なく濟まさうが、惡事千里とこの事が、世間へぱつと知れるは必定、それも出來た事ゆゑに暖簾の耻も厭はぬが、爰に一つの切ない譯は、知つての通り此わしは、十二の年から此家へ丁稚に來た奉公人、先旦那さまのお眼鏡で家の娘御と夫婦になり、中へ出來たはあのお仲器量も人並勝れしゆゑ諸所方々から聟養子の口もうるさくいつては來たれど、此家の家督が大事ゆゑ聟を選んで居るうちに、一つ目に居る久次どの、世話で手代に來たこなた、產れた家も慥にて中年者には珍らしい律義過ぎる心に惚れ、請人に立つた久次どのを親元にして貰ひ受け、娘が聟にしたこなた、あの藤八が嫉ましく思ふかして、跡方もない事をよく壁訴訟して居るゆゑ今日の始末を本店へ、直ぐにあいつが尾に尾を附け告口するに違ひない、それゆゑ此儘おかれぬは娘の愛に引かされて、不埓な聟を出しもせず家へ置くかと言はれては、相續人の此わしが本家へ對してどうも濟まねば、據なくこなたをば當分里へ歸さにやならぬ、これも浮世の皆義理ゆゑ

情を知らぬ舅ぢやと、必ずく此わしを、恨みに思ふてくれまいぞや。

卜多左衛門よろしく思入にていふ、淸七もぢつと思入あつて、

淸七 不調法なる私を左程までに思召すお情厚き其お詞、此儘御勘氣蒙りましても是非もない儀でござりまするに、恨みに思つてくれるなとは勿體ない舅御さま、有難涙がこぼれます、私事も仔細あつて浪花の果てより久次どのを便りに遙々參りましたも、御緣あつて御家へ御奉公に上りし處間もなく養子にお直し下され、まだ人樣が碌々に御存じのなき新參ながら、身の嬉しさに出精なし商ひいたす惠みにてお得意樣の御贔屓受け、どうなり斯うなり人となり、産れ故郷へ對しましても此上もない身の面目、それも今日私がふしだらゆゑに旦那樣を、お眼鏡違ひと世間の人が後指をさしませう、それが悔しうござりまする。思へば是れまで一方ならぬ厚い御恩を送りもせず、御苦勞掛ける不幸の段御免なされて下されませ。(卜 涙ながらに詫びる思入)

安藏 今更言つても仕方がねえが、惡い奴等の所とも知らずに寄つたが旦那の災難、とんだ事をなすつたなあ。

淸七 神や佛へ朝夕にお願ひ申せど身の災難、あの日に限つてうつかりと知らぬ家にて袷をば、脱いだばかりに今日の濡衣。

安藏　何をいふにも旦那の袷を、證據に取られて居るゆゑに、言ひてえ事も言はれぬ悔しさ。

多左　然しあゝいふ道ならぬゆすり街を度々なさば、いつか脱れぬ天の網、長く命は保つまい。

清七　頓て二人に此身の恨み。（トきつと思入。）

多左　さあ恨しからうが何事も、言はぬは言ふに十寸鏡、曇りかすみのないことは、神は見透しよく御存じ、祈らずとても正直の必ず頭に宿りたまへば、假令汚名は受くるとも晴れる時節があらうから心を長く持つがよい。（ト多左衞門思入、奥より以前の久次雪踏を持ち出來り、下手へおいて、）

久次　大旦那さま、御無沙汰をいたしました。

多左　おゝ、是れは一つ目の久次どのか。

清七　思ひ掛けないどうして爰へ。（ト久次下手へ住ひ、）

久次　土地の祭りでかれこれと、御無沙汰になりましたゆゑ、お詫びながらに參りましたが、お見世のお邪魔と存じまして、裏から直に奥へ通り、最前からの一部始終を、お仲さまに承はり、誠に驚き入りました。

多左　委しい樣子を聞いたとあれば、又改めて言ふにも及ばぬ、御迷惑でも清七を、當分の内こなたの家へ預かつて下さりませ。

久次　とんだ其身の不覺にて、こなたへ御苦勞掛けましたを憎ひ奴とも思召さず、お情あまる今のお詞
仰せに任せ　私方へ引取りますでござりまする。
ト此時ばた／＼にて、奥よりお仲女房にて出來り、清七の側へ來てハアと泣伏す、跡より藤八追掛け
出來り、

藤八　是れはしたりお仲さま、何もお泣きなさる事はござりませぬ。はて、聟さんが追出されても、よい聟さんの後釜が、つひ鼻の先きにぶら／＼と、ぶら附いて居りますぞえ。（トお仲顔をあげて、）

お仲　もしこちの人、お前が里へ行かしやんすなら、わたしも共に行きませう。連れて行つて下さんせいな。

清七　此清七と諸共に行かうと言つて下さるのは、我身に取つては嬉しいけれど、後先き見ずの若い了簡、不思議な御縁で今日までは、お主の娘を妻と呼び、仲睦まじう暮しましたが、土地の勝手を知らざる悔しさ、此身の不覺に金をゆすられ、御本店への申譯に是れから里へ歸りますれば、明日から又も旦那さまが、お見世の見張りをなさらにやならぬ、奥には番の仕手もなければ其身を大事に家を守るが、それが何より親御へ孝行、よしない縁に引かされて一緒に家を出ようなどは、親御へ不幸でござりまするぞ。

お仲　親に不幸になる事を辨へぬではなけれども、善かれ惡しかれ女の身は男に附くが女の習ひ、わたしや一緒に行きますわいな。（ト お仲清七に縋り泣く。）

藤八　もし〳〵お仲さま、生娘か何ぞのやうに、そんな野暮をおつしやらずと、綺麗さつぱり聟さんを思ひ切つておしまひなさい。さあ〳〵旦那、いや今日からは清七どん、聟といふ貫祿がなければ、ちつとも早く出て行かつしやい。（ト せり立てる。）

清七　そりやこなたが言はずとも、長居のならぬ此清七、里へ歸るでござりまする。

ト悄々と立つて下手へ來る、多左衞門不便だといふ思入、お仲側へ行かうとするを多左衞門留めて、

多左　あゝ、飽きも飽かれもせぬ中を、引放したくはなけれども、生木を裂くも浮世の義理、酷い親ぢやと思ふであらうが、長い事でもない程に、家に辛抱して居てくりやれ。

お仲　はあゝ。（ト お仲泣く。）

久次　旦那さまがあのやうに、事を分けておつしやれば、何れその内趣意を立て、清七どのゝ身のお詫びを、いたす時節もござりませうから、それをお待ちなされませ。

藤八　いや〳〵それはいらぬ佐平次、追出されたらそれッ切り、詫言などは無駄なことぢや。

安藏　これ番頭さん、お前も情事をする氣なら、憎まれ口を利きなさんな。（ト 久次思入あつて。）

久次　左様なれば旦那さま。

多左　久次どの、頼みますぞ。（ト淸七しく〳〵と顏を上げ、）

淸七　隨分共に御機嫌よろしう。

多左　淸七そなたも身を大事に、煩はぬやうにしてくりやれ。

淸七　有難うござります。

ト名殘を惜しむ思入よろしくあつて、久次淸七門口へ出る、此内お仲泣伏し居て、此時顏を上げ、

お仲　どうでもわたしや。（ト門口へ行くを、）

藤八　どつこい、さうは。（トお仲の袖を引留め、）

安藏　又出しや張るか。

ト有合ふ袷を藤八の天窓へすつぽり冠せて後へ引く、是れにてお仲藤八を振拂ひ門口の方へ行くを多左衞門隔てゝ、

多左　あゝこれ。（ト門口をぴつしやりしめる、是れを道具替りの知らせ、）

久次
淸七　おさらばでござります。

ト時の鐘早き合方にて、淸七久次思ひ切つて花道へはひる。多左衞門門口に取附き、跡を見送る。お

仲は多左衛門に縋り泣く、藤八手を藻搔くを蝙蝠安引附け居る、右の鳴物にて此道具廻る。

(朝日屋の場)――本舞臺三間の間、常足の二重、正面一間葭戸出這入り口、上手一間間平戸の押入戸棚、下手一間の棚に行火、煙草盆、茶道具などの書割り、上の方一間附屋體、向う天滿宮といふ掛物、左右に榊、三方にお供餅神酒德利を飾りあり、いつもの所門口、下の方一間船宿朝日屋と記せし障子、軒口に梅の花の造り花、梅鉢の紋附きし提灯を二張出し、總て一つ目船宿の體。爰に○△□◎の四人酒肴を取散らし酒を飲み居る、下手にお崎、胡麻鹽鬘やつし裝風呂敷を側におき茶を呑み居る、おかや賄ひ婆にて酒の燗をして居る、此見得屋體囃子にて道具留る。

○　こう、何ぼ天神樣のお祭りだつて、斯うお神輿を下して呑まれちやあ、幾らあつてもたまらねえ。

△　貰つた酒だからいゝけれど、あの德利で五本目だ。

□　今に親方が歸るだらうから、もういゝ加減に切り上げようぜ。

◎　祭りだといふに、親方は何處へ出掛けて行つたのだ。

かや　内の親方は箱崎の但馬屋さんに用があつて、今し方行きなすつたが、もう歸りなさる時分でござりまする。

お崎　それぢやあ親方は、お留守でござりますか。
かや　ちよつと箱崎まで行きなすつたが、伯母さんがおいでだつたら、お强飯でも上げてくれと、さう言つてゞござんしたから、ゆつくりしておいでなさいよ。
お崎　それは有難うござりまする。おかやさん、袷が出來ましたから持つて參りました。
かや　おやさう、袷が出來ましたか、ほんに伯母さんが精出して仕事をしておくれなので、まことにわたしも助かります。
お崎　よい仕事は出來ぬが、不斷こちらのお世話になるゆゑ、せめての事の御恩返しに、出來るだけはして上げます。
かや　いつぞは聞かうと思つてゐたが、内の親方と一つ生れでござりまするか。
○　おゝ、親方といやあ、いゝ加減に内へ歸つてくんなさりやあいゝに。
△　何をして居なさるだらう。
ト聖天の鳴物になり、花道より以前の淸七先きに久次出來り、花道にて、
淸七　これ久次どの、直ぐ行つて來ますから、ちよつと遣つて下さりませ。
久次　どんな御用か知らないが、今日に限つた事ではござりますまい、まあ家へおいでなすつて明日の

事になされませ。
清七　いや、是非行かねばならぬ事ゆゑ。
久次　何とお前がおつしやつても、今日は何處へも上げませぬ。
清七　まあさう言はずと。（ト行かうとするを留めて、）
久次　まあ家へおいでなされませ。
ト右の鳴物になり、舞臺へ來り、久次清七を留めながら内へはひる、皆々見て、
四人　お〻親方が、歸りなすつた。
久次　直ぐ歸つて來る積りだつたが、ちと差掛つた用が出來て、思ひがけなく遲くなつた。
ト清七を見て、
○　これは但馬屋の旦那、
四人　よくお出でなさいました。
清七　久次どの〻口入で、御町内のお揃ひから、何やかや御用を蒙り、まことに有難うござりまする。
△　そのお禮はこつちから、申さなくてはなりませぬ。
□　昨日は町内へ蒸籠を、積んで下さいまして、

◎ 外町への外聞かた〳〵、
四人 有難うございまする。
お崎 親方さん、お目出度うございまする。
久次 おゝ深川の伯母さんか、よく出て來なすつたの。
お崎 お袷が出來ましたから、お祭りを掛けて上りました。
久次 今夜は泊つて行くがいゝ、手前達は神酒所へ行つて、三つ目の山車が今に來るから、間違えのねえやうに氣を附けてくれ。
○ それぢやあ是れからわつちらは、
△ 神酒所へ行つて待つて居よう。
久次 後に賴みてえ用があるから、暮れたら顏を見せてくれよ。
□ あい〳〵、燈火を附けたら廻つて來やせう。（ト言ひながら門口へ出る。）
かや そんなら。皆さん。
四人 どれ行つて來ようか。（ト聖天の鳴物にて四人下手へはひる。）
かや 親方、御飯をお上りなさいませんか。

久次　おらあ今清七さんと鰻でも喰ひに行かう。（トお崎思入あつて、）

お崎　そんならあなたが。

久次　不斷お前に話した旦那よ。

お崎　左樣でござりまするか。（トお崎面目なき思入にて俯向く。）

かや　親方がお上りなさらずば、伯母さんお前はわたしと一緒に。

お崎　はい、お強飯の御馳走になりませう。

かや　さあ、おいでなさいよ。

ト聖天にておかや先きに、お崎清七へ思入あつて奥へはひる、此内清七は俯向き悔しき思入あつて、跡を見送り、

清七　久次どの、口惜しい目に逢ひました。

久次　其筒持せのあらましは、さつきお家の中の間で、お仲さんから聞きましたが、遠慮勝ちな氣にも似合ず、女ばかりの其家で、袷を脱いだがあやまりだつた。

清七　さう言はれると面目ない、今更思へば身のあやまり、斯かる巧みのあらうとは神ならぬ身の露知らず、新染物が出來たらば見せてくれと言はれた所から、よいお得意と思つたゆゑ、心も附かず

うつかりと脱いだ袷が種になり罠にかゝりし此清七、土地馴れぬとはいひながら身に覺えもない濡衣着せられ、世間の人の口の端に、掛りや繋がるこなたにまで、苦勞を掛ける口惜しさ、推量して下さりませ。（ト口惜しき思入にて泣く、久次も思入あつて、）

久次　其悔しいのは御尤もだが、さういふ惡い奴に出逢ひ欺されるのもこつちの不運、して其ゆすりに來た男は、どんな男で何と言ひます。

清七　亭主といつてゆすりに來たは、年の頃は三十一二で、鼻筋通つた目の大きい色白なよい男、名は與三郎といひまする。

久次　して、相ずりの女の名は。

清七　初手に逢ふた其時は、おやまといふたが、それは僞り、まことの名前はお富といつて腕に疵のある女。

ト是れを聞き久次思入あつて、

久次　そりやあとんだ者に出逢つた。其お富與三郎は、世間で名高い筒持せ、誰知らねえものもねえ。

清七　そんならこなたも、強請の二人を。

久次　おゝ二人とも知つて居ます。然も四五年跡までは世間知らずの寺々や、屋敷方をゆすり歩き、終

にやあそれが耳になり繩に掛つた二人の體、切られるだらうと思ひの外、運のよいのは大赦に出逢ひ、疵も附ずに許されて、それから上總下總あたり、旅を挊いで居る事を成田の海老屋で話しに聞いたが、又餘熖が冷めたゆゑ故鄕へ歸つて來たと見える。あの與三郎やお富にやあ幾人人が欺されて筒持せに逢つたか知れねえ。そこが名に負ふ二人共水道を浴びて育つたゞけ、水際たつたゆすり衔り、斯うい ふわつちも御當地へ大阪から來て最う十年、死んだ親仁が七回忌も今年の十月弔つて、今ぢやあ爰で產れた了簡、親仁のお蔭と信心なす觀音樣の御利益で、馴れねえ川も乘習ひ、汐の差引き瀨の替りどんな風でも押切つて、水の上ぢやあ負けねえ氣だが、根が大阪に育つたゞけ元船へ來る船場同樣、生溫いのが產土神がら、お前は腹から吳服屋ゆゑ見世に居て尺指か二尺指を遣つたら五分の拔目もなからうが、世間の事は一寸の拔け目があるゆゑ欺されて、そんなゆすりに逢つたのだ、爰がやつぱり生溫い大阪者の悲しさだ、今更いつても仕方もねえが假令ずつぷり濡れたにしろ女ばかりの其內で、着物を脫いだがこつちの誤り、然し是れも世間の敎へ、話傳へて聞いたなら人も用心する道理、とんだ敎へになつたので思ひ掛けない身の難儀、是れから先きも長い世の中、是れに懲りて淸七さん、必ず油斷をしなさるな。

淸七　實にこなたの言ふ通り、元はといへば此身のぬかり、恨む所はなけれども、知つての通り大阪も

繼母が邪魔にするゆゑに、産れた實家を出て來る時、再び故鄕へ歸らぬと暇乞して來た事ゆゑ、おのれやれ御當地で人となつて見返さうと、思つた念が屆いてか、こなたの世話で但馬屋の聟となりし此身の仕合せ、これ見てくれと大阪の血緣近附きそれぐへ、手紙を書いて送りしが、譬にもいふ惡事千里、今日の始末が大阪へ知れた時には繼母を始め、諸親類の人々にそれ見た事かと言はれるのが、それが悔しうござるゆゑ、いつその事、死んでしまはうかとも思ひます。

ト清七ぢつと思ひ入。

久次　そりやあ惡い了簡だ、何も是れきり但馬屋へ歸られぬといふ譯でもなし、旦那がわしへ預けたのも、あの番頭の藤八が、本店からの附人で十分聟になる心、所が旦那もお仲さんも不斷の所行が氣に入らず、お前を聟に直したので、ある事ない事本店へ告口するゆゑ其儘に、仕憎い場合にわしへ旦那がお前さんを預けたのだ、どうか爰で明りが立てば、又元々になられる體、勘辨強いお前ゆゑ詰らぬ事はしなさるめえが、通り惡魔に誘はれて短氣な事でもしなさると、女の狹い心からお仲さんが諸共にひよんな事でもした日には、西も東も知らねえ土地へ大阪から來て今日までも、御恩になつた但馬屋の旦那へ義理が濟みますまい。爰の道理を聞き分けて腹も立たうが清七さん、短氣を出して下さいますな。（ト久次よろしく思ひ入にて言ふ。）

清七　一つ所で產れたとて、眞身も及ばぬ其異見、必ず仇には聞きませぬ。此身の不覺といひながら欺されたのが悔しさに、いつその事二人を殺し、死なうと思ひ詰めたれど、御恩になつた舅どの、元は主人の多左衞門さまへ御苦勞かけては濟まぬゆゑ、ふッつり思ひ留まりました。

久次　そんならわしが異見を聞き、思ひ止まつて下さりますか。

清七　假令世間の人達に、ヽヽヽうつけ白痴といはるゝとも、義理を思つて身を忍ばゝ、

久次　そりやあ空行く月同樣、一旦雲が掛るとも、

清七　やがて晴れ行く風吹けば、

久次　又もや元の身の光り、

清七　先づそれまでは月もなき、

久次　浮世の闇に、

清七　身を忍び、

久次　晴れ行く風を、

清七　待ちませう。（ト清七ぢつと思ひ入）

久次　其お心を承はり、わしも安堵いたしました。何にしろ今日は祭りで、大勢人が參りますれば、

清七　お逢ひなさるも御面倒、奥へおいでなされませ。
久次　如何さま今日から日蔭の身、人に逢ふのも面伏せ、奥に隱れて居りませう。
清七　婆アがそこらに居りませう、足でもお揉ませなされませ。
久次　そんなら久次どの。
清七　清七さま。
久次　いかいお世話になりまする。（ト唄になり、清七思入あつて奥へ這入る。久次思入あつて、）
清七　やれ〳〵嬉しや、清七さんが取り逆上て居なさるゆゑ、無分別でも出さねばよいと、先刻から思つて居たが、根が發明な生れゆゑ思ひ止つて下すつたので、やつとおれも安心した、是れといふのも信心する觀音樣の御利益だ、あゝ有難い事だなあ。
ト合方になり、久次思入、奥よりお崎行燈を提げて出來り、
お崎　もし親方さん、今爰へお出でなすつたのは、ありや大阪の大松屋の若旦那でございますか。
久次　おゝ伯母さん、お前が若い時分奉行して居た、大松屋の惣領の息子さんだが、よくある奴だが二度添ひの繼母に子が出來面倒ゆゑ、わしを使つて大阪からこつちへ出掛けて來なすつたのだ。
お崎　葭戸越しに此場の樣子お聞き申しましたゆゑ、昔を語つて出ようかと思ひましたが身の科に、出

兼ねましたは其以前、大松屋に居た時分、若氣の至り手代衆と言交して逃げる時、道ならぬとは知りながら、切羽詰つて掛先を百兩取つて路用となし、遙々東へ逃げて來てそれを元手に小商ひ、間もなく女の子が出來て育てるうちにお主の罪、すること無すこと鶍となり、終に夫は病死なし、頼みに思ふ娘はまた、十四の年に情夫をこしらへ内を外なる不身持ゆゑ、勘當なして音信不通、今はどこに何うして居るか碌な者にはなりますまい。是れもみんなお主の罪ゆゑ、どうぞ百兩金こしらへ以前のお詫びを仕度いものと、三十年から明け暮れに片時心に忘れねど、百兩の事は扨おいて一兩の金も出來ぬ身の上、生涯お詫びが出來ませねば、冥土の障りでございまする。

トお崎涙を拭ふ、久次思入あつて、

久次　いゝ年をして苦勞するのも若い時の了簡違ひ、親やお主へ難儀を掛ければ、其身に報ふは知れた事だが、そこへ心の附かねえのは、此頃人の言ふ事だが、開化とやらをしねえ人だ、清七さんを罠にかけゆすつた街の與三郎、今に其身も天の網、(ト思入あつて、)伯母さん、お前も最う一ぺい娘で苦勞をしにやあならねえ。

お崎　え、最う一ぱい私が、娘で苦勞をしますとは。

久次　今の話を聞いたであらうが、淸七さんをゆすつた女は、しかも上總の木更津で、腕を切られた横櫛お富、伯母さんお前の娘だぜ。

お崎　えゝ、そんならお主の若旦那を、ゆすつた女は勘當した、娘のお富でござりましたか。

　　トびつくりなす。

久次　お前のお主といふ事は知らずにした事だらうが、何にしろ濟まねえ譯、今も爰で淸七さんに打ち明さうと思つたが、言つた所が仕方もなし、おれは默つて居るけれど天道様が許さねえ、どうで始終は二人とも、疊の上ぢやあ死なれめえ。

お崎　知らぬ事とはいひながら、飛んだ事をいたしました、何うしたらようござりませう。

久次　何うといつても仕方もねえ、お前がさした事ぢやあなし、打捨つておくがいゝ。

お崎　いえ〳〵打捨つてはおかれませぬ。何處に娘が居ります、居處をお教へ下さりませ。

久次　何處に居るか知らねえが、筒持せをした其家は、玄冶店だといふことだ。

お崎　そんなら娘は玄冶店に。（トお崎血相して行きかけるを久次留めて、）

久次　こりや血相替へて、何處へ行くのだ。

お崎　玄冶店へ尋ねて行つて、娘に言はにやあなりませぬ。

ト久次を振拂ひ、屋體囃子にてお崎花道へ逸散に走りはひる。

久次　あゝこれ危ねえ、待たねえのか。（ト久次門口へ出ようとするを奥よりおかや出來り、久次を留めて、）

かや　もし親分、大變でござります。

久次　何がどうしたのだ。

かや　清七さんの道中差しが、奥の簞笥に入れてあつたを、そつと出して腰へ差し、裏口から何處へやら。

久次　え、そいつァ大變、どつちへ行つた。

かや　あつちの方でござりまする。

久次　えゝ、分らねえ。

トおかやを突倒し奥へはひる、おかや起上つて奥へはひる。時の鐘替つた合方、下手より清七頰冠り尻端折りにて出來り、花道へ忍び行き、振返り、

清七　これ久次どの、今のやうに言つたのは、此脇差が欲しいばかり、舅どのやこなたに難儀を掛けては濟まぬと知りながら、何うも了簡ならぬのは欺されたのが悔しさゆゑ、腹も立たうが許して下され。

ト花道から手を合せ拜む、花道より以前の蝙蝠安尻端折りにて出來る、清七南無三といふ思入にて頰冠りをなし、袖で脇差を隱して行逢ひ、清七摺り拔けほつと思入あつて、逸散に花道へはひる。

安藏　今のはどうやら。（ト思入あつて氣を替へ、つか〳〵と門口へ來り、）久次さん內かえ。

久次　あい、何處から來なすつた。（ト奧より久次、清七の禮狀を讀みながら出る。）

安藏　箱崎から參りました。

久次　おゝ、但馬屋のお抱への安さんか。

安藏　お仲さんが駈け出したが、こつちへ見えはしなかつたか。

久次　え、お上さんが駈け出した、おれが內でも清七さんが、お上さんへの去狀と、禮狀張つて何處へやら。

安藏　そいつは慥にゆすりの仕返し。

久次　こりや、斯うしては居られぬわえ。（ト門口へ出る、おかや駒下駄を出し、）

かや　はい、お履物。

久次　えゝ、履物が入るものか。

ト　おかやを蹴倒し尻を端折りきつと見得、屋臺囃子になり、久次逸散に花道へ走りはひる。舞臺は氣

ト失ひしおかやト蝙蝠安呼び生ける、此仕組よろしく、
ト聖天にてつなぎ、引返す。

幕

三幕目大切

深川小名木澤の場

（淨瑠璃）昨日の惡も今日は善に歸る燕や來る雁金　身曇晴穐風（常盤津連中）（淸元連中）

〔役名――塚越與三郎、大男儈五九、小人亞松金、蔦の者蝙蝠安、合長屋の者二人、但馬屋の手代久兵衞、同與七、口上言ひ熊藏、但馬屋淸七。與三郎女房お富等。〕

幕引附けると、やはり聖天の鳴物にて、花道より羽織踏ん込みの家主出來り、跡より番人着流しにて、淨瑠璃觸を持つて出來り、花道にて、

番人　もし〱久兵衞さま、お觸れが參りました〱。
家主　何のお觸か知らないが、隣りへ廻してくれゝばよいに。
番人　又持つて參りますのが面倒だから、ちよつと讀んで下さりませ。
家主　無精な事をいふ男だ、長屋內に變死があつて、お觸などを見ては居られぬ。

番人　ほんにとんだ事がござりまして、御厄介でござりまする。
家主　これも家主の役だから、婆アをいふ所もないが、店請人が病氣だからおれ一人の厄介だ。
番人　もし、斯うしておいでなさるうち、ちよつと目を通して下さりませ。
家主　えゝ、鬱陶しい男だ、それぢやあお觸を出さつしやい。
番人　はい〳〵、左様なら御覽下さりませ。（ト觸書を渡し、）東西〳〵。（ト家主開き見て、）
家主　淨瑠璃名題――、（ト淨瑠璃名題太夫連名替名を讀み、）えゝ何のお觸れかと思つたら、こりやあ、芝居の淨瑠璃だ。
番人　今隣りの狂言方から、お觸れだといつて賴まれたが、芝居へ持つて行くのか知らぬ。
家主　そゝつかしい男だな。
番人　然し是れで、二人のお役が濟んだ。
家主　「いよ〳〵此所大切淨瑠璃始まり、其爲口上左様。」
番人　さあ、行きませう。
ト右の鳴物にて幕の引附けへはひる、知らせに附き雨車雷の音にて引返す。

（小名木川の場）　本舞臺正面大樹の松、上下淨瑠璃臺、樹木の張物にて隱し、後黑幕此前籔疊み、日覆より松の釣枝、總て小名木川五本松の體。爰に〇△やつし裝、尻端折り合長屋のこしらへにて弓張提灯を持ち、久兵衞、與七前幕の但馬屋の手代やはり尻端折り、但馬屋といふ弓張提灯を持ち、此外思ひ〳〵の仕出し、絲立風呂敷など冠り、雨宿りの體。雨車雷の音にて幕明く。

〇　もし皆さん、秋の空とはいひながら、降りさうな氣色もござりませなんだが、大層な降りでござりましたな。

久兵　左樣でござります、まことに盥でぶちまけるやうな、大降りでござりました。

△　雨ばかりならよいけれども、雷さまがごろ〳〵いふので、わつちが出臍を拔かれようかと、こんな怖かつた事はねえ。

與七　それぢやお前さんは出臍でござりますか、成程出臍らしいお顏附きだ。

△　えゝ、出臍が顏によるものかな。

與七　こりやあ御免下さいまし。

久兵　何しろ西の方が切上つて來ましたから、もうきつい降りもござりますまい。

〇　何うぞ早く止んでくれゝばよいが、私共は五つ目まで、是れから行かにやなりませぬ。

與七　これから五つ目は田甫道、どこへお出でなさるのだ。

△　一つ長屋に身投げがあつて、お寺へ知らせに行きますのさ。

久兵　そりやあ飛んだ事でございますが、女でございますか男でございますか。

△　身を投げたのは十六七の美しい新造さ。

與七　美しい新造とは、惜しい事をしましたな。

○　なに、十六七といふは常談、六十近い婆さんだが、子ゆゑに身をば投げたのさ。

久兵　命を捨てる位だから、よく〳〵な事でございませうが、こつちの身にもそんな事がなければよいと思ふ矢先き、

與七　何ういふ譯か荒筋を、摘んで聞かして下さりませ。

○　委しい譯も聞かないが、元婆さんは大阪産れで、洗濯物や仕事をして、微な煙りを立てゝ居るお崎といふ婆さんだが、お富といふ身性の悪い娘が一人あつた所、與三郎といふ惡黨とくッ附き合で夫婦になり、親の方は勘當同樣出這入りもせず音信不通。

△　今ぢやあ横櫛お富といつて、馴合間男筒持せでゆすり歩くといふ噂、所で箱崎の何屋とかいふ呉服屋の亭主を引掛け、百兩ゆすり取つたさうだが、其呉服屋の亭主といふのは元大阪の出生で、

○　大松屋といふ呉服屋の惣領息子で、婆さんが以前勤めた主人の息子さ。

其婆さんも大松屋に若い時の不義理があつて、心に掛かる其所へ恩を返さず娘のお富が、主筋の息子を筒持せで百兩ゆすり取つた事を聞いた所から濟まないと、一途に迫つて店請へ一部始終を書き殘し、どんぶり身をば投げた所、

△　折よく近所の船が通つて、引揚げてはくれたけれど、年寄りの事だから介抱したがそれ切りさ。

○　知らねえ事でもあらうけれど、其お富與三郎が手を下して殺すも同然、不孝な奴ぢやござりませぬか。

久兵　そりやあ飛んだ事でござりました、今お前方がお話しなすつた、お富與三郎にゆすられたのは、私共にござりまする。

○　え、それぢやあお前さん方は、箱崎の呉服屋かえ。

與七　はい、但馬屋の若い者でござりまする。

△　思ひがけない人に逢ふものだ。

久兵　其筒持せの一件で、私共の若旦那清七さまは勘當同樣、假親にした二つ目の久次どのが預つて、家へ連れて行つた所、人でも切る氣か刄物を持つて、裏から抜けたといふ噂。

與七　また箱崎では家の娘の、お仲さんが清七さんの跡を慕つて暮相に、家をこつそり出た切りゆゑ心當りを搜して歩くが、今に行方が知れませぬ。

久兵　世間見ずの娘御ゆゑ、身でも投げはしまいかと、出入りの者はいふに及ばず、長屋の衆まで八方へ手分けをして出ましたのさ。

○　袖振り合ふも他生の緣と、思ひ掛けない雨宿りで話しの筋が分りましたが、何にしろ婆さんが身を投げて死んだのも、又お仲さんとやら清七さんとやらが難儀をするのも、元はといへばお富與三郎から起つた事だ、人の皮を着たものなら、のめ〳〵生きちやあ居られぬ譯だ。

△　恩はぬ話しに暇取るうち、いつか雨も止んでしまつて、空は星が降るやうだ。

○　雨が止んだら更けねえうち、早くお寺へ行つて來よう。

久兵　こつちは知邊を、

久兵
與七　尋ねませう。（ト仕出しの一、二始め皆々立掛り、）

一　いや、お前方の掛合話しで、

二　雨の止んだも知らなんだ。

○　それぢやあ但馬屋のお若い衆、

久兵　お長屋の衆、お前方も、
△　急いでお出でなさいまし。
皆々　さあ行きませう。

ト禪の勤めになり、○△は上手久兵衛與七は下手へ這入る、跡に頬冠り市松の薄縁を引掛けし雨宿りの者二人殘り、本釣鐘を打込み、右の二人薄縁を捨て前へ出ると、與三郎お富にて、兩人好みのこしらへ、思入あつて、

與三　お富。
お富　與三郎さん。
與三　これ。

ト抑へる。是れを切掛けに、知せに附き後黒幕を切つて落す。向う在體夜の遠見。これと一緒に下手樹木の張物を打返し、爰に淸元連中居並び、前彈きなしに淨瑠璃になる。

〽一降りの雨は晴れても晴れやらぬ、塞がる胸の與三郎、お富も共にしよんぼりと、秋を身に知る小名木澤、川霧深く行先きも、葉蔭に闇き五本松。

ト此内兩人雨に濡れし袖や裾を絞り、濟まない事をしたといふ思入、

〽洲崎へ落ちる雁さへも、もしや追手と驚かれ、振返り見る跡や先き、

ト向ふより人の來るといふ思入あつて、與三郎は花道、お富は東の假花道へ行き、向ふを窺ひ元へ戻つて吐息をつく、時の鐘合方蟲の音になり、

與三　思ひ掛けねえ雨に逢ひ、四邊に駈け込む家もなく、出茶屋で忘れた薄緣を天の與へと引掛けて、此松陰に寄りこぞり晴間を待つて居る内に、手前の親仁やお袋が導いたのか但馬屋の、清七どのの素性が知れ、今更いつても仕方がねえが、濟まねえ事をしたぢやあねえか。

お富　知らぬ事とはいひながら、二人が親が其以前御恩になつた大松屋の、息子さんとは露知らず、麁相の振で水を掛けさせ、脫がせる袷を種にして、間男などゝ言ひ掛り、ゆすり取つたるさつきの百兩。

與三　それも手前のお袋が、不斷言つてる主人の引負ひ、親仁が掠めた百兩を再び旦那へ返さぬ内は、死んでも彼の世へ行かれぬと、言つては居るが女の手業、生涯出來ぬ引負ひ金。

お富　十四の年から母さんに苦勞を掛けた恩返し、其百兩を拵へて上げたらどんな悦びと、親に孝行する氣になつてゆすり取つたが害となり、其金ゆゑに命を捨てさせ、又もわたしが不孝の上塗り。

與三　おれも大阪加番の折、今日は新町明日は又難波新地と浮れ出し、路用の金を湯水に使ひ、既に出

奔する所、用達ゆゑに大松屋の、清左衛門どのゝ世話になり、とんだ狐に化されたも尻尾を出さずにしまつたは、清七どのゝ親仁のお蔭。

お富　二人が二人恩のある其大松屋の息子さんが、養子先きから返されたを案じて連添ふ娘御まで、家を出たとさつきの話し、もし命でも捨てられたら、何うしたらよからうね。

與三　何うといつて仕方がねえ、ゆすつた金を大松屋へ返した上で二人とも、死なざあ浮世の義理が濟むめえ。

お富　わたしはゆすつた金ゆゑに、現在親を殺した上は、死なねばならぬ身の上なれど、お前に命を捨てさせては。

與三　濟むも濟まぬもあるものか、殺した罪は同罪だ、どうで重なる身の惡事、遲かれ早かれ死ぬ體。

お富　それぢやあお前もわたしと一緒に、身の言譯に死んでおくれか。

與三　おゝ死ななくつてどうするものだ、人間らしく義理づくで、死ぬのはまだしも身の仕合せ。

お富　ほんにお前の言ふ通り。（ト新内模樣になり、）

〽故鄕を跡に下總から、上總を掛けて七歲越し、旅を稼ぎの筒持せ、欺して取りし其金は、二人が兩の此指に折り盡されぬ惡事ゆゑ、命も秋の扇橋お前も捨る覺悟して、わたしと死ん

で下さんすは、何より嬉しうござんすと、縋る手先をぢつと取り、
ト此内お富與三郎を捉へ、口說模樣の振あつて、
〽其命をば捨てさせる、身の罪科は皆我ゆゑ、今日ぞ二人の目も覺めて、夢の浮世も明烏
碑殘す慈眼寺の、惣卵塔が死に所と、善にかへれば惡黨も、只の人にぞなりにける。
ト與三郎よろしく思入あつて、トヾ兩人手を取交しぢつと思入、時の鐘かすめてばた〳〵、與三郎向
うへ思入あつて、

與三　あの跫音は向ふから、爰へ人が來る樣子。

お富　見咎められぬ其うちに。

與三　少しも早く、

お富　與三郎さん、

與三　お富來やれ。

〽元より色の中川に、手に手を取りて猿江町、流れ傳ひに、
ト時の鐘、與三郎お富手を取り上手へ這入る、三重にて淸元連中を樹木の張物にて消し、是れと一時
に上下樹木の張物を打返し、爰に岸澤連中居並び、淨瑠璃になる、

〽名にし近江の朝妻船も、別に替りは波の上、苫を敷寐のサヽ梶枕、

〽唄が漕ぎ行く猪の堀の、船の篝を道しるべ。

ト時の鐘合方、花道より前幕の清七頬冠り一本差し、尻端折りにて出來り、花道へ留り、

〽戀にあらねど清七が、心の闇にとつおいつ、胸に時打つ本所の、九つ此身も今宵限り、明日をも待たで捨鐘と、消え行く露を蹈み分けて、松の木蔭へ來りける。

ト清七よろしく思入あつて、舞臺へ來り合方になり、

清七　最前わしへ久次どのが、段々事を分けての異見、決して惡くは聞かねども、是れが十九か二十になる若い者なら言譯あれど、三十越せし此清七、筒持せに金をゆすられ離縁にまではならねども家を出されて世間の人にどう此顏が合されう、無分別とは知りながら二人を殺さにや腑が癒ぬ、跡へ難儀の掛らぬやう、お仲へ去狀久次どのへ禮狀文を置いて來たれば、心掛りもない一人身、思ひの儘に恨を返し汚名を雪いで諸共に、此身も其場で死ぬ覺悟、(ト思入あつて後を見て、)廿四日の月代がたてば今宵も九つ過ぎ、最う二時か僅か三時、この引明けが冥土の旅立ち、親に先立つ身の不孝、お許しなされて下さりませ。

〽西へ向ひて合す手に、珠數はなけれど露の玉、小夜風吹いて草の葉も、落つる涙に咽び居

る。

ト清七手を合せ詫びる思入あつて泪を拭ひちつとこなし、

〽折から爰へとつかはと、來掛るお磯が突當り、

トばた〳〵になり、下手より前幕のお磯出來り、清七に行當り、

お磯　えゝ、此闇いのに往來ばたに、何をして居やるのだ。（ト清七此聲を聞き思入あつて、）

清七　や、さういふ聲は。（ト顏見合せ、）

お磯　おゝ、但馬屋の清七か。

清七　おゝいゝ所で出會した、お富與三郎は何處に居る、在所をわしに敎へてくりやれ。（ト袖を捉へる。）

お磯　足のある人達だから、何處へ行つたか知りませぬ。

清七　筒持せのゆすりの荷擔人、何知らぬ事があらう。

お磯　えゝ、小うるせえ、知らねえといふに。（ト振拂つて行きかけるを、）

清七　知らぬとあれば。（ト襟上取つて引倒す。）

お磯　えゝ、何をしやあがるのだ。

清七　在所を言はにやあ生してはおかぬぞ。（ト脇差を拔く、お磯びつくりして、）

お磯　あゝ言ひます〳〵、二人の在所を言ひますから、早まつた事をして下さりますな。
清七　して二人は何れに居る。
お磯　何をお隱し申しませう、わたしの家は此先きの、釜屋堀でござりますが、さつき二人は大橋から寺町に居るお袋の所へ行くと別れましたが、今夜は遲くもわたしの家へ、泊り込みに來る積り、今に爰へ來ませうから、御用があるなら此近所に、待合しておいでなさりませ。
清七　そんならそれに違ひはないか。
お磯　命がけの事ゆゑに、何しに嘘を申しませう。
清七　違ひがなくば許して遣らう。（トお磯を突放す。）
お磯　やれ〳〵嬉しや〳〵。下駄は片々落したが、危ない命を拾ひました。
〽齒の根も合はずがた〳〵と、片々の下駄を引きずりて、足もしどろに逃げて行く。
トお磯下駄を片々履き、ちんばを引き〳〵上手へ逃げて這入る、清七跡を見送り、
清七　嘘かまことか知らねども、爰へ來るとあるからは、此藪陰に隱れ居て、二人が來るのを待つて居よう。
〽心にうなづき清七は、藪の小蔭へ。

ト時の鐘三重にて、淸七向うへ思入あつて下手へ這入る。知らせに附き下手樹木の張物を打返し、
爰に淸元連中居並び、是れより掛合になる、
淸元〽是れは此度淺草で、噂も高い身の丈は、九尺餘りの大男。岸澤〽一寸法師の南京を作る道辭の口上言ひ。
ト屋臺囃子へ唐樂を入れし誂への鳴物になり、花道より亞松金ちやん〳〵坊主の鬘、南京小人のこしらへにてちよこ〳〵走り出來る、跡より熊藏着附袴口上言のこしらへにて出來り、亞松金を留めて、
淸元〽天滿神のお祭りが、今年は分けて山車屋臺、よく出來秋とのせかけて、岸澤〽船よりいつそ氣散じは、天窓つかへぬ大茶船、一座も共に浮れ立ち、淸元〽上る竪川横川へ、ちよいなちよいなと招かれて、
ト此内熊藏よろしく振り、亞松金是れを見て眞似る振りあつて向うを招く。又右の鳴物になり、詹五九ちやん〳〵の鬘頭巾を冠り南京服、仕掛けにて大男のこしらへ、錫杖を杖に突き出來り花道へ留り、
岸澤〽酒と踊を勸められ、がつかり支那人錫杖を、淸元〽杖にたど〳〵道端の、松を目あてに來

りける。

ト三人振あつて舞臺へ來る。詹五九松の枝に手を掛け立つて居る、熊藏思入あつて、

熊藏　今日は竪川のお客から、天神さまのお祭りが近年にないよい出來ゆゑ、大男に見せたいから一座をそつくり連れて來いと、お迎ひに預つて夕方から出て來た所、どうして祭りを見る所か、こつちが人に見られるのだ。とてもの事に五本松の隱居樣まで行つてくれと、とうく爰まで引つ張られたが、此ちよこまかする南京のお守り役は大儀な役だ。（ト此内亞松金ちよこくと下手へ行き隱れ居る熊藏見て、）そりやこそもう何處へか行つた、ちよつとの間も油斷がならねえ。

ト亞松金前へ出て、

松金　あなた目ない、馬鹿々々々々。

熊藏　馬鹿でもいゝから、ぢつとして居てくんなせえ。（トこちらへ連れて來り、）そりやあさうと後連は何うしたらう。

五九　此跡よろしい家あります、大さん美しい娘さんあります。皆々それ見るあります。

熊藏　それぢやあ大方祭り場所で、娘でも見て居るのか、夜の更けるも知らねえで、助平な手合だ、（ト熊藏蚊に喰はれる思入あつて、）爰らは蚊の多いせゐか、涼しくなつても滅法な蚊だ、ぢつとし

ちやあ居られねえ。（ト足をばた〳〵する。）
松金 あなた踊りなどるよろしい。（ト踊る眞似をする。）
熊藏 成程手足をばた〳〵と、動かして居りやあ蚊に喰はれねえ、形は小さいが南京は利口だ。
松金 私利口、あなた馬鹿々々。
熊藏 さうおれを馬鹿だといふと、最う踊りは教へねえよ。（ト又蚊に喰はれる思入）あゝ恐ろしい蚊だ
こいつア踊らずにやあ居られねえ。
五九 あなた踊るよろしい、私大さん見たい。
熊藏 それぢやあ一番踊りませうか。
岸澤〽この竪川に其昔、蔦馬といひし人ありて、落し噺しをなせしより、流れし桃の種盡きず
枝葉榮えし滑稽者流、清元〽さて其頃の噺といふは、先づ日光の山奥に、親子暮しの雷が、
岸澤〽暑さ凌ぎの燒酎に、ぐつすり他愛も夏の空、俄に雲立つ夕立に、ぴかりぴか〳〵稻光り、
清元〽隣りの家からごろ〳〵と、鳴り出す音に目が覺めて、岸澤〽南無三おくれを取つたりと、
太鼓背負つて駈け出せば、
ト此内熊藏鬱金の手拭を角のやうに鉢卷になし、雷の振りよろしく、亞松金赤い手拭を角のやう

に鉢巻になし、子雷の思入にて熊藏を留め、

岸澤〽足に縋つた子雷、わしも一緒に行きたいと、岸澤〽いふに親仁が鳴り出して、えゝ雲心も知らないで、何處へ連れて行かれるものだ。清元〽いえ／＼わたしもお前の子。

ト亞松金熊藏を捉へ、口說き模樣になり、

清元〽寺屋へ行てもする墨を、流したやうに雲立てば、ちよつと手水と師匠さまへ嘘を筑波や大山へ、友達同士でごろ／＼と鳴つた覺えもござんすりや、是非に連れてと一張羅の虎の褌に取附いてせがみ歎けば、岸澤〽恩愛に、そんなら一緒にさあ來いと、清元〽言はれて嬉しく子雷、玩具の太鼓引つ背負ひ、先きへ鳴り出す雲の上、岸澤〽あゝこれ危ない落ちるなと、氣を揉む親仁がごろ／＼／＼、清元〽子もまた負けずにごろ／＼／＼、岸澤〽ごろ／＼、清元〽ごろ／＼、岸澤〽ぴか／＼／＼、拍子に掛つて駈け出せば、清元〽雲の途切れに眞つ逆さま。

ト兩人雷の振よろしくあつて、亞松金雲から落ちし思入にてどうとなる、

岸澤〽落ちたる下は唐土の名に負ふ千里の竹藪に、清元〽お臀突つかき、あいたゝゝゝ、父さま上げて下されと、わつとばかりに泣き出せば、（ト亞松金よろしく振あつて、）

岸澤〽忽ち吹き來る風諸共、竹藪分けて駈け出る大虎。

ト熊藏鬱金の手拭を冠り肌を脱ぐ、同じく鬱金の襦袢にて虎の思入にて出て、亞松金を追ひかける、

此内合方誂への鳴物にて紙の虎の振りあつて、

岸澤〽唯一咬みと飛び掛れば、淸元〽子雷はびつくりなし、あれ父さま褌が來ていじめるわいのと、岸澤〽いふが昔の落し噺し、（ト熊藏亞松金よろしく振りあつて納る、詹五九手を叩き褒める

岸澤〽わけもなや。

五九　大さん噺し面白い。

熊藏　詹五九さんのお國にも、面白い噺しがありませうね。

五九　おゝ、あります〳〵。

熊藏　どうぞ一つお噺しなさい。

五九　噺しするよろしい。（ト詹五九扇を持ち前へ出て、）

岸澤〽どんちや〳〵とめうかんどん、ちやんきうらう〳〵きうらんほこりん、すいらくちうちやあらりふうらりめう、けん〳〵さいはいちゐすつぱあ、からころ〳〵ちくりんたい、ぱあぱあ。

ト詹五九扇を持つて鷹揚な振あつて、

はゝゝゝゝ、大さん可笑い、はゝゝゝゝ、

岸澤〽腹を抱へて打ち笑へば、

熊藏　何がそんなに可笑いか、唐音では話しの筋がさつぱりわたしに分らないから、可笑くも何ともない。

五九　これ可笑くない、あなた馬鹿、はゝゝゝ。

岸澤〽こんな噺しが唐にもあろか、はゝゝゝゝおいた〳〵〳〵、はゝ腹の皮がよゝよれるやうだはゝゝゝむはゝゝゝゝはゝゝゝゝ。（ト詹五九腹を抱へて笑ふ。）

熊藏　腹を抱へて笑ふとは、こんな分らない事はない。

五九　あなた私噺し分りませんか。

熊藏　さつぱり分りません。

五九　分りませんよろしい、今の噺し私寐言。

熊藏　唐人の寐言ぢやあ分らねえ筈だ、はゝゝゝゝ。

松金　あなた馬鹿、はゝゝゝ。

熊藏　えゝ、いゝ箆棒にされるのだ、棒盡しでも踊つてやらう。（ト熊藏錫杖を持つて前へ出る。）

淸元〽抑々棒は常陸の國鹿島香取が始りと、長井が遣ふ樫の棒、　岸澤〽三尺棒に六尺棒、鬼が岩窟の鐵の棒、　淸元〽行列奴が槍ん棒、　岸澤〽五條の橋に武藏ばう、淀橋土産の飴んぼう、　淸元〽女房にのろい二本棒、　岸澤〽一人遣ひのでくのばう、　淸元〽べらぼう見えぼう南無三ぼう、　岸澤〽杖にはなれし座頭のばう。

ト熊藏錫杖を遣ひよろしく振、よき程に儋五九亞松傘に先きへ行かうといふ思入、亞松傘うなづき兩人差足して上手へ這入る、熊藏これを知らず振あつて、

又行先も知らさねえで、二人とも何處へ行つたか、さて〳〵世話のやける事だ、どれ跡を追掛けようか。

岸澤〽錫杖小脇に搔い込んで、跡を慕うて、（ト熊藏錫杖を搔い込み上手へ這入る。）

淸元〽秋の習ひの日和癖、又もばら〳〵降る雨に、　岸澤〽小蔭を出る淸七が、出合頭に見合す顏。

ト時の鐘雨車、下手より淸七出る、ばた〳〵になり、上手より以前のお富、非桁に橘信者講と記せし番傘をすぼめてさし出來り、道を除け合ひ傘を取り顏見合せ、

お富　や、お前は、

清七　お富か。

お富　勘忍して下さんせ。

清七　何をおのれが。（ト脇差を抜き切つてかゝる。）

岸澤〽切つて掛るを身を躱す、折しも運ぶ雨雲と、風が持て來る賤が唄、清元〽月は最中に雲霧晴れて、よれつ縺れつ風の手に、誰を招くか野山の尾花、岸澤〽抜けつ潜りつ水の手に、千種分け行く野中の清水、ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイヤサ。

ト此内清七切つて掛る、お富傘で受け兩人立廻り、お富手を負ひ松の周りを逃げ廻り、又切り下げられる、

清元〽又切り込めばたぢ〳〵と、草葉を朱に染めなせり。

ト お富どうとなる、清七胸づくしを取り喉を刺し通し、

恨みの刄、思ひ知つたか。（ト此時後の藪を押分け、以前の與三郎窺ひ出で、）

與三　女房の敵、覺悟しろ。

岸澤〽用意の匕首抜き放し、切つて掛れば身を開き、清元〽雲間をもれる月影を、よすがに暫し

挑みしが、ヘ與三郎は淸七に、肩先き切られてどうとなり。

ト是れへかすめて屋臺囃子を冠せ、與三郎懐から七首を出し、是れを抜いて切つて掛り、兩人立廻りよろしくあつて、淸七七首を打落し、與三郎を一刀切る、これにてどうとなり、

命は惜しまぬ淸七どの、一言聞いて下せえ。

淸七　此期に及んで卑怯未練な。

與三　卑怯未練でない證據は、命を捨つる覺悟の書置。

淸七　何と。

與三　ゆすり取つた金諸共、これ受取つて下さりませ。（と書置と金財布を出す、淸七取つて、）

淸七　むゝ、命を捨てる覺悟とは。（ト竹笛入りの合方になり、）

與三　其書置に記せし如く、お富の親は二人とも、こなたの實家の召使ひ、若氣の至りに主人の掛先百兩掠めて駈落なし、東へ逃げて來たところ、主人の罰で長煩ひ終に親父は病死なし、跡に殘つたお袋が引負ひなせし百兩を才覺なしてお詫したらと、明け暮れ言ひしをお富が聞き、其身の不孝を詫びる爲、百兩こしらへお袋に遣らうと思つてした仕事、心にもねえ孝行をしたのも水の泡となり、主人をゆすつた事を聞き、濟まねえ事とお袋は川へ身を投げ果敢ない最期、さうとも知らず

其金を屆けて遣らうと來る道で、思ひ掛けない雨に逢ひ、五本松の木の下で晴間を待つて居るうちに、長屋の衆の委しい話し、始めて惡事の目が覺めて身の言譯に二人とも、こなたに切られて死ぬ覺悟。此譯言へば用はない、さあすつぱりと淸七どの、わしを殺して下さりませ。

トよろしく思入にていふ、淸七思入あつて、

淸七　扨はお富は其以前我が家に勤めし善九郎お崎が娘であつたるか、そでない事とはいひながら、ゆすりし金も親の爲、早く此譯聞いたなら、お富を酷く殺すまいもの、許して下され與三郎どの。

與三　いゝや、こなたが殺さずとも、是れまで積る身の惡事、又二つにはお袋を我が殺したるも同然ゆゑ、どうで死なねばならぬ體。

淸七　斯ういふ事とも知らぬゆゑ、二人を殺さば淸七も其場を去らず死ぬ覺悟、こなた衆二人と諸共に。

與三　いゝやそれには及びませぬ。先非を悔いて二人とも、覺悟で死んだ其書置、それを反故にさつしやりますか。

淸七　さあそれは。

與三　身は畜生に劣るとも、犬死させて下さりますな。

岸澤〽最期を留める其所へ、駈け來る蝙蝠、手代ども。

ト ばた／＼、屋臺囃子になり、下手より蝙蝠安先きに、久兵衛弓張提灯を持ち出來り、

安藏 や、淸七さま爰においでなされましたか、お悅びなさりませ、あなたを慕つてお跡から脫け出せしお仲さまに。

久兵 久次どのが途中で出逢ひ、

與三 お家へお連れ申しました。

淸七 すりや家出なしたるお仲も無事に。

與三 いざ此上はお返し申せし、其百兩をお持ちなされて、

安藏 少しも早くあなたはお家へ。

與三 我は是れよりお富と諸共。

淸七 そんなら是れが。

與三 此世の別れ。（ト匕首を腹へ突立てる。）

〽惡に强きは善にもと、 岸澤〽淸き最期の與三郎、 〽是れぞ敎への端にして、 岸澤〽噂は世々に殘るらん。

ト與三郎引廻す、淸七立身にて拜む、此段切へ四人、祭りの半纏揃ひの裝にてばら／＼と出で、

四人　人殺し動くな。
清七　何と。（トきつとなる、此時樂屋頭取出て、）
頭取　先づ今日は是れぎり。

「ト目出度く打出し。

散切お富（終り）

勳功記本文倣　祐成　祐經　ハテめづらしい　假家の對面

建久四年右幕下の富士の御狩に時を得て十八年の天津風覘ひし仇を討んずと地理を窺ふ裾野の幕張早くも工藤に呼留められ絕て久しき一家の杯望む肴に扇の一指門出に母より賜りし敵にかちんの狩ぎぬに今宵限りと虎が許贈る記念を駒につけ鬼王團三が是非なく〳〵返らぬ愚癡を庵崎や手越の少將喜瀨川の龜鶴力士羽子金剛數の遊女に酌取らせ一臈職も成景と共にたわいも夏の夜を折義盛や重忠が手引に多年の恨みも晴れ本望遂げし十番切其甲斐もなく十郎は仁田の四郎に討取られ五郎は御所の五郎丸に組留められて繩目に逢ひ頼朝公の御前にて梶原父子と問答に勇氣すぐれし時致も兄の首級にうちむかひ惜しむ名殘りになみ居る諸侯も袖をしぼりしなみだの五月雨

名雲井揚羽蝶衞

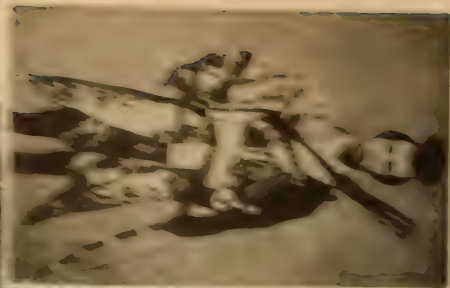
夜討曾我狩場曙

「夜討曾我」の始めて書卸されたのは明治七年五月、作者五十九歳のことである。其時の名題は「蝶千鳥曾我實傳」であつた。が現在夜討曾我の定本とされてゐるのは、それから七年後明治十四年六月に「夜討曾我狩場曙」として新富座に上演された時のもので、十番切其他に多少の增訂を施したものであつた。本集には後者を輯錄しておいた。兩者とも五郎は九世團十郎、十郎は中村宗十郎で、好評を博した活歷劇の一種といふことができる。此時團十郎の五郎は小手脛當腹卷草鞋ばきといふ扮裝であつたが、宗十郎の十郎は舊慣によつて素足に袴の股立を取つて現はれたので、世間よりも攻擊され、双方主張を枉げず、遂に宗十郎は中途より缺勤したのは、著明な逸話である。團十郎の五郎は天下一品と賞され、菊五郎の鬼王も無類との評があつた。尙本篇の序幕の十內、十作の兩役は後の幕に於ける鬼王、團三郎に相當する役所であるが序幕(三立目)である爲に、出場俳優の都合上別の役名になつてゐるに過ぎない。

明治十四年の時の役割は市川團十郎(祐經、五郎時致)、尾上菊五郎(松原鬼王)、中村宗十郎(十郎祐成、賴朝)、市川左團次(富田團三郎)、岩井半四郎(喜瀨川の龜鶴)、坂東家橘(仁田四郎、千葉之介常胤)、市川小團次(御所五郎丸)、市川團右衞門(梶原平次景高)、尾上松助(十作、梶原景時)、中村鶴藏(大藤內成景)、中村鶴助(赤澤十內)等であつた。

挿繪にしたのは、周重筆討入の錦繪と團十郎の五郎の舞臺寫眞である。

大正四年四月

校訂者

夜討曾我狩場曙（夜討曾我――五幕）

序幕

大磯八町堤の場
小磯地藏堂の場

〔役名――赤澤十内、同十作、工藤の家臣平井喜藏、同天城權平、同積田源八、同關野大助、若い者喜介、下女お松、二の宮片貝、大磯の新造千里、犬坊丸、其他。〕

（大磯八町堤の場）――本舞臺正面少し下手へ寄せて大門口、此の下手大磯の廓を見せたる遠見の書割り、ずつと上手畫心に制札場、この側に柳の立木、下手へ高來寺大權現と記したる石の鳥居、左右同じく玉垣、内に紅葉の林、下手よき所に葭簀張の出茶屋、眞中に床几並べあり、總て大磯の廓外接待茶屋の體。爰に喜助脊流し前掛け裝にて茶を汲んで居り、勢子○□△◎四人床几にかゝり居る、この見得大拍子に幕明く。

喜介　もし皆さん、濃いのが入りましたから、もう一つお上りなされませ。

　ト盆に茶を載せ、めい／＼に出すを、皆々取つて、

○　もう構はつしやるな／＼、いやこつちの方は水がすてきにいゝ所へ、御亭主が愛嬌者だからどう

しても茶がうまく呑めるて。

□　ときに御亭主、まだ晝飯には早からうの。

喜介　左樣でござります、まだ餘程お早うござりますから御寛りとなされませ、さうしてお前樣も富士野へ卷狩に、お出でなされまするのでござりませうな。

△　さうとも〳〵、獸狩の役に當つたわし等四人、

◎　どうか今度の狩野には、いゝ獸を狩出して、褒美にでもありつきたいものだ。

喜介　定めしいろ〳〵な獸が飛び出しませう、何の事はござりませぬ、まるで戰を見るやうなものでござりませうな。

○　まあ云へばそんなものだが、長の年月賴朝樣も御苦勞なさつたゆゑ、

□　御保養の爲此の間、下野の奈須野に於て獸狩をなされしところ、

△　又此度は駿州の富士野に於て、獸狩のお催し、

◎　そのお供には、和田北條どのを初めとし、數萬の御同勢。

四人　大そうな事ださうだ。

喜介　いやもう四五日前より引續き御同勢の御通行、斯樣に御治世になりましたも右大將樣のお蔭ゆゑ、

それで廓の者共も御厚恩を思ひまして、斯樣に所々へ茶店を設けお茶をあげますやうにござりまする。

四人　それは近頃奇特な事だ。

喜介　さうしてあなた方は、どなた樣の御同勢でござりまする。

○　われ〳〵共は此度の奉行、

□　工藤左衞門祐經樣の、

四人　家來のものだ。

喜介　へえ左樣でござりますか、いやもう決して胡麻ではござりませぬが、工藤樣は日頃から御仁情の殿樣ゆゑ、下々の者まで寄るとこぞるとあなたのお噂、褒めぬ者はござりませぬが、それに引替へやかましやのけゞち、いやさ、梶原樣は、まだ御通行ではござりませぬか。

△　梶原樣は殿樣の、お側の警護なされしゆゑ、

◎　明日お通りめさるであらう。

喜介　それでは明日は氣をつけて、道の掃除をいたしませう。

○　いや、ときに、もうそろ〳〵と出かけようか。

□　さうさにばなと話しに浮されて、隨分喋べつて居たやうだ。

△　あんまり後れて行つたなら、小頭に叱られるであらう。

◎　然し先へ參つた同勢とは、もう一時も後れたらう。

喜介　いえ、さうは後れはいたしますまい。

◎　いや後れたであらう。

三人　なぜ後れたな。

◎　はて、茶腹も一時と申すではないか。

三人　何をいふのだ。

○　ぢや參らう。（ト勢子四人は上手へはひる。）

喜介　いやよく喋べる同勢だ。どれ、湯を沸しておきませう。

ト流行唄になり、門の内より新造一先きに二三四五何れも振袖卷帶新造の打扮にて出來り、喜介を見て

一　もし喜介どん、工藤樣のお通りは、

五人　まだでござんすかえ。

喜介　へい、只今お先供がお通りで、お茶を呑んで行かれましたから、もう程なくお通りでござりませ

一　う。はゝあ分つた、お前さん方は御家來衆の中にお馴染がございませうな。

二　いえ〳〵さうぢやございませぬ、曾我の祐さんがわたし等を呼ばしやんして、

三　工藤樣のお通りはまだであらうか、聞いて來てと言はしやんすゆゑ、

四　皆さんと連れ立つて、樣子をちよと聞きに來ましたが、

五　もう間がないと言はしやんすゆゑ、

喜介　どれ、わたしが祐さんに知らせて來ませう。（ト新造の五行きかゝるを喜介留めて、）

一　まあ〳〵お待ちなされませ、間があるかないか慥かには知れませぬから、さういふ事なら斯うなされませ、まあ此の床几へお掛けなすつて、ちつとの間待ち合せて御覽じませ。

五人　そんならこゝで、

一　待合さうわいな。（ト皆々床几へ掛ける、喜介思入あつて、）

喜介　いやもう、昨年から此の廓も掟がすつぱりゆるやかになりまして、廓の外へも斯うやつて自由に御用が足りるとは、重寶な世界になりましたなあ。

一　ほんにさうでござんす、此の頃ではお大名方から皆さんがお遊びにお出でなさんすが、却つておのずと武家樣といふものは、堅い顏して居やしやんしても、いつそ優しいものぢやわいな。

二　その優しいとは祐さんのこと、男振といひ氣立といひ、花魁が氣を揉ましやんすも尤もでござんすわいな。

三　それに引替へ少將さんに熱くなつて、此の間から足を近く通ひなんす、梶原平次景高さん、

四　あのお方位世の中に、厭なお客はござんせぬわいな。

五　ほんに、あのお方のことは、此の廓でげぢ〳〵と渾名を附けたが通りになつて、今では誰も名を呼ばず、げぢ〳〵さんといふほどに、ほんに好かないおたんちんだよ。

喜介　然し、もうお通りがありさうなものだ。

一　（花道の方を見て、）もし皆さん、工藤さまのお通りより、よい人が見えるわいな。

ト皆々花道の方を見て、

二　ほんに、こゝへござんすは、

三　千里さんが日頃から、

四　待ち焦れて居る、十作さんが見えるわいな。

五　ほんに十作さんさま〳〵〳〵、作十さま、十作さま、えゝもじれつたい、遠見からいゝのだよ、

こりやまあほんにいゝ人が、

五人 見えるわいな。

ト流行唄になり、花道より十作剃立て着流し一本差しにて、腕組をなし屈託の體にて出來り、花道にて、

十作 五月雨の霽るれど胸は晴れやらぬお二人樣の御無念を、どうか首尾よく晴らさせませうと、あの十內と種々雜多苦勞はしてもまだなか〳〵、修行も足らぬ猿智慧ゆゑ、及ばぬ事とはいふものゝ、二年ならず來る年も厚き御恩に重年なし、御扶持を受けるこの十作、それに附けても祐成さま、この大望を餘所になし廓通ひをなさるとは、御所存あつての事かは知らぬが、迷ひ易いは戀の道早くお歸りなさればよいが。（ト思案の思入にて舞臺へ來る、五人の新造立ちかゝり）

一 十作さん、此の間はお遠々しうござんすな、

二 餘所へ惡性しなさんすと、千里さんに告げるぞえ。

三 さうして千里さんが毎日々々、お前の事を言うてぢやほどに、

四 逢うて上げなさんせぬと、いつそ罪になりますぞえ。

五 それとも千里さんがお厭なら、わたしと見立替をしなさんせ、達引女郎のお茶引女郎、もし十作さん、どうぢやぞいなあ〳〵。

ト皆々捨ぜりふにて十作を取り卷く。

十作　えゝ靜かにしてくれ〳〵、氣逆上がしてならぬわ。

一　なるほど千里さんでなければ、優しい詞はかけなさんせぬなあ。

二　どうでわたし等のやうな者は、十作さんのお氣には入るまいわいな。

三　十作さんがおいでのことを、千里さんに、なあもうし。

四　わたしが知らせて來ようわいな。

ト此の以前よき程に門の內より新造千里、振袖新造好みの裝にて塗下駄をはき、猫を抱へ出かゝり居て、この時、

千里　十作さん、ようござんしたなあ。

五　千里さん、

五人　いつの間に。

千里　あい、今爰へ來ましたわいなあ。(ト床几へ掛ける、十作思ひ入あつて、)

十作　おゝ千里どの、よいところへおぢやつた。早速聞きたいは、若旦那がおいでなさるであらうな。

千里　あいな、昨日から虎さんの所に、居續けして居やしやんすわいな。

十作　大方さうであらうと思つた。又例の通り正體なく醉つてござるであらうな。
千里　あい、二日醉ぢやと言はしやんして、また今朝から呑直して居なさんすわいな。
十作　（思入あつて、）えゝこれ、かゝる大事を抱へながら、さう酒ばかりあがるとは、まこと遊里にお心亂れ、武士の名義をお立てなさる御本心は、こりや、いさゝか無いと見えるわえ。
一　ほんに少しも、
皆々　ござんせぬわいな。
十作　なに、少しもないとは。
一　さいなあ、十作さん聞かしやんせ、此の間も祐さんが言はしやんすには、早う腰の物大小を捨て町人になり、何ぞ商ひをしたいと言うてぢやわいな。
二　おゝそれ〳〵、あの虎さんと二人して茶屋でもしたいと言はしやんしたわいな。
三　もし十作さん、お前も共々武士を止め、町人にならしやんせいな。
四　町のお方にならしやんしたら、首ッたけ惚れて居なんす、この千里さんと女夫になり、
五　いつそ文使ひでもしなさんせ、此のごろ專ら流行の炮碌笠に太股引、片手に手紙を斯うもつてまめに步いて見やしやんせ、結句武士より氣樂ぢやわいな。

十作（是を聞きつとなつて）まこと大小打捨て町人になるお心なら、命を賭けて十作が今日は御異見申さにやならぬ。（ト立ちかゝるを千里留めて）

千里　あゝこれ、待たしやんせ十作さん、祐成さんの事につき、お前に內證でお話し申すことがござんす、まあ〳〵待つて下さんせいな。（ト千里十作を留める、新造皆々顔見合せ思ひ入あつて）

一　なるほどわたし等が爰に居ては、なあ皆さん、

二　却つて野暮といふものぢやわいな。

三　粋を通してわたし等は、

四　一旦歸つて出直さうわいな。

五　ほんにそれが粋でござんす。箱根からこつちには、野暮と化物は居ぬとやら、

一　さあ喜介さん、お前も皆さんと一緒にござんせいな。（ト立ちかゝるを）

千里　もし皆さん、お部屋の首尾を、ちつとの間頼んだぞえ。

二　そりやわたしが呑込んで居るわいな。

三　そんなら十作さん、

四　千里さん、

一　後でしつぽり、

皆々　話しなさんせいな。（ト流行唄になり、新造皆々喜介附てわや／＼と門の内へ入る。跡十作思入あつて、）

十作　これ千里どの、若旦那の事につき、おれに話しがあるとは、どういふ話しだ。

千里　さあその話は、（ト言掛けて恥かしきこなしあつて、）まあ祐さんの事より、わたしの事から聞いて下さんせいな。（トこれにて媚きの合方になり、）勤めする身は厚皮なとおさげすみもなさんせうが、あの祐さんのお供にて初めておいでなさんした、その時ふつと迷うたわたし、賤しい勤めはして居れど、とても女子に生れたなら、あゝいふ殿御と末始終女夫になつて暮したならと、心に片時忘れぬゆゑ、逢ふ度毎に此のやうに話しはすれど堅苦しう、座敷ばかりでこれまでに枕もかはさぬつれないお前、もし、そりや胴慾でござんすわいな。

ト十作にすがる、十作迷惑なる思入にて千里を突き退け、

十作　これはしたり千里どの、そんな浮いた話しを聞いて居る暇はない、祐成さまにお目にかゝり御異見申したその上で、是非ともお連れ申さにやならぬ。（ト立ち掛るを千里留めて、）

千里　さあ、その祐さんの居續けも、深い樣子のある事でござんすわいな。

十作　むゝ、してその樣子は、どういふ仔細ぢや。

千里　さあ、その譯は、もし。

　　ト四邊へ思入あつて、千里十作に囁く。十作聞取る思入あつて。

十作　むゝ、そんならこなたが一伍一什を、

千里　あいなあ、夜更けて虎さんとひそ〳〵話しを次の間から、襖の隙へ耳を當て、委しく聞けば祐さんが、今度富士野へ行くからは日頃の願ひをかなへる心、所詮生きては大磯へ再び最早來られまい、今宵が此の世の別れごと、涙ながらにおつしやつたを、殘らず聞いて居たわいな。

十作　さては今生の暇乞に、昨夜お泊りなされしか。

千里　さあ、それゆゑ無理に虎さんが、昨夜はお泊めなさんしたわいな。

十作　てつきりさうとは思ひしが、心の狂ふは色と酒、もしやと思ひ最前も陰言はいふものゝ、現在お主へ勿體ない、申し過せし不調法、もし若旦那御免なされて下さりませ。（ト上手へ思入）やれ〳〵今の話しを聞き、是れで安堵したといふものだが、しかしこの事は決して誰にも他言はならぬ。

千里　そりやもうわたしも虎さんを、姉と思うて居ることなれば、決して誰にも言ひはせぬが、もし十作さん、お前も一緒に行かしやんすのであらうな。

十作　おゝさ、十内どのも此の十作も、是非ともお供せねばならぬ。

千里　そんならどうでも、わたしが願ひもかなはずに、（ト千里本意なき思入。）
十作　こなたに逢ふも今日限り、
千里　せめて名殘りに今日一日、
十作　留めておかれぬ若旦那、
千里　思ひは同じ虎さんも、
十作　涙のつゆに降り出す、
千里　雨にしつぽり、
十作　日頃の大望、
千里　わたしの願ひも、
十作　や、
千里　どうぞかなへて、（ト猫を下におき、）下さんせいな。
　　　ト十作に寄添ふ、この内猫は差金にて上手へ逃げて行くゆゑ、千里心附きびつくりし、
　　や、虎さんが秘藏の猫、見失うたら叱られる。
十作　わしも早く廓へ行つて、祐成さまをお連れ申さう。

千里　さ、わたしと一緒に、

十作　それだといつて、連れ立つては、

千里　はてまあ、ござんせいな。

ト唄になり、千里十作の手を取り門の内へはひる、跡三味線入り大拍子になり、花道より十内好みの鬘羽織着流し、一本差しにて出來り、花道にて、

十内　光陰矢を射る如くにて昨日と過ぎし十八年、この年月の艱難を考へだてすりやろく／＼に、夜の目も哀れなお家の成行き、どうか首尾よくお二人に御本望遂げさせんと思ふ甲斐なく祐成さま、先達て下野の奈須野の狩に祐經を討損じなされしゆゑ、とやせんかくやと思ふ内、又候工藤左衛門が富士野の狩は天の與へ、この圖を外さず討取らんと、時致さまには夜の目も寐ずに御心勞、それに引替へ祐成さまは、昨日より廓へござつてお歸りなきゆゑ、十作がお迎ひに參つたが彼にも相手がある樣子、こりや木乃伊取りにならねばよいが。（ト思入あつて舞臺へ來る、此の時以前の猫出來るを十内見て）おゝ愛らしき此の猫、首玉をかけて居るからは飼猫と見える、犬にでも取られぬ内に、さあ／＼早く行きやれ／＼。

ト ばた／＼になり、花道より首へ木札を掛けし藁包みの犬駈けて來り、件の猫を捕らうとするゆゑ、

十内猫を抱き取る、犬飛掛るゆゑ蹴倒す、又立ちかゝるゆゑ十内鞘の儘脇差を抜き犬を打つ、これにて犬は花道へはひる、此の時上手より以前の千里出來り、十内が猫を抱へ居るを見て、

千里　これは〳〵十内さんでござんしたか、ようその猫を助けて下さりましたな。

十内　おゝこなたの家の猫でござるか、危ふいところでござつた、さあ連れてござれ〳〵。

ト千里へ猫を渡す。千里取つて、

千里　お前さんのお蔭で、此の猫は命拾ひをいたしました、有難うござります。

ト行きかけるゆゑ、十内千里の袖を引き、

十内　あいや、ちよつと待つて下され。

千里　何ぞ御用でござんすかいな。

十内　外の用でもないが、定めし祐成さまがおいでゞあらうな。

千里　あいな。

十内　むゝ、さうして十作はまだ參らぬかな。

千里　十作さんは、つい今こゝで、わたしと一緒に、

十内　はゝあ、そんなら十作の相棠といふは、

千里（恥かしき思入にて、）えゝも、知らぬわいな。

ト唄になり、千里猫を抱き、逃げてはひろ、十内殘り呆れし思入にて、

十内　扨は噂に聞き及ぶあれが千里といふのでありしか、祐成さまのお迎ひをかこつけ、十作が廓へ來たがる筈だ、祐成さまといひ十作といひ、あゝ戀は諸道の妨げぢやな。どれ、憎まれ役ぢやがお迎ひに行かねばならぬ。（ト十内上手へ行きかゝる、此の時揚幕にて、）

四人　あいやお侍、待たつしやれ。

ト十内何者が呼ぶかといふこなし、大拍子になり、花道より平井喜藏、天城權平、船田源八、岡野大助、半纏ぶつさき大小切草鞋にて出來り、此の中へ紺看板の中間、件の犬を引き割竹を持ち附添ひ出來り、直に舞臺へ來て四人床几へ掛ける。十内こなしあつて、

十内　お止めなされしは、拙者が事でござりますか。

四人　如何にも。

十内　して、何ぞ御用でもござりまして。

喜藏　いや用と申すは別儀でない、只今あれより見受けし所、何ゆゑあつて此の犬をお手前には、

四人　打たしつた。（トきつといふ。）

十内　さればでござる、只今拙者この所を通りかゝりしに、それなる犬が一疋の猫を捕らうといたせし
ゆゑ、打捨ておかば猫の命は忽ちゆゑ、我れ人共に飼ひおきて愛する者の心を察し、猫を助け遣
はさんと、それゆゑ犬を打ちましてござる。

喜藏　如何なる猫か存ぜぬが、これへ引きたるこの犬は、忝なくも賴朝公の、

權平　富士の御狩の總奉行、工藤左衞門祐經樣が、

源八　祕藏にめさるゝ飼犬にて、此度の御狩につきお用ひなさるゝ大事の犬、

大助　濫りに打つて、

四人　濟まうと思ふか。（ト四人きつといふ。十内思入あつて、）

十内　左樣な大事な犬とも知らず、只今打ちしは拙者が麁忽、何卒御免下さりませ。（ト手を突き詫る）

喜藏　いや〳〵、われ〳〵共が主人より預り參りし、これなる犬、

權平　斯く打たれては主人へ濟まぬ、見れば武士の樣子だが、

源八　いづくの家來か主人から、汝が名をも名乘らつせえ。

大助　こりや此の儘では、

四人　濟まされぬぞ。

十内　御尤もでござりまするが、其の儀は何卒御容赦を、
大助　いや、主人の名をば名乘つたら、了簡しまいものでもないが、
喜藏　たゞ此の儘では、
四人　濟まされぬぞ。
十内　そこを何卒。（ト十内頻りに詫びてゐる。權平羽織の紋を見附け）
權平　名乘らずとも羽織の紋、山形に木瓜は、慥かに曾我の家來であらう。（ト十内是非なき思入あつて）
十内　なるほど、斯くお目立ちまする上からは、何をかお隱し申しませう、如何にも拙者は曾我の家來、赤澤十内と申すもの。
源八　扨こそ曾我の、
四人　家來よな。
喜藏　さすればこれなる飼犬の、
權平　頸に附けたる此の木札、
源八　工藤左衞門祐經と、
大助　知つて打つたか、

十内　さあ、

四人　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。(ト十内むッと詰る。)

喜藏　とやかうと面倒だ、

權平　主人へ言譯、この場に於て、

源八　犬の仕返し此奴めを、

大助　うつて〳〵打ちすゑくれん。

十内　全く存ぜぬ事なれど、木札に心附かざりしは拙者が越度、打つてお腹が癒ることなら、いざ御存分になされませう。(ト十内思入あつてきつといふ。)

喜藏　望みの通りわれ〳〵が、

權平　これにて存分、

四人　打ちすゑくれう。

ト四人にて十内を足蹴にかけ、中間が持つた割竹を取り十内を打たうとする、この時揚幕の内にて、

犬坊　者共控へい。

喜藏　あのお聲は、たしかに若殿、

四人　犬坊丸樣。

ト四人控へろ、大拍子になり花道より犬坊丸前茶筌行縢狩座の打扮、郎黨二人半纏股引大小草鞋にて弓矢を持ち、勢子附添ひ出來り、花道にて、

犬坊　父へ願うて此の度の富士野の御狩へ連立ちしが、まだ初旅の犬坊丸、

郎一　派手を飾りし狩座の、お供に立場一里塚、

郎二　二軒茶屋から三里半、四ツ谷を越して馬入川。（ト舞臺の諸士四人花道へこなしあつて）

喜藏　これは〱犬坊丸樣には、お早いおみ足、

權平　まだ日も餘程高ければ、

源八　これなる茶店で、

大助　御休息、

四人　遊ばされませう。

犬坊　おゝ、皆參れ。

郎一 郎二　はあ。（トこれにて犬坊丸先に、皆々舞臺へ來り、床几へかける。）

喜藏　して、若殿には此の場の仕儀、何ゆゑあつて、
四人　お留めありしぞ。
犬坊　如何なる仔細か知らねども、かね〴〵道をばおとなしう致せよと父の言附け、それゆゑにこそ留めたり。
喜藏　仔細な御存じなきゆゑに、手荒な所行と仰せはあれど、打捨てがたき此の場の仕儀、
權平　かねて我が君御祕藏の、これなる犬をそれに居る、曾我の家來がうち打擲、
源八　手籠めになせし不屆きゆゑ、犬を預かるわれ〳〵が役目の越度と存ずるゆゑ、
犬助　それで此奴を成敗いたせば、若殿にはお構ひなく、少しも早く御旅館へ、
喜藏　お越しあつて、
四人　然るべし。
犬坊　たとへ犬を打ちたりとて、それを科に人を打たば、父上樣よりそち達をお叱りがあらうぞや。
喜藏　でも、日頃より我が君を、
四人　敵とねらふ、(ト言ひかけるを、)
犬坊　童と侮り犬坊が言ふ事を、そち達はきかぬのか。(トきつといふ、四人是非なく控へる、犬坊丸十内に

向ひ〕家來の者が無禮をば、わしが代りて詫びますれば、どうぞ許して下されや。

十内　これは〱、申さば犬猫同然な拙者に御懇の今の御意、かね〲噂に承はりしが、お年にまさりし御發明、恐入りましてござりまする。

犬坊　まだお目には掛りませぬが、御兄弟の伯父樣方へよろしく申して下されや。

十内　畏まつてござりまする。

四人　えゝ、命冥加な。

犬坊　こりや。〔ト四人へ思入〕許してくれよ。

ト唄になり、犬坊丸十内へこなしあつて四人の諸士附添ひ、皆々上手へはひる。十内跡に殘り、犬坊丸を見送り感心の思入。

十内　實のなる木は花よりと、流石は一﨟別當の職を蒙る工藤の嫡子、まだ十五歲にはなるまいが、人に勝れし器量發明、あゝ感心な事だな、〔ト思入あつて又氣を替へ〕あいや人の子を褒めるより、こつちの大事の若旦那を、お連れ申して歸らにやならぬ。

ト砂を拂ひ行かうとする、この時以前の十作出かゝり居て、

十作　十内待つたゝ。

十内　や、誰かと思へば十作か。
十作　さて〳〵此方は見かけによらぬ、臆病未練な事だな。
十内　なに、この十内を臆病とは。
十作　樣子は廓で聞いて居たが、何ゆゑ彼等の手籠めに逢ひしぞ。
十内　高の知れたる者なれど、相手が工藤の家來ゆゑ、それで手出しをしないのだ。
十作　さあ、其の工藤の家來ゆゑ、何故手籠めに逢つたのだ。えゝこなたはなう。（ト替つた合方になり、腹の立つ思入にて、）敵と狙ふ左衞門の家來ならば猶の事、言はずと知れし敵の片割れ、骨を挫いで彼奴等めに、目に物見せてやればよいのに、えゝ忌々しいなあ。
十内　そなたの氣では十内が、意氣地がないと思ふであらうが、大事の前の小事ゆゑ、無念を怺へて辛抱したのだ。
十作　いゝや日頃こなたが臆病ゆゑ、手出しもせずに打たれたのだ、そんな未練な根性ぢやあ、まさかの時の役には立つまい。
十内　此の十内はまさかの時の、役に立つ氣で手出しをせぬのだ。
十作　いゝやそれは嘘だ〳〵、日頃十作を侮つて役に立たぬと言ふけれど、この十作ならたゞはおかぬ。

十内　それが所謂匹夫の勇、まさかの時の役には立たぬ。

十作　立つか立たぬか十作が手の内、腰拔け武士に見せてくれう。

ト兩人きつと思入、これより誂への合方になり、十作十内の胸倉を取る、十内振拂ひ柔術の立廻りよろしくあつて、トゞ十内十作を突退ける、十作又組附くを十内十作を當てる、これにて十作どうと下に居る、十内思入あつて、

十内　白痴者めが。(ト唄になり上手へはひる、十作心附き起上つて、)

十作　うぬ十内め。(ト立ちかゝる、爰へばた／＼になり、以前の千里出來り、十作を止めて、)

千里　もし十作さん、まあ／＼待つて下さんせいな。

十作　や、千里か、そなたの存じた事ではない、こゝ放せ。(ト振拂つて行かうとするを又止めて、)

千里　最前からの爭ひは御尤もでござんすが、御兄弟のお力になるのはお前と十内さん、朋輩同志で喧嘩をして、互ひに怪我をしなさんしたら、どの體でお二人の御奉公をしなさんすえ。

十作　臆病未練の十内を懲らさん爲の異見の爭ひ、女の存じた事ではない、怪我せぬ中にこゝ放せ。

千里　いゝや放さぬ放しませぬ、命に掛けても留めねばならぬ。

十作　えゝしつこい、こゝ放せ。

千里　いえ〳〵放さぬ、留めました

十作　えゝ、こゝ放せ。

千里　いゝえ、留めた。

十作　えゝ、放せ。

千里　いゝえ放さぬ、何處までも留めた〳〵、留めましたわいな。（ト千里きつと留める）

十作　はてまあ、こゝを放せといふに、

ト振拂つて行かうとするを、千里やるまいと十作の帶へ取り附ききつと留める、十作これを引放さうと兩人草摺引の模樣よろしくあつて、トヾ兩人一度に床几へ腰を掛けきつと思入（これを道具替りの知らせ、時の鐘早き合方にて道具廻る。

（小磯地藏堂の場）――本舞臺三間の間常足の二重草土手の蹴込み、二重眞中に大きなる石地藏、上手に古びたる梵天を建てあり、後黑幕、上下共藪疊、所々に振好き松の立木、下手に說教札建てあり、よき所へ空駕籠一挺据置き、總て小磯が原地藏堂の體。爰に一二三四五六の雲助焚火へ德利をかけ、酒を呑んで居る。此の模樣禪の勤めにて道具留る。と皆々捨ぜりふにて酒を呑むことあつて、

一　こう酒がもう怪しくなつて來たが、手前の顏でもう一升取つて來てくれろ。
二　いやおらあ顏が惡いからいけねえ〳〵。かう播州々々、手前うまくこぎ附けてくれろ。
三　おれは呑む方ならこぎ附けて呑むが、酒屋の使ひは御遠慮申すはうだ。
四　いや骨惜しみな奴等だ、そんならおれが行つて來るのだが、黑岩手前行つて來てくれろ。
五　常談言つちやあいけねえぜ、おれはたつた今此の海坊主と二人して、一升借りて來たばかりだ。
六　もうさつきから一升づゝ二度借りて來たから、もう此の顏ぢやあいけねえ〳〵。
一　そんなら仕方がねえから、此の地藏さまを賴んでやらう。
二　地藏の顏も三度目なぞと、古く洒落る氣だらうが、そりやいけねえ〳〵。
一　こいつア一番大當りに當てられた、然しこの地藏樣も今ぢやあ眞面目な顏をして居るが、昔は道樂者だつたといふ噂だ。
二　地藏さまの道樂なら、賣女でも買ひに行くのか。
三　それとも賽の河原といふから、ちよぼ一でも好きであつたのか。
一　なあに、そんな事ぢやあねえ、人を化したさうだ。
四　それぢやあおみつぼで狐の方だらう。

一　えゝまぜつけえさずに聞けよ、ある日の事だが、侍の旅人を化した所が、その侍がたうとう見出して石地藏を袈裟切に切つたさうだ、それだから今だに彼の通り袈裟をかけたやうに疵がある、小磯が原の袈裟疵地藏といふ、これでも昔は道樂ものだ。

五　いや地藏さまの御說法で、がうぎに睡くなつて來たな。

六　それに今日は、狩場へ行く荷物を今朝から擔ぎ通したので、餘計に疲れが出たやうだ。

三　いくら骨を折つて擔いでも、御用仕事ぢやあ錢にならねえ。

四　どうかたんまり錢になる、まぶな仕事がしてえものだ。

一　さうよ、酒の代りに牡丹餠でけつを叩かれるといふやうな、うめえ仕事がありさうなものだなあ。

ト三味線入りの禪の勤めになり、花道より片貝片外し好みの衣裳、上へ打掛を端折り出來り、後よりお松下女の打扮にて小風呂敷を持ち附添ひ出來り、花道にて

お松　もし奧樣、參る時は夢中でお供をして參りましたが、もう日は暮れかゝりますし、人通りさへございませず、氣味の惡い所でござりますな。

片貝　僅か四五町の所なれど、町家を離れし小磯が原、ほんに淋しい所ぢやわいな。

お松　よく旅人を脅しますといふ、化地藏は何處でござりまする。

片貝　その化地藏といふは、(ト舞臺へこなしあつて、)あれ〳〵、向うに見える地藏樣ぢやわいの。
お松　(舞臺へ思入めつて、)なるほどあれでござりますか、ほんに化けさうな地藏樣でござりまする。
片貝　暮れぬ中、少しも早う歸りませう。
　　ト兩人舞臺へ來る雲助皆々片貝を見て、いゝ代物が來たといふ思入あつて、
一　もし〳〵お女中さま、もう日の暮るゝに間はなし、
二　此の畷は物騷だ、
三　女ばかりぢやァあぶないもの、
四　怪我でもあつちやあよくねえから、
五　わつち等六人連立つて、
六　宿へ出るまで、
六人　送つて上げよう。(ト皆々立つて片貝を取卷く、お松下手に顫へてゐる、片貝思入あつて、)
片貝　それはまあ親切によう言うて下さんすが、わしはつい此の在所の者ゆゑ、決してそれには及ばぬわいな。
お松　それに奥樣はお駕籠は、お嫌ひでござりまする。

一　えゝ喧しい山出しめ、默つて居やあがれ。
二　お駕籠がいやなら、お馬はどうでござります。
三　馬でも駕籠でもお好み次第で、
四　行く所までわつち等が、
五　大勢揃つて、
六人　送つてあげよう。
片貝　えゝも、馬も駕籠もいらぬわいな。(ト行きかゝるを皆々留めて)
一　それぢやあ息つぎに、お酒はいかゞ、
二　丁度わつち等六人で、盛切酒を始めたところだ。
三　肴は不漁でありませんが、見晴しのいゝ小磯が原、
四　お前が爰で呑むのなら、おいらが一升取つて來よう。
五　けして遠慮はいらねえから、ゆつくり呑んで行きなせえ。
六　くどいやうだが、夜が更けりやあ、きつと送つて、
六人　あげませうよ。(ト皆々片貝の手を取るを、振拂ひきつとなつて)

片貝　やあ、女と思ひ侮つて、無禮をしやる雲助ども、身不肖なれど二の宮小太郎能重が妻　女でこそあれ、和田さまや北條さまの御贔屓にて人となつたる此の片貝、戯謔しやると許さぬぞ。

一　なに、片貝でもあわびッ貝でも、そんな事はかまふものか。

四　えゝ面倒だ、遣ッつけろ。

五人　合點だ。

ト雲助の五六片貝の手を取るを、片貝兩人を拂ひ退ける、これにて六人一度にかゝり、片貝を手籠めにしようとする。下女のお松はびつくりして花道へ逃げてはひる。早き禪の勤めばた〳〵になり、花道より以前の十内尻端折り逸散に出來り、後より以前の喜介鉢卷にて出來り、花道にて此の體を見てびつくりなし、直に兩人舞臺へ來り、十内六人を投退ける。皆々縫包みを持ち打つてかゝる、この中へ喜介はひりてまご〳〵して打たれる事よろしくあつて、十内六人を追廻す、これにて六人上下へ逃げてはひる。片貝十内を見て嬉しきこなしにて、

片貝　そなたは十内、よい所へ來てたもつたな。

十内　唯今道にてお松どのに出逢ひし所、樣子を聞いてびつくりなし、宙を飛んで駈附けました。

喜介　奥樣お怪我もなうて、お目出たうござりまする。（ト喜介鉢卷を取る。）

十內 いや危ない事でござりました。してあなたには夜に入つて、斯く物騷なる此の邊へ何御用にてお越しなされました。

片貝 今日は曾我の母樣へ御機嫌伺ひに參りし所、折惡しく誰も居ぬので、つい遲うなりましたわいな。

十內 左樣でござりましたか、成程祐成樣は昨日からお家へお歸りなされませぬゆゑ、十作もわたしもお目にかゝらぬ今日の仕儀、御免なされて下さりませ。

片貝 いや〳〵其の斟酌には及ばぬこと、かね〴〵二人が望みゐる、狩場の切手を和田さまから、お渡しなされて下さつたゆゑ、早速屆けに行きましたわいな。

十內 すりや狩場の切手を、御持參下されたとな。

片貝 おいなう。

十內 それは千萬忝ない、その鑑札さへお手に入らば、狩場の通路は自由自在、お二人さまにも定めしお悅びでござりませう。

片貝 北條さまや和田さまが、御贔屓なされて下さりまする、そのお志しを無にせぬやう、どうぞ首尾よう二人の者へ。

十內 お氣遣ひなされますな、今宵お歸りなされましたら及ばずながら御異見申し、お惠みありし鑑札

の無駄に決してならぬやう、この十内がいたしまする。

片貝　今に始めぬことながら、そなたといひ十作といひ、忠信厚き志し、忘れはおかぬ嬉しいぞや。

十内　有難い其のお詞、われ／＼の命の續くだけお二人さまへお力を、添へる心でござりまする。(ト時の鐘になり、十内思入あつて、)とかういふ内ありやもう初夜、ちつとも早くお屋敷へ。

ト此の時以前の雲助の五六の兩人伺ひ居て、

兩人　うぬ、さつきの返報。(ト兩人十内にかゝるを十内突廻してきつと引附け、)

十内　片貝さまには、こゝ構はず、

片貝　とはいへ、此の場を、

十内　おいであつては足手まとひ、

片貝　そんならこのまゝ。(ト行かうとするを五六振り解いて、)

兩人　彼奴をやつては、(ト片貝にかゝらうとするを、十内兩人を支へて、)

十内　少しも早く。

片貝　そんなら十内。

喜介　さあ奥樣、お早くおいでなされませ。

ト片貝の手を取り上手へ行かうとする、片貝思入あつて喜介附添ひ足早に下手へはひる。こゝへ以前の雲助出來り、皆々十内に打つてかゝる、十内きつとなり、

十内　やあ性懲りもねえ雲助ども、手出しをすると命がないぞ。

一　どうせ體は野へ出した、

二　命知らずの雲助が、

三　夜網にかけた代物を、

四　うぬが邪魔をしやがつて、

五　玉を逃がした埋草に、

六　うぬが身ぐるみ、

六人　おいて行け。

十内　物取りならば以後の見せしめ、片ッ端から覺悟しろ。

一　しやれた事を吐かしやァがるな。それ、やッつけろ。

六人　合點だ。

ト早き禪の勤めになり、皆々縫包みにて打つてかゝる、ちよつと立廻つてよき見得より馬士唄になり

十内六人を相手に駕籠を遣ひ花々しき仕拔きの立廻り存分あつて、十内駕籠の上にてきつと見得、これにて十内一腰を拔き峰打にする、六人上下へ逃げてはひる。ばた〳〵になり、以前の十作下手より出來り、十内を見て、

十作　おゝ十内、こゝに居たか、さつきの勝負を附けてしまはう。

十内　この十内の手並を恐れず、追駈け來るはまだしも神妙、

十作　日頃同胞同樣な朋輩なれど今こゝで、

十内　敵と味方の別れ道、

十作　あたりに邪魔も長暇、

十内　石の地藏を行司となし、

十作　こゝで勝負を、

兩人　附けてしまはう。

ト四人ちよつと立廻つてきつと見得、これより双盤入りの鳴物になる、十内上手の梵天を持ち十作下手の說敎札を拔き取り、石の地藏を遣ひ立廻りよろしくあつて、トゞ獲物を投げ捨て兩人組打ちになり、石地藏の段にてきつと見得、兩人思入あつて、

十内　こりや十作、こなたの手の内あつぱれ見上げた。
十作　おゝ、こなたの手練も恐れ入つた。
十内　最前おれに惡口なせしは、此の手の内を見よう爲めか。
十作　如何にも、手練を試さん爲め。
十内　なんと。（トこれにて兩人解れる。十作思入あつて、）
十作　名におふ敵は鎌倉で飛鳥落す工藤祐經、連れる時には千騎二千騎、連れざるとても百騎二百騎、こちらはこなたと此の十作、家來といつては二人のみ、一倍こなたの働きを見ようと思つて惡口なしたが、手並を試して此の十作驚き入りました、無禮はどうぞ許して下せえ。
ト兩手を突き詫びる、十内思入あつて、
十内　心は同じ十内も、こなたの腕を試して見たく、それで眞身の同胞とも思ふこなたへ無禮はお互ひ。
十作　これといふのもお二人のお主を大事と思ふゆゑ、
十内　怒るも泣くも忠義の爲め、
十作　こなたの御手練、
十内　そなたの手の内、

十作　双方試して、
十内　これで互ひに、
兩人　安堵いたした。（ト此の時石地藏の蔭より以前の片貝、千里出來り、）
片貝　二人の者が忠心義心、まことに感心いたしました。
十作　や、片貝樣には、
十内　まだお歸りなされませぬか。
片貝　最前戻る途中にて測らずそれなる女子に出逢ひ、樣子を聞けばそち達兩人、
千里　爭ひ事からお互ひに、どうなる事と案じたゆゑ、此の奧さまと共々に、
片貝　藪の小蔭で最前から、
千里　樣子を聞いて居りましたわいな。
十作　（思入あつて、）思ひがけなく片貝樣に、お目にかゝつてわれ〳〵が、聊か忠義の功を、お褒めに預る身の冥加、面目次第もござりませぬ。
片貝　そなた衆兩人兄弟に附添うて居るその時は、千萬人にも勝りし武士、やがて祐成時致が、
十内　會稽山にたくらべし、

十作　富士の裾野でお二人が、
千里　名をも揚羽の蝶千鳥、
十内　なるならざるは天に任せて、
十作　今にぞ恨みを、
兩人　晴してくれん。（ト兩人きつとなる。この時後へ以前の雲助五、六の二人伺ひ居て）
五　樣子は聞いた、
六　うぬ待つて居ろ。（ト行きにかゝるを、十内十作雲助兩人をぐつと引附け）
十内　不便ながらも、
十作　蟻の一穴。（ト兩人を切下げる、片貝千里あれと後へ下つて袖にて顏を隱す、十内思入あつて）
十内　今日は測らず、
十作　よい腕試しを、（ト兩人刀を引く、五六見事に轉る、十内十作顏を見合すを木の頭。）
兩人　いたしたわえ。

ト十内十作刀の糊紅を拭ふ、片貝千里兩人を見て勇しいといふこなし、此の模樣双盤のセメにて、よろしく

ひやうし幕

二幕目

工藤假屋の場

〔役名――工藤祐經、曾我十郎祐成、大藤內成景、梶原平次景高、工藤家臣平井喜藏、同天城權平、同船田源八、同關野大助、犬坊丸。喜瀨川の龜鶴、化粧坂の少將、其他。〕

（假屋門前の場）――本舞臺三間の間一面假屋の横手を見たる板羽目の張物、上手へ寄せて一間の柵門、上下柵矢來、門の兩脇へ庵に木瓜の紋附し高張を立て、其外一面同じ紋附の幕を張り、下手よき所に松の立木、總て工藤假屋門前の體、爰に△水汲裝の勢子にて四ツばひに這つて居る、これを□〇△◎何れも勢子の打扮にて、割竹を持ち追廻して居る、此の模樣勢子太鼓にて幕明く。

勢子三人　ありや〳〵〳〵。

ト割竹を敲き立てる、これにて△あちこちと這廻つて逃げることよろしく、爰へ門の內より喜藏、權平、源八、大助着流し一本差し下駄にて出來り、

侍四人　こりや〳〵、かしましい、控へをらぬか。（トこれにて勢子皆々控へる。）

喜藏 見れば一人四ツ這ひになり、逃廻るを追ひまはすは、
權平 察するところ明日の、狩場の調練致すと見ゆるが、
源八 わが君左衞門祐經樣、今日狩場の休日なれば、
大助 只今奧にて御酒宴最中、お耳障りぢや。
四人 控へてよからう。
□ いえ〳〵中々もちまして調練ではござりませぬ、これにをります軍內めが、一昨日愛鷹山にて仁田の四郎忠常樣がお仕留めなされし猪の肉を一切貰つて喰ひますと、忽ち斯樣に取り逆上せ、
○ 猪の祟りと見えまして四ツ這ひになり、そこら中を暴れ廻つて歩きますゆゑ、私共が割竹で敲き伏せて繩を掛け、駿河の町へ連れて參つて、療治にかけてやる積り、
◎ 輕い身分の私共ゆゑ、手當等もござりませぬゆゑ、何卒お慈悲をもちまして多少には限りませぬ、不便と思召し、お心附けのお手當を、
三人 偏にお願ひ申しまする。
喜藏 何と申す、扨は仁田の四郎殿が仕留められたる猪を喰ひ、その猪にあやかりて暴れ廻つて困ると申すか。

三人　へい〳〵、左樣にござりまする。
權平　さて〳〵これは椿事でござる、然らばわれ〳〵四人にて、忠常殿にあやかる爲め、彼れを仕留めて手柄にせん。
四人　やあ。(トびつくりする。)
源八　左樣々々、今般の卷狩にて、第一番の功名めされし忠常殿にあやかる時は、我々共が身の本懷、
大助　猪の怨念あやかりし勢子一人を仕留めなば、四人の者が大きな手柄、いでや急所を、
四人　貫きくれん。(ト刀の柄へ手を掛けて立ちかゝる、此の内△は下手に蹲りゐて、是を聞きびつくりなし、)
△　あゝこれ、待つて下さい〳〵、そんなら猪は止めだ〳〵。
四人　なに、止めだとは。
△　(これにて前に出て、)へい、實は何もあやかつたと、申す譯ではござりませぬ。
喜藏　して又何ゆゑ、
侍四人　立ち騷いだ。
△　もう斯うなつたら仕方がない、何もかも申しまするが、今日は午刻頃雨が降り出し狩場のお休み、我君樣には大磯から美しい傾城達をお呼び寄せなされまして、呑めや唄へのお酒盛り、私共もせ

めての事に駿河の町へ參りまして、一杯やらうと思ひましても呑代がござりませぬゆゑ、これに居ります三人が、智惠をふるつた思ひ附き、

□　三人寄れば文珠の智慧、猪になるのもこれも緣と、俄に企つ催しも、

○　斯う顯はれては文珠どころか、般得が愚痴で馬鹿々々しく、

◎　物忘れをして何れも樣、此の場の事はこれ限り、お忘れなされて下さりませ。

△　命ばかりは幾重にも、

□　お助けなされて、

四人　下さりませ。

喜藏　扨は、わいらが我々を欺かん企てなりしか、

權平　匹夫下郎の身を以て、武士たる者の眼を眩し、

源八　酒呑代をせしめんなどゝは、近頃もつて傍痛い、

大助　今日は許してくれん、以後はきつとたしなみ居らう。

四人　重ね〴〵恐れ入りました。

喜藏　外に手段もあらうのに、僅の金に眼がくらみ、

權平　四ッ這ひになる了簡は、取りも直さずこれ人外、
源八　そこが匹夫の猪武者、
大助　獅子身中のうじむしめが。（ト侍四人は門の内へはひる。）
△　何の事だ馬鹿々々しい、道の悪いに四ッ這ひになり猪の眞似をした上に、呵られたが儲けとは、こんな詰らぬ事はない。
□　いやもう、下司の智慧は後からと、今となつて考へたら全體今日の思ひ附きは、雨の休みにぬかりであつた。
三人　そりや又なぜに、
□　はて今日は二十八日だから、おしゝ（おしり）の用心する日であつた。
△　何を馬鹿な。
三人　さあ〳〵來やれ〳〵。
ト勢子四人は下手へはひる。後しつとりとした合方になり、上手の門の内より梶原景高上下衣裳、下駄にて出る、あとより小姓附添ひ出で、
小姓　梶原樣、何御用でござりまする。

景高　仲居共に頼んでも、とやかう言うて逃げをるゆゑ、そちに頼むは外でもない、奥の座敷へ參つて居る、少將といふ傾城を、これへ呼出してはくれまいか。

小姓　お安い事ではござりまするが、私が呼出しましても、參ればよろしうござりまするが。

景高　はて、そこは所謂方便にて、曾我ノ五郎と申すものが門口に待つて居るゆゑ、首尾を見合せ參るやうにと、内々にて知らせてくりやれ。

小姓　左樣な事を申しまして、後で噓が顯はれますと、面目なうござります。

景高　そこは手前が口先で、そちに難儀は掛け申さぬ。

小姓　左樣なれば梶原樣、

景高　何分ともに頼むぞよ、

小姓　畏りましてござりまする。（ト小姓は門の内へはひる。景高思入あつて、）

景高　一臈職の勢ひにて大磯の廓より、今指折りの傾城を呼寄せしといふ噂を聞き、休日の徒然に參つて見れば案に違はず、我が執心の少將が席を列ねてをるこそ幸ひ、これへ呼出し、日頃の望みを、どうぞ首尾よく參ればよいが。（ト此の時門の内にて、）

少將　あい〳〵、今直に參りますわいなあ。

ト浮いた合方になり、門の內より少將傾城の裝、庭下駄を穿き出來る、これにて景高下手幕張の蔭に小隱れする。少將四邊を見廻しこなしあつて、

時致さんが尋ねて見え、門の口に居やしやんすと、お小姓さんが內證で今知せて下さんしたゆゑ、飛立つ思ひに首尾をして門口へ來て見れば、影も形も見えなさんせぬが、わたしの來やうが遲いゆゑ、じれて戾つてしまやしやんしたか、ほんに男といふものは、氣の短いものぢやなあ。

景高　（此の時出て、）いや、其の時致はこゝにゐる。

少將　（景高を見て、）や、景高さん。（ト言捨て門の內へ行かうとするを、景高近寄つて袂を捉へ、）

景高　こりや少將、何も身共の顏を見て逃げて行くことはない、まあこゝへ掛けるがよいわさ。

ト有合ふ革床几へ少將を掛けさせる。少將こなしあつて、

少將　そんならわたしを呼出したは、景高さんでござんすかえ。

景高　いや呼出したは時致だ。

少將　何と言はしやんす。（ト合方きつばりとなり、景高も有合ふ革床几へ掛け、）

景高　今方これへ參り合すと、貧乏じみた裝をして深間の時致が小姓を賴んで密々話し、樣子を聞けばその方を呼出して貰ひたいと、人の揚げたる傾城を横ばん切らうといたす心底、武士に似氣なき

仕方ゆゑ詰つてやらうと存じたところ、身共に逢ふのが怖いかして、この梶原の姿を見ると詞も交さず逸散に、尻尾を巻いて逃げをつたが、あんなしがない時致に操を立てずと、身共に其の身を任せるとたつた一言いつてくりやれ、二ツ返事で身請なし三枚肩の駕籠よりも四枚で擔ぐ乘物で、五丁の廓を六尺の肩で風切り七里が濱、八幡宮の鳥居を越し、苦界九年と十年の勤めをのがれ我が奥方、色好い返事はどうぢや／＼。

少將（こなしあつて、）數ならぬ身をそれ程までに、御親切におつしやつて下さんすのは嬉しいけれど、世の譬にも言ふ通り、釣合はぬは不縁の基ゐ、當時鎌倉殿中にてお覺え目出度きお大名、梶原樣の奥方に化粧坂の少將と名乘るもどうやら恥かしい、龜鶴さんや虎さんのお情女郎で漸うと入山形の肩書へ呼出しといふ名目を附けて貰うた新造が、折目正しいお屋敷の行儀作法が出來ませうか、それゆゑわたしや貧乏の時致さんと言交し、辛い苦界も心から年が明ければ手鍋を提げ、貧苦に暮すを樂しみに勤めをする氣でござんすゆゑ、こんなしがない少將を奥様にしようなどゝ、どうぞ思うて下さんすな。

景高　いや／＼さうは拔けさせぬ。素性賤しき身分にて君傾城とはいひながら大々名の弄び、歌道は元より香、茶の湯、調べの道も何一つ暗きことなき名うての少將、この梶原が身請けなし奥といつ

ても恥しからず、それを勤めの張りとやら意氣地とやらを立通し、落ぶれ果てし時致へ操を立つる氣であらうが、其の意氣張りは當座のこと、いつまで若い身ではなし、盛り短き全盛の姿に花のある内に、由緒ある客に身を任せ一生涯を安樂に送つたはうが其の身の得、あんなしがない時致は、さつぱり思ひ切つてしまやれ。

少將（これにてむつとして、）景高さんの苦勞性に、占家さんか何ぞのやうに、末の末まで人の身を案じ過して下さんすは、御親切のやうなれど、どうした事かわたしには、其の分別が出來ぬわいなあ。

景高　はて、そこが至らぬ若い身そら、惡い事は申さぬから、身共が心に從がやれな。

少將　いえ〳〵わたしやどうあつても、其の心には從はれぬわいなあ。

景高　すりや、これほどに申しても。

少將　どうした事か梶原さんは、わたしばかりか人さんが、渾名を呼んでげぢ〳〵と、

景高　やあ、

少將　此の少將も、蟲が好かぬわいなあ。（トずつけり言ふ。これにて景高むつとなし、）

景高　あまりと申せば。

ト刀の柄へ手を掛け立上る。此の以前門の内よりおきつ仲居の打扮にて出かゝり居て、この時前へ出

て景高を留めて、

きつ　あゝもし景高様、まあ／＼お待ち下さりませ。

景高　誰かと思へば仲居のおきつ、

少將　よい所へ來て下さんしたなあ。（トこれより合方替つて、）

きつ　委細の樣子は後にて殘らず聞いてをりましたが、事を分けたる梶原さまの御親切なるお詞も、年端も行かぬ少將さん、蟲の居所が惡いかして愛想づかしの御挨拶、一旦斯うと言ひ出してそんならさうかとおつしやつても、引込む譯にもなりますまい、そこは仲居の役廻り、いづれ苦勞もするが路に名所古蹟のあることを、探り當てたる其の上で、中を結んで三保の松、富士の高嶺にあらねども昇り詰めたるお心や、積る思ひの白雪も解けてしまへば何もなし、蓬萊山でお目出度く三國一の納まりをきつとお耳に入れますから、此場の事は富士川の水に流して下さりませいなあ。

トよろしく留める、これにて景高思入あつて、

景高　事をわけたる扱ひも木折りでゆかぬ戀ゆゑに、中を結ぶとあるなれば水に流して遣はさうが、して其の方が挨拶は。

きつ　明日とも言はず今宵の内、少將さんに得心させ、

少將　あゝもし、わたしやどうあつても。

きつ　はて、何事もわたしが胸に。惡いやうには、しませぬわいなあ。

景高　然らば、今宵のその內に、

きつ　きつと御返事いたしませう。

景高　その詞にて身共も滿足、

きつ　左樣なれば景高さま。

景高　色よい返事を、待つて居るぞよ。

ト唄になり、景高は上手門の內へはひる。おきつ少將あとを見送り、少將氣の揉めるこなしにて、

少將　もし、おきつさん、人の心も汲みもせでお前一人が請合うても、わたしや不得心でござんすぞえ。

きつ　はてそこはわたしが口先で、今宵の內と言うたのも、明日の晩と言ひ延し、一日二日と經つうちには、もう明後日は大將さまが鎌倉へお歸りゆゑ、案じることはござりませぬわいなあ。

少將　それにつけてもあのやうな、厭なお人はござんせぬ。

きつ　そりやもうお前さんがおつしやらいでも、どうでも御紋が矢筈ゆゑ、女子には嫌はれますわいなあ。

少將　誰が渾名を附けたやら、げぢ〳〵さんとは、よう言うたわいなあ。（トこれより下座の獨吟になり、）

〽やがて降る雪間の月や影薄く、垣の卯の花しろ〴〵と、

トこれに聞き耳立てることよろしく、

ほんに好い聲でござんすなあ。

きつ　こゝに居て聞かうより、お座敷へ行つて聞きませう。

少將　行くはよけれど梶原さんの、側へ行かねばならぬかと、それが辛うござんすわいな。

きつ　はて、誰が居ようとお座敷では、いやらしい事は出來ますまいわいなあ。

少將　そんなら、一緒におきつさん。

きつ　どれ、お座敷へ參りませう。

〽更けて閨もる小夜風に、〽空に一聲おとづるゝかけ懷しき時鳥。

ト兩人連立ち門の内へはひる。この唄を借り花道より曾我十郎祐成、着流し大小袴裝下駄を穿き、竹笠を持ち出來り、花道へ止まり、

十郎　盛衰榮枯は世の中の習ひとかねて知りながら、我も世にある身なりせば三ケの莊の主人たる、河津の家に生れしゆゑ、家の定紋打連ね御狩のお供をいたさんに、軒端傾く草の家を、旅宿となして

同胞が侘しく暮す狩場のお供、これも誰ゆゑ彼の人と思へば無念止み難く、最早大事も今宵ぞと同胞決心いたせしゆゑ、假屋の案內見まほしく出向いて來る甲斐あつて、影の庵に木瓜は景光殿にてありつらん、夜目にあれをば見る時は目指す假屋と心得て、一期の大事爲損じならん、猶も探るが肝要ぢやなあ。

〽啼いてあかして曉に、曇る心の皐月雨、

ト獨吟三の句になり、十郎舞臺へ來り、柵矢來の外より內を窺ふことよろしくあつて、

正午の頃より降出せし雨に御狩も休日にて、假屋々々は酒宴を催し勞を休むる其の中に、一際目立つ遊興は、榮華に誇る糸曲の調べ、今にぞ思ひ知せてくれん。

ト十郎假屋の內へこなしあつてきつと思ひ入。これを獨吟の上げにて、門の內より幕明の侍出で十郎を見て、

喜藏　やあ、假屋の外に佇みて、內を窺ふ怪しき侍。

權平　破れ扇で高砂やと、貰つて步く浪人なるか。

源八　但しは當時の勢ひに、君の榮華を羨しく、

大助　せめて肴のお餘りか、燗冷しでも貰はうと。

喜藏　こゝらをうろつく奴なるか。
權平　そも先づおのれは、
四人　何者だ。（トこれにて十郎無念の思入あつて、わざと氣を替へ）
十郎　これは〳〵各樣のお目障りになりまして、お疑ひはさることながら、拙者はそんな怪しき者には候はず、此の度御狩のお供數に加はりましたる小身者、今日雨中のつれ〴〵に旅宿に居るも氣欝ゆゑ、お歷々の假屋の容體拜見に參りしところ、あまり御當家の假屋の内が賑やかなる御樣子に、好める道の唄三味線、唄ふ唱歌の面白さについ惹されて立留り、お咎めを蒙りまして面目次第もござりませぬ。無禮の段は幾重にも御容赦に預りたし、これは近頃失禮をいたした。
（ト花道の方へ行きにかゝる、この中喜藏祐成の着附の紋を見てびつくりなし、皆々に囁く、これにて三人扨こそといふ思入にて、
喜藏　こりや〳〵お侍、暫くお待ちやれ。
十郎　何か御用でござるかな。
權平　用があるからお呼び申した。先づ〳〵これへ、
四人　歸らつしやれ。（トこれにて祐成惡い奴に見られたといふこなしあつて、舞臺へ歸り下に居て）

十郎　して、拙者へ御用とはな。

喜藏　用と申すは餘の儀でござらぬ。只今何か承はれば此の度の御狩のお供に、列なりめされし御仁とやら、

權平　たとへ小身なればとて武士たる者は相互ひ、御狩のお供に列れば、とりも直さず味方同士、

源八　御姓名を承知いたし、次第によらば我君のお目通りへお連れ申し、我々共が執成しにて、

大助　杯のお流れ位は、呑ませて進ぜる心得なれば、如何なる御仁か御姓名を此の場に於て、

四人　承はりたい。

十郎　（これにて思入あつて、）その御配慮は忝ないが、姓名を名乘りまするもお耻しき小身者ゆゑ、矢張り此の場はこのまゝに、何卒お見脱し下さりませ。

喜藏　そりや御姓名は、

四人　名乘れぬとな。

十郎　其の儀は平に御容赦下され。

喜藏　然らばお尋ね申すまいが、御姓名の其の外に、承はり度き儀がござる。

十郎　してお尋ねの儀と申すは。

喜藏　外でもござらぬ、お手前の衣類に附けし紋所。
十郎　えゝ。（トぎつくり思入）
權平　山形に木瓜は、如何なる緣にてお附けなさる。
十郎　さあ、それは、
源八　曾我十郎祐成殿に、
四人　何と相違はござるまいがな。（トきつと言ふ、これにて祐成是非なきこなしにて）
十郎　斯くお目立ちまする上からは、今は何をか包むべき、御推量の如く拙者めは曾我十郎祐成でござる。
四人　扨こそ敵。
十郎　や、
喜藏　いやさ、入るに難き門ではなし、何故お立寄りなされぬのぢや。
權平　餘り身裝が見苦しさに、左樣な御仁と存ぜずして、
源八　河津殿の御子息たる、十郎殿に先刻より、
大助　無禮の段は、幾重にも、平に御容赦下されい。

十郎　いやもう、其の御挨拶に預つては此の方却つて迷惑いたす、實は今日私用を達し旅宿へ歸るさ、測らずも御門前を通りかゝり、お賑かなる假屋の御樣子に、もし伯父君の端近く假屋の内にましまさば、餘所ながら御尊顔を拜し度く存ぜしゆゑ、佇みて窺ひしが、お目立ちまして斯くの仕合せ。

喜藏　然らば其の由申し入れ、客來はござるなれど、

權平　次第によらば對面を、なさるまいとも申されず、

源八　我々取次いたす間、

大助　暫時の間、

四人　お控へなされい。

十郎　あいや、其の儀は御容赦下されい。

四人　とは、又なぜに、

十郎　されば以前の身なりせば、疾くよりお尋ね申さんに、見る影もなき我々が、當時一臈別當にて威勢盛んの伯父君に見え申すも、何とやら心苦しう候へば、今日御門を通行なせしは、何卒御内分に願ひまする。（トこれにて四人思入あつて、）

喜藏 なるほどそれもさうあらうが、三ケの莊の主人たる、我君左衛門祐經樣、

權平 鎌倉殿の仰せを受け、富士の御狩の總奉行、勢ひ朝日の昇る如く、

源八 威勢盛んの其の上に、他家と違つて內福ゆゑ、綺羅を飾りし其の中へ、

太助 見すぼらしげの裝をして、一家の名乘りは何とやら、

喜藏 然らば、此のまゝ、

四人 お歸りなされい。(トこれを聞き、無念を怺へる思入あつて、)

十郎 左樣ござれば各方、

喜藏 十郎どの、

四人 お別れ申す。(ト諸士四人上手へはひる、十郎後に殘り思入あつて、)

十郎 貧にとぢれば彼等にまで侮られるは無念なれど、今宵を過さずやがて望みを、(ト思入あつて氣を替へ、)どりや、歸宅いたさうか。

トしつとりとした合方になり、十郎花道へかゝる、此の時上手門の內より、龜鶴傾城の裝にて、金剛草履を穿き、竹笠を持ち出來り、

龜鶴 あゝもし祐成さん、ちよつと待つて下さんせ。(ト前へ出る、十郎後を見返り、)

十郎　や、こなたは龜鶴、どうしてこゝへ。（ト舞臺へ返る、龜鶴あたりへ思入あつて、）

龜鶴　祐經さんに招かれて、このほど廓の大磯から、この假屋へ來てをりますわいな。

十郎　そんならもしや、あの虎も、

龜鶴　いえ、虎さんは此中から持病の惱みで引籠り、廓へ殘つて居なさんす。

十郎　すりやあの虎は大磯に、煩うて居やるとな。

龜鶴　さあ、お前にお別れ申してより、持病の惱みに引籠り、泣いてばつかり居るゆゑに、常から姉妹同樣に仲好うしたるわたしの事ゆゑ、もしもの事でもある時は、祐成さんに逢はれまいと、力を附けて居るうちに、此の假屋から大磯の女郎を名差で招かれしゆゑ、少將さんや新造衆と共々爰へ參りましたわいなあ。

十郎　（これを聞き思入あつて、）大方さうであらうとは、此の祐成も推量なせど、無沙汰にしては後々にて嘸や情なく思はんと、始終を明かして聞かせたるが、今となつては我が過り。

龜鶴　さ、それゆゑ奧へ通らしやんして、少將さんや新造衆に、逢うてお歸りなさんせいなあ。

十郎　さういふ譯では、猶以て、此の樣な裝では逢はれぬわいの。

龜鶴　これはしたり、祐成さんのお詞とも覺えませぬ、そりやもうお若い御了簡では、世に落果てたお

身裝で立派な席へ列なる時は、どうやら肩身が狹いやうで耻とお思ひなさんせうが、そこは心の持ちやう一つ、假令身裝は賤しうても心に錦を着て居れば、綺羅を飾りて心の内の襤褸に劣りしお方より一倍立派に見えますぞえ。その目利きなら失禮ながら、遊里の諸譯も知りぬいて二階を稲かり世話好きに、多くの客の善惡を見分けて來たる生業がら、何とさうではござんせぬか。

十郎　なるほどそなたの心では、さう思ふのは尤もながら、これには段々。

龜鶴　はて、その入譯も何やかや、聞いて居るゆゑ呼留めました、それをとやかう言はしやんしては、ちとお心が違はうぞえ。

十郎　なに、心が違ふとは。

龜鶴　思ひ入る知るべの山の高ければ、奥の深さを尋ねこそすれ。

十郎　心あり氣な、その詠歌。

龜鶴　招待さるゝを幸ひに、奥へ通つて寢所の間取り、とつくと見屆けおく時は、お爲めにならぬ事はあるまい。

十郎　や。

龜鶴　耻も耻辱もお望みをかなへし上は雪げる道理、それゆゑ心が違ひませうと、言うたは無理ではご

ざりますまい。

十郎　そんなら、もしやあの虎より、

龜鶴　頼まれしゆゑこの品を。(ト繪圖を出す、十郎見て、)

十郎　や、こりや敵の、(ト大きく言ふを、)

龜鶴　あゝもし、色文が、(ト押へ、十郎の上へ笠をかざすを道具替りの知せ、)濡れますわいなあ。

ト龜鶴はあたりへ氣を配る、十郎は繪圖を見る事よろしく、此の模様菊慈童のちらしにて此の道具廻る。

(假屋廣間の場)──本舞臺三間の間一面の平舞臺、上下折廻し塗骨障子屋體正面木瓜の紋散しの襖、同じく紋散らしの幕を張りたる大欄間、舞臺花道とも薄縁を敷詰め、總て工藤の假屋廣間の模様よろしく。眞中に工藤祐經羽織衣裳好みの打扮にて褥の上に住ひ盃を取り上げ居る、側にかたふ振袖新造にて住ひ、手越長柄の銚子を持ち酌をして居る、上手に以前の景高少將を側へ引附けて居る、下手に大藤内成景着流し差貫にて、おきつ振袖新造のこしらへにて側に住ひ、前に干肴を入れし白木の折、三寶に三ツ組の盃などよろしく並べ、後に仲居一二三四居並び、此の模様浮いた合方にて道具留る。

景高　今日は測らざる御馳走に相成り、梶原景高大醉の仕つた。
成景　此の大藤内成景も、御丁寧なるお持成に預り、大銘酊を致してござる。
祐經　景高殿の折角の御入來、差上げるものもござらぬが、日頃よりお馴染の化粧坂の少將が參り合せて居つたゆゑ、お側にあつてお相手いたすが、此の祐經のお持成でござる。
かな　ほんに日頃から梶原さんが御執心の、少將さんがお側においでなさんすゆゑ、
手越　常には怖い顏をして、笑うたことのない人が、にこ〳〵してござんすわいなあ。
少將　わたしやそれゆゑ持病の痞が、差込んでならぬわいなあ。
きつ　あゝもし少將さん、その樣なことを言はしやんして、お床急ぎはなりませぬぞ。
成景　扨は少將は梶原氏へ、持ちかけると相見える。
仲一　ほんに羨ましい、
皆々　色男さま〳〵。
景高　あゝこれ、おだてゝくれるな、門違ひぢやわえ。
祐經　その評判のよいところで、景高殿お差し申すぞ。
景高　これは近頃迷惑千萬。

ト景高盃を引受け、手越酌をすることよろしく、爰へ下手より以前の諸士四人出で、

喜藏　はッ、我が君へ申し上げます。只今假屋の門前に怪しき奴が徘徊なし、内を窺ふ樣子ゆゑ、

權平　我々共が早くも見咎め、段々詮議いたせしところ、河津の三郎祐泰が遺兒の十郎祐成、

源八　見る影もなき姿ゆゑ、君の御前へ出る事は許してくれよと立去る折柄、

大助　お相方の龜鶴が參り合せて呼戻し、御對面の儀願ひまするが、

喜藏　あまり身裝が見苦しければ、

權平　追返して遣りませうや。

源八　但しこれへ通しませうや、

大助　御賢慮うかゞひ、

四人　上げまする。（トこれにて祐經思入あつて、）

祐經　なに、祐成が我が假屋の、前を徘徊いたせしとな。

四人　左樣にござりまする。

祐經　むゝ。（トこなし、成景、景高思入あつて、）

成景　それぞ油斷のならざる大事。

景高　こりや御對面はかなひますまい。
成景　そのまゝ彼れめを、
兩人　お歸しなされい。
祐經　いや〳〵、歸すところにあらず、苦しうないこれへと申せ。
成景　すりや祐成を。
兩人　此のお席へ。
祐經　なにか仄に承はれば、此の祐經を敵とねらひ、心得違ひを致すとやら、左樣な事のないやうに、
是れへ呼び入れ說き諭さん。苦しうない通してよからう。
四人　畏まつてござりまする。（ト此の時花道の揚幕にて、）
鶴鶴　そのおいでには及びませぬ。祐成さんはわたくしが、それへお連れ申しませう。
少將　さういふ聲は、
女形
皆々　鶴鶴さん。
ト誂への鳴物になり、花道より以前の鶴鶴先きに、十郎を連れて出來り、十郎は花道へ控へる。鶴
鶴舞臺へ來りよろしく住ふ。祐經十郎を見て、

祐經　ほゝお、珍らしや十郎どの、絶えて久しき一家の對面、遠慮に及ばぬ、さゝこれへ〳〵。
龜鶴　祐經さんのお許しゆゑ、そこは端近、
女形皆々　先づ〳〵是れへ。
十郎　然らば御免下されい。（ト十郎舞臺へ來り、下手へ住ふ。）
祐經　いやなに、十郎どの、御身の舍弟箱王どのには、いつぞや箱根の別當方にて對面いたせし事ありしが、一萬どのにも成長なし祐信どのゝ養子となり、男なりせし面ざしに對面いたすは今が始めて、親子とて爭はれぬ、河津どのに生寫し、よくぞ堅固で居られしな。
十郎　手前に於ても祐經殿の、麗しき御顏拜しまするも今が始めて、祝着至極に存じまする。
景高　（前へ進みて、）これは〳〵十郎どの、手前は梶原平次でござる。御身の御舍弟時致どのにはお出合申せし事もありしが、お手前に面會いたすは今日が始めてゆゑ、これを御縁に此の後は、手前が方へもお尋ねなされい。
十郎　すりや其許が景高殿よな、忝なきそのお詞、以後はお見知り下されい。
成景　又某は備中の國、吉備の宮の神職にて大藏内と申すもの、以後はお見知り下されい。
十郎　その儀は拙者も御同意でござりまする。（ト挨拶よろしく、少將思ひ入あつて前へ出で、）

少將　そんなら最前時致さんが、ござんしたとやら聞きましたが、こしらへ事ではなかつたかいな。
祐經　なに、時致が參りしとな。
十郎　あいや、弟時致は旅宿へ殘し、某一人他出いたしてござりまする。
手越　このお座敷に虎さんが、ござんしたことならば、嬉しう思ひなさんせう。
きつ　いつぞやから御病氣で、引籠つてござんすゆゑ、廓へお殘りなさんしたゆゑ。
手越　後にてお聞きなさんしたら、本意なう思ひなさんせうわいなあ。
祐經　（思入あつて、）十郎どのにも大磯にて全盛をめさるゝとやら、なにも一興馴染めの、お話しを承はらうか。
十郎　痛み入つたる其のお詞、零落なせし我々が廓通ひの全盛のと、思ひもよらぬ儀でござる。
景高　いや〳〵さうは脫けさせぬ、御身の御舍弟時致どのすら廓へ通つて、これに居る少將とは深い仲、
成景　兎角日蔭の部屋住などは、日に燒けぬかして色白く、脊丈もほつそりして居るゆゑ、女もかれこれいたす筈。
善藏　また傾城と申すものは、大盡客を忌み嫌ひ、
權平　貧乏じみた男には、情を掛けて惚れるとやら、

源八　たとへ女郎に嫌はれても、貧乏じみた形裝は、
大助　いたしたくない、
四人　ものでござる。
少將　ても、口の惡い御家來衆、
かな　そのやうな事言はんすと、
きつ　烏が灸をすゑるぞえ。
手越　ちとおたしなみ、
女形皆々　なさんせいなあ。
祐經　なには格別一家の對面、丁度幸ひ犬坊丸、是れへ呼出し引合さん。やあ〱犬坊丸、はや參れ。
犬坊　はあゝ。（ト上手より犬坊丸若衆鬘羽織袴にて出來り、よろしく住ふ。）
祐經　いやなに、十郎どの、これなるはお聞き及びの犬坊丸と申すもの、拳未熟でござれども後學の爲めにもと狩場の供に召連れしが、折柄のこの對面、祐經に成り代り行末お世話をお頼み申す。
十郎　扨は其れなる公達が犬坊どのでござるよな。曾我十郎祐成でござる、以後はお見知り下されい。
祐經　それ、御挨拶をいたしてよからう。

犬坊　此の末ともにお引立て偏にお願ひ申しまする。（ト見物へ辭儀をなす。――この見物へ辭儀をなすとあろは、初演當時の役者口上代りに述べしによる、校訂者。）

祐經　こりや龜鶴、盃これへ。

龜鶴　合點ぢやわいなあ。（トこれより對面三重へ三保神樂を打込み、十郎きつとなり、）

十郎　はて心得ぬ。あの太皷は、

景高　あれぞ御領の假屋にて、山神を勇めの爲め、

成景　妖魔を拂ふ卷狩の、前日奏す三保神祭、

トこの內龜鶴有合ふ三寶を祐經の方へ持行く、祐經土器を取上げ、手越酌をしてよろしく乾し、

祐經　十郎どの、差し申すぞ。

十郎　頂戴いたすでござりませう。（トよろしく土器を乾し、返杯をしようとするゆゑ、）

祐經　あいや、其の盃は犬坊へ、十郎どのよりお差し下され。

十郎　左樣ござらば仰せに任せ。（ト龜鶴取次いで犬坊丸へ差す。）

犬坊　頂戴いたすでござります。（トよろしく乾し、十郎へ返杯する。十郎乾して、）

十郎　いざ祐經殿、お納め下されい。

祐經　然らば目出度く納盃いたす。（ト土器を納める、これにて鳴物いつぱいに納り、祐經こなしあつて）いやなに十郎どの、いつぞは御邊に對面なし尋ね問んと存ぜしが、斯く改めて親族の杯なせし上からは、今は憚ることもなし、何故あつて祐經を父の敵と狙はるゝ、その心腹が承はりたい。

十郎　何と仰せらるゝ。

祐經　奥野の狩の歸るさに、角力の遺恨で御身の父河津の三郎祐泰には、股野の五郎景久が手段に陷り最期を遂げしを、過ぎし所領の遺恨により此の祐經が討ちしかと、疑惑を生じ此の年月、敵とねらひめさらうがな。

十郎　何しに我々兄弟が。

祐經　いや、お隱しあるな十郎どの、これに御邊は覺えがござるか。

ト懷中より誂への矢の根を出し投げてやる、十郎取上げ見てびつくりなし、

十郎　こりやこれ、信州三原野にて。

ト兩人ちつと顏見合せ氣味合の思入。

祐經　しかも昨年四月下旬、鎌倉殿のお供にて、心ならずも殺生を、奈須野に於て御狩の折、

十郎　淺間の麓奥深く入間の原を狩盡し、又も御狩を信濃路の月の名所も三原野にて、

祐經　つゞく霖雨に久方の、旭の光雨あがり、

十郎　三浦殿より借受けし、駒に跨がりこゝかしこ、

祐經　獲物を求め深入りなし、狩出す鹿のあと追ひかけ。

十郎　一二爭ふ弓張りの、矢たけ心に駿足を、

祐經　乘り損ぜしかお手前は、落馬いたして遠近の、

十郎　目ざす獲物を見失ひ、

祐經　切つて放せし一筋の、

十郎　ねらひは外れて此の矢の根、

祐經　慥に落手いたした祐經。

十郎　寶の山に入りながら、

祐經　望みを失ひ無念なか。

トこの内十郎無念の思入にて前にある干肴の入りし折を取つて、矢の根にて突裂く事よろしく。祐經思入あつて、

さもさうずさもありなん。然し狙ひし獲物ですら落馬いたして失ふ程武運拙きおこと等兩人、及

ばぬ望みを立てんより、思ひ止まり祐經を、一家と賴みて其の身を立て、父の家名を興されよ。

景高　祐經殿の仰せの如く、敵にあらぬ一家中、それを恨むは其の意を得ず、縱令又敵であらうとも一臈職の大々名、忍びの步行に供廻りが百騎二百騎附添へば、僅か二人の兄弟で討たうなどゝは及ばぬ事、左樣な望みは思ひ切り一家の緣に取縋り、鎌倉殿のお覺え目出度き祐經殿の執成しにて一旦潰れし河津の家を、再興なすが上分別、父への孝と申すもの。

成景　此の大藏內成景などは、七年以前に所領に放れ貧苦いたしてをつたるも、一臈職のお執成しにて舊領安堵となつたる悅び、お禮の爲めに罷り出で此のお持成にあづかるとは、これ立寄らば大樹の蔭、他人ですらも其の如く、まして一家の端くれにて立寄らざるは大きな損、惡い事は申さぬから、此の後共に御當家の袖に縋つて十郞どの、出世の蔓に有りつきめされ、慾を知らぬは愚でござる。

喜藏　こりや成景殿の言はるゝ通り、身貧に暮らしてこれ迄に、無駄に月日を送るより、

權平　多年の恨みさつぱりと、水に流して折々は、お鬚の塵をとりくに、

源八　兄弟揃つて尻尾を振り、お臺所へお廻りなされい、鹽鰹の頭ぐらゐはくれてもやらう。

大助　見るから裝もそがくと、貧乏じみた十郞どの、見りやあ見るほどみぢめなざまだ。

喜藏　左樣でござる。

皆々　はゝゝゝゝ、（トよろしく嘲笑ふ。この內十郞祐經の顏を見詰め無念のこなしよろしくあつて、）

十郞　ちえゝ、弟が後にて恨まずば、

祐經　やあ。

十郞　さあ、弟が今日同道なら直ぐに此の場で金打なし、祐經殿をお恨み申せし身のあやまりを謝せんもの、兄弟心を一致なし立てし志願にござるゆゑ、弟たりとも無沙汰にて望みは思ひ止まれず、さはさりながら手前に於ては最早疑惑の念もなく、祐經殿をお恨み申す所存は思ひ止まつてござる。

祐經　その心腹を承はり此の祐經も先は祝着、かゝる事共根をたゞし酒宴の席にて申し出すは近頃女々しき事ながら我が亡き後はおこと等を、犬坊丸が後見とも賴みたく存ずるゆゑ、時致どのへも此の由を委細具さに傳へられよ。

十郞　仰せなくとも旅宿へ歸り、時致にも申し聞かせ、何れ弟諸共にお詫に罷り出づるでござらう。

祐經　必ず相待ち申すぞ。（トこの時龜鶴前へ出て、）

龜鶴　お二人さんのお話しに、實が入り過ぎて御酒の座も、どうやら白けた樣子ゆゑ、斯う打ち解けし上

からは、なにも陽氣に、なあ皆さん、
少將　ほんにこれから皆さんの、思ひ〳〵の藝盡し、
手越　梶原さんの謠曲も、笛や太鼓で面白う、
きつ　打合せやらお好みに、狂言詞のお慰み、
一　聞かず座頭や萩大名。
二　鈍太郎さんのお手車、
三　顏はまつくろ墨塗りの、
四　お隱し藝をお出しなされて、
かな　ちと御鬱散、
皆々　なされませいなあ。
祐經　承はれば祐成どのにはだいぶ舞が上達とやら、よき折柄の面會ゆゑ、此の場の肴に所望いたす、
　何と舞うては下されぬか。
十郎　折角のお望みなれど、なか〳〵もつて舞などゝは、思ひもよらぬ儀でござれば、
龜鶴　これはしたり祐成さん、いくらお隱しなさんしても廓中での評判ゆゑ、一指舞うて下さんせ。

少將　その代りには祐經さん、御所望するは鼓の調べ、
かな　又小鼓や笛太鼓、
きつ　囃子の役はわたし等が、
祐經　われも拙き業ながら、所望に任せ、鼓を是れへ、
仲一　さあ〱お立ち、
皆々　なさんせいなあ。
十郎　然らば未熟は御免候へ。

ト　これにて仲居四人鳴物を持て出で、皆々の前へよろしく並べる、十郎扇を持ち前へ出で、

謠曲 〽飛たつばかり有明の、夜る晝となき樂しみの、（ト是れより下座へ取りて、）〽盡ぬ泉は白銀の西に三千丈の富士を作り、合〽黄金の日輪出されたり、〽其外七寶充滿して裾野にうつす酒の池肉の林の君達が、伊達の衣裳を喜瀨川や夕べの雲の化粧坂、〽玆に假屋の酒むかふ榮華にも榮耀にも、實に此の上やあるべき。

ト是れを地へとり邯鄲の舞になり、祐經は大鼓、龜鶴は小鼓、少將は笛、手越は太鼓にて囃し、十郎は舞に事寄せ四邊へ眼を配り、假屋の隅々へ心を附けることよろしく、成景はこれへ眼を附ける事よ

ろしくあつて舞納める。

諸士四人　やんや〳〵。

少將　いつもながら祐成さんの、

かな　面白い舞の手振、

きつ　久し振にてわたし等も、

手越　よい樂しみを、

女形皆々　いたしましたわいなあ。

十郎　酒興の上ゆゑ足許も、しどろに亂れ未熟の一指、面目次第もなき仕合せ。

祐經　なか〳〵以て左にあらず、流石廓で名も高く舞の手練を得られしやら、眼の配り常ならず、

十郎　や、

祐經　はて廓舞と申すものは、行き屆いたるものぢやてなあ。

十郎　測らず參つて思はぬ長座、いざ〳〵お暇仕らん。

祐經　然らば必ず再會を。

十郎　弟時致諸共に、お禮に參上仕つる。

成景 とはいへ、此のまゝ、(ト立ちかゝらうとするを、)
祐經 あこれ、(ト目顔で押へ、)犬坊丸見送りいたせ。
犬坊 はッ。
十郎 然らば何れも、御免下され。
ト唄になり、十郎皆々へ會釋なし思入あつて花道へはひる。此の後より犬坊丸先きに諸士四人附いて花道へはひろ、成景、景高思入あつて、
景高 いやなに祐經殿、ちと密々にて其許に申し入れたき儀がござれば、
成景 手前も左樣存ずる所、やがてこれにて申し出さば、景高殿と御同意ならん。
祐經 何か仔細は存ぜねど、密事とござれば龜鶴始め、廓の者は殘らず次へ。
龜鶴 そんなら皆さん、諸共に、
少將 是れでやう〳〵景高さんの、
景高 や、
女
皆々 さあ、ござんせいなあ。
ト唄になり、女形皆々奧へはひろ。跡に祐經、成景、景高殘り、祐經四邊へこなしあつて、

祐經　して祐經に、御內談とは。
景高　餘の儀でござらぬ、十郎めが只今の舞の立振舞、假屋の詰々此處彼處心を附けし眼の配り、
成景　拍子に紛らし床下に若し要害もあらんかと、足音高く踏みなせしは何とも以て心得ず、
景高　舞は則ち邯鄲の、謠に寄する扇の一指、
成景　君の榮華を盧生にたくらべ、夢と覺め行く五十年、
景高　及ばぬ事とは知りながら、不意を窺ひ此の假屋へ、
成景　兄弟連立ち今晩にも、亂入なさんも測られず、
景高　こりや、御寢所を人知れず、
成景　お替へなさらずば、
兩人　なりますまい。
祐經　されば疾くより手前に於ても斯くと推察いたせしかど、又退いて考へ見れば所領の遺恨に祐泰を手段をもつて討せしは武威を貫く我が計、殊更當今鎌倉殿のお覺え目出度き祐經を、微運極まる兄弟二人父の敵と狙ふなどゝは、世俗にいへる螳螂が斧、夫の蜘蛛が網を張り鳳凰を待つに等しく、畫餠となるに心附かぬは、近頃不便な奴でござるテ、ハヽヽヽ。

景高　貴殿の大きな目から見れば、彼等は蜘蛛か蠅同然思召すのは御尤もなれども、油斷大敵なれば、小敵と見て侮るなと古語もござれば、御寢所をお替へなさるが上策かと、憚りながら存じ申す。
成景　今日迄大藤內、全く河津の三郎を貴殿の策にて討たせしとは心附ずに罷在りしが、今の仰せを承はれば一寸の蟲にも五分の魂、彼等は早々人知れず根を斷つて葉を枯らさずば、枕を高くはお寢れますまい。
祐經　龍は眠りて本體を顯はす、又人は醉うて本心を顯はすといへり、酒興に乘じて成景殿に討たせし實をお聞かせ申せば、其の御配慮は尤も至極、仰せをもどくも不本意なれば、寢所は今宵替へるといたさう。
景高　すりや拙者等が心添へを、
成景　祐經殿にはお用ひあるとか。
祐經　如何にも。
景高　それ承はつて、
成景　安堵いたした。（ト雨車になり、）
祐經　さはさりながら恒河沙は盡き、螢の火にて須彌は燒くとも討るゝ事のあるべからず、必ず氣遣ひ

したまふな。

景高　大丈夫なる其のお詞、此の魂を鎌倉殿も、

成景　お見拔きありしゆゑにこそ、富士の御狩の總奉行、

祐經　役目首尾よく濟む上は、遠からずして兄弟は、

景高　自滅さするか、但し又、降り出す雨に啼き盡し、

成景　やがて其の身で血を吐くか、

兩人　どの道死出の、（ト思はず大きく言ふ。）

祐經　あこれ、（ト押へる、雨車 時鳥笛になり、）無常の鳥と、ふむ。

ト思入、この内よき程に上手屋體の内より以前の少將伺ひ居て、此の時祐經と顏見合せ双方障子を立て切るを木の頭。

はゝゝゝゝ、（ト此の見得よろしく、雨車。時鳥笛にて、）

ひやうし　幕

曾我旅宿の場

三幕目

〔役名――曾我十郎祐成、同五郎時致、鬼王新左衞門、富田團三郎、百姓與九郎、勢子づぶ六、女房おさご。〕

（曾我旅宿の場）――本舞臺三間の間中足の二重、藁葺の庇竹簀の本緣附、上手一間反古張の障子屋體、いつもの所竹簀戸の門口、是れへ兵士旅宿といふ札を掛け、二重の正面暖簾口、上手一間押入、下手鼠の破れ壁、門口の外一面の藪疊、總て富士の裾野百姓家の模樣よろしく。爰に與九郎ヤツシ裝百姓の打扮にて、おさご在鄕嚊のこしらへにて抱子を抱へ立ちかゝり居る。これを新左衞門着流しにて留めて居る、此の模樣在鄕唄赤子笛にて幕明く。

與九
さご　さあ〳〵、立つて貰ひませう〳〵。

新左　其のお腹立は御尤もだが、先づ〳〵下に居て下さりませ。

與九　いや〳〵下には居ませぬ、わしも立つて居るから、こなた衆も立つて下せえ。

新左　そのやうな事をおつしやらずと、御主人の留守なれば何卒御宥免をお願ひ申す。

さご　その御宥免も腹散々、耳にたこの入るほど聞き飽きました。

與九　さあ立つとも家賃を拂ふとも、二ツに一つの返事をさつしやれ〱。
新左　いやもう、段々と延び〱になりましたる儀でござれば、御夫婦の衆に如何樣に申されても是非ないこと、然し今日か明日の中には是非國元から參ります金子の當がござりますれば、決して御損はかけませぬ、どうぞ明日午刻頃まで御宥免を願ひまする。（トこれにて與九郎おさご下に居て、）
與九　これ鬼王殿、さて〱こなたも大概に嘘をついておかつしやれ、そも此の月の中旬から今日の日まで、人の家をたゞ借りて居て、やれ國元から金が來るの、明日は入る道があるのと、爰までござれに一月足らず、もう富士の卷狩も明日一日、明後日は假屋は殘らず引拂ひ、お立ちになるぢやござらぬか。
さご　さうとも〱新田の田吾十やくねツ端の仁作の家では勢子衆に家を貸し、宿錢は前拂ひでてんきにいくらと取つた上、夫婦暮しで喰るだけは炊出しのお餘りを貰つて喰れば家では炊かず、洗濯をしてやつたといつては濁酒の一杯も貰つて呑むから、狩場中は一文いらずで暮しが附き、年中狩場があればよいと悦んで居るとの話し、
與九　それに引替へわしの家を貸して進ぜたこなた衆は、宿錢もよこしはせず炊出しの飯も剩しはせず、酒といつたら今日が日まで遂に買つたこともなく、人を賴んだら錢がいると、洗濯は自身でする

し、餓鬼さへある夫婦三人の家へ居候。おれが家を明渡して何で貸したか分らない。

さご　貧乏鬮を引いたと思つて諦めも附けようけれど、おあしが無ければ上手を遣ひ、疾うからわたしの言ふ事でも聞いてくれゝば我慢も仕ようが、四角張つた顔をして丸い物を持つて居ねば、もう勘辨がならぬわいの。

與九　それだによつて、たつた今、

兩人　立つて貰ひませう〳〵。

新左　いやもう如何やうに申されても致し方はござらぬが、何を申すも主人が留守ゆゑ。左樣なら斯うなされませ、暮六ツの鳴るまで、どうぞお待ち下さりませ。

與九　日の暮れるまで待てといふのは、夜逃げでもする積りか。

新左　いえなか〳〵左樣な譯ではござらぬ、暮れ六ツまでには御主人方もお歸りでござりませうから、左樣いたせば委細を申して、假令金子が出來ませずば質物をお預け申してなりと、國許から金子の參るまでお待ち申しまする。

與九　質を預けるといつた所が衣類とてもない樣子、あるものは裏の雜部屋に繋いであるじや〳〵馬ばかり、あれを押付けられてたまるものか、さあ〳〵早く立つて貰ひませう。

さご　いえ〳〵それでは今日が日までおいたのが無駄になるから、それよりやつぱり質でも何でも、踏めるものならお預りな。
與九　なるほど、それもそんなものか、そんならきつと暮れ六ツまでに、挨拶をして貰ひませう。
新左　相違なく拙者めが、御挨拶に出づるでござる。
與九　やれ〳〵馬鹿げた話しだわえ。（ト門口へ出ろ、おさご跡に殘りて、）
さご　もし鬼王さん、妾の頼みを聞いてくれるなら、家の人はどうでもくるめて、此樣催促はしないわね。
新左　何をぐづ〳〵言つて居るのだ。（トこの內赤兒泣き出す。）
さご　えゝやかましい、よく泣く餓鬼だ。
　　ト子をいぶり附けながら在鄕唄にて兩人花道へ入ろ。新左衞門後を見送り門口をしめ思入あつて、
新左　御本望が遂げたいばつかり、困ると知つて主從四人狩場のお供はして來たが、元よりたしなき路用ゆゑ、旅宿を借りた宿賃も今に於て拂はぬゆゑ、やかましくいふも尤も、世が世であらば假屋をしつらへ、諸大名と諸共に幕打ち廻し今日などは、狩場の休日幸ひと世の雜談でも語り合ひ、笑ひを催し居ようもの、貧にとぢれば土民にまで惡口されて今の仕儀、これを思へば世の中に四百四病の病より、貧程辛きものはないなあ。

ト やはり在郷唄ばた〳〵になり、花道より團三郎出來り、直に舞臺へ來り簀戸の内へ入り、無念の思入よろしく、新左衞門團三郎を見て、

それに居るのは團三ではないか、何をいたして居る。(トこれにて團三郎新左衞門を見て)

團三 鬼王殿無念、口惜しうござる。(トこちらへ來り下に居る。新左衞門合點の行かぬ思入にて、)

新左 口惜しいとは如何なる譯ぢや、はゝあ、こりや何か工藤の家來にでも出會し、喧嘩でも仕掛けられたか。

團三 いや〳〵左樣な譯ではござらぬ、十郎樣が腑甲斐なく、何時の程にかお心替り、敵の工藤に隨身なされた。

新左 何と申す。(ト合方きつぱりとなり。)

團三 五郎樣のお供をなし、畠山殿の假屋へ參り供待ちをして居たところ、和田樣がお見廻りのお歸りがけにて拙者を見掛け、やい團三、そちも和田家の附人ならずや、なぜ祐成に諫めを入れぬと思ひもよらぬ御立腹、如何なる仔細かと伺ひしに祐成樣が工藤の假屋へ色香に惹かされ慕ひ行き、傾城遊女にそゝのかされ現在敵の祐經に、媚び諂うてござるといふこと、早くも知れて和田樣が時致參つて居るとあらば、右の由を申し述べんと奧へお入りなされしゆゑ、我も後より推參なし

時致様にと思ひしが、先づそれよりは旅宿へ歸り、御身に相談せんものと立ち歸つてござるわいの。

新左（これを聞き思入あつて）はゝあ、それで分つたあなたの御様子、最早明日一日にて狩場もしまひと相成るに、うから〳〵と此の程より敵を討つべきお心なく安閑としてござるのは、深き御所存あつてかと思ひ過せし我が過り、扨はいよ〳〵貧苦に迫り御不自由勝なる所より、意地も恥辱も打捨てゝ一家の誼に祐經に、諂ふ心にならしやつたか。

トきつとなる。これにて團三郎きつとなつて、

團三　さうだ。（ト外へ行きかけるを、）

新左　こりや團三何れへ行くぞ。

團三　工藤の假屋へ押掛けて、祐成様へ御異見を、

新左　いや〳〵それは短慮なり、時致様も御出あればお歸りありし其の上にて、又如何やうとも相談なさん、心急かずとまあ待ちやれ。

團三　それだといつて。

新左　はて、まあ下に居やれといふに。

ト無理に下に居させる。これにて團三郎無念の思入よろしく。此の時暮六ツの鐘鳴る。此の内新左衞門行燈を點すこと。又在郷唄雨車になり、花道より前幕の十郎出で、後よりづぶ六勢子のこしらへにて。ぐでんに醉ひたるこなしにて附添ひ出て花道にて、

十郎 あゝこれ〳〵御家來衆には、最早これまで參つたれば、見送りには及ばぬ程に、早く假屋へ戻つたがよい。

づぶ いや〳〵、何でもこなたの家まで、送つて行かにや氣が濟まねえ。

十郎 でも其のやうに醉つてをつては、却つて此方迷惑いたす。

づぶ 何で醉つて居るものか、此の通り大丈夫だ。(トひよろ〳〵する。)

十郎 あゝこれ危ない、困つたものぢや。

ト右の合方にて舞臺へ來る。づぶ六ひよろ〳〵と先へ駈拔け、

づぶ おい、爰がこなたの家か。

十郎 如何にも、これが旅宿でござる。

づぶ お歸りだ〳〵。(ト是れにて新左衞門門口へ來り、簀戸を明け祐成を見て)

新左 これはお歸りでござりまするか。

づぶ　お歸りだから、お歸りと言ふのだ。
　　ト門口より内へはひる。十郎内へ入りよろしく二重へ住ふ。新左衞門團三郎づぶ六を見て、
新左　して、此の者は、
十郎　工藤殿の家來なるわ。
團三　扨はいよ〳〵。（ト立寄るを。）
新左　あこれ、（ト押し留め、）左樣にござりまするか。
　　ト思入あつて下に居る。づぶ六やはり醉ひたる思入にて下に居て、
づぶ　これ酒を持つて來ねえか。何をぐづ〳〵して居る。早くしろ〳〵。
團三　えゝきり〳〵と歸らぬか。（ト引立てようとするを振拂ひ。）
づぶ　えゝ、何をしやがる、もういつぺい呑まねえうちは、誰が爰を動くものか。
　　ト醉倒れて寐るゆゑ、團三郎むつとして、
團三　いゝうぬ、其の儀なら、（ト又立掛らうとするを、）
十郎　こりや團三、捨ておけ〳〵。
團三　それだと申して。

十郎　はて、捨ておきやれ。（トきつと言ふ。新左衞門この體を見て思入あつて、）

新左　もし十郎樣、あなた樣には何ゆゑに、年頃不和なる工藤殿と、お交りをなされますぞ。

十郎　はて何ゆゑとは知れたる事。これ迄兄弟心得違ひで祐經殿を恨みしゆゑ、吳越の思ひに打過ぎしが、今日雨中のつれ〴〵に工藤殿の假屋の前を通り掛りて呼入れられ、祐經殿に對面なし段々樣子を承はれば、父の敵とねらふは僻事、敵といふは股野ノ景久、これも北國の戰ひに討死いたしてしまへば、敵とねらふ相手もなく身の過りを詫入つて、斯くの如く馳走になつてゐつた。

　ト醉うたる思入にて言ふ。これにて新左衞門むつとなし、

新左　もし十郎樣、えゝお前樣はなあ。（ト合方になり。）如何なる天魔が魅入りしか、いつ其の樣な愚にならつしやりました、過ぎし所領の遺恨に依り御親父樣を人知れず、祐經殿が討たせし事は和田北條を始めとして心ある方々は皆御存じでござりまするぞ、それに何ぞや祐經が佞辯に惑はされ、股野が仕業と思はつしやるとは、腑甲斐ない御了簡ぢやなあ。

十郎　そりやはや、手前も思はぬではない僞りとも存ずれど、假令敵であるにもせよ、當時鎌倉一﨟職威勢盛んの祐經殿へ取入らざるは大きな不覺、それゆゑ股野が仕業なりと景久へ罪を塗附け復讐の儀は思ひ止まる。これぞ世に言ふ死ぬもの貧乏、これからは祐經殿を力と賴み屋敷へ立入り媚

び諂ひ、榮耀榮華に暮すが當世、とんと重荷をおろしたやうで、あゝ好い心持ちに醉うた〱、とんとたわいはないわいなう。（ト醉ひたるこなしにて横に寐る。新左衞門團三郎思入あつて、）

團三　いや呆れたものだ、これ若旦那、いやさ十郎樣、そりやお前樣御本性でおつしやりますか、御主人河津樣が御最期ありし其の砌はまだ幼なきお二人樣、其の頃よりして父御の敵、神佛を祈つて待ちに待つたる十八年の今となつて、臆病未練な其のお詞、それであなたは草葉の蔭の親御樣へ御孝道が立ちますか。

新左　もし若旦那、どうぞお心飜へし御本心にお成りなされ、御兄弟打揃うて目出たう本望お遂げなされ、名を萬天に揚げるお心になつて下さりませ、時致樣はあの通り一徹なる御氣質、最早敵討も今日か明日かと待つてござるのに、あなたが左樣な事おつしやつてどうなりませう、もし若旦那、十郎樣、もし、（ト思入あつて言ふ。この内祐成高鼾にて寐てゐる。）この樣に申し上げても、正體のない御樣子。

團三　こりやもう、いつそ、時致樣へ。

新左　はて、まあ身共に任せておきやれ。

ト十郎醉つたるこなしにて扇を額へ突いて睡りゐる。新左衞門團三郎思案の思入。やはり在郷唄にな

り花道より以前の與九郎おさご出來り、

與九　あんないけずるい奴はありはせぬ。

さご　ほんに〳〵これだから、わたしが言はぬ事ではない。（ト兩人舞臺へ來り、門口より、）

兩人　さあ〳〵立つて貰ひませう〳〵。（トがなり込む。新左衞門兩人を見て、）

新左　只今相談最中でござれば、今少々御宥免下さい。

與九　相談も何ももう聞かぬ。先刻暮六つを打つたのが、そなたの耳へははひらぬか。

さご　挨拶するといつておき、埒が明かずば明かぬやうに、言譯にでも來はせいで、

與九　今までずらしておいたからは、もう一寸の間も待たれない。

兩人　さあ〳〵。立つて貰ひませう〳〵。（ト此の中づぶ六寐て居ながら。）

づぶ　もう一杯呑まぬうちは、立たねえ〳〵。（トこれにて與九郎びつくりして、）

與九　えゝいつぺい呑ませろもねえものだ。宿錢も拂はねえで、人の家を一月足らずたゞ借りてゐる太い奴。

さご　疊建具の損料から世帶道具や蒲團の料錢、よこさなければちつとの間も、おく事はなりませぬ。

兩人　立つて貰ひませう〳〵。（トこれにて十郎顏を上げ、兩人を見て、）

十郞　これ〳〵御夫婦の衆、少ずともにお案じあるな、今日よりして工藤殿といふ後楯の出來たる我々きつと御損は掛け申さぬ、今少々お待ち下されい。

與九　えゝ損は掛けぬもよく出來た、もうくどう〳〵といふに及ばぬ。さあ〳〵、立ち退いて貰ひませう〳〵。

さご　それともたつてこゝに居たくば、何ぞ金目な品物を、金の抵當に預りませう。

十郞　いや、其の質物がある位なら、これまで延び〳〵には仕らぬ。

與九　それ見たことか、預ける品もねえくせに。

さご　それで大概相場がわかつた。

與九　所詮たゞでは動くまい。

さご　一人々々に、

兩人　引ずり出して、

ト兩人へ立ちかゝらうとするを、新左衞門團三郞留める。與九郞おさご是れを突退け十郞へ立ちかゝる。此の內始終赤子笛にて、十郞懷中より小判を一枚出し與九郞へ差附ける。與九郞手に取り見てびつくりなす。

十郎　これを持つてお歸りなされ。

與九　思ひがけない小判で一兩。

さご　どうしてそれを。

十郎　武士たる者は肌付の金子を嗜み所持いたすは、まさかの時の要害ながら最早望みも今宵を過さず、

新左
團三　や、

十郎　いやさ、最早是れから後楯に、祐經殿が助力をすれば、其の肌付にも及ばぬこと。

ト與九郎おさご思入あつて、

與九　いや流石は武士は武士だけに嗜みのいゝ此の一兩、損料代から宿賃を一々勘定したならば、ちつと不足な所もあれど大負に負けてやらう。（ト兩人門口へ出て、）然し嚴しい催促も團三々々と鬼王つけ

さご　五郎と十郎取る氣でかゝり、一兩（臈）職で追つ拂ひ、

與九　取れぬと思つた其の金も、思ひ掛けなく取れるといふは、

さご　南瓜の亭主にわたしは子持ち、

與九　子持ち（今年）は南瓜が當ると見える。

ト在郷唄になり兩人花道へはひる。跡新左衞門團三郎思入あつて。

新左　力と頼みし十郎樣の、お心が替りし上からは、
團三　頼み少なき世の中に、千辛萬苦も水の泡、
新左　たゞ此の上は時致樣の、お歸りを待ち御相談、
團三　まだしもそれが一つの賴み、
新左　然らば團三、
團三　鬼王どの、
新左　どりやお歸りを、
兩人　相待たうか。

ト此時の鐘になり。兩人暖簾口へはひろ。時の鐘を打上げ、これより床の淨瑠璃になる。

〽早更渡る夏の夜の、初更を告ぐる豫てより喋し合せし弟の戻りを待ちて十郎は策をめぐらす折柄に、はかる時刻と時致が心も急かれ立歸る、雨の小止みや皐月闇、かたぶく軒も假の宿。

トこの内十郎思入よろしく。よき程に花道より五郎時致袴着流し大小下駄にて竹笠を持ち出來り、花道に留まりよろしくこなしあつて、五郎舞臺へ來り、竹簀戸を開け十郎を見て、

五郎 兄、これにましませしか。

十郎 （時致を見て、）弟、只今戻りしよな。

〽はひる戸口にふん反つて前後も知らぬ高鼾。

五郎 （寐てゐるづぶ六を見て、）見れば大醉いたせし小者、何れの家來か邪魔な奴。

〽足蹴にかけて搖り起せば、

づぶ （これにて目を覺し、）誰だ〳〵、えゝ何で足蹴にしやあがる。

ト ひよろ〳〵と立上り、五郎にかゝるを祐成二重より下りよろしく留め、

十郎 あいや足には掛け申さぬ。只今 弟 がお起し申した。

づぶ いや〳〵知つて居る、足蹴にしたに違ひねえ。

五郎 とやかう申すと摘み出すぞ。（ト立掛るを留めて、）

十郎 これはしたり控へて居ぬか。さゝ、お目が覺めたらお歸りなされい。

づぶ いや〳〵、一杯呑まねえうちは。

十郎 はて、夜もいたく更けましたれば、先づ〳〵假屋へお歸りなされい。

づぶ それほど言ふなら歸つてやるが、氣に喰ねえのはそつちの奴だ。

五郎　何を。

十郎　はてまあ、お歸りなされいといふに。（ト門口へ出す。づぶ六ひよろ〳〵しながら、）

づぶ　どつちの方へ行つたものか、さつぱり道が分らねえ。

ト生醉の思入にて花道の中程まで行き、はつきりとなし、後を見返り舌を出して逸散に花道へはひる。

これにて兩人こちらへ來り。

五郎　兄上、してあの小者は何れの家來でござるな。

十郎　ありや、祐經の廻し者ぢやわ。

五郎　何とおつしやる。（ト合方になり、）

十郎　豫て申し合せし如く、いよ〳〵今宵本懷を達せんものと假屋のあたり、地理を測り居つたる所、工藤の家來に見咎められ、大事の前の小事ゆゑ術よく言拔け立去らんと、いたせし折柄喜瀨川の龜鶴我れを見掛けて呼返し、虎より始終を頼まれしゆゑ手引をするとの詞に任せ、祐經に對面なし、舞に事寄せ假屋の案内篤と見極め參りし上は、いよ〳〵望みも今晚なるぞ。

五郎　我れも先刻日頃より厚く情を蒙りし、和田殿始め北條殿へも、餘所ながらお暇乞に參りし歸るさ、秩父殿の假屋に於て本田殿より承はれば、工藤の假屋に兄上が舞を舞うてござるよし、これぞ敵

祐經の心を許さす手段とは早くも推察いたせども、奸智に長けし祐經ゆゑ若し敵の手段に陷り、如何なる凶變あらんかと本田殿へはそれと言はねど、五郎心痛いたし居りしが、よくも工藤を欺いて、兄上御歸宿めされしぞ。

十郎　その折柄に今の小者、我を宿まで送らんといたく醉うたる體に見せかけ、後よりついて參りし上今までこれに醉倒れ、始終の樣子を窺ふは間者なりと悟りしゆゑ、忠義に厚き鬼王團三二人の者へ實を言はず、工藤の間者を欺きしは、心を許さす我が計略。

五郎　して又假屋の案内は、如何なる間取りに候な。

十郎　それぞ喜瀨川龜鶴が、窃に我れへ渡せし一品。

〽何か樣子は白紙へ、紅で記せし間取りの繪圖面。

ト十郎前幕の繪圖面を出し時致へ見せる、五郎件の延紙を開き、幾枚も續かせ開き見て、

五郎　ほゝお、流石當時の勢ひに他の假屋より間數廣く、仕切る矢來は東北より南へ折曲げ二十五間、

十郎　卽ち假屋の入口は東に當り定紋の、高張り左右に建並べ、しかも九尺の柵門口、

五郎　巽を受けて式臺を、假に設けし內玄關。

十郎　左りの襖隔てしは家來の詰所、侍部屋、

五郎　右に當りし十疊の、一間は客を設けの席。
十郎　假屋ながらも數十疊敷きつらねたる大廣間、これぞ酒宴の奥座敷。
五郎　目指す寢所は緣側を、南にうけし此の一間。
十郎　庭の雨戸は廻り緣。
五郎　こゝへ忍んで、
十郎　斯う討入り、
〽敵地の圖取り兄弟が暫し餘念もなかりける、時致ぞく〲打ち悅び、
五郎　斯く明細に知れたる上は、敵の首級を手の內に、最早握るは眼のあたり、
十郎　それにつけても今日ッた、酒宴の席にて祐經が、いつぞや信州三原野にて、我が射損じたる矢の根を取出し、及ばぬ事をと無禮の大言、左右に有合せし吉備津の神職たる大藤内といへる奴、梶原平次景高と共に我への雜言過言、直に其の場で飛びかゝり、日頃の望みと思ひしが、我一人にて討つ時は、跡にてそちが恨まんと、無念を怺へ立歸りし兄が胸中推量のいたしてくれいやい。
〽推量せよと十郎が胸を明かせし物語り、聞く時致も感じ入り。
五郎　よくぞお忍び下された、日頃短慮な拙者故、大事の前を仕損ぜんと旅宿へお殘しなされしは、情

なき兄と恨みしが、却て同道いたさぬが今となつては互ひの仕合せ、

十郎　たゞ此の上は兄弟が、打連れだつて易々と、

五郎　本意を遂ぐるは最早今宵と、

十郎　こりや、事成るまでは穩密に、

〽弟をさとし十郎が閑談數刻に及びける、始終を聞いて納戸より鬼王團三進み出で、

トこの文句にて暖簾口より、以前の新左衞門團三郎出來り、

新左　樣子は殘らずお次にて承はりましてござりまする、斯かる御賢慮あるとも知らず十郎樣へ對しまして、御異見申せし烏呼がましさ。

團三　嘸お心の內では、小癪な奴とも無禮とも思召したでござりませうが、つまる所は御兄弟に敵をお討たせ申したさ、我々が不調法は、

新左　偏にお許し、

兩人　下さりませ。

十郎　何の〳〵、其の詫には及ばぬこと、そち達が赤心は見ぬいて居る我々兄弟、

五郎　その心配には及ばぬわえ。

新左　すりや御宥免下さりますとか、

兩人　有難うございまする。

〽日頃の勤め主從が心は淸き水と魚、その尾について願はんと、

ト新左衞門團三郎思入あつて前へ進み、

新左　その有難いお詞に取縋りまして、今一つお願ひがございまする。

十郎　して、その願ひは如何なる儀ぢや。

新左　われ〱二人を御本望の御供に、

團三　お連れなされて、

兩人　下さりませ。

十郎五郎　何と申す。（ト合方きつぱりなり、）

新左　改め申すに及ばねども、わたくし父は御兄弟の祖父樣にお當り遊ばす、伊東入道祐親樣へ仕官なしたる譜代の郎黨、松原八郎家重とて重き舊恩蒙りしもの、さすれば三代相恩の主君の仇にございますれば、御兄弟と諸共に一太刀なりと祐經殿を、討つて御恩が報じたさ。

團三　又私の父なるものは、伊藤家譜代の臣富田八郎と申しまして、主家滅亡の其砌り父は討死、この

團三はまだ幼少に義盛樣の御丹精にて人となり、お附人も同然に御當家へ參りしからは、これも三代相恩の御主君樣の仇敵、何卒今宵の御供を、

新左　仰せ付られ、

兩人　下さりませう。

〽思ひ入りてぞ願ひける、二人が心健氣とは思へど供に連れがたく、

十郎　尤もなる頼みなれども、その頼みより兄弟が二人の者に頼みがある、是非とも承引いたしてくりやれ。

新左
團三　何とおつしやりまする。

十郎　その頼みとは外ならず、父の仇たる祐經殿を討果したる其の上では、討死いたす覺悟の兄弟、心にかゝるは母上の御事、たゞそれのみが冥土の障り、我々兄弟亡き後はそち達が成替りお世話いたしてくれよかし、それが一つの頼みなるぞ。（ト新左衞門團三郎思ひ入あつて、）

新左　扨は我々兩人は、足手纏ひと思召し、

團三　お供にお連れなされませぬか。

十郎　いやなか〳〵左にあらず、母上の御事が心にかゝりゐる故に、そち達を殘すのぢや、疑惑をはら

し兩人共早々曾我へ立歸れ。

新左　いや〳〵それは心得ませぬ。御老母樣の御介抱心にかゝると仰せられまするが、我々共が居りませいでも、御兄弟の御姉君片貝樣もおいであれば、禪司坊樣もお跡には殘つておいでなされまする。

團三　それを體よく御老母樣の御介抱賴むとおつしやつて、曾我へ歸れとはお情ない。そも國許を出る時より、御兄弟が御本望をお遂げなさるゝ其の時は、お手傳ひをばいたすを樂しみ、

新左　生きて再び戾るまいと、御母公樣へも餘所ながら、お暇乞をいたした我々、

團三　これらの事を思召し、

新左　何卒不便と、われ〳〵を、

團三　お供にお連れ、

兩人　下さりませっ

〽詫つ口說つ、兩人が賴むも不便健氣やと兄は涙に詞なし、弟もとむねは迫れども心弱くばかなはじと、わざと怒りの聲あらゝげ、

トこの內新左衞門團三郎、五郎十郎に縋りよろしく賴む、これにて十郎愁ひの思入、五郎も愁ひのこ

なしよろしくあつて、氣を替へ立腹なし、

五郎　やあ、斯程に申せど聞入れなく、主人の詞を用ひねば、主従の緣を斷切らうか。

兩人　えゝ。

五郎　さあ兄上、斯様な奴にお構ひなく、お支度をなされませ。

兩人　すりやどうあつても、お願ひは、

五郎　かなはぬ願ひぢや、兄上ござれ。

〽縋る袂を振拂ひ涙を隱す破障子、はたと閉切り入りにける。(ト五郎十郎は上手の屋體へ入る。)

〽跡に二人は茫然と腕拱いて居たりしが、鬼王團三に打ち向ひ、

新左　こりや團三、この鬼王が折入つて、そちに一つの賴みがあるが、何と聞いてはくれまいか。

團三　改まつたる其の詞、中村に居る時より兄弟の因みを結び、兄と賴みし朋輩仲、身にかなつたる事ならば、賴みを聞かいで何とせう。

新左　先づはそれにて一つの安堵、外でもないがこりや團三、この鬼王に成替り曾我へ歸つてくれまいか。

團三　何と言はつしやる。

新左　今御兄弟お二人が仰せ出されしお頼みを、背けば二人が不忠となり、又御本望の御場所にも有合さねばこれも不忠、何れの道を立てるのもたゞ一筋に御主君へ忠義を立てる我々二人、双方全く致さんには、二つなければならぬ體、この鬼王は年嵩ゆゑ跡に殘つてお供をなし、そちは此の世に存へて曾我へ立越え御母公樣の御介抱をいたしなば、御兄弟の孝も立ち、又我々の忠も立ち、忠孝全き分別ゆゑ、是非とも聞いて貰ひたい。

〽否と言はれぬ裏釘を、さしたる頼み聞き入れず、

團三（この内思入あつて、）鬼王殿、そりやこなた水臭いといふものぢや。

新左　なに、水臭いとは。

團三　さればこなたと團三とは兄弟の仲なれど、同じ忠義を立つるにも死ぬと生きるは雲泥萬里、兄と頼んだこなたなら、わしをお供に立たせてくれ、こなたは跡に生殘り、曾我へ歸つて御母公樣のお世話をしては下されぬ、否と言はせぬ其の爲に先きへ承知をさせておき、其の頼みはあんまりだ、假令兄弟の緣を切つても、こればつかりは厭でござる。

新左　そんならそちは聞いてくれぬか。

團三　外の事なら何でも聞くが、こればつかりは厭でござる。（トきつと言ふ。）

へ切つて放せし挨拶に、押して言はれぬ鬼王が、思案つく〴〵團三に向ひ、

ト新左衞門思ひ入あつて、團三郎に向ひ、

新左 是非に及ばぬ。今宵に限る其の場所へお供のならぬ上からは、生きて詮なき二人が命、假令お供はいたさずとも捨てる命は忠義の一つ、兩人この場で腹かッきり彼の世のお供をいたさうと、鬼王所存極めたるが、そちの心底如何なるぞ。

團三 なるほどそれは好い分別、所詮何ほど賴んでもこなたも跡へ殘らねば、團三も殘る心なし、兩人共に此の場にて、命を捨てるが冥土なる、御主君樣や御母公の滿江樣への申譯、

新左 おゝ出來した〳〵。

團三 さはさりながら鬼王殿、長の年月お附き申して今宵のお供がならぬといふは、無念なことではござらぬか。(ト新左衞門これを聞きよろしくあつて、氣を替へ、)

新左 いや〳〵愚痴はもう言ふまい、此の期に及び跡へ心の引かるゝは、武士の本意を失ふ道理。

團三 それぢやによつて少しも早う、

新左 急げや團三、

團三 言ふにや及ぶ。

〽互ひに諸肌押し拭ひ、覺悟はすれど思はずも袖に涙の雨もよひ、

ト此の内兩人覺悟の體にて肌を脱ぎ刀を拔く、此時はげしき雨車になり、兩人思入あつて、

新左　丁度折よく五月雨の、降り出す雨の音はげしく、

園三　御兄弟にはお支度の、最中なれば心も附かず、

新左　見咎められぬ其のうちに、

園三　いでや最期を、

兩人　此の場に於て、

〽あわやと見えし兩人が、生死の境一間にて、

ト此の内兩人刀を拔き腹を切らうとする。上手障子屋體の内にて、

十郎　あいや死ぬには及ばぬ、兩人へ、

五郎　申し附ける事こそあれ。

新左
園三　えゝゝゝ。

〽一間の障子引き明くれば、袴の裾も高らかに虎が情や母の慈悲、結ぶ模樣の直垂は言はねどしるき蝶千鳥、形見携へ立出づる、

ト此の内よき程に上手の障子を引きぬく、内に五郎十郎の兄弟畫面の打扮にて十郎は風呂敷包みを抱へ、五郎は大小と小弓に小矢を一つにして抱へ出る、兩人是れを見て、

新左　ても お勇ましい此の扮裝、かゝる有様見るにつけ、嗚花々しきお働きを、

團三　なさるであらうと思はれて、猶々心いやまさり、

新左　お供が仕度う、

新三　ござりまする。

五郎　おゝ、其の望みも尤もながら、曾我へ殘せし母上や姉片貝へ參らする形見を持つて歸國なし、忠義を立てよ鬼王團三。

新左　すりや切腹も相成りませぬか、

團三　殘念至極にござりまする。

〽忠義に凝りし兩人が悔み歎くぞ道理なる、兄弟詞を改めて、

ト新左衛門團三郎無念のこなし、十郎五郎思入あつて、

十郎　死するばかりが忠義にあらず、さりながら今宵の供がかなはずして存命なすを無念に思ひ、切腹なさんと決心せしは、我々兄弟悦ばしいぞよ。

五郎　かゝる忠義の兩人を供に連れぬは殘念なれど、外に乞ふべき者なければそち達二人は故郷へ歸り、母に形見をわたしてくりやれ。

新左　參りともなきお使ひも、不忠とあれば是非もなし、

團三　涙ながらも打連れだち、故郷へ歸るでござりますが、して、お形見の、

兩人　品々は、

十郎　只今申し附けるであらう。

五郎　裏に繋ぎし乘馬をこれへ。

新左
團三　はッ。

〽はッと答へて雜部屋に繋ぐ乘馬も打しをれ、見すぼらしげに引出せば、見るも不便と兩人が、浮ぶ涙や雨のあし背撫でさすり繋ぎ留め、

トこの內新左衞門團三郎下手の藪の蔭より、乘馬を引出し思ひ入あつて、下手の松の立木へ繋ぎこちらへ來り、

新左　はッ、御乘馬これへ、

團三　引出しましてござりまする。

十郎　おゝ、大儀々々、

〽言ひつゝ一通取出し、

零落なしたる我々ゆゑ、目ぼしき品はあらざれど膏染たる垢附も、血緣の者へ振分けて、これに委しく認めあれば、母上はじめ片貝どの禪司坊へそち達より、又虎が許へは此の切髪、乘馬諸共屆けてくれよ。

五郎　（懷中より手紙を出し、）又この狀は兄弟が、當地へ赴く途次箱根山なる我が師匠行實阿闍梨へ先年のお詫を申し入れし折、世にも得難き二口の劒を賜はる其の禮狀。これなる弓矢は鬼王團三、そち達へ遣はす間、よろしく分けて形見にせよ。

新左　すりや我々にまで、

兩人　お形見を。

十郎　其の弓矢こそ兄弟が、祕藏なしたる品なれば、そち達二人へ形見のしるし。

ト此の內新左衞門團三郎よろしく思ひ入あつて、

新左　數なりませぬ我々まで、身分に過ぎたる御形見、

團三　何れも樣へはそれ〴〵に、お屆け申すでござりまする。頂戴物は我々が、

新左　寶にいたすで、
兩人　ござりまする。
十郎　さ、時刻うつらぬ其のうちに、
五郎　早々故郷へ立歸れ。
兩人　はツ、（ト泣き伏す。）

〽是非もなく／＼兩人は涙ながらに立上り、形見の馬に形見なる小弓に小矢と風呂敷を附ける力もなき跡の、これも故郷へお形見と馬の背分くる雨支度、古き草鞋も手作りに保てど涙保ちかね、しめる夜道の暇乞。

トこの内、兩人形見の品々を馬に附け雨支度をなし、草鞋をはき笠を持ちてこちらへ來り、

新左　左樣なればお二人さま、
團三　隨分ともに御油斷なく、
新左　御本望を、
兩人　祈りまする。
十郎　そち達二人も、

五郎　堅固で暮せ。
兩人　これがお顏の、（ト兩人側へよろた、態ときつとなつて、）
五郎　えゝ未練者めが。
へと荒けなく態と口には叱れども、主從三世恩愛の別れは同じ袖袂、とゞめかねたる兄弟が
淚を隱し見ぬ顏を覗くも淚限りなく、立出る空は晴間なきこれも淚の雨もよひ、
ト此の內新左衞門團三郎、十郎五郎の顏を覗き込む、これにて十郎、五郎顏を背けて泣く、新左衞門
團三郎是非なく門口へ立出ること、よろしく思入あつて、
新左　これが今宵のお供なら、嘸や心も勇まんに、
團三　身分に過ぎたお形見を、お貰ひ申せど勇氣も挫け、
新左　これより故鄕へ立歸らば、御母公樣を始めとして、
團三　何れも樣がお歎きと、今から思ひ過されて、
新左　足も進まず、
團三　氣も進まず、
新左　あゝ情なの、

兩人　お使ひぢやなあ。

〽心細道踏み迷ふ闇に夜旅をする墨を、流せし空や五月雨の故郷さして兩人は、乘馬引連れ出て行く。

トこの内新左衞門團三郎花道にて愁ひの思入よろしくあつて、トヾ花道へはひる、これより稽古笛の入りし床の合方になり、十郎五郎立ち上り二重より下りて、兩人を見送る事よろしくあつて、

十郎　如何に時致、今宵最期と極めし上はなか〳〵心易けれど、年月はなれぬ兄弟のあかぬ顏見んことも、これが此の世の別れぞや。

五郎　これこそ最後の見參よ、兄と見奉つらんも今ばかりなる思ひなれ、我は乙にて血の餘り是れ母方の愛しみ、御身は正に嫡子にて父のかたみの御顏、

十郎　五ツや三ツの頃なれば、覺えぬながら子は親に、

五郎　似るなるものを松山の、

十郎　はしをりかゞみと聞くからは、

五郎　在すが如き父の俤、

十郎　今見る心地弟時致、

五郎　祐成どの、

十郎　お懐しう、

兩人　ござります。

〽互ひに手に手取交し、又も涙となる鐘に軒端貫く梅雨の雨、車軸を流す如くなり。

ト兩人手を取交し愁ひのこなしよろしくあつて、此の内時の鐘雨車になり、

五郎　如何に兄上、（トのりになり）最早時刻も亥の刻に、猶豫なすべき所でなし、父の敵は不倶戴天、

〽かくては果じと時致が、涙とゞめて聲勵まし、

十郎　實に、三千年に一度花咲き實るなる、西王母が園の桃、優曇華よりも珍らしや。

五郎　その優曇華を、拜みて手折れといふからは、拜みて討てや十郎どの。

〽逸るを押し留め祐成が、

十郎　逸るはことわりさりながら、女數多あるべきぞ、太刀の振度に心し候へ。

五郎　言ふにや及ぶ、いで諸共に、

兩人　打ち立たん。

〽勇み立つたる勢ひは、末世にその名荒人と、（ト兩人よろしく思入あつて、）

〽由々しかりける。

ト雨の音三重にてよろしく、跡雨車風の音にてつなぎ引返す。

幕

四幕目

工藤假屋討入の場
右幕下假屋裏の場

〔役名――曾我十郎祐成、同五郎時致、御所の五郎丸、仁田四郎忠常、大藤内成景。喜瀨川の龜鶴、化粧坂の少將、手越、千里其他。〕

〔假屋木戸口の場〕――本舞臺正面狩場の木戸口、扉立切り、左右柵矢來、此の前一間丸物の番小屋、突棒刺股を置き篝を焚き、總て千葉介假屋木戸口の體。爰に○□△◎何れも勢子の裝にて、番小屋の前に筵を敷き酒を呑み居る、此の見得時の鐘五ツの拍子木にて幕明く。

○　さあ〳〵、三六ついでくれ〳〵。

□これ〳〵、われはかり呑まずと、ちつと外へも廻せ〳〵。

△さうだ〳〵、ちつとはこつちへも呑ませろ、おのればかり呑んで居ずと。

○これ、おればかり呑んでゐるとは、そりや何の事だ、呑みたくば勝手に呑め。(ト茶碗を打附ける。)

△この野郎め、なぜ投打をしやあがるのだ。(ト立掛る、)

◎はて、あんな分らぬ奴は、構はずと捨ておけ〳〵。

□おぬしもどうもよくねえから、騒がずと靜にしろ〳〵。

○いゝや靜には出來ねえ、癪に障つてこてえられねえ。

ト又立ちかゝる、これを三人にて留める、番小屋の内より番卒勢子の打扮にて出來り、

番卒 こりや〳〵。狩場口にて尾籠の振舞、靜まらぬか〳〵。(トこれにて四人下手へ控へる。)

□つい互ひに言募り、あなた方のお耳へ入り、

◎申し譯もござりませぬが、よく申し附けますれば、

□何卒御勘辨のほど、

◎お聞き濟み、

四人 下さりませ。

番卒　わけて今宵は雨を催す皐月の空の雲立に、篝しめらば通路の難儀、油斷いたさず出入を改め、必ず番所を怠るな。

四人　心得ましてござりまする。

　　トこれにて番卒小屋の內へはひる。跡四人あたりを片附け、

□　さあ、これから、篝をたやさず。

◎　木戸口固め、

皆々　張番いたさん。

　　ト皆々篝を直し小屋の前へよろしく控へる。誂への合方雨車になり、花道より前幕の十郎蓑竹笠、松明を持ちて先に立ち、後より同じく五郎やはり松明を持ち、四邊へ思入あつて出來り、兩人花道に留まり、

十郎　これまで來るその內も、數十の假屋數十の關門、危ふかりしも漸うに、免がれ來るは神の加護、

五郎　向ひの木戸は千葉が警衞、早や遠からず祐經が假屋へ近附き候はんが、もし關門にて否と申さば、直に其の場で討入らん。

十郎　いや逸まるな弟時致、今が大事の、（ト四邊へ思入あつて、）窃にいたせよ。

ト是れにて舞臺へ來る、此の内勢子四人立上り、下手へ來り、

○　こりや〳〵、それへ來りし兩人は、何れの者に候ふぞ。

□　斯く夜更けに相成りて、印を持たず松明のみ、

△　怪しき者とて咎めたり、

◎　何者なるぞ、

四人　名乘られよ。（トこれにて兩人ぎつくりなし、十郎思入あつて、）

十郎　いや〳〵決して怪しき者にあらず、我等二人は假屋の内へ、使ひのありて來りしなり。

○　してその先は、

四人　何れなるぞ、

十郎　その先きは、（ト思入。）

○　いや、口籠るは合點行かず、相番の衆、

四人　お立合ひ下され〳〵。

ト合方きつぱりとなり、番小屋の中より以前の番卒甲、乙の兩人出來り、

番甲　假令何れの使者たりとて、其の姓名を名乘らずして通行なさんと致せしは、

番乙　如何にも不審と覺えたり、通す事、

兩人　許し難し。

十郎　其の不審は御尤も、我等は御内方の者共にて、これまで所々の木戸固めも、仔細なく通りしなり、許されて通されよ。

番甲　して御内方とは誰なるや、其の苗字を明かに名乘りし上にて各の、

番乙　通路の切手を、

皆々　見せられよ。

十郎　いや左樣に重きものにあらず、御内方と申せども苗字もあらぬ匹夫の兩人、決して氣遣ふ者ならず、疾く／＼お通し下されい。

番甲　やあ斯く怪しき者共を、調べん爲めの木戸固め、

番乙　我々勤番いたす上は、其の姓名と二ツには、通路の鑑札あらばよし、

番甲　さなくばこれより、

皆々　戻られよ。（ト是れにて五郎少しムツとして、）

五郎　すりや斯樣に願つても、此の木戸明けて下されぬとか。

皆々　如何にも。
五郎　通さぬとおらば是非がない、如何にも我等は假屋の内へ、強盜に入る者なり、止めん奴等は片ッ端
此の所で討捨つるぞ。（トいふ。皆々びつくりなし、）
番甲　さてこそ、狼藉、
番乙　それ、者共、
皆々　心得ました。（ト皆々時致へ立掛る。この内下手に十郎窺ひ居て此の時中へ割つて入り、双方を押分け、）
十郎　先づ〳〵、暫くお待ち下され。
番甲　此奴も正しく彼奴が同類、
番乙　召捕つて突出さん。
十郎　いや決して怪しき者ならず、先づ〳〵お靜まり下されい。（ト十郎穏かなるこなしにて、五郎を宥め下手にて皆々へ向ひ、）只今これなる雜人が強盜などゝ名乘りしは、跡方もなき僞り言、此奴は只今參る途中本間殿の假屋に於て、存じ掛けなき酒の馳走に、匹夫の證據度を過し前後も分ぬ程なりしを、主の使ひに無理に引立て漸うこれまで參りし所、斯く無禮の申し上げ御立腹を致させしは申し譯なき此の場の仕儀、これも全く酒興の上、何卒御勘辨の願ひ上げまする。

ト十郎皆々へ詫びる。

番甲　して又、左いふ御身等が、主人と申すは何れの御方、

番乙　これにて包まず申しなば、

番甲　此の木戸通し、

兩人　遣はさん。

十郎　（思入あつて、）我々二人をお見知りなきや、廳南殿の家臣にて彌源次彌源太と申す兄弟なり、廐の役を預りて今度も富士の巻狩に、御供いたして此の程より各方にも面會せり、忘れたまふな見覺えござらう。

トこれにて皆々考へる事あつて、○は十郎をぢつと見る、十郎思入あつて松明を脇へやりよろしくこなし、○は思ひ出せし體にて、

○　彌源次とやらは見忘れしが、御身は聊か覺えあり、

□　いつぞや宇都宮殿、片瀨よりお歸りのその時に、

△　面會いたせし馬取兄弟。

四人　思ひ出せしぞ〳〵。（ト十郎はつと思入。）

○ しかも其の折濁酒に醉を發して、彌源次彌源太浮れて舞ひし仁王舞、

□ 一入肴に相成りしが、

△ その時まみえし此の雜人、

◎ こりや盜賊などでは、

四人 ござりませぬ。

番甲 斯く見知人のある上は、何も仔細はござるまい。

番乙 然らば酒興のそやつと共に、此の木戸通し、

四人 遣はさん。

十郎 すりやお通し下さるとな。

兩人 如何にも。

十郎 はツ、これにて主人の御物の具を取りに參る御用も足り、まことに大慶至極でござる。こりや〳〵彌源次、これにて無禮のお詫せよ。(ト五郎へこなし、)

番甲 いや、その詫より今申す仁王舞の一差を、此の所にて舞つて見せえ。

五郎 さあ、それは、

番甲　それがそちの、
皆々　詫なるぞ。
十郎　いや舞はせますはいと易けれど、主君の御用足せし上、又候是れへ參るでござらう。
番甲　然らば再び參りし上、
番乙　仁王の舞を、
皆々　所望いたさん。
十郎　左樣ござらば、何れも方、
皆々　相待ち居るぞ。（ト十郎思入あつて、）
十郎　いざ關門を、（ト十郎五郎辭儀をなすを、道具替りの知せ、）
十郎五郎　お開き下されゝ。
ト是れにて差圖なし、内より扉を開く、兩人思入あつて悠々と内へはひろ、やはり雨車誂への合方にて此の道具廻ろ。

（工藤假屋庭前の場）――本舞臺四間通し中足の二重、本緣附板庇軒口に庵に木瓜の紋附の幕を張り、

正面同じ紋散しの襖、上下柵矢來、總て工藤の假屋庭前の體。二重よき所に鐘の行燈を點し、是に傾城の打掛を掛け、前幕の少將差添を拔きて持ち、自害しようとして居る、これを前幕の龜鶴留めて居る。この模樣雨の音床の送りにて道具留る。

〽降りしきる雨は烈しく祐經が、假屋も更けて寐靜まり、誰白川と見えにける。

少將　もし龜鶴さん、死なねばならぬ此の少將、どうぞ見ぬ振して下さんせいな。

龜鶴　いえ見ぬ振りは出來ませぬ。お前が死なうとなさんすはどういふ譯か知らねども、晝の酒宴に醉潰れ、祐經さんを始めとし家來の衆も誰あつて知る者とてもあらざれば、今は憚る事もなし、譯を聞かせて下さんせ。

少將　さあ、死なねばならぬ其の譯は、今宵一夜を過しなば梶原平次に根引され、身を任せねばならぬゆゑ、又二ツには言交したる彼のお人も今宵限り、あの世の人にならしやんすとやら、生き存へて詮ないゆゑ、どうでも死なねばならぬわいなあ。

龜鶴　いえ／＼それは惡いぞえ。そりやもう操を立通し、梶原さんに身請けされ行くが厭さに死なしやんすは尤もの樣なれど、お前一人の身ではなし、年季の内は大磯の親方さんに任せた體、及ばずながら龜鶴もこれへ立ちたる身の不承、惡いやうにはせぬ程に景高さんの身請けならわたしに任

せて下さんせ。はて、今宵一夜を過しなば、どうなる事やら知れぬわいなあ。
少將　さあ、その本望の事につき、假令何であらうとも、祐經さんに遙々と招かれた身でありながら、
　手引をして討たせては、どうも生きては居られぬゆゑ、
鶴龜　さあ、それゆゑわたしも、彼のお人が望みを遂げし其の上では、もう此の世には居ぬ覺悟、
少將　それにわたしの何で又、自害をお止めなさんすえ。
鶴龜　その切り所が違ふゆゑ。
少將　さうしてお前の切らしやんすは、
鶴龜　乳の下切つて死なうより、わたしや綠の黑髮を、切つてこの世に居ぬ心。
少將　そんなら、お前は尼法師、
鶴龜　そも大磯を出る時から、虎さんとも誓ひをたて、尼になる氣でござんすわいなあ。
少將　(これにて思入あつて、)呑込みました龜鶴さん、そんならわたしも共々に、
鶴龜　はて、この龜鶴や虎さんはもう此の月で年も明け、親方さんの御損もないが、お前は年季もまだ
　一年、親方さんにわたしから譯を話したその上で、惡いやうにはせぬ程に、死ぬのは止めにしな
　さんせいなあ。

〽年の功なる龜鶴が異見に何と少將が死を止まりし折柄に、又も降り出す雨の足、すべる闇路も厭ひなく忍ぶ手越が走り來て、

ト此の内龜鶴少將が刀を捥ぎ取り鞘へ納める。雨の音になり、花道より前幕の手越出來り、直に舞臺へ來り、

手越　龜鶴さんか。

龜鶴　あこれ。

〽四邊うかゞひ〳〵て、

ト三人あたりへ思入あつて、龜鶴聲をひそめ、

さうして未だお二人さんは、

手越　さあ、かねてお前の言附に、そつと假屋を忍び出で、女子だてらも蓑笠に姿をやつし爰かしこ、分けて嚴しい廳南と廳北殿の假屋の前、わざと駈抜け通りしを怪しい女と咎めしゆゑ、其處はわたしが口先きと色で仕掛けて進み寄り、宵の酒宴の其の折に殘りし酒を一德利、お淋しからうと差し出せば、

〽酒に眼のなき番卒が、嬉し悦び我れ先きと呑んでくだまく者もあり、泣きつ笑ひつ酒機

嫌。
ばひちらがうて呑みしあと、前後他愛も夏の雨、いつか他愛も醉倒れ門の固めも更になし、御安堵あれやお二人さま。
〽御安堵あれと訴ふれば、こなたの二人は勇み立ち、
トこの内手越注進の模様よろしくあつて、龜鶴少將これを聞くこなしあつて、
龜鶴　出來しなさんした手越さん、それでわたしも一つの安堵、
少將　それに附けても千里さん、もう見えさうなものぢやなあ。
〽待つ間あらせず新造の千里、おきつも共に走り來て、
トばたばたになり、花道より以前の千里、おきつ走り出來り、直に舞臺へ來り、
千里　もし龜鶴さん悦ばしやんせ、首尾よう行つてお二人も、最早狩場へ忍び入り、
きつ　程なうこれへお出でゆゑ、早くお知せ申さうと、慥に見屆け、
兩人　來ましたわいなあ。
千里　そんなら、首尾よう、
兩人　忍び入り、〽ト兩人大きくいふを、龜鶴冠せて、)

龜鶴 あゝ、これ。

〽しめし合せて、

ト龜鶴左右へ思入、手越、千里、おきつ口を押へるこなし、双方よろしく床の送りにて、此の道具まはる。

（假屋廣間の場）――本舞臺二幕目の對面の場の道具。上下へ燈臺を照し、時の鐘誂への合方にて道具留る。茲に五郎十郎立身にて居て、

五郎 兄上、

十郎 時致、（トぢつと思入あつて、）これまで數ヶ所の關門も、虎口を脱れ近寄りて、思ふ敵の寢所に入りしに、早くも察し臥處を替えしか、進む所に居らざるは未だ兄弟天運の來らざりし所なるか。

兩人 あら殘念やなあ。

ト兩人無念のこなし、此の時正面の襖を明ける。これにて兩人下手の襖の間に小隱れして窺ふ、奥より以前の龜鶴亦卷裝にて團扇を持ち、片手に手燭をかざし眞中へ出で四邊へ思入あつて、扨はといふこなし、

[illegible] 塒さまよふ浦千鳥、波にゆらるゝ沖津船、しるべの山はこなたぞや、そことも知らぬ夜の波、風をたよりの湊入り、心附ずや闇の空。（ト思入あつて小聲になり、）いざや此方へ。

ト持ちたる團扇にて下手を招き、襖を明けし儘奥へはひる。兩人これを透し見てうなづき合、十郎、五郎へ目くばせをする、これにてきつと思入。誂への合方になり、兩人太刀を拔き、窺ひ〳〵奥へ入る。これにて此の道具知せなしに廻る。

（假屋玄關口の場）――本舞臺眞中より少し上寄に、二間中足の假屋玄關口、此の前同じく式臺。正面雨戸を建切り、上手一面假屋の續きと見たる張物にて見切り、下手柵矢來、この前松の立木、よき所に工藤の紋附きし屋根附の大提灯立てあり、總て工藤假屋玄關口の體。雨の音誂への合方にて道具留る。と上手より勢子の火の番二人拍子木を打ち出てくる。これと一緒に下手より、同じく二人やはり勢子にて割竹を持ち出來り、

一　これはお役目御苦勞に存じまする。

二　最早深更に及びましたれば、猶更大事でござる。

三　左樣々々、それに先刻も怪しき者、忍び込みしと申す事ゆゑ、

四　御領の假屋が大切でござるぞ。

一　いや假屋と申せば工藤殿、今日俄に臥處をば取替えしと申すこと、何か仔細がござると見ゆるて、

二　我々も不審に存じ申すが、これは大磯喜瀬川などの遊君數多入込み居るゆゑ、

三　萬事に世話が燒けるでござらう、扨々女子と小人養ひ難しと、萬事にお心お附け下され。

一四　心得申したく。（ト皆々あたりを見廻して、）

二　然らば、後刻お目にかゝらう。

三　お役目御大儀、

皆々　お別れ申す。

ト双方目禮して上下へ別れてはひる。ばたくになり、正面の雨戸を内より蹴散し、二幕目の大藤内成景寐卷裝にて走り出で、後より十郎追駈け出でちよつと立廻り、

成景　やあ、わいらは曾我の兄弟ならずや、工藤殿を討ちたる次第、御領の假屋へ注進するぞ。

ト行かうとするを十郎太刀を振上げ一太刀切る、爰へ五郎走り出來り、成景を切下げる。これにて成景の體仕掛にて胴切りになる。これにて兩人きつと見得。

五郎　十づつに當の敵を討ちしあと、四十のをのこ四ツになりけり。

十郎　むゝ、よくも仕つッたり、末期の秀逸、時致集とも召されなん。（ト兩人顏見合せ、）

兩人　むゝ、はゝ、はゝゝゝゝ。（ト兩人思入あつて、）

十郎　最早この世に、思ひおくこと更になし、今ぞ最期の門出の盃、

五郎　兄弟別れの、

十郎　その盃は、

ト篠笛入りの合方になり、十郎あたりへ思入あつて、上手の立樋を見やりよろしくこなし、此の時雨車になり、十郎太刀を構へ、えいと樋の中端を切る、是れにて樋竹斜に切れる、とその口より雨水出ろを、兩人烏帽子を取つて雫を受け、

五郎　せめて軒端の雨雫受けて弟へ水盃。（ト一口呑んで差出す。五郎取つて、）

如何に十郎殿、今こそ最期の際なれば、心靜かに互ひの念誦、

十郎　實に尤もなるその詞、いざ〳〵これにて、諸共に。（ト兩人手を合せよろしくあつて、）

五郎　臨命終の佛達我れ〳〵過去の宿業にや、一念の愼恚により敵味方と隔つるなり。

十郎　慚愧懺悔の力に依り、六根の罪障消滅し、

五郎　因果の輪囘を盡せし上は、過りたまはで一つ蓮の緣となし、

十郎　父のましますその御國へ、

五郎　迎ひとらせてたびたまへ。

兩人　南無阿彌陀佛々々。

大勢　やあ浪籍者、お出合ひめされ〳〵。（ト口々に言ふ。これにてきつとなつて立上り、）

五郎　いで此の上は、思ひおくこと更になし、兄弟名乘つて潔く、

十郎　討死なして美名を殘さん。（ト假屋へ向ひ、）遠からん者は音にも聞け、近からん者は眼にも見よ、伊豆の國の住人、伊東次郎祐親が孫曾我の十郎祐成、

五郎　同じく五郎時致とて兄弟の者、君の假屋の御前にて、一家工藤左衞門尉祐經を討取つたり。

十郎　われと思はん人々は、これにて討留め、功名せられよ。

五郎　兄弟相手に、

兩人　なり申さん。

ト高聲に呼ばゝる、これにてドン〳〵早めになり、以前の勢子上下より出る、玄關口より平野遠安等十人の大名好みの裝にて出來り、

遠安　扨こそ兄弟これにあり、斯くいふ我は將軍家に、其の名聞えし平野馬之允遠安なり、

信勝　同じく家臣、愛甲三郎信勝、
幸高　岡部彌三郎幸高、
景成　原三郎景成、
德一　吉香小次郎德一、
行道　村上嘉藤太行道、
吉影　堀藤太吉影、
國安　海野小太郎國安、
賴國　宇田五郎賴國、
成家　臼杵八郎成家、
遠安　いでや勝負を、
皆々　いたしくれん。

ト一度に拔き連れ打つて掛る、十郎五郎皆々を相手に立廻つてきつと見得、これより誂へ派手なる鳴物になり、眞ッ先に平野馬之允打つてかゝる、これを十郎立廻つて切倒す、これと一緒に愛甲三郎五郎へ切つて掛り、立廻つて腕を落され下手へ逃げてはひる。此の後へ岡部彌三郎原三郎い

兩人にて打つて出で、五郎十郎と立廻りトヾ兩人手負になり、十郎兩人と立廻りながら下手へはひる。跡皆々一時に打つて出る、これを五郎立廻つてきつと見得。誂への鳴物になり、立廻りの內嘉藤太右の腕を切られ、堀藤太は小鬢を切下げられ、小太郎は袈裟切りになり、宇田ノ五郎はまつ二ツに切下げられる立廻り、トヾ上下より軍兵大勢出でごつちやの立廻り大まくしの見得、この內上下にて、夜討が參つた〳〵といふ聲する、やはり雨車にて、此の道具知せなしに廻る。

(假屋庭前の場)――本舞臺正面黑幕、よき所に狩屋の軒口を見せ、これへ幕を張り、前通り誂への柴垣、右の道具にて納まる。とドン〳〵、ありや〳〵の聲になり、十郎大童の體にて下手より出でホッと思入、下手より三階の人數出で十郎にかゝる、十郎皆々を相手に立廻り、此の時勢子出で十郎と立廻り、勢子を見事に首打ち落す。

十郎　最期は兄弟諸共と約せし上は、いで時致に、(ト行かんとする。此の時幕の內にて仁田の四郎の聲にて、

四郎　やあ狩屋を騷がす曾我兄弟、仁田ノ四郎が討取りくれん。

十郎　やゝ、すりや御身は忠常殿よな、望む所の好き相手、

四郎　いざ此の場にて勝負を決せん。

十郎　いざ、

四郎　いざ〳〵〳〵。

ト誂への鳴物になり、長刀と太刀の烈しき立廻りあつて、トヾ十郎の刀ぽつきと折れる、これにて兩
人びつくりなし、

十郎　や、これは、むゝ。(ト思入あつて、)さ、首級を上げよ、四郎忠常。

四郎　すりや某に、この場に於て、御身は討たるゝ心よな。

十郎　如何にも。

四郎　然し忠孝全き武士を。

十郎　猶豫なされな後れしか。

四郎　臨終稱念。

ト忠常太刀を抜き構へる、十郎覺悟の思入。この見得誂への鳴物にて道具廻る。

(右幕下假屋裏の場)――本舞臺上手大臣柱の際より下手へ奥深に假屋の軒先、一面に雨戸を建切り、
この前置舞臺ほどの幅廣の板緣、この下中足の高き吹抜の緣づかを見せ、上手のつま白洲階子、上下

一面笹龍膽の幕張り、下手松の立木、上手柵矢來の張物にて見切り、總て右幕下假屋の體、雨車ドドンにて道具留る。と誂への鳴物になり、東の揚幕より五郎大童、血に染みたる太刀を引提げ四邊を窺ひながら出來る、此の後より臼杵八郎追掛け來り、花道にて打つてかゝる、兩人ちよつと立廻りて八郎を一太刀切りきつと見得、此の時舞臺の後にて、

四郎　やあ〱假屋の面々承はれ、曾我の十郎祐成は仁田ノ四郎が討取つたり、各安堵候へ。

大勢　えい〱おー。

五郎　やゝ、扨は祐成御最期とか、斯くなる上は時致一人目指すは伯父伊東の仇、御領の假屋へ切つて、鎌倉殿の御首級をたまはらん。おゝ、さうだ。

ト右の鳴物にて舞臺へ來り、白洲階子より椽側へ上り窺ひ〱下手へ行く。此の時上手幕張りの内より白絹の被衣したる黑革の鎧陣立の五郎丸、幕を上げて窺ひ思入あつて、つか〱と後を慕ひ五郎に寄添ひ、双方氣味合のこなしあつて入替り五郎の前へ立塞がる、五郎は女と心得これを避けんと行きかゝるを、後より腰を捉へ押戻し、ちよつと立廻りあつて、五郎下手五郎丸上手より半身出して見込む、これを誂への鳴物になり、五郎女と心得庇ひながら行きかゝる、五郎丸これをやるまいといふ立廻りあつて、トヾ五郎丸五郎を抱き留め、えい〱と引戻す、此時五郎力足をむゝと踏む機に、仕掛

にて板緣を踏抜き片足落ちろ、これにて五郎丸折重り、五郎に早繩を掛ける。

五郎　やゝ、女にあらず扨は汝は、

冬保　御所の五郎丸冬保なるわ。（トこれにて五郎無念のこなしあつて、）

五郎　えゝ不覺を取りしか、（ト立たうとして片足拔き、どうとなるを木の頭。）口惜しい。

ト上手を見込む、この見得ドン〳〵ありや〳〵の聲にて、よろしく

ひやうし　幕

五幕目大詰　右幕下假屋の場

〔役名――右幕下賴朝、曾我五郎時致、御所の五郎丸冬保、仁田の四郎忠常、梶原平三景時、同平次景高、工藤嫡子犬坊丸、其他。〕

（右幕下假屋の場）――本舞臺四間通し六板飾り高足の二重、本緣附、正面一面笹龍膽の紋散しの襖、軒口に同じ紋附の幕張り、上下柵矢來、これに同じ紋附の幕張り、眞中白洲階子、總て右幕下假屋の體。二重の眞中に梶原景高兜鉢卷にて鎧陣羽織附太刀にて陣扇を持ちて控へ、平舞臺上下に大名一、二、三、四、何れも鎧下鉢卷にて床几に掛りゐる、この見得時の太鼓、鷄笛にて幕明く、

一 昨夜は思はざる椿事にて、河津が悴の祐成時致大雨に紛れ工藤殿の假屋へ忍び、祐經殿を父の敵と討取るのみか、

二 まつた其の場に有合せし吉備津宮の神職たる大藤内を殺害なし、其の虚に乘じ我君を討ち奉つる所存なるか、

三 御領の假屋を志し、支ゆる者を數知らず、或は切捨て手を負はせ、不敵の働きいたせしが、

四 兄十郎は仁田ノ四郎忠常殿に討取られ、弟五郎は五郎丸冬保殿に生捕られ、

一 明け行く空の曉天に、

二 雨のあがると諸共に、

三 やう／＼事は鎭りしが、

四 大膽不敵の兄弟二人、

一 油斷ならざる、

四人 事でござる。（ト奥より梶原景高出て、）

景高 右につき今日ツた、平次景高御前へ願ひ面縛なせし五郎めを此の所へ呼出し、夜討の趣意を調べんと、早朝よりの此の出席。

一　それは別して景高殿には、
二　君命とは申しながら、
三　今日の御大役、
四　御苦勞千萬に、
四人　存じまする。
景高　唯今これへ呼出し、この景高が言下に言伏せ、彼奴めを耻しめ御覧に入れん、各方にも見物めされ。
一　それぞ日長のよき慰み、
二　われ〳〵共も後學の爲め、
三　景高殿の御辯才、
四　これにて見聞、
四人　いたすでござらう。（ト景高花道揚幕の方へ向ひ、）
景高　やあ〳〵者共、五郎めを引摺り出せ。（ト揚幕の内にて、）
冬保　あいや、曾我ノ五郎時致は、御所ノ五郎丸冬保が、自身に召連れ、唯今それへ。
景高　なに、五郎丸か、

皆々　召連れるとな。（トこれより床の浄瑠璃になり、）

〽されば孝道比類なき、曾我ノ五郎も時なれや、天下に猛き勇力も盈れば虧くる綟縄の不覺を悔むばかりにて、五郎丸にぞ引かれける。

ト時の太鼓を冠せ、花道より前幕の五郎大童にて縄にかゝり、五郎丸兒髷鎧附太刀にて縄を取り、後より軍兵誂への太刀を持ち附添ひ出來り、花道へよろしく留る。景高これを見て思入あつて、

景高　やあ御自慢なり冬保殿、昨夜の手柄を鼻にかけ、自身に縄を取られずとも、兵卒どもに申し附け何故縄取りをおさせなさらぬ、君のお側に人なきやうで、却つて權威を失ひ申す。

〽詰りかくれば、

冬保　これはしたり景高殿、其のお詞こそ心得ね、冬保自身に召連れしは己が功をあぐるにあらず、武門の習ひ忠義の爲め、組敷く相手は名にしおふ、五ケの莊の主人たる伊東の孫の時致ゆゑ、雜人共の手に掛けず、某自身に縄取りいたす。

景高　さ、それが所謂むだな御差配、假令伊東の孫たりとも鎌倉殿へ敵たひし、叛逆人の血筋の五郎、情を掛けては我君の却つて御意に違ふの道理、きり／＼これへ引き据ゑめされい。

冬保　其のお差圖を受けずとも、只今それへ召連れん。五郎あれへ參られよ。

〽いたはる情するゑかぬる胸を悋へて時致は、緣端近く控へける。

トこの內五郎よろしく思入あつて舞臺へ來り、眞中に下に居る、五郎丸下手へ控へる。景高五郎を見て思入あつて、

景高　こりや時致、面を上げい。（ト言へども、五郎知らぬ顏をして居るゆゑ、）いやさ、面を上げい。（ト言へども矢張りぢつとして居るゆゑ、景高思入あつて、）こりや、五郎、再三申せど面を背けたゞ一言の答へもなきは、かゝるみぢめな有樣で此の景高に面會なし、一別以來面目ないか、閉口いたしてよいざま〳〵。（トこれより張扇の入りし合方になり、）あゝ、何日やらの事でありしが、化粧坂より其の方が戾るを見受け某が、呼返せしを見向きもせず尻尾を卷いて逃げをつたが、此の景高が恐ろしいか、但し女郎に現をぬかし、武士の根性失うたか、大小たばさむ武士が、途中に於て呼掛けられ、後を見せて逃げるやうな、卑怯な性根で敵討、ちと其の方には出來過ぎたが、まだ其の上に我が君を覘ふなどゝは及ばぬ事、あの爰な橫道者めが、

〽眼下に見くだし罵れば、時致腹にするゑ兼ねて、

五郎　默れ景高、汝が心に引較べ、人もなげなる其の雜言、この時致は天下の英雄、左樣な小事にたづさはらうや、馬鹿な事を。

〽と一言の答も胸に少將の、戀爭ひぞ是非もなき、冬保詞改めて、

冬保 いやなに、景高殿、承はれば其許には君の上意を蒙りて、夜討の趣意を問ひ糺すお役目にてはあらざるや、それに何ぞや私の、宿意と相見え過去りし、化粧坂の事など仰せ出されて無益の爭ひ、左樣な事は差おかれ、昨夜の次第逐一にお尋ねあつて然るべし、斯かる席にてなまめきし爭論などは此の冬保、承はつて迷惑千萬。

景高 いや〳〵只今某が五郎めに申せしは、私の宿意にあらず、臆病未練な根性にて親の敵を討ちしとは餘り不思議と存ずるゆゑ、雜話の端にもならうかとお耳に觸れしまでのこと、曾我ノ五郎へ景高が君に代つて問ひ糺さん、一々それにて返答いたせ。

〽肩肱いからし座を進み、

いかに時致、今一天下を知し召さるゝ、鎌倉殿の御座ましますす狩場の内へ忍び入り、亡父の恨みを散ぜん爲め、祐經殿を失ひしは不屆き至極と申せども、聊か孝の道にかなひ餘儀なき次第と存ずれども、叛逆謀叛に異ならず御領の假屋へ亂入なし、鎌倉殿を討たんとせし大膽不敵の重罪人、何等の趣意にて我が君を討ち奉つる所存なるや、これ狂人のいたし方、但し闇夜に眼眩み御所へ亂入なしたるか、此の返答は如何なるぞ。

〽如何に／＼と問ひかくれば、時致兩眼おし開き、

ト景高縁端へ進み、五郎景高をきつと見て、

五郎　こりや景高、この時致より汝こそ發狂いたして尋ぬるか、但し私慾に眼くらみ無道と知つて尋ぬるか。

景高　何がなんと。（ト誂への合方になり、五郎前へ進み、）

五郎　そも人倫の常として仁義忠孝禮智信の教を守り、義によつては一命をも輕んずるが、これ大丈夫の魂ならずや、今一天下の權たり共、右幕下殿は時致が祖父祐親の怨敵にて、伊豆の伊東の五ヶ庄滅亡させしを知らざるか、汝も元は平家にて君恩の蒙りながら、源家へ諂ひ二股武士の名を取りしを恥入りもせで、時致に無益の舌の根かわかすは、氣が違うてか狼狽てか、性根があらば平次景高、心に恥ぢて控へをらう。（ト五郎きつと思入、景高むつとなし、）

景高　やあ小賢しきその舌頭、箱根に於ていさゝかの習はぬ經を讀み覺え、理を非に曲げた無駄說教、汝が如きと議論を立つるは無益なり、いざ此の上は景高が自身の成敗致してくれん。

〽縁よりひらりと飛下りれば、冬保きつと押し隔て、

ト景高二重より飛下り五郎へかゝる、これを五郎丸立寄り、景高を留めて、

冬保　お待ちなされい景高殿、自儘の成敗相成りますまい。
冬保　やあ高景殿まで時致が、肩持ち顔なめさるゝは、居へ對して不忠でござる。
冬保　いゝや不忠にあらざる冬保、お留め申すは忠義の爲め。
景高　とはまた何故。
冬保　されば今日其許が君の上意を蒙りしは、夜討の趣意を糺せよと仰せを受けしお役目ならずや、其の詮議もめされずして無謀の成敗なす時は、鎌倉武士は義も知らず勇に誇つて仁なしと、世の人口に疎まれなば天下に亂の生ずる基ゐ、そこを存じて冬保が、お留め申すは忠義の爲め。
景高　いゝや仁義を施すは人間らしき奴にこそ、君に敵たふ奴なれば理非を論ぜず討果すは、後日の難を避けんが爲め、邪魔立てせずとお退きなされい。
冬保　斯樣に申せど聞入れなく、君より預る時致を、自儘の成敗めさるとあらば、此の冬保がお相手いたさう。
景高　面白きその一言、御厩上りの小舍人冬保。
冬保　我意に募りし平次景高。
景高　いでや此の場で、

兩人　勝負を遂げん。

〽既に斯うよと見えたる折柄、（ト兩人太刀へ手を掛けきつとなる、此の時奥にて、）

賴朝　兩人控へい。（ト聲する。）

一　あのお聲は、

四人　我が君樣。

兩人　はゝはッ。（ト控へる。）

〽聲かけまくも天が下、實にも畏き君が代や、草木も靡く鎌倉の星を列ねし大小名、附添ひ出御なしたまふ。

ト此の内警蹕の聲になり、正面の襖を引拔く、後一面富士の裾野諸家の假屋を見せたる切出しの遠見になり、小姓二人虎の革の敷物を持ち出で、よき所へ敷く、賴朝烏帽子狩衣鎧にて出る、梶原景時鎧陣羽織、其の外大名五、六、七、八、九、十、何れも鎧兜鉢卷陣羽織にて附添ひ出で、左右へよろしく居並ぶ。これにて平舞臺の六人平伏する。

〽大將それと見やりたまひ、

賴朝　假屋を騒がす罪人たりとも、未だ詮議もなさゞるに、成敗などゝは粗忽なるぞ。

景高　はゝはッ。

景時　上意を待たぬ無禮奴めが。

景高　恐れ入り奉る。

頼朝　（思入あつて、）昨夜の大雨に庭前も、何となくしめりつらん。誰そあるか、時致に敷革與へい。

ト下手にて、

軍兵二人　はあゝ。

へはッと答へて、軍卒が携へ出る猪の革、法例とこそ見えにけれ。

トこの内下手より軍兵二人、猪の皮の敷革を持ち出來り、舞臺よき所へ敷いてはひる。

五　罪人たりとも法例を、

六　亂したまはぬ我が君の、

七　お情厚きその敷革、

八　有難くお受けをいたし、

九　時致それへ座を定め、

十　夜討の趣意を我が君へ、

五　逐一言上、

皆々　いたされよ。

〽情に返す詞なく、土壇にあらぬ敷革の上に座を占め、につこと笑み、

ト五郎思入あつて敷革の上へ居直り、

五郎　この敷革を見るにつけ、思ひ出すは十四年過ぎし昔の事なりしが、由井ケ濱邊に引出され、既に命も旦夕に迫りし折は死を悲しみ、今は本意を達せしゆゑ、冥府へ急ぐ敷革と思へば心勇まれて時致席をまうけてござる。

〽むんづと座せば御大將、

頼朝　はて勇ましき五郎が振舞、昨夜の趣意を逐一に、頼朝これにて問ひ糺さん。

景時　あいやわが君、それにては御威光を落すに似たり、忰が粗忽に成替り、景時吟味仕らん。

五郎　いゝや鼠輩の景時づれに、調べを受くる謂れなし、口を噤んで控へてお居やれ。

景高　憎き雜言。（ト立ち掛らうとするを、）

景時　こりや、御前なるぞ。（トきつといふ、景高是非なく控へる。）

頼朝　然らば自身に問ひ糺さん。いかに時致承はれ。（ト大小入りの合方になり、）汝等兄弟不倶戴天の仇な

れば、祐經は討つべき趣意もあるべきが、今其の方が言ひし如く由井ヶ濱にて一旦斬罪申し附けしが、名家の子孫斷ゆるも不便と、助命なせしは我が情、命の恩ある頼朝を討たんとなせし所存は如何に。

五郎　何事のお尋ねかと存ぜしに、其の儀に於ては時致にお尋ねまでも候はず、夫の唐國の孟獲は七度助命せられしかど孔明を敵と覗ふ、近き例は義朝公、保元平治の戰ひより待賢門の軍敗れ、野間の内海に家人たる長田が爲めに討れたまひ、君も其の後捕虜となり、外三人の公達も御母常磐もろともに伏見の里の艱難も、夫の宗清が情によつて助命となり、まつた其の後相國殿源家の血筋を絶さんと、旣に御命危ふかりしを、小松の内府重盛公池の禪司諸共に、諫めに依つて佐どのは蛭ヶ小島へ配流の身、然る所時運來つて平家を滅ぼし、今武將と仰がれたまふは何等の趣意に候ぞ。

頼朝　む丶。

五郎　例に習ひ祐成時致、一旦助命を蒙りし、恩は恩仇は仇、勇士の本意を失はんや、御賢慮あつて然るべし。

頼朝　汝が申す處一應の理は聞えしが、爰をよう聞け、源氏平家は武門の棟梁、共に朝廷守護の任、平家背けば源氏より討ち、源氏悖れば平家これを正す、いはゞ同輩友吟味、まつたそれ迚も私なら

ず、賞罰共に官府の御沙汰、兵衛佐たる頼朝を何ぞ清盛進退ならんや、助命ありしも帝の御恩、流罪となりしも朝家の勅命、平家追討なしたるも上皇の院宣蒙る故のこと、私の計ひならず、然るに祐親平家へ黨し我が官軍に敵する間、誅戮なせしは公の政道、さ、これにも汝批判あるか。

五郎　さ、それは。

頼朝　逆徒伊東が孫なるゆゑ、誅罰なすべき命を助けし頼朝を仇と思ふは、こりや其の方が僻事であらうぞよ。

五郎　むう。

景高　我が君の仰せの通り、源氏に背く伊東の族、御助命ありし御仁心、よし又君が無成敗にもせよ、刄向ひならぬが臣下の常、それに何ぞや、我が君を敵呼はり、傍痛い。

五郎　やあ又してもいらざる差し出で、臣下とは誰が臣下、祖父祐親を始めとしてわれ〱兄弟右幕下殿へ何日仕へた。

景高　假令君に仕へずとも、御先祖八幡公以來、坂東武士は悉く源氏の御家人同然だわ。

五郎　その又家人の汝等が、何故平家へ仕へをつた。

景高　やあ。

五郎　平家の恩を打忘れ、石橋山にて兵端を開かれしより源家に隨ひ、僅かな功を鼻にかけ出頭顔なる二股武士、元より頑愚な汝等親子、我が朝の御國體君臣の名分は辨へをるまい。抑我が大御國は一君萬臣、眞の君と仰ぎ奉るは一天萬乘の君ばかり、主上へ對し弓引けば逆賊とも謂つべきが、右幕下殿は時の武將、まして況んや祖父の怨敵、逆賊とは言はれまい、殊更以て伊東河津は藤原の末流、尤も時の盛衰にて大小尊卑はありと雖も、臣下とは言はれまい、追從を元とする汝等如きが存ぜぬ事だ、退りをらう。

賴朝　むゝ、左程君臣の道を正す其の方が、何故武邊に拘りなき吉備津ノ宮の神職たる大藤内を害せしぞ、何等の趣意のありつるか、其の意を得ざる不審の二ヶ條、罪なき者を殺害なすは大丈夫の身にあらざる仕業、時致答へは如何なるぞ。

五郎　こは仰せとも心得ず、これに居合す景時や景高づれはいざ知らず、總て信ある人間たるべき者日頃水魚の朋友が、一期の場所に有合せ助力なさゞる者あらんや、祐經殿を討ち取る砌り寢所の内に有り合せ、支へ立てせしそれゆゑに、止む事を得ず殺害なしたり。

景高　して又工藤の假屋まで忍び入るには數ヶ所の關門、定めて出入りも嚴重ならんに、如何いたして通行せしや。

景高　それぞ北條、畠山、和田が手引で兄弟が、忍び入りしに相違はあるまい。

五郎　いゝや手引はかつてなし、父の仇は不倶戴天、一身の外味方なき兄弟二人が寸孝を天も助力を賜はりしか、篠を束ねて降亂す大雨に紛れ易々と、忍び入つたる昨夜の本懷、關門如きは愚なこと鐵壁にて固むるとも、忍ぶに難きことあらんや。

賴朝　然らば問はん、汝等兄弟さ程の術のありながら、此の賴朝の寢所へは忍び得ずして假屋を騷がし、など本懷を遂げざるや。

五郎　さん候、祐經殿を敵と狙ひ候は不倶戴天ともいふべきも、祖父の仇とは申せども君には人馬を勞せし上所領を奪ひたまひしなれば、これ戰國の習ひにて討ち討たるゝは武士の常と心得候へば、さまでに恨む所存なく、即時に望みまうけしゆゑ、扨こそ事を爲損じたり、君も年來附狙はゞやわか討たざることあらんや。

賴朝　して又、宿意なき多人數を、或ひは切捨て手を負はせ、討取りたるはこれ如何に。

五郎　百萬騎にも勝りたる君の御首級得んものと、進むに刄向ふ人々は、餘儀なく切捨て候へど首級を討ち取る覺えなし。

賴朝　して又、平野馬之允は如何いたして切伏せしぞ。

五郎　されば平野馬之允と名乘つて出し武者一騎、兄十郎が渡合ひ第一番に切伏せたり。
頼朝　して〳〵愛甲三郎が、二番に切つて出たるは、
五郎　この時致が渡合ひ、弓手の腕を切下げしに、かなはじものとや引退く。
頼朝　して又岡部彌三郎を第三番に切掛けしは、
五郎　兄十郎が渡り合ひ、深手を負はせ追散らす、
頼朝　して〳〵四番に立向ひし、原三郎は如何になしぞ。
五時　時致得たりと渡り合ひ、肩口深く切り込んだり、
頼朝　して又五番の吉香小次郎、切捨てたるは如何にして、
五郎　小柴を小楯に十郎が、暫く戰ひ切捨つる、
頼朝　して六番の嘉藤太は、
五郎　右の腕の深手に退く、
頼朝　又七番の堀藤太は、
五郎　小鬢を割られて逃げ去りたり。
頼朝　して八番の小太郎は、

五郎　袈裟切りとなる運の盡き、九番に切つて出でたるは、

頼朝　宇田の五郎と名乘りかけ、

五郎　眞向二ッに切り割りたり、

頼朝　して又臼杵八郎が、十番に出て向ひしは、

五郎　始めの廣言に似もやらず、僅かの手疵忍びかね、犬蹲ひに逃込んだり。

頼朝　さ程の手並を持ちながら、五郎丸に組敷かれ繩目の耻辱を受けたるは、時致力劣りしや。

五郎　いゝや力の劣りしならねど、豫て夜討の折柄に兄十郎の戒にて、女數多あるべきぞ、太刀の遣ひに心附け無益の者に手を負はさば、後日の聞え耻かしと牒し合せしそれゆゑに、薄衣かつぎし若者こそ女と心得目も掛けず、侮りしゆゑ不覺を取りたり。

冬保　如何にも時致、さもありなん、我れまだ力は劣れども、君の御前に程近く暴れ込んだる剛の者、やわか其の儘おくべきと、過し昔に御曹子が五條の橋にて辨慶を取つて押へし例に習ひ、衣引ッかつぎ待受けしに、女と思ひ目を掛けず行き過ぎしを後より、むづと抱き留め捻ぢ合ひしが、君の御運の強かりしや、歩みの板を時致が踏み貫きしそれゆゑに、折重なつて組敷きたり。

頼朝　してまた兄の祐成は、仁田ノ四郎忠常に討たれて最期を遂げたるが、時致そちは知らざるや。

五郎 〽尋ねに時致打ちしをれ、

（思入あつて、）されば夜討の前以て、兄弟最期を共にせんと契約いたしおきつるが、互ひに多人数引受けて闇夜の血戰いたせしゆゑ、十郎を見失ひ、尋ぬる暇も嵐吹く敵の木の葉に支へられ、我は一人縛せられ、仁田ノ四郎忠常に討たれたまふは情なし、嘸や最期の際までも此の時致はいづくにと、在所を尋ねめされしと、思へば胸もさし塞がり、殘念至極に候なり。

〽さしもに猛き時致も、兄の最期を思ひやり、さし俯くぞ哀れなる。

ト この内五郎よろしく愁ひの思入、

〽心を察し御大將、庭のあなたへ向はせたまひ、

頼朝 （上手へ向ひ、）やあ〳〵忠常何れにある、昨夜の首級持參いたせ。（ト上手にて、）

四郎 四郎忠常唯今それへ。

ト 大小の鳴物になり、上手より鎧兜鉢卷陣羽織附太刀にて、首級を抱へ出る、これへ軍兵一人折れたる太刀を持ち附添ひ出る、四郎忠常上手下に居て、

御諚に任せ夜前の首級、持參いたしてござります。

頼朝 こりや時致、最期を遂げし祐成が首級に對面いたさせん、一世の別れとツくりとそれにて名殘り

をいたしてよからう。

五郎 すりや其の首級が祐成どのとな。

四郎 實檢に供へし後、血緣の者に渡さんと君に願つて申し受け、昨夜の功に代へたる首級、それにて對面いたされよ。

〽籠る情に首桶の蓋取りのくれば祐成が、無慙の最期時致は、一目見るより張詰めし心も撓み我が顏を、首級に當て身を悶え、

ト この內四郞忠常件の首桶を五郞の前へ持ち行き蓋を取りのける、內に切首あり、これにて五郞首へ頰摺りなし、トヾ顏を上げ、これより橫笛になり、

五郎 おゝお懷かしや十郎殿、御身と我は兄弟の中でも深き因みにや、父が最期のその後は五ツや三ツの頃よりも御身を慕ひ我を憐れみ、母に勘氣を蒙りて身の寄邊なかりしを一方ならぬ愛しみ、首尾よく本意を遂げし上、野外に屍は晒すとも最期は共にと期したるも、晝餠となりて死に後れ、鎌倉殿の面前にて御身の首級に見えんとは。

〽夢にも知らでありつるぞや。

定めて昨夜時致が在所を尋ねさせつらんが、斯くあさましき御最期は、遂げられまじと存ぜし故、

深入りなせし我が過り、頓て冥府へ追附いてお詫は篤と仕つる、忠常殿の手にかゝり討たれたまひし御身より、跡に殘りて時致が繩目の耻辱に惜しからぬ、一命ながらへ淺ましき首級に見ゆる心の切なさ、幾千なるか御推察下され。

ヘ鬼をも挫ぐ兩眼にそゝぐ涙の皐月雨、晴間もなくや時鳥、血を吐く思ひぞ道理なる。

トこの内五郎よろしく愁ひの思入。

ヘ大將始め人々も、さこそと哀れ催せば、忠常涙押し拭ひ、

トこの内皆々顏をそむけて愁ひの思入よろしく、仁田ノ四郎前へ進み出で、

四郎　時致の歎きも道理、さりながら此の忠常が遠く及ばぬかの祐成を討取つたは、過の功と謂つべし。

賴朝　さもありなん、兄弟が昨夜の働き逐一に、これなる五郎に聞きつるが、祐成忠常兩人が其の働きは如何なるや、忠常それにて物語れ。

四郎　我が君の上意と申し、祐成殿の靈魂を慰めの爲め物語らん、時致殿にもお聞きあれ。

ヘ物語らんと座を進み、（ト忠常陣扇を持ち前へ出る、是れより鳴物になり、）

扨も昨夜の狼藉は、何者なるやと爰かしこ、敵を求むる折も折、

ヘ望む相手を松ケ崎、大樹を小楯鍔元より滴る血汐に喉を潤し、

弟五郎は何れに居る、時致やァい。

ヘと呼ばゝる若者、

見れば入魂を結びたる、河津の三郎祐泰が遺兒の十郎祐成、君の爲めには親兄の因みも餘所に渡り合ひ、

ヘ受けつ流しつ虚々實々。

仁田が運の強きにや、祐成が太刀鍔元より、ぽつきと折れしを附入つて、

五郎　や。

四郎　されば某得たりと附入り、長刀にて左りの足を薙ぎ、勝負は見えしと其の儘に引かんとせしを祐成が、やよ忠常情なし、早首討つてたまはれと健氣な詞に某が、終に首級をあげてござる。

ヘ有りし次第を物語る、聞くに五郎は齒喰みをなし、（ト五郎無念の思入にて）

五郎　扨はさしもの微塵丸、鍔元より折れたるよな、

四郎　疑念をはらす其の爲めに、忠常持參いたしたり。

ヘ家來に持たせし微塵丸、五郎が前へ差出せば、

ト軍兵に持たせし太刀を取つて出す、五郎折れたる太刀を見て、

九郎　斯くいふ事と知るならば、我が友切を兄上へ讓らんものを鍔元より、微塵丸が折れたるばつかり
無慙の後れを取られしか、むゝ。
〽先非を悔む一言に、御大將は目早くも、（ト賴朝冬保の持ちたる太刀へ目を附け、）

賴朝　こりや冬保、その太刀これへ。

冬保　はッ。

〽手に觸れたまひ拔きはなし、見れば違はぬ友切丸、
ト賴朝太刀を拔き見ることよろしくあつて、

賴朝　こりや時致、この太刀は何方より其の方が手に入つたるぞ。

五郎　さあそれは。（ト思入。）

賴朝　はて、其の方は珍らしき、劍を所持なしをりつるな。
〽思ひ掛けなき劍の尋ね、差詰りしがさあらぬ體、

五郎　（思入あつて、）求めてござる。

賴朝　何と。

五郎　それぞ日外鎌倉殿御上洛の折柄に、祐經殿を討たんが爲め、京地へのぼり都にて測らず見當り、

求めてござる。

〽詞の文に景高は、爰ぞと思ひしやくり出て、

景高　いや〱、それは聞き取れぬ、曾我貧乏と名を取りし兄弟づれが自力にては斯かる見事な業物を求めて持たう筈はない。あゝこりや、何か祐經殿を討たんが爲、何れの家にか忍び入り、賊を働き盗んだか。

五郎　やあ舌長し平次景高、假令身貧に迫ればとて賊をなしたる覺えなし、黄金に代て名劍を兄弟常に嗜むは、勇士の習ひ珍らしからず、汝等如きの存ぜぬことだわ。

景高　然らば問はんがあの劍は、何程の價にて京地に於て手に入りしや。

五郎　さあ、それは、

景高　返答なきはいよ〱以て、いで景高が一詮議、

〽仕濟まし顏に立ち上がれば、

トこの内賴朝こなしあつて、扨はといふ思入よろしくあつて、

賴朝　景高控へい。

景高　でも、怪しげな、（ト又立ちかゝらうとするを、）

景時　君の御上意、控へてをらぬか。（トきつと言ふ。これにて景高餘儀なく控へる。）

頼朝　こりや時致、この劒は箱根に於て、行實阿闍梨に申し受けたか。

五郎　や。（トぎつくり思入。）

頼朝　さ、知らずんば申し聞けん。

〽劒を納め禮拜なし、（ト樂太鼓の入りし合方になり、）

これこそ源家重代の友切丸の寶劒にて、平家追討の其の砌り弟義經所持なせしが、兄弟不和になりし後、箱根權現へ祈誓を掛け奉納せしと聞きつるゆゑ、取り返さばやと存ぜしかと、一度神へ捧げし劒、神慮の程も恐れありと其の儘空しく打ち過ぎしが、此の度測らず我が手に入り生前の悦びこれに過ぎず、は丶有難し忝なし、まつたあれなる微塵丸は同じ清和の末流たる木曾義仲の重寶なりしを清水義高傳來なし、二所權現へ奉納せしと過ぎつる頃より聞き及ぶ、かれこれ思ひ合すれば行實阿闍梨が沙門の身にてそれらの儀をば辨へなく、たゞ尋常の太刀と心得兄弟二人へ與へしならん、死後に迷惑掛けまじと虚言を構へる所存であらうが、源家の重寶測らずも我が手に戻る悦びに、いかで咎めを申し附んや、時致心苦しむるな。

〽大地を見拔く大將の明察仁慈時致も、感服してぞ見えにける。折柄打ちし幕張りの蔭に窺ふ

ふ犬坊が、鞭携へて躍り出で、

トこの内時致よろしく思入、爰へ下手幕張りの蔭より犬坊丸着流し袴股立にて鞭を持ち出來り、

犬坊 父上樣の仇敵、時致覺悟、

〽縛せられたる後より、りう〳〵はつしと打ちすゆれば、

ト犬坊丸五郎の側へ立寄り、鞭にてよろしく打ちすゑる。これにて五郎きつとなつて、

五郎 やあ、何奴なれば敵呼はり、無禮いたさば睨み殺すぞ。

〽はつたと睨む勢ひに、寄るも寄られず犬坊は、無念涙に暮れ居たる。

トこの内五郎犬坊を睨む、犬坊丸これに恐れて寄り附けぬこなしあつて、ト、下に居て袖を額へ當て泣き伏す。忠常、冬保これを見て、

四郎 御前でござる、犬坊丸、

冬保 無禮の手向ひ、

四郎 冬保 控へ召されい。

五郎 (思入あつて、)なに、この少年が犬坊どのとな。

四郎 工藤の嫡子、犬坊丸。

五　我が君のお許しなきに、
六　此處へ推參なし、
七　未だ詮議も落着せず、
八　罪科の程も定まらぬ、
九　いましめ受けし時致を、
十　自儘の打擲相成らぬ。
五　無禮でござらう。
皆々　控へめされい。
景時　あいや、其のお詞はさることながら、父を討たれて無念に思ひ、君の御前も憚らず、時致を打擲せしは、
景高　辨へのなき少年ゆゑ、たゞ御仁慈の御沙汰にて、此の儀偏に御宥免、何卒願ひ、
景時景高　奉る。
〽日頃の誼梶原が、君の御前を執成せば、時致面を和らげて、
五郎　(思入あつて、)いやなに犬坊どの、これへござれ。(ト言へども猶豫して居るゆゑ、)はて、何にも怖いこ

とはござらぬ、臆せずこれへ進まれよ。（トこれにて犬坊丸怖々五郎の側へ進む。五郎顏をちつと見て）扨は御身が聞き及ぶ、祐經殿の嫡子たる犬坊どのでありしよな。（ト床のメリヤスになり）對面致すは初めてながら、御身も我も一家中父と子とが此世にて敵同志にあらざれば、祐經殿の御最期を愁傷なして力を添へ助太刀をもいたすべきに、如何なる前世の報いにや、御身の父は我が亡父祐泰殿を失ひて、我々兄弟兩人に父の敵と附けねらはれ、十八年が其の間艱難辛苦いたせしが、御身は仕合せものぞや、昨夜討たれし父の敵を今日直に討たるゝは、取りも直さず修羅道の、苦艱を見るも此の世から、あらあさましや人の一生、討ち討たるゝは武士の習ひと思ひ候へば、此の世に用なき時致を打つて腹だに癒るならば、いくらも打たれよ犬坊どの。

〽さすが孝心時致が我が身の上にたくらべて、打たるゝ情默然と兩眼とぢて控ゆれば、利發に鞭もあげ兼て啜りあげたる恨み泣き、

トこの内五郎犬坊丸へ體を寄せ、打てといふこなし、犬坊打ち兼ねるこなしあつて、トゞ鞭を投げ出し下に居て、

犬坊　情なき其の詞、時致殿は荒くれて強い人ぢやと聞きつるが、此の犬坊に孝道を立てさせて下さるなら、なぜ父上の恨みを述べ怒つて居ては下されぬ、打てと言れて打つものは仁義を知らぬ武士

と人の誹りを受くるとやら、それ程情を知るならば父上樣を討たずとも、外に仕樣もあらうもの

〽如何なる遺恨か古への事は知らねど差當り、父を討たれし無念さは、寐ても寐られぬ口惜しさ、

子として親の最期をば餘所に見るのは孝ならず、どうぞ敵が討ちたいと思へど一人は討死し、一人は昨夜生捕られ、我が君樣のお差圖で成敗を受け、死ぬるとやら、科人ならば、

〽手出しもならず鎌倉へ、戻りし時は母さまへ、

申し譯が立たぬゆゑ、せめて刄は當てずとも心の濟むだけ此の鞭で、打つて恨みを晴らさうと、我が君樣の御前も恐れず、隱れ忍んで居りました、不便と思はゞ時致殿、情を掛けず尋常に、敵となつて下さりませ。

〽と一言に時致心察しやり、

五郎　おゝ健氣なり犬坊どの、父を討たれし無念さは、御身も我れも同じこと。

犬坊　父上樣の仇敵。

五郎　うたるゝものなら、打つて見よ。

犬坊　やわか打たいでおくべきか。

〽打つは孝心、打たるゝ義心、

父の敵、時致思ひ知つたるか。

〽情を感じ人々も、口を閉ぢてぞ控へける。

トこの内犬坊丸五郎の傍へ立寄り鞭にて打ちすゑる、五郎體をさし附け自由に打たるゝ事よろしく、

頼朝感心の思入にて、

頼朝　ほゝお、實に堯舜の聖代も今見る如く百杖に、恨みを晴らし晴らさするも孝心義心の其の潔白、頼朝感心いたせしぞ、こりやく犬坊、それにて恨みは晴れたであらうな。

犬坊　仰せの如く父上を、討たれし恨みも晴れまして、心殘りはござりませぬ。

頼朝　して、時致にも犬坊に打たれて無念は殘らぬか。

五郎　打てと名乘つて打たるゝ程覺悟の上の時致ゆゑ、遺恨を殘す謂れなし、さはさりながら我れく は十八年が其の間艱難を仕つり、やうく夜前本意を遂げしに、犬坊どのには我が父を昨夜討た れて今日ツた、仇を報いし果報者、たゞ羨ましう存じまする。

〽笑ひながらに答ふれば、又も平次がしやくり出で、

景高　やあ百杖打たれしばかりでは羨しいとは言はれまい。刑罪の場へ引出し、君へ願つて犬坊どの、

頼朝　時致が首ぶち落し、亡父の恨みを晴らされよ。
頼朝　いゝや、これなる時致は、助命いたさせ領地を與へん。
景時　なに、時致を、
皆々　御助命とな。
頼朝　勇あり義ある時致をいかで此の儘失はん、今目前に百杖うたせ犬坊丸が孝道を立てさせたるは天晴義心、我れまた河津が家名を興させ、汝が孝を立てさせんが、多年の恨みを飜へし旗下に屬して忠勤を勵む心はなきや如何に。
〽如何に〳〵と問ひたまへば、時致につこと打ち笑ひ、
五郎　やあ助命とは思ひも寄らぬ。（トのりになり、）昨夜の最期、今日まで延はるさへも冥府なそ、兄祐成の待ちつらんと心詫しく候ぞや。まして一人此の世に殘り祖父の仇たる右幕下殿より惠みをうける謂れなし、たゞ此の上は一刻も早く罪科に處せられよ。
〽一心變ぜぬ時致が、義膽に孝もたつか弓、ひくや並居る武士も、
四郎　可惜勇士を闇々と、捨つるは惜しきものながら、
冬保　君の仁惠うけずして、最期を急ぐとあるからは、

景高　片時も早く犬坊どの、君へ願うて時致を。

犬坊　いえ〳〵最早時致殿を、恨む心はござりませぬ。

景時　して刑罰の御所置はな。

頼朝　それぞ頼朝かねてより認めおきし此の罪狀、忠常それにて讀み上げよ。

〽差し出したまへば開き見て、

ト頼朝手箱の內より立文を出し、忠常に渡す、忠常開きみて、

四郎　やあ、こりや罪狀と思ひの外、曾我滿江へ我が君より、一二百餘町のお墨附。

五郎　なに、母人へお墨附とな。

四郎　篤と拜見いたされよ。（ト忠常五郎へ墨附を見せる、五郎讀み終りて、）

五郎　すりや罪科を却つて御仁惠にて、

頼朝　おゝさ、旗下になさんと思ひしが最期を急ぐ上からは、それぞ兄弟兩人が、死後を營む弔ひ料、

四郎　六十餘州を掌に、握らせたまふ頼朝公、

冬保　勇士を惜しみ斯くまでに、寛仁大度の御計ひ、

景高　子ゆゑに母の滿江も、一二百餘町の頂戴もの、

景時　そちも孝道忘るゝな。
五　かゝる御仁惠ある上は、
六　泰平謳ふ鎌倉の、
七　御代は萬歳、
皆々　萬々歳。
頼朝　時致を早く引立てよ。
五郎　あ、斯くまで厚き、（ト思入あつて氣を替へ）いざ、お引き下されい。
〽智仁勇士も三國の雲井に高き富士ケ根や、納まる御代こそ目出度けれ。
ト頼朝は件の太刀を持ち立上がる、忠常は十郎の首を取つて五郎に見せる、五郎愁ひの思ひ入にて立ち上ろ、冬保〔判読不能〕取りて附添ひ上手に立ちかゝり、跡皆々引ばりよろしく段切にて、
ひやうし　幕

夜討曾我（終り）

繰逢廓花帰見月

春趣向綴直

東京日々新聞が御意に叶うてまたぞろや御好み故に附錄となし新開町の洗湯で淺くら六三が二かいばんのおそのに預けし金側の時計を盗む天ぷら銀次おなじ其夜の十二時すぎ貧に迫りて戸のすきを窺ふ秋津某はわが身のうんも春米屋よくに赤米仙右衛門が殺しかねぬを幼少の悴が親を諫めしは是學校の教へにして賊も心を改めて商法ひらく洋物店のきを並べし牛なべや五分もすかざる五郎七が思はぬ難も大恩の主人の息子にいひかぬる啞と目くらとつんぼうのざんぎり左吉が詮議の高聲元より知らぬ德右衛門失ふ品を尋ね出し蛇の目をあくで洗ひ粉や附木たはしを賣りあるくおむつが逢はれぬ仙太郎に鐵道故にめぐり逢ふ自由の足りる世の中は實に有がたき文明の御代

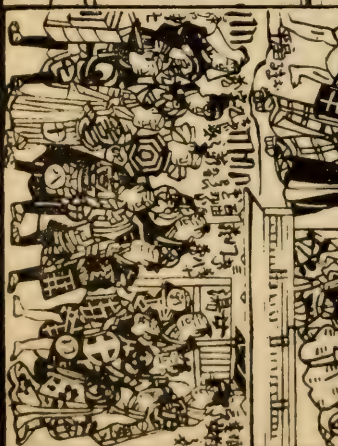
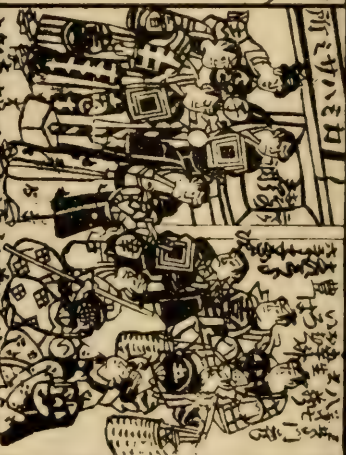
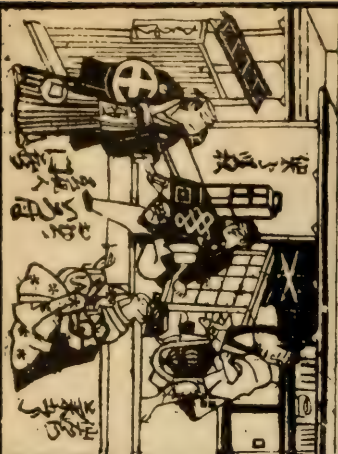
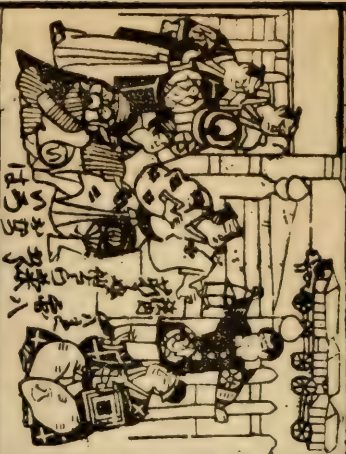
「三人片輪」は明治七年七月守田座に稿下された、作者五十九歳の時である。散切物の第二作である。作者の自宅へ來る米屋が、升目を親指の分量だけづゝごまかすのを見て、それが一つの暗示となつて生れたと傳へられるものである。さして歡迎を受けるには到らなかつたが、新時代の世相を活寫するには相當の苦心と努力の跡が認められる。田村成義子の續々歌舞伎年代記には次のやうに誌されてある。「此二番目は前狂言の番附には載せながら出幕にならざりし三人片輪の書きものなり。芝翫牛肉屋のあるじにて啞に左團次理髪床の亭主にて聾に、菊五郎仙右衛門にて量目を盜み不義の財を得たる報いにて盲目となり、按摩の世話場に咲松の悴が洋行すると聞き、これを追ひ行きてステーションに至りしも發車の後にて面會ならず、絶望のあまり蹈鞴ふみて慟哭することなし大出來大評判なりき。」と。

書下しの時の役割は、尾上菊五郎（赤米仙右衛門、天ぷら銀次）、坂東彦三郎（東京の士族秋津豊）、中村芝翫（牛肉屋五分れぎ五郎七）、市川左團次（西洋床ざんぎり佐吉）、中村仲太郎（新開町の湯屋德右衛門）、坂東しう調（左吉女房おさき）、尾上いろは（仙右衛門女房おむつ）、市川子團次（商法家淺倉六三郎）、尾上梅五郎（紙屑買權兵衛）、坂東喜知六（下剃刈込のはれ吉）、市川幸升（書生なまじゆく鷄卵）、大谷門藏（差配人杢右衛門）等。

挿繪にしたのは稿下當時の繪草紙の一部である。

大正十四年四月

校訂者

福寿湯の場
氷店の場
西洋床の場
牛肉店の場
裏借家の場
道具店の場

繰返開花婦見月（三人片輪――三幕）

序幕

新開町洗湯の場
仙右衛門内の場
深川萬年橋の場

〔役名――秋津豊、湯屋の亭主徳右衛門、絹屋息子六三郎、巾着切三五郎、同茂七、合長屋の佐次兵衞、百姓、町人、湯屋の三助、巾着切天ぷら銀次、搗米屋仙右衛門、仙右衛門忰仙太郎、牛鍋屋亭主五郎七。福壽湯のお関、仙右衛門女房おむつ、小娘お竹、同お駒等。〕

（新開町湯屋の場）――本舞臺一面湯屋の表掛り、庇の上二階の手摺を見せ、上の方男湯の入口、下の方女湯の入口、此左右格子のうちへ目隠しの簾を掛け、總て新開町湯屋の體。爰に○△□の三人町人體のこしらへにて手拭を提げ、お竹お駒小娘のこしらへにて、手拭糠袋を持ち立掛り居る、此模樣おいとこ節にて幕明く。

○　こう吉や、手前も湯は爰と極めたのか。

△　さうよ、直き表に湯もあるが、爰は新湯できれいだから、ちつと遠いが爰まで來るのよ。

○　お竹さんにお駒さん、おめえ方もわざ〳〵こつちまで來るのかえ。

お竹　きれいで心持がいゝ湯だから、今月からこつちへ來ますよ。
お駒　それにまたこつちの二階へ、友達が來て居るからさ。
△　はあ、それぢやあの二階番のお園ぼうは、おめえ方の友達かえ。
お竹　あの子は髮結床の佐吉さんの妹で、子供のうちから稽古朋輩さ。
○　成程比丘尼橋の髮結床の娘で、爰の家とは親類だといふはなしだ。
△　あれの兄貴は、ざん切佐吉といつて、西洋風の天窓を刈るのが上手だといふ評判だぜ。
○　道理であすこの髮結床は、大層立派な西洋造りだ。
お駒　わたしやお園さんにちよつと逢ひたいが、二階は込合つて居るだらうね。
お竹　二階も下も爰の湯は、いつもお客が一杯だよ。
□　實にこんなに流行る湯も、珍らしいなう。
□　何にしろ、一遍飛込まうかの。
○　さうだく、一皮剝いて色を白くしにやあならねえ。
お駒　お竹さん、こつちも這入らうかね。
お竹　どれ、這入つて來ませう。

三人　おめえ方一緒に歸らうぜ。

トわや／＼言ひながら男湯と女湯へ別れてはひる、流行唄角兵獅子にて、花道より三五郎辻賣りの贋物師のこしらへ、百姓木綿やつし、象股引、近所の百姓のこしらへにて、三五郎の胸倉を取り、跡より義七相摺の惡漢のこしらへにて、これを留めながら出來り、花道にて、

百姓　これ、貴樣は／＼太え男だ、さあ連れて行くから、覺悟さつせえ。

三五　これさ、往來中で見ツともねえ、まあ靜かにしなせえ。

百姓　いゝや、靜かにされるものか、何でも是れから連れて行つて、白い黑いを附けにやあならねえ。さあ、歩ばつせえ。（ト百姓無暗に三五郎を引立てる、義七これを留めて、）

義七　おい／＼田舍の兄イ、どういふ話しだが知らねえが、まあ了簡しねえ／＼。

百姓　いや／＼打捨つておかつせえ、こんたの知つた事ぢやない。さあ、屯まで一緒に歩べ。

ト三五郎を引摺り舞臺へ來る。

義七　これさ、待ちねえといふことよ。（ト義七留めながら舞臺へ來て、中へはひり、）さつきから留めて居るのに、待ちねえと言つたら待ちねえな。（ト百姓を引分けて、）そんなに手荒いことをしねえで、おめえが屯へ此男を連れて行かうといふ譯を、おれに話して聞かせなせえ。

百姓　そんならこなたに話すから、まあ其譯を聞かつしやれ。去年の暮に此男が辻で煙管を賣つて居て、性のいゝ銀だといふから一兩二朱でわしが買つて、直に田舍へ持つて歸り、學校所の寄合に村の者に自慢をしたら、贋物だといふ評判だから、疑ひ晴らしに灰をつけ磨いて見たら中は赤銅、こいつはとんだいかさまと、それからわしも東京へ出る度毎に此男の、行方を方々尋ねたが、今日思はずも出つくはしたのは、もう此男の運の盡き、是れから屯へ連れて行き、わしやあ調べて貰ふ積りだ。

義七　成程話しを聞いて見りやあ腹の立つなあ尤もだ。これ、それぢやあ手めえ此人に、かぶせ物をしたのだな。

三五　おいおい常談言つちやあいけねえ、何のつけに煙管なんぞを人におれが賣るものか、おらあ手めえも知つての通り、堅氣一方の職人だ、商ひなんぞをするものか。

百姓　いやいやしないことがあるものか、油町の橋臺で、こなたの手から贋物を、確に買つたに違ひない。

義七　そりやあおめえ了簡違ひだ、此男はおれが友達、稼業は石屋職人で、石よりも堅い男だ。

三五　紙屑買や天道ぼしと、間違へられちやあそつちより、おれの方で了簡ならねえ。

義七　こりや全く人違ひ、おめえに煙管を賣つたのは、此男ぢやァあるめえぜ。
百姓　いや〳〵此男に違ひない、證據といふのは其時から、見覺えのある額の黑子。
義七　とんだ彌陀六だ。
百姓　そつちは石屋の職人で、彌陀六といふか知らぬが、おらあ是れでも熊谷在で、治郎兵衞といふ顏役だ、屯まで一緒に步べ。（ト また立掛るを義七留めて。）
義七　こう、三五郞、黑子が證據で見出されちやあ、しらを切つても追附かねえ、何もかもぶちまけて誤つて濟ませろ〳〵。
三五　違えねえ、誤るのが上分別だ。（ト百姓に向ひ。）おい兄ィ、彌陀六に似た駄六の煙管、贋を知らずについ賣つたが、おれが大きに惡かつた、腹も立たうが誤るから、どうぞ了簡してくんなせえ。
百姓　いや〳〵敦盛の首同樣な雁首のくわせもの、贋物といふことは承知で賣つたに違ひない、それとも屯へ行くのがいやなら、あの時拂つた一兩二朱、たつた今爰で返すか。
三五　これさ、金を返せといつても、どうして今まであるものか。
義七　あの金はおれが借りて、みんなお花で取られてしまつた。とんだ辨慶の別れだが、一朱の切もありやあしねえ。

百姓　なに、あの金をこなたが借りて、それぢやあやつぱり相摺りだな。
義七　知れたこッた、みんなこつちやあ一つ懐、
三五　二人揃つて辻賣りに、
義七　盛り場稼ぐ、
兩人　贋物師だ。
百姓　さう聞く上は二人とも、連れて行くから覺悟しろ。
ト百姓左右の手で義七三五郎の胸倉を取り、連れて行かうとする、兩人行くまいとする爭ひあつて、
ト三五郎もぎ放し、下手へ逃げてはひる、百姓追駈けようとするを、義七後から足を持つて引放し、
上手へ逃げてはひる、百姓起き上り、
ええ、二人とも逃げてしまつた、泥坊々々。
ト言ひながら上手へうろ〳〵して、どちらへ追掛けようと思入あつて、ト下手へ追掛けてはひる。
やはり流行唄にて花道より六三郎散髪鬘シヤツポを冠り、羽織着流し、襟巻金鎖の時計を襟へかけ、
表附の駒下駄、蝙蝠傘を杖につき出來る、少し放れて跡より銀次羽織着流し、日和下駄番傘をすぼめ
て持ち、六三郎の身裝に目を附ける思入、六三郎これを知らず兩人舞臺へ來て、

銀次　もし〳〵、ちとあなたお願ひがござりまする。

六三　はい、何の御用でござりまする。（ト六三郎立留まる、銀次側へ寄り、）

銀次　どうかお見掛け申した所が、時計をお持ちなされてござりますが、もう何時でござりまするか、ちよつと御面倒ながら、御覽なすつて下さりますまいか。

六三　はい〳〵、それはお安い御用でござります。（ト六三郎懐より時計を出して見て、）二時十五分でござります。

銀次　それでは、三時前でござりますな。

六三　左樣さ、まだ小半時間がござりませう。（ト銀次横目で時計をじろ〳〵見ることあつて、）

銀次　今日三時の葬ひに參りますのでござりますが、少々空が曇つたので、生憎と日ざしは知れず、時がさつぱり分りませぬゆゑ、大きに困つてをりました、お蔭さまで分りまして、まことに有難うござりまする、三時前ならゆつくりしても、まだ大丈夫でござります。

六三　いやもう時が知れませぬと、不都合なことがござりまする。そのくせ時計は無駄なものだと、申す人もござりまするが、斯うして不斷持ちつけますと、片時側を放せば不自由なことがござりまする。

銀次　成程左樣でござりませう。(ト時計をのぞき、)私などは分りませぬが、どうかよいお時計のやうでござりますな。

六三　大した品でもござりませぬが、是れは引打ちでござりまするから、どうも安く賣りませぬ。兎角こんなものが好きでござりますから、つい買つてなりませぬ。

銀次　もう此位の品になりましては、めつたに狂ふこともござりますまい。

六三　左樣さ、餘り狂ひは出ないやうでござります。(ト時計を懐へ入れる。)

銀次　まことに有難うござりました、時が知れましたので、大きに都合がよろしうござります。

六三　左樣なら私は、ちよつと入湯いたしますから、これでお別れ申しまする。

銀次　左樣でござりますか、是れは大きに御面倒さまでござりました。(トこれにて六三郎男湯の暖簾へはひる、銀次跡を見送り、)ちよつと裝のこしらへは、官員といふ所もあるが、それにしちやあちつと意氣だ、商社へでもはひつて居る商人の息子だらうが、何にしろ今の時計は金側に藤鎖、安く踏んでも二百兩の代物、あの樣子ぢやあ懐にも、定めて一分や二分ぢやァあるめえ。こいつあどうも見のがせねえわえ。(ト銀次は二階を見上げる、此時上下より以前の義七三五郎出て、)

義七　兄貴、今の息子を知らねえか。

三五　ありやあ豪氣に、ねたがいゝぜ。
銀次　おゝ三五郎に義七か、今聞きやあ手めえ達ア、百につかまつて困つたさうだな。
三五　困つたの困らねえのと、馬鹿力のある奴で、何でも屯へ連れて行くと、おらあ二三町引摺られた。
義七　おれがやうやくごまかして無難に三五郎を逃してやつたが、すんでの事にあぶねえ所よ。
三五　これから當分懲役で、炭團でも丸めるかと、おらあうんざりした。
銀次　そりやあさうと、手めえ達ア、今の息子を知つて居るのか。
義七　ありやあ銀座の煉瓦石へ此間見世を明けた、高崎の絹屋の息子、よつぽどねたのいゝのだから、旨くいきやあたんまりだぜ。
三五　おまけに相手が初心だから、仕事にするにやあ譯はねえ。
銀次　おれもさういふ玉と見たから、馴々しく話しを仕掛け、ちよつと貫目を引て見たが、隨分仕事になりさうだ、一寸耳を借してくれ。（ト銀次は兩人に囁き）ないゝか、二人ながら旨くやつてくれ。
義七　承知だ〳〵、それぢやアあいつの跡をつけ、
三五　湯に來た振りで樣子を見て、
銀次　おれが手づまで遣るつもりだ。

義七　そんなら一緒に、

兩人　是れから二階へ。（ト大きく言ふを、）

銀次　え丶靜かにしろ。

ト銀次制してまた兩人へ囁く、此模樣流行唄の角兵衞獅子にて道具廻る。

（湯屋二階の場）――本舞臺湯屋の二階、向う一面の障子、柱際二三枚明けたる所あり、此外軒口に風鈴附きの提灯を掛け、手摺の上よき所に半簾をかけ、上手の見切り茶壁に聯をかけ、下手折廻し着物を入れる戸棚、よき所に二階の掟書、晝寐無用の札、その外鏡立て櫛の箱、柱に掛行燈を掛け、下手に階子の上り口、此傍に履物棚、舞臺眞中に一段小高くしたる茶床、銅壺へ茶釜をかけ、茶碗棚菓子の箱、小箪笥などよろしく、爰にお園世話裝、前垂れがけの娘にて漉茶をこして居る、よき所に以前の六三郎短き煙管にて煙草を呑み居る。此模樣よろしく流行唄、湯風呂で羽目を叩く音して道具納まると、右の合方をなまめきのやうに殘して、

六三　時にお園さん、湯にはひる其前に、斯う落着いて一服呑むのは、こりやあ全體惡い癖さね。

お園　いえ／＼惡いことはござりませぬ、今日は少しお話しがござりますから、まあゆつくりして下さ

りませ。

六三　いえ〳〵今日は爲替の事で、海運橋まで用があるから、さうしては居られぬわいの。

お園　まあ、そんな事をおつしやらずと、少しお待ちなされて下さりませ。（卜お園茶をこしらへて六三郎の側へ持ち來り）さあ、お茶が出來ましたわいなあ。

六三　いや、これは御馳走だ。（卜六三郎取つて一口呑み、）はてお前がこしらへたお茶だと思へば、何だか格別旨いやうだ。

お園　あれ、そんな事をおつしやつて、人をおなぶりなさいますと、わたしやきゝませぬわいな。

六三　なに、お前をなぶるのなんのと、そんな事があるものか、ふとしたわけでいつぞやから、斯うい ふ仲になつたからは、折を見合せ家へ貰つて、世間晴れてと思つて居る、此六三郎の心のうちは知つて居るではないか。

お園　さあわたしもそれを樂しみに、早く兄さんにも打明けてと、時節を待つて居りますれど、もしや永い月日のうちに、ひよつとお心が替りはせぬかと、案じられてなりませぬわいな。

六三　はて今更心が替るの何のと、それは入らぬ思ひ過し、家の近所に湯のあるのに、毎日かうしてこつちまで出て來るのは、是れが何より慥な證據。

お園　左樣なら若旦那、どうぞ見捨て下さりますなえ。

六三　何の見捨てよいものかいなう。

お園　そのお詞がまことなら、わたしや嬉しうござりますわいな。

　　ト お園六三郎の側へ寄添ふ。此時階子口にて、

銀次　さあ〳〵二階で、一服やらう〳〵。

　ト流行唄になり、以前の銀次先きに、三五郎義七銘々履物を持ち上つて來る、是れを見てお園うろたへて茶銅壺へ坐り、何喰はぬ顏にて、

お園　いらつしやいまし、お早うござります。(ト三人は履物を棚へのせて上手へ住ひ、)

三人　どれ、一服やらかさう。(ト煙草盆を引寄せ煙草を呑みながら、)

銀次　こう、手めえ達あどうだか知らねえが、おらあ今朝の醉が出て、よつぽど妙な心持だぜ。

三五　おれも溜飲でおつなあんべいだ。

義七　姉さん、茶より湯の方がいゝぜ。

お園　畏りました、只今差上げます。(ト此時銀次は六三郎の顏を見て、)

銀次　これはお前さん、先程はとんだお世話さまでござりました。

六三　どういたしまして、お安い御用でござります。

銀次　お蔭さまで時が知れましたから、ゆつくりと湯にはひれます。（ト此うちお園櫻湯をこしらへて出で、）

お園　皆さん櫻湯にいたしました。

三五
義七　そいつァ有難え。

銀次　この腹の鹽梅に、櫻湯はもつて來いだ。（ト三人湯を呑み居る、六三郎思入あつて、）

六三　どれ、一ぱいはひつて來ませうか。（ト立上り着物を脫ぎにかゝる。）

お園　左樣なら、お預かりのお浴衣を差上げませう。

トお園澁を引いたる貸文庫に浴衣の入りしを出し、預かり手拭、ブリツキに入りしシヤボンなど添ておく、六三郎時計と蟇口の紙入を投りだして、

六三　お園さん、これを預かつておくれ。

お園　畏りました。（ト手に取り見て、）若旦那、大層立派なお時計でござりますねえ。

六三　時計屋さんにすゝめられ、昨日買つたばかりさ。

お園　どれ、しまつておきませう。

トお園件の時計と紙入を小簞笥の引出しへ入れる。銀次これに目を附け、三人うなづき合ふことあ

て、此うち六三郎浴衣に着替へ、着物を文庫へ入れ、手拭とシャボンを持ち立上り、

六三　御免下さいまし、ちよつと一風呂はひつて參ります。

銀次　私も只今お跡からはひります。（ト六三郎階子口へはひる。三五郎煙草を呑みながら、）

三五　かう兄貴、ゆうべからのいきさつは、殘らずで幾らになるか、ちよつと勘定して見ようか。

銀次　お互えに一つ懷だ、ありやあどうでもいゝぢやあねえ。

三五　それでも錢金は他人だから、まあ勘定して見るがいゝ。

義七　さうだ／＼、何の中でも勘定だ、爰で極りを附けてしまはう。

銀次　そんなら待て／＼、爰へ目をおいて見よう。（ト銀次叺煙草入より錢を出して算盤の替りに疊へ並べ、）まづ昨夜の勘定は、勤めがこれで、臺に酒がこれよ。それいゝか。其外あとのもろ／＼がみんなでこれよ。

三五　それから、今朝の蛤鍋の勘定だ。

銀次　よし／＼、慥か是れだけだな。

義七　跡が爰までの俥賃よ。

銀次　よし／＼、人力がこれだけ。（ト銀次一々錢を並べて〆高を見て、）殘らず〆て、二兩一分二朱と五百

になる。

三五 それぢやあざつと一人前が、先づ三分一朱だな。

義七 そりやあ三割にすりやあさうだらうが、おらあ頭割ぢやあ不承知だ。

三五 なぜ〳〵。

義七 なぜといつてべらぼうめ、割に當らねえからさういふのだ。

銀次 これさ義七、野暮を言はずと友達づくだ、仕方がねえ、三割で負けてやれ。

義七 かう手めえ、同じやうにそんな事を言つちやあいけねえ、土臺向うは酒を呑むし、こつちやあ下戸のことだから、同じ勘定ぢやあ割に當らねえ。

三五 そんな因業いふもんぢやあねえ、手めえ酒を呑まねえ替り、一人で肴を荒すから、丁度割は五分ぢやあねえか。

義七 いくら肴を荒しても、骨だけは殘して來るが、手めえ酒は殘しやあしめえ。

三五 分らねえ事をぬかしやあがる、うぬそんな事を言ひ出して、此割前を出さねえ氣だな。

義七 割りやうが氣にくはねえ、おらあ一文も出すものか。（ト段々聲高になる。）

銀次 こう〳〵、手めえ達やあ何のこツた、姉さんに氣の毒だ、いゝかげんに靜かにしねえか。

義七　それでもあんまり分らねえから、譯を言つて聞かせるのだ。

三五　さういふうぬが吝嗇だ。

義七　此野郎好きな戲言をつきやあがるな。

三五　何をいやあがる。（ト三五郎だしぬけに義七を張り倒す。）

義七　うぬ、ぶちやあがつたな。（ト義七むしやぶりつく、銀次留めて、）

銀次　こいつらあ何をしやあがる。これ、いゝ加減によさねえか。

三五　兄貴、打捨つておいてくんねえ。

義七　野郎、どうするか見やあがれ。

ト兩人挐り合ひ、すべて言合せにて喧嘩をする模樣あつて摑み合ひながら茶銅壺の側へ行く、お園恐れて逃げ廻る、銀次捨ぜりふにて兩人を留めながら、此紛れに簞笥の引出しより、六三郎の時計と紙入を出し、見物に見えるやうに三五郎の手へ渡す、三五郎摑み合ひながらこれを受取り、懐へ入れる。階子の口より德右衞門綿入半纏、湯屋の亭主のこしらへ、三助二人附添ひ出て、

德右　もしく、二階が拔けさうだ、靜にしておくんなせえ。

三助　まあく待ちなせえく。（ト三助兩人捨ぜりふにて三五郎義七を留めてやうく引分ける。）

徳右　も、お前さん方は、とんだ人達だ、何の間違ひかは知らねえが、客を扱ふ湯屋の二階で、喧嘩をされちやあ迷惑だ。どうぞ歸つておくんなせえ。

銀次　やい、二人ながら歸れ〳〵、えゝ、早く外へ出やあがれ。

ト銀次は兩人に早く歸れと目で知らせる、兩人呑込み、

三五　やい義七、喧嘩なら外へ出ろ。

義七　出るからどうともして見やあがれ。

三助　さあ〳〵、早く出ておくんなせえ〳〵。

ト三助兩人三五郎と義七を押出す、是れにて兩人履物を持ち、捨ぜりふにて爭ひながら階子の入口へはひる、銀次徳右衞門に向ひ、

銀次　もし親方、あいつらァわつちの連れだが、詰らねえ間違ひから友達喧嘩を始めやあがつて、こんなに二階を騷がして、こつちのお家へまことに濟まねえ。あいつらに成替つて、此わつちが誤るから、まあ了簡しておくんなせえ。（ト頻りに詫びる。）

徳右　いやもう、お連れのお前さんが其樣におつしやりますと、手前の方で痛み入ります、先づは事なく納りまして、やう〳〵安心いたしましたが、餘り騷ぎが強いので、實はびつくりいたしました。

ト此時六三郎湯から上つて來る、喧嘩を恐れし心にて、後の方へ退り手早く着物を着にかゝるを、

銀次　これは銀座の若旦那、もうお上りなさいましたか。

六三　相變らず長湯をしました。（トお園六三郎へ茶を出す、銀次は此うち茶代の錢をかぞへ）

銀次　そりやあさうと今の騷ぎで、まだ湯にも這入らねえが、是れから行つてあいつらを、仲直りでもさせにやあならねえ。

德右　左樣なら、もうお歸りでござりますか。

銀次　おい姉さん、お茶代は爰へおくよ。（ト銀次履物を持ち階子口へはひろ、此内六三郎着物を着てしまひ）

六三　お園さん、さつきの物をちよつと出して貰はうかね。

お園　ほんに、お預り物をさつぱり忘れてをりました。（トお園引出しを明けて見て、右の二品なきゆゑ、合點の行かぬこなしにて、外の引出しを殘らず改め、いよ／＼なきゆゑびつくりして）えゝ、こりや大變ぢやわいなあ。

德右　大變とは、何事だ。

お園　若旦那からお預かりのお時計と紙入が、この引出しに見えぬわいなあ。

六三　なに、あの二品が見えぬとか。

徳右　お客様の御持參ものを、なくなして濟むものか、よくそこらを搜して見ろ。

お園　いえ〳〵、どう尋ねても見えぬわいな。

徳右　そんならもしや、盜まれたか。

三助　さあ〳〵、大變な事が出來たぞ〳〵。

ト徳右衛門三助とも〳〵立上り、そこらをうろ〳〵尋ねる、お園心附き、

お園　もしやさつきの喧嘩の紛れに。もし、今のお客が怪しいわいなあ。

六三　そんなら、彼奴の仕業であつたか。

徳右　遠くは行くまい、それ追ッかけろ。

三助　合點でござります。（ト三助兩人足早に階子を下りる、六三郎扨はといふ思入あつて、）

六三　是れで樣子がさらりと分つた。さつき途中であの男が、見ず知らずのわしを呼びかけ、もう何時と尋ねたのは時計を出させて見ようばッかり、さうとは知らず浮々と飛んだ企みに罹りました。

お園　何にいたせ此二階で、盜まれたのはわたしの油斷。もし伯父さん、どうぞ取返して下さりませ。

徳右　それはおぬしが言はずとも、取返して差上げねば、湯屋の主人の役が濟まぬ、何にしろ今の客を、首尾よく連れて戻ればよいが。（ト此時階子口にて、）

三助 さあ〳〵二階まで來ておくんなせえ。（ト三助兩人にて銀次を連れて出て來る、）親方やう〳〵連れて來ました。（ト銀次合點の行かぬ思入にて、）

銀次 おい〳〵番頭、茶代ならあすこへおいたが、外に何ぞ用でもあるのか。

トよき所へ住ふ、徳衞右門思入あつて、銀次の側へ寄り、

徳右 もし、お呼び返し申しましたは、外の事でもござりませぬが、こゝの二階でたつた今、紛失物がござりますゆゑ。

銀次 なに、紛失物だえ、そりやあ御心配だねえ。（ト四ツ竹節の合方になり、）してどんな品がなくなりましたえ。

六三 さあ紛失いたした其品は、金子のはひつた蟇口の棧留の紙入に、金側の時計が一つ。

銀次 そんならさつきのあの時計を、爰の二階で取られなすつたか、そりやあとんだ御災難だ。

ト態とびつくりする。

徳右 さつきから二階に居たのは、取られなすつた御當人と外には家の者ばかり、喧嘩をした二人の衆を一足先へ歸してしまひ、跡へ殘つたお前さん、お氣の毒ではござりますが、掛り合は脱れませぬ、御不承ではござりませうが、疑ひ晴らしに懷を、改めさせておくんなさいな。

銀次　ト銀次わざと迷惑な思入にて、

成程この場に居たから、掛り合といはれても仕方がないとは云ふものゝ、懐を見せるのはわつちあちつと迷惑だね。

徳右　御迷惑でもございませうが、見せてお貰ひ申さにやあ、どうも疑ひが晴れませぬ、これが僅かの品ならば捨ておきもしませうが、何をいふにも金目な品物。

お園　是れきり出ぬとこのわしが、お客様へ濟まぬわいなあ。

六三　何にいたせ持主のわしは扨おいて、爰の主人のきつい心配、品物さへ戻りますれば、何事も此場ぎり穏便に濟ませまする所存でござりまする。

徳右　御當人はあの通り、事を好みませぬ御氣質ゆゑ、よしんばこなたの懐に、さあ品があつたにしろおとなしくお戻し申せば體に疵が附かず、世間へ知れずに濟むといふもの。

ト是れを聞き銀次思入あつて、

銀次　むゝ、それぢやあおめえ方、わつちだと思ひなさるのかえ。

徳右　まあそんなものさ。（ト合方きつぱりとなり。）わたしも爰の新開町へ新湯を始めて今日までは、襦袢一枚下駄一足、まだ盗まれた事もなく、堅い家だと御近所で評判のいゝ所から、低い鼻さへ此

頃は一段高い番臺へ肩身を廣く坐つて居たが、つい二階へも氣を附けず思はず油斷が大敵に、大事のお客が御持參の預かり物がなくなつちやあ、湯屋の名前に拘るゆゑ濁り掛つた水船の底の底まで洗ひあげ、沈んだ品を出さにやあならねえ。（ト此内銀次思入あつて、）

銀次　仕方がねえ、ようございます。そんなにわつちを疑ぐるなら、懐を見せやせう。

德右　なに、そんなら見せると言ひなさるか。

銀次　裸になつて見せやせう。しかしちよつと斷つておくが、もし改めて見た上で、其時計と紙入が體のうちにねえ日にやあ、わつちやあ濟まされねえが、そりやおめえ承知だらうね。

三助　いや盜人たけぐ\しいと、白々しい事を吐かしやあがる。

同　ぐづぐ\言はずと、盜んだ品をきりぐ\爰へ、

兩人　出しやあがれ。

銀次　喧しい三助め、よく口を出しやあがる。（ト睨める、是れにて三助控へる。）さあ、裸になるからよく見てくれ。（ト銀次叺煙草入を投り出して立上り、手早く帶を解いて着物を脱ぎ、）それ、體中を改めろ、おれの物はそこにある、煙草入と手拭ばかり。それ、着物も此通り振つて見せるぞ。ト銀次はいろぐ\と着物を振ひ體中を見せる、件の品なきゆゑ皆々びつくり、

六三　慥にそれと思ひの外、
徳右　こりやどう見ても二品は。
銀次　どうだ、何もありやあしめえな、是れでもおれが盗んだと、おめえ達は言ひなさるか。
徳右　いえなに、なか〱もちまして、さういふ譯ではござりませぬ。
銀次　それぢやあ疑ひは晴れたのかえ。
徳右　先づ晴れたやうでござりますな。（ト是れにて銀次思入あつて、手早く着物を着る。）
銀次　うぬらあ、よくおれを盗人にしやあがつたな。（ト尻をまくつて眞中へどつかり胡坐をかく、是れにて合方きつぱりとなり。）これさ外の事たあ譯が違ふぞ、手めえの家の柘榴口に張つた硝子の窓よりも、曇り霞のねえおれに、よく惡名を附けなすつたな、斯ういふ事が耳になりやあ、明日が日どういふ災難を浴びる岡湯のしぶきから、惡い噂がぱつとして後へ廻る手拭の、いやな印がおれの身に掛るめえとも云はれねえ。さあ是れからは表向きシヤボンで體を洗ひ上げ、垢を落して貰ふから、扱ひ所までうしやあがれ。（ト銀次徳右衛門の胸倉を取る。）
徳右　あゝもし〱お腹の立つは御尤もでござりますが、先程からの始末柄は、みんな私が了簡違ひ、此上はどの樣にもお詫びことをいたしまする、お客樣への不調法は、どうぞ御勘辨下さりますや

う、偏にお願ひ申し上げまする。

銀次　いやだ〳〵了簡ならねえ。こつちで言やああの娘が、盗んでおいて其科を、おれに着せるこしらへ事だ。

お園　どうしてわたしが、其やうな。

銀次　さうでなけりやあ主人のわれが、盗んでおれに言ひがけするのか。

德右　あゝこれ、必ずめつたなことを。

銀次　たとへ何と言譯しても、人に惡名を附けたのは、うぬらに曰くがあるからだ、さあ出る所へ出て仕埒をつけ、明りを立てゝ貰ふから、どいつもこいつもうしやアがれ。

ト銀次立上り、德右衞門とお園の手を引立て行かうとする、六三郎留めて、

六三　あゝもし、ちよつとお待ち下さりませ。

銀次　何でおめえは留めなさるのだ。

六三　さあ是れなる二人を存分に、連れて行かうとおつしやりまするも、お腹立ちから起りしこと故、さら〳〵御無理とは存じませぬが、品物をなくされました其當人の私が、お詫言をばいたしますゆゑ、ちよつとお待ちなされて下さりませ。（ト是れにて銀次思入あつて、）

銀次　待てといふなら待ちもしようが、盗人の肩書が、綺麗さつぱり脱けるやうに、おめえ捌いてくんなさるか。

六三　さあ私が青い口前で、捌く譯もござりませぬが、只今考へて見ますれば、時計は元より紙入も着物を脱ぐ時緣側の、手摺を越して往來へもし落したかも知れませぬ、それを一途に預けたと思ひ違へて、お前さまに疑念を掛けたはこつちのあやまり、まつたく心得違ひでござりますれば、どうぞ御勘辨をもちまして此儘お歸り下さりませうなら、有難う存じまする。

ト頻りに詫びる、銀次しめたといふ思入にて、

銀次　成程おめえは年は若いが筋道の分つた人だ、さう事を分けて言はれりやあ、こつちも了簡しにやあならねえ。ようござります、疑ひさへ晴れたなら、さつきからのいきさつは、みんな負けて歸りませう。

六三　左樣なら何事も、御勘辨下さりまして、お歸りなすつて下さりまするか。

銀次　大金な物をなくして往生のいゝおめえの挨拶、それに免じて何にも言はず、わつちやあ直に歸りまする。（ト銀次捨ぜりふにて、）大きにおやかましうござりました。

ト羽織を肩へかける、四ッ竹節になり、銀次階子口へ行き、舌を出してにつこり思入あつて、下駄を持

ちづう〳〵しく下へおりる。

三助　たしかに彼奴が盗んだか盗まねえか知らねえが、何にしろ太々しい、憎體な奴だなあ。

同　そりやさうと、今の騷ぎで、いつの間にか日が暮れた、どれ燈火でもつけようか。

ト三助茶銅壺の附木を出し、掛行燈へ燈火をつける、德右衞門三助に向ひ、

德右　これ、暮れちやあ下が無用心だ、早く行つて氣を附けろ。

三助　そんなら、親方、

兩人　わつちらア下へ行きます。（ト三助兩人階子口へはひる。跡合方、德右衞門思入あつて）

德右　もし若旦那樣、正しく彼奴の懷に持つて居るかと思ひの外、喧嘩をしたのが相摺りで、早くも品をこかした樣子、是れといふ證據もなければまさか突出すこともならず、殘念なことをいたしました。承はればお時計は、大枚な品とのこと、お紙入にも定めて金子が。

六三　なに、金は僅か二三十兩、惜しいとも思はぬが、外に大事な證書があるゆゑ、それに當惑しましたわいなあ。

德右　御尤もでござりまする、是れと申すもお園が麁相。これ、おぬしやあとんだ事をしでかしをつたなう。

ト是れまでお園泣いて居て、ぢつと思ひ入あつて、

お園　お預りの其品が是れきり出ませぬ其時は、わたしや生きて居られぬ思ひ。伯父さん、どうぞ仕様はないかいな。

六三　これお園さん、言譯に死なうなどゝはそりや狹い了簡、器械がいゝからあの時計惜しいとは思つたが、二百圓の金さへ出せばいつでも買へる品、お前の命は何百圓、金を積んでも買はれはしまい。殊に斯うした二人が仲、いやさ、斯ういふわたしがあの品は、思ひ切つてしまふから、必ずともに心配せずと、まあ落着いて居たがいゝ。

お園　はい。（トやはり泣いて居る。）

德右　これ、何を泣いて居るのだ、あの通り若旦那がおつしやつて下さるも、無分別をさせまい爲、殊におぬしは親類から此德右衞門が預りもの、もしもの事があつた日にやあ、兄の佐吉へ濟まぬゆゑ、必ず短氣を出してくれるな。

お園　そのやうに言はしやんすりや、死ぬにも死なれぬわしが身の上。左樣なら若旦那、不調法は幾重にも。

六三　はて、世間にいくらもある事ゆゑ、必ずきな〱思はぬがよい。（ト德右衞門思ひ入あつて、）

徳右　あきらめのいゝ若旦那の、其お詞で落着きました。とはいふものゝ、大枚二百圓といふ品が、爰の二階でなくなりしは、時の不承と言ひながら、

お園　わたしが心を附けたなら、斯ういふ事もあるまいに、

六三　それも此身の油斷から、終にはかゝる禍ひの、

徳右　今日は如何なる惡日と、

お園　何科もなき日を恨む、

六三　その舊弊も世につれて、

徳右　開けし今の曆には、

お園　よしあしさへも無きものを、

六三　降つて湧いたる災難は、

徳右　思へば時節で。（ト徳右衞門煙管で、灰吹を叩くを道具替りの知せ、）ござりまするな。

ト六三郎何か考へる思入、お園は手拭を額へあてゝ泣く、此模樣流行唄にて道具廻る。

（春米屋見世の場）――本舞臺三間の間常足の二重、眞中暖簾口、上の方まひら戸の戸棚、下手の

壁に帳面を掛けし書割、此前に帳場格子、ずつと上手一間の板羽目、米俵を澤山に積み、下手一間舂場の模様、米櫃、はかり桶、桝、はかりかきなどを置き、空俵、繩などを取りちらし、いつもの所門口、此外路地口、總て舂米屋見世の體、二重よき所に見世火鉢へ鐵瓶をかけ、角行燈をとぼし、爰におむつ世話女房のこしらへにて針仕事をして居る、此側に十歳ばかりなる仙太郎、雜なる散切り筒ッぽの上へ木綿の着附、小倉の帶にて讀物の本を讀み居る、此模様さんげ〳〵にて道具納まる。

むつ　これ仙太郎や、もう今に十時になるから、讀物はよいかげんにして、早く寐たがよいわいの。

仙太　いえ〳〵、まだおとつさんがお歸りがござりませぬから、私は起きて居りまする。

むつ　いつお歸りなさるか知れないから、先きへ寐たがいゝわいなう。

仙太　いえ〳〵いくら夜が更けても、おとつさんがお歸りまで私は起きて居りまする。

むつ　今日は朝早くから出なすつたに、今時分まで何處を歩いて居なさるか、大分遲いことだわいなう

トやはり右の鳴物にて、下手の路地より佐次兵衞、着流し綿入れ半纏、相長屋のこしらへ板に綴ぢつけたる御布告を下げ、片手に米かし桶を持ち出來り、

佐次　はい、御免なさいまし。

むつ　どなたかと存じましたら、裏の佐次兵衞さんでござりますか。

佐次　また御布告が來ましたから、直に廻しに參りました。（ト二重へ御布告書を置き腰を掛ける。）
むつ　これはお世話さまでござりました。（ト佐次兵衞仙太郎を見て、）
佐次　仙太郎さん、まだ起きて居なさるのか、おれの家の奴などは、もう疾に寐てしまつた。
　　　トおむつ御布告を手に取り、
むつ　もし佐次兵衞さん、これは何のおふれでござりますな。
佐次　いやも、何のおふれだかむづかしい字ばかりで、わたしなどには讀めないから、直ぐにこつちへ持つて來ました、どうぞ御布告は誰れにでも、讀めるやうにして貰ひたい。
むつ　隣り町の喜兵衞さんは、一々おふれへ假名を附けて、お廻しなさるさうでござります。
佐次　成程さうしてくれたなら、誰れにでも分るであらうが、こんな四角な字ばかりでは、さつぱりよめないの閻魔さまだ。
むつ　左樣なら、地獄のおふれでござりまするか。
佐次　何を言はつしやる、はゝゝゝゝ。それはさうとおふれの序に買物をしに來ました。御面倒でも中白を、どうぞ二朱だけおくんなさいまし。（ト佐次兵衞桶を出す。）
むつ　はい〳〵畏りました。どれ、直にはかつて上げませう。

トおむつ桶を持ち下手へ來て米をはかる、佐次兵衞煙草を呑み居る。此うち仙太郎件の御布告書を手に取り小口の所を少し讀む、佐次兵衞これを聞きびつくりして、

佐次　これ〱仙太郎さん、お前それが讀めるかえ。

仙太　伯父さん、此位なものは讀めますよ。

佐次　なに、この位なものは讀める。そりやあお前感心だ、しかしまだ子供のくせに、そんなむづかしい字がどうして讀めるね。（ト此うちおむつ米を量り、佐次兵衞の側へ桶をおき、）

むつ　お前さんも御存じの通り、内の人は商賣の帳面ぐらゐは附けますが、學問をせぬゆゑにとんとむづかしい物は讀めませぬ、それゆゑこれには讀書の出來るやうにして遣りたいと、六ツの年から手習のお師匠さんへ遣りましたが、それにまた去年から學校所へ上げまして、毎日通つて居りますお蔭、有難いことに此頃は、大概なものは讀みますわいな。

佐次　はて、それでこんなものが讀めるのだね、成程學問は仕ようものだ、實はわしも學校所などは無駄なものだと思つて居たが、さういふ話しを聞くにつけ、お上にていろ〱とお世話下さる思召しが有難い、家の忰も今年は九ツ、早速學校所へお願ひ申して、學問をばさせませう。

むつ　昔とは様子が替つて、此節の學問は商人でも職人でも、身分に應じてそれ〴〵に、みんな役に立

つさうでござります。どれお暇しませうか。

佐次　何にしろ家へ歸つて、女房にも言ひ聞かせ、早速悴を出さにやあならぬ。

むつ　左樣なら、もうお歸りなされまするか。

佐次　米の代を、爰へおきますぞや。（ト二朱札を出しておく。）

むつ　これは有難うござりまする。

佐次　大きにおやかましうござりまする。（ト佐次兵衞桶を持ち門口へ出て、）さて〳〵息子が息子なら、お袋までがいゝ心掛けだ、其上隨分女もよし、程のいゝ上さんだ。しかしちつと盛りが過ぎて、惜しいことにひねツくさいな。（トおむつこれを聞き、）

むつ　もし、いゝ、ひねでおわるければ、新を上げませうか。

佐次　なに、いゝ、ひねの方が殖えますわな。（ト佐次兵衞下手の路地口へはひる。）

仙太　もし、おつかさん、御布告を直にお隣りへ廻しませうか。

むつ　いや〳〵、もうお隣りはお休みなされた樣子、明日の朝にしやいなう。

トおむつはまた仕事にかゝる、仙太郎はやはり本を讀み居る。さんげ〳〵の合方にて、花道より仙右衞門羽織着流し、紺の前垂れ、駒下駄手拭を米屋冠りにし、小田原提灯を提げ出來り花道にて、

仙右　今宵は闇と思つたが、大方先の暦ぢやあ二十日前に當ると見えて、いつか月が上つたゆゑ、提灯は無駄になつた。いや無駄といやあ此間から、引續いて損をしたのは、中々たやすい金ぢやあねえ、何でも相場に掛つちやあ、儲けるのも大きいが遣り損なやあ此通りだ。家へ歸つて女房子に話しも出來ねえ。（トロ小言をいひながら舞臺へ來り、内へはひつて、）おむつ、今歸つた。

トおむつ見て、

むつ　おやお歸りなさいましたか、今晩は大分お遲うござんしたなあ。

仙右　用がありやあ遲くなることもある、稼業の事で歩くのだから、夜半に歸つても仕方がねえ。

ト言ひながら仙右衛門は提灯を消し、二重へ上り住ふ。仙太郎仙右衛門の前へ手を突き、

仙太　おとつさん、只今お歸りでござりましたか。

仙右　仙太、まだ起きて居たか。

むつ　さつきから寐ろと言つても、お前さんの留守のうちに先へ寐ては濟まぬと云つて、居睡りもせず待つて居たわいなあ。

仙右　此頃は一日ましに、子供らしい事がなくなつて、だいぶ堅藏になりをつたな。

むつ　それはさうと今日晝のうち、伊勢藤さんの所から人が來ましたわいなあ。

仙右　何といつて寄越した。

むつ　此間から川岸の會所で、お引合せ申した勘定を、明日は間違ひなく殘らずお戻し下さいと、さう言ひおいて歸りましたわいなあ。（ト是れを聞き仙右衞門思入あつて、）

仙右　その相場の勘定を、殘らず綺麗に拂ふ日にやあ、此家から代物まで、そつくり附けて渡しても。

むつ　え。

仙右　さあ渡してやるのは造作もねえが、まだ帳面を〆めねえから、さつぱり勘定が分らねえ。

ト仙右衞門考へる思入、おむつは八寸の膳に燗德利と小皿を載せたるをそこへ出して、

むつ　お酒の支度をしておきましたが、直に一口あがるかえ。

仙右　いや、ゆつくり寐酒にしよう。

むつ　そんなら、斯うしておきませう。

トおむつ、膳を片側へ寄せる、此うち仙右衞門煙草を呑みながら仙太郎を見て、

仙右　これ仙太、そんなに本ばかり讀んで何の事だ、商人が學問などをしても、何が役に立つものか、無駄なことだ、よせ〳〵。（ト是れにて仙太郎仙右衞門へ氣を兼ねる思入）

むつ　あゝもし、お前さんは此子が本さへ見て居ると、いつでもよせ〳〵と言ひなさるが、下々のもの

まで學問をさせようと、お上の厚い思召しでお建てなさつたものを、親の身で學問するは無駄な事だと貶しては、それぢやあ道が違ひますわいなあ。

仙右　手めえまでが同じやうに、兎角そんな事ばかり言つて居るが、これがいゝ家の息子ぢやあなし、二間間口の舂米屋、商賣の道を覺えて儲けることさへ知つて居りやあ、外に學問がいるものか。昔からちんぷんかんとむづかしい事をいふ商人で、仕出したものはありやあしねえ、それだからおれがよせといふのだ。

むつ　いえ〳〵そりやあ理不盡といふもの、昔はさうでもござんしたらうが、今では町人百姓でも物を知らねば何かにつけて、不自由な事がござんす。（ト以前の御布告書に目を附け、）おゝそれ〳〵、其證據はこれでござんす、學問しないで今日の用が足りるものならば、此おふれは何のおふれだか、お前さんに讀めますか。（トおむつは御布告書を出す。）

仙右　どれ〳〵、讀めるか讀めぬか爰へよこせ。（ト仙右衞門手に取上げ讀めぬ思入にて、）はて、夜になると目がかすんで、細いものがさつぱり讀めぬ。先づこれを讀むのは、願ひ下げにして貰はう。

むつ　それ御覽なさい、讀めねば不自由でござんせうが。

仙右　成程さういつて見りやあそんなものだが、全體おれに言はせると、こんなむづかしい字で書くの

が惡い。

むつ　いえ〳〵讀めない方が惡うござんす、それゆゑ誰にでも讀めるやうに、學問しろとおつしやるは有難いお上のお慈悲、仙太郎は學校所のお世話になる甲斐があつて、立派にこれが讀めますわいなあ。

仙右　なに、仙太郎にこれが讀める。嘘をつけ、どうして讀めるものか。

仙太　いえ〳〵おとつさん、私にやあ讀めるよ。

仙右　何だ生利なことを云つて、さあ讀めるなら讀んで見ろ。

ト仙右衛門御布告を仙太郎に突附ける、仙太郎取つて是れを殘らず讀む、仙右衛門呆れし思入、

むつ　もし、どうでござんす、感心なものではござんせぬかいなあ。

仙右　成程こりやあびつくりだ、然しこんなにむづかしくなけりやあ、おれにでも讀めるのだ。全體よく讀めるやうに、假名で書いて出せばいゝに。

仙太　おとつさん、そんな事をおつしやると、人が舊弊だと言ひますよ。

仙右　なに久平だ、馬鹿を云へ、おれが名は元から仙右衛門、誰れが久平だといふものか。

むつ　お前がそんな分らない小言ばかり言はしやんすゆゑ、口へは出さねど此子が心配、せめて好きな

學問は、とやかう言はずに心持よく、させて遣つたがよいわいなあ。
仙右　またそんなくだらぬ事を言つて、どうもおれたあ氣が合はねえ、こつちやあ學問なんざあ大嫌ひ。
むつ　お前さんが嫌ひでも、此子がこんなに好きなものを、留めることはないわいなあ。
仙右　えゝぐづ〳〵とやかましい、もう四つ過ぎだ、いゝかげんに奥へ行つて寐てしまへ。
むつ　それぢやあお前さんも、寐たがようござんす。
仙右　いや〳〵、おれはちつとばかり帳合をしにやあならねえ、それだから先へ寐ろといふに。
むつ　そんならわたしは兎も角も、此子を奥へ寐かしませう。
仙右　行くなら、燗をつけて行つてくれ。
むつ　あい〳〵、爰へ入れておきますぞえ。（トおむつ燗徳利を鐵瓶へ入れて）さあ仙太郎、奥へいつて寐ませうわいなう。（ト是れにて仙太郎仙右衞門の前へ手を突き）
仙太　左樣ならおとつさん、お先へ臥せります。
仙右　いや、また四角四面にやあ恐れるなあ。
むつ　さあ、來やいなう。
ト右の鳴物にて、おむつ仙太郎を連れ奥へはひる、跡仙右衞門思入あつて合方になり、

仙右　女房や小僧はあの通り、おれと氣性が違ふから、何かの話しをした所が相談相手になりもせず、仲間うちの遣繰も此頃はきつちり詰り、融通の利かねえおれの懐、川岸へ行つても赤米の仙右衛門と云つちやあ一粒選りの舂米屋だが、此間から相場の狂ひにすつかり景氣を見損なひ、何にも知らねえ素人に山程金を儲けられ、こつちの損は大きなことだ。然し考へても後の祭り、どれ緣起直しに一杯呑まうか。

ト仙右衛門鐵瓶より德利を出し、手酌にて酒を呑み居る、時の鐘誂への合方にて、秋津豐無地紋附の着流し、山岡頭巾を冠り、侍と見えるこしらへにて出來り、花道にて、

豐　思ひ廻せば廻すほど、世に零落せし我が身の上、親の代には貯への金子に事を缺かざりしが皆放蕩に遣ひなくし、今は貧苦の其上にかてゝ加へし長煩ひ、斯く落ちぶれて朝夕の煙の代も盡き果てし我が困窮は厭はねど、たつた一人の母親を養ひ兼ねる腑甲斐なさ、今日に迫りし難儀より盜みをなさんと思へども、締り嚴しき家のみ多く、忍び入るにも力なし。(ト舞臺を見て)向うの家に明りのさすは、門の締りのあらざるか。何にもせよ、むう。(トうなづきて忍び足に舞臺へ來り、門口へ寄りて咳の出る思入にてびつくりして花道へ行き、)あゝ、こりや咳が出てならぬ、困つたものだや。

ト口を押へて咳に惱む思入、仙右衞門は是れまでに酒を大分に呑み、

仙右 やれ〳〵、いつ呑んでも酒はうまいな、然し相手なしのぐい呑みで、ぐつすりと極めたら、何だか草臥が出て來たわえ。

ト仙右衞門其儘横に寐て手枕をする。此時豐再びそろ〳〵と舞臺へ來り門口を少し明け、やはり咳出るゆゑ足早に花道へ行く、仙右衞門これに心附き天窓を上げ門口の方を見て、扨は盜人かといふ思入あつて、わざと横になり空鼾をかく、豐花道にて胸をさすり氣を附けて舞臺へ戻り、樣子をうかゞひ鼾がするゆゑ寐て居ると心得、顫へながら門口をそつと明け內へはひる。仙右衞門わざと大きく鼾をかく。豐ふる〳〵二重へ上らうとして空俵の繩のあるに躓きばつたり轉ぶ、仙右衞門飛び起き、

うぬ、盜人め。

ト仙右衞門やにはに豐を引附ける、豐逃げようとして振拂ふ、此はずみに行燈倒れて消える。是れにて暗黑の模樣にて捻ぢあひ、此うち豐の頭巾とれることあつて、トヾ仙右衞門豐を取つて押へ、

おむつ、盜人が這入つた、燈火を持つて來い燈火を持つて來い。（ト奧にて、）

むつ あい〳〵、今持つて行くわいな。（ト合方になり、奧よりおむつ寐卷細帶の裝にて手燭を持ち、仙太郎寐卷姿にて附添ひ出來り、）もし、泥坊はどこに居ますかいな。（トうろ〳〵そこらを見る、）

仙右　これ〳〵、おれが爰に押へて居る、早く燈火を見せろ〳〵。
むつ　なに、其處に居るのかいなあ。(トおむつ手燭を出す。豐ふろへ居る。仙右衛門見て、)
仙右　見りやあまだ若い奴だが、寐たふりをして居るとも知らず、人の家へ忍び込み、わりやあ太へ奴だな。(ト豐顏を上げ、)
豐　あゝ面目次第もござりませぬが、貧に迫りし所から締りのないを幸ひに、忍び入つたる出來心、何卒お慈悲をもちまして、此儘お見脫し下さりませ。もしお情でござります。(ト手を合せ拜む。)
仙右　なに、貧に迫つた出來心だ。しら〴〵しい事をぬかしやあがる、假令何と言譯しても、斯う取押へた上からは、こつちも十分に仕にやあならねえ、もうじたばたしても叶はぬ、うぬどうするか覺悟しろ。(ト仙右衛門强く捻ぢあげる。)
豐　成程盜賊に這入りまして、取押へられましたる上は、假令どのやうな目に逢ひましてもいたし方もござりませぬが。もう〳〵是れに懲りまして、以後は心を改めます、何卒御勘辨下さりますやう、偏にお慈悲を願ひまする。(ト頻りに詫びる。)
むつ　もし、大層あやまつて居るではござんせぬか、斯う見たところが人體といひ、盜みを仕さうな人でもなし。成程こりやあ、ほんの出來心でござんせう。

仙太　もし、よい加減におとつさん、助けてお遣りなされませ。

仙右　これ、馬鹿も大概に言へ、假にも盗人だ、うつかり助けてやられるものか。

むつ　それぢやといつて爰の家から、盗人を出すのも、あんまり出來したことでもござんせぬ。

仙右　出來さうが出來すめえが、おれの勝手にしにやあならねえ、餘計な口をたゝかずと、早く繩でも持つて來い。

ト豐これを聞き、

豐　あゝもし、此通り神妙にしてをりまする。何卒繩目の儀は、お許しなされて下さりませ。必ず逃げ隱れはいたしませぬ。

仙右　何だ逃げ隱れはしねえ。假令そつちで逃げようと思つても何で爰を逃すものか、定めてわれも宿無しぢやアあるめえ。何處の何といふものだか、きり〳〵それを吐かしやあがれ。

ト仙右衛門豐を突放し、門口をぴしやりと締め二重へ腰をかける。おむつ行燈へ燈火をうつす、豐額を上げて、

豐　何れの者とお尋ねに、此身の素性を語るさへ、面目もなき事ながら、一通りお聞き下され。（ト合方になり。）何をか包まん某は、元舊幕の直參にて、五百石を領せし身なれど、若氣の至り放埒

に親共より讓り受けたる、貯への金銀を遊里に於て遣ひなくし、既に瓦解の其折も脫走なさず町家に身を寄せ、其後士族に召出され、一人の母を片手業に商法をも開きしが、仕馴れぬことゆゑ利德もなく、彼の頂戴なす御扶持方は借財の爲に皆奪はれ、遂に活計の道を失ひ、まだ其上某が昨年夏より長煩ひ、次第々々にたつきに迫り、大小始め衣類まで皆悉く賣代なし、母を養ふ飯米の手當も盡きし當惑より、胸に浮みし出來心、盜みをなして今日のかゝる貧苦を凌がんと、この家の內へ忍び入り、斯く捕はれし上からは、假令獄屋へ引かるゝとも是非もなき事ながら、斯くと聞かば母人のその驚きはいかばかり、もし老人の歎きに迫り不慮の事でもある時は、悔んで返らぬ我が不孝、爰の道理を聞きわけられ、何卒この儘某をお見脫し下さらば、生々世々の御高恩、此儀偏に賴み入る。

ト豐手を突いて賴む、仙右衞門思入あつて、

仙右　成程盜人猛々しいと、わりやあ太え奴だな。(ト合方になり、)神妙らしく長談義、哀れな話で言ひふくめ、此場を助かる心であらうが、此仙右衞門は其手は喰はぬ、桝目の細い米屋の見世で、まだ新米の盜人が、その身の素性を肥後米の上白らしくごまかしても、稼業の道で不斷からこれはふけ米水冠りと、俵の上から見拔くほど、修行の積んだ眼力に、喰せ物だと睨んだからは桝へ

這入つたおのれの體、今夜の始末をはかり立て、相場を調べる屯所へ連れて行くから覺悟しろ。

トきつと言ふ、豐これを聞きぢつと思入あつて、

豐　すりや、かほどまで事を分け、只管お頼み申しましても、お聞き入れはござりませぬか。

仙右　此仙右衛門は盗人に、頼まれたことは一度もねえ。

むつ　あゝもしお前さん、其樣に言はしやんすが、今お話しを承はれば御身分のあるお方とやら、貧苦に迫つて親御さんを、養ふ爲の出來心と、事を分けておつしやるのは、よもや嘘ではござんすまい。

仙太　まだ其上に何一つ、取られぬうちのことなれば、どうぞ此儘見脫して。

仙右　やい、何をわれまでが口を出すのだ、早く樣子を氣取つたから、何一つ取られねえが、知らずにおれが寐て居りやあ何かさらつて行く奴だ、こんな太え奴があるからお上に御苦勞が絕えねえのだ、うぬ是から突出すから、最うかなはねえとあきらめろ。(ト是れを聞き豐覺悟せし思入あつて、)

豐　左樣に仰せある上は、縛せらるゝも餘儀なき次第、如何にも只今言はるゝ通り、假令一品盗まずとも、夜中に忍べば卽ち盗賊、母を思ふて一旦は穩便の沙汰を願ひしが、今更思へば未練の至り、此上は是非に及ばぬ、いざ繩掛けて下されい。(ト豐後へ手を廻す、仙右衛門見て、)

仙右　流石は侍、いゝ覺悟だ。幸ひ爰に俵の繩。

ト仙右衛門下手にある俵の繩を取り豐へ立掛る、此時仙太郎つかつかと寄つて、仙右衛門を隔てしつかり留めて、

仙太　もしおとつさん、まあまあお待ちなされませ。

仙右　またしても子供のくせに、留め立てせずと退いて居ろ。

仙太　いえいえ私の留めるのは、是れもやつぱりお前の爲。

仙右　何だ。

仙太　最前からあのやうに、罪を悔んで其身の詫びごと、側で見るさへいたはしく、此間も學校で修身口授に先生が、お敎へなすつた西洋に、昔し普魯士といふ國のフレデリツキといふ王樣が、お側に使ふ少年の椅子に掛りて睡り居る側に落散る手紙を拾ひ、何心なく讀んで見しに、その少年が故鄕の一人の母へ給金の半を貢ぎし禮狀ゆゑ、斯くまで親に孝心を今まで知らぬは天への恐れと、多くのお金を睡り居る衣嚢へそつと入れたまひしと、今の世までも孝行の鑑に殘る故事は、親を思ふ子の道にて、また此のお方も親のため、どうぞ此儘罪を許し、無事にお歸し申したら、よもや惡くは報いますまい。

仙右　えゝ、わりや學問を鼻へかけ、ませた理窟を並べるが、慈悲をするのも事による、そいつアみすみす盗人だ。

仙太　さあ其盗人にはひられたも、十時過ぎまで門口の、締りをせぬが此方の油斷。

仙右　や。

仙太　さあ、人を思ふは身を思ふと、何にも言はずにあの方を、助けてお歸しなされませいなあ。

ト仙太郎繩をもぎ取る、仙右衞門天窓をかき、

仙右　よく親をへこませやあがる。

ト仙右衞門しよげて下に居る、豐仙太郎に感心する思入、おむつ豐に向ひ、

むつ　もしお聞きなされましたか、あの通り内の悴が親に異見をいたしまするも、無事にお歸し申さうばつかり、あれも學校所へ通ひまして學問をいたしますれば、子供ながらお前さまの親御に引かるゝお心根を、いたはしく存じましてお助け申さうあれが心底、ことに御身分のあるお方とあれば、世間へぱつといたさぬうち、少しも早く此所を。

豐　御親切なる其お詞、必ず忘却は仕りませぬ。それにつけても御子息の感じ入つたる今の一言、平民の子でさへも學校の教へを受け、親を諫めて說得なすに士族の身をもち面目なし、これに恥

ぢて改心なし、元より柔弱非力ゆゑ、士名を捨てゝ商となり、若し活計の道を立て、人並々の者
ともならば、其時こそは御子息に、今宵の恩を謝するでござらう。

むつ　是れと申すも幼いものに、物の道理を教へて下さる其學問のお蔭ゆゑ、有難いはお上のお慈悲。

豐　返す〴〵も御子息は、我が身に取つての大教師、せめてお禮に、（ト豐思入あつて懐より板表紙の手本
を出す、尤もこれに秋津氏と認めあること、）賣代なさんと所持なせし、董其昌の此法帖、心ばかりの
品なれど、何卒これをお受け下され。（ト右の手本を仙太郎の前へ置く。）

仙太　すりや、此品を私に。（ト取らうとするを、）

仙右　仙太待て、物を貰つて濟むものか。（ト仙右衞門引つたくり見て、）何だか怪しい古手本、盜み物なら
引合だ、こんな物は入るものかえ。

ト仙右衞門手本を投出す、是れにてばらりと開けて中の文字見える、仙太郎のぞいて、

仙太　ても、見事な此法帖（ト目早く名前を見て、）あなたは、秋津氏とおつしやりまするか。

豐　どうしてそれを。

仙太　是れに書いてござりまする。（ト是れにて豐こなしあつて、）

豐　はゝあ斯く。お目立ちまする上からは、今は何をか包むべき、拙者ことは舊幕臣、秋津豐後が悴に

て、同苗豐と申す者。(トお睦これを聞きびつくりして、)
むつ　そんならあなたは駿河臺の、若旦那さまでござりましたか。
豐　はて、それを知られしそこ許は。
むつ　あなたに乳を上げました、小松川のお節が娘、むつと申すものでござりまする。
豐　さては乳母の娘であつたか。
むつ　若旦那さまでござりましたか。
豐　あゝ、面目ない。(ト豐うつ向く。)
仙太　そんなら常々話しに聞いた、お屋敷の若旦那さま。
むつ　以前に替りし御樣子と、承はつてはをりましたが、そんならあなたはそれ程までに。
豐　零落いたせし今の身の上、詳しい事は申さずとも、今宵の始末で察してくりやれ。
むつ　あゝおいたはしいことでござりまする。(トおむつは仙太郎と共に泣く、仙右衞門これを見て、)
仙右　女房の爲にやあ由縁のある、主筋かは知らねえが、こつちやあ少しも緣はねえ。これ盜人のお侍繩目に掛つて突出す所を、無事に濟ましてやるからは、有難いと三拜して、もういゝかげんに歸らつせえ。(トあつけなくいふ。)

豐　成程盗賊の罪科をお許し下さる上からは、長居いたすは恐れあり、最早お暇仕る。(ト立掛るを、)

むつ　あゝもし、ちよつとお待ち下さりませ。(ト豐を留めておむつ上手の戸棚より手文庫を出し、此中の札入より札を出して、)もし、若旦那様、ほんの私が心ばかり、聊かでござりまするがお宅へお持ち下さりまして、御隱居さまへお好きなものを、買うて上げて下さりませ。(ト札を出す。)

豐　はて以前の誼を忘れずして、貧苦を惠むお志し、此儘に貰ひ受け、母の土産にいたすであらう。

ト仙右衞門これを見て、

仙右　扨々無駄を知らぬ奴だが、いつたいそりやあ見世の物か、見世の物なら、一文半文手を附ける事はならねえぞ。

むつ　いえ〳〵是れは去年の暮に、とゝさんから貰つた札、私の物でござんすわいな。

ト仙太郎も同じく文庫より小札を出し、

仙太　おぢいさまより小遣ひに、わたしも貰うた此小札、これも一緒に差上げまする。(ト豐の前へ出す。)

むつ　僅か一朱でござりますが、仙太郎の志し、お受けなされて下さりませ。

豐　最前拙者を助けくれし、厚き情の其上に、親子諸共かほどまで、重ね〳〵の志し、詞に任せ受納いたす。必ず忘れはおきませぬ。

ト豐件の札を押しいたゞき懐へ入れる、是れにて明けの鐘、仙右衛門聞き耳立て、

仙右　とかういふうちありやもう九ツ、夜更けさふけにごて〳〵して、隣り近所へ見ッともねえ、さあさあきり〳〵と歸りなせえ。（トあつけなくいふ。）

豐　十二時とあらば思はぬ遲刻、直さま是れより宿先へ。

仙太　もうお歸りなされまするか。

豐　如何にも、お暇仕る。（ト立上る。）

むつ　して只今は何方に。

豐　その隱れ家は何れそのうち。

むつ　左樣なればお近いうちに。

仙右　また來られては迷惑だ。

むつ　若旦那さま、

豐　お睦どの。

仙太　御機嫌よろしう。

豐　あ返す〴〵も今宵の恩義。（ト思入。）

仙右　えゝ、まだうせぬか。（トむごく突出す、豐よろ〳〵と門口へ出る。）

むつ　あもし。（ト寄らうとするを、）

仙右　これ。（ト隔てゝ、門口をぴつしやり締めるを道具替りの知らせ、）どれ締りをしようか。

ト仙右衛門掛金をしつかり掛ける、豐外にて情ないといふ思入。おむつは外を氣遣ふこなし、仙太郎は以前の手本を出し戴く。此模樣さんげ〳〵火の用心の割竹にて道具廻る。

（深川萬年橋の場）――本舞臺正面大川より向うの川端を見たる遠見、上手の所横に枝川のある心にて、繪心にたすき欄干の橋を掛け、萬年橋といふ札打附けてある。下手に出茶屋を片附けし葭簀張り、日覆より柳の釣枝、灯入りの月をおろし、總て深川萬年橋夜の模樣、時の鐘波の音にて道具留る。と直にばた〳〵になり、花道より以前の三五郎逃げて出る、銀次これを追ひかけ出來り、茶屋へ來て銀次三五郎を捉へ、

銀次　やい三五郎、待たねえか。（ト上手へ廻り、）なぜ手めえはおれを見て、一目散に逃げ出した。

三五　なに、おめえなら逃げやあしねえが、もし湯屋から捜しに來たかと思つたから、それでおらあ逃げたのだ。

銀次　何にしろ、さつき渡した、時計と紙入をこつちへ寄越せ。
三五　今出すから待つてくれ。（ト三五郎懐へ手を入れもぢ〳〵して、）こいつあ大變なことした、紙入は持つて居るが、時計の方は落してしまつた。（ト嘘をつく思入。）
銀次　時計の方は落してしまつた。（ト銀次さてはといふ思入あつて、）落したら仕方がねえ、紙入だけをこつちへ寄越せ。（トこれにて三五郎懐より以前の紙入を出し、）
三五　それ、よく見ねえ、しつかりと渡したぜ。（ト銀次受取つて見て、）
銀次　よし〳〵、跡でふてう割をして遣るぞ。（ト懐へ入れる。）
三五　まだ用があるから、おらあ爰で別れるぜ。（ト行き掛けるを、）
銀次　ちよつと待て。
三五　何ぞまだ用があるか。（ト立戻る、銀次だしぬけに三五郎の胸倉を取り、）
銀次　野郎め、時計をどこへこかしやあがつた。（トしめあげる。）
三五　あゝこれ、どうする〳〵、時計は、落したと云ふことよ。
銀次　どこで、落した。
三五　湯屋から出て爰まで來るうち、道を急いで途中へ落した。

銀次　馬鹿ぬかすな、そんな事を喰ふやうな、銀次だと思やあがるか。（ト合方になり、銀次右の手にて三五郎の胸倉をぐいと取りながら。）名前目は道具屋だが、小二朱や五丸の口錢で、天窓ア下げた事あねえ、ほんの稼業は附けたりで年が年中小めくりや、また賽事に日を暮し、鐵火の盆で遣り取りも、負けた擧句は盛り場で小遣ひ仕事の晝稼ぎ、それもけふ日は町役の島刑状のぼく除けに、辻商人とごまかして、天麩羅銀次も上部にやあ堅氣な衣を掛けちやあ居るが、種は名うての巾着切だ、まだ駈け出しの手めえ達が、よもやに掛ける積りでも何で其手を喰ふものか、さあ時計を出すか出さねえか、うぬ出さゞあたゞはおかねえぞ。（ト強く捻ぢあげる、三五郎切なき聲にて、）

三五　兄き、出すから弛めてくんねえ〳〵。

銀次　そんならきり〳〵、出しやあがれ。（ト手を弛める。）

三五　さう覺られちやあ仕方がねえ、今出すから待つてくれ。それ、時計は爰に。

ト出して見せる、銀次取らうとするを、三五郎前の川へ飛込む、

銀次　野郎め、生かしちやあおかねえぞ。

ト續いて飛込まうとして、さう行かぬ思入にて上下へうろ〳〵する。此時橋の上より五郎七腹掛股引、牛鍋屋亭主のこしらへ、大束の葱五六把を繩にて下げ出來り、銀次に突當り顏を見て、

五郎　や、若旦那か。

銀次　五郎七か。

五郎　いゝ所で逢ひました。（ト捉へようとするを、）

銀次　手めえに逢つちやあ。

ト銀次振りもぎつて以前の紙入を落し、上手の橋の上へ逃げてはひる、五郎七跡を見送り、

五郎　あゝもし、たつた一言このわしが、言ひたいことがござります。もし若旦那々々、えゝもう逃げて行かつしやつたか。（ト呆れて見送る、此時件の紙入に目を附け拾ひあげ、）こりやこれ紙入。

ト思入、下手葭簀の蔭より以前の義七出て、

義七　それをこつちへ。

ト取らうとするを、五郎七突廻してちよつと立廻る、此時橋の上より銀次うろ〳〵紙入を捜しながら出來る、是れと一緒に下手より以前の豐、何心なく出來り義七うろたへて突當る、五郎七提灯を出すを銀次打ち落す、これを枷にさぐり合ひ世話ダンマリよろしくあつて、紙入は五郎七の手へはひる、義七縫包みにて打つてかゝる、豐身を躱して義七をぽんと轉す、銀次は五郎七の持つたる紙入をひつたくり、つか〳〵と花道へ行き、

銀次　泥坊。(ト大きく言ふ。)

豐　えゝ。

トびつくりして、上手にて思はず懷を押へる、五郎七は下手にて義七へ踏みかける。銀次は紙入を内懷へしつかり入れる、三方見合つて木の頭、

銀次　どろばうく。

ト言ひながら花道へ走りはひる、五郎七は義七を踏みかけしまゝ是れをきつと見込む、豐ホツと息をつき胸を撫でおろす、此模樣浪の音、佃にて、

ひやうし　幕

二幕目

久保町牛肉屋の場
比丘尼橋西洋床の場

〔役名――秋津豐、西洋床ざん切の左吉、絹屋息子六三郎、下剃の吉、辻道具屋れり玉の三五郎、屑屋權兵衞、巾着切義七、天數羅銀次、盲人仙右衞門、牛鍋屋五分ねぎの五郎七、書生なまじゆく鷄卵。五郎七女房お咲、左吉妹お園、仙右衞門女房おむつ等〕。

（牛肉屋見世の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向うに暖簾口、上手一間間平戸の押入、下手一間酒樽、三段の棚になり、火鉢燗徳利などの書割、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方一間葺おろし、三尺牛肉といふ腰障子、三尺口の向う牛の股をつるし、下手に俎板、臺附しちりん、鍋などの書割、門口の外に赤く牛肉と記せし立行燈。總て牛肉屋見世の體。平舞臺の上手に前幕の銀次、三五郎月代生へ單物病み擧句のこしらへにて、義七と三人鍋を載せし火鉢を五德に取卷き、側に燗德利牛を入れし皿などを置き、酒を吞み居る、下手にお咲結び髮世話女房のこしらへ、襷がけ燗銅壺で酒の燗をして居る、此見得米山甚句にて幕明く。

銀次　こうお咲や、鍋が出來たら、生肉を二枚いゝ所を切つてくれ。

お咲　はい、畏りました。（ト燗德利を持つて來る。）

義七　贅澤なことをいふやうだが、葱は五分よりざくがいゝね。

銀次　ついでにたれもくんねえよ。

お咲　只今揃へて上げませうわいなあ。

ト下手の下家へ來て牛を切るこなし、此うち三五郎面目なき思ひ入、義七取りなすこなしにて銀次に向ひ、

義七　もし兄貴、おめえも腹が立つだらうが、久しく三五郎も煩つたから、何事も水に流して堪忍してやつておくんなせえ。

三五　實に斯うしておめえに逢ふのも、面目ねえ話しだが、あの時時計をごまかさうと、少しばかり水心があつたばかり、川へ飛込み潜つて向うへ抜けようと思つた所が目がくらみ、こいつあ爰で死ぬことかとあわてた紛れに時計を落し、やう／＼岸へ這ひ上り三次が所で始末をして、其晩夜更にこつそりと碇をおろして捜したが、沼の中へ潜つたか、但しやあ網にでも引つかゝつて、漁夫にでも拾はれたか、四五日ばかり捜したが、水の中ゆゑ知れなんだ。

銀次　あの時直ぐなら捌けるが、今となつちやあ出た所が、紛失觸れが廻つたから、うつかり賣りやあ喰ひ込み、直に中へ行かにやあならねえ、まあ知れねえなら其儘に、川へ沈めておくがいゝ。

義七　沈んで居ればいつか一度、拾ひ上げることもあるが、ひよつと網にでも引ッ掛つて、揚げられた日にやあ無駄骨だ。

三五　いや網にでも引ッ掛つて揚りやあ直に屯所へ、拾ひ主が訴へるから、日々新聞へ直に出にやあならねえが、まだ新聞に出ねえから、川の中に違えねえ。

銀次　手めえは不斷から高慢だが、日々新聞を買つて見るか。

三五　なに、新聞賣屋へ二百出して、時々行つて讀んで來るのさ。

銀次　また生利なことを言やあがる、水心も知らねえで。

三五　さう言はれると面目ねえ、少しばかり泳げるとこから、吞まねえでもいゝ水を吞んで、痢病と瘧と二枚がけで、丁度八十日苦しんだ。

銀次　懲役場とはどつちがいゝ。

三五　いやも、懲役場は眞平だ、一度行くと懲り〳〵する。

義七　手めえがそんな煩ひをするも、あんまり慾張り過ぎるからだ、おらあ兄貴に紙入の割を貰つて成田から、芝山の仁王さまへ參つて來た。

三五　手めえも仁王さまへ參つたのか、よく何ともなかつたな。

義七　なぜ、參つちやあ惡いかえ。

三五　いゝの惡いのといつて、芝山の仁王さまは、泥坊除けだ。

義七　そいつアさつぱり知らなんだ。

銀次　ぼんやりとした奴だな。（ト此うち猪口の遣り取りをして、三人酒を吞むことよろしく）

お咲　はい、生肉を切つて參りましたが、直に御膳を上げませうか。

銀次　いや、飯は喰つても喰はねえでも、もう一本つけてくんねえ。
お咲　今上げましたのが九本目ゆゑ、もうよろしいではござんせぬか。
銀次　またそんな氣障を言ふよ、數よく十本呑ましてくれ。
お咲　それぢやあもう一本つけますから、是れぎりになさいましよ。
義七　今日は親方は見えねえが、買出しにでも行きなすつたか。
お咲　いえ、奥の三疊に寐て居ります。
義七　はあ、風でも引きなすつたのか。
お咲　此間から持病の癇で、舌が釣つて一言も口を利くことがなりませぬゆゑ、何やかやでじれつたいので、間がな隙がな寐てばかり居ります。
三五　そりやあ、嘸困りなさるだらう。
お咲　まことに不自由で困りきります。（ト徳利を持て來て、）それぢやあもう是れきりになさいましよ。
銀次　おいく承知々々、（ト徳利を取り、）いや五郎七の口がきけねえので、異見をされる世話がなくつて、おれが爲にやあよつぽどいゝ。（ト酒を呑んで三五郎へさす。）
三五　兄貴、わつちやあ、もういけやせぬ。

銀次　手めえ豪氣に弱くなつたなあ。
三五　病ひ擧句のせゐか、直に醉ひやす。
銀次　何にしろ病み擧句に、單物ぢやあ寒からう、布子の一枚も着せてやりてえが、おれも此頃間が惡く斯うして紙入は持つて居るが、中に小札が一分二朱だ。（ト件の蟇口の紙入を出し中を明けて見せる）
義七　おめえも都合の惡いところへ、こんな事を云ふも氣の毒だが、どうかしてやつてくんなせえな。
銀次　爰の牛鍋屋の五郎七は、おれが親仁が使つた者ゆゑ、借りがなけりやあ無心を言つても、布子くらゐは着せてやるが、山ほど是れまで借込んだから、言つた所が貸しやあしねえ、どうかおれが算段しようから、もう一杯呑むがいゝ。
三五　いえ今も云ふ病み擧句で、すつかりわつちやあ利きやした。
義七　それぢやあわつちがその替りに、もう一杯呑みやせう。
銀次　よく呑みたがる奴だなあ。

と銀次義七酒を呑む、此うちお咲下手へ來て、棕櫚箒へ頰冠りをさせ、下手へ立てかけて拜む。やはり米山甚九にて、花道より權兵衞縞の半纏股引、尻端折り紙屑屋のこしらへにて、屑籠を擔ぎ出來り、

權兵　屑はございく。（ト花道へ來り、）まだ屑は溜りませぬか。

銀次　おい、屑屋さん〱。
權兵　お呼びなすつたは、此方でござりますか。（ト門口を明け、）今日はよいお天氣でござります、もしお上さん、屑屋はどちらでござります。
お咲　いえ、屑は昨日賣つたから、まだ少しも溜りません。
權兵　左樣なら、何ぞお拂ひ物がござりますか。
お咲　いえ〱、何もござりませぬわいなあ。（ト權兵衞むつとして、）
權兵　それぢやあたゞ冷かしかえ、惡い洒落をしなさるね。
銀次　おい〱屑やさん、腹を立てなさんな、呼んだのはおれだ。
權兵　へい、お前さんでござりまするか。
銀次　まあ爰へ來て、一杯やんねえ。
權兵　はい、有難うござります、私は。（トもぢ〱する。）
三五　おめえ酒は嫌ひかえ。
權兵　いえ、嫌ひぢやござりませんが。
義七　嫌ひなら仕方がねえが、好きなら、早くやんなせえ。

權兵 實はぷんと匂ひをかいで、ぐびついて居る所でござります。

銀次 それぢやあ早くやんなせえ。（ト茶碗を出す。）

權兵 これは有難うござります。（ト茶碗で一杯ぐつと呑み、）もう一杯頂戴いたしませう。（ト呑んで、）ときに、お拂ひなさいます物は。（ト銀次懐より件の紙入を出して、）

銀次 此黑棧の紙入だが、幾らにおめえ買つてくれるか。（ト權兵衞は取つて見て、）

權兵 これは、結構なお紙入でござります。

義七 地體のいゝ紙入だから、張込んで買ひなせえ。

權兵 御酒を御馳走になりましたから、目一杯張込んで、一兩三分にお貰ひ申しませう。

銀次 そいつァちつと安からう、蟇口の銀ばかりも、二兩がものはあるだらう。

權兵 いえ、私の方へ引取りますと、潰し直でござりますから、二兩には踏めませぬ。

銀次 外へ見せたら三兩か、安くも二兩二分位にやあ買手があらうが、急ぎの金だ、二兩に買つて行きなせえ。

權兵 さうおつしやいますなら、御愛敬にもう二朱も買ひませうか。

義七 汚ないことを言はねえで、器用に一分買ひなせえ。

權兵　實に目一杯でございますが、御酒を頂戴いたしましたから、一兩にお貰ひ申しませう。其替りもう一杯、どうぞ振舞つて下さりませ。
三五　それぢやあ、もう一分買つてもいゝのだ。（ト三五郎ついでやる、權兵衞呑んで、）
權兵　時に此節は以前と違ひ、往來買ひが御法度ゆゑ、お宅はどちらでござりますな。
銀次　おれが家は遠方だから、爰で賣つたらいゝぢやあねえか。
權兵　こちらのお家で御承知なら、直ぐにお貰ひ申しませう。
銀次　爰は親類同樣だから、おめえも手帳へ留めるなら、牛肉屋の五郎七と、こつちの名前にしておきねえ。
權兵　左樣なら、五郎七さんでござりますな。（ト權兵衞矢立を出して手帳へ記す、これをお吹聞いて、）
お咲　あゝもし、ちよつと待つて下さんせ、こつちの家の名前では。
銀次　何の構つたことがあるものか、これが盜み物といふぢやあなし、おれが物をおれが賣るのだ、名前を借りたつていゝぢやあねえか。
お咲　いえく、こちの人に此事を、言はねばお貸し申されませぬ。
銀次　えゝ、野暮なことを云ふ奴だな。

お咲　もし、こちの人ちよつと來て下さんせ。(ト合方になり、奥より五郎七褞袍平ぐけ裝にて出來り、眞中へ坐る、お咲紙入を取つて、)銀次さんが此紙入を、お前の名前で屑屋さんへ、今賣ると言はしやんすが、名前を貸してもようござんすか。(ト五郎七紙入をぢろりと見て頭を振る。)それ、惡いと言はしやんすわいなあ。(ト銀次、五郎七の側へ寄り、)

銀次　これ五郎七、手めえはおれが紙入を盜み物だとでも思つて居るのか、見る通り此野郎が、病氣擧句で顫へて居るから、布子を一枚着せるのだ、名前が貸せざあ借りねえから、金を五兩貸してくれろ。(ト五郎七これまで幾度貸したか知れぬゆゑ、貸されぬといふ仕形をする。)そりやあ是れまで度々借りたが、主人を家來が貢ぐのは、こりやあ年來の恩返しだ。さあ名前を貸すか金を貸すか、二つに一つ聞いてくんな。

三五　金を貸すのがいやならば、名前を器用に貸しなせえ、何も此紙入が盜み物と云ふぢやあなし。

義七　こりやあ第六天の丸忠で、兄貴がこしれへた紙入だ、決して不正な品ぢやあねえから、名前を貸してやんなせえ。

三五　それとも名前が貸されざあ、金を貸してやんなせえ。

銀次　さあ五郎七、名前を貸すか。(ト紙入で五郎七の胸を叩く、五郎七口の利きたい思入。)但しは五兩金を

貸すか。さあ〳〵〳〵。（ト叩き立てる。）早く返事をしねえのか。（トきつといふ、五郎七是非なくうなづく、）それぢやあ名前を、貸してくれるか。（ト五郎七うなづく、權兵衞見て、）

權兵　きつとお請合ひなさいますな。

お咲　あゝもし、それを請合つては。（ト五郎七お咲を押へ、わが胸を叩き、おれが承知だといふ思入。）

權兵　もし五郎七さん、默つて居ては分りませぬ、名前を貸していゝなら、早くいゝと言つて下さりませ。

銀次　いや、此男は癇が起つて、口がさつぱり利けねえから、うなづいたのが承知のしるしだ。

權兵　御承知であるなら、直ぐにお貰ひ申しますが、爰は何番地でござります。

お咲　はい、十五番地でござります。（ト權兵衞手帳へ記し、財布より一圓札を二枚出し、）

權兵　左樣なら二圓札と、引替へにしまする。（ト渡す、銀次三五郎に向ひ、）

銀次　これぢやあちつと少なからうが、今見る通りの譯だから、是れで一枚着てくれろ。

ト二圓の札を三五郎に遣る。

三五　これを貰つちやあ濟みませぬが、折角の思召しだから、兄貴お貰ひ申します。（ト札を戴く。）

義七　口をきいたわつちも悅び、まことに有難うござります。

銀次　おらあこれから築地の方へ、廻つて行かにやあならねえから、手めえ達ア暮れねえうち、日蔭町へ行つて買つて來ィな。

三五　それぢやあ兄貴、貰ひ立ちに、

義七　一足さきへ行きますぜ。

權兵　わしも是れから立場へ廻つて、屑を賣つて歸りませう。

三五　屑屋さん、しつかり儲かるぜ。

權兵　どういたしまして、しつかりどころか、一朱も儲かればようござりますが。

義七　へん、旨く言つてるぜ。（ト三人門口へ出る。）

銀次　まだぐづ〳〵して居るのか。

兩人　今行きますところさ。

權兵　へい、おやかましうござりました。

ト米山甚九になり、三五郎義七連立つて話しながら、跡より權兵衛荷をかつぎ、屑はござい〳〵と呼びながら三人花道へはひる。五郎七腹の立つ思入にて銀次を捉へ、口が利けぬゆゑ小突き廻すを、銀次振拂ひ、

銀次　これさ、何をそんなに腹を立つのだ。(ト五郎七お咲に言つてくれといふ思入。)

お咲　さあ、あのやうに腹を立つのは、こちの人がお前さんに、是れまでお貸し申したのは、どの位だか知れませぬ、それを返しなさらぬはそりやあ仕方もござりませぬが、今のやうな御無理をばおつしやいますゆゑ、あんまりぢやと言ひたい口が利けぬので、一倍腹が立ちますわいなあ。

銀次　そりやあおれも家を出て、小遣ひ錢に困るから、度々金を借りたけれど、いつでも二兩か三兩だ纏めて一度に十兩と借りたことはありやあしねえ、手めえの方ぢやあ其金を、恩にきせるか知らねえが、借りてもいゝから借りるのだ。(ト五郎七是れを聞き、何が借りてもいゝといふ思入。)これ、借りていゝといふ其譯は、手めえもおれの親仁にやあ、十二の年から世話になり、年が明けて世帯を持ち褒美金に百兩遣り、それから間もなく燒けた時普請金に二百兩、貸した金もそれ切りだ、利息の勘定したならば、何百兩だか知れやあしねえ。おれに二十や三十の端た金を貸したつて、日歩だと思やあ何でもねえ。(ト五郎七またそんな事を言はつしやるかといふ思入にて銀次の手を取り疊へ書くのを見ろといふ思入)なに、疊へ書くのを讀んで見ろ。(ト五郎七腹の立つ思入にて、疊へ書いて見せる。銀次讀んで、)「親旦那は人に勝れ、堅いお人であつたのが、どういふ事で、お前はこんな身持におなりつしやりました、去年あの世へお出でなされたお袋さまが、くれ〴〵もお前さまが、堅氣になる

やうに異見をしてくれと、今際のきはに別れのお頼み。」これ〳〵、もういゝ加減に無駄を言へ（ト手を振拂ひ、）百萬だら言つたつて、今更堅氣になられるものか、おれがかういふ身の上になつたも元は親仁が悪いからだ、木材木町四丁目で五本の指に折られる家だ、何も二本か三本の端た金を使つたとて、勘當するの久離を切るのと、いけやかましく吐かすから、遂にやあ家を駈出して、爰に二日かしこに三日、泊り歩いて悪戯を覺え、双六より外手にとらねえ賽の上が明るくなり、暗い所も三度行きお上へ御苦勞かけるやうな、こんな身性になつたのも、元はといやあ親仁のせゐだ。（ト五郎七これを聞きそんな事を言つて濟むものかといふ思入、銀次の胸倉を取り、引据ゑるを振拂ひ、）えゝ、何をしやあがるのだ。

ト五郎七しなくつてどうするものかといふ思入にて立掛る、側よりお咲留めて、

お咲　おゝ尤もでござんす〳〵、お前の正直な心では、嘸腹が立つでござんせう。（ト五郎七それだと云つてといふ思入にて、また立掛るを、お咲ぢつと留め、）もう、よいかげんになさんせいなあ。

ト銀次五郎七の側へ來て、

銀次　これ、痩せても枯れても主人だぞ、手めえがおれを手籠にして、疵でも附けりやあ主殺しだ。とさあ時代なせりふは言はねえから、もう一杯呑ましてくれ。

お咲　いえ〳〵、もうお前さんには、あげられませぬわいなあ。

銀次　うむ、主人の詞を背きやあがるか。

お咲　それぢやと云つて。

銀次　えゝ、つけろと言つたらつけねえか。

ト立掛る、五郎七銀次の胸倉を取り、引据ゑるを道具替りの知らせ、五郎七お前さまはなあといふ心にてきつとなる、銀次は喉の痛き思入、此の見得米山甚九にて道具廻る、

（西洋床の場）――本舞臺三間の間、左右中窓の硝子障子、下板羽目、向う後へ下げて常足の二重、暖簾口、左右板羽目、同じく下手の棚に香水瓶、刈込みの鋏掛けある、此道具青ペンキ塗り西洋床のこしらへ、入口に紅白の段々塗りの目印を出し、上の方住居の心にて障子屋體、下の方堀端を見たる片遠見、柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て西洋床の體、門口へ椅子を置き、是れへお客の書生生熟鶏卵散切着流し書生羽織駒下駄にて、襟へ金巾の毛除を掛け、椅子にかゝり、下剃の吉散切り着流し、片襷にて鋏を持ちはさみ居る、此見得端唄の合方にて道具留る。

吉　きのふは旦那、どちらへお出でなさいました。

鶏卵 昨日は例の休暇ゆゑ、朋友一兩輩誘引し、ステンショより八時の車で横濱へ遊びにまゐつた。

吉 何ぞ面白いことがござりましたか。

鶏卵 元東京の在住であつたが、當今横濱の新聞で一等の冠たる、假名垣氏魯文子をとぶらひながら、今度櫻木町へ出來た櫻風呂へ行きました。

吉 今朝お出でなすつたお客さまも、其お話しをなさいましたが、慥今月の一日が、見世開きでござりましたね。

鶏卵 東京からも諸先生が夥しく出席して、近年にない盛會だつたさうだ、實に家屋の建築浴室の清潔、一寸樓上で喫する煎茶は元より菓子の美製、あすこの土地は別世界だ。

吉 定めて別品もをりませうね。

鶏卵 實は、それを當込んで行つたのだ。

吉 それぢやあ昨晩は、お泊りでござりますね。

鶏卵 假名垣氏に誘はれ、神風樓へ一泊した。

吉 私も吉原に居る時分、先生の天窓をはさみましたが、やつぱり濱でも相替らず遊びにおいでなさいますかね。

鷄卵　いや人には癖のあるもので、先生家へ寐るのが嫌ひだ。

吉　それといふのも、女郎衆に可愛いがられるせゐでござります、嘸御新造が氣が揉めませう。

鷄卵　あれを一々氣を揉んで、頭上へ角を生したら、針のやうであらう。

吉　いや針の山といへば、先生は地獄もお好きでござりますね。

鷄卵　閻魔界では鬼に鐵棒だ。はツくしよ。

吉　お風氣でござりますか。

鷄卵　なに、濱で噂をして居ると見える。

ト合方にて、奥より左吉散切り着流し、髪結のこしらへにて、盆に茶碗を載せ持ち出て、

左吉　旦那、お茶がはひりました。（ト出す、鷄卵取りて、）

鷄卵　これは親方忝ない、湯上りで一杯喫したい所だ。（ト左吉聞えぬ思入にて、）

左吉　それぢやあお茶は上りませぬか、梅毒には湯の方がようござります。

ト鷄卵さては聾だといふ思入あつて、

鷄卵　親方は段々遠くなるの。

吉　いろ／＼藥も附けましたが、耳の穴へ蓋でも出來たか、さつぱり此頃は聞えませぬ。

左吉　いろ〳〵藥をあがるよりは、南傳馬町の菱屋の藥がようございります。
鷄卵　到頭僕をしいつかきにしてしまつた。
吉　旦那も色の青いのは、少しは梅毒氣もございませう。
鷄卵　まだそんな事をいふか。
左吉　股へ横根が吹き出しましたら、そこで毒をお取りなさい、取り損ふと鼻へ來ますぜ。
鷄卵　うつとしい梅毒責だ。
吉　どこまで行つても振り切れねえ。
左吉　なに、降り出して來た、降り出したら傘をあけろ。
鷄卵　どうでもかさはのがれねえか。
吉　こりやあ旦那、骨がらみだ。（ト兩人顏見合せ）
兩人　はゝゝゝ。（ト笑ふ、左吉同じやうに）
左吉　こいつア可笑い、はゝゝゝ。
吉　えゝ、分りもしねえくせに。（ト右合方にて下手より、以前の權兵衞籠をかつぎ）
權兵　親方、今日はよいお天氣でござります。

左吉　そいつあさつぱり知らなんだが、さぞかし賑かだらう。
吉　また何か間違つたわえ。
權兵　親方、おめえが知らねえと言ひなさるのは。
左吉　駒形へ出來た琴平さまよ。
吉　誰がそんなものを知るものか。
權兵　親方の耳も困つたものだ。
吉　段々遠通寺になります。
權兵　いや遠通寺といへば、赤坂で古火鉢を見たところ、豪氣に重い火鉢だから、こいつあてつきり淺草で先度あつた、火鉢の中に金があるに違ひないと、二朱に踏めねえ代物を三朱で買つてあけて見たら、瓦ばかりで何にもなし、業腹まぎれに投り出して、三朱の金をなくしたが、捨てる神あれば助ける神と、今日はめつぼふな掘出し物をした。
左吉　なに目黒から堀の内へ行つた、よくそんなに歩けるの。
權兵　天狗さまぢやァあるまいし、そんなに道が歩けるものか。
左吉　天德寺から赤羽根へ、成程、あれが近道だ。

權兵　道は近いか知らねえが、お前の耳が遠いので、さつぱり話しが分らねえ。
吉　ときにお前、掘出しといつて、何を掘出して來なすつたのだ。
權兵　吉さん見なせえ、此の紙入だ。（ト以前の紙入を出して見せて、）當時流行の蟇口だが、いゝこしらへぢやあござりませぬか。
吉　成程、こりやあいゝ紙入だ、幾らだか買ひたいものだ。
權兵　どうして〳〵、お前達には買はれねえ。（ト左吉これを見て、）
左吉　その紙入は、賣物かえ。（ト手に取つて見て、）銀金具の蟇口は、妹が話した似寄りの紙入。（ト思入あつて奧へ向ひ、）おその〳〵。（ト奧にて、）
お園　あい〳〵。（ト奧よりお園序幕の娘にて出來り、）兄さん、何ぞ用でござんすか。
左吉　手めえにちつと見せるものがある。（ト件の紙入を見せる、これに構はず、）
鷄卵　屑屋さん、其の紙入はいくらだ。
權兵　三兩二分で買つて來たから、四兩なら上げませう。
鷄卵　一分利附と仕ようから、三兩三分で賣りやれ。
權兵　四兩を缺いては上げられませぬが、もう二朱買つて下さいまし。

鷄卵　そんなきざを言はねえで、器用に負けてしまひなせえ。（ト權兵衛思入あつて）

權兵　ようござります、上げませう。

ト手を叩く、此うちお園とくと見て、是れに違ひないといふ思入あつて、耳へ口を寄せ、

お園　兄さん、これに違ひござりません。

左吉　いよ〳〵是れに違ひねえな。

權兵　只今こちらへ上げました、其の紙入をおくんなせえ。

左吉　權兵衛さん、此紙入はどこで買つた。

權兵　どこで買つても、いゝぢやあねえか。

左吉　おめえは知らずに買つたらうが、此紙入は泥坊ものだ。

權兵　えゝ。（トびつくりする。）

左吉　どこで是れを買ひなすつた。

權兵　こりやあ久保町の曲り角、牛鍋屋で買ひました。

左吉　なに、九兩にこれが曲げてあつた。

吉　久保町の曲り角の、牛鍋屋で買つたとさ。

左吉　むゝ、久保町の曲り角の、牛鍋屋で買つたとか。して、亭主の名は何といふ。

權兵　五郎七と云ひます。

左吉　なに、亭主がごろつきだ。

吉　五郎七と云ひますとよ。

左吉　牛鍋屋の五郎七が此の紙入を賣つたとか。こりやあ詮議をしにやあならねえ。

權兵　それぢやあ、こりやあ泥坊ものかえ。

お園　あい、此紙入は先達て、新開町の湯屋の二階で、お客さまからわたしが預り、取られた品でござんすわいなあ。

吉　權兵衞が種まきアとんびがほじくる、こりやあおめえも掛り合だ。

權兵　今この旦那に早く賣れば、みすく儲かる代物だ、とんだとこから槍が出て、おれが息の根を留められた。

鶏卵　僕もうつかり是れを買ふと、掛り合になる所だ。

吉　もし、安物は買はれませんね。

鶏卵　いや、骨がらみは眞平だ。

ト此うち左吉お園に半纒を持つて來いといふ、お園奥より半纒を持つて來て着せる。

左吉　おい、權兵衞さん、氣の毒ながら此の紙入を、買つた先きまでおめえ一緒に行つてくんねえ。

權兵　それぢやあ一緒に行きますのかね。

吉　はて、掛り合ひだ、仕方がねえ。

權兵　とんだ目に逢ふものだ。（トお園左吉の耳の側へ來て、）

お園　わたしも一緒に行きませうか。

左吉　手めえは奥の番をしろ。吉公、見世を賴んだぜ。

吉　あい、合點でござります。（トうなづく。）

鷄卵　思はぬことでうか〳〵と、僕も大きに長居をした。

吉　まあ、よろしうござりまする、（ト權兵衞左吉の耳の側で大きな聲をして、）

權兵　さあ左吉さん、行きませうか。

左吉　えゝ、聾は居ねえわえ。

權兵　へえ、耳の聞える振をして。

左吉　どれ、洗ひ方をして來ようか。

トきつと思入、端唄になり、左吉先きに權兵衞籠をかつぎ、兩人よろしく花道へはひろ。鷄卵は下手へはひろ。

吉　どうして今の紙入が、牛屋の手から出たことか、思ひがけねえところから、悪い事は足の附くものだ。

お園　これといふのも豐川さまへ、お願ひ申した御利益で、それで知れたでござんせう。

吉　ほんに、豐川さまはあらたかだ。

お園　それはさうとお前はまだ、お晝飯をおあがりでなかつたね。

吉　つい忙しいので忘れてしまつた。此間に一膳かッ込みませう。

お園　生憎今日は何にもないが、お茶はいゝのがありますよ。

吉　そいつあ何より有難い。どれ、かつ込んで來ませうか。

ト合方にて、吉は奥へはひろ。跡にお園思入あつて、

お園　六三さんはどうなさんしたか、半月餘り便りもなく、お家の首尾が悪いか知らぬ。聞けば取られた紙入になくてはならぬ書附が入れてあつたを失つて、親御さまへ言譯がないと云ふてゞござんしたが、其お苦しみを掛けるのも元はと云へばわたしが麁相、濟まぬことをしたゆゑに、湯屋た

ら歸つて兄さんに譯を話して其品を、尋ねて貰へど今日までも、行方の知れぬ紙入が、思ひがけなく知れたれど、其書附がないゆゑに今詮議に行かしやんしたが、どうぞあつてくれゝばよいが、それがなければ六三さんに、濟まぬ事でござんすなあ。

とお園涙を拭ふ、やはり端唄にて、花道より前幕の六三郎、着流し草履下駄にて出來り、花道にて、

六三　今更言つても仕方がないが、日外とられた紙入の中にあつた貸金證書、此間まである積りで隱して居たが貸先が、夜逃をして行方知れず、あれがなければ無證據ゆゑ、義理ある親仁に三百兩損を掛けねばならぬ仕儀、殊には實のお袋が中へ這入つて其の迷惑、なまじ小言をいはぬだけのめのめ家にも居られぬ此身、死なうと覺悟を極めたゆゑ、お園にちよつと餘所ながら暇乞をしようと思つて、爰まで出かけて來たけれど、逢はない方がましか知らぬ。

ト右の唄にて腕を組み、舞臺の方へ來て、また跡へ戻らうとする、是をお園見て、

お園　や、六三さんぢやござんせぬか。

六三　おゝお園か。（ト六三郎向うへ行かうとするをお園とらへて、）

お園　どこへお出でなさんすのか、まあ〳〵爰へ來て下さりませ。（ト是れにて六三郎お園に連れられ舞臺へ來て、）此間から逢ひたうて、お待ち申して居りました、なぜ顏見せては下さんせぬ。

六三　わしも逢ひたく思つたが、此頃はやる風を引き五六日寐たゆゑに、それで此方へ來なんだのだ。

お園　いえ〳〵さうぢやあござんすまい、大方どこぞに面白い所があつて此頃は、そこへ行かしやんすのでござんせう。

六三　そんな浮いたどころか、日外とられた埋草に、跡の月から心を入替へ、商法大事に精を出し風の直るを待ちかねて、儲け口で長崎へ急行に行かねばならぬゆゑ、久しく逢はれぬ言譯と、暇乞に今日來たのだ。

お園　さあ其長崎へお出でなさるも、日外とられし品々の其埋草とおつしやるゆゑ、お待ちなされて下さりませ。

六三　そりやまた何ゆゑ、留めるのぢや。

お園　日外とられし紙入の、思はず在所が知れました。

六三　え、あの紙入の在所が知れた。して〳〵、それは何處から知れた。

お園　こつちの見世へいつも來る、紙屑屋が持つて來たゆゑ、今兄さんが賣先きへ、出所を聞きに參りました。

六三　して、紙入の賣主は。

お園　あの久保町の曲り角で、五郎七といふ牛鍋屋が、賣つたさうでござります。

ト是れを聞き六三郎思ひ入あつて、

六三　あの紙入の出所が知れゝば、こいつアうつかり死なれぬわえ。（ト思はずいふ。）

お園　なに、死なれぬとは。（ト思ひ入、合方きつぱりとなり。）

六三　さ、盗み取られし紙入の中にあつた證書といふは、三百兩の貸證文、湯屋の二階で失ひしと親仁の前へ言はれぬゆゑ、たゞお袋へ内證で話し、證文箱へ入れた積りで今日まで隱しておきたれど、その貸先が夜逃げして、願つて出るに貸方證書が、なければ出るにも出られず、義理ある中の親仁ゆゑお袋がそれを苦にして昨夜から、胸の痞につての苦しみ、側で見て居るわしが苦しさ、まだ部屋住みに商法も利を得ることのないおれが、三百兩の貸證文に損をかけ、産みの恩あるお袋に苦勞を掛ける身の不孝、濟まぬことだと思ひ詰め、死ぬる覺悟で長崎へ行くと言つたは餘所ながら暇乞をしに來たのだ。（トお園これを聞いて六三郎に縋り。）

お園　さういふ事ならなぜわたしに、話しをしては下さんせぬ、親御さんに濟まぬといふてお前が死ぬる其覺悟も、元の起りはわたしゆゑ、お前が死ぬなら共々にわたしも死にたうござんすが、其紙入の出所を今兄さんが詮議に行つたゆゑ、家へ歸つてござんすまで、どうぞ待つて下さんせいな。

あ。

六三　その手掛りが知れたとあれば、左吉殿が歸るまで死ぬのは思ひ止まるから、必ずともに案じやるな。

お園　そんなら兄さんの歸るまで、思ひとまつて下さんすか。えゝ有難うござんすわいなあ。

ト手を合せ拜む、六三郎思入あつて、

六三　思へばさつき一途に迫り、おぬしに逢つたら未練が出ようと、實は逢はずに死ぬところ。

お園　さういふ事があつたらば、尋ぬる證書が出たとても、

六三　是れがあつたら死ぬまいものと、親に苦勞を掛けるのみ、

お園　わたしを思ふて餘所ながら、

六三　未練に逢ひに來たばかり、

お園　あやふいお命助かりしは、

六三　神の助けでありしよなあ。（ト兩人思入、奧より以前の吉出て、）

吉　もしお園さん、奧に誰も居ないから、留守番をしておくんなせえ。

お園　えゝ、今行くわいなあ。

吉　これは若旦那、いらつしやいまし。

六三　久しくお前にも逢はなんだ。

吉　どうなされましたかと、此間からお噂を申してをりました。お園さん丁度兄貴が居ないから、若旦那をお連れなすつて。

お園　ほんに、裏口の番をしながら、

吉　隣り知らずのしつぽりと、

兩人　え、

吉　話しでもなさいまし。

六三　それでは、兄御の歸るまで。

お園　わたしと一緒にござんせいなあ。（ト端唄になり、お園六三郎の手を取り奥へはひる。吉跡を見送り）

吉　若旦那も此間までは、來る度毎に一圓づゝ口塞げに下すつたので、程よく幕を切つてあげたが、今日此頃は不都合か一歩の渡りもくんなさらねえ。奢る平家は久しからずと、よく人の言ふことだが、成程沒落は早いものだ。

ト端唄になり、花道より秋津豐羽織着流し駒下駄、商人のこしらへにて出來り、花道にて、

豐　今日は十日で金比羅さまへ、人の出るので賑かだ、おれも晝から參らうと思ふところへ寄合を、觸れて來たから行かねばならぬが、ちよつとたばねて行きたいものだ。（ト舞臺へ來り、）吉公親方は家か。

吉　これは旦那いらつしやいまし。今久保町まで參りました。

豐　金比羅さまへ行つたのか。

吉　いえ、據ないことで參りましたが、名代新造でよろしくば、私が遣りませうか。

豐　いやお前なら結構だが、急に寄合へ行くのだから、撫附けて貰はうか。

吉　そりやあ私の手にかゝるより、上分別でござります。

豐　どうして親方より、お前の方が心持は、

吉　よつほど惡うござりませう。

豐　惡いどころか、實にいゝのさ。

吉　そんなに油をおつしやらずと、まあお急ぎならいらつしやいまし。

豐　それぢやあちよつと、撫附けてくんなせえ。

ト豐二重へ腰をかける、吉後へ立掛る、此とき花道の揚幕にて、

仙右　どうぞ御免なされて下さりませ。

三五　えゝやかましい、うしやあがれ。（ト是れをきつかけに床の淨瑠璃になり、）

義七　〽世の中は淵瀨と潛る飛鳥川、深き其身の罪科に盲目となりし仙右衞門、杖と頼みし子に別れ、足許わるくとぼ〱と、突當りたる生醉に、詫びをなせども聞き入れず。

ト此うち花道より前幕の仙右衞門、亂れし鬘そぼろなるこしらへ、胸へ「俄目くら」といふ札を掛け、杖と鼻緒の切れし下駄を片々持ち、以前の三五郎義七生醉の思入にて、仙右衞門を引摺りながら出來り、花道にて、

三五　これ、此廣い往來中を、何でうぬア突當りやあがつた。

仙右　御覽の通り俄目くらで勘が惡うござりますから、つい突當りましてござりまする。

義七　たゞ突當つたばかりなら、文句を言はず通して遣るが、厭といふほど足を踏んで、おれが方から突當つたやうに、不理窟を言やあがるから、毆りつけにやあ腹がいねえ。

三五　御免なせえと手を突いて、うぬが方からあやまりやあ、盲目を相手にしやあしねえわ。いけ強情をぬかすから、了簡がならねえのだ。

義七　盲目くらゐ根性の、曲つた者はありやあしねえ。それだから、目が潰れたのだ。

仙右　そりやあ皆さんがおつしやらずとも、斯うして兩眼潰れましたも、みんな私の心立てが惡いからだとあきらめまして、假令途中で打たれても、ぢつと辛抱してをります。定めてお腹も立ちませうが、どうか御勘辨なされて下さりませ。

三五　心立てが惡くつて、目が潰れたとあるからは、どうでろくな奴ぢやァあるめえ。

義七　天道さまの名代に毆つてやるから。

兩人　うしやあがれ。

〽詫びるも聞かず兩人が、引摺り來り蹴倒せば、涙にまろぶを兩人が、見るに忍びず嚇ければ、

ト此うち兩人仙右衛門を引摺り、舞臺へ來り撲りつけて酷く蹴倒す、仙右衛門悔しいといふ思入にて涙ながらに手を合せ詫びる、豐これを見て不便だといふ思入あつて吉に嚇く、吉門口へ出て兩人を留め、

吉　こう〳〵、どんな惡い事をしたか知らねえが、何しろ相手は盲目だ、いゝ加減にしなさらねえか。

三五　よく見や、降りさうもねえ天氣だが、とんだ生利が降つて來たな。

義七　さうよ、いゝ加減に仕ようとどうしようと、人の指圖を受けるものか。
三五　餘計な口を利きなさんな。
吉　こうおめえ方は二合半か葛西の若い衆か知らねえが、此東京のものなら、盲目を相手に喧嘩はしねえ、天から降つた生利なおれの云ふこと聞けばよし、聞かれなけりやあ仕方がねえ、お巡り方をお頼み申して、お上の御苦勞に掛けるから、屯へ一緒に步びなせえ。
三五　おゝ屯所でも裁判所でも、どこへでも行きやせう。
吉　さあ、行くならおれと一緒に來い。
三五　行かなくツてどうするものだ。（ト三五郎ぶる〳〵顫へながら步むを義七留めて、）
義七　これ〳〵三五郎、曇りかすみのねえこちとら、どこへ行くのも怖くはねえが、暇ツつうやしだ、よしにしろ。
三五　生利兄いが行けといふから、行くところまで行かにやあならねえ。
義七　これさ、いゝかげんに野暮を云へ、手めえやおれが行つた日にやあ。何も怖へことはねえが、今もいふ暇ツつうやしだ、今日は負けて歸つてやれ。
三五　外の奴が留めるならどんな事でも歸らねえが、さつきも布子の世話になつた、手前の詞は背かれ

ねえから、今日は負けて歸つてやらう。

義七　それぢやあおれが詞を立て、今日は手めえ歸つてくれるか。

三五　然しこの儘歸るのは、癪に障つてこてえられねえ。

〽またも盲目を蹴倒せば、（ト三五郎仙右衞門を蹴倒す、仙右衞門どうと倒れる。）

吉　えゝ、酷いことをしやあがるな。

三五　したらどうする。

吉　どうするものか力みやあがると、樫の棒を背負はせてやるぞ。

三五　おゝ面白い、背負はされよう。

〽屯と聞いて身の罪に、口と心の裏表、ぶる〳〵もので歸り行く。

ト三五郎ふろへながら力むを、義七是れを留め、捨ぜりふにて、息込む三五郎を押へながら、兩人花道へはひろ。

〽跡に盲目は顏をあげ、（ト仙右衞門顏をあげ、思入あつて、）

仙右　どなたさまでござりますか、危い所をお助け下され、何とお禮を申さうやら、有難うござります。

豐　如何に生醉だといひながら、目の見えねえお前を捉へ、酷いことをしやあがつたが、何ぞ遺恨でもありやあしねえか。

仙右　私も若い時分には、負けぬ氣性でござりましたから、仰しやる通り喧嘩でもした奴かも知れませぬ。

ト仙右衛門の足へ糊紅の附いてゐるを見て、

吉　おゝ、おめえ、足から血が出るぜ。

仙右　ぴり〱すると思ひましたが、それでは膝をすりむきましたか。

豐　血が止まらずば、爰にいゝ血止めがあるから上げませう。

〽情も厚き紙入より、血止めの薬取り出し、思はず盲目の顔を見て、

ト豐紙入より薬包を出し、仙右衛門に遣らうとして、

や、こなたは。（トびつくり思入。）

仙右　え。（ト仙右衛門思入。）

豐　はて、思ひがけない其の姿。

吉　旦那は、お近附きでござりまするか。

豐　いや、近附きといふ譯でもないが。（ト豐よろしく思入、仙右衞門思入あつて、）

仙右　さういふお聲は、私も承はつたやうでござりまする。

〽いふ顏見れば面やつれ、髮も亂れて古への、姿あらぬを不便に思ひ、

ト仙右衞門件の血止めを足へ附ける、吉古手拭で結へてやる。

豐　してお前は達者な時分、何生業をしなすつた。

仙右　はい、私は春米屋を年來いたしてをりました。

吉　米を舂くのは毒だといふが、脾胃を揉んで其やうに、目が潰れなすつたのか。

仙右　いえ、さういふ譯でもござりませぬ。

豐　何しろ中年で、目が潰れては困りなさらう、定めてお前のお上さんや、子供衆があるだらうな。

仙右　はい、女房もござりますれば、悴も一人ござりまする。

吉　爰においでなさる旦那は、お慈悲深い旦那だから、品によつたら御助力を、お願ひ申して上げようから、どういふ譯で目が潰れたのか、譯を話して聞かせなせえ。

仙右　えゝ有難うござります、御親切なお詞に、包まずお話し申しまする。不圖風眼を煩つて、俄に兩眼潰れましたも、みんな御罰でござりまする。

豊　兩眼俄に潰れるはどな、罪を受けたと云ひなさるが、どんな事をしなすつた。

吉　金比羅さまへ斷つた酒を、破つて罰を受けなすつたか。

〽問はれて浮む涙を拭ひ、（ト床の合方になり、仙右衞門思入あつて）

仙右　斯樣に兩眼潰れましたも、年來いたす米屋の科、上より渡る一升の桝へ一升はからねばならぬ稼業を手の先きで、素人衆には見えませぬが、一升の米を九合五勺、桝目を盗むはかり方、それが勝れて上手ゆゑ十五の年から此年まで、桝目を盗んだ其米は何萬石だか知れませぬ。遂には天の御罰を蒙むり、再び米の量られぬ盲目となりし身の罪科、米屋ばかりぢやあございませぬ、酒屋油屋一切の桝を扱ふ生業は、正路にせねばなりませぬ、桝目を盗めば末々は、斯樣になると私が世界の人のよき手本、今更後悔いたしまする、曲つた事は出來ませぬ。

〽先非を悔んで身の耻を、明す赤米仙右衞門、聞くも哀れに問ひかへし、

ト仙右衞門先非を悔み思入にていふ、豊思入あつて、

豊　桝目を盗んだ其罰と、氣の附いたのはお前の仕合せ、今にその目も直らうから、氣長に療治をしなさるがよい。して、其目の潰れたのは、何時頃からのことであつた。

仙右　はい、潰れましたは五つ月跡から、まだ半年にはなりませぬが、年來たゝまる借金に身代限りを

いたしまして、小松川の女房の里に二月餘りをりましたが、何の中でも二人の厄介、目には見えねど詞の樣子邪魔になるのが知れますゆゑ、僅な金を借りまして、知邊を便つて新網の裏家を借りてをりまする、力と思ふ其金も二兩に足らねば使ひなくし、其日に困つて女房は附木やたわしを賣り歩き、また私は若い時から按摩が好きで揉んで貰つた、其手附きを眞似まして、上下揉んで百文と呼んで歩けど今の世は直は高くとも良きもので、なければ買はぬことなれば。

〽聲もかれ〳〵夜更まで、呼び歩いてもたゞ一軒、

按摩さんよと呼ぶ人もなく、暮し兼ねるを誰が言つたか、戸長さまが救育所へ願つてやるとおつしやれど、どうがなしたら取附かうかと、お禮を申してお願ひ申さず、斯うして毎日出歩きまするが、まだ今日などは朝からして、百のお錢も取りませぬ。

〽胸の苦勞に兎や角と、とばつく足に躓きて、今のやうな亂暴者に、蹴たり踏んだりされまするも、桝目を盗んだ罪滅し、

今となつてはつく〴〵と、若い時から非道した、此身の惡事を後悔なして、親が死んでも涙の出ぬ、情を私らぬ私が、日には幾度か身を悔み、泣かぬ日とてはござりませぬ。

〽見えぬ其目に聲をあげ、人目も耻ぢず泣き伏せば、貰ひ涙に下剃が、

ト仙右衞門よろしく思入あつて、汚なき手拭を顔に當て泣伏す、此うち豐ぢつと思入、吉涙をこすりながら、仙右衞門の背中を擦り、

吉　おゝ尤もだく\、嘸おめえ悲しからう、おれが親仁も貧乏ゆゑ餓鬼の折から苦勞もしたが、おめえ程の難儀をしねえが、かういふ身分になつたらばと思ひ過しにさつきから、貰ひ泣きに泣いて居た。もし旦那、可愛さうなことぢやあござりませぬか。

豐　むゝ、聞けば聞くほど哀れな話し、お前も今の了簡が、早く出たならそれ程に、おちぶれることもあるまいが、今更いつても返らぬこと。是れから頼みは子供の運だが、一人あると言ひなすつた其子は何處ぞへやんなすつたか。

仙右　これは私と違ひまして、利口な生れでござりますゆゑ、女房が好んで學校所へお願ひ申しておきましたが、人に勝れて讀めるので、懇意なものが口入で、北海道へおいでなさるかりたくとかかいたくとか申すお役の官員さまへ、其身の出世になることゝ承つて遣りましたが、身代限りをせぬ前ゆゑ、五つ月越しになりますが何の便りもござんせぬは、もし難船でもいたしまして、遠い國へ吹き流されたか、但しは鯨の餌食にでもなつた事やら知れませねど、斯うして存へをりますも、實は悴が安否をば今日か明日かと待つて居ります、今にも悴が死んだといふ便りがあれば何

豐　樂しみ、直きに身でも投げまするか首でも縊つて死ぬ覺悟、生きて居る氣はござりませぬ。
それは一途な狹い了簡、頼みに思ふ子に別れ、何樂しみもないゆゑに死なうといふは無分別、お前が死ねば連合も亭主に別れ子に別れ、何で生きて居るものだ、共に死ぬは知れたこと、斯かる開化の世の中に愚痴な事を云ふやうだが、二人の親がとも〲に命を捨てたら死んだ子が、冥土で罪を重ねるとも決して菩提にはならぬから、必ず死なうなどゝいふ惡い心を出しなさんな。(ト此うち紙入より十圓札を出し紙に包み、)これは少しばかりだが、お前に合力しますから、氣を取り直して長生きするやう、生業大事に精出しなさい。吉公、これを進ぜて下せえ。

ト札の包を出す、吉取つて、

吉　それ、お慈悲深い旦那から、御合力を下すつた。おめえには見えめえが、下すつたのは十兩札だよ。

〽手渡しなせば探り見て、仙右衛門は打ち驚き、(ト仙右衛門札を受取り探り見て、)

仙右　すりや十圓下さりますとか、えゝ有難うござります。(ト札を戴き、)然し見ず知らずの旦那さまに、十圓といふ此お金を、お貰ひ申しては濟みませぬ。

豐　其遠慮には及ばない、まんざらわたしもお前をば、見ず知らずといふではなし。

仙右　それではあなたは、私を。

豐　いやついに逢ふたことはないが、以前に替る不仕合せ、盲目となりしが氣の毒ゆゑ、お前に進ぜる其十圓、所詮それでは足りまいから、また其うち合力しませう、必ず死なうなどゝいふ、無分別を出しなさんな。

仙右　有難うござりまする、見ず知らずの私に十圓といふ此お金を下さりまする思召し、何とお禮を申さうか、かやうに世にはお慈悲深い、お方もあるに私などは、若い時から浮々と其日を徒に送りました報いで斯かる不仕合せ、せめて悴が達者にて、此結構な世の中の人にいたして私が、見えぬ目ながらももう一度、世界が見たうござります。

〽見えぬながらも延び上り、四邊見廻す心根を、思ひ遣りて打ちうなづき、

ト仙右衞門目を明きたき思入、豐不便なといふ思入あつて、

豐　よく世の譬にもいふことだが、人は七轉び八起きといつて、一生涯の其うちには何不自由のない身でも零落するが、丁度わしが知つて居る若い人だが、元舊幕の直參で家祿を相應に取つて居たれど、若氣の至りに其身の放埓、遂には家も零落なし、たつた一人の母をさへ育み兼ねし困窮に惡心生じて道ならぬ人の物を盜まんと、さる商家へ忍び入りしが、不圖せし事より改心なし、是

れまで母に苦勞を掛け、道に缺けたる身の行ひ、濟まざることゝ氣が附けば、天の惠みで測らずも、舊領分の百姓より三百圓の貢を得、それを元手に商法を開けば多分の利分を得、今は此やうな身の上に、いやなに、丁度わしと同じやうな身分になつた人があるから、こなたも心を改めたら、天の惠みで助けを得、元の身分になられよう。必ず愚痴な心を持たず、末の榮えを願はつしやい。

仙右　えゝ、有難うござりまする。

〽厚き惠みを伏し拜み、嬉し涙にくれ近く、塒へかへる鳥さへも、夫の噂に氣遣はしく、おむつはとつかは走り來て、

ト仙右衞門は豐を伏し拜む、吉捨ぜりふにて豐の髪を撫附ける。此うち花道よりおむつ切繼窶し裝にて附木と棕櫚だわしを紐へ通し、是れを提げ足早に出來り、花道へ留り、

むつ　今四つ辻で噂を聞けば、俄盲目が生醉にぶたれて居たといつたは若し、こちの人ではあるまいかと、案じるせゐか胸騒ぎ、早う逢ひたいものぢやなあ。

〽心忙しく來かける道、それと見るより走り寄り、（トおむつ舞臺へ來て仙右衞門を見て）

むゝ、こちの人、爰に居なんしたか。（ト縋り寄る。）

仙右　おゝ、おむつか、よく來てくれた。今日はとんだ目に逢ふた。

むつ　それでは噂に違ひなく、お前打たれなさんしたか。

仙右　惡い奴に出會し、蹴たり踏んだりされたわいの。

むつ　そりやまあ危いことでござんしたが、どこぞ怪我でもしなさんせぬか。

仙右　膝を少し擦つたばかり、もつと怪我をするところ、よいお方が留めて下され、剩さへ、是れ見やれ、俄盲目に不便だとて、十圓札を下すつた。（ト仙右衞門以前の札を見せる、おむつびつくりなし）

むつ　え、十圓お前に下すつたとは、そりや何處のお方でござりまする。

仙右　どこのお方か知らねども、そこにおいでなさるから、ようお禮を申してくりやれ。

むつ　あい〱、只今お金を下さりましたは、どなた樣でござります。

吉　爰においでなさる旦那樣だ。

むつ　左樣でござりまするか。

〽小腰を屈め側へ寄り、思はず見合す顏と顏。

ト辭儀をしながら、二重の前へ來て顏を上げ、豐を見てびつくりなし、

や、あなたは。

豐　あ、これ。

〽あたりを憚り目で押へ、

此少なれども先達て、受けたる恩を謝す金子、何にも言はず納めて下さい。

むつ　え丶有難うござりまする。して只今では、あなたのお宅は。

豐　南傳馬町二丁目で、秋津屋といふ紺暖簾の掛つて居るがわしが宅、然し見世には手代どもあれば裏からこつそり尋ねてござれ、十や二十はいつ何時でも、二人へ貢いでやりませう。

むつ　返す〴〵も有難い、旦那さまの思召し、お禮の申しやうがござりませぬ。

トおむつうれし泣きに泣く。時の鐘。

豐　思はぬことで寄合へ、行くのが大きに遲くなつた。吉公、髪はもうよからうか。

吉　はい、よろしうござります。また明日いらつしやいまし。

豐　おゝ、明日剃つて貰はう。それぢやあわたしは用があるから。

仙右　左樣なら旦那樣、もうお歸りでござりますか。

むつ　お名殘り惜しうござりまする。

豐　是れぎり逢はれぬといふ譯ではなし、いつでも家へ尋ねて來なせえ。

むつ　はい、お尋ね申しまするでござりまする。

豐　兎角時候が惡いから、其目を大事にしなせえよ。

仙右　有難うござりまする。（トみすぼらしげなる裝を豐見て、）

豐　あ、思へば不便な、

兩人　え。

豐　いや、降らぬうちに行きませう。

〽みすぼらしげな兩人が、姿に浮む涙をば、砂に紛らし立歸る。

ト唄になり、豐二人を見てホロリと思入あつて、砂の目にはひりし思入にて、指でこすりながら花道へはひる、仙右衞門おむつは跡を拜み居る。

吉　お前方の三の切で、こつちも思はず涙をこぼして、目の緣が腫れたやうだ。どれ奧で顏でも洗つて來よう。

〽暖簾かゝげて入りにけり、跡に二人は吐息をつき、

ト吉奧へはひる。跡に仙右衞門おむつ思入あつて、

仙右　これおむつ、おぬしが詞の樣子では、今の旦那を知つて居るか。

むつ　あい知つてる段ではござんせぬ、わたしがかゝさんがお乳を上げた、秋津さまの若旦那。
仙右　おゝそれぢやあ、いつぞやおれの家へ、泥坊に來た若旦那か。
むつ　あこれ、滅多なことを。（トおむつは髪結床を窺ふを、仙右衛門どうと下に居ろ、床の合方になり）
仙右　あゝ面目ない〳〵、いつぞや家へ泥つくにござつた時に引捉へて、繩を掛けて突出すと無慈悲なことを言つたのみか、緣に繫がる御主人へ拳を上げた仙右衛門、憎い奴とも思召さず今日下されし此十圓、この目が見えた事ならば、何でお貰ひ申されうか、早く其場を逃げようもの、あゝ面目ない、面目ない。

〽身をかきむしりひれ伏して、面目涙に暮れければ、

ト仙右衛門よろしく思入、おむつ介抱しながら、

むつ　おゝ尤もでござんすが、あの時わたしと仙太郎が少しなれども若旦那へ、お貢ぎ申した其禮ぢやと、おつしやつての事なれば、今お貰ひ申したとて、濟まぬことがござんせう。
仙右　さあ、おぬしと忰はよからうが、おれはあの時因業な無慈悲なことを言つたゞけ、今となつては面目ない、嘸お心のその內では、盲目になつたはよい氣味と、思召してござりませう。
むつ　何でそんなお心が若旦那にありませう、露ほどそれがあるならば、お前にお金を下さりませうか。

仙右 成程いへばそんなものぢやが、それに違ひはあるまいか。
むつ そんな事は決してないから、必ずきな〳〵思はしやんすな。わたしやそれより合點の行かぬは、其日に困りし若旦那が、僅かのうちに今の樣な、どうして立派な御身分に、おなりなされた事であらう。
仙右 おゝ其事なら今の先き、人に擬へてお話しあつたが、今々思へばあなたのこと、元御領地の百姓衆が三百圓の貢ぎをなし、それを元手に商法を開いて今は一廉の身分になつたとおつしやつたはあなたの事に違ひない、一度零落なされても其お心が正直ゆゑ、再びさういふお身にもなれど、此仙右衞門は不正直、假令心を改めてもどう人らしくなられよう、それを思ふといつそのこと、早く死んでしまひたい。
むつ えゝめつさうな事言はしやんせ、お前に死なれてなるものか。かういふしがない暮しをしても、生きて居たいは蝦夷地へ行つたあの悴。さあ、其悴の事に附いて、今日聞いた話しがござんす。
〽悴と聞いて氣を取直し、
仙右 そりや、よい便りでもあつたのか。
むつ いえ〳〵さうぢやござんせぬが、今日愛宕下のお得意先で、悴が事を言ふたれば、それは慥に世、

話人が心よからぬものであらう、御政事厳しい掟を背き、此頃異國へよく金で子を賣るものがあるとのお話し、そんな事もあるまいと思ふて居れど人心、ひよつと牛屋の五郎七が慾に迷つて仙太郎を、異國へ賣りはせまいかいなあ。

〽語るを聞いて仙右衛門、子ゆゑに迷ふ心より、一途にそれと思ひ詰め、

ト仙右衛門さてはといふ思入あつて、

仙右 おゝそれにて思ひ當りしは、此頃あいつの都合のよさ、何でも道に間違つた非道な金に違ひない。それに此節五郎七が癇が起つて舌がつれ、口の利けぬは惡事の報い、こりや捨てはおかれぬぞよ。

ト兩人思入、此時髪結床の内にて、吉これを聞き居て、

吉 今爰でちよつと聞いたが、そんならおめえの息子といふは、世話をする人があつて、遠い國へやんなすつたのか。

むつ はい、久保町の牛肉屋の五郎七さんがお世話にて、北海道へやりましたわいなあ。

吉 え。(トびつくりして、)そんなら久保町の牛肉屋が、おめえの息子の口入で、北海道へ遣んなすつたとか、そいつあとんだ事をしなすつたね。(ト是れを聞き兩人聞き耳を立て、)

仙右 もし〳〵、とんだ事とおつしやいますのは、どういふ譯でござります。

吉　さあ、どういふの斯ういふのと、その五郎七といふ奴が今日自分の見世先きで、通り掛りの紙屑屋に、泥坊ものゝ紙入れを賣つたとこからもくゞが割れ、其代物一件でさつき家の親方が屑屋を連れて詞べに行つたが、お前方も先の相手が牛肉屋ぢやあ安心ならねえ、こいつァ捨てちやあおかれねえ。

仙右　え、何とおつしやりまする、そんならあの五郎七が、盗み物の紙入を紙屑屋に賣りましたとか、さういふ心の五郎七なら、悴を賣つたに違ひない。是れから行つて彼奴めを、しつかり詮議をせねばならねえ。

むつ　あゝもし〳〵、是れから詮議にござんすなら、わたしも一緒に行きませう。

仙右　いや〳〵、女が行つては面倒ゆゑ、そちは家で待つて居やれ。

むつ　それぢやといふて目の悪い、お前一人を遣られませうか。

仙右　いや目の悪いがおれが德、喧嘩をせずに談判なし、いよ〳〵それに極まらば直に屯へ訴へて、彼奴に繩を掛けてくれる。

吉　何にしろ盲目一人で、嘸困るだらう。（ト吉空を見て、）どうか今夜はばれさうだ、ばれねえうちに早く行きねえ。

仙右　ばれるといふは顯れ口。
むつ　よい辻占でござんすぞえ。
仙右　その辻占を賴りにして。（トつか〳〵と行きかけ、看板へ突當る。）
兩人　あゝもし、あぶない。（ト抱き留めるおむつを振拂つて、）
仙右　杖さへあれば、
むつ　怪我せぬやうに、
仙右　なあに、大丈夫だ。
〽おゝ合點と夕まぐれ、杖を力に、
ト時の鐘、仙右衛門杖を突きばた〳〵にて花道へ行く、おむつは氣遣ふ思入、吉は看板を片附ける。
此見得三重時の鐘の送りにて、仙右衛門花道へはひる。これと一時に道具廻る。

（元の牛鍋屋の場）――本舞臺元の牛鍋屋の道具、平舞臺上手に髮結左吉住ひ、眞中に五郎七、下手にお咲住ひ、門口の外に權兵衛窺ひ居る。此見得道具中程より四ツ竹節にて道具留る。と右の合方にてお咲盆へ茶碗を載せ、

お咲　もし、お茶を一つお上りなさいまし。(ト左吉知らぬ顏をして居るゆゑ、)もし、お茶を一つお上りなさいまし。(ト左吉の前へ出す。)

左吉　お構ひなすつて下さいますな。(ト思入あつて、)左樣ならお前さんが、五郎七さんでございまするか、わたくしは比丘尼橋の、髮結左吉といふものでございます。(ト五郎七うなづいて辭儀をする。)

お咲　何の御用でございますか、こちの人は癇のせゐで舌がツッて此頃は、少しも口が利かれませぬから、私へおつしやつて下さりませ。(ト左吉知らぬ顏をして居るゆゑ、)もし、何の御用でございますか、私へおつしやつて下さりませ。

左吉　おめえ何か言つてるやうだが、わつちやあ逆上性で耳が遠いから、大きな聲をしてくんなせえ。

ト左吉大きな聲をする、お咲びつくりして、

お咲　えゝも、びつくりするわいなあ。

左吉　おい屑屋さん、おめえこつちへはひつてくんねえ。

權兵　はい、御免なさいまし。(と權兵衞内へはひるを五郎七見て、こつちへ來いといふ。)

お咲　おゝ、お前はさつきの屑屋さん。

權兵　もし、屑屋さんもねえもんだ、とんだ物を賣りなすつた。よくも、わたしに難儀を掛けなすつた

ね。
お咲　お前に難儀を掛けたとは。
權兵　さつき五郎七さんが請人で、わたしに賣つた紙入は、ありやあ盜み物でござります。
お咲　え〻。（ト五郎七ぎつくりせし思入。）
左吉　もし五郎七さん、此紙入はおめえの所で、さつき屑屋に賣つたさうだが、此紙入があるからは、
此蟇口に入れてあつた三百圓の證文と、藤鎖りの金側時計が一緒にある筈だ、それをお貰ひ申し
たい。
〽味な詞に五郎七も、扨は主人の銀次郎が盜みし品と覺れども、素知らぬ體に見向きもせ
ず。
ト此うち五郎七主人が盜みしに違ひないといふ思入、お咲その品はと言ひたきこなしを、五郎七留め
ろ、左吉思入あつて、
默つて居るのは知らねえと、しらばッくれる氣だらうが、此紙入は新開町の、湯屋の二階へ雇
はれたおれが妹がお客から、預つたのを盜まれて、お張り出しは云ふに及ばず、新聞にさへ出て
居る品、此紙入を證據として恐れながらと云ふ日にやあ、客の名前も出ることゆゑ、內證でおれ

が今日來たが、其證文と時計をば返してくれゝば穩便に、こつちも愛敬生業ゆゑ濟ます心で出て來たのだ。さあ、殘りの品を渡して下せえ。

〽いふに五郎七頭を振り、口は利かねど覺えなき、仕方に左吉はせき立ちて、

ト五郎七是れを聞き、覺えないといふ思入。

もし屑屋さん、今おめえの見る通りだ、首を振つて五郎七さんが、知らねえといふからは、買つたといふのはお前の嘘か。(ト權兵衞首を振る。) 何だ、おめえまでが首を振つて、嘘でなけりやあ言はして下せえ。

權兵　あゝ言はなくツてどうするものか、屑屋仲間へ嚴しい御法度。(ト懷から鑑札を出し、) それ見なせえ、上より此通り御鑑札が下つて、生業して居るからは嘘はつかねえ。早く言つて下せえ、おめえは耄碌でもしなすつたか。

〽疊を叩いて屑買が、詰寄る中を押し隔て、(ト權兵衞疊を叩いていふ、お咲これを留め、)

お咲　あゝこれお前も知つての通り、こちの人は癇の病で、口が少しも利けぬゆゑ、お前のやうに疊みかけては、猶々癇が起るばかり、まあ靜かに言ふて下さんせ。

權兵　いや賣つたと言はねえうちは、おれの目串が拔けねえから、靜かにしちやあ居られねえ。

〽口をば利かねど五郎七は聞える耳に持ちまへの、癇を怺へる身の苦しさ、左吉は人の言ふ
ことも耳に聞えず氣をいらち、

ト五郎七は疳に障るを怺へる思入、左吉は如終聞えぬ思入にて掛り、

左吉 これ〱屑屋さん、何でおめえは默つて居るのだ。

權兵 何で默つて居るものか、これ程口を利いて居るのに。

左吉 おめえのやうに口ばかり、動かして居ちやあ分らねえ、しつかり物を言ひねえな。

權兵 しつかり物は言つて居るが、おめえが聾で聞えねえのだ。(ト左吉ぢれ込み、)

左吉 えゝ、もつと大きな聲を出しねえ。

權兵 何だ、もつと大きな聲を出せ、五節句はお廢止だ。

〽いふも聞えずぢれ込みて、(ト左吉聞えぬ思入あつて、)

左吉 これ、今更買つたの賣らねえのと、未練な事を言はねえで、殘りの品を出しなせえ。(ト紙入を目て、)此紙入に入れてあつた三百圓の貸證文、あれがなけりやあ取られた人が、命も捨てにやあならねえ譯だ、さうなる時には妹もともに命を捨てにやあならねえ、一人といはず二人の命、此紙入があるからは、おめえの知らねえ事はあるめえ、人の命の助かることだ、盜んだ品を出して

下せえ。

ト五郎七首を振る、

〽紙入取つて五郎七が、片頬打てば持前の、癇に怺へず立掛るを、

ト左吉紙入で五郎七の頬を打つ。五郎七何をしやがると、煙管を持つて片膝立てるを、お咲すがり留め、

お咲　あゝこれ、こちの人待ちなさんせ、こんな疑ひうけるのも、心良からぬ若旦那ゆゑ、是れまで種々の厄介掛け、まだ慊らないで此樣な、難儀をかけるはあんまりぢや、もう何もかも打明けて、お前が身晴れをしなさんせいなあ。おゝお前は口が利かれぬゆゑ、わたしが譯を言ひませう。

〽いふ女房を引留めて、十二の時から大恩をうけた御主人の血の餘り、よし此口が利けたとてそれがあらはに言はれうか、假令この身が疑ひ受け繩目に逢ふとて締め搦む、義理は捨てぬと言ひたさも、癇の病に口へ出ず、齒を喰ひしばるいぢらしさ。

ト此うち五郎七お咲を留め、文句の模樣仕方にて切なき思入よろしくあつて、口が利けぬが悔しいと口へ指さしお咲をこづく、

お咲　おゝ尤もでござんす〳〵、嘸口が利きたうござんせう。あゝいぢらしいことぢやなあ。

ト お咲せき込む五郎七の背中をさする、權兵衞前へ出て、

權兵 いくら口が利きたくつても、五郎七さんは利けねえから、お前代りに言ひなせえ、さつき爰で紙入をわたしに賣つたあの人は、どこの人だかそれが聞きてえ。

お咲 さあ、其名はどうも言はれぬわいなあ。（ト左吉はこれに構はず、五郎七に向ひ大きな聲で、）

左吉 これ程おれが譯を言ふに、やつぱりおめえはしら〻〻を切るのか。

權兵 こつちでせりふを言つて居るに、野暮に大きな聲ぢやあねえか。（トお咲に向ひ）さあ、言はねえと言つたとて。（トきつといふ。）

左吉 それぢやあ二人を殺す氣か。（ト權兵衞せりふを言はうとして口を開いたまゝ留り、）

權兵 また口を出すか困つた人だ、折角油が乘つて來ると、口を出すので氣が拔けらあ。さあ、言はねえと言つたとて。

左吉 おめえの口の利けねえのも、

權兵 おめえの口の利けねえのも、えゝ釣込まれてしまつた。

左吉 それも何かの、罰であらう。

權兵 それも何かの。また、釣込まれたか。

左吉　二人が命を助けたら、

權兵　出る所へ出たならば、

左吉　少しは報いで利けようぜ。

權兵　少しは報いで。えゝ、どつちが何うだか分らなくなつた。どうでもいゝからお上さん、早く言つてくんなせえ。

〽お咲が手を取り引寄せるを、五郎七見るより襟上取り、縁より下へ蹴倒せば、

ト權兵衞お咲の手を取り引寄せるを、五郎七見るより權兵衞を引寄せ、投げ退ける。

あいたゝゝゝ、何でおれを投げたのだ。(ト五郎七の側へ來る、五郎七疊へ指で書いて見せる、權兵衞これを見て、)なんだ、「主ある女の手を握れば、こなたは云はずと間男だ。」面白くもねえ、ちよつと手を握つたばかりで七兩二分、懲役一ケ年は眞平だ。(ト權兵衞跡へ下る、左吉思入あつて、)

左吉　これ屑屋さん、どうした。

權兵　どうしたどころか、御厩川岸で大南を喰つたのだ、もう／＼わたしぢやあいけねえ。

ト權兵衞手を振つて見せる。左吉思入あつて、

左吉　こなたの力でいけねえけりやあ、是れからおれが腕づくで、利けねえ口を利かしてやらう。

〽片肌脱いで五郎七が、胸倉取るを振拂ひ、身構へなせば詰寄つて、

ト左吉片肌ぬぐ、下は筒ッぽ、左吉胸倉を取るを五郎七煙管を持ちきつと思入、是れにて左吉ちつと下に居て、兩人氣味合の思入、誂への合方へ屋體囃子をかすめて冠せ、左吉件の紙入を出して、

これ此蟇口の紙入より、しつかり惡事の口を閉ぢ、どんな詮議に逢はうとも口を開かねえ氣だらうが、急所を一番押されたら、開かねえ口も開かざあなるめえ。三百圓の貸證文、この紙入が印紙より盜んだ慥な證據ゆゑ、反故にならねえ荒稼ぎ、巾着切りには出來過ぎた金側時計の鎖附、しかし直段は二百圓、慾に心は狂つたらうが時計は狂はぬ六時前、言譯くらき黄昏に、襟にかけたる鍵の手で、くさりの繩の掛らぬうち、盜んだ品をまき出しなせえ。

〽聞えぬ耳の高聲に、隣り憚る惡名も解くに解かれぬ二重帶、忠と義心に喰ひしばる心を察して女房が、

ト左吉きつと思入あつて、煙草を呑み居る、五郎七は隣りを憚る思入、お咲こなしあつて、

お咲　そんならお前はどうあつても、覺えないこちの人を、盜人だと言はしやんすか。

權兵　おゝ、覺えがあらうがあるまいが、此の紙入が出たからは、おめえ方の目串は拔けねえ。

左吉　さあ、盜んだ品を出さねえか、えゝ、いけッぷてえ野郎だなあ。

〽猶も左吉が盗人と呼はる折から門口に、樣子窺ふ仙右衞門、さては盗みをするからは、我が子を賣りしに違ひはないと、一途に思ひ格子戸を明けて其儘内へ入り、

ト此以前よき程に下手より仙右衞門出來り、門口にて内の樣子を窺ひ、憎い奴だといふ思入あつて、門口を明け、

仙右　五郎七どのは、内でござるか。（ト下駄の儘内へはひる。）

お咲　誰かと思つたら仙右衞門さん、ようお出でなさんしたなあ。

仙右　いや餘りよくも來ませぬが、五郎七どのはどこに居る。

〽探り廻れば手を取りて、

ト仙右衞門下駄をはいた儘あたりを探る、五郎七仙右衞門の手を取つて、顏へ指さし爰に居るといふ思入あつて、あゝ見えぬかといふこなし、

お咲　五郎七どのは爰に居ますが、まあ履物を脱ぎなさんせいなあ。

ト是れにて仙右衞門下駄をふるひ落し、五郎七を探り見て、

仙右　おゝ五郎七どのか、早速わしが聞きたいは、いつぞやこなたの口入で、北海道へ遣つた仙太郎、あれは何處へ遣らしつた、其行先きが聞きたいのだ、早く言つて聞かして下され。

お咲　あゝもし、仙右衛門さん、こちの人は癇が起つて、口が少しも利けぬわいなあ。

仙右　その口の利けないのも、此間から聞いて居るが、そりやあ癇の病ぢやあない、悪い事をする報いだ。

〽そりや何ゆゑと五郎七が、言ひたい體を妻が見て、（ト五郎七思入よろしく。）

お咲　もし仙右衛門さん、悪い事の報いとは。

仙右　さあ悪い報いと言つたのは、人の體を養ふ爲め、表に官許の幟を立て牛を商ふこなさんが、裏は大きな僞りで、人の子までを異國へ賣つたこりやあみんな天の罰だ。さあ、わしが悴を何處へやつた、其先きを言はつしやい。

〽その行先きはと五郎七が、疊へ書くを妻が見て、

お咲　それ、仙太郎さんの行先きを、疊へ書いて居やしやんす、早う讀んで見やしやんせ。

仙右　えゝ、よいかげんにたわけを盡くせ、盲目に物が讀めるものかえ。

お咲　おゝほんにさうでござんした、それではわたしが讀んで上げませう。「お前の息子の仙太郎どのは北海道の開拓へ、御出張なされる三春陸さまへ、測量のお弟子にお願ひ申しました。」

〽いふをこなたは半分聞かず、

ト五郎七疊へ書くをお咲讀む、仙右衛門これを聞き、何を言ふといふ思入あつて、

仙太　えゝ、そりや嘘だ〳〵、あれは餘所の子供と違ひ、八ツの年から學校へ好んで行つたゞけあつて、人に勝つて覺えもよく物の理合も分るゆゑ、おれと違つて親孝行、北海道へ行く時もあちらへ附けば無事狀を、直ぐによこすと云つたものが五ツ月越しに音沙汰なし、不思議なことだと思つたが、便りをせぬも尤もだ、親切らしくわしを欺し、金に目がくれ人の子を、異國へ賣つた人でなし、さういふ事とは知らぬゆゑ、おれは仕馴れぬ按摩となり、暗き浮世を送るのも、便りに思ふ仙太郎が出世するのを樂みに、待つ甲斐もないおのれが惡心、ようも〳〵人の子を、遠い異國へ賣りをつたな。えゝ、おのれはなあ〳〵。

〽目くら探りに五郎七へ、むしやぶり附いて悔み泣き、

權兵　見るから哀れな俗按摩、目の不自由な人を欺し。（ト左吉の耳へ口を寄せ、）此五郎七は泥坊ばかりか勾引しもするさうだ。（ト大きくいふ、左吉思入あつて、）

左吉　なに、勾引しをしたといふのか。

權兵　何と太え奴ぢやあねえか。

左吉　さういふ事があるからは、いよ〳〵時計は五郎七がどめて居るに違えねえ。さあ三百圓の貸證文

を、揃へておれに渡してしまへ。

仙右　人の物をわが物と、盗むほどの了簡では、勾引したに違ひない、さあおれが忰を返してくれ。

左吉　さあ盗んだ品を早く出せ。(ト五郎七の胸倉を取つて引附け、)いやさ、これでもわりやあ出さねえか。

仙右　さあ、忰を何處へ遣りをつた。(ト仙右衛門下から五郎七の胸へ取附き、)

左吉　さあ、きり〳〵と出さねえか。

仙右　さあ其行先きを吐かさぬか。

〽右と左に兩人が、さあ〳〵〳〵と引据ゑるを、まあ〳〵待つてと女房が、留めるを邪魔と支へる屑屋、お主大事と五郎七がぢつと怺ゆる辛抱も、流石男にたまり兼ね、もろてを拂つて突き退ければ、

ト此うち左吉は立身にて五郎七の胸倉を取り引立てる、仙右衛門は五郎七の足に縋り、三人引張りの見得、五郎七ぢつと辛抱して切なき思入、お咲側へ寄らうとするを權兵衛引附ける。此立廻りよろしくあつて、トゞ怺へかねし思入あつて、左吉の手を拂ひ退けて突廻し、足に縋る仙右衛門を振拂ふ、是れにて仙右衛門後へ引くり返る。

おのれ、盲目を投げをつたな。

〽起き上りしが途を失ひ、探り廻つて左吉が足を、しつかと取るを蹴倒され、

ト仙右衞門起上り、方角を違へ門口へ行つてぶッつかりどうとなり、這ひながら五郎七と心得左吉の足へ取附くを、酷く蹴倒す。仙右衞門またむつとなり、

恨みはこつちにあるものを、ようも／＼目の見えぬ、おれを二度まで蹴倒したな。えゝ口惜しい口惜しい。

〽涙ながらに恨み言、左吉は猶もいら立ちて、

左吉　もう此上は四の五のと、論をするにやあ及ばねえ、うぬを是れから屯所へ、そびいて行つて仕埒を附ける。

權兵　それが何より近道だ。

左吉　野郎め、一緒にうしやあがれ。

〽屑屋諸共左右より、引立てかゝる其所へ、息をばかりに下剃が、此家を目がけ駈來り、

ト左吉權兵衞立掛り、五郎七を引立てにかゝる。ばた／＼になり、花道より以前の吉出來り、門口より、

吉　これ親方、大變だ／＼。（ト内へはひりうろ／＼するを見て、）

左吉　や、手めえは吉か、何しに来たつ

吉　さあお園さんが書置を、家へおき居なくなつたゆゑ、方々捜したが知れねえのは、あの六三さんか連れ出したに違ひねえ。

權兵　なに、妹御が逃げたといふのか。

吉　さあ逃げたのならいゝけれど、多分死にゝ行つたのだ。

權兵　そいつァとんだ事だなあつ（ト左吉聞えぬ思入にて、是れに構はず）

左吉　さあ、きり〳〵とうしやあがれ。

吉　これさ親方、そんな詮議どころぢやあねえ。お園さんが六三さんと、心中に行つたといふことよ〳〵書置取つて突き附れば、（ト吉書置を出し開いて見せる、左吉見てびつくりなし）

左吉　やゝ、すりやお園には六三さんと。こりや、斯うしては居られぬわえ。

權兵　ひよつと死ぬまいものでもねえ。

左吉　ちつとも早く。

仙右　おれは屯へ注進するわ。

權兵　時計の盗賊、

吉　おのれ五郎七。
左吉　そんなら是れから、
仙右　少しも早く。
左吉　むゝ、さうだ。
〽尻端折つて駈け出し、飛ぶが如くに。
ト仙右衛門行かうとする、お咲帯をつかまへ、是れにて仙右衛門引かるゝこなし、左吉はつかく〳〵と花道へ行く。權兵衛、吉、五郎七の手を取る、此見得三重にて引張りよろしく、
幕

三幕目

芝新網裏借家の場
新橋鐵道外圍の場
築地海岸浪除の場

（役名――盲人仙右衛門、天麩羅銀次、西洋床左吉、絹屋息子六三郎、下剃苅込はれ吉、新網の家主杢右衛門、町人三人、牛鍋屋五郎七。左吉妹お園、仙右衛門女房おむつ、同悴仙太郎。）

（新網裏借家の場）――本舞臺一面の平舞臺、後へ下げて古びたる屋根附き、上の方一間折廻し切張りある古障子を建て、上手一間中仕切りのある押入戸棚、内に素麵箱の佛檀誂への位牌、此前瀨戸物の佛具を並べ、此脇破れたる鼠壁、上手一間板羽目にて見切り、いつもの所門口、揉療治といふ札を掛け、下の方路地口、向う惣雪陰にて見切り、板塀の前に井戸流しを取附け、總て芝新網裏借家の體。爰に前幕のおむつ襷前垂がけにて手拭を冠り、下駄をはき、井戸端にて米をとぎ居る、此見得四ツ竹の合方にて幕明く。とやはり右の合方にて、下手より家主杢右衛門、鼠返し當番つなぎの半纏、着流し駒下駄にて出來り、

杢右　あい、御免なせえ、仙右衛門どのは内かの。

ト門口を明け内へはひる。おむつこれを見て、米かし桶を持ち門口へ來り、

むつ　どなた樣かと思ひましたら、お家主さまでござりましたか、ようお出でなされました。

ト手拭襷を取り内へはひる。

杢右　見れば夜食炊きと見えて、忙しい樣子、必ずおれに構はつしやるな。

ト上手に住ふ、おむつ汚なき煙草盆へ、竈の中の火を入れて出す。

むつ　生憎お茶がぬるうござりますから、お上げ申しませぬ。まあ一服お上りなされませ。

李右　これさ、必ず構はつしやるなと言ふに。ときに、仙右衛門どのは内かな。
むつ　夜分遅くなりまするので、少し風氣でござりますゆゑ、二疊に臥せつてをりまする。
李右　大分風が流行るさうだから、重らぬやうにするがよい。どうだちつとは療治がふえましたかな。
むつ　何を申すも俄盲目、習ひ覺えの按摩ゆゑ、いくら安く揉みましても、揉ませて下さるお方のないので、いたし方がござりませぬ。
李右　いや何生業でも中年から、覺えたことはいかぬもので、幾ら仙右衛門どのが骨を折つても、療治のこつがまだ知れまい。さうして、こなたの商ひ物は。
むつ　お前さまのお勸めで附木やたわしを賣りまするが、世間に鬼はないもので、身の上話をいたしますると、可愛さうだとおつしやつて、よう買つて下さりまするので、思ひの外商ひをいたしましては歸りましたが、此間からのお日和ぐせで、晝から兎角雨勝ちゆゑ、少し歩いては歸りますのでまことに困りきりまする。
李右　大方さうであらうと思ひ、今日は主人の仙右衛門どのに、一理窟言ひに來ました。
むつ　そりやまあ、何のお腹立ちにて。
李右　寐て居るなら、起して下せえ。（ト此うち上手障子屋體のうちにて、）

仙右　何事か存じませぬが、只今それへ參りまする。（ト合方替つて障子屋體を明け、前幕の仙右衞門探りながら出て來るを、おむつ手を取り眞中へ住ばせる。此うち杢右衞門は煙草を吞み居る、おむつ上手に杢右衞門が居ると知らせる、仙右衞門思入あつて、）これは〳〵、お家主さま、ようお出でなされました。

杢右　いや〳〵、ようは來ませぬ、今日は惡く來ました。（ト是れにて仙右衞門思入あつて、）

仙右　只今あれにて承はりますれば、何かお腹立ちの事があつて、此仙右衞門に一理窟言ひにお出でなされたとやら。いやもう、俄盲目の私に心の附かぬこれなる女房、定めて御意に入らぬだらけでお腹立もござりませうが、御緣あつて此お長屋へ越して參つた其日から、一方ならぬ御厚情、緣者に勝つたお世話にあづかり、あゝ捨てる神あれば助ける神と、夜分寐るにもあなたのお宅へ足を向けたことはござりませぬ。如何なることの不調法で、お腹立ちか存じませぬが、俄盲目の私ゆゑ、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

ト仙右衞門手を合せ拜む、此うちおむつは釜へ米を入れ、竈の下を焚いて居て、此時前へ出て、

むつ　仙右衞門も此通り、お詫びを申してをりますから、お腹立ちの御機嫌を、お直しなされて下さりませ。

杢　いや〳〵、假令何と詫びようとて一理窟並べた上、返す物を返さぬうちは、腹の蟲が承知せぬ。

仙右　して、お腹立ちの其譯は。

むつ　どういふ譯でござりまする。（ト是れにて杢右衞門懷より店賃の通ひと一圓札を出し、）

杢右　いや譯といふは外でもねえ、何でさつきわしが留守へ、三月溜つた店賃を、耳を揃へて持つて來たのだ。

兩人　何とおつしやりまする。

杢右　さあ今更いふにも及ばぬが、わしが店へこなた衆が、越して來たとき樣子を聞けば、以前は隨分相應な舂米屋であつたさうだが、長の病氣や不仕合せで按摩渡世をすると聞けど、揉み習ひか呼ぶ人なく、其日に困る樣子ゆゑ、先達も戸長へ話して救養所へ願つてやらうと、二三度おれが勸めたが、もう少ししたらどうか暮しが附きませうと、こなたが云ふゆゑ其儘に、内儀へ少しの合力して附木やたわしを賣らせるが、此間から日和ぐせで思ふやうに療治もなく、又商ひにも出られぬに、なけなしな物を質においたか但しは高利でも借りたのか、どの道ひどい算段でこしらへた金であらうのに、何でこんなに義理ばつて、三月ぶりの店賃を、一度に持つて來さしつたのだそれがおれの氣に喰はぬ、さあ一月ぶり受取りにして持つて來たから二月分は、そつちへ取つておいて貰はう。

ト店賃の通ひと一圓札を仙右衞門へ突附ける、此うちおむつは竈の下を焚いて居て、これを聞き思ひ入あつて、前へ出て、

むつ　もしこちの人、何事のお腹立ちかと、わたしも案じてをりましたが、御親切なお家主さま、三月振りあげたのを、困るであらうとお腹立ち、何と有難い事ぢやござんせぬか。

仙右　いやもう有難いの何のと、どんな不調法なことでもしたかと、此頃にない心配したが、今のお詞を聞いたので、さつぱりと胸の痞へも下りました。

むつ　さあ困るであらうとあのやうに、お案じなされて下さるから、今日のことを打明けて、お話し申さうぢやござんせぬか。

仙右　成程、それがいつちよい。（トこちらへ向ひ、）

むつ　只今あなたのおつしやる通り、私共の商ひと、馴れぬ手業の稼ぎにて、思ふやうには行かぬゆゑ、休み勝にて朝夕の、細き煙りも立て兼ねまする貧乏暮しの其中で、一圓半といふお金の出來よう筈はござりませぬ。それゆゑあなたが只今の、御親切なお腹立ち、あだおろそかには存じませぬ。

仙右　今日はからず女房の母が勤めてをりました、御主人樣にお目に掛り、お惠み受けし十圓のお金、思ひがけない金が手に入り、何事おいてもまづ先へ雨露凌ぐ家賃のたゝまり、御勘定せねば濟ま

兩人　ぬゆゑ、三月ぶり一圓半、差上げましてござりまする。かゝる譯ゆゑ其儘に、
　お納めなされて下さりませ。（ト是れを聞き、思ひ入あつて、）
李右　それぢやあ昨日おむつどのゝ、親御が勤めた主人に出逢ひ、十圓金を貰つたとか。
むつ　以前は秋津豐さまとて、駿河臺にいらつしやいました、其お方さまにお貰ひ申しました。
李右　さういふ事ならよけれども、苦しい中ゆゑ貧の盜みで。
兩人　え。（ト思ひ入。）
李右　いやさ、必ず氣に掛けて下さるなだが、夜るを拵ぎの按摩渡世、もし得意先で料簡違ひをさつし
　やりはせまいかと、思ひ過して心配しました。よく噺し家の言ふことだが、大家といへば親も同
　然、三月や四月店賃が、溜つたとて苦にさつしやるな。はて十三軒ある店子のうち、月々きつと
　納めるものは、新橋の鐵道へ出る月給取りの安兵衛ばかり、一月や二月の滯りのない店子はない
　必ず心配さつしやるな。
仙右　人樣は兎も角も、私ばかりはお家主さまへ、御損を掛けては濟みませぬ。出所知れたる此金子、
　どうぞお納め下さりませ。
むつ　それともお納め下さりませぬは、もしや不正の金子かと、お疑ひでござりまするか。

李右　いや〳〵さういふ譯ではないが、高い利息の附く金でも、借りて持つて來たかと思つたゆゑ、二月ぶり返しに來ましたが、さういふ金とあるからは、受取つておきませう。
仙右　そんなら、お受取り下さりまするか。
むつ　やれ〳〵、それで落着きましたわいなあ。
李右　さう極つたら二月分、受取りにして持つて來ませう。
仙右　いえ〳〵態々お持ちなさらずとも、お序でよろしうござります。
李右　とんだわしも履き違ひで、不理窟を言ひに來ました。夫婦の衆、許して下され。
兩人　恐れ入りまする。
李右　どりや。受取りにして屆けませう。（ト通ひと札を懷中して門口へ出る、おむつ送り來り）
むつ　左樣なれば、お家主さま。
李右　これおむつどの、くどい事をいふやうだが、店子と云へば子も同然、三圓や五圓の金なら、どうなりとして進ぜるから、高い利の附く金などは、借りようと思はつしやるな。まして當時大藏省で御製造になる此札には、一々番號が記してあれば、めつたな事は出來ませぬぞ。（トきつと言つて氣を替へ）はゝゝゝゝ、言はずともよいことを、くど〳〵云ふのが年のせゐ、爰らが箍の弛ん

だところだ。

ト四ッ竹節になり、杢右衞門下手へはひる。これにて仙右衞門上手へ住ふ、

むつ　もしこちの人、此裏のお家主ぐらゐ、親切なお人はござりませぬな。

仙右　あのやうな氣立のよいお方は、またと二人外にはない。御布告の表を守り、先づ樽代はいふに及ばず、節句錢釣瓶錢の集めッこは一切なし。

むつ　まだ其上に來る年毎、神武さまの御祭典氏神さまのお祭りには、强飯をふかして店子へ配り、

仙右　譬にもいふ大家根性、取りたがるのがあたりまへだに。

むつ　あゝも慾氣のないといふは、

仙右　世に珍らしいお家主ぢやなあ。（ト此時仕掛にて竈へ煙り立つ、仙右衞門思入あつて、）これおむつ、大分焦げくさいぜ。

むつ　ほんになあ。（トあわてゝ竈の下の火を引く。）

仙右　麁相なれば仕方もないが、なるたけ麁末にならぬやう、おれが夜食に喰はうから、焦げた所を握つてくれ。

むつ　お前がそんなにならしやんしたも、お米を麁末にしたゆゑかと常から思ふて居るからに、決して

仙右　麁末にはせぬわいなあ。（トお櫃へ飯をうつして居る。仙右衛門思入あつて）此眼病も、桝目を盗みし、

むつ　え。

仙右　いやさ、此眼病もますく重り、其日に困つて昨日まで、三度の飯も粥ばかり、力が抜けたが久し振り、飯にあり附く其嬉しさ、是れといふのもそちがお袋、おせつどのが勤めて居た秋津さまがお情ゆゑ、あだおろそかには思はれない。あゝ拜みますく。

むつ　どうしてあだに思はれませう、昨日お禮に上らうと、思つたなれど身裝の惡さに、旦那さまのお恥を思ひ、お寄り申さず歸つたが、お惠み受けしお金にて、質に入れた半纏を、今朝出したれば是れを着て、お臺所からそつと上り、お禮を申して來ませうわいな。

仙右　おれもお禮に行きたいが、こんなざまゆゑ御遠慮申せば、二人前旦那さまへ、厚くお禮を申してくれ。然し今から遲くはないか。

むつ　いえく晝より夜の方が、人の目褄にかゝらいでようござんす。今から急いで行つたなら、九時頃には歸られませう。

仙右　なるたけ早く歸つてくれ。是れにつけても五郎七めは、昨夜屯へ引かれたさうだが、いよく彼

奴が金側の時計を盗んだ本人なら、北海道へ遣るといつて、金が欲しさに悴をば異國へ賣つたに違ひない。

むつ　それも嚴しき御吟味で、白狀すれば分ること。

仙右　どうぞお上のお調べで、早く口が開けばいゝが、何をいふにも啞とやら、嘸御吟味にお骨が折れよう。（ト此うちおむつ半纏を着、下手から古行燈を出しあかりをつける。）

むつ　もし、少し早いが行燈へ、あかりをつけておきますぞえ。

仙右　おゝ、手探りではむづかしい。

むつ　そんならちよつと、行つて來ますぞえ。

仙右　なるたけ早く歸つてくれ。

むつ　つい歸つて來るわいなあ。

ト四つ竹節にておむつ足早に花道へはひる、仙右衛門これを知らず、門口へこなしあつて、

仙右　これおむつ、どうぞ早く歸つてくれ。これ、おむつ〳〵。（トいへども答へなきゆゑこなしあつて、）あゝもう行つたか。

〽鐘の音も六ッか七ッか指折りて、算へ盡きせぬ仙右衛門、思案に餘る胸のうち、吐息をつ

いてかこち言。（ト是れより床の合方になり、仙右衛門思ひ入あつて）今打つたはもう八時か。あゝ今更言つても返らぬが、可愛さうなは女房おむつ、おれが盛りの時分には毎日相場で會所へ行き、崩れが酒から女郎買ひ、三日も四日も歸らぬので異見をすれば撲り附け、あらひざらひ引つ攫ひ車を飛ばして廓へ行き、榮耀榮華の仕度い三昧、跡に殘つた女房や悴にたゞの一日も樂をさせた事もなく、今々思へばこれだけの、罰でも此目が潰れる筈。

〽左程邪險にしたおれを、無慈悲な者と恨みもせず。

長の病氣のかんがくも手に手を盡した甲斐もなく、盲目となりしを助けんと、晝は町家の門へ立ち、夜は金杉の毘沙門さまへ百度を踏みに行くと僞り、大門邊で往來の袖に縋つて合力受け、やうやう其日の話計立て、不正直な此おれを過してくれる情なさ、今となつては面目ない、我が身の惡事に目は見えず長生きしても此先に、何樂みのない體、女房に苦勞をかけようより、留守を幸ひ一思ひ。

〽とは云ひながら、我が悴いづくの果てに居る事やら、案じ過して氣を取直し、

あゝいつまで言つても返らぬこと、幸ひ今日は親父の命日、見えぬ目ながら手探りにお膳を供へて回向なし、心靜かに死に支度。むゝ、さうだ〳〵。（ト是れをキッカケに地藏經になり、仙右衛門探

りながら下手へ行き、手桶の水でうがひを遣ひ、上手佛壇にある瀬戸物の佛器を持つて來り、おはちの飯を盛り佛前へ供へよろしくあつて、）折も折とて棟割りの、隣り長屋で此間子供が死んで一七日、回向の爲の地藏經は、生死分からぬ悴めが、死んで彼の世に居るといふ、是れも佛の知らせなるか、此世でなした罪科で、兩眼ばかりか身代まで、潰した詫びは冥土へ行き、呵責を受けるが罪滅し、どうぞ許して下さりませ。

〽位牌に向ひ手を合せ、過ぎし懺悔を死出の旅、涙ながらに勝手より身の錆庖刀探り取り、

ト此うち仙右衞門佛檀へ向ひよろしくあつて、臺所へ探り行き、俎板の上にある菜切庖刀を持つてこちらへ來り、撫廻しこなしあつて、

身代限りをする時に、簞笥は元より鏡臺まで、皆ばつたりに賣つたゆゑ、今となつては剃刀一挺小刀一本ない始末、刄物と云つては錆びついた此庖刀があるばかり、出刄の替りや小刀の替りも勤めた擧句の果が、今日はおれが腹切刀、然しこの錆びやうでは切れまいが、砥石もなければ瓦もなし、研ぐに研がれぬ此身の錆、あゝ力任せに遣つたなら、死なれぬ事もあるまいわえ。

〽肌押脱ぎて仙右衞門、胸撫でおろし二度三度、死なうとすれど死に兼ぬる、折から爰へ錆附きしその庖刀より親と子の、血筋切れざる仙太郎、爰やかしこと尋ね詫び、

ト此うち仙右衞門肌を脱ぎ繻袢になり、胸をあけ腹へ庖刀を當て、痛いといふ思入、死なうとして死なれぬこなし、庖刀を下に置き當惑の思入。時の鐘。花道より序幕の仙太郎、散切り鬘、西洋服のこしらへ靴にて出來り、花道にて襟に掛けたる時計を出し、ちよつと見ることあつて、

仙太 おゝ、時計は二分おくれてゐるが、今打つたのは八時の鐘、親に逢ふのも僅か二時間、今入口で聞きたれば、裏へ曲つて三軒目と、教へてくれたは慥に向う、あれへ參つて尋ねて見よう。

〽言ひつゝ門へ歩み寄り、（ト仙太郎舞臺門口へ來り）

お賴み申します。

〽内にはそれと知らざれば、

仙右 何の用か知らぬけれど、今家が取込んで居れば、明日のことにして下せえ。

仙太 いえ、火急な事でござりまするが、仙右衞門さまは、此方でござりまするか。

仙右 仙右衞門はこちらだが、今お留守で分かりませぬ。

仙太 でも、誰やらおいでの樣子。

仙右 いえ〳〵、だれも居りませぬ。

〽急ぐ最期に挨拶も、後や先なる父の聲、門に悴は氣もせかれ、

ト此うち仙右衞門早く歸つてくれゝばいゝといふ思入、門口に仙太郎當惑のこなし、トゞ門の戸を覗くこなし、

仙太　そこにおいでなさるは、お父さまではござりませぬか。

ト いふ聲聞いてびつくりなし、

仙右　やゝ、さういふ聲は、仙太郎ぢやないか。

仙太　はい、仙太郎でござります。

仙右　なに、仙太郎だ。（ト立上り門口の方へ行かうとして飯櫃につまづき、どうと倒れる、仙太郎門口を明け）

仙太　あゝ、お危うござります。

ト 靴ぬぎ捨てゝ走り寄り、介抱すれば其儘に、側へ引き寄せ親と子が、涙先立つばかりなり。

仙右　おゝ、悴か。

ト此うち仙太郎靴をぬぎ、こちらへ來り、仙右衞門を抱き起す、仙右衞門仙太郎を引き寄せ、

仙太　おとつさま。

仙右　死んだとばかり思つてゐたが、よくまあ達者でゐてくれたなあ。

〽嬉し涙に泣き伏せば、仙太郎も目を押し拭ひ、

ト仙右衛門嬉し泣きに泣く、仙太郎手を突き、合方になり、

仙太 久々お目に掛りませぬが、御健勝にゐらせられ、恐悦至極にござりまする。

仙右 先づおれよりは仙太郎、よく息災で歸つて來た、忘れもせぬ五月あとの四月廿日の事であつたが牛肉屋の五郎七が親切ごかしに勸めるゆゑ、そなたに出世がさせたいばかりに、北海道へ遣つたあと、世間で人の口の端に異國へ子供を賣る者があるといふ話しを聞き、明暮おむつと案じて居たが、もし五郎七に異國へでも、賣られて行きはせなんだか。

仙太 いえ〳〵左樣な事ではござりませぬ、旦那さまのお供を致して、所々を廻つて參りました。

仙右 おゝそれならやつぱり旦那のお供で、そなたは方々廻つて來たとか。よくまあ、歸つて來てくれたなあ。

〽一目見たさも見えわかぬ、親は涙の目なし鳥、子は賢しくもそれと見て、

ト仙右衛門よろしく思入、仙太郎仙右衛門を見て、

仙太 おとつさまにはいつの間に、そんなお目になりなされました。

仙右 さあ問はれて話すも面目ないが、年端も行かぬ手前にまで、異見をされたおれが不所存、若い折

から三十年來、桝目を盗んで生業した其報いにて目が潰れ、所へこれまで借込んだ借金方から願ひ立てられ、身代限りをしてしまひ、おつかあが里の小松川へ、引取られて行つて居たが、米の高いに二人口長く居るのも氣の毒ゆゑ、少しばかりの元手を借り、三月跡此裏へ、しがない世帶を持つたのだ。

仙太　以前の所においでがないゆゑ、それで狀が屆きませぬか。

仙右　なに、狀が屆かぬとは。

〽いふに悴はしとやかに、（ト誂への合方になり、）

仙太　先づお聞き下さりませ。北海道へ下る途中、銚子口も無事に越し、金華山の沖合へ、掛りし折柄一天曇り、俄に西北の暴風吹き、船頭盡力いたせども逆浪高く搖り上げられ、遂に輪船の器械を損じ、船中一同死を極め、止むを得ずして風波に任せ、凡そ日數五日程、大洋中に漂ひしが未だ運命盡きずして北アメリカへ漂着なし、主人と共に上陸後、右の次第を書き認め、郵便船へ出しましたが、身代限りに住居分らず屆かぬことゝ見えまする。

ト仙太郎よろしく思入あつていふ。

仙右　それぢやお途中で難船して、北アメリカへ流されたとか、道理で手前の言ふことは、唐人臭く

ちんぷんかんで、おれにはさつぱり分らぬが、何しろ危ねえことだつた、さうしてこつちへいつ歸つた。

仙太　船の破損を繕つて、昨夕方に横濱へ着船いたしてそれ〲へ、お屆け濟んで又候や、北海道へ明朝出帆、今日お目に掛らねば、

〽何時またお目に掛れるか、生死知れざる浪の上、

一日なりともお顏が見たく、涙ぐんで居りましたを、早くも主人が心を察し、嘸や親に逢ひたからう、家でも案じて居ようから、無事を知らして來るがよいと、十時間の暇を貰ひ、やれ嬉しやと鐵道でステーションへ上るがいな、直ぐにお尋ね申しましたが、身代限りで小松川へ、お出でと聞いて力も拔け、またもや車で小松川へ參つて聞けば三月あと、爰へお出でと承はり、お婆さまにもそこ〲に、お暇申してとつて返し、やう〲爰を尋ね當てお目に掛りに參りました、

〽逢ふは別れと子心に縋り歎けば仙右衞門、可愛のものと抱きしめ。

ト此うち仙太郎よろしくこなしあつて、仙右衞門に縋るを、抱きしめて思入、

仙右　親といふのも面目ない、親甲斐もない仙右衞門、それを慕うて此やうな、穴のやうなる新網までよく尋ねて來てくれた。嘸おつかあが悅ぶだらう、幸ひ飯も炊きたてなれば、手前の好きな鰻で

も馳走するからゆつくりと、四五日逗留するがいゝ。

仙太　いえ〳〵さうしては居られませぬ、明朝未明に出帆ゆゑ、晝十二時から十時まで、十時間の暇を貰ひ、參りましてござりまするから、十時の車に乘りませねば、未明の間には合ひませぬ。

仙右　それぢやあ十時の鐵道へ、乘らねば主人へ濟まねえか。

仙太　お上の御用で碇泊中、主人の情で十時間の暇を貰ひし私ゆゑ、出帆の期に後れましては、主人の情が無になりまする。

仙右　そいつァ本意ねえことだな。

仙太　見受けますれば最前から、おつかさまはお留守の樣子、何れへお出でなされましたか、十時と云つても僅かゆゑ、お目に掛りたうござります。

仙右　あれも明暮逢ひたがつて噂を言はねえ事はねえ、今京橋まで行つたから、もう少ししたら歸るだらう、何しろ物言ひは十五六の子のやうだが、どんなに形が大きくなつたか、顏が一目見たくつても見ることならぬ此眼病、せめて女房に二人前、顏の見置がさせたいが、斯ういふ事と知つたなら、秋津さまへ遣らにやあよかつた。

〽見えぬ眼ながら延び上り、妻の歸るを待ち詫ぶる、側に悴は主人より貰ひし金子取出し、

ト仙太郎洋服の隱しより蟇口の巾着を出し、中より紙に包みし五圓の金貨を二枚出し、

仙太　もしおとつさま、爰に五圓金が二つ、十圓貨幣がござりますが、こりや主人よりお手當にお貰ひ申せし旅費ながら、さして入用もござりませねば、これをあなたに上げますから、お好きな物を召上り、お氣をお晴らし下さりませ。

〽手渡しなせば探り見て、(と仙右衞門の手の上へ載せる、仙右衞門さぐり見て、)

仙右　すりや御主人からお手當に、お貰ひ申した此金を、其儘おれにくれるとか。

仙太　測量方を勉強なし、上より月給たまはるやうに、登用いたせばその時は、お樂をおさせ申しますから、それを樂みにおとつさま、御不自由でも兩三年、お待ちなされて下さりませ。

〽健氣な詞に仙右衞門、さし來る淚胸一杯。

ト仙太郎も愁ひの思入にていふ、仙右衞門始終淚を拭ひ、

仙右　その志しは嬉しいが、此金ばかりは貰はれぬ、おりや其金より時の鐘、せめて一時も暇を貰ひ使ひにやつたおつかあに、ゆつくり逢はせてやりたいわい。

仙太　どうぞ私も今のうち、おつかさまにお目に掛り、立ち歸りたうござりまする。

〽言ひつゝ取出す懷中の、時計の表見てびつくり、

ト此うち仙太郎襟に掛けし時計を出し、是れを見てびつくりなし、

仙右　やゝいつの間に九時を打ちしか、時計は九時と三十分。

仙太　えゝ、そんなら十時にもう半時。新橋までは道程も近いといへど十町餘り、直に行かねば間に合はぬ。

ト是れより床の早き合方になり、仙太郎心の急く思入。

仙右　それぢやあ手めえはおつかあに、逢はずに是れから直ぐに行くか。

仙太　さあ一目なりともおつかあさまに、お目に掛りたうござりますが、時刻を缺いては主人へ濟まず殘念ながら參りまする。

〽見えぬ兩眼幸ひと、いはぬ色なる置土産、父はそれとも氣が附かず。

ト此うち仙太郎金を出して行燈の臺の上へ載せ、下手へ來り靴をはいて居る、仙右衛門探り〳〵下手へ來り、

仙右　あこれ、何でおむつは歸らぬ、今歸つて悴に逢はねば、いつ逢はれるか知れぬのに、車にでも乘ればよいが、大方歩いて居るであらう。

〽氣を揉みあせれど女房の、歸り知れねば是非なくも、こなたは容を改めて、

ト仙右衛門氣を採む思入、仙太郎身支度をなし仙右衛門に向ひ、

仙太　左樣ならおとつさん、隨分ともに御機嫌よろしう。

仙右　そんならどうでも、もう行くか。

仙太　おつかさまには持病あるゆゑ、御身を大事になされるやう。

仙右　おゝ、そちも煩はぬやうにしやれ。

〽未練殘さぬ男氣も、名殘りは惜しき恩愛に、妻の歎きや子の歎き、我が身に思ひ行く影を見送る眼さへ淚の種、跡を見送り〳〵て子は悄々と別れ行く。

ト此うち仙右衛門門口にてよろしく愁ひの思入、仙太郎は振返り〳〵花道へ行き、跡へ心の殘る思入あつて、時計を出しこれを見てきつとなり、逸散に花道へはひる。

〽跡には一人張詰めし、心も撓み仙右衛門、わつとばかりに泣き伏せしが淚拭うて起上り、

ト仙右衛門尻邊にどうとなり、泣伏し、また起き上つてこなし、

仙右　一途に迫つてすんでのこと、今庖刀で死ぬところ、半時悴が遲かつたら逢はずに死んでしまつたらう、あゝ思ひ出しても忌はしい。それはさうと女房は、何でこんなに遲いことか、早く歸つて來ればよいに。

へ待つ間ほどなく女房が、時刻の遲れにとつかわと、心せわしく我が家の門。

ト花道より以前のおむつ片手に壜を提げ、足早に出來り、直ぐ門口へ來り、

むつ　こちの人、今戻りましたぞえ。（ト內へはひろ、仙右衞門顏を上げ、）

仙右　おゝおむつか、あゝ遲かつた〳〵。

へいふに女房は合點行かず、

むつ　道を急いで歸つたが、そんなに遲うなつたかいなあ。

仙右　遲いといふは、たつた今尋ねて來て、今歸つた。

むつ　そりや、誰れが來ましたぞいなあ。

仙右　えゝ手めえもまあ呑込みの惡い、來たと言つたら知れさうなものだ。

むつ　ほんにまだ油屋に、借りが殘つてござんしたな。

仙右　えゝ、さうではない、悴が來た。

むつ　え、悴が來ましたえ。

仙右　おゝ、たつた今來た。

むつ　もし、そりや幽靈ではござんせぬか。

仙右　あゝ鶴龜々々、緣起でもない、達者で歸つた。
むつ　そりやまあ、ほんまの事かいなあ。
〽嬉し悅び女房が、四邊うろ〳〵立ちつ居つ、尋ね搜すぞいぢらしき。
ト此うちおむつ上手の屋體を開けて見て、あちこちと搜す思入、仙右衛門じゆつなきこなしにて、差しうつ向き居る、
これ、仙太郎は何處に居やる、早く顏を見せてくれぬか、仙太郎。
〽呼べど答へのあらざれば、
もし、仙太郎は湯へでも行つたかいなあ。
仙右　おゝ、仙太は行つた〳〵。
むつ　行つたとは、そりや何處へ。
仙右　さあ、たつた今横濱へ行つた。
むつ　あゝそれでは何ぞ横濱へ、忘れ物でも取りに行つて、明日家へ歸るのかいなあ。
仙右　いや家へ歸つて來るならいゝが、明日の朝北海道へ出帆すると言つたから、またいつ歸るか知れぬわい。

むつ　え、、、、。

〽妻はびつくり、氣も半亂、

トおむつどうとなる、是れより床の合方、仙右衛門の胸づくしを取り、

これこちの人、さういふ事なら留めておいて、なぜ逢はせては下さんせぬ、お前ばかりの子ではなしわたしの爲にも大事のかゝり子。五月あとに北海道へ行つてそれきり便りもなく、大方海で難船して死んだと思へどもしひよつと、歸つて來まいものでもないと、明暮待つて居るものを、わたしに逢はせず歸すとは、そりや胴慾ぢや、聞えませぬわいなあ。

〽愚痴は女房の常ながら、夫を捉へかぞへ立て、恨み歎くぞ哀れなる、涙拭ふて仙右衛門、女房の背撫でおろし、

ト此うちおむつよろしく思入、仙右衛門泣き伏すおむつの背中をさすり、

仙右　おゝ尤もだ〳〵、其恨みを聞くまい爲、いまにおむつが歸つて來るから、それまで待つて居てくれろと、云へど猶豫のならぬのは、明日夜明けの出帆で、今日十二時から十時までのお暇を貰つて來た所、そちが歸りの遲いので、本意なく逢はずに歸つたのだ、譬にもいふ主と病、奉公の身は仕方がない、逢はれぬ時節と思つてくりやれ。

〽一部始終を女房も、聞いて涙を押し拭ひ、

むつ　さういふ事なら是非もないが、ちよつとなりとも見たかつたに、形は大きうなりましたらうな。

仙右　それもおれが見えぬ眼に、形は知れぬが物言ひは、十五六の子供のやうだ。

むつ　小さい折からませて居たゆゑ、嘸高慢になりましたらう。

〽言ひつゝ傍の行燈を、掻立てんとして、包みを取上げ、

トおむつ行燈をかき立てようとして以前の金包みを取上げ、

こりや銅錢かと思ふたら、ほんまのお金の五圓金、十圓爰にお金のあるは。

仙右　扨は最前返したを、またもや其處へ置いて行つたか。

むつ　置いて行たとは、そりや誰か。

仙右　さあ旅の手當に御主人から、悴が貰つた其十圓、貧乏暮しを助けようとおれにそれをくれたれど旅では金の入るものゆゑ、志しは貰ふ程に金は其儘持つて行けと、懐へ入れてやつたが、やはり爰へおいて行つたも、知らぬ盲目の面目なさ、さうだ。

〽血相變へて立上るを。（ト仙右衛門立上るを、おむつ留めて、）

むつ　さあ其見えぬ目も一度は、見える稀代の此良藥、秋津さまから下すつた硝酸銀といふ水藥、また

一品は價の高い、世にも稀なる鮑の眞珠、善は急げといふからは、是れを呑んで水藥を、少しも早く附けなさんせ。

ト此うち帶の間より巾着を出し、此うちより眞珠の包み紙を出し、有合ふ壜と二品を仙右衛門へ渡す、仙右衛門押し戴き、

仙右　すりや眼病には稀代の効ある、價の高い此藥を、憎い奴とも思召さず、此仙右衛門に下すつたとか、あゝ勿體ない〱。（ト此うちおむつ下手の手桶の水を、茶碗へ汲んで持ち來り、）

むつ　その勿體ない入譯は、なほつた上で旦那さまへ、お詫びの仕様もあらうわいなあ。

仙右　おゝ忰が達者で居る上は、此眼をあいてもう一度、人間らしくなりたいわい。

むつ　さあ〱、早う呑ましやんせ。

〽差出す眞珠を仙右衛門、押し戴きてぐつと呑み、

ト此うち仙右衛門藥を呑むことよろしくあつて、

仙右　まだ十時にはなるまいから、車の出ぬうちそちにも逢はせ、此十圓を返さにやならぬ。

むつ　ほんにこれから新橋の、鐵道までは十町餘り、道を急いで行つたなら、逢はれぬこともござんすまい。

仙右　そんならおむつ、支度はよいか。
むつ　あい、杖も草履も、これ爰に。

〽馴れし女房が介抱に、杖に縋つて仙右衛門、立出る門口杢右衛門、

トおむつ介抱して仙右衛門に草履をはかせ、杖を突かせ手を引き門口の外へ出る、此以前下手より幕明の家主杢右衛門出で窺ひ居て、

杢右　様子は聞いた夫婦の衆、爰構はずと行かつしやい。
むつ　そんなら何分お家主さま。
仙右　留守をお頼み、(ト花道へ行きかけ、ひよろ〳〵として杖をとんと突くを道具替りの知らせ、)申しますぞ。

〽道を急いで、

ト三重になり、おむつ仙右衛門の手を引き逸散に花道へはひる。此模様よろしく道具廻る。

(新橋停車場夜の場)——本舞臺一面に白ペンキ塗りの柵矢來、内に樹木の植込み、後石造のステンション、下手蓬萊橋の石橋、向う西洋造りの蓬萊社を見せ、汐留川岸通りの遠見、日覆より松の釣枝、總て新橋ステンションの體、爰に前幕の下剃の吉、廣袖三尺麻裏草履、湯屋の三助、着流し草

履にて福壽湯といふ弓張提灯を持ち、二人捨石へ腰を掛け居る、此見得浪の音合方にて道具留る。

三助　ときに吉さん、とんだ事が出來たぢやあないか。

吉　さうさ、お園さんと六三さんは福壽湯に居た時から、いゝ仲といふことは親方もおれも知つて居るが、よもやこんな事にもなるめえと、油斷をしたのがこつちのあやまり。

三助　たゞ逃げたならいゝけれど、ひよつと心中でもした日にやあ、直に新聞に載る話しだ。

吉　何にしろ親方がすてきに心配をして居るから、二人が行方を搜しに出たが、丁度いゝあんべいにお前に逢つて、脫れぬ中の湯屋と髮結、氣を揃へて搜したら、知れねえこともありやすめえ。

三助　さうとも〳〵、もしや二人が陸蒸汽で横濱へでも走りはせぬか、ステンシヨへ行つて聞いて見よう。

吉　それがいゝ〳〵、何でも二人は逆上して居るから、こりや蒸汽でもござりませう。

三助　いや、とんだお茶番だ。

吉　さあ〳〵行きやせう〳〵。

ト吉、三助思ひ入あつて正面柵矢來の內へはひろ、中にて鈴を振り立て、浪の音になり、上下より仕出思ひ〳〵のこしらへにて、捨ぜりふを言ひながら出來り、

△　まだ十時にやア大丈夫だから、ゆつくりと行きませう。

皆々　それがいゝ／＼。

ト此時後木戸のうちより○、散髪、木綿の夏洋服片腕に番號を縫ひ附け、紺足袋麻裏草履にて出來り、皆々を見て、

○　さあ／＼、早く札を買つた／＼、さあ／＼急いで／＼。（トこれにて皆々びつくりして）

△　やあ、こいつは大變だ／＼。

皆々　早く行かうぜ／＼。

ト皆々木戸口へはひる、また鈴の音になり、是れより床の浄瑠璃になる。

〽日に増しに世界開けて雁よりも、早き便りの電信機、八里の道も一時間、煙草呑む間に横濱へ、通り路しげき蒸汽車も、暮れて暫しは音絶えし、鐵道館の十時前。

トよき程に蒸汽の出る笛になり、花道よりばた／＼にて、以前のおむつ先きに仙右衛門、杖に縋り走り出で、花道にて躓きばつたり轉ぶ、おむつこれを介抱して抱き起し、

むつ　もしこちの人、何處ぞ傷めはなさんせぬか。

仙右　いや何處も傷めはしないから、おれに構はず先へ行き、車の安否を聞いてくれ。

むつ　心も空に急いだせるか、切通しの鐘を聞かぬから、まだ十時にはなるまいわいなあ。
仙右　暮れると間もなく八時を打つから、もう十時に間もあるまいが、鐵道へはまだ來ないか。
むつ　あい、もうつい向うでござんすわいなあ。
仙右　さういふ事なら少しも早く、もう一遍逢ひたいものだ。
ト痛む足許踏みしめて、おむつに縋りたど〳〵と、來かゝる折から鐵道より、乘りおくれた
る人々が。
ト浪の音になり、おむつ仙右衞門等舞臺へ來る、爰へ上手より、一、二、三の町人、思ひ〳〵のこし
らへにて出來り、
町一　もし〳〵、お前やつぱり濱へ行きなさるのか、此夏から蒸汽が朝の七時から、晩の十時まで休み
ツこなしに出るゆゑに、つひ煉瓦石の方をぶら〳〵と、ひやかして居たうちに七時四十五分の車
が出て、今度は十時と思つて居るうち、わしが時計が狂つて居たか、急いで爰へ駈け附けたが、
町二　もう一足早く來ると、今の車に乘れたのに、
兩人　惜しい事をしたなあ。（ト言ひながら下手へ行くをおむつ見て、）
むつ　もし〳〵、お前さま方は、鐵道へお出でなされましたのでござりまするか。

町二 あい、今行つてあぶれて來ました。
仙右 え、それぢやあ蒸汽は出ましたか。
町一 あい一足違ひで乘りおくれ、
町三 すご〳〵あぶれて歸りますのさ。
むつ それなら十時の、あの車は、
仙右 一足違ひで出ましたとか。
むつ こちの人、
仙右 女房、
兩人 ほい。
〽車におくれ思はずも、大地へどうと伏し轉べば、立寄る人も氣の毒顏。
ト仙右衞門おむつどうとなり、當惑の思入。
町二 かう見たところがお前方も、大方急な用だらうが、乘りおくれたら是非がない。
町一 歩いて行けば横濱まで、八里からある道程に、今夜中にはとても行かれず。
町三 それゆゑ今宵は我慢して、明日の朝來て七時の車に、乘つて行くのが上分別。

町二　わしらも其氣であきらめて、一先づ家へ歸ります。
町一　お前方もあきらめて、家へ歸つてあした來なせえ。
町三　やれ〳〵、氣の毒千萬な。
三人　さあ〳〵、早く歸らう〳〵。
〽乘りおくれたる人々は、おのが心にたくらべて、悔みたら〳〵別れ行く。
〽跡に夫婦は茫然と、暫し詞もなかりしが、逢ふて別れし夫より、逢はぬ女房の猶本意なく。
ト仕出し三人は花道と下手へ別れはひる。おむつよろしく思入あつて、
むつ　もし、こちの人どうせう。
仙右　おゝ尤もだ。
むつ　どうせう。
仙右　尤もだ。
むつ　どうせう〳〵、どうせうぞいなあ。今更いふも愚痴ながら、斯ういふ事と知つたなら、最前家へ戻つた時、直に跡を追駈けたら、逢はれぬこともなかつたに、お前が兎やかう言はしやんして、期を延ばしたゆゑ逢はれぬか。

〽何の因果で斯くまでに、薄き緣と口說き立て、涙のはてしなく聲を聞くも哀れと盲目の、目にもあふるゝ溜め涙、前後正體なかりける、女房きつと立上り、

ト此うち兩人よろしく愁ひの思入あつて泣き落し、トゞおむつきつとなつて、

もう此上は女の一心、道は何程あるとても、今宵のうちに濱へ行き、我が子に逢はひでおくべきか。

〽狂氣の如く帶引きしめ、行かんとするを引き止め、

トおむつは血相して行かうとする、仙右衞門探り寄りてきつと留めて、床の早めになり、

仙右　こりやおむつ、その歎きは尤もだが、八里からある橫濱へ晝でもあるか夜を掛けて、女の足で行かれるものか、所詮及ばぬことだから逢はれぬことゝあきらめて、たゞ此上は時節を待ち、悴の無事を祈つてゐやれ。

むつ　そんならどうでも逢はれぬか、えゝ情ないことぢやなあ。

〽またも女房が泣き沈めば、空も涙の雨催ひ、むらだつ雲に雷の音。

ト兩人よろしく思入、此時薄く雷の音になり、おむつこなしあつて、

あゝ折惡い雷さま、空の光りの樣子では、どうやら强う鳴りさうぢやわいなあ。

仙右　産れ附いての雷嫌ひ、強くならぬ其うちに。(ト雨車になり、)家へ歸らうと思ふうち、もうばらばらと降つて來た。

むつ　どこぞこゝらに知つたお家が。

仙右　おゝ木挽町に以前使つた、舂屋が世帯を持つて居れば。

むつ　そんならそれへ。

仙右　さあ、少しも早う。

むつ　とはいへ此儘。(ト立掛るを仙右衞門留めて、)

仙右　はて、人は時節を。(トおむつを引廻し、)待つものぢやわえ。

〽次第〳〵に、

ト兩人引張りの見得、床の三重、雷の音はげしく、此道具廻る。

(築地海岸浪除の場)――本舞臺上手へ寄せて柳の大樹、同じく日覆より釣枝、下手に疊んである葭簀張りの出茶屋、後一面黑幕、裾通り葛籠石を漆喰留めにて一枚通り並べたる海岸の石垣、總て築地海岸浪除、夜の體よろしく、浪の音にて道具留る、と上手より以前の三助先きに下剃の吉出來り、

三助　どう調べて貰つても、乘合のうちには居ない樣子だ。

吉　さうして見ると二人とも、築地の方へ追駈けて、悪くしたらどんぶりと、飛込んだかも知れねえわえ。
三助　風呂の中ならどんぶりやつて、何にも案じる事はないが、川の中では命があるまい。
吉　そりやあ言はずと知れたことだ、女がお土左で男の方が土左衛門とならにやあならねえ。
三助　何にしろ大事だが、どうか仕様はあるめえか。
吉　外に仕様といつちやあねえが、是れからおらあ船を借りて、すばりで川をさがして見よう。
三助　すばりをするより網を借りて、散蓮華といふ渾名だから、すくつた方が早からう。
吉　お前はまた湯屋だけに、流れッ木を拾ふ氣で、川岸通りを捜してくんねえ。
三助　そりやあおれが得手ものだが、斯うい事と知つたなら、相棒でも連れて來るのに、一人でうろうろ尋ねるのも、これがほんのゆやな番だ。
吉　そんな駄洒落を言はねえで、眞劒で捜してくんねえ。
三助　そんなら吉さん。
吉　番頭さん。
兩人　どうか知れて、くれゝばいゝが。

ト兩人別れて上下へはひる。跡浪の音、ばた〳〵になり、花道より銀次、巾着切り頬冠り尻端折り草履にて逃げて出來り、跡より前幕のお咲牛鍋屋の女房にて、片棲端折り前垂がけ、下駄にて追つかけ出來り、直に舞臺へ來り、お咲銀次の袂を捉へ、

お咲　もし銀次さん、ちよつと待つて下さんせいな。

ト是れより端唄の合方、かすめて浪の音になり、銀次手拭を取り、

銀次　おれが名を呼んで來るものは、損料取りより外にねえから、譯も分らず逃げ出したが、おめえは牛屋のお咲ぢやあねえか。

お咲　あい、ちつとお話し申したい事があつて、それでお呼び申しましたのさ。

トこれにて銀次、有合ふ捨石へ腰を掛け、

銀次　そりやあ丁度いゝ所で逢つた、おれもちつと譯があつて、急に濱の方へ行かにやあならねえから、逢ひたく思つて居たところだ、これお咲お定りのせりふだが、ちつとばかり貸して貰ひてえものだ。

トお咲思入あつて

お咲　もし銀次さん、それどころではござんせぬ、お前ゆゑにこちの人、五郎七どのは繩目に逢ひ、屯

へ引かれて行きましたわいなあ。（ト愁ひの思入、銀次これを聞いてびつくりして、）

銀次　これお咲、そりやあいつてえどういふ譯だ。（トこれにてお咲下に居て、）

お咲　さあ昨日お前方がわたしの家で、紙屑屋を呼んで賣らしやんした紙入が、新開町の湯屋の二階で金側の時計と一緒に盗まれた、不正の品で二階番の、娘の兄が其紙入を證據にして、こちの人が盗んだやうに時計を出せと惡口たら〳〵、段々聞けば京橋邊で散切り左吉といふ髪結で、見掛けによらぬかな聾、言譯しても聞き入れず、それにまたこちの人が持病の癇で、口が利けず、中へ這入つてあちこちとわたしが言譯するうちに、お廻りさまのお耳に入り、相手の左吉を屯所へお連れなされてまた間もなく、こちの人に繩を掛けお連れなされてござりますが、口は利けずどの位困つて居るか知れませぬ、殊には露にいふ時はお前さまのお身の上、其身に引負ひ暗い所へ送られるか知れませぬ、もし銀次さん、元の起りはお前ゆゑ、よい思案して下さんせいなあ。

銀次　むゝ、それぢやあ昨日手めえの家で、紙屑屋を呼込んで、おれが賣つた品物から、おぬしの亭主が調べになつたか、そいつあとんだ事だなあ。（トぢつと銀次思入あつて、）

お咲　まあ何にしろ木挽町の、伯父さんの所へ行き、お慈悲願ひを頼むゆゑ、一緒に行つて下さんせ。

ト銀次の袂を捉へ、連れて行かうとするを振拂ひ、

銀次　いやお慈悲願ひにやあ及ばねえ、さういふ譯ならおれが是れから、連れて行かれた屯所へ駈込んで言ひ開きをしたならば、元より知らぬあの五郎七、後方までに返してやるから。

お咲　いえ〳〵そんな嘘を言つて逃げる氣でござんせうが、其の口先には乘らぬわいなあ。

銀次　成程これまで五郎七や、手めえに嘘も度々ついたが、こればかりは本當だ。

お咲　いえ〳〵何と言はしやんしても、そりや本當とは思はれぬ、まあ伯父さんの所へ一緒に。

ト引ッ張る、

銀次　えゝ、聞きわけのねえ、爰を放せ。

お咲　いえ〳〵、爰は放されぬわいなあ。

銀次　えゝ面倒な

ト是れより浪の音になり、銀次振拂つて行かうとするを、お咲支へてちよつと立廻り、トゞ銀次お咲を振拂つて上手へ逃げてはひる。やはり浪の音にて上手より銀次跡を振返り〳〵出て、天水桶の陰へ隱れ、やう〳〵のことでまいてしまつた、亭主が屯へ行つて居るから、半氣違ひも尤もだ、さて〳〵女といふものは、いけしつこいものだなあ。（ト誂への端唄の合方になり、銀次あたりを見廻し思入あつて、）今お咲の話しぢやあ、昨日ばらした紙入から湯屋の二階の足が附き、

賣主にした五郎七が屯へ引かれて行つたさうだが、おれも是れまで彼奴にやあ、故主ごかしで借込んだ、金も積つて四五十兩、その恩のある五郎七が、無實の難で引かれたと聞いちやあおれも最うこれまで、丁度爰らが惡心の改め時に名乘つて出て、牛に緣ある闇黑から明るい所へ五郎七を引出した上お仕置うけ、ぶら〳〵遊んだその替り何ケ年でも懲役場で膏をしぼるが罪滅し、思へば首のねえ科も命を助けて下さるとは、以前に替るお上のお慈悲、夢で暮らしやあ知らねえこと、濟まねえ事だと目が覺めたら、惡い事は出來ねえなあ。(ト銀次よろしく思入、上手にて人音するゆゑ)またお咲めが引返し、爰へ來ちやあ面倒だ。どれ、此間にさうだ。

ト浪の音佃になり、銀次逸散に花道へはひる、浪の音打上げ、下座の唄淨瑠璃になり、

〽川岸に茂る柳の影くらく、雨持つ空にむら立ちし、雲足早き夏の夜の。

ト本釣鐘雨車、薄く雷の音をあしらひ、花道より前の六三郎、着流し尻端折り頰冠り、絲立を着て出來り、お園手拭を吹流しに冠り、跣足にて出で花道に留り、振返り跡を見て、

〽光り鋭き稻妻や、遠音にひゞく鳴神の、間に一聲ほとゝぎす、なれも戀路にぬるゝ氣か、若葉隱れに啼いて行く。

ト此うち兩人花道で振あつて舞臺へ來り、合方になり、

六三　これお園、昨日おぬしに話した通り、いつぞや取られた紙入に、入れてありし三百圓の貸證文を失ひて義理ある親父に言譯立たず、舊弊ながら死なうとまで、覺悟を極めたことゆゑに、跡に殘つて一遍のどうぞ囘向をしてくりやれ。これが一つの賴みぢやわいなう。

お園　そりやお情ない六三郎さま、その證文を取られしも、預り主はわたしゆゑ、科はわたしにあるものを、あなた一人に難儀を掛け、どうまあ生きて居られませう。（ト六三郎に縋り附く。）

六三　すりや、どうあつても此六三と、

お園　一緒に死にたうござんすわいなあ。

六三　はて、聞きわけのないことぢやなあ。

〽木々の雫のはら〳〵と肌に冷たき夏の夜も、薄きえにしの袷どき、沖を越え來る汐風に、

ト此うちお園一緒に死なしてくれろといふこなし、六三郎それでは濟まぬといふ思入、此うち下手より前幕の左吉、番傘下駄がけにて出て窺ひ、兩人の話しを聞かうとすれど聞えぬ思入、段々側へ來り、思はず兩人と顏見合せ、双方びつくりして、

左吉　や、わりやお園ぢやねえか。

お園　お前は兄さん。

六三　左吉どのか。

〽濕りがちなる袖の村雨。（ト唄の上にてお園六三郎逃げにかゝる、左吉兩人を捉へ）

左吉　こりやいゝ所で見つけたわえ。

兩人　どうぞ逃して下さりませ。

左吉　めつたに逃してなるものか。

ト此うち始終雨車雷の音にて、お園六三郎振切つて逃げようとする。左吉遣るまいとよろしく爭ふ。此うち段々雷の音はげしく、トゞ雷の落ちたる心にて、本鐵砲の音して三人とも舞臺へ俯伏せになる。これと一時に後の黑幕切つて落す、向う一面鐵砲洲の沖を見たる波手摺、海の遠見、これにて雷の音止みて本釣鐘を打込み、跡しんみりとした合方、かすめて波の音になり、六三郎心附きホツト思入、下手へ來りお園に雨水を呑ませ介抱する、これにてお園心附き六三郎を見て、

お園　六三さまか。

六三　あこれ、此間に早く。（ト左吉へ思入、お園こなしあつて、）

お園　そんなら此儘、

六三　さあ來やれ。（ト波の音、六三郎お園上手へはひる。床の淨瑠璃になり、）

〽折から爰へ五郎七が、繩目を許され駈けり來て、思はず左吉に躓きて、うんと此方は心附き、あたり見廻しびつくりなし。

ト花道よりばた〳〵になり、前幕の五郎七逸散に走り出で、舞臺へ來り思はず左吉につまづく、これにて左吉心附き、あたりを見廻しびつくりなし、

左吉　やゝ、こりやいつの間にか二人とも、おれを出しぬき逃げて行つたか、こりや斯うしては居られぬわえ。

〽駈出す裾を五郎七が、引き止むれば振返り、

や、わりや牛屋の五郎七か、昨夜屯へ引かれて行つたに、どうして爰へ出て來たのだ。

〽いふにとつかは懷より、三百圓の證文に、添へて差出す銀次が書置、これ見てくれと五郎七が、仕形をなすも悟り得ず、

ト五郎七懷より三百圓の證文と銀次の書置を出し、左吉にこれを見てくれといふ仕形をする、左吉お園六三が氣に掛り、心の急くまゝ思入あつて、

えゝ、しみしつこい、おれを留めて仕形をするのは、其書附をおれに讀んでくれといふのか。（ト五郎七うなづく）それを讀んだら分らうが、おらあ無筆で少しも讀めねえ。

〽讀めぬといふを無理やりに、また差しつくれば捥ぎ取つて、
え〻、一字一點讀めねえといふに。
〽あたりへ手紙を投げ捨てれば、爰へ來か〻る仙右衛門、足にさはるを取上げて、
ト此うち左吉書附を下手へ投げつける、下手より仙右衛門杖をつき出來り窺ひゐて、

仙右　なに、此手紙が讀めぬとか。

左吉　お〻、おめえは昨日の按摩さんか。（ト仙右衛門は件の書附を見て）

仙右　「書置のこと。」

左吉　なに、書置とは。

仙右　「先達て新開町の福壽湯の二階に於て、金側時計に蟇口の紙入、三百圓の證文とも盗み取りしは我等にて、五郎七は無實の難ゆゑ、今宵屯へ名乘つて出で、お仕置受ける所存ゆゑ、此證文を先方へ御返し下さるべく候。五郎七どの親類中へ。天麩羅銀次。」（ト仙右衛門讀み終るを、左吉聞きて）

左吉　や、それぢやあ時計と紙入を、湯屋の二階で盗んだは、天麩羅銀次であつたるか。

ト　これを聞き仙右衛門思入あつて、

仙右　こなたは昨日聾だつたが、どうして是れが聞えたぞ。（ト左吉思入あつて）

左吉　おゝ、さういふこなたも盲目であつたが、此書置がどうして讀めた。
仙右　おゝ今まで心附かなんだが、此兩眼の見えるのは、さてはさつきの、眞珠のきゝめか。
左吉　おれが聾の聞えたは、お園を捉へた其時に、あたりへ落ちた雷の、響きに耳が直つたか。
〽これは不思議と兩人が、悦び合へば五郎七が、これで盗まぬ疑ひを晴らしてくれろと、書置を二人へ見すればうなづいて、
仙右　わしも疑ふ悴が歸り、こなたの仕業でないことが、さつき分かつて面目ない。此書置で五郎七どのが、盗まぬことが慥に知れ、今となつては濟まない譯。
左吉　昨日はおめえの知らねえ事を、さぞ腹が立つたらう。
仙右　その腹いせに二人とも、
左吉　存分にして五郎七どの、
仙右　疑ぐつたのを、
兩人　許して下せえ。
〽後悔なして兩人が、身を投げ出して詫びければ、五郎七も吐息をつき、
ト仙右衞門左吉下に居て、五郎七に詫びろこなし、五郎七思入あつて、

五郎　それならわしが盗みもせず、勾引しもせぬことが、お前方に知れましたか。

仙右　おゝ、知れなくッて、

兩人　どうしませう。

〽いふに二人も心附き、

仙右　や、こなたも口が、

左吉　利けて來たのか。（ト五郎七思入あつて、）

五郎　おゝ二人に逢つて疑ひが、晴れたと聞いて嬉しやと閉ぢた癇が開いたか、不斷のやうに口が利けます。

仙右　あゝ、思ひがけなく今日爰で、

左吉　唖と聾と盲目の、

五郎　三人片輪が打寄つて、

仙右　測らず一度に治るといふは、

左吉　是れも藥や神の加護、

五郎　あゝ有難い、

三人　事だなあ。

〽三人手に手を取交し、悦び合ふぞ道理なる。

ト三人よろしく思入あつて、波の音ばたばたになり、下手より以前の吉、金側の時計を以つて出來り、

吉　おゝ親方、爰に居なすつたか。（ト左吉に手眞似をするゆゑ、）

左吉　これ吉や、其手眞似にやあ及ばねえ、今しがた落ちた雷の響きで、聾が直つたから、話しがあるなら言つて聞かせろ。

吉　そいつあ何より目出たいことだ。外ぢやあねえが、もし親方、金側の時計が手に入りました。

左吉　え、さうしてそれはどういふ譯で。

吉　さあ宵におめえの言附けで、お園さんを尋ねに出て、あつちこつちと捜しても、影も形も見えねえから、こいつあてつきり飛込んだと、船を頼んで大川をすばりをして見たら碇へかゝつた此時計、見れば似寄りの金側ゆゑ、おめえに見せに歸つて來たが、湯屋の二階で盗まれたのは、もしやこれぢやあござりませんか。（ト件の時計を左吉に渡す、五郎七是れを聞き思入あつて、）

五郎　これにて思ひ當りしは、さつき屯で天麩羅銀次が、時計は其夜永代橋から測らず川へ落せしと、

白狀したる上からは、慥にそれに違ひあるまい。

左吉　してまた、これなる證文は。（ト以前の證書を出す、仙右衞門引取り開き見て、）

仙右　こりや三百圓貸渡せし、印紙を張つた慥な證文。

左吉　これで妹が盜まれた、品は殘らず揃つたが、二人が死んでは水の泡。

吉　この度を外さず、もう一息、二人の行方を捜しやせう。（ト此時上手にて、）

むつ　そのお二人は捜さずとも、爰においでなされまする。

ト以前のおむつ、お園六三郎を連れて出る。皆々見て、

仙右　や、そちや女房、どうして二人を。

むつ　今この先きで身を投げて死なうとなさる其所へ、お前を捜しに通り掛り、お助け申してござりまする。

五郎　左吉どのも安堵であらう。

六三　樣子は小蔭で聞きましたが、思ひがけなく皆さんの、病氣も直り二品の、

お園　取られし品が戻りしも、爰に連なるお人のお蔭。

六三　えゝ有難う、

お園　ございまする。（ト波の音ばた／＼になり、下手より以前の家主杢右衛門出來り、）

杢右　おゝ夫婦の衆爰に居たか、今横濱から電信で、便りがあつて家への使ひ、明日出帆するところ、急にお上の御用が出來、立ちが二三日延びたゆゑ明日息子がゆつくりと、逢ひに來るとの此の知らせ。

ト電信局の書附を出して見せる。

仙右　そんなら立ちが延びたとか。

むつ　こりやまあ、夢ではないかなあ。

五郎　これで双方悦びの、

左吉　重なるにつけ悪人も、

六三　改心したとあるからは、

お園　お慈悲を願つて命を助け、

むつ　まことの人になる時は、

吉　天麩羅銀次も大きな仕合せ、

五郎　かう物事が極つたら、

左吉　善は急げといふからは、

杢右　此差配人が先棒で、
仙右　お慈悲願ひに、（ト立上るな、木の頭）
皆々　出かけませう。
ト引張りよろしく、浪の音、本釣鐘の寺鐘にて、
ひやうし　幕

三人片輪（終り）

條立本道古跡尋大久保武藏鐙
脚色支道名所寫二荒山道中記

先其頃は四月中旬氏光公の御社參に時なるかなと上野が工む湯殿の奸計を奥方眞弓が諫めかね世を卯の花の垣に積靱負が非道の大工の拷問仔細は何と棟梁がともに鳴音のほとゝぎす二世を掛けたるお早が戀に妹背を結ぶ與四郎が三々くどくも藤右衛門に問はれてあかす普請の密事こは一大事と庄屋の訴へ才智はふかき井伊殿が人やそれとは白川侯と餘所へもらさぬ内膳の小事ならざる騷動に忠義はかたき石川がうはさにのこる駕籠の勇力

宇都宮紅葉釣衾

「宇都宮騒動」は明治七年十月、作者五十九歳の時、守田座に書卸された。材を實錄の宇都宮釣天井に仰いだものである。元來が寧ろ寂しい陰謀劇であるから、加賀騒動の如き成果を收めることは出來なかつたが、彦三郎の本多上野介、菊五郎の與四郎、左團次の石川八左衞門等は、後世當り役と稱せられるものが含まれてゐて、成功した御家狂言の一つとなつた。特に彦三郎が與四郎を訊問するに際して、温顏を以て事實を白狀せしめ、いよ〳〵庄屋藤左衞門に一大事を洩らしたことを確め、憤怒の餘り足蹴に掛けて蹂躙するの狀は、際立つた出來であつたことが傳へられてゐる。

書卸しの時の役割は、坂東彦三郎（本田上野介、井伊掃部頭）、尾上菊五郎（松平越中守、大工與四郎）、中村翫雀（將軍家光公、大工棟梁作左衞門）、市川左團次（石川八左衞門、川村靱負）、尾上いろは（本田の奥方眞弓、與四郎母おさが）中村仲太郎（庄屋藤左衞門、松平伊豫守）、坂東しう調（藤左衞門娘おはや）、市川子團次（板倉内膳正）、中村いてう（庄屋の下女お卷）、尾上梅五郎（岩淵段平）、坂東喜知六（門番佐五兵衞）、大谷門藏（梁田賴母）、坂東八藏（飯塚玄蕃）等であつた。

挿繪にしたのは、國周筆與四郎の責めである。中央彦三郎の役は本田上野介の誤記である。

大正十四年四月　　校訂者

宇都宮紅葉釣衾（宇都宮騷動――六幕）

序幕

本田家普請小屋の場
同　奥御殿の場

〔役名――本田左門之介、門番佐五兵衞、梁田頼母、飯塚玄蕃。本田の奥方眞弓、其他。〕

（普請小屋の場）――本舞臺三間の間丸太造り、作事下小屋の體。上の方丸木の鳥居注連を張り、續いて白壁の塀、所々に地口行燈を建て、小屋の内材木を積み、下の方材木を建掛け、上の方鳥居際松の立木、同じく釣枝、爰に八人大工のこしらへにて道具箱を重ね、上へ板を渡しちやぶ臺の心、酒肴を取散らし皆々鼻切に腰を掛け酒を呑み居る、家中娘○△□の三人立掛り大工の八、大工の六手拭にて鉢卷をなし踊つて居る、大工の二大醉にて、釘箱を鐵槌にて叩き拍子を取つて居る。伊勢音頭へ大拍子を冠せ、賑かに幕明く。

大一　これさ〱、今日のお目出度で、お上から御酒を下すつたといつて、あんまり騷ぎが大き過ぎるわ、まあちつと靜かにしろ〱。

大二　なに構ふものか、陽氣にやッつけろ〱。

大六 大八　さうだ〱、構ふものか、もつと、踊れ〱。（ト頻りに踊る、大工の三制して、）

大三　これさ〳〵肝煎が氣を揉むから、まあ〳〵靜かにしろ〳〵。それに御家中のお孃さん方が肝を潰して見ておいでなさるわ。もしお孃さん方、今夜はお賑かでよろしうございます、ちと此方へお出でなさいまし。

大二　やい〳〵よせ〳〵、此野郎は女を見ると世辭を遣やあがる、胡麻を擂るなえ、總別氣に喰ねえ野郎だ、ねえお孃さん。（トひよろ〳〵と側へ行かうとする、大工の一留めて、）

大一　これさ、お孃さん方に構ふな。皆さん、お參りでございますか。

○　今宵はお宮が賑かゆゑ、お參り申しに行くのぢやわいなあ。

大一　左樣でございますか、每年お屋敷の東照宮樣は、每年此樣にお祭りがございますかね。

△　每年十五日から十七日までは、此やうにお祭りがござんすが、取分け今年は賑かな事ぢやわいなあ。

大五　私共もお祭りに御普請が、あら方出來いたしましたので、此やうに澤山に御酒を下すつて、こんな有難い事はございませぬ。

大四　あゝ誠にいゝ心持に醉つた、此いゝ心持で、材木町あたりをひやかしたいな。

大六　さうよ皆出來まで御門留めで、御城外へ出る事がならねえから、久しく逢はねえうち、あの阿魔

が浮氣でもしやあしねえかと、そいつが氣になつて堪らねえ。

大二　此野郎うまく言やあがるぜ、手前達に女が惚れておたまりこぼしがあるものか。それはさうと羨しいのは與四郎だなあ。

○　其與四郎といふ人は、いつぞや御城下の芝居へ來た、尾上菊五郎といふ役者に瓜を二つに割つたやう、あのやうな好い男は、此お屋敷には一人もござんせぬ、なあ皆さん。

△　さうでござんす。今夜はこゝに見えぬが、何處ぞへ遊びに行つたかいな。

大二　お孃さん方も、毎日與四郎を張りにお出でなさいますが、あの與四郎は御城下には、立派な情婦がござりますから、あいつのことは思ひ切つて、私共になさいまし、誰でも直に、うんと言ひます。

大六　まあ試しに、情婦にして御覽じませ。

大八　なんだくだらねえ事を言ひねえ、お孃さんの顏へ紅葉が散るわな。

大三　なに紅葉が散る、おきやあがれ、お孃さんをいのしゝだと思つてるやあがる、此獸め。

大七　おつと、あんまりお前も脫れた中ぢやァあるめえぜ。

大三　此こびッちよめ、餘計な事を言やあがるな。お孃さん、こいつらあ人が惡くていけません。

△　ほんに氣散じなことぢやわいなあ。それはさうとあの與四郎には、どのやうな情婦があるぞいの。
大三　あの與四郎の情婦といふはッ（ト言ひかけるを大工の一袂をひかへ、）
大一　これ、どこに何ういふ緣引があらうも知れぬに、めつたな事は言はねえがいゝぜ。
大三　成程、こりやあ言はれねえわえ。
○　それでは今夜與四郎は、其人の處へでも逢ひに行つて、それで居ぬのかいなあ。
大三　實はこつそり、御門を脫けて。（ト大工の三うつかりいふを大工の一制えて、）
大一　あこれ、何處へ行くものか、肝煎ゆゑに棟梁と今お作事へ御酒を貰つた、其お禮に行つたのでござります。なあに何處へも行きやあいたしませぬ。
○　お作事へ行つたのなら、お宮へお參り申して歸りがけに、なあ皆さん。
△　さうでござんす、丁度お作事は通り道ゆゑ、ちよつとなりとも與四郎の、顏を見て歸りませうわいなあ。
□　ほんにさうでござんす。勿體ないがお宮より先きに、お作事へ廻らうではござんせぬか。
○　そんなら、さうしませうわいなあ。

大一　ほんにそれがようござります、お早くお出でなさいまし。
女形
三人　大きにおやかましうござりました。（ト行きかける、此時大工の二出て、）
大二　もし〳〵お孃さん方、與四郎よりは爰にまだ好い男がござりますぜ、よく見ておいでなさりませ。
○　お前の顏を見るよりも、お神樂堂へいつて、なあお大さん。
△　ほんにさうでござんす、ひよつとこの面を見る方が、よつほどよいわいなあ。
大二　なに、ひよつとことは。（ト大工の二顏をこしらへて出し、）こんな顏かえ。
女形
三人　ほんに、よく似て居ますぞえ。
皆々　成程こいつあよく似て居るわ、そつくりだ。
大二　こいつらまで、そんな事を言やあがるか。（ト打つ眞似をする。）
女形
三人　ほゝゝゝゝ、どれ、行きませうわいなあ。
　トやはり大拍子にて三人鳥居の內へはひる。跡合方かすめて大拍子。
大二　たうとうみんな爰に居る者を、お神樂堂の土川干にしてしまやあがつた。
大四　なあに、みんなぢやあねえ、お前ばかりだ。
大二　なに、おればかりだ、嘘をつけ、どいつもこいつも玩具箱だぜ。

大五　なあにお前の顔に、みんながかぶれたのだ。

大二　人を漆だと思つて居やあがる、忌々しい事をいふ奴等だ。

ト大工の二手酌で酒を呑む、大工の一工板と帳面と引合せ、何か書いて居る。

大三　それはさうと御普請も、あら方今日で出來上つたといふのだが、お前達は何う思ふか、おらあ何うも此間から合點の行かねえのは、御殿向は兎も角も、お湯殿の釣天井、何の爲に使ふものか知らん。

大四　棟梁からの言附ゆゑ、こしらへは拵へたが、後日に何ぞお祟りでも來ねえければいゝと思ふ。

大五　何が來やうと構ふものか、尤も急ぎの御普請ゆゑ、朝は手許の暗い内から、夜るは毎晩四つ頃まで、燈火を附けての夜業仕事。

大六　骨も折れるが仕上げになれば、一人前百兩づゝの御褒美を下さる約束、こんな仕事があるものか。

大七　あんまり話しがうま過ぎるから、實は跡が案じられる。

大八　うま過ぎるといへば、與四郎はいゝ娘をしめ込んだなあ。

大三　さうよ何でも宇都の宮の御領分の庄屋では、指折りの藤左衛門どの、聟にでもなれば仕合せだ。

大四　あの色事の始まりは、去年裏へ茶座敷の圍ひが出來た其時に、娘が見染めてそれで出來たといふ

噂、所が今度の御門留めで、久しく行かねえものだから、娘が案じて居たかして、さつきお出入の小間物屋が娘の文を持つて來た。

大五 是非今夜逢ひたいと、細々書いてあつたので、仕事もろく〳〵手が附かず、

大七 娘に逢ひ度い樣子をば、苦勞人の棟梁だから門番へ一升買つて、今夜こつそり出してやつたが。

大八 もう今頃は庄屋の娘と、こつそり痴話つて居るだらう。

皆々 あゝ氣の惡い話しだな。

大二 やい〳〵うぬ等、人の事を羨しがつて燒餠を燒かずとも、手前で情婦をする工面でもしろ、面あ見やがれ、べこ助め。

大一 これさ又大きな聲をして、此やかましい御門留めに、もし出して遣つた事が聞えて見ねえ、第一棟梁の迷惑にならあな。

大三 ほんにみんなにまで、どんな難儀が掛るも知れねえ、もう其話しは是れぎり〳〵。

大二 さあみんなおれに附合つて、もう一つやッつけろ。

大四 おゝ、それがいゝ〳〵。

皆々 さあ〳〵、景氣よくやッつけろ〳〵。

ト又酒盛りになる、やはり大拍子合方にて、下手より佐五兵衛袴一本差し、更けたる門番にて出來り、皆々を見て、

佐五　こりやあ大分賑かな事だの。

大一　御門番の佐五兵衛さんか、いゝ所へ來なすつた、一杯呑んで行きなせえ。

佐五　いや〳〵お目附方まで、急な御用があつて參るゆゑ、なか〳〵さうしては居られぬ。

大一　さうでもござりませうが、一つ位は上つておいでなすつてもようござりませう。

佐五　いや〳〵、なか〳〵さうしては居られぬ〳〵。

大三　それでも酒外れをしちやあ延喜が惡うござります、お急ぎなら猪口だけ受けて、お出でなすつておくんなせえまし。

佐五　折角其やうに申してくれるもの、達て斷るも異なものなれば、一つ馳走になつて參らうか。

大三　そんなら、上つて行つておくんなさいますか。

佐五　如何にも一つお相をいたさう。

皆々　さあ〳〵、此方へお出でなさいまし。（ト佐五兵衛小屋へ來り、やはり鼻切へ腰を掛け、）

大二　さあ〳〵駈附け三杯に、一本そつちへ渡しませう。（ト帳場藥鑵よりちろりを出し佐五兵衛に渡す。）

佐五　ありやうは、先刻お作事から酒の來た話しを聞き、かぎ附けて參つたて。
皆々　よくお出でなさいました、さういふ譯ならまあゆつくりと、お遣んなせえまし。
佐五　忝けないく、然らば遠慮なしに手酌でやらかします。あゝ甘露々々、お上の御酒ゆゑ拙者が不斷たしなむ、上澄などゝは格段の違ひ、腸へ沁み渡るやうぢやて。どれ、駈附け三杯。（ト又手酌で引掛け、）　時に棟梁どのは、居られるかな。
大一　今しがたお作事へ御酒のお禮に參りました、もう程なく歸つて參りませう。
佐五　そりやさうと、與四郎を棟梁の賴みゆゑ、御役人の目を忍んでそつと今夜出して遣つたが、必ず人に言つて下さるな、其替り又お前方もな、それ材木町とか又は坂の下あたりへ行く時は、一人づゝ位は又どうともいたさうが、今夜の事が飯塚どのゝ耳へはひると、直に意地惡の川村樣へ言附けるに違ひない、さうなる日にはわしは元より棟梁どのも、どの位難儀をするか知れぬゆゑ、必ずともに他人に言つて下さるなや。
大三　そりやあわし等も友達仲、あれが難儀になる事を決して人にやあ言ひませんから、佐五兵衛さん案じなさらねえがようござります。
大六　そりやあもうこいつの言ふ通り、友達はお互えの事でござります、もし又わつち等だつて情婦が

出來りやあ、お前さんの御厄介になる事もござります。
大四　こう〳〵大概にしておけ、手前達に情婦が出來てたまるものか、それはおれが言ふ事だ。
大六　あんまりお前だつて、さう言はれた義理でもあるめえ。
大一　これさ、又くだらねえ事を言ひ合つて居やあがる。もし佐五兵衞さん、わつち共の口から漏れる氣遣ひはござりませんから、安心しておいでなさるがようござります。
佐五　それを聞いて落着きました。胸が下つたせゐか、今呑んだ酒がどこへか行つてしまつた。どれもう一杯呑まうか。（ト此時大工の五向うを見て下手へ來り、又皆々の側へ來て、）
大五　いや、うつかり人の噂は出來ねえ、今向うから梁田樣と意地惡の飯塚樣が、どうか爰へござるやうすだ。（トこれを聞き佐五兵衞びつくりなし、）
佐五　なに、飯塚樣が來たと。
大八　成程、あれ〳〵向うから、箱提灯を持たして來るわ〳〵。
佐五　それは大變だ、見附けられては門番佐五兵衞扶持の喰上げ、どうか仕樣はあるまいか。
　　　ト徳利と茶碗を持つてうろ〳〵する。
大一　おゝ其徳利と茶碗を持つて、爰へお隱れなさいまし。

ト道具箱を積みし板を渡し、ちやぶ臺の心にて吞み居たりし下を敎へる。

佐五　成程これは大極上々の隱れ場所、九太夫でもなし、矢はり門番のことなれば、小栗のねずみと遣らかさうわえ。

ト下へ隱れ手酌で酒を吞む事。合方になり、花道より中間二人箱提灯を持ちて先に立ち、飯塚玄蕃羽織袴大小、梁田賴母羽織袴大小にて出來り、花道にて、

玄蕃　梁田氏お悅びなされい、御前樣のお好みなされし御普請も、あら方出來いたしたれば、事なう御滿足との事。

賴母　此度將軍家日光御社參の節、當城內へ御一泊、それまでには間に合ふまいと、存じの外なる大工の奮發、よくぞ出來いたしてござる。

玄蕃　それゆゑ今日大工どもへ、上より御酒を下されたるが、酒興の上、喧嘩口論でもいたしはせぬかと、見廻り步くも此身の役前。

賴母　拙者とても同じ事、皆出來の檢分相濟むまでは、故障があつては我々の無念。

玄蕃　如何にも左樣、然らば梁田氏。

賴母　飯塚氏。

兩人　いざ、御同伴仕つらう。（ト本舞臺へ來り上手へ住ふ、大工の一出て、）
大一　これは〳〵お見廻りのお役目、御苦勞に存じまする。
玄蕃　棟梁作左衞門も居るかな。
大一　へい、棟梁は先刻お作事成島樣へ、御酒頂戴の御禮に上りましてござりまする。
賴母　成程、先刻拙者成島宅で面會いたした。
玄蕃　棟梁が居らぬとならば、其方共へ申し聞す。援此度御殿からお湯殿まで、日限りよりは早い出來、
賴母　これと申すも其方共が、日夜出精いたせしゆゑ、上にも殊の外お悅び。
玄蕃　それゆゑ當座の御褒美として、御酒を下しおかるゝ、有難く頂戴いたせ。
皆々　へい〳〵有難うござります。
玄蕃　皆出來まで其方共が、他出を止めおきたるが、誰も出たものはあるまいな。
大一　へい、一人も御門外へ出ましたものはござりませぬ。
賴母　いやも、大工とはいへど稀なる氣質、棟梁が敎へゆゑ、他出もいたさず奮發なすは、良將の下に弱卒なしとは、是等の事であらう。いや天晴々々。
大一　へい〳〵、有難うござります。（ト此内大工の二大醉になり、大工一の袖を引き、）

大二　こう〳〵あんまり褒められるのもけんのんだぜ、百両の褒美がふいになりやあしねえか、ちよつと駄目を押しておきねえ。
大一　えゝ打捨つておきねえ、おれが承知だ。
大二　いゝか、けんのんだぜ。
大一　いゝといふ事よ。（ト大きく言ふ。）
頼母　あゝこれ、何事だ。
大一　へい、なあに宜しくお禮を申せと、申して居りますのでございます。
大二　へん、うまく胡麻を摺つて居やあがるわ。（ト此内玄蕃あたりを見廻し、人数をかぞへ、）
玄蕃　棟梁ともに以上十人、人数を数へて見れば、一人足りぬが如何いたした。
大二　そりやこそ寺子屋もどきの御詮議だ、退引ならねえ所だ、早く申し上げてしまひねえ。
大一　何だくだらねえ事を言はねえで、引込んで居ろ。
大二　いゝや引込んぢや居られねえ、おれ達の身に拘はることだ。ねえお役人様。
大三　これさ、引込んで居ねえといふ事よ。（ト無理に大工の二の手を取り入れる。玄蕃見て、）
玄蕃　こりや〳〵、其者をこれへ出せ。

大三　へい〳〵。（トもじ〳〵する。玄蕃中間に向ひ、）

玄蕃　これ〳〵、一人足りぬが、誰が居らぬかそれを申せ。

大二　へい〳〵與四郎が一人居りませぬ。（ト大工の一袖を引くを振拂ひ、）何だ〳〵、居ねえから居ねえと
　いふのだが何うした。

玄蕃　して、與四郎は何れへ參つた。

大二　へい、與四郎は。（ト言ひ掛けるを大工の一搔き分けて前へ出て、）

大一　へい、與四郎は、それ〳〵、棟梁と一緒に只今お作事へ參りました。

賴母　成程、左樣申せば與四郎は、作事で見掛けたやうであつた。

玄蕃　しかと作事へ與四郎は、參つたに相違ないな。

大一　へい、それに相違はござりませぬ。

玄蕃　然らば是れより作事方を詮議をなし、居らぬときは其方共は、上を僞る憎き奴、どいつも此奴も
　其分には差おかぬぞ。

大二　もし、差おかぬとおつしやつて、そでない時は私共を、あなたは何うなされます。

玄蕃　はて知れた事、上を僞る大罪人、檻倉を申し附けた上首を取るぞ。

大二　えゝ。(ト大工二びつくりなし首を押へる。)

玄蕃　われは一番正直さうな奴ぢや、有體に申せよ、有體に申さぬと、一番先きへわれが首をとるぞ。さゝ首が欲しくば眞直ぐに申してしまへ。彼等が申すには、與四郎は作事へ參つたと申すが、それは僞り、城外へ脱出したであらうな。さゝ、只今も申す通り首が欲しくば、眞直に申してしまへ、それともわれは首がほしくはないか、何うぢや〳〵。(ト玄蕃いろ〳〵思入あつて言ふ。)

大二　こんな南瓜頭でも、取られるのはどつとしません。此上は、包み隱さず申します。

大一　あゝこれ、滅多なことを。(ト留めるを聞かず。)

大二　首と釣り替だ、言はなくツてどうするものだ。

賴母　こりや〳〵、彼れは熟醉なせし樣子、取留めざる儀を申し、一向前後辨へぬ樣子と見えるわ。

玄蕃　いや〳〵、生醉本性違はず。有體に申せ、申さぬと、これ、首ぢやぞよ。

大二　えゝ申します〳〵、皆有體に申します。

大三　餘計な事をいふなと言ふ事よ。

大二　えゝ打捨つておけ。(ト振拂ひ。)何をお隱し申しませう、與四郎には情婦があつて、今夜城下へ脱出しました。

玄蕃　なに、與四郎めは城外へ、今宵脱けて參つたと申すか。

大二　慥に參りましてござります。

玄蕃　しかとそれに相違ないな、僞ると又うぬが首が飛ぶぞ。

大二　何しに僞りを申しませう、門番が相揩で出して遣つたに相違ござりませぬ。外の奴等はどうでもようござりますが、かう白狀した替り、私だけはどうぞ首を取る事は、堪忍なすつておくんなさいまし。

ト此以前より佐五兵衞臺の下にていろ〳〵思入あつて、トヾ天窓を着物の中へ入れ這ひ出して逃げにかゝるを玄蕃見て、

玄蕃　こりや〳〵、それへ參るは何者だ。（大工びつくりなし、）

大二　やあもう誰か首を落された。大變〳〵。（ト中間佐五兵衞の襟を捉へ前へ引出す。）

玄蕃　さあ、うぬ何者だ、首を出せ。（ト無理やりに佐五兵衞の首を出す、佐五兵衞顏を上げて、）

佐五　へい、私でござります。

玄蕃　おのれは門番の佐五兵衞だな。

賴母　何ゆゑこれに居つたるぞ。

玄蕃　察する所こやつめが、門を出したに違ひない。

大二　お察しの通り、門番が相摺でございます。

玄蕃　かねて御門留めを申し渡しおきたるに、僅な賄賂に目がくれて門を出したに相違ない。うぬ憎き奴、それへ直れ、手打ちにいたす。（ト刀の柄へ手を掛けるを頼母留めて）

頼母　あいや、お待ちなされい飯塚氏、豫て川村氏よりも嚴しく申し渡せし一儀、おのが身分に拘はる事を、何ゆゑあつていたしませうぞ。

玄蕃　いや／＼、日頃から慾に目のなき彼なれば僅な金に掟を破り、賄賂を取つてこつそりと門を出したに相違ないわさ、それぢやに依つて以後の見せしめ、眞ツ二つにいたしてくれるわ。

ト息込むを留めて、

頼母　彼れを手打ちになされては、掟を破りし罪人の、詮議の道を失ふ道理。

玄蕃　や。

頼母　それぢやに依つてお留め申した、何と左樣なものではござらぬか。

玄蕃　然らば殺すことは止めにして、拷問なしても吐かしくれるわ。これ老ぼれ、僅な賄賂に眼くらみ、門を出したに相違あるまいな。

佐五　いえ〳〵、左様な事は毛頭ござりませぬ。只今まで御門の張番をいたし居りましたが、御門外へ出ました様子は見受けませぬやうにござりまする、お祭りの事ゆゑに定めしそこらこゝらを、ぶら附いて居りまするに相違ござりますまい、なか〳〵もちまして私は、賄賂に酒を一升貰つて、それで內々御門を出すなどゝ申す事は決してござりませぬ、どうぞお許しなされて下さりませ、へい〳〵お願ひでござります〳〵。（ト頻りに詫びる。）

立番　やかましい、えゝやかましいわえ。

佐五　へい〳〵。

立番　こいつ中々一應では申すまい。これ大工ども、わいらも同類になつて出したであらうな。

大工　いえ〳〵、私共は一向に存じませぬ。

皆々

立番　存ぜぬとあれば其身の念晴れ。其方ども彼れを打据ゑ、此場に於て白狀させえ。

大一　畏つてはござりまするが、此儀ばかりは、

大工　御免なされて下さりませ。

皆々

立番　然らば其方達も、共々に賴んだか。

皆々　いえ〳〵、全く以て。

立番 然らば打つか。

皆々 さ、それは。

立番 え丶きり〳〵と打据ゑぬか。(ト皆々迷惑なるこなし、大工の二出て、)

大二 いえもしお役人様、こいつを打据ゑるには及びませぬ、棟梁からの頼みで、此門番が出したに相違ござりませぬ。わつちが證人でござります。

立番 しかとそれに相違ないな。

大二 これツぱかりも間違つた事のねえといふ、わつちやあきら几帳面の職人でござります。

立番 お丶よし〳〵、こりや佐五兵衛、いよ〳〵それに相違ないか。(ト佐五兵衛思入あつて、)

佐五 斯くなりまする上からは、何をお隠し申しませう、一通りお聞きなされて下さりませ。あの者が只今申しまする通り、棟梁が参りまして今夜據ない事で御城下まで與四郎を遣らねばならぬ、内々御門を出してくれとの頼み。え丶もめつさうな、何ぼ棟梁の頼みでも、川村様から嚴しい仰せ、どうして〳〵それはならんと、斯様に申しましたれば棟梁の申しますには、人一人の命にも拘はる事だから通してくれ、それに萬一お咎めのあつた時は、お前には罪は着せぬ、わしの越度にするからと申しますれど、私はならぬと強情を張りましたら、人の命にも拘はる事だから、

頼むを聞き入れないとはあんまりだ、お前も武士の端ではないか武士は情を知つて居るに、お前は人の命に拘つても出さないとはあんまり因業過ぎる、門番をやめて質屋の番頭にでもなんなせいなどゝ、種々に言ひますゆゑ據なく出しましてござります。尤も罪は棟梁が着る積りでござりますゆゑ、私はどうぞお許しなされて下さりませ。お慈悲、お情でござります。

ト頻りに手を合せ詫びる、

玄蕃　掟を破る不屆奴、われは定めて金を貰つたであらうな。

佐五　いえ〳〵どういたしまして、金などを取りましては濟みません、決して左樣な事はござりませぬ。

玄蕃　きつと取らぬと申すか。よい〳〵、こいつめを皆寄つて、打つて〳〵ぶちのめせ。

中間　はツ。(ト棒を持つて立掛るを見て、佐五兵衞驚き、)

佐五　あゝ、申し上げます〳〵、寄つて集つて棒でぶたれて、堪るものでござりますか。

玄蕃　早く申せ〳〵。

佐五　ありやうは棟梁から、一分貰ひましてござりまする。

玄蕃　僅な金に目がくれて大事を引出す不屆者、何用あつて與四郞は、城外へ參つたか、通すからは存じて居らう。さあ、それを申せ、えゝ、ぬかさぬか。(佐五兵衞の襟上をとつてこづく。)

賴母 察する所與四郎が城外へ出でたるは、豫て一人の母あつて孝行なるよし聞き及ぶ。定めて母の病氣とでも申す事で參つたか。大工ども、左樣であらうがな。

大一 へい、實は母の病氣ゆゑ、それで參つたに相違ござりませぬ。

賴母 それに相違ないな。

皆々 へい／＼、それに相違ござりませぬ。

賴母 母の病氣とある事なら、此度は差許す。以後は決して相成らぬぞ、

玄番 あいや梁田氏、假令母の病氣にもせよ、一旦止めおいたるを願ひもいたさず外出せるは、關破りも同然ゆゑ其分には捨ておかれぬ。先づ差當る門番佐五兵衞、うぬは大罪覺悟いたせ。それ、佐五兵衞を引ッ括れ。

中間 はッ。(ト佐五兵衞へ繩を掛ける。)

佐五 そんなら私も、罪は脫れませぬか。あゝ情ない事になつたなあ、はあゝゝゝゝ。

ト泣く。大工の二手拭にて淚を拭いてやりながら、

大二 これ、お慈悲を願つてやるから、神妙にしろよ。

玄番 大工共も、其分では相濟まぬぞ。

大一　すりや、此上に、
大工
皆々　私ども〳〵。
玄蕃　一人なりとも外出なしては、かねての密事が。
頼母　や。
玄蕃　いや、密々ならぬ彼等の越度。きつと蟄して、御沙汰を待て。
大工
皆々　え〻情ない目に逢ふものだ。
玄蕃　何にせよ川村氏が他出ゆゑ。
頼母　歸宅ござらば評議なし、
大一　どうかあなたのお執成しにて。
頼母　承知いたした。
玄蕃　それ、佐五兵衛めを引立てい。
中間　はッ、立ちませい。（ト佐五兵衛を引立てる、佐五兵衛思ひ入あつて、）
佐五　一分ほしいばつかりに、斯うした憂き目の縛り繩。
玄蕃　何と。（ト息込むを頼母留める。）

佐五　金が敵の、(ト行き掛けるを中間縄を引く、佐五兵衛膝を突くを木の頭)世の中ぢやなあ。

ト時の太鼓にて、此道具廻る。

(奥殿の場)――本舞臺三間の間、中足の二重、銀襖上下杉戸、本田家奥殿の模様、爰に○△□の三人腰元にて居並び、琴唄の合方にて道具留る。

○今日は東照宮様のお祭りにて、御家中は殊の外賑はふとの事。

△地口やまたぎ、作り庭立花も、大層綺麗なと最前小使ひの話し。

□それに又お神樂が、芝居に似て面白いとのこと。

○其芝居といへばお湯殿の御普請に參る大工のうち、與四郎といふ若い者は、役者のやうぢやといふ噂。

△それゆゑ此間隙見をいたしましたら、成程江戸から土産に貰ふた、菊五郎の繪に生寫し。

□聞けば御家中の娘御や又は乳母子守まで、御普請小屋へ朝から晩まで、附き通しぢやとの事。

○町と違うて屋敷住ほど、男を見たがるものはござんせぬ。此やうな男の話しも、奥ではめつたに出來ぬのは、此間から奥様にはお顏の色も常ならず、何か深い御心配のある御樣子に見えますわ

いなあ。

△　お側勤めは不器量者ゆゑ、お手の附かう氣遣ひなければ、御苦勞遊ばす事はないが、何か外にお心に掛る事があると見えまする。

□　何一つ御不足のない御身にも、斯うした事のあるといふは、

○　うき世は苦勞の、

皆々　絶えぬものでござんすなあ。（ト花道より侍出來り、）

侍　はツ、申し上げます。只今これへ若殿樣、奥樣のお見舞としてお入りでござりまする。

と引返してはひる。

○　若殿樣のお入りの趣き。

三人　どれ、奥樣へ。（ト立ちかゝる、此時奥にて、）

眞弓　左門之介が參りし由、知らせに及ばぬ、聞いたわいなう。

ト三味線入り序の舞になり、花道より左門之介上下差添、小姓に刀を持たせ出來る。是れと一緒に奥より眞弓、奥方のこしらへにして、女小姓一人附き出來る。

△　若殿樣には、ようこそお入り、

○　先づ〳〵これへ、

三人　お通り遊ばされませう。

左門　母上には御不例のお厭ひもなく、是れまでの御出座近頃以て祝着至極。

眞弓　左門之介、ようこそ。さゝ、是れへ。

左門　然らば御免下されい。（ト左門之介舞臺へ來り、二重下手へ住ひ、）母上樣には此程より、御不例のよし承り、早速御見舞に上るべき所、父上の御用繁く、延引の段幾重にも、御免なされて下さりませ。

眞弓　見舞を受ける程にもないが、兎角欝々胸を閉ぢ、枕に附けぬ我が苦しさ。推量してたもひなう。

左門　して御持病のお癪氣と、申すやうなる事にござりまするか。

眞弓　只心氣の滯り、容易な事では開くまいわいなう。

左門　醫師良庵の申すにも、御病根はたゞお氣の結ぼれなりと申しまするが、全く左樣でござりますか。

眞弓　さあ醫師にも知れぬ我が病、案じてたもるそなたゆゑ、他人には言はれぬ胸の切なさ、そなたに話して聞かさうわいなあ。これ皆の者、暫く次へ。

皆々　畏りました。（ト腰元、小姓、女小姓皆々下手へはひる。）

左門　して母上の御病根は。

眞弓　他聞を憚る一大事、左門之介近う。

左門　はッ。（ト摺寄る。眞弓四邊を見廻して、）

眞弓　わらはが病の起りをば、これ左門聞いてたもひなう。わらはが病の根といふは外ならず、先達て駿府より平岩殿がお出での節、奥の數寄屋で終日の御密談、何事なるかと襖の蔭へ身を寄せて立聞きせしに、御本腹の駿河樣を世に立てんと、聞けば聞く程おそろしいお企て、神君樣の御指圖にて御妾腹の氏光樣が御惣領ゆゑ順道に、つひに御家督なしたまひ、今三代の將軍と仰がれたまふを遺憾に思ひ、此度日光御社參に當城內へ、お泊りの御沙汰を幸ひ奸計にて、今將軍家と仰がるる君を弑し奉らんと、新たにしつらふ怪しの湯殿、首尾よう事を仕果するとも、保元平治の戰ひに、野間の內海で長田の庄司正しき主君の義朝を、討ちしが何よりよき手本、昔が今に叛逆の榮えし例は當てなし、それゆゑ此程再度まで御諫言を申せしかど、一旦思ひ立ちし大望、いッかな心を飜さぬと以ての外の御挨拶、先祖の武功も當代にて水の泡と消え行くは、是非もなき事とは言ひながら、武勇も人に勝れたる智勇兼備のわが夫も、如何なる天魔が魅入し事かと、思ふ心が結ぼれて、遂には病の根となりて斯かる惱みをするわいの。家を思ひ夫を思ひ、そなたを思

ひ末の世まで、主殺し不忠者の汚名を殘す口惜しさ、身も世もあられぬわらはが思ひ、左門之介推量してたもひなう。
ト愁ひの思入。

左門　御病根を承はり、失禮ながら母上には左樣に思召すは、こりや至極御尤も、然し耆婆扁鵲の配劑でも、御全快の儀は覺束なし。

眞弓　さあ、それぢやに依つてわらはが病、本復さすは其方ならで外にはない。

左門　ふむ、拙者ならでは母上の、御病氣御全快のならざるとは。

眞弓　そなたは今より父上の御側へ行きて御諫言を申し上げ、そら怖しき企て事を思ひ止まりたまひなば直にも治する我が病、此母を殺さうと生かさうと、そなたの心たゞ一つ、又二つにはお家の爲、これ、わしが一生の頼みぢやわいなう。

左門　甚だ以て不孝の至り、母上の御身思はぬに似たれども、假令御病氣重らせたまふとも、此御諫言は相成りませぬ。

眞弓　子として親へ諫言の、ならぬといふは何ゆゑなるぞ。

左門　さ、其御諫言のならぬと申すは。

眞弓　ならぬといふは、はゝあ聞えた、父上のお叱りがこわいのか。これ、侍の子と生れながら大功は細瑾を顧みずと、一時のお氣に逆らふとも、國家の爲の諫言が、ならぬといふはえゝこなたは、腑甲斐ない生れぢやなあ。（ト思入にていふ。）

左門　いや、全く以て御立腹を、恐れて申し上げぬにはござらねど。

眞弓　左なくば御諫言申し上ぐるか。

左門　さあ、それは。

眞弓　御立腹がこはいのか。

左門　全く以て。

眞弓　諫言ならぬ仔細を聞かうか。

左門　さゝそれは。

眞弓　さあ、

左門　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

眞弓　若年ながらも一國一城の嫡男、しかと返事をしやいなう。（トきつと言ふ、左門之介思入あつて、）

左門　此上は是非に及ばぬ、御諫言のならぬ仔細、申し上げるでござりませう。
眞弓　して其仔細は。
左門　拙者も父上と、同意でござる。
眞弓　やあ。（トびつくり思入、左門之介きつとなり、）
左門　御本腹たる駿河公、世に埋れ木となりたまひ、御妾腹たる氏光公三代將軍と仰がれたまふを見る
　無念さ、窃に弑して駿河公を、將軍に仰ぎ奉らん我々が企て。
眞弓　そなたはよもやと思ひしに、扨は父上と同意なるか。
左門　如何にも、善惡ともに子は親に、附くが則ち武門の習ひ。
眞弓　御先代の御武功も、泡と消え行く本田の滅亡。
左門　えゝ忌はしい事仰せあるな、百發百中計略のなるは必定、本望遂ぐるは近きにあり。假令計略圖
　に當らず父諸共に一命を、戰場に於て捨るとも、主君と頼む駿河公へ、忠義の爲ゆゑ何厭はん。
眞弓　すりや、どのやうに申しても。
左門　いつかな變ぜぬ丈夫の魂、說得あるは無益の至り、重ねて諫言御無用々々。（ト眞弓きつとなり、）
眞弓　もう此上はそちは頼まぬ、叶はぬまでも今一度、わらはが參つてお諫め申さん。

ト立上るを、左門之介留めて、

左門　あいや、如何程お諫めあるとても、鐵石心の御父上、何とてお用ひなされませうぞ。

眞弓　お用ひなくば其座を去らず、（ト懐劍に思入あつて、）それ。（ト又行掛けるを左門之介立廻つてへだて、）

左門　すりや、どうあつても母上には。

眞弓　留め立てせずと、そこ退き居らぬか。

左門　やあ達つてとあれば是非に及ばぬ、父には母は替がたし。

眞弓　やあ憎き左門が其一言。誰そあるか、引立てい。（ト奥にて、）

腰元
六人　はあゝ。

ト上下より腰元六人對の衣裳、紅絹の襷鉢卷、紅葉の枝を持ち出來り、

腰元　奥樣の御意なれば、若殿樣。

皆々　御免下され。

ト左門之介六人を相手に、扇にて立廻りきつと見得。是より誂へ唄入の鳴物になり、立廻りよろしくあつて、トヾ六人左右へ居並び見得。

眞弓　皆引きや。

六人　はあゝ。（ト下に居る。）

眞弓　かほどの手練を得たる上は、いで其時は花々しく、敵を引受け討死なさんが、末世へ汚名を殘すのが、母は悔しう思ふわいの。

左門　そこを何卒思ひ返され、母上にも父上諸共、此の企てに御一味あるやう。

眞弓　いゝや、不義の榮華は好まぬわらは、一味などゝは思ひも寄らぬ。

左門　すりや、大望の妨げとなる上は、母上とて容赦がならうか。

眞弓　假令命を捨つればとて、母は美名を殘す心。

左門　ではござらうが、夫に附くが、

眞弓　えゝ穢はしい。（ト立つを左門之介裾を捉へる、眞弓振拂ふを木の頭、左門之介きつとなる。）

六人　やあ。（ト立掛る。）

眞弓　聞く耳持たぬ。

　　　　トきつと思入。早舞にてよろしく、

　　　　　　　　　　　　　　ひやうし　幕

二幕目

鹽谷村庚申塚の場
庄屋藤左衞門內の場
本田家城外の場

〔役名――大工與四郎、川村靫負、庄屋藤左衞門、中間くづ八、同づぶ六、飯塚女番、百姓三人、捕手四人。藤左衞門娘お早、下女お牧等。〕

（庚申塚の場）――本舞臺三間の間一面の平舞臺後黑幕、上手小高き石垣の草土手、此上傍示杭「從是日光 道中宇都宮宿」と記し、此續き石の六地藏、庚申塚後藪畳、下寄りに葭簀を卷きたる出茶屋、床几二脚ほど積重ね、日覆より十五日の月をおろし、上下松の立木、同じく釣枝、總て日光街道鹽谷村庚申塚夜の體。爰に○着流し尻端折り草鞋にて、帶に燒印を押したる木札を挾み、鹽谷村といふ弓張提灯を持ち、△□同じ裝鍬をかつぎ立掛り居る。此見得時の鐘、在鄕唄にて幕明く。と三人提灯の灯にて煙草を呑みながら、

△□何と、今日位草臥た事はありましッけい。

○それは其筈さ、明日公方樣が日光へ御社參になるに附き、道路掛りのお役人が此街道へ出張して往來筋を測量なされ、道の高低を直せといふ、村の者へ嚴しい言附。

△お負けに何でも今夜中に仕上げてしまへと道端へ、篝を焚いて檢分するので、煙草を呑む間も休

みなし、こんな泣きな事はありやあしねえ。

□其泣きで思ひ出したが、泣子と地頭に勝たれぬと、たうとうこけの一心で道普請を仕上げたゆゑ、これから先きはわし等が體、草臥休めをせねばならぬ。

○其草臥の拔けるやう、今日は庄屋の藤左衛門どんに、風呂があるからはひりに來いと、さつき竹法螺で知らせたから、是れから行つてうだつて來よう。

△いや、わしは風呂でうだるより角酒屋で片足もちやげ、ぬたかお芋で濁酒をぐつと一杯呑みたいものだ。

□いや成程心はまち〳〵だ、わしは又喰氣より、是れからずつと材木町の、あいつの處へしけこんで、顏を見せて遣らねばなるまい。

○成程三人寄れば文珠の智慧と、酒と女とすいい風呂と、品は替れど仲間同士、わしらも共々附合ひませうよ。

□もうわしの方へ荷擔をしたのか、成程惡事は染み易い。

△其替りには別品を、どうかわしらに取持つて下さい。

□そこはずつとほうしのはるだ。

○　承知の腹だといふ洒落で、其場へ行つて流山は眞平だ。
□　そんな甘口なわしではないから、關宿船に乘つた氣で、水に任しておくがいゝ。
兩人　いや、川流れを出すのは、猶々あやまつた。
三人　はゝゝゝゝ。

トやはり右の合方にて、上手よりお牧庄屋下女のこしらへ、前掛駒下駄にて出來る、三人お牧を見て、

○　や、そこへお出でのは、庄屋のおまきどんぢやあないか。
お牧　おゝ是れは皆の衆、今お歸りでございますか、嘸まあ今日はお疲れなさんしたらうな。
△　いやもう大變に草臥ました、やう〳〵の事で道普請もしまつて、今歸る所でございます。
□　さうしてまだ、お家の湯はありますかね。
お牧　今夜は旦那さまのおつしやり附けで、皆さんのお出でまでは拔かずに待つて居りますから、少しも早くお出でなされませ。
○　それぢやあ是れから歸りがけに、馳走になつて行きませう。
お牧　もし、どうぞわたしが皆さんに、爰でお目に掛りましたを、家へは默つて居て下さりませ。
○　はゝあ、爰で逢つたを默つて居ろとは、あゝ分つた、扨は情人を待つて居るのか。

お牧　いえ、なか〳〵そんな譯ではござんせぬわいな。

○　何だか、其言譯は當てにならない。

□　あゝ、どんな情人が遣つて來るのか。（ト○□お牧に見惚れ、）

○　えゝ畜生め。（ト思はず六地藏の天窓を打ち、）あいたゝゝゝ。

○□△　何をしたのだ。

○　是れは皆さん、大きに麁相をいたしました。（ト△□に詫る。）

兩人　いや、そゝつかしい噂話しだ。

○　おゝ、こりやあ間違つた。

三人　はゝゝゝ。（ト矢張り右の合方にて三人上手へはひろ、お牧跡を見送り思入あつて、）

お牧　いつぞや家へ仕事にお出での、同じ所の村に居る、あの大工の與四郎さんをお孃さまが見初めてから、一度が二度と緣の端、お世話申した其内に、此間より御城内へ急な仕事が始まつて、一晩たりとも他出はならぬと堅いお上の言渡しに、ちよつとお目に掛ることも出來ず、丁度幸ひ今日家へ御用を勤める小間物屋さんが商ひにお出でゆゑ、お孃さんから樣々と是非今夜來て下さんすやうお文を書いて屆けたゆゑ、もう爰へ來なさりさうなものだが、掟厳しい御城内は定めし出にく

い事であらうが、まあ何にしろ爰で待合して見ようわいな。

　トお牧花道附際へ行き向うへ思入、おけさ節になり、上手よりぐづ八紺看板一本差し中拔草履の裝にて酒に醉つたるこなし、づぶ六同じ裝にて、一升樽と竹の皮包みを提げ、千鳥足にて出來り、

ぐづ　やい、づぶ六、それだから後の一升は止せと言つたのだ、それを無暗に呑めもしねえに、ぐい〳〵後を引くから、たうとう今夜は時がおくれて門限になつてしまつた、是れぢやお屋敷へ歸られねえぞ。

づぶ　歸られねえのは手前のせゐだ、酒ばかりで歸ればいゝに、やれ材木町へ行つてひやかさうか、池上町へ行かうのと、出來もしねえ女の方へ掛合ふから、其内に、たうとう時刻がおくれたのだ。

ぐづ　どうせ斯うなりや二人同罪だ、是れから元締の所へ行つて、詫びを賴むが上分別だ。

づぶ　がうせい弱くなりやあがつたぜ、そんならなるたけ早く出掛けよう。さあ、ひよろ〳〵せずとしつかり歩けよ。

ぐづ　何だ、そりやあ手前の事だ、おれは大丈夫醉ひはしねえが、手前の足許はまるでよい〳〵のやうだ、あゝよい〳〵。

づぶ　やあ、あいこでせ。

ト兩人拳を打ちながらひよろ〳〵して下手へ來る、お牧これを見て跡へ下り上手へ逃げに掛るを、
兩人見附け、

ぐづ　おい〳〵、姉え待ちねえ〳〵。

お牧　はい、ちつと急ぎの用事がございますから、さうしては居られませぬ。〔ト又行き掛るを、〕

兩人　どつこいしよ、まあ待ちねえといふに。〔ト兩人お牧の袂を捉へ、眞中へ挾み、よく〳〵顏を見て、〕

ぐづ　やい、づぶ六ちよつと見や、第一等といふ代物だぜ。

づぶ　こりや爰らに珍らしい、田舍に稀なぼつとりもの、こいつあ只は見脫せねえ。

ぐづ　どうして〳〵見脫せるものか、おれも是れまで方々の部屋を渡つた折助だが、こんな女に出逢つたことは、只の一度もありやあしねえ。

づぶ　おれも今まで駿府の城で、久しく奉公して居たが、毎晩々々二丁町をぞめいて歩いて知つて居るが、お前のやうないゝ女は、どうして〳〵一人もねえ。

ぐづ　かう姉え、何も後生だ、おらッち二人に、たんとの事は言はねえから、一膳づゝ振舞つてくんねえ。久松もどきで見込んだからは、

づぶ　幾らお前が喚いても、聞き手は麥や桑畑、是れから宿へ行くまでは、人家の稀な往來中、もう叶

はぬとあきらめて、おらッち二人の念佛講で、爰で往生してしまへ、とさあ凄んだ事は言はねえから、何にも言はずに、おい姉え。

兩人　どうぞ言ふ事を、聞いてくんねえ。

お牧　其思召しは有難うはござんすが、急な用事で塚原まで參る者でござりますから、御縁があつたら又その内、どうぞ今晩の所は、御免なされて下さりませ。

ぐづ　そんならおら達二人して、こんなにお前に頼んでも。

づぶ　それでもいやだと斷るのか。

お牧　どうぞ是ればかりは、お助けなされて下さりませ。

ぐづ　こつちも助けてやりてえから、極樂往生念佛講と、情を掛けりやあ附上り、堪忍しろとは押しが強い、もうかうなりやあ地獄の責、どこぞ其處等の辻堂へ、しよびいて行つて弄まうか。

お牧　さあそれは。

づぶ　それとも素直に。

お牧　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵。

ぐづ　え丶面倒だ、やッつけろ。

づぶ　合點だ。

ト禪の勤になり、お牧逃げようとするを兩人追廻し、ちよつと立廻りのうち、お牧あれえ〳〵と聲を立て泣く。三人立廻りのうち、花道より與四郞、頰冠り好みの着附、三尺尻端折り藤倉草履にて出來り、花道にて此聲を聞附け、思入あつて直舞臺へ來り、此中へはひり、ぐづ八づぶ六を突き退け、お牧を圍ふ、お牧與四郞を見て、

お牧　や、與四郞さんか。

與四　あこれ。(ト押へる、此名に兩人心附き、與四郞を透し見て、)

兩人　や、わりやあ大工の與四郞だな。

與四　え。

ぐづ　掟嚴しい御城內を、一人たりとも作事の者は、外へ出すなと堅い言附け、それをおぬしは夜る夜中八町餘りの棒鼻まで。

兩人　どうして屋敷を脫けて出た。(ト是れにて與四郞ぎつくりして氣を替へ、)

與四　是れはどなたかと思つたら、本田樣のお中間衆でござりましたか、爰で二人に見附けられては、何とも面目ない始末。

ぐづ　どうした始末か知らねえが、急御用の御普請で、出來までは一人も大工は門から外へ出すなと、お作事方の川村樣から、中間小者に至るまで、嚴しいお觸のあつたのに。

づぶ　たつた一人で出て來たのは、柵矢來でも乘越したか、どつかの隅を這ひ出したか、實は今夜おら達も二人で晝から遣り過ぎて、御門限を忘れてしまひ、今更屋敷へ歸られねえのだ。

ぐづ　どうして爰へ出て來たか、どこぞにこつそり拔けられる穴があるなら敎へてくれろ。

與四　どうして〳〵御城內は、たゞは出られぬ御門なれど、わしの母が大病で度々家から願ひに來るゆゑ、川村樣へ內々で、職人中で御門へ願ひ、こつそり拔けて來たのだから、どうぞ二人もわしの事は、內々にして下さりませ。

ぐづ　そりやあ內證にしてやらうから、文句なしに酒を買へ、斯うして酒も肴もあるが、肴といつたらお約束の鮎の鹽燒、干瓢の煮染、酒は地酒で天窓へ上り、たまにやあちつと上酒でも腹へ入れにやあ續かねえ。

與四　そりや內々にさへしてくれるなら、酒を買ふのは易い事、定めて是れでは不承知だらうが、是れを

取つて二人とも、一杯呑み直して下さいまし。

ト與四郎煙草入の間より二朱金を出し紙に包みやる。ぐづ八開き見て、

ぐづ　おい〳〵こりやあ二朱ぢやあねえか、是れぢやたつぷり呑めやあしねえぜ。

づぶ　口ふさげの事だから、せめて水戸廻りの水呉で、一杯やるだけ出すがいゝ。

與四　そりやあお前方が言はねえでも、持合せて居る事なら、器用に二人へ呑ませるが、何をいふにも棟梁からまだ作料を貰ひませぬから、それで二人へ頼みますのさ、其替り屋敷へ歸り、拂ひが下つた其時は、しつかりこんたに奢りませう。

ト與四郎お牧に早く逃げろといふ思入をする、お牧心得そつと上手へ逃げてはひる。

ぐづ　さういふ事なら仕方がねえ、安いものだが今夜の所は、二朱で負けてやらうから、其替り作料を取つた時には奢らせるぞ。

與四　そりやあ言はずと、胸にあります。

兩人　とんだ溜飲だ、はゝゝゝ。（トづぶ六四邊を見て、）

づぶ　そりやあさうと肝腎の、今の女はどこへ行つた、あいつを爰で逃した日にやあ、今夜一晩繋ぎ切れねえ。

ぐづ　與四郎、おぬしは知らねえか。
與四　今まで後に居ましたが、つひ話しに實がいつて、見失つてしまひましたが、何でもてつきり宿の方へ、逃げて行つたに違ひございませぬ。
ぐづ　折角今夜辻堂か瓜畑の番小屋で、抱いて寐ようと思つたに、逃がした日にやあ詰らねえ。
づぶ　どつちへ行つたか、早く追つかけろ。
與四　わしは爰で頑張つて居ますから、二人で早く宿の方へ追掛けて行つたなら、きつと逢ふでござりませう。
ぐづ　それぢやあ與四郎、奢るのを忘れるなよ。
與四　えゝ大丈夫でござります。
ぐづ　づぶ六一緒に來い。（トつかく＼と下手へ行く、づぶ六は後にて樽の口より酒を呑み居る、ぐづ八是れに心附ず、）どつこい忘れた、酒と肴を殘して來た。（ト跡へ戻るを、）
づぶ　安心しろ、爰に御持參だ。
ぐづ　素早い奴だぜ、もう遣つて居やあがる、おれはすつかり覺めてしまつた。
づぶ　是れから行つて女をつかまへ、三人五德でやり込まうぜ。

ぐづ　さう旨く行けばいゝが。

ト兩人捨ぜりふにて足早に下手へはひろ、與四郎跡を見送り思入、後藪疉の蔭より、以前のお牧窺ひ出で、

お牧　與四郎さん。

與四　これ。（ト四邊へ思入あつて、）又もや爰へ來ぬうちに。

お牧　少しも早く裏口から。

與四　こつそり忍んで。

お牧　さあお出でなさいまし。

ト時の鐘、與四郎頰冠りをする、此時懷より鑑札を落し、お牧先きに上手へはひろ。やはり右の合方になり、下手より以前のぐづ八づぶ六四邊を見ながら出來り、

ぐづ　月の光りで先きの方を、どう見渡しても玉が知れねえ、こいつァてつきり與四郎が、今の女を知つて居て、引廻したに違ひねえわえ。

づぶ　まあ兎も角も無駄にして、雀の宮の方へ七八丁、ぶら〱行つて搜して見よう。

ぐづ　こんなどぢを組んだことはありやしねえ。（トこなしあつて上手へ行きかけ、ぐづ八落散りありし鑑札に

躓き、思はず取上げ月影に透かし見て、）や、こりやお作事から職人へ銘々渡つたお上の鑑札、どうして是れが往來中に、こいつあ不思議な事だわえ。

づぶ　何にしろ此鑑札を持つて居る職人達は、普請の出來するまでは、一切外へ出られねえ筈だが。

ぐづ　こいつあ何でも與四郎が、今の女を引廻して、どこへか出掛けた其時に、落して行つたに違ひねえ。

づぶ　丁度女の意趣晴らしに、こいつを種に酒呑代、こいつあ物を言ひさうだわえ。

ぐづ　何にしろ今の娘を逃したのが殘念だ、どうせ今夜は暇ツかき、もう一遍尋ねて見よう。

づぶ　そいつア何より上分別だ。

ぐづ　あゝ御神酒の氣がなくなつたら、豪勢に寒くなつた。

（ト捨ぜりふにて上手へはひる、時の鐘合方になり、花道より藤左衛門羽織袴庄屋のこしらへにて、弓張提灯を持ち出て來る。少し跡より川村靱負ぶつ裂き羽織袴大小にて出來り、花道にて思入あつて、

靱負　それへ參るは、庄屋藤左衛門どのではないか。（ト是れにて藤左衛門振返り、火影に透し見て、）

藤左　是れはどなたさまかと存じましたら、御城内の川村さまでござりますか。

靱負　如何にも川村靱負でござる、てもよい所で面會のいたした。

藤左 して川村さまには夜中と申し、何れへお越しでござりまする。

靱負 丁度幸ひ其方の、宅へ參る所である。

藤左 へえ、そりや何御用でござりまする。

靱負 宅で話すも他聞の憚り、幸ひ向うに晝の茶見世、あれへ參つて話すであらう。

藤左 お供いたして參りませう。（トやはり右の合方にて藤左衞門先きに案内して舞臺へ來り、重ねある床几を一脚よき所へ直し、靱負これへ掛け、藤左衞門は下手に手を突き）して私へ御用とは。

靱負 いや、其挨拶にては申しにくい、そちも是へ掛けたがよい。

藤左 いえ〳〵中々もちまして、御領主樣の御奉公に、我々風情が同座いたすは、恐れ多うござります。

靱負 いや、其儀は決して心配なく、どうか是へ掛けてくりやれ。

藤左 左樣なれば、御免なされて下さりませ。（ト是れにて藤左衞門床几へ掛け）して、御用とおつしやりまするは。（ト合方になり）

靱負 其用事と申すは外でもない、此程より同家中飯塚を以て申し入れし、其方の娘お早、疾うより身共が思ひを掛け是非とも妻に貰ひ度く、度々申し入れたれど今に於て返事もなく、日毎身共も待兼しが、晝は御上の御用繁く、休暇の外に私用ならねば、夜中も厭はず自身に參り、豫て賴みし

縁邊の、否やの返事を聞かん爲。

藤左　何御用かと存じましたら娘早が儀でござりまするか、成程飯塚様よりお話しは是れまで度々ござりましたが、まだ年端も行きませぬ田舍育ちの世間見ず、子供同様の不束者を、御身分のあるあなた方より望まるゝは親の面ばれ、早速お受けのいたしたうはござりますれど、御存じの通り私には、たつた一人の娘ゆゑ家督をさせねばなりませぬ、それゆゑ先日玄蕃様へお斷りを申しましたが、まだあなた様へ先方から、お話しはござりませぬか。

靱負　いや其返事は聞いたれど、再應そちに頼みくれと、くれ〴〵も頼みし後は、まだ身共へ挨拶なきゆゑ、態々今宵參つたも、面目ないが川村靱負、そちが娘にぞつこん執心、どうも思ひ切られぬゆゑ直き〴〵頼む此婚姻、急速承知のいたしくれなば、言はずとしれたこなたは親、惡いやうには決していたさぬ、口廣い事をいふやうだが本田の家は身共次第、此領地の大庄屋に出世さするは瞬くうち、其證據と申すのは、主人本田は駿府の後見、此度日光御社參御用相濟む其時は、再び駿府へ歸られ跡を預る川村靱負、諸事某の勝手次第、其時こそは活計歡樂、爰の所を得心あつて娘早へも申し聞け、何卒縁談お頼み申す。（トよろしく兩手を突いて頼む、藤左衛門當惑の思入にて）

藤左　其思召しは有難うはござりますれど、前々も申し上げまする通り、一人娘の事ゆゑに家督させね

ば私が、先祖へ對して濟みませぬ、それゆゑどうも此事ばかりは、御返事は出來兼ねまする。

靱負　さあ其先祖へ濟まぬのも、只今申せし立身出世、假令相續いたさいでも、身の後榮を思はれなば、先祖も冥府で悦ぶ道理。

藤左　成程その理は御尤も有難うはござりまするが、假令我が子といひながら、縁談ばかりは親の自由に、ならぬものでござりますれば。

靱負　さあ、そこを娘へ說得あつて、是非とも身共へ縁談を。

藤左　くどう申すやうなれど、一人娘にござりますれば。

靱負　すりや、どうあつても得心せぬとか。

藤左　此儀ばかりはお斷り申し上げます。（トきつぱり言ひ放す。）

靱負　む〻。（ト思案の思入、藤左衞門氣を替へ、）

藤左　又明日は上樣が、此街道を御成りゆゑ、小前の者へ申し附ける、用事もあれば失禮ながら、是れにて御免下さりませ。（ト挨拶をして上手へ行き掛けるを靱負引留め、）

靱負　どうかそこを今一應、身共が是れにて申す事を。

藤左　はて、上の御用でござりまする。（ト振拂つて上手へはひる、靱負跡を見送り忌々しき思入あつて、）

靭負　娘がほしいばつかりに、關係人を差おいて手を下け示談いたすのに、手前勝手に聞き入れず、さりとは憎き藤左衛門、村の束ねをなすこそ幸ひ、今に彼れが越度を拵へ、庄屋役を退役させみぢめを見せて腹癒せせん。思へば〳〵、忌々しい親仁だなあ。

ト きつと思入、上手より以前のぐづ八、づぶ六出來り、後に窺ひ居て、

兩人　川村様。

靭負　や、おゝ其方どもは、どうして爰に。

ぐづ　はッ、先刻道にて怪しき奴、御城門より忍び出で、此邊へ參りしゆゑ、跡を附けて樣子を見ますに、御作事小屋の職人にて、大工與四郎にござりまする。

靭負　なに、大工與四郎が城内より外出せしとか、むゝ。（ト思入。）

づぶ　其時跡をつけまして、慥な證據を取りおきました。それ、さつきの品を。

ト 是れにてぐづ八以前の鑑札を靭負に渡す、靭負月影に透かし見て、

靭負　こりや作事方より職人へ、渡しおきたる上の鑑札、是れが何うして手に入りしぞ。

ぐづ　先刻こゝで拾ひました。

靭負　むゝ、此處にて拾ひしとか。

兩人　左樣にござりまする。(ト是れにて靱負考へる思入あつて、)

靱負　さては大工與四郎めは。

兩人　え。(ト兩人聞き耳立て、)

靱負　こりやよきものが、(ト鑑札を懷中するを道具替りの知らせ、)手に入つたわえ。

ト につたり思入、ぐづ八づぶ六後に控へる。此模樣時の鐘、合方にて道具廻る。

(庄屋離座敷の場)——本舞臺三間の間常足の二重、竹簀の本椽附大和葺の庇、眞中三尺太鼓張の襖、上手一間の床の間、此下三尺の地袋、下手腰張りの茶壁、下手の横下地窓、上手一間障子屋體、眞中の柱に時計を掛け、いつもの所枝折戸、下手建仁寺垣、此前柴垣、平舞臺の上手石燈籠、突這ひ、四つ目垣に山吹の下草をあしらひ、上下松紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、總て庄屋藤左衞門離れ座敷の體。屋體前側一面に伊豫簾をおろし、風の音時の鐘にて道具留る。と誂へ獨吟の唄へ時鳥笛をあしらひ、よき程に前側の伊豫簾を卷上る、爰にお早振袖好みの着附、庄屋娘のこしらへにて、上手に行燈を點し、草双紙を見て居る。獨吟の合方にて思入あつて、

お早　儘ならぬ浮世の中とはいひながら、此本にある三浦屋の浦里といふおいらんは、勤めの中で子ま

でなし、末は夫婦と言交した、時次郎は二階を堰かれ、哀れ苦界の悲しさに互ひに逢ふも内證へ氣兼苦勞の面ぶせ、それと是れとは替れども、いつぞや家の茶座敷を、仕事にお出での與四郎さん、ふつと心に思ひ草、一度が二度とお目もじの、其樂しんだ甲斐もなく、二階をせかれた時次郎さんに、丁度似寄りのお上の御普請、御城内へ行つたぎり只の一度便りもなく、文を委しく書きのべて晝間お城へ屆けたゆゑ、今夜はきつとござんす筈、何とて遲い事ぢややら、迎ひにやつた牧も歸らず、待たるゝ身より待つ身になるなと、あゝ待ち久しい事ぢやなあ。

〽晴れぬ思ひの繰言も、又繰返す戀の癖、末は晴れ行く月影を、よすがにたどる庭潦。

ト此内お早二重下手へ來り、向うへ思入あつて又こちらへ來り、鬢など撫附け居る、よき時分に花道より以前のお牧與四郎の案内をして出來り、花道にてちよつと囁き合ひ、與四郎うなづき兩人舞臺へ來り、枝折戸の外へ與四郎を待たせ内へはひる。お早お牧を見附け、

おゝ牧、今戻りやつたか。（ト大きくいふ、お牧びつくりして、）

お牧　あゝもしあなたは何でござります、お靜かになされませいなあ。（トお早あわてゝ口を押へ四邊へ思入、）さうして、旦那さまは。

お早　まだ父さんは、お歸りはないわいなう。

お牧　それでやうやく安心いたしました、あんまりあなたの大きなお聲で、內證の事が知れましたら、第一に私が濟みませぬ。ちとお嗜みなされませいなあ。もしお孃さま、お悅び遊ばせ、與四郎さんをお連れ申して參りました。

お早　そんならそなたは行く道で、彼のお方に逢やつたか。

お牧　はい、お目に掛つてござりまする。（ト下手へ來り）さあ、こちらへおはひりなされませいなあ。

ト又獨吟になり、與四郎四邊へ思入あつて內へはひり、手拭を取る、お牧手を取りお早の側へ住はせる、お早與四郎に縋り、

お早　與四郎さん、逢ひたかつた〲わいなあ。此間からお屋敷へ仕事にお出でなされたきり、只の一度も便りなく、あんまり情ないお方ぞと、わたしや恨んで居りました、なぜに便りをして下さりませぬ。

ト淚ながらにいふ、與四郎思入あつて、

與四　さあ、便りを疾うに仕度いにも、晝夜ともに出入りを留められ、棟梁始め仲間の者は、御作事小屋に居るばかり、尤も日限の仕事ゆゑ皆出來するまでは、大工は堅く御門を留められ、手紙一本我が家へ屆ける事も出來ぬ言附、それゆゑ便りが出來ませなんだ。

お早　何でお前は其のやうな不自由な所へ行かしやんした、外の大工と譯が違ひ、所々の得意で人に望まれ、澤山仕事のござんすを、出入の出來ぬ御城の内へ仕事に行くとは聞えませぬ。

與四　其仕事に行つたのも、お前の聟になりたいからだ。

お早　わたしの聟になりたい爲とは、そりや何ゆゑでござりまする。

與四　別に仔細もない事だが、此間も爰に居るお牧どんの話しで聞いたが、お前と斯ういふ譯になつたを薄々旦那も御存じで、一旦は御立腹なれど、出來た事なら今更いつても返らぬこと、娘が好んだ者ならば大工でなくば聟に取り、二人添はしてやりたいが、何をいふにも職人を家督にさせては世間の口の端、かゝりや繋がる親類までに、親の身として義理が濟まぬと、おつしやつたといふ事だ。

お牧　そりや先達て旦那さまが、私まで御相談なされました其時に、假令身分は職人衆でも、誠の人が何よりお爲、いくら高位のお方でも其お心が邪なら、お家の爲にはなりませぬと慶庵口を利きましたが、何を申すも昔堅氣、俗に申す開けぬといふやうな御氣質ゆゑ、私も當惑いたしましたわいな。

與四　昔堅氣の旦那ゆゑ所詮大工は聟になされず、仕方がないから大工だけ、わしが積りを入れて見た

のは、今度の仕事を首尾よくすれば、僅か十日か十五日で、百兩づゝの御褒美を大工中へ下さる約束、其百兩で大工を止め、何か堅氣な商法を、始めて一生懸命に、拵いだ事なら金も出來、それ相應な商人になつてお前の聟になりたく、御布告嚴しい御城内の人に言はれぬおつかねえ、仕事に行くのも其譯さ。

お早　さういふお前がお心なら、それでわたしも落着いたが、まだ落着かれぬは今のお話し、人に言はれぬおつかない仕事をすると言ひなさんすが、そりや何ういふ事でござんすえ。

與四　爰で話して聞かせたいが、此事ばかりは御作事から、堅く口止めされて居るから、うつかり是は話されねえ。

お早　いえ〳〵聞かねば心掛り、どうぞ隱さず打ち明けて、話して聞かせて下さんせいなあ。

ト與四郎に縋る、お牧いろ〳〵氣兼れの思入にて、

お牧　もし〳〵お孃さま、何うなされたものでござります、生業違ひのあなたなどが、御城内の仕事のお話しお聞きなされて何になされます、まあそれよりは何時ぞやより、逢ひたい〳〵とおつしやりました積る思ひのお話しを、そこでしつぽりなされませいなあ。まだ夜分とて詰るばかり、さう落着ては居られませぬぞえ、ほゝゝゝ。こりやまあ私としたことが、一人で喋舌つて目先の見え

ぬ。仲人は宵の内。お次へいつてお手水や、お茶の支度をいたしませう。（ト立上り思入あつて、）お孃さま。

お早　あい。

お牧　さぞお嬉しうござりませう。

ト此内與四郎三尺などを締直し、四邊へ心遣ひの思入、お牧お早に囁き、こなしあつて鼻紙を渡し奥へはひる。やはり獨吟の合方にてお早思入あつて、

お早　今言はしやんした、おつかない仕事といふは何でござんす、わたしの方でも氣が揉めて、どうも心が落着かぬゆゑ、話して聞かせて下さんせいなあ。

與四　話しをするのは易い事だが、女の聞いてもいらぬ事、まあそれよりは夜る夜中、掟の嚴しい城門から態々手紙で呼寄せて、愚痴の交つた長談義、そいつあ後の事にして、人目を憚る二人が中、まあ何よりか、少しも早く。

ト お早の手を取る。

お早　それぢやといふて安心の、ならぬといふ其譯は、本多樣のお屋敷へ、わたしも幼い其時にお小姓勤めをしましたが、御前樣のお好みで女中はみんな美しく、醜いものは一人もなし、それをわた

しは推量して、疾うより便りをしなさんせぬは、きつと外の女中衆に、お前は情婦が出來なさんして、それでわたしへ一言の便りをせぬのでござんせう。

與四　どうして〳〵大違ひだ、日限の極つた御社參の間に合せるので朝から晩まで、夜業を掛けての急仕事、煙草を呑む間もない位で、どうしてそんな暇はねえ。さう言はれるわしよりも久しく來ない其うちに、お前こそ安心ならねえ、わしの來ないを幸ひに、どんな情人が出來たか知れねえ。

お早　その疑ひは胴慾ぢや、お前をおいて餘所外に、何で男がござんせう。そりやお情なうござんすわいなあ。

與四　綺麗さつぱり言張るが、一番こいつァけんのんだ。

お早　是れほどまでに思ふのに、お前はやつぱり疑はしやんすか。

與四　どうもこいつあ請合へねえ。

お早　さう思はしやんすなら。(ト思入あつて、有合ふ硯箱の小刀を取つて、)さうぢや。

ト又獨吟になり、お早自害しようとする、與四郎あわてゝ是れを留める。又振拂つて死なうとするを手早く小刀を引き取りよろしく留める。お早これにてわつと泣伏す、與四郎びつくり思入あつて、

與四　いや、うつかり常談も言はれねえ。あんまりこつちを疑ぐるから、負けずに言つたが誠になり、

爰で命を捨てられちやあ、何よりこいつがおつかねえ、さつきから言つた事はみんなわしが誤りだから、どうぞ堪忍してくんねえ。（トよろしく詫びろ、お早涙を拭ひ、）

お早　そんなら今まであのやうに、お前が言ふた疑ひは、いよ〳〵是れで晴れましたか。

與四　晴れなくツてどうするものだ。

お早　與四郎さん、お嬉しうござんすわいな。

與四　おれも嬉しい。

ト獨吟の上げにて兩人四邊へ思入あつて寄添ふ。此以前後の襖を開け藤左衞門窺ひ居て、此時前へ出て、

藤左　不義者見附けた、そこ動くな。（ト中へ割つてはひる、兩人飛びのきびつくり思入）

お早　お前は父さん。

與四　お許しなされて下さりませ。（ト兩人手を突き詫びろ。藤左衞門きつとなつて、）

藤左　二人ともそれへ出い、えゝ出いと申すに。

兩人　はあい。（ト合方になり、）

藤左　こりやよく聞けよ、身が支配地に住ひする日頃の恩を忘却なし、よくも娘に不義いたづら、こり

ややい、身は當村の長なれどな、何卒娘を一廉の正しき方へ嫁づかせ一人並にいたし度く、行儀に育ておきたるに、よくも我が子に疵附けたな。殊には夜中忍び入り、まして明日街道を上様の御通行、今宵から嚴しき中、もし見廻りの役人方に見咎められたら何と致す。又其方とて不屆奴親の許さぬ不義いたづら、こりや、汝を親が此年に育てるまでの丹精は、中々口にも言難く、ややう是れまで育て上げ本の少しも習ひながら、誠の道を失念なし、親が日頃の說諭を忘れ、斯かる徒をいたすとは思へばく憎い奴。あゝ是れに附けても過ぎ行きし、家内の手前面目ないわい。

トよろしく愁ひの思入、與四郎思入あつて、

與四 段々との御立腹、重ねぐ御無理とは存じませぬ。常日頃からお世話になる、お得意場の御恩を忘れ、大それた事いたしましたも、元の起りは去年の暮、お庭へ出來た四疊半の圍ひの仕事を請合ひまして、殊の外のお急ぎに晝夜を掛けての造作仕事、申し上げにくうはござりますが、其時ふつと馴れそめて、一度が二度と重なるうち棟梁からの話しには、今度日光御社參に附き御城内の急仕事、手間も澤山下さるゆゑ、行つたがよいと言はれまして、斯ういふ仕事に行つたなら定めし金も儲からう、左すればそれを元手にして堅氣になつて生業始め、お早さまの聟にならうと、

下司の心の淺慮から、仕事に參つて樣子を聞けば、中々以て大切な御普請ゆゑに出來までは、大工は一人も門外へ出すことならぬと嚴しい御布告、それゆゑ今晩仲間の者が一同御門へお願ひ申し、川村さまへ內々で、親の病氣を言ひ立てまして、七つまでの暇を貰ひ、やうく脫けて是れまで參り、斯樣な始末になりまして、是れぎり屋敷へ戾りませねば、大勢の難儀になります故、どうか今晩の所は御勘辨下さりまして、お返しなされて下さりませ。

ト よろしく思入あつて詫びろ、お早も兩手を突き、

お早　申し父さん、斯ういふ事になつたのも、みんなわたしの徒ら事、茶の湯座敷の普請のとき、文を遣つたが緣の端、みんなこちから仕掛けた事、お腹が立つならわたしをば、存分にして下さりませ。所詮添はれぬ事なれば、生きて居る氣はござんせぬ。

ト お早覺悟せし思入にて言ふ、藤左衞門ぢつとこなしあつて、氣を替へ、

藤左　覆水盆に返らぬ譬、今更悔んで詮なきこと、畢竟我が子の不義いたづら、知らぬといふはわしが誤り、此事村へ知れる時は藤左衞門は家事不取締と、多くの者の嘲けりを受くるも却つて恥の上塗り、又娘とて天にも地にもたつた一人の母に別れ、今そちと緣切らば生きて居る氣はないなどと、娘心の一筋にもしもの事でもあつた日には、冥土の母にわしが濟まず、双方思へば職人とて、

又百姓とて元は同一、娘が好いた夫こそ家の和合となる道理。むゝよいわ、わしも村長藤左衛門、二人女夫にいたしてくれう。（トくだけていふ。兩人びつくりして、）

與四　そんなら何とおつしやります。あの、私に小言もなく、

お早　二人を添はして下さりますとか。

藤左　おいやい。

兩人　えゝ有難うござります。（ト兩人悦び辭儀をする、藤左衛門思入あつて、）

藤左　斯う物事が極つたら、善は急げぢや此場にて、二世の固めの杯さゝう。こりや牧や〳〵。

ト手を叩く。奥にて、

お牧　はい〳〵、只今それへ參りまする。（ト合方になり、奥よりお牧銚子杯を持ち出來り、）先程よりお次にて、委細の樣子を承はり、どうなる事かと存じまして、氣を揉んで居りましたが、段々樣子がよくなるので、是れは必定お杯が定めし入らうと推量して、疾うより待つてお次に控へ、お手が鳴るのを待兼ねましたわいな。

與四　いろ〳〵お世話になりまして、又候今夜のこの始末、今となつて見まするど、實に面目なうござります。

お牧　何のあなた其御心配、こりや斯うなくてはならぬ所。もしお孃さんえ、先程に引替て又一倍お嬉しうござりませう。

お早　これが嬉しうなうて、何とせうぞいなあ。

藤左　其悦びはわしも同じい、然し二人に申しおくが、今宵俄に夫婦にするは、先達てより御城内の、川村樣から娘をば玄蕃樣が口入にて、是非女房に貰ひたいと度々わしへお頼みなれど、一人娘に聟を取り家督させねばならぬゆゑ、上げられませぬと斷るのに、又もや今宵自身の頼み、それといふも一人身ゆゑ定まる聟がある日には、主ある體に二度と再び女房にくれとは言はれぬ道理、それゆゑ今宵兩人が不義徒に立腹なせど、碎けて見れば緣づくと、存じて只今杯さすのぢや。

お牧　何はともあれ少しも早く、御祝言のお杯を。

藤左　何さま寸前尺魔と申せば、一世一度の晴れの祝言、草葉の蔭の母親も嘸悦んで居るであらう、ああ目出度いな。さあ娘、そちも祝うて一杯呑みやれ。（ト杯臺を直す。）

お早　そんなら、あのわたくしから。

藤左　祝言の杯は、そちから呑んで聟どのへ。

お早　あい／＼。

藤左　目出度く祝つて肴いたさん。（ト藤左衛門扇をしやんと構へて、）千秋萬歳の千箱の玉を奉つる。
（ト此内お早杯を取上げお牧酌をしてお早呑干し與四郎へさす、是にて杯事あつて、）むゝ目出度いな。

三人　有難う存じまする。

藤左　これにて二人世間晴れ、

與四　三々九度の杯を、

お早　松も緑の尉と姥、

お牧　盡きぬ眞砂の數々に、

藤左　其高砂の謠さへ、

與四　昔語りに四海波、

お早　目出度き齢鶴龜の、

お牧　壽祝ふ熨斗昆布、

藤左　其三ツ組の杯は、

與四　家内和合の、

皆々　もとゐぢやなあ。（ト皆々悦び、藤左衛門安心せし思入あつて、）

藤左　是れにてわしも一つの安堵。こりや娘そちの體を過ぎ去りし母が今際に言ひくらし、黄泉の障りと案じて居たが、娘が好いた聟取つたと、いふたら嘸や悦ばう、そちは牧と同道して、母の位牌へとつくりと、よう話しをして來やれ。

お早　左様なればおとゝさま。

お牧　御佛間へ行て參ります。

ト お早立ち上り行きかけるを、お牧もしと袖を引き、與四郎の方へ思入、お早領き耻かしさうに、

お早　もし與四郎さん。（ト言ひかけるを冠せて、）

藤左　これ。（ト目まぜする、お早心附きもぢ〳〵しながら、）

お早　もしあなた、ちよと行て參ります。

ト言ひ惡さうに顏を隱す、是れを唄になり、お牧側で氣癒れのこなしあつて兩人奧へはひる。藤左衞門跡を見送り思入あつて、

藤左　聟どの、近う。

與四　へい。（ト合方になり、）

藤左　斯う祝言の濟む上は今日よりしては聟舅、その聟どのに改めて親が聞きたい事がある、何と話し

てはくれまいか。

與四 何ういふ事か存じませぬが、根が職人の生れゆゑ、普請の事か材木なら、存じたゞけは申しませうが、よい衆のなされる行跡は、私風情が存じませぬ事、それは御承知下さいまし。

藤左 いや決して外の事は聞かぬが、こなたが仕事に行つて居る、御城内の今度の普請、僅か十日か十五日の一月掛らぬ其仕事に、百兩といふ大枚の金を大工へ銘々に、下さるといふは合點が行かぬが、どんな普請か御城内の、仕事の話しを聞せてくりやれ。(ト是れにて與四郎當惑せし思入にて)

與四 舅御さまのお頼みながら、此事ばかりはお屋敷から大工中へ一般に、堅く人には話すなと度々出ました嚴しい御布告、それゆゑどうも申されませぬ。

藤左 そりやさうでもあらうけれど、親子の中に何遠慮、心おきなう話して聞かしやれ。

與四 ではござりまするが、此事ばかりは。

藤左 それでも只今そなたの口より、普請の事なら話さうと、わしへ綺麗に言つたではないか。

與四 さあ、それは。

藤左 わしを他人と思ふてか。

與四 何しに左樣な。

藤左　そんなら話して聞かせるか。
與四　さあ、
藤左　さあ、
兩人　さあ〳〵。
藤左　聟どの、親が賴むわいの。(ト是れにて與四郎是非なき思入あつて)
與四　餘所を憚る大事ゆゑ、親仁さまあたりへ心をつ(ト與四郎つか〳〵と平舞臺へ下り、枝折戶の外を窺ふ、藤左衞門は奧の襖を窺ひ、兩人二重へ住ひ與四郎小聲になり)親仁さま、斯うでござりまする。(ト誂への合方になり、與四郎小膝を進め)丁度今日で半月あと、棟梁から賴まれまして、私ども大工十人御城內へ行きますと、本田樣を初めとして、御家來川村靱負樣が今度お城の普請奉行で、其外腹心とか申すお侍が大勢寄合いたしまして、畫圖を出しての大評定に、仕事の模樣を聞きますと、五間四面の浴室に、一丈四方の湯殿を取込み、惣檜の注文にて、此御湯殿の緣の下を、一面に落し穴と一決いたし掛りました。
藤左　して、其落し穴を、如何いたして用ふるのぢや。
與四　さあ其注文の落し穴が、あらまし出來いたした所、殿樣はじめ川村樣が是れでは行かぬと工夫を

仕直し、それから急に模様が替り、湯殿の上の天井を、金物にて釣込みまして、上に大きな石を載せ四隅の檜の柱を取替へ、松に直してすべりもよく、あした日光御社參で公方様の御泊りに、此御湯殿にて合圖をすれば、四方の釣繩切つて落し、御近習までも押殺す御城主樣の巧みの極意、それゆゑ夜ゐも幾度となく、見廻りの役人衆が大工の頭數を改めますので、うつかり外へ出られぬ體、御城内の本田樣から嚴しく口留めされましたから、決して此事外の人にどうぞ言つて下さりますな。（トよろしく思ひ入あつて話す、藤左衞門びつくりして、）

藤左 一方ならぬ一大事、こりや斯うしては。

與四 え。

藤左 いえなに一大事の仕事ゆゑ、何で人にいふものぞ。

與四 それでわしも安心しました。（ト此時奥よりお早、扱帶裝にて出來り、）

お早 父さん、御佛前の母さまへ、ようお禮をいふて參りましたわいな。

藤左 おゝさうか、嘸や家内が草葉の蔭で、そちが祝儀を悦んだであらう。（ト此時柱時計の八つを打つ、藤左衞門聞き耳立て、）あの時計は最早夜半、つい話に實が入つて、思ひの外遲うなつた、娘は寐間へ聟どのを、早う連れて行たがよい。

お早　そんなら寐間へ共々に、行ても大事ござりませぬか。
藤左　はて、杯すれば誠の夫婦、誰に遠慮がいるものだ。
お早　さあ父さまのお許しゆゑ、少しも早うわたしと一緒に。（ト與四郎の手を取る。）
與四　とはいへ、今更改まつて。
藤左　はて夜が詰つた、早うござれ。
與四　左樣なれば舅御さま。
お早　はてまあ、ござんせいな。
ト唄になり、與四郎の手を取り無理に連れて上手屋體へはひる。合方にて藤左衞門思入あつて、
藤左　今宵俄に與四郎を娘の聟に貰ひしは、御城内の普請の樣子を、委しく聞きたいばつかりに、親が許して急の祝言、親子の因みを結びし上は否やを言はさず謀策の、巧みの話しを聞いてびつくり、打捨ておかれぬ天下の大事、幸ひ今日の達しには、明日は上樣石橋宿へ御小休みとあるからは、御大老の掃部樣へ委細の事を記載なし、御訴訟申すが何より近道、丁度夜更けに人目もなし、此間に委細を、さうぢや。（ト誂への合方、床の間にある硯箱を持ち來り、行燈を引寄せよろしく認め、心の急く思入、四邊へこなしあつて上包をなし懷中して、）此一通を持參なし、先きへ駈拔け御訴訟申

さん。（ト柱時計を見て、）未だ七つには間もあれば、奥へ參つて衣服を改め、夜明けを待つて、さうぢや〳〵。

ト やはり右の合方にて藤左衞門奥へはひる、跡靜かなる合方、所々にて、鷄笛になり、下手の庭口よりお牧手燭を持ち出來り、

お牧 此二三日はめつきりと夜の詰つたのが知れて來た、今の先き二里山の八つを打つたと思つたら、もう一番鷄が鳴くからは、大方七つに間もあるまい、お起し申すも心ないが、御城內へは半道餘り、おそなはつては御身の大事。（ト行きかけ、）とはいふものゝお孃さまが、御用濟みになつたやら、又ならぬやらそれも氣掛り、何はともあれちよつと時計を。（ト柱時計を見て、）此まあ時計の今夜に限り、大曆足の早いこと、最う八つ半を越してしまふ。あんまり目先が見えぬといふもの、ちつと靜かに步けばいゝのに。こりやお起し申さではなるまいわいな。（ト上手屋體へ來り、）もしお孃さま〳〵、もう七つでござりまする。（ト障子の內にて、）

與四 七つとあれば、斯うしちや居られぬ。

ト與四郎帶を持ち出來る、跡よりお早しどけなき裝にて是れを留めながら出で、與四郎の帶を捉へ、

お早 まだまあ七つを打つたではなし、もう少しよいではござんせぬか。

與四　どうして〳〵氣の急くのは、七つ半の廻りまでに、作事小屋へ歸らねば、折角情で出してくれた棟梁始め朋輩の、難儀になれば歸らにやならぬ。
お牧　お孃さまの心殘りは、御尤もではござりますが、一事が萬事と申しますれば、又其うちに御ゆるりとお目にお掛りなされませいなあ。
お早　棟梁さんや朋輩衆の難儀とあれば無理にともお留め申しも出來ないが、仕事をしまつた事ならば。
與四　その時こそはお上から、褒美に百兩金を貰ひ、立派に體をこしらへて、表向きでの夫婦の祝言。
お牧　さうなる時は世間晴れ、お孃さまの花聟さま。
お早　早う其日にしたいものぢやなあ。（ト此時本釣鐘の七つを打込む、與四郎聞耳立て、）
與四　あの鐘はもう七つ、こいつあ斯うしちや居られねえ。（ト心の急く思入にて立掛るをお早留めて、）
お早　あゝもし、ちよつと待つて下さんせ。
與四　何ぞ用か。
お早　あんまり髮が亂れて居るゆゑ、ちよつと撫附けて上げようわいな。
與四　是れからどうで表へ出れば、頰冠りをして行くから、撫附けるにやあ及ばねえ。
ト此内お牧奥より鏡立を出して、よき所へ直し、

お牧　はて、さうおつしやらずと、ちよつと鬢など掻上げて、お貰ひなされませいなあ。

與四　それぢやあざつと遣つてくんねえ。（ト誂への合方與四郎鏡立に向ふ、お牧手燭を出す、お早髪櫛を取つて與四郎の髪を撫附けながら泣く、與四郎鏡に寫るのを見て、）お前は何が悲しくつて、そんなに涙をこぼすのだ。

お早　さあ父さんのお許しで、今宵一杯したけれど、元より足らはぬわたしゆゑ、ひよつと是れぎり愛憎をつかされ、逢はれぬ事にならうかと、それが悲しうござんすわいな。

與四　いや女といふものは、詰らねえ事を泣くものだ。斯うして命懸けの仕事をするも、お前の聟になりたいからだ。そつちの心に替りがなければ、十つ百年も添ふ心だ、そんな詰らねえ事をくよくよと、案じるにやあ及ばねえ。（ト是れまでに撫附けてしまひ、）

お早　それが誠でござんすなら、わたしや嬉しうござんすわいな。（ト與四郎に縋る。）

與四　嘘をついてどうするものだ。（ト此時所々にて鶏笛になる、お牧思入あつて、）

お牧　もし、家の時計は後れた七つ、ありや二番鶏でござりまする。

與四　なに二番鶏だ、そいつあ落着いちやあ居られねえ。（ト思入あつて立上る。お牧手早く草履を直し、）

お牧　此お草履でござりますか。

與四　あい、藤倉の突掛だ。
お早　月はあれども雨催ひ。
お牧　お提灯を上げませうか。
與四　なに、それにやあ及ばねえ。(ト草履を穿きつか〳〵と下手へ行き掛け、前鼻緒切れる。)えゝ、南無三
　鼻緒が切れた。
お牧　ちよつと立つて上げませうか。
與四　なに、さうしちやあ居られねえ。
お早　なければ何ぞ、替りをば。
與四　なあに面倒だ。(ト草履をぬいで下手へ投り、)跣足で行かう。
　ト鷄笛早き合方、與四郎心の急く思入にて花道へ逸散にはひる。お早門口より跡を見送り居る、お
　牧手燭にて草履を取上げ、
お牧　まだ新らしい草履だに、どうして鼻緒が切れたか知らぬ。
お早　もしや、與四郎さんのお身の上に。
お牧　え。

お早　心に掛る事ぢやなあ。（ト合方になり、奥より藤左衞門袴羽織にて出來り、）

藤左　娘、聟どのは歸つたか。いや歸るではない、開いたか。

お早　二番鷄がうたふたゆゑ、遲うなると言はしやんして。

お牧　今お開きなされましたわいな。

藤左　最早夜明に程もなければ、定めし心が急くであらう、然し婚姻整ふ上は、御城内より聟どのが仕事を濟して歸宅いたさば、其時こそは表向き、婚禮の式をいたさする間、それ樂しみに待つて居よ。

お早　父さま有難う存じますわいな。

藤左　先は是れにてわしも安堵ぢや、然し是れから出掛けにやならぬ。

お早　まだ明けませぬに、今から何れへ。

藤左　明くれば當所の御城内へ、公方樣がお泊りゆゑ、道までお出迎ひいたさにやならぬ。

ト立上る、お牧草履を直し、

お牧　お提灯を差上げませうか。

藤左　いや、月があればそれには及ばぬ。（ト草履をはき枝折戸の外へ出る。）

お早　そんなら父さん、御機嫌よろしう。

藤左　あゝ、明日の大事を、何にも知らずに。

兩人　え。

藤左　いやなに、大事に留守を。（ト袴を端折り上げるを、道具替りの知らせ、）氣を附けいよ。

ト氣を替へ向うへ心掛りの思入。お早以前の草履を取り上げ氣になるこなし。お牧跡を見送る。此模様よろしく、合方鷄笛にて道具廻る。

（本田家城外の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向う一面宇都宮の城門、左右松並木夜の遠見、上手に莫大なる高札場、此後松並木、下手前へ出して中足の石垣、此上へ棕櫚伏の桝形、一面に松並木、上下松の立木、日覆より同じく釣枝、霞附きの月をおろし、總て本田家城外の體、時の鐘凄き合方にて道具留る。と上手より飯塚玄蕃、野半纒達附大小にて、赤總の十手をさし、捕手四人附添ひ出來り、

玄蕃　斯く嚴重に見廻りなすは、此度將軍御社參に附き、當宇都宮へ御泊りと定り、城内新たに旅館のしつらへ容易ならざる御作事ゆゑ、職人共を一人も他出を禁止しおきたる所、今宵人數を改しに

○　與四郎といふ奴一人不足、再度探索いたせども御城内に居らぬ樣子、殘りし大工を吟味中、川村殿より屆けには、豫て職人に渡しおきたる作事方の鑑札を、當宿内にて拾ひし者、達しのあつて明白たり、何れも必ず氣を附け召され。

□　其儀は夜中作事より、卽刻屯へお達しゆゑ、一統布告仕つり、

△　皆それ〲に手分けをなし、

◎　見廻り居れば籠の鳥、

四人　程なく捕縛、

玄番　いたすでござる。

四人　然らば何れも。

玄番　はッ。（ト玄番先きに四人附いて花道中程まで行き、向うへ思入あつて、）

四人　雲間をもれし月影に、向うへかすかに手拭ひにて、面體覆ふ若者は、慥に彼は大工の與四郎。何れも、（ト玄番〇に囁く。皆々囁き合ひ、）必ず油斷めさるゝな。

はッ。

トつか〲と舞臺へ戻り、上下松のあはひへ忍ぶ、やはり右の合方蛙の聲になり、花道より以前の與

四郎足早に出來り、花道にて跡を振返り、ほつと思入あつて、

與四　やう／＼の事で人目を忍び、首尾よく爰まで馳附けたが、まだよつほど時刻が早い、まあこれで安心した。（トほつとこなしあつて懷へ手を入れびつくりなし）や、こいつあしまつた、あんまり道を急いだので作事方から渡つて居る鑑札を忘れて來たが、庄屋どのゝ家ならよいが、もしや途中へ落しはせぬか、取りに返れば時刻の後れ、是れにやあ一番當惑した。えゝ儘よ仕方がねえわえ。

ト舞臺へ來る、爰へ玄蕃出て、

玄蕃　それ、搦め取れ。

四人　はツ、（ト四人出て、）與四郎、御用だ。

ト十手にて打つて掛る、與四郎びつくりして上手へ逃げに掛るを、玄蕃是れを支へる、是れにて拔けつ潜りつ逃げる、此内知らせに附き、月に雲かゝり暗くなりし思入、遠見打返しにて以前の道具闇落しになり、四人捕つた／＼と打つて掛る、闇黑捕物の立廻り、與四郎はやたらに拔けて逃げ歩き、めつちやの立廻り、此内知らせなしに道具半廻しになり、松並木の草土手舞臺眞中へ出る、此間を潜り存分立廻りあつて、トゞ月出る。與四郎土手の上より飛び下りようとして、片袖を松の枝へ引つかけ、おこつく途端平舞臺へのめる。これへ四人一時に掛つて與四郎を打ちすゑ、繩を掛ける。與四郎

びつくりして、

與四　こりや何ゆゑに私を。

玄蕃　罪は其身に覺えがあらう、堅く禁じおきたるに、何ゆゑ城門を脫け出しぞ。」

與四　え。（トぎつくり思入）

玄蕃　何と言譯あるまいがな。

與四　そりや、それゆゑに私を。

玄蕃　禁獄いたせと上の上意だ。（ト是れにて與四郎ちつと思入あつて、）

與四　思ひがけない此繩目、草履の切れたは。（ト思はず立上り、向うを見込むを、）

皆々　え丶控へろ。（ト繩を引く、是れにてひよろ〳〵として、きつと留るを木の頭）

與四　知せであつたか。

トうつむき愁ひの思入、玄蕃上手に捕手四人繩を取り、皆々引ぱりよろしく、六つの時の太鼓にて、

ひやうし　幕

三幕目　本田家奥殿の場

〔役名〕――本田上野介、川村靫負、門番佐五兵衛、飯塚玄蕃、中間づぶ六、中間ぐづ八、足輕六人、大工棟梁作兵衛、大工與四郎。〕

（本田家奥庭の場）――本舞臺三間の間、中足の二重、本庇附向う銀張、上の方一間後へ下げて塗骨障子屋體、折廻して本緣附、上手變つた網代塀、此前に石燈籠、松の立木、卯の花を結びし四つ目垣、下の方下座の前まで同じく折廻して網代塀、よき所に誂への松の立木、日覆より同じく松の釣枝、總て本田家奥庭の體。下手に六尺棒番手桶割竹などおく、爰に一、二、三、四、五、六の足輕六人菖蒲革袴股立ちにて控へ居る、此見得時の太鼓にて幕明く。

一　昨夜門番の佐五兵衛と大工が八人縛られたが、何を惡い事をしたのだな。

二　手前は話しを聞かねえか、御屋敷内で評判の與四郎といふいゝ男の大工が、昨夜こつそり御城内から脱け出たので、八人共に縛られたのだ。

三　かねて大工は出來まで、御城外へ出すなといふお觸のあつたを知りながら、錢を貰つて佐五兵衛が御門を明けて遣つたので、こいつも共に繩にかゝつたのだ。

四　其與四郎も今朝明方、斯ういふ事とは夢にも知らず、うつかり歸つて來た所。

五　飯塚樣が昨夜から捕手を連れて御城外に、網を張つて居た所ゆゑ。

六　忽ちこいつも縛られて、今日此お庭で川村樣が、御詮議なさるといふ事だ。

一　まだ棟梁の作兵衛は縛られずに居るさうだが、何ういふ譯で大工をば、御城外へ出さねえのだな。

二　そりやあ今度將軍樣が、日光御社參なさるに附き、此御城內へお泊りゆゑ、御殿も方々修覆になり、

三　取分け立派に出來たのはお圍ひ續きの新規のお湯殿、お屋敷うちの者でさへ、中へは誰も入れねえさうだ。

四　其お湯殿をお泊りまでに、是非こしらへねばならぬので、夜業を掛けてのお急ぎゆゑ、それで大工を出さねえのよ。

五　夜を日についだ其替り、普新もあら方出來して、待ちに待つた將軍樣も明日は爰へお泊りだ。

六　今日は大工も手引になり、明日は家へ歸られるのに、とんだ所で脫け出たものだ。

一　然し普請が出來上つたら、一晩位脫けたとて、縛るにも及ぶまいに。

二　薄々話しを聞く所が、新規に出來たお湯殿に、言ふに言はれぬ仔細があつて、

三　世間へ行つて其事を、拵へた大工に言はれては、悪い事があると見える。
四　此間から築山のお茶屋へ行つて殿様と、川村様の御相談。
五　何でもこりやあたゞぢやあねえ、仔細があるに極つた。
六　御門を脱けた與四郎は、縛られても仕方がねえが。
一　跡の者が巻添に、縛られたのは可愛さうだ。
二　こいつもとんだ、
皆々　災難だなあ。（ト皆々わや〳〵いふ、上手より前幕の玄蕃、袴大小摘み股立ちにて出來り。）
玄蕃　やあ、御前間近く高聲に、何ゆゑ上のお噂いたす。
二　へい〳〵、恐れ入りましてござりまするが、大工共が縛られましたは。
三　何ういう譯でござりますか、仔細を存じませぬゆゑ、
四　打寄りまして其話を、
五　ついいたしまして
皆々　ござりまする。
玄蕃　如何なる仔細があらうとも、其方共が入らぬ世話、重ねて噂いたすに於ては、大工どもと諸共に

其方ども、縛り上げるぞ。

二　へい〳〵、眞平御免下さりませ。

三　以後はきつと愼しみまして、

四　決して噂は、

皆々　いたしませぬ。

玄蕃　以後をきつと愼しむなら、此度は許してくれる。

皆々　へい〳〵、有難うござりまする。

玄蕃　只今これにて川村氏が、大工與四郎の詮議をめさる、其方共は作事より、與四郎めを引立て參れ。

皆々　畏つてござりまする。（ト合方調べにて六人下手へはひる。）

玄蕃　最早今に川村氏が、是れへ御出席なさるであらう。どりや、お待ち申さうか。

ト思入、やはり合方調べにて、奥より靱負上下大小にて出來り、

靱負　それにござるは、玄蕃殿か。

玄蕃　これは〳〵川村樣、只今御出仕なされましたか。

靱負　先刻出仕いたしたが、御前のお召しにお圍ひにて、御密談申せしゆゑ、思はず過刻致してござる。

玄蕃　夜前外出いたしましたる、大工與四郎めは御城下にて今朝未明某が召捕りましてござりまする。

靱負　それは〳〵御苦勞千萬、よく早速に召捕られた。（ト靱負よき所に住ひ、やはり合方調べにて、）夜前與四郎外出なし、鹽谷村へ參りし事は、證據あつて慥に知るが、何れへ參り居つたるぞ。

玄蕃　母の所へ參りしと、申すは彼れが僞りにて、段々探索いたせし所、鹽谷村の庄屋藤左衛門方へ竊に參りし由にござる。

靱負　何用あつて參つたるぞ。

玄蕃　あなたは御存じござるまいが、お聞きなされた事ならば、お腹の立つ儀でござりまする。

靱負　むう、身共の腹の立つ儀とは。

玄蕃　かね〴〵あなたが御執心の、藤左衛門が娘早めと、密通いたして居りまする。

ト靱負思入あつて、

靱負　それは一向存ぜざるが、藤左衛門が娘早と、彼は密通いたし居つたか。して、それには何ぞ慥な證據でもあつての事か。

玄蕃　彼れが密通いたし居る、慥な證據がござりまする。

靱負　して〳〵、其證據といふは。

玄蕃　今曉拙者が與四郎を召捕りましたる其折に、懐中なせし此艶書、是れを御覽なされませ。

ト懐から口紅の文を出す、靭負これを開き見て、腹の立つ思入にて、

靭負　さてはお早が迎ひによつて、與四郎めには脫け出しか、返す〴〵も憎き奴、他聞を憚る湯殿の普請、出來いたせし上からは、千丈の堤も蟻の一穴、彼等が口より漏れん事を恐るゝゆゑに片ツ端、科をこしらへ殺さうと思ふ所へ丁度幸ひ、戀の意趣ある與四郎め、憂き目を見せて殺してくれん。玄蕃殿引出し召され。

玄蕃　心得ました。(ト下手へ向ひ、)申附けたる大工與四郎、只今是れへ引立て參れ。(ト下手にて、)

△○　はあゝ。

ト是れをキツカケに床の淨瑠璃になる。靭負は煙草を呑み、玄蕃は床几に掛り居る。

〽思はざる身に身りかゝる災難に、雨は晴れても晴れやらぬ、胸も卯月の曇り勝ち、身はいましめに與四郎が、母を案じて兎や角と、心も跡へ引かれ來て、躓く石によろめくを、情容赦も荒けなく。

ト此内よき程下手より前幕の與四郎繩に掛り、それを以前の○△の足輕二人繩を取り出來り、與四郎躓きよろ〳〵となるを、△○手荒く繩を引附ける、是れにて與四郎立止る。

下に居らう。（ト與四郎をよき所へ引すゑ。）
仰せに任せ大工與四郎、
罷り連れましてござりまする。
〽言ふに川村ぢろりと見遣り、

△○　○

靱負　こりや大工與四郎。
與四　はツ。（ト辭儀をする。）
靱負　今改めて申さずとも、定めて汝も存じ居らうが、恐れ多くも將軍家日光御社參あらせられ、當城内へ御一泊、其折までに出來なすやう、晝夜をかけての普請ゆゑ、外出を止めおいたるに、夜前竊に脱け出しが、汝は何れへ參つたぞ。
與四　御城内へ參ります節母が少々不快ゆゑ、良いか惡いか案じられ、此間から夢見が惡く、心に掛りまするゆゑ、棟梁からも仕事中は御城外へは出られぬと、言附つては居りましたが、母に逢ひたいばかりに、つい脱け出しましてござりまする。
靱負　母の病氣を案じるゆゑ、それで外出いたせしとか。して汝が母は、何れに居るぞ。
與四　へい、芝崎村に居りまする。

靫負　然らば夜前芝崎村の、母を尋ねしばかりにて、直に城内へ立歸つたか。
與四　左樣にござりまする。
靫負　いや、それは汝が僞りだ、芝崎村へ參るのに、何ゆゑあつて弓と弦なる、鹽谷村へは參りしぞ。
與四　いえ〳〵、參りはいたしませぬ。
靫負　しかと汝は參らぬか。
與四　へい、左樣にござりまする。
靫負　鹽谷村へ參らぬ者が、何ゆゑ同所庚申塚にて、當家の中間づぶ六ぐづ八、彼等兩人に逢ひたるぞ。
與四　え。（ト與四郎ぎつくり思入。）
靫負　其場へ汝が落したる。此鑑札が證據なるわ。
〽是れが證據と懷中より、鑑札出せば、玄蕃は差附け、
ト靫負懷より前幕の鑑札を出す、玄蕃與四郎に差附け。
玄蕃　か〻る慥な證據があつても、鹽谷村へは參らぬと、汝は上を僞るか。
與四　何しに上を僞りませうぞ。
玄蕃　然らば行つたと早く言へ。

與四　でも實以て參らぬゆゑ。

靱負　それ、中間兩人を呼出せ。

○　はツ、（ト下手へ向ひ）づぶ六ぐづ八、是れへ出ませい。（ト下手にて）

△づぶ
ぐづ　はあゝ。

ヘ　はツと答へて醉どれも、今日はしらふにおづ〳〵と、廣縁先に控へれば、

ト下手よりぐづ八づぶ六の中間出來り、與四郎の下へ控へる。

靱負　こりやづぶ六ぐづ八、汝等夜前鹽谷村の庚申塚の邊にて、此與四郎に逢つたと申すな。

ぐづ　へい、慥に逢ひましてござりまする。何をお隱し申しませう、昨日は非番で二人とも晝から城下へ遊びに參り、盛切り酒屋の湯豆腐で、つい一杯が二杯三杯、微醉機嫌にぶら〳〵と、庚申塚へ參りますと、年の頃は十九か二十、田舍に稀な新造が、人待ち顏に立つて居るのは、てつきり出合と思ひまして、味な心になつた所から。

づぶ　娘を小蔭へ引張り込み、月を明りに草枕、たんまり寐ようと思ひの外、此與四郎が通り掛り、私共とも存じませず、娘を助けに中へはひり、留める折から月影に、互ひに顏を見てびつくり。

ぐづ　據ろない母親の病氣見舞に脱けて出たから、どうぞ内證にしてくれと、手を合して頼むゆゑ、酒

を一升買ふならばと、酒代取つて與四郎を見逃して遣りました。

づぶ　其間に娘は逃げてしまひ、四邊近所を尋ねましたが、行方は知れずすご〳〵と、又もや元の庚申塚へ歸つて來た時、拾つた鑑札。

ぐづ　鹽谷村へ與四郎が參りましたは私共が、

づぶ　慥に存じて居ります。

靱負　こりや與四郎、庚申塚で逢つたといふ、斯かる慥な證人あつても、汝は行かぬと申し張るか。

〽退ッ引きならぬ證人も、逃るゝだけはと與四郎は。（與四郎思入あつて、）

與四　いえ此兩人に逢ひましたは、芝崎村の一里塚、鹽谷村ではござりませぬ。

ぐづ　これ〳〵與四郎、そりやあ手前何をいふのだ、盛切り酒に醉つて居たゆゑ、芝崎村と噛着す氣か、鹽谷村の庚申塚で手前に逢つたに違ひねえ、づぶろく醉つても譬にいふ、そこは生醉本性違はず、忘れるやうなどぢだと思ふか。

づぶ　然も其時庚申塚で川村樣にお目に掛り、お渡し申した作事の鑑札、所詮脱れはしねえから、しらを切るのはよしにしろ。

ぐづ　鹽谷村へ行つたと言つては、惡い譯か知らねえが假令何處へ行かうとも手前が昨夜縛られたは、

出るなと堅く禁じられた御門を脱けて出たのが兇狀、早く有體に言つてしまへ、くだらぬ事に口を閉ぢ、餘計にお上へお手數を、掛けるはあんまり氣が利かねえ。

づぶ　手前が庄屋の娘の所へ、逢ひに行つたといふ事は、外の大工が喋舌つたから、誰でも知らねえものはねえ、それに昨夜おら達が、庚申塚で逢つたから、鹽谷村へ手前が行つたとお上で目串が附いたのだ。

ぐづ　くどい事をいふやうだが、今もおれが言ふ通り、假令どこへ行かうとも、御門を脱けたが身の兇狀、早く行つたと言つてしまへ。（ト與四郎俯向き默つて居るゆゑ）

靱負　今兩人が申す通り、外出なせしが其身の科、假令何れへ參らうとも、其行先きに構ひはない、鹽谷村へ行つたら行つたと、有體に言つてしまへ、達てそれを言はざれば拷問なして言はせるぞ。

ト玄蕃割竹を取つて、

玄蕃　餘計に痛い目しないうち、早く言つてしまはないか。

與四　假令何とおつしやつても、芝崎村の母の所へ、病氣見舞に參りし私、お尋ねなさるゝ鹽谷村へは、決して參りはいたしませぬ。

玄蕃　芝崎村の母の病氣を見舞に行く者が、なぜ門番の佐五兵衛へ、庄屋の娘に逢ひに行くと、申して

門を脫けたのだ。

與四　いえ、左樣な事は申しませぬ。

立番　なに、申さぬ事があるものか、それ佐五兵衞を呼出さつせえ。

△○　はツ、（ト下手へ向ひ。）

○　門番佐五兵衞、これへ出ませい。

佐五　はあゝ、

〽又も呼出す聲につれ、身の太繩に引替へて、心細くも佐五兵衞が、足もふら〳〵出來り、

ト下手より序幕の佐五兵衞腰繩にて□◎の足輕二人附添ひ出來り、

◎□　下に居らう。（ト引据ゑる。）

佐五　はあい。（ト下手へ佐五兵衞ひよろ〳〵として下に居る。）

立番　こりや佐五兵衞、先刻其方申す通り、昨夜與四郎に賴まれし次第、川村樣へ申し上げい。

佐五　はツ。

靱負　さあ事有體に申しなば、慈悲を以て某が、汝が繩目は許してくれる、何れへ參ると與四郎は、申して門を脫け出たぞ。

佐五　さあ、それは。（ト與四郎を見て言兼ねる思入。）
勘負　包み隱さず、早く申せ。
佐五　さあ、それは。
玄番　何を猶豫いたし居るのだ。
佐五　さあ。（ト言兼ねるを見て。）
勘負　察する所與四郎めに、金子を貰ひ口留めされ、それで包み隱すのだな。よしなき大工に義理立てなす、憎き奴め打ちすゑい。
玄番　畏つてござりまする。それ、佐五兵衛を引据ゑい。
足輕皆々　はツ、
〽はつといふより右左、手取り足取り足輕が、腕を取つて引据ゑれば。
ト足輕佐五兵衛の兩手を捉へ捻伏る、玄番割竹を持つて立掛り、
玄番　さあ、有體に申し上げぬか。
〽割竹取つてりう〳〵と、力に任せて續け打ち、（ト玄番割竹にて佐五兵衛を打つ。）
佐五　あゝ申します〳〵、打つのは許して下さりませ、お前さまのやうに酷く打つと、顏ばかりではご

ざりませぬ、脊中までが中低に散蓮華になりまする。

玄蕃　え〻、無駄を言はずと早く言へ。（ト佐五兵衛を打つ。）

佐五　今有體に申します、これ與四郎どの、こなたが言つてくれるなと、くれ〴〵おれに頼んだが、痛い目には替へられぬ。（ト靫負に向ひ。）かねて、大工は一人も、外へ出すなとおつしやつたを、背きましたはお出入りの、棟梁どの〻口添へに、又これに居る與四郎が、打明けての情事話し、鹽谷村の庄屋の娘と。

與四　あ〻これ、それをあらはに、爰で言つては。

玄蕃　え〻喧しい、控へ居らう。（ト與四郎を割竹で隔て。）して〳〵、娘と如何いたした。

佐五　さあ去年の冬から言交し、三日に上げず忍び逢ひ、よき樂しみをした所、此御普請で半月餘り、御門留めにて逢はれぬので娘が苦に病み人傳に、寄越した文の樣子では、今夜行かねば其娘が焦れ死に死にますから、どうぞ出してくれとの頼み、心遣ひも貰つたが、先きの娘が死ぬ程に、惚れて居るゆゑひよつとして、若しもの事でもあつてはと、思つて御門を出しましたのだ。

與四　え〻あれ程こなたに頼んでおいたに、それを爰で言ふといふは。

五佐　さあこれ〳〵、言はねばわしが打たれるゆゑ、どうまあ默つて居られるものだ。

ぐづ　おら達といひ佐五兵衛どの、一人ならず三人まで、證據人があるからは、もう知らねえとは言はれねえ。

づぶ　それを強情張る日には、こなたの枷にお袋へ、繩の掛るは知れたこと。

佐五　親の難儀を思ふなら、未練な心を出さねえで。

ぐづ　鹽谷村の庄屋の所へ、行つたと早く、

三人　言はつせえ。

靱負　斯くまで慥な證據があるに、まだ其方は申さぬか。

立番　もうよい加減に。

皆々　言つてしまへ。

ト問詰められて與四郎も、拔差しならぬ身の切羽、母に難儀を掛けまじと、心を定め吐息をつき。（ト床の合方になり、與四郎思入あつて、）

與四　斯くなりました上からは、もう何もかも打明けて、有體に申し上げます。今佐五兵衛どのゝ申した通り、去年の暮から庄屋どのゝ娘と念頃いたしまして、三日に上げず親の目を、忍んで逢引をいたしましたが、此お屋敷へ仕事に參り、御門留めにて半月から互ひに便りも出來ぬゆゑ、少し

も早く御普請を仕上げて娘に逢ひたいと、思ふ矢先へ昨日の晝、川村樣のお手に入つた、文が來たので矢も楯も堪らないほど逢ひたくなり、指す指金の目も忘れ、鑿や手斧も手に附かず、飛立つやうに思ふのを見兼ねて昨夜棟梁が、御門番人を賴んでくれ、御門を脫けてこつそりと、鹽谷村へ參る途中、思はぬ事からこれにござる中間衆に出逢ひましたは、惡い事をした報い、其場を僅かの酒代で無難に脫れて裏傳ひ、庄屋どのゝ庭口から奧へ忍んで娘に逢ひ、其折思はず、（ト言ひかけ思入あつて）いやさ、思はず七つを聞き損ひ、時刻のおくれにびつくりなし、急いで歸る御門下、捕手の衆に捕へられ、仔細も分らず高手小手、縛られまして引かれたは御門を脫けた此身の科、恨む所はござりませぬが、臍の緒切つて初めてゆゑ、實にびつくりいたしました。斯う有體に打明けて、申し上げればお上のお慈悲に、どうぞお袋に餘計な歎きを掛けぬやう、命はお助け下さりませ。

〽有りし次第を物語れば、扨は大事を漏らせしかと、氣遣ふ靱負は二道の、戀の遺恨に兎やせんと。（ト與四郎よろしく思入にていふ、靱負戀の遺恨あるこなしあつて、）

靱負　扨はいよ／＼鹽谷村の、庄屋方へ忍び込み、娘と密會いたせしとか。（ト無念の思入。）

立番　いや人もあらうに川村氏の、聞かるゝ前で惚氣話し、いやはや呆れた奴でござる。

靫負　いやなに與四郎、しかとそれに相違ないな。
與四　へい、それに相違ございませぬ。
佐五　えゝ、早くそれを言はつしやれば、今打たれずに濟んだのに。
ぐづ　往生際の悪いばかり、
づぶ　おら達までも呼出されたのだ。
靫負　今與四郎が鹽谷村の庄屋方へ參りしと、有體に申せしからは、づぶ六ぐづ八兩人は構ひない、勝手に引取れ。
ぐづ
づぶ　それは有難うございまする。
佐五　して私は。
靫負　嚴しく申し渡しおいたに、金に目がくれ與四郎を、外出させたる科は同罪。
佐五　え、そりや私は大工等と。
靫負　上の御所置を相待ち居れ。
佐五　あゝ情ない目に逢ふものだ。
ぐづ　それも慾に、

づぶ　迷つたからだ。
佐五　一分の金が怨めしい。
立番　それ、引立てい。
◎□　はッ、立ちませい。

〽引立てられて佐五兵衞は、今更是非も投首なし、づぶ六ぐづ八諸共に、切戸の外へ出でゝ行く、跡には一人與四郎が、取殘されて消え入る思ひ、靱負は奥へ打向ひ、

ト此内□◎の足輕佐五兵衞を引立て、ぐづ八づぶ六附いて下手へはひる。跡を見送り與四郎殘り口惜しき思入。靱負は奥へ向ひ、

靱負　御前樣、それにお渡りなされましたか。
上野　おゝ先刻よりの一部始終、殘らず是れにて聞いたるぞ。

〽襖左右へ押開き、一間の内より靜々と、威儀を正して立出る上野、はつと敬ふ臣下の者、正紲褥の上へ座し、

ト此内奥より小姓袴裝にて褥を持ち眞中へ敷く、奥より上野之介羽織袴一本差にて出で來る。跡より同じく小姓紫の袱紗にて刀を持ち出る、同じく小姓二人刀掛、煙草盆を持ち出で來り、よき所に

置く、上野之介褥の上へ住ひ、
刀はそれへ掛けおきて、其方共は次へ參れ。

小姓　はツ。

〽はつとばかりに小姓共、禮儀亂さず入りければ、正純靱負に打ち向ひ、
ト小姓四人奥へはひる、上野之介思入あつて、

上野　かねて棟梁作兵衛へ外出を留めおきたるに、夜前城外へ脱け出しそれなる大工與四郎には、鹽谷村藤左衛門方へ參りしとな。

靱負　只今お聞きなされた通り、彼れが口より參りしと、申しましてござりまする。

上野　鹽谷村の藤左衛門は、我が領分に並なき才智勝れし者と聞く、彼れが宅へ參りしとは。(ト思入あつて氣を替へ)いや、何れへ彼れが參らうとも苦しからぬに母方へ參りしなど、僞るゆゑ、何か仔細のある事と此方にても疑惑いたす、初手から庄屋へ參りしと、申せばよいに愚な奴ぢや。こりや與四郎、夜前藤左衛門にそちは逢ふたか。

與四　はい、逢ひましてござりまする。(トうつかり言ふ。)

上野
靱負　や。(ト上野之介靱負と顔見合せ思入)

與四　いえ、藤左衛門どのには逢ひませぬ。
上野　只今逢ひしといふたでないか。
與四　いえ〳〵、申しはいたしませぬ。
靱負　現在只今申しながら、又もや舌を二枚に使ふか。
與四　何しに二枚に使ひませうぞ。
上野　なぜ藤左衛門に逢ふたら逢ふたと、そちは言はぬのぢや。
靱負　包み隱すは仔細ぞあらん、さあ有體に言つてしまへ。
玄蕃　言はずば爰で拷問せうか。
與四　さあ、それは。
靱負　痛い目せずに早く言ふか。
與四　さあ。
靱負　えゝ面倒な、打ちすゑさつせえ。
玄蕃　心得ました。
○△　〽心得たりと足輕が、用意の棒でこぢあぐれば、玄蕃は割竹おつ取つて、

ト○△六尺棒を取り、與四郎の手の間へ入れ捻ぢあげる、玄蕃割竹を取つて、

玄蕃　どれ、痛い目をさしてくれうか。

〽力に任せて飯塚が、背骨も折れよと打ちすゑれば、

ト玄蕃與四郎を割竹で打つ、靱負留めて、

靱負　こりや與四郎、さりとは分らぬ奴だな、藤左衛門に逢つたらば、逢つたといへば濟む事だ、それを默して言はねえのは、まだ痛い目がしたいのか。

玄蕃　仕度くば身共が最う一打ち。

〽又も玄蕃が立ちかゝれば、詮方なさに與四郎が、（ト玄蕃又割竹を振りあげる。）

與四　あゝもし、只今申し上げますから、暫くお待ち下さりませ。

靱負　申すとあれば許してくれる。さあ、有體に早く言へ。

與四　さあ實は昨夜娘と二人、寐て居る所を不義者と、藤左衛門どのに見附けられ、逃げる間もなくうづくまり段々と詫ました所、情深い庄屋どのゆゑ今夜は此儘許すから、以後はきつと愼しめと異見をなされて下すつた。其時測らず、いやさ、測らず命を助かつて無難に歸りました事、初手から包まず有體に申し上げればよかつたを、始めて繩目に逢つたので、申す事さへ後や先き、御免

なされて下さりませ。

〽縛られしまゝ與四郎が、頭を下げて詫びければ、主從顔を見合せて、藤左衞門に一大事を漏らしはせぬかと打案じ、

ト與四郎よろしく思入、上野之介靱負顔見合せ、大事を言ひはせぬかと言ふこなしあつて、

上野　扨こそ汝は藤左衞門に、其夜面會いたしながら、何ゆゑ包み隱せしぞ。

靱負　察する所、其折に、かねて他言を止めおきたる、釣天井の密計を。

與四　え。

靱負　汝は口外いたしたらうな。

與四　いえ〳〵、申しはいたしませぬ。

靱負　いや〳〵言つたに違ひない、釣天井の密計と、身共が言つた其時に、何ゆゑあつて驚いた。

與四　むう。

靱負　言はぬといへど汝が面色、言つたに相違あるまいが。

玄蕃　それとも外に言はぬといふ、何ぞ慥な證據があるか。

與四　さあ、それは。

上野　密事を庄屋へ漏らしたか。
靭負　但し、言はぬといふ證據があるか。
與四　さあ。
靭負　さあ、
與四　さあ、
皆々　さあ〳〵。
靭負　きり〳〵白狀いたさぬか。（トきつといふ、與四郎思ひ入あつて）
與四　假令如何やうおつしやつても、此事ばかりは、決して申しはいたしませぬ。
靭負　親も許さぬ密通なし、人の娘を盗むからは、いはゞおのれは盗人同然いけ太い根性ゆゑ、一通りでは言ひ居るまい、川村靭負が心を掛けし、いやさ、心を掛けて見拔いた眼力、どれ拷問に掛け言はしてくれん。
〽胸に一物うなづきて、靭負は庭へ下りたちて、（ト靭負下へおり割竹を取つて）
斯程まで拷問なしても、そちは白狀いたさぬか。さあ、早く言はぬか〳〵、言はぬとあればいつ〳〵その事。

上野 〽割竹取つて立ち掛れば、（ト靫負割竹を持つて立ち掛る、上野之介思入あつて、）

上野 あゝこりや、靫負待ちやれ。

靫負 なぜお止めなされまする。

上野 拷問なしても言はざる與四郎、予が一通り申し聞さん。

靫負 ぢやと申して。（ト又立ち掛るを、）

上野 はて、待てと申すに。（トきつと言ふ。）

靫負 はッ。

〽主命ゆゑに是非なくも、差し控へれば與四郎は、蘇生なしたる心地にて、肩で息をぞなしにける、正純は席を進み、

ト是れにて靫負玄蕃控へる、與四郎ほつと思入、上野之介縁端へ出る、誂への合方になり、

上野 こりや與四郎、

與四 はッ。

上野 好事必ず門を出でず、悪事千里を走るの譬、隠す事ほど漏れやすし、決して他言はいたすなと止むることを言ひたがるは、凡そ一なる世界の人情、そちが庄屋藤左衛門に釣天井の一條を話しの

序に申すとも、敢て無理とは思はぬぞ。只言ふたらば有體に、言ふたと實事を申してくりやれ、定めて棟梁作兵衛より密事はそちも聞いたであらう、昔が今に例なき釣天井をしつらへしも深き仔細あつての事、首尾よく成就いたしなば、褒美と共にそち達にも予が心腹を明して聞かさん。それは後して、差當り、藤左衛門に言ふたか言はぬか、それさへ申せば此やうにそちを拷問なすにも及ばぬ、包み隱さず實事を申せ、假令如何なる大事なりとも他言いたせし其後にて、千悔なすとも返らぬこと、只一大事が他へ漏れなば、其覺悟をいたさにやならぬ。予が心得にいたすゆゑ、有體に申してくりやれ。（ト上野之介柔らかく思入あつていふ、與四郎じゆつなきこなしにて、）

與四　あゝ勿體ない、御領主様が、私風情に事を分け、物柔かな其お尋ね、言はねばならぬ事ながら、（ト思入あつて、）實々以て其事を、庄屋どのへ私が申した事はござりませぬ。

上野　斯ほどまでに予が申しても、藤左衛門に言はぬとあれば、僞りにてもあるまいが、萬一そちが僞りて此事露顯いたすに於ては、先祖の武功も水となり、十八萬石の領主たる本田の家の滅亡ゆゑ、此理解を辨へて、僞りならば明し聞かせよ。

與四　左様にあなたがおつしやりましては、誠に辛うござりますが、先程から申す通り、實に明さぬ事なれば。

上野 すりや何やうに申しても、そちは言はぬと申すのぢやな。

與四 へい、どうも申し上げやうがござりませぬ。

〽額の汗を振拂ひ、じゆつなき體に正純も、今は問ふべき詞もなく、

ト與四郎じゆつなき思入、上野之介是れを見て思入あつて、

上野 こりや靱負、かほどに問へど知らぬと申すが、そちが見込みは如何なるぞ。

〽主の詞に戀の意趣、自滅させんと頭を振り、(ト靱負思入あつて)

靱負 拙者は、彼れが僞りと、目串を附けしは詞の內、濁る所が慥な證據、今一詮議なされませ。

上野 然らばそちに任す程に、詮議いたして白狀させい。

靱負 畏つてござりまする、拙者にお任せ下さらば、口を明して御覽に入れん。(ト與四郎に向ひ、)こりや與四郎、今度は骨をぶち折るから、われも覺悟をいたし居れ。

玄蕃 拙者も共々川村氏の、助鐵砲を仕らん。

靱負 それなる松へ繩を掛け、與四郎めを引上げめされ。

玄蕃 心得ました。

〽傍の松へいましめの、繩うち掛けて與四郎を、足輕どもが引上ぐれば、靱負は割竹おつ取

つて、腰も折れよとめつた打ち、我が身の重みに手もしびれ、怺へがたなく聲をあげ、

ト此引玄蕃○△足輕二人、與四郎の繩を松の枝へ掛け、仕掛にて引あげる、靱負割竹を取つて與四郎を續け打ちに打つ、與四郎苦しき思入にて、

與四　あゝ申し上げます、申し上げますから、どうぞ下して下さりませ。

靱負　おゝ、言ひさへすれば許してくれる。

與四　申しますく。

玄蕃　白狀するなら下してやらう。

〽繩を放せばどつさりと、大地へ落つるを引起し、

ト玄蕃繩を放す、與四郎どつさりと下へ落され、倒れる所を靱負引越し、

靱負　さあ、有體に早く言へ。

與四　へいく。

〽息もはづんで言ひ兼ぬるを。

靱負　まだ強情にぬかさぬか。

〽又も割竹振上ぐれば、小蔭を駈出る棟梁作兵衞苦痛に弱る與四郎を、後に圍ひ押し隔て、

ト靱負又打たうとする。ばた〳〵になり、作兵衛羽織脊流し大工の棟梁のこしらへにて、つか〳〵と出來り、與四郎を圍ひ下に居て、

作兵　あもし暫らく〳〵、暫らくお待ち下さりませ。

上野　其方は棟梁の作兵衛。

靱負　何ゆゑあつて留むるのだ。

作兵　御太守樣の御前をも、憚りませず駈け出でましたは、もう一打ち與四郎をお打ちなされた事ならば、もとよりかぼそい體ゆゑ、打殺されて死ぬのは必定、如何にも不便でござりますからお留め申しに出ましたは、子方の者の不調法は、其棟梁の不調法ゆゑ、わしを代りにお打ち下され、是れはお助け下さりませ。

上野　小前の者の不調法は、其棟梁の不調法ゆゑ、外出なせし與四郎が、替りに其身を打つてくれとか。

作兵　どうぞお慈悲に私を、お打ちなされて與四郎を、お許しなされて下さりませ。

靱負　假令何やう申さうとも、彼れは打つべき科あるゆゑ。汝に打つべき科はない。

作兵　いえ〳〵ない事はござりませぬ、昨夜子方の與四郎が御門外へ出ましたは、此作兵衛が許しまして、御門番の佐五兵衛どのへ、無理にお頼み申しまして、出してお貰ひ申しますれば、科は子方

の與四郎より、此棟梁の作兵衛ゆゑ、替りにお打ち下さりませ。

覩貟 む、外出なせし其科は作兵衛汝も脱れぬが、此與四郎は一大事を、他へ漏したる大罪ゆゑ、白狀するまで拷問なすのだ、留め立ていたさず控へて居よ。

作兵 いえ〳〵控へて居られませぬ。子方の命に拘はる事、棟梁の身で此儘に、どうまあ餘所に見てをられませう。

〽弟子を思うて作兵衛が、支へ留むる仁愛を、正純實にもと打ち見遣り、

ト上野之介思ひ入あつて、

上野 こりや作兵衛、汝が弟子をかばふのは、尤もなれど大罪を犯せしゆゑに許されぬ、脱れぬ所と控へて居よ。

作兵 御太守樣の御意なれど、知らぬ先きは兎も角も、今殺されるを知りまして、是れが留めずに居られませうか。

覩貟 えゝ又してもく、御前の御意を背く不屆き、控へいと申さば控へ居らう。

作兵 御前の御意を背いては恐れ入ります事ながら、もう一拷問なされたら、命のないは知れた與四郎、くどい事を申すやうだが、彼れが一人の母親へ此作兵衛が濟みませぬ義理があるゆゑ私を、先

きへ殺して下さりませ。

穀負 そりや何ゆゑに。(ト誂への合方になり、)

作兵 さあ一方ならぬ此度の他聞を憚る御普請も、多年お出入りいたすゆゑ、命を懸けて私がお請合申しましたも、力と頼むは此與四郎、此宇都宮の御城下にも多く大工はございますが、業がよければ身性が悪く、数百人の其中で、やう〳〵選んで人数も十人、其肝煎に與四郎を頼んで連れて参る折、斯かる事になる端を蟲が知つたか母親が、よい仕事ではあるけれど手許にどうか置きたいと違つていふのを事譯いひ、首尾よく仕事を仕上ぐれば身分に過ぎる御褒美を、下さる事ゆゑ一緒に行けと、無理に借りたる此與四郎、なした科とは言ひながら、責殺されて死にましたと、此作兵衛が母親へ何と言譯がなりませう。それゆゑどうぞ私を、先きへ殺して下さりませ。

〽涙ながらに作兵衛が、弟子をば思ふ眞實を、聞く與四郎は咽び入り、

ト作兵衛よろしく思入、與四郎これを聞き、こなしあつて涙を拂ひ、

與四 あゝもし親方、弟子をかばつて下さいますお前さんのお志し、有難涙がこぼれます。わつちと違つて親方は女房もあれば子供衆も、二人まである事なれば、今お前さんが死んだなら跡の難儀はどの位、それに引替へ與四郎はたつた一人のお袋ばかり、力と思ふ人もないゆゑ、難儀を掛け

れたては濟まねえが、是れも定まる約束事、いらぬわつちへ義理立てより、今わつちが責殺されたら、便り少ないお袋をどうぞ貢いで下さりませ。死ぬのは時節とあきらめても、是ればかりが心掛り、お前さんが引受けて世話をなすつて下されば、それで迷はず死にますから、どうぞお頼み申します。

作兵　假令何と手前がいつても、生きて再びお袋に、此作兵衞が逢はれるものか、死なねば浮世の義理が濟まねえ。

與四　お前の堅い了簡では義理を立てるは尤もだが、それぢやあわつちがどうも濟まねえ。まだ飯籠を擔ぐ時から板削りや手斧打ち、やつとの事で壺金も覺えて繪圖も引習ひ、一人前の職人になるまで長の年季中、親にも勝るお世話になつた、大恩のある親方を、我が身の科で殺されませうか。

作兵　是れまでどんなに世話をせうとも、おれが仕事で殺さしては、どうもお袋へ義理が濟まねえ。

與四　お前もさうならこつちも又、わつちの事で殺さしては、姉御へ對してどうも濟まねえ。

作兵　假令何と手前がいふとも、おれが先きへ死なにやあならねえ。

與四　いゝやわつちが先きへ死にます。

〽弟子を思へば親方を、思ふ心に爭ふ兩人、始終を聞き居る正純が、斯くては果じと聲あら

らげ、（ト與四郎作兵衛此内よろしく思入、上野之介こなしあつて、）

上野　やあかしましい靜まらぬか、我が面前も憚らず最前から無益の爭ひ、大事を漏らせし與四郎の、詮議いたすに邪魔立てなす、作兵衛めに繩掛けい。

玄番　はツ、畏まつてござりまする。

〽捕繩手繰つて立ち掛れば、（ト玄番繩を持ち立ち掛る。）

作兵　すりや、私にも繩目をば。

靱負　元より科は脱れぬ棟梁、覺悟いたして繩受けるか。

玄番　但し手向ひいたしなば、踏み附けても繩掛けるぞ。

作兵　此期に及んで卑怯未練に、何でじたばたいたしませう。さあ、繩掛けて下さりませ。

〽惡びれもせず手を廻せば、玄番が透さず早繩掛くれば

ト作兵衛手を廻す、玄番繩を掛ける。

靱負　流石は棟梁よい覺悟だ。それ、引立てい。

○□　ハツ、畏つてござります、作兵衛立たう。

作兵　すりや私は此處に。

執負　詮議の邪魔だ、きり〳〵立て。
〽引立てられて作兵衛が。（ト作兵衛足輕に引立てられ、立上りて、）
作兵　これ與四郎、かゝる無慈悲な殿樣とも、知らずにおれが命を掛け、拵へ上げた釣天井、今となつては悔しいが、親の代からお出入りゆゑ、據なく請合つて手前にまで此やうな、憂目を見せて氣の毒だが、約束事と思つてくれよ。
與四　なに、わつちあ仕出した科があるから、責殺されても仕方がないが、親方お前に繩を掛けさせ、濟まねえ事だが今もいふ、是れもやつぱり約束事と、どうぞ達者で居て下さい。
作兵　何で達者で居られるものか、どうでおれも切られる覺悟。
與四　そんなら親方、お前も死ぬ氣か。
作兵　どつちが先きか知らねえが、
與四　其行く道は一筋ゆゑ、
作兵　あの世の旅も、二人連れ、
與四　三途の川で、
兩人　待合さう。

靱負　えゝ何をぐづ〳〵よまひ言、きり〳〵と立ち居らぬか。（ト きつといふ。）

作兵　そんなら、與四郎。

與四　親方。

作兵　もう此世では逢はぬぞよ。

△○　立ちませい。

〽名殘り惜しげに見返れば、縋り留めたき腕さへ、身はいましめに留められず、是非も涙に別れ行く。

ト作兵衞與四郎よろしく別れの思入あつて、作兵衞足輕に引立てられ下手へはひる。與四郎心細き思入、

〽跡打ち見遣り川村が、邪樫の割竹打ち叩き、

ト靱負俯向き居る與四郎の前を割竹で嚴しく打つ。與四郎びつくりする。靱負割竹で顏を上げ、

靱負　他聞を憚る釣天井、藤左衞門へ明せしを有體に白狀なさば、汝が命は助けてくれる。

立番　一人の母を案じるなら、白狀なして命を助かれ。（ト與四郎默つて居る。）

靱負　有無の返答いたさぬは、どうあつても言はぬ氣か。

上野　さりとは憎き與四郎め、笞に掛けて白狀させい。

靫負　はッ、白狀いたすか〳〵。

〽白狀せよと川村が、竹も篩に割れる程、數をかぞへて打ちすゑられ　よろめく途端手の廻り眉間をはつしと打ち破られ、流るゝ血汐に眼も眩み、

ト靫負與四郎を打ちすゑる、與四郎苦しき思入にて逃げに掛るを、玄蕃ひどく繩を引く、是れにて與四郎どうとなり、起上る所を靫負眉間を打つ、與四郎あつと言つてうつ伏になるを、玄蕃繩を持つて引起す。此時額糊紅になり、仕掛にて額へ血汐流れ、與四郎きつと思入、誂へ床の合方、

與四　今この儘責殺され、死ぬのも前世の約束ゆゑ悔む所もないけれど、たつた一人のお袋が去年に今年と曲る腰、杖と思つて力にする此與四郎が死んだと聞いたら、直に弱つて病氣となり、杖より先きへ折れるであらう、是れを思ふと死にたくないが、背中の皮も破れるほど川村樣が非道の責方、こらへて居られぬ苦しみゆゑ、親には不孝な事ながら早く死んでしまひたい。

〽目に入る血汐を振拂ひ、身の苦しさに與四郎が、つく息さへも弱り果て、見るも哀れな有樣に、靫負も暫しためらへば、正純しづ〳〵おり立ちて、

ト此内與四郎よろしく苦しき思入、上野之介こなしにて庭下駄をはき、與四郎の側へ來て、

上野　こりや與四郎、拷問に逢つて苦しいか。

與四　はい、苦しうござりまする。

上野　其苦しみも心柄、なぜ藤左衛門に話せしと早くそれを言はぬのだ、尤も他言いたすなと堅く申し渡せしゆゑ、大事を他人に明せしと、申さば一命を取らるゝと、思つてそれで言はざるか、露顯いたさば正純が國家に掛る一大事、汝如きが一命を取つたとて無益のこと、決して命は取らぬから、有體に早く申せ。

與四　はい、其やうにおつしやいますと、實に切なうござります。

ト差しうつ向けば正純が、包む大事を打明し、彼れが眞僞を探らんと、四邊見廻し聲潜め、

ト笙の入りたる床の合方になり、上野之介思入あつて、

上野　抑々此度其方等を當城内へ留め置き、新たにしつらふ湯殿の内、我が肺肝を碎きたる釣天井の工夫といふは、四方の釣繩切拂へば上に載せたる大盤石の重みに何かは堪るべき、時に落ちて浴室に入りたる者は鏖し、斯かる苦肉の計略なすも此正純謀叛にあらず、此企ての根ざしといふは豫て噂に聞きつらん、當時駿府に御在城たる駿河大納言氏長公は御臺所の御本腹、まつた三代將軍氏光公は御長男とはいひながら、御妾腹ゆゑ御家督は、御次男なれど氏長公と我人共に思

ひしゆゑ、既に御沙汰もあつたる所、未だ神君御在世の折妾腹たりとも長男へ家督させよと嚴命ありしを、故老大久保彦左衛門が御遺言を相守り、終に三代將軍職は氏光公と事極り、御臺所を始めとして氏長公の御附人平岩主計並に某、その殘念は如何ばかり、御家督極らぬ其内は御同席遊ばされしも、忽ち一段お位下り遂に駿府に御在城、氏長公の御無念は如何ばかりか計り難し、いつぞは御無念散ぜんと思ふ折柄こたびの御社參、宇都宮の當城が第三日目のお泊りと、事極りしは天の與へ、お湯を召させたまふ時釣天井を切つて落し、恐れ多くも將軍を其場で弑し奉りよしや正純切腹なすとも、御血統たる氏長公を御世に出し奉らんと、忠義の爲のこの企て。然るに夜前其方が口外なして露顯に及ばゞ、實に千日に苅つた茅、大望成就なさぬのみか討手の向ふは目のあたり、所詮家國沒收なれば敵を引受け一戰なす、城中用意をいたさにやならぬ。そちも親の代よりして宇都宮の城下に住ひ、領主の耻辱になる事ゆゑ、爰の道理を聞き分けて大事を漏らさば、明して聞かせよ。

〽事を分けたる正純が、惡事といへど我が主へ、忠義の爲の企てに、聞く與四郎は後悔なし、

ト上野之介よろしく思入にていふ、與四郎これを聞き後悔せし思入あつて、

與四　段々との入譯を、承はれば御主人へ、忠義の爲になされし事、さうとも知らず御領主へ、濟ま

ない事をいたしました。
上野 なに、濟まぬ事とは。
靱負 もしや大事を他言せしか。
與四 かゝる事とも存じませず、口さがないが下司の常、深く聞かれて跡先の、考へもなくうか〳〵と、
靱負 釣天井の話しをなせしか。
與四 さあ仕手方九人の其内で、目鏡によつて私が拵へました釣天井、委しく知つたばツかりに、口がすべつて話しました。
上野
靱負 や。
靱負 して〳〵それは何者に。
與四 何をお隱し申しませう、其夜娘と祝言なし、親子の緣を結びしゆゑ、
上野 扨は庄屋藤左衞門に、
與四 話しましてござりまする。
三人 やゝゝゝゝ。
〽大事を庄屋へ明せしと、聞いて三人打驚き、

上野　農家なれども經書に明るく、五常を守る藤左衞門、天下の大事を聞くからは、よも其儘にはいたすまじ。

靱負　道を守つて大老へ、訴へ出でしに疑ひなし。

立番　こりや一大事でござりまするな。

〽大望露顯なす上は、事ならざると察せしゆゑ、正純面に怒りを發し、疲れ果てたる與四郎を、はつたと蹴倒し土足に掛け、

ト上野之介よろしく思入あつて、與四郎を蹴倒し、ばつたり倒れたるに、上野之介足を掛け口惜しき思入にて、

上野　ちえゝ殘念や口惜しや、某お育て申したる氏長公を世に出さんと、時がなあらばと此年頃時節來るを待ち詫びしに、こたび日光御社參に當宇都宮の城内へ、第三日目のお泊りは盲龜の浮木優曇華の又逢ひ難き時節ゆゑ、多年の恨みを散ぜんと釣天井をしつらひしも、出來なして早今宵大望成就の時なるに、露顯なしたる上からは、氏長公が御身の上、十が九つ仕果せし企みも畫餠となつたるか。これ皆汝が口外せしゆゑ、思へば憎き匹夫めが。

〽怒りの餘り上野が、面部もわかず庭下駄で、踏み蹂り蹴倒せば與四郎は只うろ〳〵と、

ト上野之介きつとなり、與四郎を散々に踏み蹂り蹴返す、與四郎濟まぬ事をしたといふ思入にて、

與四　あゝ今更言つて返らぬが、庄屋の娘に心引かれ、昨夜お城を脱け出たばかり、御領主樣の御難儀になる事をば仕出せしか。あゝ申し譯もござりませぬ。

〽身をもみあせれば川村が、髻摑んで引倒し、

ト與四郎うろ〳〵と下の方へ行くを、靱負髻を取つて引倒し、眞中へ引摺り來り、

靱負　こりややい、うぬがさがない此口ゆゑ、十八萬石の御知行を取上げらるゝのみなるか、殿を始め我々まで氏長公へ忠義を立て、末世へ美名を殘さんと思ひの外に奸賊の、惡名取つて身の末は、野末に首級を曝さにやならぬ、それのみなるか當城の老若男女が路頭に迷ふも、皆誰ゆゑぞ。どうして腹を癒てくれん。

玄蕃　どうで殺す奴なれど、たゞ殺しては興がない。

靱負　弄り殺しにしてくれう。

〽髻をもつて引摺り廻し、蹴たり踏んだり叩いたり、どうして腹をいてくれんと、小鬢の毛をば一摑み、指に搦んで引きぬけば、與四郎くるしさ怺へかね、

ト此内靱負髻を持つて引摺り廻すを、玄蕃割竹にて打ち、トヾ小鬢の毛を拔く、仕掛にて毛の拔けし

跡より血の出ること、此内上野之介二重へ腰を掛け煙草を呑み居る、與四郎苦しき思入にて、

與四　もう此位になされたら、大概腹も癒えましたらう、早く殺して下さりませ。

勧負　えゝ、早くとわれが言はずとも、初手からうぬは殺す所存だ。

與四　なに、初手から殺す所存とは。

勧負　普請が出來する上は、後日に口外せぬやうに、棟梁初め十人とも、殺してしまふかねての所存。

與四　えゝ、そんなら仕上げた其上で、褒美の金をくれるといふたは。

勧負　新刀物の亂れ燒き、刀の刄金をくれるのだ。

〽聞くに與四郎齒嚙みをなし、（ト與四郎口惜しき思入にて、）

與四　えゝ、聞けば聞くほど非道な計らひ、大望成就する時は、六十餘州を握る程な企みの元は釣天井、夜の目も寐ずに仕事をさせ、出來なせば其上で初手から殺す積りとは、情を知らぬ無慈悲な仕方、さういふ曲つた心ゆゑ、昨夜思はずわしが出て庄屋どのへ話したは、此與四郎が口をかり、天道様が言はせたのだ、そんな非道な企みをして何で成就するものだ。

〽欺かれたる悔しさに、眼血走り髮逆立ち、さも恨めしげに詰め寄れば、

ト與四郎悔しき思入にて上野之介へ詰め寄る。

上野　我を蔑なす憎き奴、軍神への血祭りに彼れが命を斷つてくれん、それなる松へ括し上げい。

玄蕃　心得ました。

〽心得たりと飯塚が、又も手荒く與四郎を、傍の松に引括れば、上野側へ立寄りて、

ト玄蕃與四郎を上手へ引立て來り、上手の松へ立身にてくゝり附ける、上野之介刀を持ち與四郎の側へ來り、誂への床、下座の合方になり、

上野　氏長公の御世になさんと、窃に一味徒黨を語らひ、千辛萬苦なしたるも汝が大事を漏らせしゆゑ、大望空しくなるのみか、先祖の武功も水となり、十八萬石の領地を失ひ、家中一統路頭に迷ふも、これ皆汝がなす所ゆゑ、今八つ裂きになしたりとも、罪に比すれば慊らぬ、思へば憎き匹夫めが。

〽刀すらりと拔き放し、見るも鋭き氷の刄、目先きへぐつと差出せば、

ト上野之介刀を拔き、與四郎の鼻の先きへ突出す、與四郎思入あつて、

與四　そんならわしを殺すのか。

上野　おゝ、予が手に掛けて殺してくれる。

與四　むゝ腹が癒ぬなら殺さつせえ、非義非道の刄に掛り、果敢なく命は捨てるとも、此與四郎一人は死なぬ。どうでこなた衆主從も斯かる企てなすからは、遲かれ早かれ死ぬ體、冥土へ行つて待つ

て居るぞ。

上野　返す／＼も憎き奴。

靱負　拙者も共々此奴が成敗、

〽刀抜き持ち弓手馬手、脇腹ぐつと貫けば、あつと苦しむ與四郎を、尻目に掛けて主從が、

ト靱負刀を抜き上手へ廻り、双方より與四郎の目先きへ刀を出す、與四郎びつくりなす。直に脇腹へ突込む、與四郎足をもがきて苦しみ、仕掛にて血汐流るゝ、兩人是れを見て、

上野　切ないか。

靱負　苦しいか。（ト双方より刔る。）

與四　もう此位さいなんだら、早く命を取つて下せえ。

靱負　まだ／＼滅多に殺すものか。

〽又も貫く急所の深手に、腹に波打つ身の苦しみ。

ト又兩人脇腹を突く、與四郎よろしく苦痛の思入あつて、

與四　あゝ苦しい／＼、早く殺して下さい／＼。

上野　どれ、息の根を止めてくれうか。

〽正純刀取り直し、喉元突かんとなす折柄、小蔭を駈け出る作兵衛が。

ト上野之介刀を抜き血を振ひ取直して、與四郎へ止めを刺さうとする途端、ばた〳〵になり下手より以前の作兵衛繩附のまゝ出來り、是れを見て、

作兵　や、こりや與四郎を。(ト側へ行かうとするを、玄蕃繩をとらへて引き据る。)

上野　外出せしゆゑ手に掛けた。

作兵　えゝ、餘りと言はゞ非道な仕方。(靱負作兵衛の前へ刀を差出し、)

靱負　われも今に殺してくれるぞ。

〽非業な姿見るよりも、側へ行き度く作兵衛が、身を揉みあせれど繩目の悲しさ。

ト作兵衛與四郎の側へ行かうと立ち掛るを、靱負蹴倒し玄蕃むごく繩を引附ける。作兵衛是非なく、

作兵　これ與四郎、作兵衛なるぞ。(ト是れにて與四郎目を明き見て、)

與四　おゝ、親方か。(ト嬉しき思入。)

作兵　えゝ、非業な最期を。

靱負　えゝ、かしましい、默り居らう。

上野　どれ、成敗をいたしてくれん。

〽ぐつと突き込む止めの刀、果敢なく息は、

ト上野之介與四郎の咽喉へ刀を突込む、仕掛にて血汐流れ與四郎よろしく苦しむ、作兵衞駈け寄らうとするを、靭負肩へ踏みかけ刀を差附ける、作兵衞ちえゝと悔しき思入、双方引張りよろしく、三重カケリ、ドロ〳〵のやうな風の音にて、

幕

四幕目

石橋宿棒鼻の場

同　本陣の場

〔役名――井伊掃部頭、松平越中守、石川八左衞門、庄屋藤左衞門、板倉内膳正、道中師百錢長次、本陣の亭主德右衞門、森川左京、山口主水、櫻井數馬、村越右近、立場の亭主市助、將軍氏光公、其他。〕

(石橋宿の場)――舞臺眞中誂への立場酒屋、酒肴と記したる障子を建掛け、床几二三脚並べあり、上下松並木在體の遠見、日覆より松の釣枝、よき所に日光街道石橋宿といふ傍示杭、爰に○△□の仕出三人床几に掛け、酒を呑み居る、下女二人前垂がけにて給仕をなし、市助前垂尻端折り、亭主のこしらへにて酒をつぎ居る。總て石橋宿棒鼻の模樣、馬士唄にて幕明く。

○　おい〳〵姉さん、燗が出來たら早く跡をくんなせえ。
女一　はい〳〵畏りました。(ト銚子を出し。)もし、お溫ければ直しませうわいな。
△　有難え〳〵、何でも呑むだけ呑まねえうちは、腹の蟲が承知しねえ。
□　おらあ又肴あらしだ、姉さん鯡と蒟蒻を、もつと爰へくんなせえ。
女二　はい〳〵畏りました。もし親方、鯡と蒟蒻がお三人前出ます。
市助　おつと承知だ。それ、お三人前。(ト女の二肴を出し、仕出三人酒を呑みながら、)
○　時に御亭主、日光御社參で大層宿々が込合ひますの。
市助　いやもう込合ふ段ではござりませぬ、此街道始まつてこんな賑やかな事はござりませぬ、其落ちこぼれで仕合せに、私共の見世なども、引切りなしのお客さまでござります。
△　何にしろ將軍樣が初めて御參詣なさるのだから、定めてお供の御同勢は夥しい事であらうの。
市助　左樣でござります、お附人には先づ第一に彦根の掃部樣、白河の越中樣、其外數多のお大名が皆行列でお通りゆゑ、實に立派な事でござります。
女一　私共もたつた今お通りを拜見いたして、ほんにびつくりしましたわいな。
女二　あなた方は將軍樣を、まだお拜みなされませぬか。

□ どうぞ拜みたいと思ふから、態々在から出て來たが、まだ今から間に合ひませうかの。

市助 まだ大丈夫間に合ひます、此石橋がお小休みで、今夜は宇都宮の御城内へお泊りと申す事ゆゑ、其道筋へお出でなされて、お拜みなされたがよろしうございます。

○ そんなら是れから先へ廻つて、雀の宮の棒鼻あたりで、將軍樣を拜みませう。

△ 時に御亭主、勘定は幾らになりますの。

市助 へい〳〵、御勘定でございますか、六百八十文でございます。

□ そいつは素敵に安勘定だ。（ト此内錢を出して、）

○ それ、爰へおきますぞ。

市助 有難うございます。

△ さあ〳〵、此勢ひで出掛けよう。（ト三人立上る。）

女兩人 お靜かにいらつしやいまし。

三人 又歸りに寄りますぞや。（トやはり馬士唄にて、三人上手へはひる。）

市助 やれ〳〵、今日はお客さまが朝ッから立通しで、こんな忙しいことはない、手前達も草臥れたらう。今に鉢石の羊羹を、茶受けに奢つてやりますぞ。

女兩人 どうぞお願ひ申しますわいな。

ト そこらを片附ける、長持唄躁路の鳴物になり、花道より六人雲助のこしらへにて菰包みの長持を、とんぼにて擔ぎ、長次脚絆一本差し、合羽を肩へ掛け道中師のこしらへにて附添ひ出來り、花道にて、

雲一 やれ〳〵、重いぞ〳〵。

六人 ぬけるぞ〳〵、肩がぬけるぞ。

長次 これさ、もうちつとの所だから、そんな弱い音を出さねえで、遣つてしまふがいゝぢやあねえか。

雲一 どうして〳〵、棒が肩へめり込みさうだ。

雲二 もう〳〵我慢が仕切れねえぞ。

雲三 何にしろ立場まで、漕ぎ附けろ〳〵。

六人 それ重いぞ〳〵、そこだぞ〳〵、(ト舞臺へ來り、)もう堪らねえ、立てろ〳〵。

ト よき所へ長持を下し、

雲一 中は何だか知らねえが、べらぼうに重い長持ぢやあねえか。

雲三 十五の年から雲助をするが、こんな重い物に出會した事がねえ。

雲四 何ぼおらッちの肩だといつても、大概數のあつたものだ。

雲五　泣事を言ひたかァねえが、息が切れて堪えられねえ。
雲六　もう〳〵いやだ、斷つてしまへ〳〵。
雲一　お氣の毒だが、もし親方、わつちらにやあ、もう、
六人　擔げねえよ。
長次　これさ、貴樣達ァどういふもんだ肩を元手の生業で擔げるの擔げねえのと、そんな事をいふのが見得でもあるめえ、もう少しの所だから、我慢をして遣つてくんなせえ。
雲一　もし〳〵親方、もう少しだと言ひなさるが、假令一跨ぎの丁場でも擔げねえと言ひ出したら、わつちらあもう動かねえよ。然しそれも詠と歌、どうか色を附けて貰やあ擔ぐめえものでもねえ。何とみんな、さうぢやねえか。
雲二　さうだ〳〵、幾ら擔げと言ひなすつても、そんぢよそこらの話しがなけりやあ、此長持ぢやあ上らねえ。
雲三　もし親方、達つて遣らせようと思ふなら、一杯呑ましておくんなさいまし。
雲四　それがいやなら、長持ァ此棒鼻へ晒し物だ。
雲五　お前さんも素人ぢやあなし、萬更目の明かねえ人でもあるめえ。

雲六　高が錢で濟むことだ。

雲一　遣る所までやッつけるから、器用に酒手を、

六人　おくんなせえ。（ト口々にわや〳〵いふ、是れにて長次思入あつて、）

長次　何ぞの附にやあ酒手々々と、よく錢にこだはりやあがる、忌えましい奴等ぢやあねえか。（ト財布より錢を一貫出し、）それ、一杯呑ましてやるから、ぐづ〳〵言はずに早くやれ。

ト件の錢を投り出す、雲助一取つて見て、

雲一　もし親方、こりやあ錢が一貫だね。こう〳〵みんな見や、是れだけの天窓へ酒手が一貫だ。

雲二　面白くもねえ、六人の中へ一貫ばかり、したみ酒も呑まれるものか。

雲三　見掛は立派な男だが、する事はしみッたれだの。

雲四　そればかりの端た錢なら、こつちからくれてやらあ。

雲五
雲六　返してしまへ〳〵。

雲一　もし親方、思召は有難うございますが、まあ是れはお返し申しませう。

ト雲助の一件の錢を投出す、長次むつとして、

長次　そんなら貴樣達ア一貫の酒手で、不足だといふのだな。

雲一　さうよ、不足だから返したのだ。

長次　さうして幾ら出してやりやあ、手前の氣に入るのだ。

雲二　長え短けえはいらねえから、一人前に一貫づゝ、六貫酒手をはづみなせえ。

長次　なに六貫よこせ、そんな戯言はまたにしやあがれ。（ト長次きつとなり、）これ、うぬ等ア人を見損なやあがつたか、口幅ツてえ言草だが百錢長次といはれちやあ、小ざし仲間で人にも知られ大名方へ出入りをして、年中參勤交替に街道筋を股にかけ、何處のいづくの問屋場でも、引けを取らねえ道中師だ、跡の宿から手前達の機嫌を取つた其上で酒手を出すのはこつちの達引、それを多いの少ねえのと、あんまり御託をつきやあがると、そつちの爲にならねえぞ。

ト弱身を見せぬ思入、雲助六人は長次を取巻き、

雲三　もし〱、大層ぽん〱言ひなさるが、それ程お前がいゝ顔なら、出すものを出して文句を言ひねえ。

長次　べらぼうめ一貫の其上は、百の錢も出すものか。これ外の仕事と譯が違ふぞ、假令お供方でも御用荷物、ぐづ〱言やお片ッ端、問屋場へそびいて行くぞ。

雲一　なに、問屋場へそびいて行く、そびいて行くなら行つて見ろ。

六人　さあ、どうともして見やあがれ。（ト六人して長次へ立ちかゝる。）

長次　こいつらあ途方もねえ奴等だ。（ト長次立ちかゝる、市助これを留めて、）

市助　何だか知らねえが、見ツともねえ、まあ靜かにしなせえ〳〵。

六人　えゝ打捨つておきなせえ。

ト皆々ごつちやになり、長次へ摑み掛る、市助下女二人捨ぜりふにて是れを留める。花道より石川八左衞門野半纒股引ぶつ裂羽織大小にて、足早に舞臺へ來て此中へはひり、

八左　こりや〳〵待て、上樣御通行の宿内に於てかしましき爭論、えゝ控へ居らう。

トきつと言ふ、是れにて皆々控へる、長次八左衞門を見て、

長次　是れは〳〵御近習役の、石川八左衞門樣でござりましたか、よい所へお出で下さりました。

ト八左衞門も見て、

八左　おゝ其方は宰領方にて、慥長次と申すものぢやな。

長次　へい〳〵、御意の通り、小ざしの長次めでござりまする。

八左　して只今の爭論は、ありや一體何事ぢや。

長次　いやもお聞き下さりませ、是れなる六人の人足共が、あの長持を小金井から蜻蛉でかついで參る

路々、重い〳〵と申しますのを種々と宥めまして、やう〳〵爰までまゐりましたが、到頭あれへ下しまして、酒手をくれねば一寸も歩けぬと申しますゆゑ、一貫文遣しましたを六貫よこせと無法のゆすり、それから段々言募り思はず立ち騷ぎましたる所、旦那樣のお目に留り、へい〳〵恐れ入りましてござりまする。（ト是れを聞き、八左衞門思入あつて、）

八左　すりや長持が重いとあつて、定めの賃錢の其外に、酒手をくれいと申すのぢやな。こりや人足共、其方どもは不埓な奴ぢや、大切なる御社參の御用荷物を存じながら、法外なるねだり事、達つて兎や角申すなら、其分には差おかぬぞ。（トきつといふ、雲助一おづ〳〵出て、）

雲一　もし旦那樣、成程賃錢の其外に酒手をねだるは、わつち等が惡いやうに聞えますが、お定りの貫目より六七貫も重い長持、一杯呑まして貰はにあや、どうしても肩が續きませぬ。

雲二　それだからわつち等が、こだはりを附けたのは、あんまり無理ぢやあござりますめえ。

八左　成程實以て重ければ隨分手當も遣はさうが、見た所から輕さうな、是れしきの荷物を、重いと申すは其方共が僞りゆゑ、酒手を出す謂れはないわえ。

雲三　へえ、そんならお前さん、わつち等が重いといふのは、嘘だと思つておいでなさるかね。

八左　何の重い事があらう、高の知れた小長持、六人掛つて擔げぬとは、餘りと申さば不便な奴等、身

共ならば一人で擔ぐわ。

雲四　もし〳〵、御常談もいゝ加減におつしやりませ、是れが一人でかつげりやあ、わつち等の方で酒手を上げます。

八左　なに、酒手をくれる、さう聞いては面白い、幸ひこれに酒屋もある、然らば身共一人にて見事擔いで見せるから、たんとは入らぬ二升買やれ。

雲五　買ひますとも〳〵、一人で此荷が上つた日にやあ、酒を買つても悔しくねえ。

雲六　物はためしだ、二升買つて旦那の力を見ようぢやあねえか。

八左　おい御亭主、二升ついでくんなせえ。

市助　つぐ事はつぎますが、どうぞ現金にお願ひ申します。

雲二　よし〳〵錢は前錢だ。さあ〳〵、みんな錢を出せ〳〵。

六人　さあ〳〵、集めッこだ〳〵。

ト皆々の端た錢を集め代を拂ふ、此内市助二升樽へ酒をつぎ床几の上へ置く。

市助　へい、是れに二升ござります。

八左　よし〳〵、其處へ置いてくりやれ。

雲三　時に旦那、こつちで二升買ひましたが、ひよつと、あの長持がお前さんに擔げずば、此出入は何うなりますな。

八左　成程こりや尤もなる掛合ぢや、然らば斯やういたすであらう、もし八左衞門の力が足りずば、其方共六人へ一斗酒を遣はさう。

六人　なに、一斗お買ひなさいますか。

八左　武士の詞に二言はない。こりや〳〵亭主、もしも身共に擔げぬ時は、直に一斗ついでやりやれ。

市助　へい〳〵畏りましてござります。（ト長次氣遣ふこなしにて）

長次　もし旦那樣、最前からうか〳〵と、餘り御常談をおつしやりまして、あなた是れが擔げまするか。

八左　長次必ず心配いたすな、是れしきが擔げねば、生きて居る甲斐がないわえ。

長次　左樣なら、見事あなたが、

八左　只今擔いで見せる程に、そちもそれにて見物しやれ。

六人　早く力が見たいな〳〵。

八左　さらば一肩入れようかな。

ト八左衞門腕まくりをなし、長持の側へ行き棒の先きへ手を掛け、ちよつと貫目を引いて見る、雲助

六人どうして擔げるものかと囁き合ふ思入、トヾ八左衞門肩を入れうんと擔ぎあげ、上下へ一二遍かつぎ歩く、皆々びつくりして、

六人　やあ、擔いだぞ〳〵。

長次　こいつあ妙だ。不思議だ〳〵。

市助　仁王樣の再來か。

女二人　もし、天狗樣ではないかいな。

ト皆々捨ぜりふにて囃し立てる。よき程に八左衞門長持を元の所へおろし、

八左　どうぢや人足共、手並は見えたか。

六人　見えましたとも〳〵、實にびつくり仰天でござります。

八左　はて、こんなものは朝飯前ぢや。（ト八左衞門床几へ掛ける、長次感心の思入にて）

長次　よもや〳〵と思つたに、六人掛りの長持を一人でお擔ぎなさるとは、驚き入つた旦那のお力。

市助　わしも感心しましたが、首尾よく參つたばかりに、どうやら斯うやら一斗の酒を、賣り損なつて殘念至極。

雲一　又こつち等は、一斗の酒を、

六人　呑み損なつて殘念至極。
八左　然らば身共一人にて、酒の馳走に預からうか。（ト有合ふ樽を取り、）女ども、茶碗を持て。
女一　あい〳〵、合點でござんす。
　　ト女の一茶碗を出す、八左衞門長持へ足を掛けて、自身に酒をつぎぐつと乾して、
八左　あゝ甘露々々、いつ呑んでもよい味ひぢや。
六人　あゝ、いつ嗅いでもよい匂ひぢや。（ト羨ましきこなし、八左衞門又一つついで呑み、）
八左　人に買はして呑む酒ゆゑ、また格別に旨いやうぢや。長次一獻さゝうかな。
長次　有難うはござりますが、まあお預けにいたしませう。
八左　すりや、其方は酒は嫌ひか。
長次　生れ附いての不調法。
八左　はてさて、下戸とは無器用な。
雲一　そんなら上戸がちよつとお相を。（ト側へ來る、八左衞門見て、）
八左　わりや呑みたいか。
雲一　一つ頂戴。（ト額を出す。）

八左「ええ未練を申すな。」(ト雲助一の天窓を張るを、道具替りの知せ、)相手はいらぬわ。
ト八左衞門椁の口から呑み、皆々指をさし呆れる思入、馬士唄にて道具廻る。

(石橋宿本陣の場)――本舞臺四間通し中足の二重本緣附、向ふ唐紙形の襖、軒口へ葵の紋の幕を張り、上手好みの板塀、下手同じ塀に冠木門の庭口、所々に樹木、總て石橋宿本陣御用座敷の模樣、二重に明荷、葛籠など置き、爰に四人旅裝諸士のこしらへて控へ居る。此模樣驛路の入りし合方にて道具留る。

○「何といづれも、此度は將軍家の御社參に、お供に立ちし我々は、上なき仕合せではござらぬか。
△「左樣々々、常の旅とは事替り、道中筋も肩身の廣さ、實によい心持でござるて。
□「それと申すも拙者共は、當時天下の大老たる、掃部頭樣の御家來故、麁末にされぬと申すもの。
◎「今晚は宇都宮の本田家の城内へ、お泊りと申す事ゆゑ、定めてよい手當でござらう。
○「其儀は申すまでもなく、かねがね上樣御招待の爲、お座敷からお湯殿まで新たに建しと申す事。
△「流石は本田上野殿、行き屆いた事でござる。
□「其樣子では食類なども、定めてうまいものを喰せるでござらう。

◎　拙者などは只今から、その持成が樂しみでござる。
○　何さま今宵は一世の晴、性根をすゑて膳部に向ひ、
△　喰つて〳〵喰ひまくり。
□　やがて食傷、
◎　仕つらん。

ト此時下手の切戸より德右衞門、袴着流し本陣の亭主のこしらへにて手をつかへ、

德右　はツ、各樣へ申し上げます。
○　其方は此家の主人。
四人　あわたゞしい何事なるぞ。
德右　只今宇都宮在鹽谷村の庄屋藤左衞門と申す者、彥根樣へ直き〳〵にお目通りを願ひたしと、罷り出ましてござりますゆゑ、お次に控へさせおきましたるが、此儀如何計らひませうや。

ト諸士四人是れを聞き、

□　なに、宇都宮在の庄屋が、御主人掃部頭樣へ、お目通りを願ふと申すか。
德右　何か一大事の趣きを竊に言上仕つると、遮つての願ひゆゑ、留めおきましてござりまする。

△　假令何と申さうとも、身許も知れぬ怪しき奴。
□　御大老へ直き〳〵に、お目通りとは失敬至極。
◎　こりや御主人へ伺ひましても、とてもお許しはござりますまい。
○　こりや〳〵亭主、願ひの趣き叶はぬと申して、其儘に追返せ。
徳右　はツ。早速追ひ返しまするでござりまする。（ト徳右衞門立ち掛ろ、此時奥にて）
掃部　亭主待ちやれ。
徳右　はツ。（ト控へる。）
○　あのお聲は、
四人　御前樣。
ト誂への合方になり、奥より掃部頭野袴ぶつ裂き羽織大小、大名の旅裝にて出來り、二重よき所に住ひ、
掃部　こりや亭主、何か仔細は存ぜねども、一大事とは聞き捨て難し、其者これへ召連れい。
徳右　左樣ならお目通りの儀、お許しなされて下さりまするか。
掃部　掃部頭直き〳〵に面會いたして遣はすぞ。（ト諸士四人氣遣ふこなしあつて、）

○　仰せにはござりますれど、庄屋と申せばやはり土民、お目通りの儀は、

四人　何とも以て。（ト危むこと）

掃部　はて、假令土民であらうとも、一大事と聞きながら事の仔細を糺さねば、大老の役目が立たぬ。

徳右　こりや亭主、苦しうない是れへ呼べ〳〵。

はツ、畏りましてござりまする。（ト徳右衛門下手の切戸口へはひる、掃部頭思入あつて、）

掃部　今宵宇都宮の城内へ上樣お入りの其幸先き、同所の庄屋が密々に申入れたき事ありとは、何とも以て心得ず、早く仔細を承はりたいものぢや。

トよろしくこなし、此時切戸の内より、徳右衛門案内して前幕の藤左衛門、袴羽織訴狀を懷へ差しおづ〳〵と出來り、平舞臺下手へ平伏なす。

徳右　はツ、お許しによつて藤左衛門、即ち召連れましてござりまする。（ト掃部頭藤左衛門を見て、）

掃部　こりや、庄屋藤左衛門とは其方なるか。

藤左　はゝツ、御意の通り私事は、宇都宮在鹽谷村にて名主役を相勤めまする、藤左衛門と申す者。恐れ多くも御大老樣へ、直き〳〵お目見得を願ひし所、早速のお許し、大慶至極に存じ奉つります。

掃部　して其方が掃部頭へ、申し入れたき仔細と申すは、如何なる譯ぢや早く申せ。

藤左　其儀は、密々申し上げたき、一大事にござりますれば、恐れながらお人拂ひの儀を願はしう存じまする。（ト掃部頭うなづく）

掃部　密事とあれば尤も至極。こりや亭主、暫く此場を遠慮いたせ。

徳右　畏りましてござりまする。（ト掃部頭諸士に向ひ）

掃部　其方共も次へ立て、

四人　はツ。（ト顏見合せ立兼ねるを）

掃部　えゝ、立てと申すに。（トきつと言ふ。）

四人　はゝツ。（ト諸士四人奧へはひる。徳右衛門下手へはひる。掃部頭思入あつて）

掃部　藤左衛門近う。

藤左　はゝツ。（ト二重の側へ進む）

掃部　して一大事の趣きは。

藤左　他聞を憚り、逐一書面に認めまして、持參仕ツてござりまする。いざ、御一覽下さりませう。

ト藤左衛門訴狀を出す、掃部頭受取りちよつと四邊へ思入あつて、書面を開き、口の內にて讀んで一々びつくりすることなしあつて、よろしく讀み終り、

掃部　こは容易ならざる本田が逆意、扨は今宵の御旅泊に、將軍家を失はんと、斯かる企てなしたるか。

藤左　さあ、それゆゑに此事を、お知らせ申さぬ其時は、御身の大事と存ぜしゆゑ、御大老のあなた樣へ少しも早く言上なさんと、取るものも取りあへず、是れまで出ましてござりまする。

掃部　ほゝお、よくぞ注進いたせしぞ、汝が知らせのあらざれば、上樣宇都宮へ入らせられ、釣天井の計略に、やみ／＼陷りたまはんに、斯く急變の際に臨み本田が惡事顯はれしは、是れも偏に日光尊靈將軍家を守りたまひ、人を以て言はしめたまふ神祖の示現、ほゝお有難し忝けなし。（トちよつと日光の方を拜禮する事あつて、藤左衞門に向ひ）まつた其方が志しは、お上へ對して上なき忠節、農家に稀なる義心の程、近頃感伏いたせしぞ。

藤左　こは冥加なき其お詞、多年の間本田樣の御領内には住みますれど、天下の大事を餘所には見られず、殊には常から非道にて民百姓に難儀を掛け、慈悲を思はぬ御領主ゆゑ、只今御訴訟申しまするも、お上のお爲と二つには、日頃の遺恨を返したさ。恐れながら御前樣、御推量なされて下さりませ。

ト よろしく思入。

掃部　心底の程察し入る、さりながら其私の遺恨は格別、捨ておき難きは謀叛の上野、猶其方には城

内の様子尋ね問ふべき仔細もあれば、事落着に及ぶまで、當本陣へ留めおくぞよ。

藤左 はッ、其儀はかねて覺悟の前、いつくまでも此所に、控へまするでござりまする。

ト掃部頭へ向ひ、

掃部 誰そ居らぬか、早參れ。(ト奥にて、)

△○ はあゝ、(ト奥より○△出來り、)何か御用にござりまするか。

掃部 あれなる藤左衛門を一間へ伴ひ、心を附けて張番いたせ。

○ 畏つてござりまする。

藤左 左樣なれば訴人の大法、お繩を頂戴いたしまして。

掃部 あいや繩目の儀は許して遣はす。こりや、麁略なきやう持成いたせ。

○ 畏つてござりまする、いざ藤左衛門どのお立ちなされい。

藤左 左樣なれば、仰せに隨ひ。

○ いざ、御案内仕らん。(ト○案内して藤左藏門奥へはひろ、掃部頭△に向ひ、)

掃部 こりや其方は詰所へ參り、松平越中殿に、掃部頭が御意得たしと急速に申し入れい。

△ 畏つてござりまする。

ト△奥へはひる、掃部頭再び件の書面を繰返し見て、小首を傾け、いろ〳〵考へる思入、よき程に奥より松平越中守、野袴打裂羽織大小、大名の旅裝にて出來り、二重下の方に住ひ、

越中　何かは存ぜず大老には、火急の御用とござりますゆゑ、罷り出でましてござりまする。

掃部　これは〳〵白河侯には、早速の御入來重疊々々。ちと密々に其許へ申し入れたき仔細あれば、わざわざお招ぎ申してござる。

越中　はて、密々の御用とは、心得ざる其お詞、して其仔細は。

掃部　別儀でござらぬ越中殿。君御社參の御道筋に、逆意をふくむ曲者がござる。

ト越中守不審の思入にて、

越中　なに、逆意の曲者とは。

掃部　只今宇都宮在の庄屋にて、藤左衞門と申す者、竊に拙者へ注進せし、事の仔細は此書面、それにて御一覽下され。(ト掃部頭以前の書面を出す、越中守受取り、開き見て、びつくり思入あつて、)

越中　やゝ、驚き入つたる訴狀の趣き、扨は本田上野之介、疾より逆意を含みしか。

掃部　日頃より彼れが素振り心得難しと思ひしが、案に違はぬ今度の叛逆。

越中　某とても宇都宮へ、今宵御旅泊ある事を、何となく氣遣ひしが、斯かる企てある事が自然と的中

なしたるか。

掃部　實に神君の御武德より、今三代の君に至り、世は泰平に及びしに。

越中　かゝる謀叛の曲者あつて、窃に天下に弓引くとは。

掃部　油斷のならぬ、

兩人　儀でござる。（ト兩人よろしく思入あつて、）

越中　何は格別、危きは將軍家の御身の上、此凶變を避けんには、手段なくては叶ふまじきが、して大老の思召しは。

掃部　掃部頭心中に存じ附きたる儀もござれど、おのれ一人の存意を以て、事をなすべき場合にあらず、先づ以て承はりたいは、其許の思召し。

越中　なに越中守が所存の程演舌いたせと御意あるか。はゝツ、暫く御猶豫願ひ奉つる。（ト越中守小首を傾け深く考へるこなしあつて、獨りうなづき、）はゝツ、拙者が存意は。（ト四邊を見廻し、）御免、（ト越中守掃部頭の側へ進み、扇にて疊へ書いて見せ、）此儀は如何でござりまする。

ト掃部頭につたり思入あつて、

掃部　ほゝお、流石は白河侯の思召し、言ひ合さねど某が、所存の程も先づ其通り。

越中　すりや、彦根侯にも御同意とな。

掃部　兩人符合なしたる上は、それと決定いたすべし、猶其上に、（ト掃部頭同じく扇にて疊へ書いて見せ、）な、斯く計略を施して、上野めを僞り果せ、お歸りあるやう取計らはん。

越中　それぞ誠に天晴妙計、是れより直に江戸表へ、御歸城だにあるならば、君の御身に恙なし。

掃部　此上は何かの手筈、板倉内膳と仰せ合され、密々の御計らひ、諸事は貴殿へお頼み申す。

越中　委細承知仕つる、及ばずながら拙者めが一命かけての御奉公、必ず氣遣ひめさるゝな。

掃部　其一言を承はり、先は安心いたしてござる。（ト兩人よろしく思入、風の音になり樹木の間より白鳩二羽藍糸引にて日覆へ引いて取る。）あれ見られよ白河侯、梢を立ちし白鳩の東の方へ飛行きしは、神も歸館を勸めたまふ、日光山の則ちお告げ。

越中　古へ右幕下頼朝公伏木隱れの危難の折も、鳩の奇瑞に敵を避け、遂に其身をのがれし例。

掃部　それは治承の合戰に、語り傳へし石橋山。

越中　爰は所も石橋宿に、同じ淸和の流れなる、

掃部　源氏の長者を守護なして、

越中　敵の手段の裏をかき、

掃部　危難を避くるは、
越中　苦肉の計策。
掃部　一世の忠義は、（ト兩人ちよつと顏を見合せるを道具替りの知らせ、）
二人　爰でござる。（トよろしく思入、此模樣誂への合方にて道具廻る。）

（本陣玄關先の場）――本舞臺眞中二間の玄關、霧除けの本庇式臺廣く飾り、軒口に葵の紋の幕を張り、よき所に數本の槍かけてあり、上下さゝら子塀、總て右の本陣玄關先の模樣、馬士唄にて道具留る。と揚幕にて、

四人　さゝ石川氏、お越しなされ〳〵。
ト花道より以前の八左衞門大分酒に醉ひたるこなし、森川左京山口主水、櫻井數馬、村越右近の四人野半纏打裂大小、同役のこしらへにて八左衞門を肩に掛け出來り、花道にて、
八左　やれ〳〵、いゝ心持に醉つた〳〵。もう身共は步けぬ〳〵。
左京　八左衞門殿には、何れで御酒を參られたか。
主水　餘程酩酊の樣子でござるな。

數馬　こりや石川氏、大切なるお供先きにて、見苦うござるぞ。
右近　何は兎もあれ本陣まで。
四人　さゝ、お越しなされい／＼。（ト肩にかけ連れて行かうとする。）
八左　いや／＼、何處へも參らぬ／＼。爰へ寐る／＼。（ト他愛なきこなし、）
主水　是非ともあれへお越しなされ。
左京　はてさて、爰は往來中でござる。
四人　さゝ、お歩きなされ／＼。（ト寐ようとする八左衞門を、無理に引立て舞臺へ來り、）
左京　石川氏、爰が石橋の本陣でござる。
主水　上樣にも此處にて、暫時の間御休息。
數馬　未だお立ちに間もござれば、我々が詰所へ參られ。
右近　其酩酊をお醒しなされい。
四人　さゝ、御同道仕つらう。（ト玄關より抑上げようとする。）
八左　えゝ又してもうるさい／＼。寐ようといふに寐かさぬとは、さりとは意地の惡い。
左京　それぢやと申して、爰は端近。

主水 寐る所ではござらぬわえ。

八左 何であらうと構はぬ〳〵、お供觸れに相成るまで、どりや一寐入り仕らう。

ト八左衛門四人を拂ひのけ、式臺下の方へころりと寐る。

左京 これさ、如何いたしたものでござる、恐れ多くも將軍家御小休みの本陣なるぞ。

主水 其玄關先きをも憚らず、言語同斷のこの振舞。

數馬 酒興の上とは申しながら、行儀作法を失ふ石川。

右近 もし諸侯方の目に掛らば、同役共までのがれぬ越度。

左京 こりやどうあつても此儘に、打捨てはおかれますまい。

主水 然らば引起して召連れませう。

數馬 いかさま、左樣仕つらう。

四人 八左衛門殿起きさつせえ。

ト四人にて八左衛門を引立てようとする、八左衛門寐たまゝ、足にて四人を蹴倒す。四人又掛るを八左衛門はづみを打つて一人を蹴る、是れにてぽんとかへる。

八左 あゝ、いゝ心持だ〳〵。(ト下の方へ寐返りをして鼾をかく、四人きつとなり、)

左京　重ね〴〵の無禮の振舞。

四人　もう此上は。

ト四人刀の柄へ手を掛け立ちかゝる、早き合方ばた〳〵になり、下手より板倉内膳正野袴打裂大小、大名の旅裝にて一通の狀を持ち走り出て、

内膳　何れも方お聞きなされ、只今江戸表老中方より早打の御狀到來せしぞ。

四人　なに、早打の御狀とな。（ト四人は八左衞門を捨ておき氣遣ふこなし、内膳奥へ向ひ）

内膳　彦根侯白河侯は在するか、板倉内膳正御意得申さん。

ト呼ばゝる、是れにて玄關の奥より、掃部頭越中守出來り、

掃部　樣子はあれにて承はる、氣遣はしきは火急の早打。

越中　して、御狀の趣きは。

内膳　即ち是れに。

ト内膳正件の書狀を出す、掃部頭越中守狀を開き紙の跡先を持つて、兩人一時に是を讀み、

掃部　やゝ、扨は大御所樣俄の御不例。

越中　御大切なる御容態とな。

内膳　さるに依つて將軍家、途中より御歸城あつて然るべしとの其文面。

掃部　はて、椿事出來。

掃部越中　いたせしよな。（ト兩人態と驚く思入、諸士四人もびつくりこなし、）

内膳　今の今まで我々は、斯かる事とも露知らず、君の御供いたせし所、

左京　思ひ掛けなき御狀の趣き。

四人　驚き入つてござりまする。

掃部　何は差しおき御容態御大切とあるからは、暫時の間も捨ておき難し。

越中　して大老には是れより直に、歸城と決定なしたまふか。

内膳　まつた、御社參と定めたまふか。

越中　御賢慮伺ひ、

兩人　奉つる。（ト是れにて掃部頭思入あつて、）

掃部　御尤なる御尋ね、先づ掃部頭が存ずるには、假令御社參の儀は重くとも、父君御不例とある上は、片時も早く御歸城なくば、御孝道に背き申さん。尤も日光山へ御名代の儀は板倉殿勤められ、越中殿には取敢へず大御所樣お見舞として、君に先立ち江戸表へ、お越しあつて然るべし。

越中　すりや、お先番の儀は、拙者が役目。
内膳　御社參の御名代は、此内膳に勤めよとな。
兩人　はゝッ、委細畏つてござります。
掃部　御近習役の面々には、御供方の大小名へ、此議一々注進めされ。
四人　心得ました。（ト四人は上下へはひる。）
掃部　拙者は是れより將軍家へ、事の仔細を申し上げ、猶御兩所へ役目の御差圖仕つらん。（ト掃部頭立ち上り、寐て居る八左衞門に目を附け思入あつて、）斯かる折には自から諸人の心顚倒なし、御歸館の途中も覺束なく、勇士を選んで我が君の警固なすべき此時節、力量勝れし武士は、そこら邊にありながら、好める酒に性根を亂し、はて、やくたいもなき。（ト思入あつて氣を替へ、）どりや、御前へ伺候仕つらん。（ト唄になり、掃部頭八左衞門を尻目にかけ奧へはひる、越中守思入あつて、）
越中　板倉殿、それに熟醉いたし居るは、石川氏ではござらぬか。
内膳　如何にも、石川八左衞門でござる。
越中　かねぐ大酒と承はりしが、お供先きをも憚らず行儀を亂せし其酩酊、御所存深き掃部頭殿、彼れが武勇を惜しませたまひ、歎息ありしお詞は、それと推察いたせども、此體にては是非もな

し。
ト思入。

内膳　此上は引起して、性根の程を附け申さん。（ト八左衛門の側へ寄り、）石川殿起きられよ、八左衛門殿々々。（トゆり起す、八左衛門其手を拂ひ退け、）

八左　誰だか知らぬが許せ〳〵、もう一滴も呑めぬ〳〵。（ト他愛なき思入、越中守きつとなり、）

越中　こりや石川氏、將軍家の御大事なるぞ。（ト扇にて式臺を叩く、八左衛門むつくと起きて、）

八左　なに、我が君の御大事とな。（ト目を擦りそこらを見る、）

越中　大御所樣御不例に附き、これより君には御歸城なるぞ。

八左　然らば御供仕らん。えゝい。（ト嚏をしてやはり生醉の思入、）

越中　すりや、それ程に酩酊なしても、お供を願ふ所存とな。

八左　御近習役の八左衛門、いづくまでも御供いたす。

越中　其志しは神妙なれど、熟醉ゆゑに覺束なし。

八左　はて、醉ひはいたさぬ、ずんと慥ぢや。

越中　さらば呼吸を試し見ん。（ト越中守玄關に掛けし槍に目を附け、）それ。

ト内膳正へ目くばせなす、内膳正心得、立上つて件の槍を取り、

内膳　石川氏、貴殿醉はぬと仰せあるが、路次にてかゝる狼籍あらば。

ト突いて掛る、八左衛門きつとなり、

八左　粉骨なして防ぎ申さん。

内膳　所を斯うして。

ト内膳正また突いて掛るを八左衛門扇にて受留め、きつと見得。是より張扇の入りし鳴物になり、小短く立廻りあつて八左衛門槍の汐首を握りきつと留める、越中守感心のこなしにて、

越中　ほゝお、大酒に亂れぬ五體の働き。

内膳　流石は石川八左衛門殿。

越中　其腕前を見る上は、貴殿へ頼む御歸城の御供、君の御警固いたされよ。

八左　仰せにや及ぶべき、御乘物に附隨ひ、如何にも守護なし奉らん。

越中　頼もしゝ、力量勝れし八左衛門殿、お側に附添ひある上は、假令仇なす曲者ありとも、君の御身に氣遣ひなし。(ト八左衛門心得ぬ思入にて、)

八左　はて、心得ぬ其お詞、君に仇なす曲者とは。

越中　それにこそ仔細あり、此上は何かの樣子、貴殿へ打明け物語らん。これ、（ト越中守八左衛門に囁く）な、斯かる逆意の企てゆゑ、心を附けて守護めされよ。（ト八左衛門びつくりこなしあつて）

八左　すりや、宇都宮の城内にて。

越中　これ、密事でござるぞ。

八左　君を失ひ奉らんとは、思へば憎き上野めが。

ト八左衛門思はず力足を踏む、是れにて式臺の板仕掛にて踏み折れる。内膳正見て、

内膳　やゝ、力餘つて欅の厚板。

越中　足下にかけて踏み折りしか。

八左　はて、面目ない、麁相いたした。（ト天窓を掻く）

越中　あいやお見事、（ト扇を開くを道具替りの知らせ）感服でござる。

ト越中守扇にてあふぐ、内膳正槍を杖に感心の思入。八左衛門は足を拔いて、式臺を見込む。此模樣馬士唄にて道具廻る。

（將軍歸館の場）　―本舞臺四間通し常足の二重、塗框上段の模樣、向う唐紙形の襖、上下同じ

襖、二重平舞臺とも薄縁を敷詰め、總て本陣上段の間の模様、二重に金屏風を建て、其内に褥を敷き、氏光公葵紋附の着附、袴裝、位あるこしらへにて脇息に掛り、刀掛に刀かけてあり、平舞臺下の方に以前の掃部頭。上下衣裳に着替へ、平伏して居る。此模様時計の音にて道具留る。と合方になり、氏光思入あつて、

氏光 こりや掃部、人拂ひと申すゆゑ、近習の者を遠ざけしが、何事なるか早く申せ。

掃部 はゝツ、お尋ねなくとも申し上げねば相成らぬ火急の椿事、別儀でもござりませぬ、此程我が君御發足の後、大御所様御不例との趣き、江戸表老中共より當宿へ知らせの早打、只今到着仕ツてござりまする。(ト氏光是れを聞き、びつくり思入あつて、)

氏光 なに、父上には御不例とな、して御容態は如何なるぞ。(ト案じるこなし。)

掃部 殊の外御病體重らせたまふと書狀の文面、さるによつて愚臣が心配、其外御供の大小名、前後忘却仕つるばかり、先づ取敢へず言上なさんと、それゆゑ伺候仕ツてござりまする。

氏光 予が發足のきざみまで大御所には御機嫌よく、御不例の様子なかりしが、御大切とは氣遣はしい。こりや掃部、いかゞいたしたものであらうな。

掃部 恐れながら愚臣の存意は、是れより日光山へ御名代を立てられ、君には急ぎ御歸城あつて、大御

所樣の御容態お伺ひあらせらるゝが、當然の道と存じまするが、我が君、思召しは如何にござりまする。

ト氏光思入あつて、

氏光 如何にも、御不例と知りながら、聊かも猶豫いたさば孝養の道相立つまい。こりや其方が申す通り、是れより歸城いたさうわえ。

掃部 すりや、いよ〳〵御歸城ましますとな。

氏光 おゝ、片時も早く發足いたさん、急ぎ供觸れ申し附けい。(ト立ち掛るを、)

掃部 あいや暫く、お心急くは御道理なれど、餘り火急にお立ちあらば、お供の面々狼狽なし、粗忽あらんも計られず、先は御歸城のお先觸れとして、松平越中守を君に先立ち發足させ、跡よりお越し遊ばさば路次の騷動あるべからず、此儀最前越中守へ、申し附けましてござります。

氏光 して、日光山への名代は。

掃部 其儀は板倉內膳正へ申し含めおきましたれば、改めて御代參の儀、御沙汰あつて然るべし。

氏光 萬事はそれにて整ひしが、心に掛るは御不例の樣子、(トちつとこなしあつて、)氏光歸城いたさぬ內、若し御大事に及びなば、其殘念さは如何ばかり、胸を惱ます予が心痛、掃部頭推量いたせ。

ト よろしく思入、是れを聞き掃部頭こなしあつて、

掃部　すりや左程まで御父上を思召し御心痛遊ばすとな。ほゝお、勿體なし〳〵。此上は御安堵の爲實を明して言上なさん。いやなに我が君、必ずお氣遣ひ遊ばしまするな、大御所樣の御不例とは、眞赤な僞りにござりまする。

氏光　なに、御不例にはあらざるか。

掃部　常に替らず、御安泰にござりまする。

氏光　それ聞いて先は安堵、さりながら合點行かぬは、老中共より知らせの書狀、何ゆゑ僞りを申し越せしぞ。

掃部　これぞ即ち愚臣が計策、お跡供の内よりして面體知れざる者を見立て、江戸表より早打と言ひこしらへしは、差當る一大事をば避けんが爲。

氏光　して一大事とは何事なるぞ。（ト掃部頭四邊を見廻し、以前の藤左衞門の書面を出し、）

掃部　即ちこれなる密事の一書は、宇都宮在の庄屋藤左衞門と申すもの、掃部頭へ窃に訴へ、とくと御披見遊ばされませう。（ト書面を出す、氏光受取り開き見てびつくり思入、）

氏光　やゝ、此氏光が社參の途中に、斯かる謀叛の逆臣ありしか。

掃部　さればこそ我が君を、御歸城なさしめ奉らんと、深くも計りし火急の手配り。
氏光　すりや宇都宮の城内へ、我を入れざる手段であつたか。
掃部　計略とは申しながら、恐れ多きは我が君を、一旦欺き奉つりし愚臣が罪科、御高免の儀偏に願ひ
奉つる。(ト平伏なす。)
氏光　はて、それも一時の計策ゆゑ、いかで罪科と申すべき、今宵の難をのがるゝも全く汝が智謀ゆゑ、
猶もよしなに賴むぞよ。
掃部　はゝツ、是れより御歸城ましまさば、彼の計略はのがれたまへど、御道筋に曲者あつて讐をなさん
も計られず、君には直さまお先番たる越中守の乘物にて、竊に當所を御發足、まつた我が君のお
乘物には、越中守を舁き乘せて、御供の面々隨ひなば、必定敵を欺き申さん。
氏光　して、氏光に附添ふものは。
掃部　御近習役の其のうちにて、力量衆に勝れたる、石川八左衞門に守護さすれば、必ずお氣遣ひある
べからず。
氏光　まつた、上野めが實否を糺すは。
掃部　御名代たる板倉内膳、日光山より下向の折、本田が城内へ立寄つて、篤と見屆け參るやう申し附

けましてござりまする。

氏光　ほゝお、何時に替らぬ掃部が才智、流石は天下の大老とて、殘る方なき其計ひ、汝は當家の礎なるぞ。

掃部　はゝッ、御懇の上意、恐れ入り奉つりまする。(ト掃部頭平伏なす。此時七つの時計鳴る。)

氏光　あの時計は、申の上刻。

掃部　最早夕陽傾けば、御發足あつて然るべし。(ト奥へ向ひ、)やあ〳〵御近習の面々、越中守の乘物これへ。(ト奥にて、)

四人　はあゝ、(ト下手の襖を明け以前の左京、主水、數馬、右近長棒の駕籠を手舁きに持出し、よき所へ据ゑ、)はッ、持參仕ッてござりまする。(ト掃部頭氏光に向ひ、)

掃部　只今言上いたせし通り、是れなる乘物に召させられ、君には御出立遊ばされませう。

氏光　如何にも、用意いたすであらう。(ト氏光平舞臺へおりる、近習の内一人二重にある刀を持ち附添ふ、氏光立身にて件の乘物を見て、)是れが越中守の乘物なるか。

掃部　はッ、君の乘輿と事替り、遙かに賤しき臣下の乘物。

四人　何ゆゑ是れを上様へ。

掃部　はて、深き仔細のある事ゆゑ、必ず他言めさるゝな。
四人　委細承知仕ッてござりまする。
氏光　して、八左衛門は如何いたした。
左京　はッ、お供の用意仕り、玄關先きに控へ居りまする。(ト氏光思入あつて、)
氏光　掃部頭、先きへ參るぞ。
掃部　はッ。(ト掃部頭にじり寄つて、)恐れながら道中筋、必ず御油斷遊ばされまするな。
氏光　其儀はとくと承知いたした。
掃部　左樣ござらば、我が君樣。
氏光　發足いたすぞ。
掃部　はゝッ、急ぎ御歸城、(ト掃部頭氏光の顏を見込み氣味合の思入、氏光うなづく、雙方見合つて木の頭)遊ばされませう。

ト掃部頭平伏なす。氏光は駕籠へ乘らうとなす、此模樣よろしく、

ひやうし　幕

盬谷村與四郎内の場

返し

（役名――大工與四郎の亡靈、大工の女房お大、同お勘、齋坊主西念、百姓出來作、同豐作、万作。庄屋の娘お早、與四郎母おさが、庄屋の下女お收、大工の女房お賤等。）

（大工與四郎内の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面暖簾口、上の方一間中仕切のある間平戸の戸棚、下の方鼠の破壁、ずつと下手一間臺所の心にて、向う板羽目、下手の棲竹の格子の中窓、此下板羽目、よき所に一つ竈、臺所の棚廻りよろしく、上手一間折廻し反古張りの障子屋體。此反古張り後に卷上げる事あり。屋體の正面三尺の佛檀、後に消える仕掛あり、いつもの所門口、此外一面の生垣古木の材木、軒口に建掛けあり、よき所にスツポンの切穴、總て盬谷村大工與四郎内の體。上手に西念坊主葛鼠の着附、法衣裝の齋坊主にて牡丹餅を喰つて居る、下手に二幕目の百姓三人よろしく住ひ、やはり牡丹餅を喰つて居る。此模樣在鄕唄にて幕明く。

西念　扨々こつちのお袋が、砂糖を張込んで入れたと見えて、至極牡丹餅がうまく出來た。

○　西念どの丶言はる丶通り、此位に甘くするには、餘ッほど砂糖を張込まねばならぬ。

□　いや、此間新家の五作の三回忌に呼ばれた時、振舞はれた牡丹餅は、とんと鹽餡のやうであつた。

△　さうぢや〳〵千體念佛を唱へて貰ふに、鹽餡を喰はせるとはこんな分らぬ事はない。

皆々　そりや又なぜだ。

△　はて、あまいだ〳〵といふ事が出來ぬ。

□○　何をいふのぢや。

西念　時に皆の衆、今日はいつたいこつちの家の、誰の命日でござるの。

○　これはしたり西念どの、お經を上げて囘向をしながら、其志しの佛を知らぬといふがあるものか。

西念　牡丹餅のうまいのは、一年たつても忘れぬが、死んだ佛は忘れてならぬ。

□　それでは大方今日の佛の、戒名なども知らつしやるまい。

西念　戒名所か生業の、經さへも知らぬゆゑ、覺えて居やう筈がない。

△　それでも今方佛檀の前で、何やらお經をば上げたではござらぬか。

西念　いや、實はあれは口から出任せ、角力甚句と端唄の文句を、お經の節でごまかしたのだ。

三人　いや、けんのんな坊さまだ。

ト呆れし思入、合方になり、暖簾口よりおさが更けたる母親のこしらへにて、盆へ茶碗を載せ、土瓶を提げて出來り、

さが　さあ〳〵皆の衆、番茶ではあるなれど、煮花がはひりました、吞んで下され。
　ト よろしく住ふ、皆々おさがを見て、
西念　これはお袋どの、今こなたの氣前のよいので、牡丹餅がうまく出來たと噂をして居つた所ぢや。
○　いやも昨日今日のやうなれど、與左衞門どのが死なれてから、もう七年になりますとは、早いものでござるなう。
さが　親仁どのが死なれた時は、忰與四郞もまだ十七、板ッ削りがやう〳〵で親方に居た時分ゆゑ、わしは村の衆のお世話になり、農業の手傳ひに出て其日々々を送りしゆゑ、一周忌も三年も思ふやうに出來ませなんだが、棟梁さまのお蔭にて、今は忰も一人前の大工になつて居りまするゆゑ、あれの拵ぎで親仁どのゝ、七年も出來るといふもの、死んだ佛がお馴染の、皆の衆をお招き申して、回向をしてお貰ひ申すが、何より功德でござりますわいの。(ト西念これを聞き思入あつて、)
西念　いや、こつちの息子も大工ぢやといへば、定めし話しに聞いたか知らぬが、宇都宮の御城内へ行つた大工は、一同何の麁相があつたか知らぬが、一人殘らず役人に切殺されたといふ事ぢや。
　ト 是れを聞きおさがびつくりして、
さが　えゝもし西念さま、そりやほんの事でござりまするか。

西念　さあ、ほんか嘘かは知らねども、さつき隣村の檀家へ寄つて話しに聞いて來ましたが、そんなら
　こつちの息子どのも。

さが　はい、小さい時からお世話になつた棟梁の仕事先きゆゑ、後月仕事に遣りましたが、どういふ普
　請か知らねども、御城内へ行つた日から家へとては戻つて來ず、只さへ案じて居りますのに、も
　しやそれがほんまの事で、ひよんな事でもござりましたら、たつた一人の悴を先立て、わしやど
　うせう、どうしませうぞいなう。（ト めそ〳〵泣出す。此内百姓三人思入あつて、）

○　わしらもさつき其話しを聞いて來たが、こつちの家でそんな話しを仕出したら、

△　あの與四郎も御城内へ、行つて居る仲間ゆゑ、嘸お袋が案じようと、

□　三人ともに言合せ、今まで話しをせなんだが、とんだ事をば西念どの、

○　話し出して、

三人　下されたなう。（ト是れにて西念面目なき思入にて、）

西念　さあ、わしもこつちの息子どのが、仕事に行つて居る事やら、そこの所は知らぬゆゑ、馳走にな
　つた牡丹餅の、餅の上にてうつかりと、飛んだ話しを仕出しました。

○　いや、それに附けてお袋に、安心させる話しがあるぞや。

さが　なに、安心をさする話しとは。
○　さあ、昨夜藪際の太郎作が、こちの息子の與四郎どのを、庚申塚で見掛けたさうぢや。
さが　そんなら、忰を太郎作どのが。
△　あんな素早い息子ぢやから、危ない場所を切抜けて、達者で居るに違ひない。
□　案じた事ではあるまいから、決してこなたも氣を落さず、安否を待つて居さつしやれ。
さが　庚申塚を通つたら、家へ戻つて來る筈ぢやが、なぜ戻つては來ぬぞいなう。
西念　いや〳〵切られて死ぬ所を、逃出したのではけんのんゆゑ、うつかり家へは戻れまい。
○　西念どのゝ言はれる通り、逃出したとでもいふ事なら、
△　言はゞ科人お尋ねもの、近所にこつそり隱れて居て、
□　今夜あたりは人知れず、家へ戻つて來ようから、
西念　必ず心配、
皆々　せぬがよいぞや。
さが　何にせい忰の安否、早う聞きたいものぢやなあ。
ト案じる思入、やはり在鄕唄になり、花道よりお大お勘大工の嫗あのこしらへ、洗髮やつし裝前垂

お大　もしお勘さん、棟梁の作兵衞さんの家から、知らせて遣つたか知らないが、まだ與四郎さんのおつかあは、殺された事を知るまいねえ。

お勘　さあ、たつた一人の掛り息子、知らせてやつた事ならば、嘸おつかあが泣くであらうと、まだ知らせないといふ事だよ。

お賤　知らせずにおいたとて濟むといふ譯ではなし、いつか一度は知れる事ゆゑ、知らせてやらうぢやござんせぬか。

お大　ほんにお賤さんのいふ通り、大工仲間の誼ゆゑ、早く知らせてやるとしよう。

お勘
お賤　そんならお大さん。

お大　さあ行かう。（ト右の唄にて三人舞臺へ來り門口を明けて、）おつかさん、此間は。

ト三人内へはひる、おさが三人を見て、

さが　どなたかと思つたら、大工仲間のお内儀手合。お揃ひでよく來さつしやれた。

お大　いえ〳〵、よくは來ない、惡い事で、

三人　來ましたのさ。（トよろしく住ふ。おさがびつくりして、）

さが　なに悪い事でござつたとは。
お大　さあ外の事でもござんせぬが、後の月から御城内へ、仕事に行つた大工仲間、
お勘　どういふ仕落があつたやら、委しい事は知らぬけれど、
お賤　一人殘らずお役人に、切殺されたといふ噂、それゆゑ知せに、
三人　來ましたわいなあ。(ト三人ともめそ〳〵と泣出す。)
さが　さあ其話しはたつた今、此衆達に聞きましたが、ほんの事でござるかいなう。
お大　さあ、見ない事ゆゑわたし達も、本當か噓か知らないが、意地の悪いと不斷から、御城内で評判の川村靫負の手に掛り、
お勘　棟梁はじめ仕手方の與四さんやわたしの亭主、一緒に行つた十人の大工は殘らずむごたらしく、切殺されたといふ話し。
お賤　どういふ仕落か知らねど、如何に所の御領主さまとて、餘りといへば非道な仕方、どうか仕様はあるまいかと、途方に暮れて三人とも、うろ〳〵して、
三人　居りますわいなあ。(ト愁ひの思入。)
さが　えゝゝゝゝ。(ト氣打なせしこなしにて、こちらへ來り、)村の衆、何うせう。

三人　尤もぢや。
さが　西念さま、何うせう。
西念　尤もぢや。
さが　何うせう／＼、何うせつぞいなあ。（トよろしく泣伏す。西念涙を拭ひ、）
西念　そんならこなた衆三人も、御城内へ仕事に行つた大工仲間のお内儀手合か、やれ／＼それは氣の毒千萬。
○　斯ういふ事が外にあれば、願つて出ようといふ先きの、
△　御領主さまが其やうな、非道な事をなされては、
□　みす／＼亭主を殺されても、願つて出るにも出られぬ譯、
西念　成程途方に、
四人　暮れるであらう。（トおさが顔を上げ、）
さが　途方に暮れるは三人の、こなた衆よりも猶一倍、勝る思ひは年取つて日増しに曲るわが腰に、杖と頼みし挊ぎ人の、あの與四郎に死なれては、外に便りのものもなく、明日から困る痩世帶生きてみぢめを見ようより、いつそ死にたうござるわいなう。

お賤　おゝ尤もでござんす、お前ばかりぢやござんせぬ。わたしとても其通り、親兄弟もない身ゆゑ、頼りに思つた内の人に、先きへ死なれて是れから後、二度の亭主を持つとても、氣心知れぬ其人の機嫌氣褄を取らねばならず、寡婦で居れば手一つにすゝぎ洗濯賃仕事、涙にきしむ絲よりも心細うて浮世をば、泣いて送らにやならぬわいなあ。

お大　いえ／＼お前は十人並に、勝れた器量を持つて居るゆゑ、是れから後の亭主を持ち、返り咲きではなけれども、二度の花が咲くであらうが、亭主に別れて仕樣のないのは、十人並に勝れた中低、散蓮華といふ名は取れども、とぢ蓋のないわれ鍋ゆゑ、救うてくれ手がござんせぬ。

お勘　そりやお前ばかりぢやござんせぬ、自分の恥をいふやうだが、此間まで宇都宮でとやかくして居た旅女郎、年は明けても病擧句、痩ッこけたる其上に今度の苦勞で目が窪み、亭主になつてくれ手がなく元のかん子で明日から、飴でも賣らねばならぬわいなあ。（ト三人よろしく泣伏す。）

さが　おゝ尤もぢや／＼、棟梁どのは別なれど、後は殘らず小前の大工、亭主に別れ明日から困らぬものは一人もない、どうぞ仕樣はない事かいなう。

西念　然し噓やら眞やら、知れぬ事ゆゑ、なう皆の衆。

○　さうぢや／＼此實正を糺すには、村の束ねの庄屋どの。

△ 手蔓を以て段々と、聞きたゞしたら分らうから、

□ 是れから三人連立つて、庄屋どのへ泣込んで、

西念 安否を聞いて、

四人 貰はつしやれ。

お賤 そんなら是れからお庄屋さまへ、お頼み申しに行かうわいなあ。

お大 それでも不斷行かぬ家へ、行くのもどうやら極りが惡い。

お勘 えゝも、不斷の氣にも似合はない、引込み思案をおしでない。

○ 行きにくければ庄屋どのへ、

△ どうせわし等も歸り道、

□ 一緒に行つて、

百姓三人 やりませう。

お賤 何分お頼み、

女三人 申しまする。

さが そんならこなた衆三人に、

お賤　是れから行つてお庄屋さまへ、
お大　お頼み申した其上で、
お勘　安否が知れたら又歸りに、
さが　どうぞ寄つて下さりませ。
○　そんならお袋、
△　西念どの、
□　大きに馳走に、
百姓三人　なりました。
お大　どれ、連立つて、
三人　行かうわいなあ。
ト在鄕唄になり、お大先きにお勘、お賤、これへ百姓三人附いて花道へはひる。西念跡を見送り、
西念　やれ〳〵騷々しい人達ぢや、然し安否は分らねど、息子どのが死んだとあれば、愚僧は一間でもう一遍、回向をして進ぜませう。
さが　どうぞお願ひ申しまする。

西念 あゝ氣の毒な事ぢやなあ。

ト西念上手障子屋體へはひる。此時寺鐘を打込み、床の淨瑠璃になる

〽夏の日も涙に暮れて入相の、鐘も無常を告げわたる一間の念佛佛前へ、世になき人を、燈明の灯影も闇き雨催ひ、所の名さへ鹽谷とて、吹き來る風の濕り勝ち、

ト此内上手屋體にて鐘の音して、おさが下手の臺所より燧箱を出し、火を打ち附木へつけ燈明をあげる心にて、上手屋體へはひり、直に行燈を提げ出來り、思入あつて、

さが 棟梁どのを始めとして仕手方共と都合十人、切殺されて死んだとあれば、我が子ばかりでないゆゑに是非もない事ながら、今々思へば七年あと、死んだ夫が羨ましい。まだあの頃は與四郎も一人前の仕事は出來ず、わしが田畑の手傳ひして僅な賃で其日を送り、長の間の貧乏も、やう／＼悴の稼ぎにて三年跡より氣樂になり、やれ嬉しやと思ふ甲斐なく、又もやこんな難儀に逢ひ、此悲しみをするといふは、因果な事であるわいなう。

〽何の因果と老の身の、果てし涙に暮れけるが。

あゝ今更いふても返らぬが、只殘り多いのは、昨夜悴に太郎作どのが、庚申塚で逢ふたとやら、近所へ來たら此母に、顏なと見せて行く筈を、家へ寄らぬは人違ひか、但しは危ない中を脱れ、

どこぞに隱れて居る事か、無事で此世に居る事なら、便りを聞かせてくれぬかいなう。

〽亡き魂よばひ母親が、父もや愚痴を繰返す、絆に引かれ與四郎か、戻る姿も朦朧と、

ト、おさがよろしく泣伏す、此内始終上手障子屋體にて鐘の音聞え、此時きびしく打込む、東西の窓蓋をなし、よき程に花道の揚幕にて聲をかけ幕を明ける。これと一時にドロ〳〵にて、門口へ與四郎三幕目のこしらへ窶れたる裝にてスッポンにて出で、茫然と門口より内を窺ひ、戸を明けずに仕掛にて内へはひり、おさがを見て、

與四　おつかあ今歸つたよ。

〽思ひ掛けなき聲にびつくり、（トおさが聲を上げ、）

さが　心の迷ひか此母を、呼ぶは慥に悴の聲、

〽合點行かずと見廻すこなた、（ト四邊を見廻し與四郎を見て、）

や、そこに居やるは與四郎か。

與四　あい、わつちでござります。

さが　えゝゝゝゝ。

〽肚胸つく〴〵見る影も、先は安堵と行燈の、さらに變りはなかりけり。

ト此内おさが行燈の蓋を明け、與四郎の姿を見る事よろしくあつて、

さが　ほんにやつぱり與四郎ぢやわいの。（ト安心したる思入、與四郎よろしく住ひ、）

與四　何でそんなに騒ぎなさるのだ。

さが　何でとはこれ與四郎、どうしてそなたは歸つたぞいの。

與四　どうして家へ歸つたとは。（ト床の合方になり、）

さが　さあ今も今とて村の衆や、大工仲間のお内儀達が爰へ來ての話しには、宇都宮の御城内にて、棟梁どのを始めとして、仕手方の者は一人も殘らず切られて死んだといふ事ゆゑ、そなたも一緒に死んだと思ひ、泣き明して居た所ぢやわいの。（トこれを聞き與四郎思入あつて、）

與四　すりや其事が。

さが　え。

與四　さあ、もう其事なら案じなさんな、誰がそんな事を言つたか、切られて死んだ者などは、たゞの一人もありやあしねえ。

さが　そんなら死んだ者はないとか、やれ／＼それで落着いた、さういふ事とは露知らず、切られて死んだと聞いたゆゑ、途方に暮れて居ましたが、それではみんな空言で、人の噂であつたかいの。

與四　今日は仕事も仕上になり、棟梁始め仕手方殘らず、御城內から暇が出て、それ〴〵家へ歸りましたが、嘸仲間の上さん達も死んだと思つた亭主が歸り、みんな悅んで居るだらう。

〽かき立つれども燈火の、闇き火影に與四郞が、萎れし顏を打案じ、

ト此內おさが始終行燈を氣にして、掻き立てる事あつて、

さが　これ與四郞、見ればそなたは顏の色が、常と違つて大分惡いが、心持でも惡いかいの。

與四　なあに心持は何ともないが、夜の目も寐られぬ急仕事に、夜更しをしたせゐか二三日跡から風を引き、髮も結はずに歸つたから、不斷と違つて顏の色も、惡いやうに見えるのだ。

さが　風邪ぐらゐならよいけれど、人の噂が前表で、もしもそなたに死なれたら。さあ、死んだと思ふそなたが歸り、こんな目出度い事はない。斯ういふ事と知つたなら、生り節か鹽物でも晝間買うておいたものを、今日は死なれた親仁どの、、七年忌の法事ゆゑ家にあるのは精進物、なまぐさとてはないわいの。

與四　いえ、わつちならなまぐさより、風邪を引いて居りますから、精進物の方がいゝ。

さが　はて目出度く仕事も仕上になり、久し振りで戾つたに、精進物では氣になるゆゑ、何ぞ買うて來ませうわいの。

〽いそ〳〵として立ち掛るを、

與四　これ〳〵おづかあ、肴といつても村方ぢやあ、四五丁行かにやアありやあしねえ。

さが　いや〳〵何の四五丁位、行くのは厭ひはせぬけれど。お〻四五丁といへば、昨夜そなたを庚申塚で、見掛けたものがあると話しを聞きましたが、あれから家へは僅か四五丁、なぜ寄つて行かなんだのぢや。

〽恨みいふのも可愛さが、餘る情に胸せまり、

與四　さあ、それが心に掛るゆゑ、（ト思入あつて氣を替へ、）さ、それも心が急かれるゆゑ、何をいふにも急な使ひに、出たので途中も氣がせかれ、家へ寄らずに歸りました。

さが　さういふ事なら是非がないが、まあ何にせい、何ぞ肴を。（ト立ち掛るを、）

與四　あ〻これおつかあ、待つてくんねえ、あらあ何だか睡くなつたから、飯より早く寐てえものだ。

さが　ほんにそなたも此中から、夜の目も寐ぬといふ事ゆゑ、嘸草臥れて居るであらう。

與四　家へ歸つて安心したら、一度に體へ疲れが出た。

さが　それも其筈、風氣とあれば、どれ冷えぬやうにして遣りませう。

〽それとは知らねばとつかはと、建てる屛風も逆さまと、心附など與四郎が、疲れし體母親が、

ふわりと掛ける搔卷の、薄き緣と外面より、袖に涙の二人連。

ト此內與四郎上手よき所へ手枕にて寐る、おさがは立上り有合ふ二枚折の屏風を逆さにして與四郎を圍ひ、上手の戸棚より小搔卷を出し與四郎に掛ける。淨瑠璃の留り、稽古唄になり、花道より二幕目のお早泣きながら出る、跡よりお牧二幕目の下女にて供をして出來り、花道にて、

お牧　もしお孃さま、あなたがそんなにお泣きなさると、私までが悲しくなり、先きのお家へ參りましても、口を利くことが出來ませぬ。

お早　さあ泣くまいと思ふても、與四郎さんの母御さんが、嘸や泣いてござんせうと、それを思ふと悲しくなり、涙が堪忍せぬわいの。

お牧　悲しいからと申したとて、只今となりましては、もういたし方もござりませぬ。

お早　母御さんのお顏を見ては、わたしや何にも言へぬ程に、そなたよいやうに賴むわいの。

お牧　あなたがそんなお弱い事では、私が困ります。

お早　それではいつそ止めにして、もう爰から戻らうかいの。

お牧　折角爰までお出でなさつて、それでは心が屆きませぬ。

お早　そんならいつそ一思ひに、悔みを言うて戻らうかいの。

お牧　やあお出でなさりませ。（トはやり唄にて兩人舞臺へ來る、此内おさがは菓子盆土瓶などを片附け居る、お牧門口より内を窺ひ、）はい、御免下さりませ。（ト門の戸を明ける。）

さが　はい、どなたでござりまする。

お牧　さあお孃さま、おはひりなされませ。

　　ト言へどもお早門口に泣いて居る、おさがこちらへ來りお早を見て、

さが　こなたかと思ひましたら、お庄屋さまのお孃さまでござりますか。

お早　母御さま、久しうお目に掛りませぬ。（トやはり顔へ袖を當て泣いて居る。）

お牧　是れはしたりお孃さま、まあおはひりなされませ。

さが　さあ〳〵此方へいらつしやりませ、ようまあお出でなされましたなあ。（ト合方になり、お牧お早の手を取り無理に内へ入れる、お早やはり泣いて居るゆゑ、おさが合點の行かぬ思入にて、）もしお牧どの、何ぞ御意に入らぬ事でもあつて、御機嫌が惡いのか、どうした事であるぞいの。

お牧　さあそこへ參る路々も、お前さんのお顔を見ては、何にも物が言はれぬと、お泣きなされてござります。

さが　えゝ何をおつしやります、私の顔を見たとて、悲しい事はない筈でござりまする。

ト是れにてお牧こなしあつて、

お牧　そんなら、あのお前さんは、まだ御存じではござりませぬか。

さが　なに、私が知らぬかとは。

お牧　さあ宇都宮の今度の騷動、定めて最前大工仲間のお上さん達がこちらへ來て、お話し申したでござりませうが、嘸御愁傷でござりませうと、お悔みに參りましたわいな。

さが　はゝあ、それでやう〳〵分りました。そりやもう最前村の衆や大工衆のお内儀達が、爰へ來ての話しには、棟梁どのを始めとして大工は殘らず御城内で、切殺されたといふ事ゆゑ、扨は悴も一つ稍死んだとばかり思ひまして、實は途方に暮れましたが、お悦び下さりませ、それはほんの人の噂で、御城内で切られた者は、只の一人もござりませぬ。（トこれを聞きお早びつくりして）

お早　え、そりやまあ誠でござりますかいな。

さが　ほんの嘘のとつい其處に、悴が戻つて寐て居ります、これが慥な證據でござりまする。

お早　えゝゝゝゝ。

お牧　〽母が敎へに傍なる、屛風の逆さを目早くも、（ト此内お早上手へ行き屛風を見て）

お早　もし、こりや逆さではござりませぬか。（トおさが屛風を見て心附き、）

さが　ほんにわたしとした事が、麁相な事ではあるわいの。
〽立ち寄るこなたの屏風の内、
與四　なに、お早さんがお出でなすつたとか。
〽二人は姿を見てびつくり、（ト此内與四郎屏風の蔭より前へ出る、お早お牧與四郎を見て、）
お早　ほんにお前は、與四郎さん。
お牧　そんなら、御無事でござりましたか。
與四　はい、與四郎は此通り、何ともありはいたしませぬ。（トよろしく住ふ。）
お牧　もしお孃さま、こりやまあ夢ではござりませぬか。
お早　わたしや夢でも嬉しいわいの。
〽逆さ屏風も夢の間に、姿は戀の蝶番ひ、放れがたなく見えにける。
ト此内お早屏風を建て直して傍に取りのけ、與四郎に縋る、お牧氣兼れのこなし、
お牧　これはしたりお孃さま、如何にあなたはお嬉しいとて、親御さんの見る前で。
ト側へ寄つて引分けようとするを、
さが　あゝもし、其御遠慮には及びませぬ、賤しい身分の忰をば、お庄屋さまのお孃さまが、御贔屓に

して下さるとの事、疾から聞いては居りましたが、外でないことゆゑ、改めてお禮にも上りませぬが、悦んでこそ居りますとも、決して咎めはいたしませぬ、此後ともにお孃さま、たんと可愛がつて遣つて下さりませ。（ト是れを聞きお早嬉しきこなしにて、）

お早　てもまあ粋な母御さま、そんならどうぞ此末とも、與四郎さんの嫁ぢやと思ふて、度々お内へ來ませうとも、必ず叱つて下さりますな。

さが　いえ／＼それはなりませぬ、親御さまのあるお身ゆゑ、我々風情の此家へ、度々お出でなされましては、あなたのお爲になりませぬ。

お牧　いえ、それはお案じなされますな、こちの家の旦那樣も昨夜與四郎さんにお目に掛り、内々ながらお盃を、なされましてござりますゆゑ、何れ此頃表向きお話しがござりませうわいな。

さが　さういふ事ならこちらも仕合せ、親御さまさへ御得心なら、何時でもお出でなされませいな。

お早　そりやまあ、嬉しい事ぢやわいな。

〽何も白歯に娘氣の、悦ぶ體を見る悲しさ。（ト此内與四郎お早を見て愁ひの思入あつて、）

與四　あとの嘆きが。

二人　え。

與四　いやさ、跡でとつくり昨夜の話しは、おつかあお前に話して聞かさう。何にしろお前方に、今夜逢はうとは思はなんだ。よくまあ來てくんなすつた。

お早　ほんにお前に尋ねたいは、仕事に行つた棟梁どのから、仕手方殘らず御城内で、切られて死んだと聞きましたが、ほんの事ではなかつたかいな。

與四　さあ今も爰でおつかあに、一部始終を話したが、誰がそんな事を言つたか、殺された者は一人もなく、尤も今日が御普請の惣出來でお上から大工中へお酒を下され、皆醉ひ倒れて他愛もなく、死んだやうに寐たのを見て、死んだ〱と言觸らし、爰等近所を尾に尾を附け、觸れて歩いた者があつたが、とんだ間違ひもあるものだ。

お早　それなら案じはせぬけれど、やれ牢へはひつたの、縛られたの、切殺されて死んだのと、世間で噂をしたゆゑに。

お牧　常からこちらの與四郎さんを、御贔屓なさるお孃さま、不動さまへ命乞ひの護摩を上げて火の物斷ち。

さが　何かに附けて御贔屓ほど、世に有難いものはなく、徒おろそかに思つては必ず罰が當るわいの。

與四　この與四郎も歸る道々、人の噂に聞きましたが、宇都宮の騷動とぱつとした評判に、濟まぬ事だ

と思ひましたが、譬にもいふ慈悲はお上、名に負ふ所の御領主様ゆゑ、そんな非道は少しもなく、首尾よく家へ歸りましたが、御心配をして下すつた御贔屓様の有難さ、徒おろそかには思ひませぬ。

お早　そのお前よりわたしを初め。

お牧　物數ならぬ此お牧。

さが　母は言はずと知れたこと。

お早　ほんに嬉しい、

三人　事ぢやわいな。

〽悅び合ふぞ道理なる、母は詞を改めて、（ト此内皆々こなしあつて）

さが　それはさうと今度の御普請、棟梁どのはいふに及ばず、仕手方殘らず家へも歸さず、日限切つてのお急ぎにて、夜の目も碌々寐られぬ程、骨が折れたといふ事ぢやが、どんなものが出來たのぢやぞいの。

與四　さあ其御普請は將軍樣が、今度日光御社參に、此宇都宮の御城内が三日目のお泊りゆゑ、御殿向きは殘らず御修覆、新たに出來たお湯殿はうつかり人には話せぬが、方一丈の湯風呂の上へ、す

つぼに落ちる釣天井。

お早　えゝ（トびつくりする、おさが合點の行かぬ思入、）

さが　つひぞ是れまで話しにさへ聞いた事のない御普請、釣天井といふものは、何のお爲になるものぢや。

與四　さあ何のお爲になるか知らぬが、其注文の繪圖面は大工に引かせず殿樣が、御工夫なすつて御自身に、お引きになつたといふ事だが、まあとつくりと是れを見なせえ。

〽晴れて見られぬ繪圖面も、深き企みと取出し、見すれば母は差し寄つて、

ト此内與四郎懷中より誂への繪圖を出し、廣げて見せる、三人左右より是れを見ながら、

さが　成程これは上樣の、おはひり遊ばすお湯殿とて、

お早　繪圖で見てさへお立派な、風呂の入口左右の羽目、

お牧　流しの板は惣殘らず、檜の厚みもあるからは、

與四　金にあかした御普請ゆゑ、其結構は測られず、

さが　遠州透しへ黒塗りの、

お早　縁を打ちたる大欄間、

お牧　御影の石の水槽に、
與四　湯風呂の上は一面に、四尺四方の桝形に、神代杉の格天井、それへ大きな石を載せ、
〽四隅へ掛けし釣繩を、一度に切つて落す時は。（ト與四郎ちよつと仕形をして見せて）
何の事はねえ、鼠を取る地獄落しのやうな仕掛だ。（ト是れを聞き皆々びつくりして）
さが　そんなら、もしや、
三人　上樣を。（ト大きくいふを、）
與四　あゝこれ、滅多な事は言はねえものだ。
〽四邊憚り繪圖面を、胸にたゝんで納むれど、母は心を納め兼ね、
ト與四郎件の繪圖を懷中する、おさが思入あつて、
さが　さういふ繪圖を見るに附け、年寄りの身の取越し苦勞、案じられてなりませぬが、もし其事が露顯したら、御領主樣は勿論のこと、大工仲間のそち達も。
與四　萬一これが知れた日にやあ、言はずと知れた首仕事。
三人　え。
與四　そんな事はあるめえが、然し人間は生身だから、明日が日死ぬめえものでもねえ、よく年寄りの

いふ事だが、轉ばぬ先きの杖とやら。もしもおいらが死んだなら、弟弟子の佐吉を貰ひ、細くなりとも位牌の絶えねえやうにしてくんねえ。又お早さんもわつちゆゑ、悪い噂が立つたれど、此與四郎がない後は、どうぞ心を入替へて親御さんの詞に随ひ、立派な所から聟を貰ひ、是れまで親御に苦勞を掛けた、其御恩返しと思ひなすつて、家を大事になさいまし。只此上のお頼みはわつちの事を思ふなら、回向なんぞはどうでもいゝから、此お袋に小遣ひでも、たまには遣つて下せえまし。

〽いつか話しも理に落ちて、兎角無常になり振りも、小ませ娘の氣に掛り、

ト此内與四郎愁ひの思入、お早心に掛るこなしにて、

お早　えゝもう、そんな忌はしい話しは止めて下さんせ、それでなうても最前からお前の影が薄いゆゑ、心で案じて居るわたし、そんな事はあるまいが、

〽二世と定めしお前に別れ、何で聟をば貰ひませう。立ちし浮名に二度の縁、結ばぬ誓ひに黒髪を、切つて此身は尼法師。

お前の縁に繋がれば、

〽わたしの爲には大事な姑、おみつぎ申して何一つ、御不自由をさせませねば、必ず案じて

下さるなと、膝に縋りて口說きける。(ト此内お早よろしくあつて、)

與四　其志しは嬉しいが、尼となるとは惡い了簡、髮を下さず家を立て、菩提の爲にお袋を、お前がみついでくれさへすれば、それが何より我が悅び。(ト幽靈のこなしにて、)草葉の蔭から禮を言ひます。

ト かすめて風の音、與四郎物凄くいふゆゑ、おさが前へ出て、

さが　あゝ鶴龜々々、今死んでゞも行くやうに、聞き度くもないそんな話し、最う〳〵止めにしたがよい。

お牧　ほんに、此やうなお目出度い中で、忌はしい事は言はぬもの。

お早　是れから何ぞ外の話しを、仕ようではないかいの。

さが　それがよろしうござりまする。(ト與四郎思入あつて、)

與四　是れで、此世に言ふことも。

二人　えゝ。

與四　さあ、此やうに長居をして、お家へ惡くはござりませんか。

お早　いえ〳〵今宵は父さんから、お許しが出て不動さまへ、お參りに行く積りゆゑ、案じる事はござ

んせぬ。

お牧　ほんに四つまでお許しで、今夜はこちらへ參りましたわいな。

さが　まだ五つさへ聞きませねば、さういふ譯なら御ゆるりと、お話しなされて下さりませ。

ト此内上手障子屋體より、以前の西念出來り、

西念　今佛前で聞きましたが、息子どのが歸られてお袋どのにも嘸悅び、もう念佛にも及ばぬから愚僧はお暇いたします。

さが　これは〳〵西念さま、大きに御苦勞でござりました。

お早　そんなら一間に、

お牧　御出家さまが。

西念　いや〳〵必ず心配さつしやるな、戀と無常の二道かけて、天窓を丸めた西念のゑ、こんな所へ出逢つても決して人には言ひませぬ。

お牧　粹な氣質の西念さま。

お早　それで安心しましたわいな。

與四　御用があるなら仕方もないが、ならう事なら念佛を。

皆々　え。

與四　又明日來て唱へて下せえ。（ト西念下手へ來て、）

西念　初めて逢つたこちの息子、何だか色も蒼ざめて。

與四　え。

西念　いやさ、色で逢ふたはお樂しみぢや。

さが　左樣なれば、西念さま。

西念　大きに馳走になりました。（ト西念門口へ出て思入あつて、）慥に切られて死んだと聞いた、大工が家へ歸るとは、もしやれこゝでは、（ト幽靈の仕方なし、ぞつとせしこなしにて、）南無阿彌陀佛々々。

〽夜風も襟にぞく／＼と、怖げ立つてぞ歸り行く。

ト時の鐘にて西念下手へはひる、お牧思入あつて、

お牧　もしお孃さま、ありやもう五つでござりますから、私は今の內あなたの御代參を勤めませう。

お早　さあ命乞の御願を掛け、お禮參りが代參では、不動さまへ濟まぬわいの。

さが　ほんに左樣でござります、夜の事ゆゑ與四郎も、お參禮りに御一緒に。

與四　いや／＼わしは神さまより、丁度親仁の七年ゆゑ、位牌の前でこれまでの、不孝の詫びをせねば

ならぬ。

お早 そんならわたしも親御さんに、お目に掛つて行かうわいの。

お牧 左様ならば私は、一足お先きへ參りますぞえ。

さが 御苦勞ながら少しも早う。

お牧 どれ、お先觸れに行きませうわいな。(ト在鄕唄にてお牧下手へはひる。)

〽跡にしをく與四郎は、以前の繪圖を行燈の、小陰へおいて立上り。

ト此内與四郎よろしくあつて、立上り、

與四 思ひ廻せば人間は、老少不定といひながら、

お早 若い子供が先立つて、

さが 老いたる親が取り殘され、

與四 塒に迷ふ旅鳥、

お早 ないて明すも、

さが まゝある習ひ、

與四 それと知れても、

お早
さが　え。
與四　どれ、回向をしませうか。

〽さそふ夜風に消えて行く、影も一間へ、

ト床の送りへドロ〳〵のやうな風の音を冠せ、與四郎お早の手を取り、よろしく上手の屋體へはひる。此内おさがは行燈の明りを搔立て居る。此留り早き合方ばた〳〵になり、花道より以前のお大、お勘走り出來り、直に舞臺へ來て内へはひり、

お大　さあ〳〵おつかあ、いよ〳〵本當に、
お大
お勘　切られたわいの〳〵。
さが　これ〳〵二人の衆、本當に切られたとは、そりや誰が。
お大　お庄屋さまから手を廻し、御城内の中間衆に委しい事を聞いて來たが、やつぱり噂に違ひなく。
お勘　棟梁さんはいふに及ばず、仕手方殘らず切殺され、こつちの息子は其内でも大層責められ弄り殺し
お大　非業に死んだといふ事まで、
お勘　殘らず聞いて、
兩人　來ましたわいの〳〵。

さが　えゝめつさうな事言はつしやれ、わしの息子の與四郎は、家へ歸つて居りますわいの。
お大　えゝも氣味の悪い、何をお言ひだ、切られて死んでしまつた者が、何で家へ歸らうぞ。
お勘　それより早く支度をして、切られて死んだ大工仲間の、上さん達と連立つて、
お大　敵を取つて貰ひたいと、
お勘　お庄屋さまへ、
兩人　泣き込まつしやい。
さが　さあ泣き込むにも泣き込まぬにも、こちの悴は戻つて居るゆゑ。
お大　さうしてそれは、
お勘　どれ何處に、
さが　あれ／＼、影がうつりますわいの。

ト上手屋體へ指をさして教へる。此時仕掛にて屋體の障子反古張りだけ卷揚げる。内に以前の與四郎お早後向になり、佛檀に向ひ回向して居る、お大お勘障子屋體の所へ行き内をのぞき、兩人には見えぬ思入にて、

お大　障子の内にはお庄屋さんの、娘御ばかりたつた一人、

お勘　回向をしては居るけれど、お前の息子は居やあしない。
さが　なに、居ぬ事があるものぞ、現在そこに悴の影が。
　　ト立上り上手へ行く、此時ドロ〳〵にて與四郎正面の佛壇へ消える。掛け烟硝ぱつと立つ、お早これを見て、
お早　あれえ。（トびつくりして屋體より駈け出るゆゑ、）
さが　もしお孃さま、どうなされました。
お早　たつた今までござんした、與四郎さんが煙りのやうに、姿が消えてしまつたわいな。
皆々　えゝゝゝ。
　　ト呆れし思入、ばた〳〵になり、下手より以前のお牧出來り、内へはひり、
お牧　もし母御さん、今こちの家の櫺子から人魂が出て參りましたが、何ぞありはしませぬか。
　　トこれを聞きお大、お勘びつくりして、
お大　そりやこそ息子の、
お勘　幽靈だ。（ト兩人門口へ逃出し腰の拔けたる思入、おさが思入あつて、）
さが　扨は此世の別れを惜しみ、跡に殘りし此母に、逢ひに戻つて來たかいの。

ト お早行燈の蔭にある、以前の繪圖を拾ひ取り、

お早　姿はなけれど此繪圖が、爰に殘つてあるからは、

さが　もしやそれをば此母に、

お牧　渡さう爲で、

三人　あつたるか。

ト此時ドロ〳〵になり、與四郎亂れし鬘、血に染みたる裝にて仕掛にてお大、お勘の間へ出で、

與四　どうぞ是れをば藤左衞門さまへ。

ト此聲を聞き、お大お勘與四郎を見上げ、

お大
お勘　そりやこそ幽靈だ。（ト顫へて居る、お早門口を見て）

お早　ほんに、お前は、

お早
お牧　與四郎さん。（ト門口へ出ようとするを）

さが　あゝもし、（ト隔て門口をしやんとしめるを木の頭）南無阿彌陀佛々々。

ト念佛を唱へる、お早は件の繪圖を廣げ見る、此内與四郎の體仕掛にてよき所まで引きあげる、此仕組よろしく大ドロ〳〵にて、

ひやうし幕

六幕目大詰

大手城門の場
本田屋敷の場

〔役名｜｜本田上野之介、松平越中守、石川八左衛門、川村靱負、松平伊豫守、本田左門之助、梁田賴母、飯塚玄蕃、將軍氏光公。本田奥方眞弓其他。〕

（舞鶴城大手先の場）｜｜本舞臺正面に大手の城門、扉後に毀れる仕掛、上の方に屋根附の潜り門、左右屋根附の白壁、裾通り石垣の張物、日覆より松の釣枝、よき所に下馬札、下手に辻行燈、總て舞鶴城大手先の模樣よろしく、爰に一、二菖蒲革の足輕、提灯六尺棒を持ち立ち掛り居る。此見得時の太鼓にて幕明く。

一　何と左源次どの、上樣日光御社參に附き、お留守中の儀でござれば、常と違つて嚴重なる固めをいたす我々共、半時毎に夜廻りも細く刻んで小半時毎、かやうに廻りをいたすとは、何とせわしない儀ではござらぬか。

二　左樣でござる、是れが夜長の時分なれば、少しは合間もござらうが、短夜の儀ゆゑ聊かの、息をつく暇もなく御城外を廻るといふは、扨々大儀な役目でござる。（ト此内一向うを見て、）

一　左源次どの御覽なされい、夜目にはそれと分らねど、下乘橋の方に當り、大分人聲が聞えます。

二　るが、何とも以て心得ず。
仰せの如く遙かなるあなたに當つて人聲いたし、物騷がしい樣子でござるが、こりや何事かありはせぬか。

一　今泰平の世の中ながら、納りてまだ御三代。

二　至つて大事な御家督に、殊更上樣お留守といひ。

一　油斷のならぬ、

兩人　事でござる。（トばた〳〵になり、花道より足輕の三走り出來り）

三　御兩所、是れにござつたか、一大事でござる〳〵。（ト一二、三を見て）

一　左いふは同役仲平どの。

二　一大事とは何事でござる。

三　上樣日光御社參のお留守でござれば、常に勝りて嚴重なる固めをいたす辻番外、怪しき奴が只一人乘物を擔ぎまして大手を指して參りまするゆゑ、我々共が支へまするを、聊か用ふる氣色もなく、是れへ推參いたしまするゆゑ、何卒御助力下されい。

一　それぞ役目の一大事、

二　怪しき奴とあるからは。

一　我々御助力、

兩人　仕つらん。（ト三、向うを見て、）

三　あれ／＼最早此所へ、參る樣子でござりまする。（ト此時花道の揚幕にて、）

八左　えツさツさ／＼。（ト聲するゆゑ、足輕三人きつとなり、）

一　御兩所とも、ぬかりめさるな。

兩人　心得ました。

ト是れより早笛の鳴物になり、花道より前幕の八左衞門肌脱ぎ、袴股立、鉢卷、誂への乘物をかつぎ是れを四、五、六、七、八、何れも菖蒲革の足輕にて六尺棒を持ち、支へながら出來り、花道に留りきつとなり、

八左　やあ、天下の大事に上樣の、お供いたせし某は、石川八左衞門と申す者、必ず共に妨げいたすな。

四　いゝや其儀は呑み込めぬ、恐れ多くも上樣には、日光へ成らせられ、

五　未だ御歸城あるまでは、六七日も日數かゝり、

六　殊更お供に列なりし、御直参は申すに及ばず、
七　諸侯の方々列を正し、御歸城なくては叶はぬ事、
八　其お先觸れも是れなくして、夜半に及び只お一人、
四　石川とやら市川とやら、
五　小身者の名を名乘り、
六　大手を指して近寄る曲者、
七　石川なれば盜人の、
八　種は盡きざる大膽者、
四　通す事は、
皆々　相成らぬ。
八左　やあ燕雀何ぞ大鵬の心を知らぬ分際で、君を守護なす某を、盜人呼はり傍痛い、達て妨げい
たしなば近頃無益の殺生ながら、踏殺しても通らにやならぬ。
四　然らば君を何ゆゑに、
五　先觸れもなく只一人、

六　夜陰に守護なし參りしか。
七　事の次第を逐一に、
八　係りの者へ屆けし上、
四　大手の開門、
五人　申し入れぬ。
八左　えゝ、それ言つて居る暇はないわえ。
四　言はぬとあれば亂暴狼籍、
五　我々共も役目の表、
六　通す事は、
五人　罷りならぬ。
八左　えゝ邪魔立てせずと、退いたく。
　　ト右鳴物にて八左衞門支へる皆々を突退け、舞臺へ來る。四、舞臺の三人を見て、
四　狼籍者ゆゑ打ちするゑめされ。
三人　心得申した。

ト是れより以上八人の足輕六尺棒にて八左衞門に打つて掛る、八左衞門下手よき所へ乘物をおろし八人を相手によろしく立廻り、ト、乘物の棒を拔取り振廻し、大まくしの立廻りあつて、足輕皆々花道へ逃げてはひろ。八左衞門これを追ひて花道よき所まで行き、乘物の棒を突きほつと思入。此時本釣鐘を打込み、舞臺の乘物の戸を内より明け、前幕の氏光公乘つて居て四邊を窺ひ、

氏光　こりや、八左衞門は何れにある、八左衞門々々。

ト呼ぶ、此聲を聞き八左衞門氣を替へて舞臺へつか〳〵と歸り、下に居て、

八左　はツ、君には御安泰に居らせられまするか。

氏光　夢となく現となく、是れまで搖れ參りしが、して爰はいづくなるぞ。

八左　はツ、最早大手の御城門にござりまする。

氏光　すりや曲輪内へ參りしよな。

八左　是れまで參りし上からは、恐れながら御安心遊ばしませ。

氏光　見れば其方一人なるが、餘の供廻りは如何せしぞ。

八左　はツ、拙者が足の早きゆゑ、長途の疲れにお供方は次第に遲れ、千住宿よりお供なすべき者もなく、火急の儀ゆゑ拙者一人、お供いたしてござりまする。

氏光　すりや續くものはなかりしとか、虎口をのがれ歸城せしも、全く汝が働きゆゑ、追て褒美は取らすであらう。

八左　こは有難き其御上意、常は無益の馬鹿力も、今日ばかりは我が君のお役に相立ち此やうなる、悦ばしき儀はござりませぬ。

氏光　何は格別大手とあれば、片時も早く開門させよ。

八左　はッ、只今開門いたさせますれば、御窮屈でも今暫く。

氏光　乘物の戸を立ていと申すか。

八左　夜露を厭ひ奉つれば。

氏光　承知いたした、然らば石川。

八左　我が君樣。

氏光　片時も早く開門させよ。

ト是れにて八左衞門、はッと平伏する。氏光乘物の戸を立切る。八左衞門立上り、正面の扉を叩きながら、

八左　やあ／＼御番衆、日光山より只今上樣御歸城なれば、開門めされ／＼。（ト言入れる。此時門内にて、）

伊豫　やあ何者なるか夜陰に及び、將軍家の御名を騙り、開門などゝは無禮至極、とつとゝ大手を。

大勢　立去り居らう。（トきつといふ、是れにて八左衞門むつとなし、）

八左　やあ無禮とはそつちが無禮、石橋宿より上樣には御歸城に成らせられ、石川八左衞門御供なし、只今御着遊ばしたり、片時も早く開門々々。

ト是れにて上手の潜り門の屋根へ、伊豫守上下大小にて手丸の提灯を持ち半身出で、提灯の明りにて八左衞門を見て、

伊豫　誠に汝は石川なるが、何ゆゑかゝる虚言を申すぞ。（ト八左衞門伊豫守を見上げ、）

八左　左いふ貴殿は伊豫殿ならずや、全く以て虚言にあらず、上樣只今御歸城なれば、開門あつて然るべし。

伊豫　いゝや其儀は相成らぬ、かゝる夜更に將軍家、何ゆゑあつて御歸城あらうや。

八左　其御疑念はさる事ながら、宇都宮にて計らずも、急變あつて上樣を某お供いたしてござる。

伊豫　やあ假令如何なる變ありとも、大老井伊殿はじめとして數多の御家臣お供なし、君を守護なし奉れば、汝一人上樣のお供をいたす謂れなし。

八左　その御不審も跡々にて、自然と分かる大事件、何はさておき開門めされ。

伊豫　いゝや開門相成らぬ、身不肖ながら伊豫守、大手の御門を預かり居れば、汝如きが詞を用ひ、いかで開門いたさうや。

八左　すりや、是れ程に申しても。

伊豫　いつかな開門相成らぬ。

八左　ならぬとあらば是非がない、打破つても通つて見せう。

伊豫　やあ大手へ對して狼藉なさば、其分には捨ておかぬぞ。

八左　して又誠の上様を、お供なしたら何とめさるゝ。

伊豫　やあ汝如きに論は無益、とつとゝ早く立去りをらう。

トきつと言つて伊豫守門の內へはひる、是れにて八左衞門腹の立つ思入にて、

八左　えゝ面倒な、(ト有合ふ駕籠の棒を取り門の際へ立寄り、)誠の君のお供をなし、歸城いたせし某を、小身者と見侮り、取合ひのなき上からは、手籠めになしても通つて見せん。さ、開門せぬか〳〵。(ト件の棒にて門の扉を撞木突きになし、)是れでも開門いたさぬか。

ト力任せに突く、此時おびたゞしき音して、門の屋根より瓦大分に落ち、門の扉突きたる所だけ破れる仕掛、八左衞門棒をかい込み屋根をきつと見上げる。此時下手の乗物の戸を明け以前の氏光顔を出

して鏡ふ。上手の家根へ以前の伊豫守短筒の鐵砲を持ち半身出だし、

伊豫　やあ御城門へ狼藉なさば、飛道具にて一打ちなるぞ。

ト短筒を向ける、是れにて八左衞門下手の乘物を圍ひ、

八左　やあ君の御身に過ちあらば、後日の後悔まのあたり。

伊豫　然らばそれにて夜明けを待ち、なぜ開門は願はぬのぢや。

八左　でも我が君の大事ゆゑ。

伊豫　さ、君の大事を存ずる者が、御法を犯して濟まうと思ふか。

八左　さ、それは。

伊豫　夜明けを待つて開門願ふか。

八左　さ、それは。

伊豫　御法を犯すか。

八左　さあ、

伊豫　さあ、

兩人　さあ／＼。

伊豫　假令何やう申せばとて、夜中に開門相成らぬ。

トきつといふ、是れにて八左衞門ぐつと詰る。此時乘物の内より氏光出で、

氏光　夜中に開門いたさぬは、役目の表尤もなるが、伊豫守予であるぞよ。

ト前へ出る。伊豫守氏光を見てびつくりなし、

伊豫　やゝ、誠に我が君、（ト門の内へ飛下りる、此内八左衞門は氏光に草履をはかせる事よろしく、爰へ潜りの扉を閉け伊豫守出來り、）はゝ、思ひ掛けなき此御歸城、失禮御免下さりませう。

ト下手へ平伏する。是れにて氏光上手へ來り立身にて、

氏光　委細は跡にて申し聞けんが、宇都宮にて急變あつて、俄に野州石橋宿より掃部頭が計らひにて、越中守が體に持てなし、夜を日についで歸城せしぞ。

伊豫　かゝる事とも存ぜずして先刻よりの無禮の段々、如何なる刑に處せらるゝとも、申譯なき拙者が粗忽、恐れ入り奉りまする。

氏光　それも留守居を大切に、思ふ汝が役目の表、無禮は許す、苦しうないぞ。

伊豫　すりや御許容下さりますとな、はゝ有難く存じ奉つりまする。（ト平伏なす。八左衞門前へ出て、）

八左　何と伊豫どの、是れにて御疑念晴れたであらうな。

伊豫　いやも、只今と相成つては面目次第もなき仕合せ、さるにても心得ぬは、貴殿の外に誰あつて御供とてもござらぬは、如何なる仔細でござるよな。

八左　されば急變出來いたし、片時も早く我が君樣江戸表へ御歸城あるやう、某お駕籠に附隨ひ夜を日についで急ぎし所、陸尺どもは道に疲れ終には君の御乘物おろせしまゝにへたばりて、火急の役に立たざるゆゑ、某一人我が君のお乘物を引ッかつぎ、御供いたしてござりまする。

伊豫　すりや御手前が我が君の、お乘物をば只一人かつぎめされて遠路の所、安々お供いたされしか、忠臣無二なる其上に、驚き入りし天晴怪力、誠に感悦いたしてござる。

氏光　八左衞門がこたびの働き、實に怪力とも謂つべきか、乘物に居る氏光すら夢路を走る心地にて、我が城内へ參りしも心附ざる程なれば、陸尺どもが石川に後れて跡より續かざるも、尤も至極と思ふなり。

八左　何は格別我が君には、嘸かし長途の御疲れ、片時も早く御開門。

伊豫　如何にも開門申し附けん。(ト立上り後へ向ひ、)上樣只今御歸城なるぞ、者共開門仕つれ。

大勢　はあゝ。

　　トきつといふ、後にて、

ト聲し、正面の扉を左右へ開く、内に絹羽織の侍大勢平伏して居る、是れにて東西の窓蓋を明け、
鷄笛本釣鐘を打込む、氏光思入あつて、

氏光　蜀の劉備は潭溪を狄驢に乘りて越えしと聞く、我は忠臣石川が怪力無双に誘はれ、易々のがれし虎口の難。
八左　其玄徳に異ならぬ、君の御武徳曉天に、昇る旭の御勢ひ、
伊豫　今三國にも比類なき、天下に對し横雲なる、叛逆謀叛を企つとも、
氏光　及ばぬ事とは言ひながら、未だ當家も三代にて、跡目をとりの鳴く空も、
八左　東を照す神靈の光り尊き上からは、
伊豫　泰平うたふ君が代の、礎かたき舞鶴城。
氏光　握る拳も覺束なく、
八左　ひらく大手は、
伊豫　武門の功し、
氏光　實に忠臣は、（ト氏光膝の塵を拂ふを道具替りの知らせ、）寳ぢやなあ。

ト八左衞門伊豫守平伏する、氏光は兩人を見てにつたりと思入、此模樣鷄笛時の太鼓にて道具廻る、

（本田家奥殿の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面金地紋散しの襖、上下折廻し、同じく紋散しの襖日覆より同じく金地の大欄間をおろし、花道揚幕の所杉戸の出はひり、舞臺花道とも薄縁を敷詰め、總て宇都宮本田家奥殿の模樣、爰に女形三人腰元にて住ひ、此見得調べにて道具留る。

○ もうし皆さん、私共に奥樣から俄にお暇下さりましたは、どうした譯でござりませう。

△ ほんにそれ〴〵、不調法でもある事なら、お詫のいたしやうもござりまするが、其やうな覺えもなし。

□ 只そち達が爲なれば、早々宿へ下るやうにと、合點の行かぬおつしやりやう。

○ どういふ深い思召しか、其お心は知らねども、

△ 爲を思ふてお暇とは、合點の行かぬ仰せ出し、

□ こりやたゞごとでは、

三人 ござりませぬわいなあ。

トやはり調べにて、奥より眞弓奥方の裝にて紫の袱紗包みを持ち出來り、

眞弓 腰元ども、是れに居やつたか。（ト合方になり、よろしく住ふ。腰元三人眞弓を見て手をつかえ、）

○只今三人打寄りまして、相談いたして居りまするが、降つて湧いたる俄のお暇、
△御奉公をいたし居つては、爲にならぬとおつしやりまするが、如何なる譯でござりまするか、
□不調法でもござりますなら、どのやうにもお詫びをして、勤め居りたうござりますれば、
○ならう事なら此儘に、
△お置きなされて下さるやう、
□偏にお願ひ、
三人　申し上げまする。(ト眞弓これを聞き、よろしく思入あつて、)
眞弓　さあ年は行かねどそち達は、是れまで長のその間何一つ麁相もなく、奉公大事に勤めしゆゑ不調法とては少しもない、殊には子飼の時分から召使ふたるそち達ゆゑ、頼まいでも此儘に置いて遣りたいものなれども、言ふに言はれぬ、さあ、急に置かれぬ譯あつて、殘らず暇をやる程に、少しも早う宿元へ、どうぞ下つてくりやいなう。
○そりやもう置かれぬ譯あつて、暇を出すとおつしやりますれば、是非ない事とは存じますれど、
△是れまで長の其間、不束な私共を御不便掛けて下さりました、お慈悲深い御主君樣、
□勿體ない事ながら産みの母より大切と、お慕ひ申す奥樣に、此儘お別れ申しますのは、

○　心細うて、

三人　なりませぬ。（ト愁ひの思入、眞弓も不便だといふこなしあつて、）

眞弓　僅な恩義を其やうに思うてくれる志し、あだには聞かぬ嬉しいぞや、それにつけてそち達に遣したいものがある。三人共に、是れへおぢや。

三人　はアい。（ト眞弓の側へ來る。眞弓件の紫の袱紗包みより目錄包みを三つ出し、）

眞弓　これは些少な金子ぢやが、此れまで長々神妙に勤めてくれしそち達ゆゑ、心ばかりの褒美のしるし、受けておいてくりやいなう。（ト是れにて三人目錄包みを取上げ、）

○　そんなら是れを私共へ、

△　首尾よう勤めし御褒美とて、

□　あの奥樣から、

三人　下さりますとな。

眞弓　ほんの褒美のしるしぢやわいなう。

○　是れまで長の御丹精、下さるのみか此やうに、

△　神妙に勤めしとて、多分の金子を下さりますとは、

□　何とお禮を申さうやら、有難いお志し、
○　仰せに從ひ此儘に、
△　頂戴いたすで、
三人　ござりまする。（ト戴いて懷へ入れる。）
眞弓　さ、暇の出でし上からは、少しも早く支度しや。
○　お名殘り惜しうはござりますれど、
△　長居いたせば却つてお叱り、
□　左樣なれば、
三人　御機嫌よろしう。（三人眞弓の顏を見下げる。眞弓三人を見てほろりとしたる思入にて、）
眞弓　これが此世の、
三人　え〻。
眞弓　早く行きや。
ト顏を背けて泣く。腰元三人眞弓の樣子を見て、顏見合せ愁ひの思入にて、
○　お名殘り惜しう。

三人　ございまする。(ト立兼ねて居るゆゑ、眞弓わざと氣を替へ、)

眞弓　えゝ、行きやらぬかいなう。(トきつと言ふ。)

○　はゝい――。

トやはり調べにて腰元三人悄々と下手の襖を明けてはひる。眞弓是れを見送り、愁ひの思ひ入れ、合方になり、

眞弓　人を思へば思はるゝと、多く使ひし腰元の中でも取分けあの三人、子飼の時より手許にて使ひしゆゑに心もおけず、我が子のやうに思ふて居れば、又三人の心でも産みの母か何ぞのやうに思ふてくれる健氣な心、此儘置いてやりたいが置くに置かれぬ其譯も覺悟極めし身の上に、口へ出されぬ大事ゆゑ、言ひ聞かせねど三人共、蟲が知らすか此わしに、名殘を惜しむあの心根、思へば不便な事ぢやなあ。

トよろしく泣き沈む。此時どん／＼ばた／＼になり、花道より川村靱負、素襖後鉢卷袴股立大小にて先に立ち、跡より飯塚玄蕃家臣三人、何れも素襖後鉢卷袴股立大小にて出來り、直に舞臺へ來り、

靱負　若殿樣には御出張の、御用意よくば川村靱負。

玄蕃　譜代の御家臣飯塚玄蕃。

臣一　我々御供、

皆々　仕つらん。(ト此時上手襖の内にて、)

左門　疾くより用意いたし居るわえ。

　　　ト誂への鳴物になり、上手より左門之介、素網後鉢卷袴股立凛々しきこしらへにて出る、眞弓これを見てびつくりなし、

眞弓　川村靭負を始めとして、譜代恩顧の家來といひ、左門之介にはいかめしきその裝をして何れへ行くのぢや。

左門　母上樣には御存じなけれど、豫ての大望露顯なし、掃部頭が計らひにて、石橋宿より將軍は昨夜の内に歸城となり、既に今日當城へ問罪の使者來るよしと、承はつて捨ておかれず、

靭負　斯くなる上はやみ／＼と、上使を相待ち罪科に服し切腹なすは殘念ゆゑ、此城外の爰かしこ遠卷きなせし討手を引受け、一戰なして花々しく、死する覺悟の我々ども。

玄蕃　運に叶つて敵方を、物の見事に追ひ散らし、籠城仕遂ぐる其時は、六十餘州を駿河公の御手に入れる下ごしらへ。

臣一　さすれば主君が是れまでに、御企てを遊ばされし、

臣二 御存意相立ち我々が、日頃の望みも叶ふといふもの。

左門 それゆゑ主從申し合せ、

靱負 用意いたして、

皆々 ござりまする。

眞弓 いや／＼、其儀はなりませぬ。

左門 なに、出張が、

皆々 成りませぬとな。（ト合方きつぱりとなり）

眞弓 七人の子はなすとも女に肌は許されずと、過ぎし頃より我が夫には、容易ならざる御企て、お包みあれど漏れ易きは惡事千里を走るの習ひ、殊に連添ふ此身ゆゑ早くも知つて幾度となく、お諫め申せど中々に、お聞き入れなき上からは、もし大望の期に至らば、自殺をなして相果んと覺悟極めて居つたる所、既に昨日惡事露顯、是れぞ天命是非なしと、腰元どもはそれ／＼に、暇を出して將軍家の御沙汰を待つて居る眞弓、昔が今に至るまで叛逆謀叛の成就なく、榮えし例あらざれば、惡事露顯となる上は、手向ひだては無益ゆゑ、其身を愼しみ御公儀の、御沙汰を待つてるませうぞ。

トきつといふ、左門之介思入あつて、

左門　母人の仰せながら、悪事露顯となる上は、所詮罪科はのがれぬ某。
靱負　其身を愼しみ居つたりとて、御家の安泰叶はぬ上は、手を束ねて居る謂れなし。
玄蕃　世の諺にもいふ如く、先んずる時は人を制し、後るゝ時は制せらるゝ。
臣一　古語に習ひて此方より、
臣二　討手來らぬ其うちに、
臣三　切つて出づるは是れ上策。
左門　母人必ずお留めあるな。
靱負　是非とも出張、
皆々　仕つらん。
眞弓　すりや此母が詞を用ひず。
左門　武士の意地ゆゑ、御免下され。
靱負　左樣ござらば若殿樣。
左門　者共續け。

皆々　はッ。（ト花道へつか〳〵と行く、此時後にて、）
上野　やれ逸まるな左門之介、川村靱負も暫く待て。
左門　あのお聲は、
皆々　御前様。
　　　ト時計の音になり、正面の襖を明け、前幕の上野之介上下大小にて出る、眞弓は是れを見て、
眞弓　こりや悴、我が夫のお詞なれば、さあ〳〵是れへ歸りませうぞ。
左門　假令父上お留めあるとも、
靱負　思ひ立つたる上からは、
玄蕃　是非とも出張、
皆々　仕つらん。（ト行きかけるを、）
上野　はて、待てと申さば、控へ居らぬか。（トきつと言ふ、是れにて皆々是非なく舞臺へ歸り、下に居て、）
左門　して又拙者を始めとして、
靱負　我々共をお留めありし、
玄蕃　我が君樣の御賢慮は、

臣一　如何なる仔細か御心中、

臣二　仰せ聞けられ、

皆々　下さりませう。（ト左右より詰掛ける。）

上野　其方どもを留めしは、匹夫の勇と存ずるゆゑ。

皆々　何とおつしやる。（ト是れより誂への合方になり。）

上野　事新らしく申さずとも、其方達も存ぜし如く、かねて企つ大望こそ只私の宿意にあらず、當時天下を知ろし召さるゝ氏光公へ對しては、叛逆謀叛に當れども、駿河公へ對しては、忠義の爲の企てなりしも、事ならずして露顯の上は、所詮時運の至らぬ所、然るに僅か當城の人數を以て將軍家へ刃向ひ立ては益なきこと、及ばぬ戰爭なす時は是れ軍法も辨へなき匹夫の勇と死後までも、恥辱を重ぬる無念さに、そち達を留めたり。さ、斯かる無益の討死なし世の物笑ひとならうより、惡事露顯に及びし上は、是れまでなりと身を愼しみ、公儀の沙汰を相待つが、武士たるものゝ覺悟なるぞ。

ト是れを聞き靱負進み出で、

靱負　あいや我が君、恐れながら其御教諭は、御容赦下され。

上野　なに、我が教訓を用ひぬとは。

靱負　其儀ばかりは此靱負、用ひられぬと申す儀は、そも大望の企てに荷擔いたせし其日より、惡事露顯の其時は、切死なして一命は駿河公へ捧ぐる心底、然るに叛逆露顯に及び、多年の望みも畫餅となり、家國沒收は目のあたり。

左門　假令謹愼なすとても本田の家は是れ限り、退轉いたす位なら討手を引受け潔く、討死なして末の世まで、美名を殘すがこれ本懷。

玄蕃　惡事露顯の今となり、其身を愼しみ居る時は、命惜しさに身を愼しむ、腰拔武士といはるゝ無念。

臣一　其物笑ひを見んよりも、

臣二　討死なすが上策と、

臣三　所存一決いたしてござれば、

左門　其御教諭は、

皆々　用ひられませぬ。（トきつといふ、是れを聞き上野之介悦ばしき思入あつて、）

上野　ほゝお、義を重んじて命を輕んじ、所存一決いたせしとは、天晴由々しき日本魂、上野之介感悦いたした。

勘負　すりや我々が寸忠を、御賞美あつて我が君には、
左門　今日の出張を、
玄蕃　此儘お許し、
皆々　下さるとな。
上野　其戰爭は相成らぬ。
勘負　とは又如何なる、
皆々　仔細にて。
上野　義を重んじて一命を、君へ捧げて討死なすは、天晴勇士の所存ながら、及ばぬ事と知りながら戰爭なすは愚の至り、殊更以て我々が天下へ敵對なす時は、御世に立てんと萬苦せし駿河公のお爲にならず、且は領地の農民ども兵火に掛りて家財を失ひ、其苦しみは如何ばかり、されば兵書の敎へにも、無益の戰ひを好まざるを軍法奧義の極意となす。さ、此理を篤と相辨へ、假令世上の物笑ひに臆病未錬と言はるゝとも、君の御爲民への情、叛逆露顯となる上は只何事も無念を忍び、愼みくれよ、こりや忰。勘負を始め臣下の者共、此上野が賴みなるぞ。
トよろしく思入にていふ。眞弓前へ出て、

眞弓　女子の身にて留むるは差出がましき事ながら、死ぬるも忠義係ゆるも忠義の爲と思ふなら、萬民の爲君の爲・無念を忍び身を愼み、公儀の御沙汰を待つてたも。母が頼みぢや、こりや悴、そちから皆の者共へ、よしなに諭してたもいなう。

トこなしにて言ふ、是れにて左門之介も當惑の思入、靱負思入あつて、

靱負　如何にも君の御教訓、承知いたしてござりまする。

上野　すりや聞き濟んでくれると申すか。

靱負　我が君樣のお頼みゆゑ、戰爭の儀は留まりまするが、改めまして今日より、お暇願ひ奉つる。

上野　すりや今日の期に至り、主を見限り暇欲しいか。

靱負　君の爲ゆゑ身を愼み、御沙汰を待てとの御教訓、承つて此靱負、命が惜しくなりましたゆゑ、お暇願ひ奉つる。（ト是れにて上野之介思入あつて、）

上野　然らばそちが望みに任せ、今日只今改めて、暇をくれう出て參れ。

靱負　は、有難く頂戴仕ッてござりまする。（トよろしく辭儀をなす。）

五番　すりや、あのいよく、

皆々　川村氏は。

靱負　お暇願ひ脱走なし、當家の臣にあらざれば、假令討手を引受けても、いやさ、假令討手が來れば
とて、戰爭なすにも及ばねば、それゆゑ脱走いたす心底。

玄蕃　左樣ござらば、我々も、

臣一　脱走なして、

玄蕃
皆々　上の討手を。

靱負　あこれ、我と思はん方々は、君へお暇願はれよ。（ト是れにて玄蕃先きに諸士皆々前へ出て、）

玄蕃　はツ、何卒我々一同へ、

臣一　お暇願ひ、

玄蕃
皆々　奉つる。

上野　いや、そち達は相成らぬ。

玄蕃　すりや我々へ、

玄蕃
皆々　お暇は。

上野　川村靱負が暇を願ふは、浪人なして意を貫き、上の討手に敵たふ所存。

靱負　や。

上野　さ、假令浪人いたせばとて、當家の藩たる者共が徒黨を結び將軍家へ、敵對なさば祟りは同じ、それゆゑ靱負の其外は中間小者に至るまで、暇を出す事相成らぬ。さ、望みに任せそち一人、暇を取らせ遣はす間、片時も早く退散いたせ。（トきつといふ。是れにて靱負思ひ入あつて、）

靱負　餘人へお暇出ぬとても一本立ちとなるからは、日本國中敵となし、死後に勇名轟かさん。

左門　すりや川村には、

皆々
左門　それ程までに。

靱負　思ひ込んだる上からは、善惡ともに變ぜぬが、勇士の習ひ是非がござらぬ。

　　ト立上る、上野之介是れを聞き天晴といふ思ひ入あつて、

上野　はて頼もしい、（ト言ひかけ態と氣を替へ、）頼まぬ腕立、勝手にいたせ。（トきつて言つて顔を背ける。）

靱負　左樣ござらば各方。

左門　然らば此儘、

玄蕃
皆々　川村氏。

靱負　我が君お暇仕つる。（ト唄になり、靱負思ひ入あつて、花道へはひる、左門之介きつとなつて、）

左門　それ。（ト刀を持つて立上り、花道へ行かうとするを、）

上野　こりや忰、そちも靫負と諸共に、父を見限り暇が欲しいか。
左門　全く以て。
上野　さなくば是れに控へ居よ。
左門　それぢやと申して。
上野　死するばかりが忠義にて、武士の譽れと心得居るか。
左門　さ、それは。
上野　言はうやうなき、不覺者めが。（トきつといふ、此時花道の揚幕にて、）
呼ビ　御上使のお入り。（ト呼ぶ、是れにて皆々向うへ思入あつて、）
左門　なに、御上使の、
左門　お入りとな。（トきつとなつて立ち掛るを、）
皆々
上野　え丶見苦しい控へ居らぬか。（トきつといふ、是れにて左門之介舞臺へ歸り皆々是非なく下に居る、上野之介思入あつて、）　こりや奧、不覺者の靫負に誘はれ、忰を始め家中の者が、脫走なさんも計られず、奧へ召しつれ其方より、異見を加へ謹愼させよ。
眞弓　畏りましてござりまする。

立番 すりやどうあつても、

立番皆々 我々は。

眞弓 お許しの出ぬ上からは、伜諸共奥の一間へ。

左門 とはいへ、どうも。（ト立ち掛るを、）

眞弓 はてまあ、奥へ來やいといふに。

ト唄になり、眞弓左門之介の手を取り先に立ち、諸士四人附いて上手へはひる、是れにて上野之介下手へ向ひ、

上野 やあ〳〵頼母、出迎へいたせ。（ト下手にて、）

ト頼母上下大小にて先に立ち、臣四、臣五、同じく上下大小にて出で、皆々よろしく出迎ふ、此時また花道の揚幕にて、

頼母 はあゝ。

呼ビ お入り。

ト呼ぶ、是れより太鼓、謡になり、花道より前幕の松平越中守、上下大小にて袴小姓二人跡先に附添ひ、案内をして出來り花道に留る、上野之介越中守を見て、

上野　これは〳〵越州殿には御上使のお役目、
頼母　御苦勞千萬に、
皆々　存じまする。
越中　上野殿にもお出迎ひ、近頃以て祝着至極、
上野　何は格別、
皆々　先づ〳〵是れへ。
越中　然らば御免下されい。
ト右鳴物にて越中守舞臺へ來る、上野之助越中守へ上手へ通れといふこなし、越中守上野之介へ會釋して上手へ通りよろしく住ふ。是れにて皆々よろしく居並び、上野之介小姓に向ひ、
上野　お茶煙草盆の用意いたせ。
小姓二人　はッ。（ト下手へはひる。）
上野　白河殿には遠路の所、路次のお疲れ推察仕つる。して御上使の趣きは、如何なる仔細か承はりたし。
頼母　梁田頼母を始めとして、

臣四　その外臣下の我々へ、
臣五　仰せ聞けられ、
皆々　下さりませう。
越中　只今演舌いたすでござらう。大老よりの上使。
上野
皆々　はゝはッ。（ト平伏なす、是れより管絃になり、）
越中　上使の趣き餘の儀にあらず、今般上樣日光山御參詣に附き、豫て當城お泊りの旨、前以て御沙汰により御座所は勿論御湯殿まで、新たに造營いたされし由、近頃奇特の事なりと、上樣にも殊の外御滿悅にあらせられし所、右御湯殿の儀に附き御不審の廉これあつて、窃に探索いたす折柄大工職與四郎より井伊殿へ差上し貴殿自筆の起し繪圖、釣天井の仕掛まで事明白に相分り、恐れ多くも將軍家を弑し奉らんと計る容易ならざる企てなし、鳥井忠恆、平岩主計一味荷擔の事までも露顯に及びし上からは、最早脫るゝ所なし、同罪の上親子共召連れ參れと則ち嚴命、かゝる證據のある上は、服罪あつて尋常に、江戸表へ出府召されよ。
　ト越中守袱紗に包みし前幕の畫圖を開き見せる、これにて上野之介是非なき思ひ入あつて、
上野　此期に及び上野之介申し陳ずる所なし、如何にも此度將軍家日光山へ成らせられかねて、當城御

泊りと定まりしは是れ幸ひ、誠に天の與ふる時節、此時事をなさゞれば、何時の世にかは我が本懐遂せんものと存ぜしゆゑ、企てはいたせしかど、武運拙く露顯に及び、斯く問罪にあづかる上は、國家の沒收は覺悟の前、如何なる刑に處せられても、天下へ對し奉つりお恨み申す謂れなし、只此上の願ひには、寛仁の御沙汰を以て、家中一統助命の儀、何卒願ひ奉つる。

越中　流石は本田上野殿、天晴なるお覺悟、御家臣一統助命の儀は某が身に替へても、よしなに執成しいたすでござる。

上野　すりや其許の御身に替へ、あのお執成し下されんとな。

越中　それぞ手前が寸志の計ひ、必ず心配めさるゝな。

上野　御厚志の段忝う存ずる。（ト是れにて賴母思入あつて、）

賴母　かく露顯に及ぶ上は、主君と共に我々が、重き罪科は免がれず。

臣四　元より死する覺悟ゆゑ、惜しまぬ命をそれほどまで、

臣五　おかばひ下さる我が君樣、又御上使の御厚情。

賴母　有難く存じ、

三人　奉りまする。（トよろしく辭儀をなす。越中守思入あつて、）

越中　上野殿を始めとして御家臣までが義を重んじ、可惜名家にありながら、何等の宿意で上樣を、旣に失ひ奉らんと御企ては召されしぞ。

上野　それにも深き趣意ござれど、此期に及び何面目、申し立つべき儀にあらねば、只某が身一つに重き罪科を蒙る心底。

越中　すりや何事も其許の、御身一つに引受けられ。

上野　叛逆謀叛と將軍家へ、何卒御披露下されい。（ト覺悟の思入、越中守こなしあつて、）

越中　いやなに上野殿、上使の表相濟む上は、ちと其許に密々にて、申し入れたき儀もござれば、暫時の間お人拂ひを。

上野　承知いたした。こりや〳〵賴母、其方共は暫く次へ。

賴母　はッ、左樣ござらば。

七人　御上使樣。

上野　立て〳〵。

賴母三人　はツ。（ト賴母、臣四、臣五下手へはひる。兩人跡を見送りて、）

上野　して密々にて某へ、仰せられたき一儀とは。

越中　餘の儀でござらぬ上野殿、さぞ御殘念にござらうな。

上野　何と言はるゝ。(ト是れより誂への合方になり、)

越中　此度の御企てに拘はる儀ではござるまいが、既に二代の將軍家御繁昌の折柄にも、神君の仰せを背き、今三代の將軍家は駿河公にて御家督と、仰せ出されし事ありしが、其節大久保彦左衛門遮つて諫めをいれ、氏光公にて三代の御家督定めとなりしゆゑ、同じお胤にありながら駿河公には御家臣の、列にて空しく世の中を送りたまふを附人たる、其許の御所存では嘸お傷しく思召されん、上野殿の御心中、越中推察いたす。(ト思入にていふ、上野之介こなしあつて、)

上野　は、忝なき其お詞、今改めて申さずとも、御存じの事ながら、駿河公には二代の君の御本腹にましますゆゑ、正しく御世を知ろし召さるゝ君と悦ぶ甲斐もなく、神君の御仰せにて、御妾腹の氏光公御惣領の順序に依り、御家督とならせられ、駿河公は申すに及ばず御臺所の御胸中、嘸御殘念にましまさんと臣等が身に取りお傷しく、逆意と知つて此企て、いやさ、此企てをいたさずば、又お力にもなるべきに、我は私慾に身を亡ぼす拙き非運を越中殿、御賢察なし下されい。

(ト思入宜しく、)

越中　して御子息の左門殿には、御壯健でござるかな。

上野　左門之介めも御上使のお出迎ひをいたさすべきに、惡事露顯と承はり、逆上いたし居りますれば、粗忽あつては濟まざる儀と、只今奥に申し附け、一間へ押籠めおいてござる。

越中　御若年の儀でござれば、左もあるべきとは存ずれど、今日上使に參りしは、其許御親子諸共に、江戸表まで即刻に、召連れ參れと重き嚴命。

上野　委細承知いたしてござる。

越中　未だ時刻も早うござれば、お心おきなくお支度めされ。

上野　御配慮の段忝うござる。（ト上野之介思入あつて、）かゝる信ある其許の御入來ゆゑ常なれば、酒肴珍味も申し附け、饗應なさんに、今は早や。

越中　忠義ゆゑとは言ひながら、順杯ならぬ杯の、逆意にめぐる七五三。

上野　重ぬる罪科是非もなく、治めかねたる家國も、

越中　あだに過して大醉の、

上野　しどろもどろの足許に、

越中　鳥の立舞ふ一指が、

上野　死刑の場所の亂れ舞。

上野之介越中守きつとなり）

越中　扇とる手の期を思へば、

上野　捨つべきものは、

兩人　弓矢ぢやなあ。（ト兩人よろしく思入、此時下座にてドン〳〵を打込む、

上野　はて心得ぬ、今城内は謹愼の布令によつて誰一人、騷立つ者はあらざる筈。

越中　遠巻きなせし者共へも、法令嚴しく申し附け、濫りに兵は出さゞる筈。

上野　如何なる事の手違ひよりか、俄に城中騷がしく、

越中　動亂いたすものなるか。

上野　心得難き、

兩人　事どもぢやなあ。（トやはりドン〳〵にて、奥より以前の眞弓出來り）

眞弓　我が夫これにおいでありしか、一大事でござります。

上野　一大事とは氣遣はしい、して〳〵樣子は如何なるぞ。

眞弓　先刻あなたがあれ程に、お諭しありし詞を背き、川村靭負が城門にて將軍家よりの討手を引受け、切死にいたす樣子ゆゑ、悴を以て鎭めんといたせど是れも不所存者、此儀は如何計らひませう。

上野　して〳〵悴を始めとして、四人のものは如何せしぞ。

眞弓　手放してやる其時は心許なく存じまするゆゑ、奥の一間へ嚴重に、押籠めおいてござりまする。

上野　先づはそれにて一安堵。（ト下手へ向ひ、）やあ〳〵賴母、早や參れ。

賴母　はあゝ。（ト下手より以前の賴母出來り、下手に居て、）何ぞ御用にござりまするか。

上野　只今俄に打ち立つる、あれなる太皷を存じ居るか。

賴母　何か委細は存ぜねど、新御殿にて川村氏が、亂暴狼藉いたす由、

上野　其方參つて靱負めが、粗忽の振舞取り鎭めい。

賴母　はッ、畏つては候へども、拙者如きが參りしとて、中々以て川村氏が。

上野　我が詞さへ聞き入れなき、强情我慢の川村なれど、彼れは先刻暇を遣はし、疾くにも城内立退くべきに、將軍家よりの討手を引受け、無謀の振舞相成らぬと、理解を以て取り鎭めい。

賴母　然らば君の御威光にて、川村氏を取り鎭めん。

上野　いそふれ賴母。

賴母　はッ。

トやはりドン〳〵にて賴母逸散に花道へはひる。此時奥より左門之介、若殿のこしらへ玄蕃附いて出來り、

左門　玄蕃續け。

玄蕃　はッ。（ト血相して向うへ行かうとするを、上野之介左門之介、眞弓玄蕃を留め、）

眞弓　こりや悴、そちや血相して何れへ參る。

左門　川村靭負が狼藉なすゆゑ、是れより參つて取り靜めん。

上野　いゝや其儀は相成らぬ、梁田頼母に申し附け、只今鎭めに遣はしたれば、そちが參るには及ばぬ事。

眞弓　又其方も同じやうに、御上使樣の御前にて、立騷いで無禮の振舞。

上野　奥へ參つて、

眞弓　愼み居らぬか。

ト兩人きつといふ、是れにて左門之介玄蕃是非なく下に居る、此内越中守扇を膝へ突き、始終の樣子を見て居る事よろしくあつて、

越中　はて健氣なる此振舞、是れが謀叛の名を取らずば、まさかの御用に立たうもの。

上野　返す〴〵も御上使へ、無禮の粗忽幾重にも。

眞弓　お許しなされて下さりませ。

左門 とはいへ此儘。(ト又立ち掛るを、)

上野 こりや父が詞を、(ト下に居させるを、道具替りの知らせ、)用ひ居らぬか。

ト此模様早舞にて、皆々引張りよろしく道具廻る。

(城内湯殿の場)——本舞臺眞中二間の湯風呂、中足程の高さ、此上一面眺への天井、仕掛にて後に落ちる事、正面板羽目、左右同じく一面の板羽目、前面一面塗緣遠州透しの欄間、此れへ注連と見せたる誂への繩を張り、下手よき所御影石の水槽、此脇へ誂への桶を大分に積みあげ、總て城内新御殿風呂場の模樣よろしく、爰に袴股立襷鉢卷の侍六人、槍を持ち立ち掛り居る、是れを以前の靱負支へて居る、此見得ドン〳〵にて道具留る。

侍一 將軍家よりの上意を受け、

侍二 湯殿普請を遂一に、

侍三 吟味に參りし我々共、

侍四 何ゆゑあつて留め立てなすか、

侍五 手向ひいたすに於ては、

侍六　其分には、

六人　差しおかぬぞ。

靱負　某事は今日より、當家を浪人いたしたれば、事の次第は辨へねど、新たに造營いたしたる館に濫りに踏込むのみか、座敷のくまぐ床下まで手槍を持つて突き散らし、亂暴なさるお手前方、見るに忍びず支へ申した、故主なれども當家の主人が丹精籠めし此普請、湯殿の内へ一寸でも疵を附けたら許し申さぬ。

侍一　やあ留め立てなす程猶怪しい、

侍二　湯殿の内の天井に、

侍三　曰くがあると聞くからは、

侍四　外の座敷の詮議より、

侍五　目指す所はあの天井、

侍六　いで突き崩して、

六人　吟味なさん。（トきつとなるを、靱負よろしく留めて、）

靱負　やあ、達て亂暴いたしなば、片ツ端から命がないぞ。

侍一　さいふ汝を、

六人　突殺さん。

靫負　何を小癪な。

ト侍六人靫負へ槍にて突いて掛る、靫負よろしく立廻り、トゞ六人を左右へ投退け、眞中にてきつと見得。是れより誂への鳴物になり、有合ふ留桶片手の猿棒などを遣ひ、侍後の天井を槍にて突かうとするを靫負支へて立廻り、トゞ立廻りの留り、花道より、ばた／＼になり以前の賴母走り出來り、靫負を見て、

賴母　我が君の御意でござる、川村氏お控へなされい。（トきつといふ、靫負賴母を見て、）

靫負　さいふは梁田賴母殿、假令主君の御意なりとも、今日よりして浪人なし、一本立ちの川村靫負、殿の上意は用ひられぬ。

賴母　いゝや其儀は僻事なり、お暇出し上からは、疾くにも城中立退くべきに、將軍家よりの討手に對し無謀の手向ひいたされるは、近頃以て亂暴狼藉。

靫負　その狼藉も忠義の爲、大事を餘所へ漏らさぬやうっ

賴母　假令如何程其許が殿の大事をお庇ひあつても、最早御上使御入來にて、罪科に服し我が君樣、

靱負　さては君にはお覺悟あつて、最早服罪めされしか。(トびつくり思入、爰へ侍六人窺ひ寄つて、)

侍六人　覺悟。(ト槍にて突いて掛る、靱負ちよつと立廻つて六人を引附け、思入あつて、)

靱負　殿が服罪召されし上は、最早是れまで、覺悟なせ。

六人　何を。

ト振解いて突いて掛るを、靱負よろしく立廻り、トヾ後の軒口に張つてある注連繩を切る、是れにて夥しき音して湯風呂の上の天井仕掛にて落ちる、天井の上に莫大なる石を取り附けある事、侍六人この物音に驚きどうとなる、賴母これを見て、

賴母　はて、怖ろしき釣天井。

靱負　いでや、最期の、(ト件の石へどかと腰を掛けるを道具替りの知らせ、)魁なさん。

ト靱負刀を逆手に持ち腹を切りにかゝる、此模樣ドン〳〵にて道具廻る。

(本田家玄關先の場)――本舞臺眞中三間の間大名玄關の掛り、中足の二重、此前へ式臺を取り附け、左右黑緣間平棧の杉戸、破風造りの屋根、本庇、正面大紗綾形の襖、平舞臺上下屋根附の白壁、上下とも簾をおろせし日窓ある事。上下の窓より後に覗く事あり、裾通り一面の腰羽目、日覆より

松の釣枝、總て本田家玄關先の體、爰に網乘物を二挺置き、黑四天の捕手大勢立ち掛り居る、此見得時の太鼓にて道具留る。と時計の音になり、奥より以前の上野之介先に、左門之介麻上下無腰にて出る此跡より玄蕃、臣一、臣二、臣三、臣四、臣五、何れも麻上下無腰にて送り出來り、皆々式臺へ下り、

玄蕃　左樣ござらば殿樣には、

臣一　最早御退城で、

六人　ござりまするか。

上野　只今申の上刻なれば、最早退城いたさねばならぬ。

左門　越州殿には何ゆゑに、奥にて猶豫召さるゝか。

上野　こりや玄蕃、奥へ參つて見て參れ。

玄蕃　はッ。（ト立たうとする、爰へ奥より以前の眞弓出來り、）

眞弓　いや〳〵それには及びませぬ、御上使樣へ御猶豫を、折角お願ひ申せしもの、急き立てられるものかいなう。（ト愁ひの思入よろしく、上之介眞弓を見て、）

上野　やあ未練なる其詞、跡々の儀はかねてより、申し附けてあるではないか、それに何ぞや此期に及び、名殘りを惜しむは不覺なるぞ。

眞弓　さあ假令不覺でござりませうとも、親子夫婦が一世の別れ、是れが名殘りを惜しまいで、居らるるものでござりませうか。

上野　やあ、まだ〳〵申すか未練千萬。(トきつと叱る、左門之介前へ出て、)

左門　いやなに、母人さま、斯くなりまする上からは、假令如何程お嘆きあるとも、返らぬ事にござりますれば、あなたのお身を大切に、御長壽をなされまして、父諸共に某が切腹なせしとお聞きあらば、逆縁にはござりますれど、只一遍の御回向を、偏に願ひ上げまする。

眞弓　そりやもうそちが頼まいでも、斯くなるからは此母も、最う此世には居ぬ心、上の御沙汰を待ちし上、髪を下して菩提所へ寺入なして朝夕に、世になき夫や其方の菩提を弔ふ心なるが、今別れるが今生の別れと思へばいとゞ猶、未練なやうぢやが此胸も、張裂くやうであるわいなう。

ト懐紙を出し、顏へ押當てゝ泣く、是れにて皆々愁ひの思入よろしくあつて、上野之介わざと氣を替へ、

上野　やあ越州殿の情により、是れまで見送りいたすさへ、苦々しき儀と存じ居るに、斯かる場合に其落涙、見苦しい奥へ立て。

眞弓　はい。(トやはり立ち兼ねて居るゆゑ、)

上野　え〻立てと申すに。（ト きつといふ、是れにて眞弓是非なく泪を拭ひ、）

眞弓　そんなら悴、我が夫樣。

左門　左樣なれば、御機嫌よろしう。（ト 眞弓左門之介互にちつと顏を見合ひ、）

眞弓　思へば果敢ない。（ト 上野之介の側へ寄るを、）

上野　え〻未練者めが。（ト きつといふ、是れにて眞弓泣く〳〵奧へはひる、上野之介是れを見送りほろりとせし思入あつて、六人の諸士に向ひ、）こりや者共、それへ出い。

六人　はツ。

ト 前へ進み平伏する、上野之介式臺の上にて床几にか〻り、是れより横笛の入りし合方になり、

上野　先刻も申せし如く、必ず〳〵將軍家の討手引受け籠城などゝは、無益な事ゆゑ相成らぬ、斯く何事も露顯の上は、只尋常に身を愼しみ、我々親子遠からず、上の御所置を蒙りなば、頓て家來の者共へは助命の御沙汰があらう程に、謹愼なして彼の君の、お爲にならぬ事どもを引出しては相成らぬ。くれ〴〵も申し渡したぞよ。（ト 是れにて諸士皆々顏を上げ、）

立番　君辱めを受くる時は、臣死すといふ本文ながら、斯くまで厚き御仁情。

臣一　いかで仰せに背きませうや、今日よりして身を愼み、

臣二　上の御沙汰を待ちし上、
臣三　我々助命と定まらば、
臣四　涙ながらに退城を、
臣五　いたしまするで、
六人　ござりまする。
上野　其一言を承り、予も滿足に思ふぞ。（ト此時奥にて）
越中　あいや、お見送りには及び申さぬ。（ト皆々是れを聞き、）
左門　あのお聲は、
諸士
六人　御上使樣。
　　ト奥より以前の越中守先に、跡より賴母首桶を抱へ附添ひ出で來る、上野之介床几を放れ下に居て、
上野　益なき奥が願ひにより、暫時の御猶豫なし下され、恐れ入り奉る。
越中　こりや猶豫をいたせしならず、只今是れなる御家臣が、携へられし一つの首級、實檢なして居つたるゆゑ、思はぬ遲刻いたしてござる。
上野　なに、首級をば、

皆々　御實檢とな。

賴母　浪人なせし川村靱負、君の仰せを背きし上、將軍家の討手へ對し狼藉なせしそれゆゑに、首級を以て申し譯。

ト首桶を前へ出す、上野之介思入あつて、

上野　天晴賴母よくいたした。

左門　然らば是れが、

諸士六人　川村氏の。（ト首桶の側へ詰寄る。）

越中　實檢相濟む上からは、それにて名殘りを惜しまれよ。

ト是れにて上野之介件の首桶の蓋をあける。内に誂への切首ある事、上野之介ぢつと見て、

上野　我が教訓を用ひぬのみか、上へ對して憎き奴めが。

トきつと言つて、不便なといふ思入にて涙をこぼす、皆々上野之介の顔を見て、

左門　憎いと口ではおつしやれど、

賴母　我が君樣には、

皆々　御落涙。（ト是れにて上野之介心附いて氣を替へ）

上野　憎い奴ほど、（ト首桶の蓋をなし、）不便であるわえ。（トよろしく思入。）
越中　さ、御用意よくば退城召され。
上野　如何にも退城、
左門上野　仕つらん。
　ト上野之介左門之介先に、越中守件の首桶を抱へ、三人共式臺より平舞臺へ下りる、諸士皆々是れを見送り。
賴母　左樣ござらば、
皆々　我が君樣。
　ト此内捕手皆々件の網乘物を前へ出し戸を明ける、此時上手曰窓の簾を揚げ、以前の眞弓顏を出し、上野之介を見送る、
眞弓　そんなら是れが。
　ト此聲を聞き、左門之介振返り、眞弓を見て、
左門　此世のお別れ。
　ト上手へ行かうとするを、上野之介きつと留めて、

上野　あこれ、必ず其身を、（ト左門之介を下手へ廻すな木の頭、）愼み居らうぞ。

ト是れにて諸士皆々はツと平伏する、眞弓は窓の内にて愁ひのこなし、舞臺上手に越中守、眞中に上野之介、下手に左門之介、捕手大勢乘物の側に居並び、此引張り、太撥の時の太鼓にてよろしく、

ひやうし　幕

宇都宮騷動（終り）

吉備大臣支那譚

轉々堂主人が投書に基き
世界は扶桑皇統記圖會
然も玄宗皇帝へ
仲麿卿が忿死の問罪
我日本の俊才英智を
他境へ顯はす野馬臺の詩
古きをもつて新らしく
新歌舞伎十八番

「吉備大臣」は明治八年五月、六十歳の時に河原崎座で書卸した作である。新歌舞伎十八番の一つで好評を得た。伊原青々園氏の「市川團十郎」に次のやうなことがある。「此の作は當時大久保公が支那へ談判に行かれたことを當込んだので三世種彦の高畠藍泉翁が、作者の河竹に智慧を貸したとかのことであるが、茶屋の軒提燈が牡丹を崩して日の丸の國旗に見立て、大層な評判で大入を取つた。……團十郎は、先づ野馬臺を見てぐつと落着いてゐる。暫くしてドロ〳〵で蜘蛛が下る、ニヤりと笑ふやうな顔付をして首を二三度左右に動かして臺の上を蜘蛛のたどるを見廻し、それから詩を讀む、その始めて蜘蛛に氣の付く所の呼吸が言ふべからず妙であつた」と。

書卸しの時の役割は、市川團十郎（遣唐使吉備大臣）、中村仲藏（總官安祿山）、市川權十郎（大將軍吳懷寶）、市川團升（羽栗吉滿）、尾上榮三郎（吉滿の妻玉蘭女）、市川團右衞門（副總督揚國忠）、市川小半次（官士朱蘭金）、坂東筆之助（侍女菊花）、岩井てうし（侍女翠竹）、市川團四郎（官士崔國輔）等であつた。

口繪にした着色木版は國周筆の錦繪である。挿繪にしたのは、明治二十年八月再演の際の繪草紙である

校訂者

大正十四年四月

吉備大臣支那譚（新歌舞伎十八番の內吉備大臣――一幕）

唐土蓬萊宮の場
吉備公旅館の場

〔役名――遣唐使吉備大臣、大將軍吳懷寶、軍務總督安祿山、副總督揚國忠、仲麿の臣羽栗吉滿、吉滿の臣加茂友之、同嵯峨重成、官士朱蘭金、同崔國輔。吉滿妻玉蘭女、唐の女小姓梅子、同侍女翠竹、同菊花、其他。〕

（唐土王城外構の場）――本舞臺三間の間上手朱塗りの唐門、續いて下手石を積み上げし塀、上下とも置き据の石の塀、日覆より松の釣枝、總て唐土王城外構の體。爰に朱蘭金、崔國輔等裝束、官士の打扮にて劍を帶び上手に立掛り、下手に○△□◎下官のこしらへにて控へ居る、此の見得唐樂にて幕明く、

蘭金　いやなに、崔國輔どの、先年此の土へ日本より遣唐使に隨從なし、書記官に渡來なしたる阿部ノ仲麿といへる者、留學の爲めこの土に住ひ、名も朝衡と改めて官士の數に加はりしが、流石は遠き波濤を越え、學問修業なす程あつて、晝夜分たず書籍に向ひ眼をさらす彼れが勉強、

國輔　仰せの如く仲麿は勉強怠りなき上に、才智衆に勝れしゆゑ玄宗帝の御意にかなひ、月々立身登

用され、既に左補闕の官位に上り國政にまで關係なせば、豫て安祿山公が四百餘州を掌握なさん
其の企てに邪魔なるゆゑ、揚國忠公が智略を廻らし、

蘭金　而も八月十五夜に月見の宴と僞つて、凌雲臺の高樓へ一人殘して梯子を引き、通路を斷てば仲麿
も翼なければ、日を逐つて終に餓死なしたるを、誰知るまいと思ひの外、

國輔　彼れの家來の羽栗吉滿、窃に歸國なせし上仲麿餓死なしたる趣き、具に注進なせしゆゑ、又もや
此の度遣唐使吉備大臣この土へ來り、その罪狀を訊さんと先達てより應接最中、

○　承はれば今日は蓬萊宮にて、我總督安祿山公始めとして、

△　揚國忠公諸官の輩、和戰の二つ評議なし、

□　使に立ちし吉備大臣へ、有無の返答なすべき定め日、

◎　和議調はねば止むを得ず、戰爭なさねばならざる大事、

蘭金　聞き怖ぢするにはあらざれど、吉備大臣は俊才叡智、殊に武略は世に勝れ、日本第一の英雄なり。

國輔　されども權威を表に見せず、柔和を以て應接なす底の知れざる遣唐使、議論は所詮及ばぬこと。

蘭金　それゆゑ僕が存ずるには、無駄に日を追ひ議論なすより、吉備大臣を手短に、討つて捨つるが上
分別、

國輔　なにさま、それはよき策なり、よしや再び日本より其の問罪に大軍の兵士を以て攻來るとも、
○　名に負ふ支那は大國に、
△　高の知れたる小國の、
□　日本勢が寄せ來るとも、
◎　決して物の數ならず、
蘭金　軍務の總督安祿山公が、軍配執つて指揮あらば、
國輔　勝利は必ず、
皆々　我等のもの。（ト此の時門の内にて揚國忠の聲にて、）
國忠　その儀は方々氣遣ひあるな。
蘭金　や、あの聲は、
國輔　副總督の、
皆々　揚國忠公。
ト唐樂になり、門の内より揚國忠唐装束にて出で來る、皆々下手に控へる。
蘭金　副總督には蓬萊宮へ、

國輔　最早御出仕、

四人　なされましたか。（ト揚國忠上手床几に掛り、）

國忠　先達より支那日本仲麿横死の事件により、數度應接なしたるも最早今日手詰の返答、それゆゑ疾くより出仕なしたり。

闘金　それは〱御苦勞千萬、御職掌とは申しながら、兩總督には此の程より御心配のほどお察し申す。

國輔　只今我輩遣唐使吉備大臣を暗殺なさんと、これにて申し談ぜしを、氣遣ひするなと仰せありしは、

○　定めて貴君の御良策、

△　あつての事と存じられます。

□　心得の爲我輩へ、

◎　仰せ聞けられ、

皆　下さりませう。

國忠　その仔細は外ならず、今日吉備と是非を論じ、我が國分に極らば、償金を以て和を結び、彼が才智を譽めそやし如何なる博學多才の者も、讀むこと難き野馬臺の五言十二韻の詩を出し、是れ日本の未來記ゆゑ、とく〱熟覽あられよと詞巧みに申しなば、縱横分らぬ長篇に讀むこと難く

蘭金　難儀は必定、これにて恥辱を與へる所存。
國輔　讀むことならぬと申せども、凡才ならぬ吉備大臣。
國忠　もし又それを讀み得し時は、ます〳〵以て國の恥、
國輔　その時こそは是非に及ばず、和議を結びし祝ひと稱し、酒宴を設けて饗應なし、窃に瓶子へ毒を仕込み、これを勸めて手も濡らさず、吉備大臣を殺す所存。
蘭金　すりや野馬臺の詩を讀まば、
國輔　毒酒を以て、
皆々　遣唐使を、
國忠　これ、（ト押へ、）窃に〳〵。
ト此の以前下手塀の蔭へ玉蘭女唐女筒袖のこしらへにて窺ひ居て、是れを聞きびつくりなす、朱蘭金、崔國輔これを見て、
蘭金　まことに以て壁に耳、
國輔　油斷のならぬことでござる。（トこれにて玉蘭女花道へ行きかけるを、）
蘭金　こりや〳〵、女待て。

玉蘭　はい、私でござりまするか。
國輔　如何にも、汝のことなるわ。
玉蘭　思ひがけないあなた方が、お呼び留めなされましたは、
蘭金　ちと其の方に用事がある。
玉蘭　あの私へ御用とは、如何なる事でござります。
蘭金　用事といふは外でもない、
國輔　汝が命を貰ひたい。
玉蘭　えゝ、（トびつくりなし、）そりや何ゆゑでござりまする。
蘭金　何ゆゑとは知れた事、先達まで仲麿が同道なせし隨臣の、羽栗吉滿が妻となり、
國輔　此の土に産れし身を以て、夫に惹かれ日本へ心を寄する玉蘭女、此の場の樣子を聞いたが不運、
○　命を取るから、
四人　覺悟なせ。
玉蘭　すりや毒殺の樣子をば承はりしそれゆゑに、他へ漏らさうかと思召して、命を取るとおつしやりまするか。

蘭金　おゝ、蟻の穴より堤の崩れ、
國輔　不便なれども助けおかれぬ。（トきつと言ふ、玉蘭女覺悟せし思入にて、）
玉蘭　さういふことなら是非もなし、二世を誓ひし吉滿どのゝ仲麿樣の御最期をお知らせ申しに日本へ竊にお歸りなされしゆゑ、便り少ない我が身の上、思ひ掛けなくあなた方の毒殺なさる御密談を承はりしが此の場の災難、所詮お詫をなしたりとて、斯かる大事のことなればよもお許しはござりますまい、今日につゞまる我が身ぞと覺悟いたせばお二人さま、さあ命をお取り下さりませ。

ト前へ出て首をさし延べる、

蘭金　卑怯未練に泣きわめき、むごい料理と思ひの外、
國輔　さりとは健氣な其の覺悟、どれ、そッ首を落してくれう。

ト崔國輔劍を持ち立ち掛る、この内揚國忠始終玉蘭女に目を附け居て、

國忠　あいや、兩人待ちやれ。
蘭金　大事を聞きし此の女、
國輔　待てとお留め、
兩人　なされしは。

國忠（思入あつて、）餘りといへば健氣な覺悟、わるびれもせず座を構へ首さし延べしは男子も及ばぬ、女子に稀なる玉蘭女、命はその儘助けられよ。

蘭金　でも密談を、

國輔　聞きたる女。

國忠　我が國辱になる事ゆゑ、毒殺いたす其の譯を篤と申し聞かしなば、彼女も支那にて產れし者、假令夫吉滿が因みあるとも日本へ、密事をよもや漏しはせまい、揚國忠が所存もあれば、（ト思入あつて、）此の儘一命助けめされ。（トこれにて朱蘭金、崔國輔思入あつて、）

蘭金　助けがたなき奴なれど、副總督のお詞ゆゑ、

國輔　彼女が一命助けてくれう。

玉蘭　すりや、お助けなされて下さりまするか。

○　命冥加な、

四人　女だなあ。

玉蘭　え〻有難うござりまする。（トひれふす。揚國忠思入あつて、）

國忠　最早評議の刻限なれば、各方は蓬萊宮にて、安祿山を相待たれよ。

皆々　畏つてござります。

國忠　我はこれにて玉蘭女へ、(ト思入)密事の仔細申し聞かさん。

玉蘭　すりや私へ、あなた樣が、

國忠　むゝ、用事あれば控へて居よ。

玉蘭　はあゝ。(ト控へる。)

蘭金　左樣ござらば、

皆々　我れ〳〵は、

國忠　蓬萊宮へ、

國輔　出仕いたすで、

皆々　ござりまする。

ト唐樂になり、朱蘭金、崔國輔、○△□◎附添ひ下手へはひる、揚國忠後を見送り思入あつて、

國忠　玉蘭女、近う。

玉蘭　はツ。

國忠　はて、遠慮に及ばぬ、近う〳〵。

玉蘭　御免なされて下さりませ。(ト合方になり、玉蘭女前へ出る。)

國忠　今朱蘭金崔國輔が大事を聞きし其方ゆゑ、一命絶つと申せしかど、盛りの花を散すが不便に情を
もつて助けしぞ。

玉蘭　あなたさまのお詞にて不思議に命助かりしは、此の上もない身の仕合せ、何とお禮を申しませう
やら、有難うござりますわいな。

國忠　我が一命を助けしを、そちは嬉しう思ふとか。

玉蘭　これが嬉しうなうて、何といたしませう。

國忠　さ程嬉しく思ふなら、頼みがあるが聞いてくれるか。

玉蘭　命の親のあなたのこと、この身に叶ひしことならば、

國忠　叶へてくりやるか。

玉蘭　はい。(ト思入。)

國忠　叶へてくれる心なら、我に其の身を任してくりやれ。(ト手を取る。)

玉蘭　えゝ、(トびつくりなし振拂ふ。)

國忠　何も驚くことはない、未だ羽栗吉滿が妻とならざる其の前より思ひを掛けし玉蘭女、副總督の身

を恥ぢて言出し兼ねて居つたるうち、人の眺めとなりし殘念、折がなあらばと思ふに幸ひ羽栗吉滿日本へ歸りし上は寡婦のそなた、誰に遠慮もあるまい程に、命の親と思ふなら其の身を我に任すがよい、それとも否と申すなら、可愛さ餘つて憎さが百倍、二人の者に申し附け、此の場でそちが命を取らうか。

玉蘭　さあ、それは、

國忠　但しは其の身を我に任すか。

玉蘭　さあ。

國忠　命を取らうか。

玉蘭　さあ、

國忠　さあ、

兩人　さあ〳〵。

國忠　色よい返事を聞かしてくりやれ。（ト揚國忠思入にて言ふ、ぢつとこなしあつて、）

玉蘭　數ならぬ身をそれ程に、思召して下さりますは冥加に餘る事なれど、安祿山樣に續いての副總督のあなた樣、如何なる者でも隨ひまするに私へ、左樣な事をおつしやりますは、そりや御座興で

ございませう。
國忠　何の座興で申さうぞ、眞實そちに戀慕いたした。
玉蘭　そんなら貴い御身にて、賤しい此身をそれ程までに、
國忠　思ひを掛けしも下世話にいふ、戀に上下の隔てはない。
玉蘭　それが眞實でございますなら、
國忠　おれが心に從ふか。
玉蘭　この身をお任せ申しませう。（ト思入あつて揚國忠に寄添ふ。）
國忠　これで日頃の、思ひも晴れた。
玉蘭　あなたの頼みをお聞き申せば、又わたくしがお頼みも、お聞きなされて下さりませうな。
國忠　そちが頼みとあるならば、如何なる事でも聞いてやらう。
玉蘭　その、お頼みと申しまするは、此の程よりの應接を何辨へぬ下々で、いろ〳〵取沙汰いたしまするが、今日より此の身をお任せ申せば下々ならぬ官士の妻、どうか其の場の樣子をばお襖越しに伺ふ事が、なりませうなら私へ、お許しなされて下さりませ。
國忠　それは何より易いこと、其の場の樣子を見聞したくば、腰元どもに打交り給仕の役に出るがよい。

玉蘭 すりや、お叶へなされて下さりまするか。
國忠 可愛いそちが別しての頼み、聞かいで何といたさうぞ。
玉蘭 それで此の身の。（ト思入。）
國忠 や、
玉蘭 いえ、此の身の願ひがかなひまして、嬉しうござりますわいな。
國忠 その悦びの、禮は閨にて、
玉蘭 誰憚らず、今宵はしつぽり、
國忠 はて、可愛い奴めが。
ト手を取る、此の時ばたばたにて下手より以前の△出來り、
△ 最早總督安祿山さまの、御出仕にござりまする。
國忠 おゝ、安祿山どの出仕とか。
△ 至急に御出仕下さりませ。
國忠 承知いたした。
△ はツ。

玉蘭　左樣なれば私は、

國忠　老女へ頼まん、一緒に來やれ。

ト唐樂になり揚國忠玉蘭女△附添ひ上手門の内へはひる。これにて此の道具廻る。

（蓬萊宮の場。）――本舞臺三間の間、平舞臺上下朱塗りの丸柱、金彫物彩色の欄間、正面兩つま共金地彩色の腰障子、上下同じ障子、舞臺前朱塗り鍍金かなもの附の勾欄を出し、正面に蓬萊宮といふ額を掛け、上下へ朱塗り誂への椅子を四つ並べ、舞臺花道とも唐花模樣敷物と見える摺込の布を敷き、總て唐土北京の都蓬萊宮の體、唐樂にて幕明く。と床の淨瑠璃になり。

〽晴れ渡る日影まばゆく輝きし、金銀珠玉ちりばめたる二重三重高樓は、四百餘州の主人たる玄宗皇帝の物好きに、華美を盡せし蓬萊宮。

呼ビ（花道の揚幕にて、）安祿山出仕、

〽おとなふ聲と諸共に軍務の總督安祿山、今日ぞ日支の應接に綺羅を飾つて立出づれば、出迎ふ諸臣揚國忠、

トこれへ唐樂を冠せ、花道より安祿山唐冠美々しき唐裝束、沓を履き、房附き見事なる扇を持ち出來る、後に下官一人手箱を持ち大勢附添ひ出來り、花道に留る。これと一緒に奥より以前の揚國忠

朱蘭金、崔國輔、其他下官四人出迎ふ。

祿山　今日は日本遣唐使吉備大臣と、應接の定め日ゆゑに安祿山、唯今出仕いたしてござる。

國忠　これは〳〵總督には、御用繁多の其の折柄、和戰を決する應接の、お役は近頃御苦勞千萬。

祿山　して大將軍吳懷寶どのには、最早出仕召されしか。

蘭金　大將軍には尊公の、

國輔　御出仕あるを先刻より、

○　お待ちなされて、

四人　ござりまする。

國忠　何は兎もあれ、總督には、

皆々　設けの席へ。

祿山　然らばそれへ參るでござる。

〽安祿山は徐々と沓音高く入來り、設けの席へ座に着けば、

ト安祿山舞臺へ來り、上手の椅子へ掛ける、下官下手へ控へる。

國忠　常と替つて今日は、一大事件の日支の應接、

蘭金　御苦勞至極に、

皆々　存じまする。(ト唐樂になり)

祿山　此の程よりして玄宗皇帝、久しく外邪に冒され給ひ御不例なるに日本より、渡來なしたる遣唐使吉備大臣が皇帝へ拜謁なして應接の、返答聞かんと迫りしゆゑ、今日こそは是非ともに彼れを言下に言伏せて、支那の國威を輝かす所存で出仕いたしたり。

國忠　當今四百餘州にて一といつて二のなき議論者、文武兼備の安祿山公、及ばずながら某も副使の役に控へ居れば、今日こそは吉備大臣閉口なすに疑ひなし。

祿山　その儀に就いて副總督に、申し談ずる密事あれば、從者は暫く次へ立て。

下官
皆々　畏つてござりまする。

へ鶴の一聲小雀の、下官は次へ立つて行く。

トこれにて下官殘らず下手へはひる、跡揚國忠、朱蘭金、崔國輔殘り、

國忠　して密談と仰せらるゝは。

祿山　密事といふは外ならず、先年當地へ渡來せし遣唐使の書記官たる安部ノ仲麿歸朝の折、留學の爲殘りしが、素より才智勝れし者ゆゑ我が皇帝の寵愛深く、名も朝衡と改めて左補闕に任ぜられ、

猶高官にも進むべきを、高の知れたる日本の書記官ぐらゐに大任を、命ぜらるゝが口惜しく、而も八月十五夜に簠簋內傳を讓ると僞り、凌雲臺へ追ひ上げて食は元より水さへ與へず、乾し殺さんと謀りしを仲麿察して憤激なし、自ら頭を柱に打ち附け狂ひ死にゝ死したるを、誰れ知るまいと思ひしに、彼れが家來羽粟吉滿如何いたして聞き知りしや、歸國に及びて注進せしゆゑ、則ち此の度日本より吉備大臣を差向けて其の罪狀を訊さんと、先達より度々の應接、なれども證據あらざれば、取るに足らざる水掛論。

國忠 及ばぬ事と知りながら弱身を見せず此の程より、二言目には兵端を開かんなどゝ申せども、高が六十餘州の小國、四百餘州の大國へ敵たふなどゝは傍痛し。

蘭金 仰せの如く吉備大臣、衆に勝れし智辯をふるひ、

國輔 是を非に曲げて言張るとも、總督公に及ぶべき。

祿山 大概今日の應接にて彼れを言伏せ日本へ、ぼい返さんとは思へども、萬に一つ理に負けて、勝を取らるゝ其の時は、豫て貴殿に賴みおいたる、

國忠 毒酒を以て自滅させ、

蘭金 病死と言ひ立て、

國輔　取り片附れば、

祿山　この應接も、先づそれまで、

蘭丘　その虚に乘つて、

國輔　四百餘州を、

祿山　掌握なすも近きにあり。

國忠　はて、悦ばしき、

三人　さいさきぢやなあ。

〽額を合せ語らふ折柄、奏者の下官走り出で、ト四人よろしく思ひ入れ、ばた〳〵になり、花道より下官一人走り出來り。

下官　はツ、申し上げます。

國忠　何事なるぞ。

下官　只今遣唐使吉備大臣、御出席にござりまする。

祿山　吉備大臣が出席とな。

國忠　總督公にもお待ち兼ね、

蘭金　これへと申せ、

下官　はッ、畏つてござりまする。

〽はつとばかりに走り行く、（ト下官花道へ走り入る。）

〽程もあらせず遣唐使吉備大臣は禮服に、衣冠正しく日本の武威を他國に輝かす、黄金作りの太刀を佩き、威儀堂々と歩み來て、

トこれへ音樂を冠せ、花道より吉備大臣冠装束公卿のこしらへ、沓を履き笏を持ち出來る、後より加茂友之、嵯峨重成侍烏帽子素袍大小にて附添ひ出來り、花道へ留り。

吉備　日本の晁卿帝都を辭し、片帆萬里蓬壺を繞り、明月歸らず碧海に沈み、白雲秋色蒼梧に滿つと、仲麿朝臣を悼みたる李白が詩意も思はるゝ、卿が幽死の罪を問はんと渡海をなせし吉備大臣、

友之　先達より因循せし、和戰の兩議定めらるゝ、

重成　則ち今日應接に、これまで出席めされたり。

祿山　吉備大臣には御苦勞至極、我が方にても先刻より、軍務の總督安祿山、

國忠　副總督楊國忠、

蘭金　其の外文武の官士一同、

國輔　これまで出仕、
皆々　致してござる。（ト此の時後へ唐裝束の下官大勢居並ぶ。）
吉備　各方にも御苦勞千萬。
祿山　何は然れ、吉備公には、
國忠　いざ先づ、これへ、
皆々　御着座召され。
吉備　然らば、御免。

〽一禮なして吉備公は徐々上座へ打ち通り、出仕の席を見廻して、

ト右の鳴物にて舞臺へ來り、上手の椅子へ掛ける、友之重成は此の後へ床几に掛る、吉備大臣あたりを見廻し、

吉備　大將軍吳懷賓どの、未だこの座に見えられぬが、御出席はござらぬかな。
蘭金　疾より參朝めされたれば、
國輔　只今出席めさるでござる。
祿山　假令この場へ出席なくとも、斯くいふ總督安祿山、玄宗帝の命を傳へ、則ち今日應接の役目に立

てば何事も、皆某が存念次第、

國忠　萬事を委任せられたる安祿山が應接あれば、我が玄宗皇帝に拜謁あるも同じこと。

蘭金　大將軍の出席を、

國輔　お待ちなされず、この場にて、

國忠　總督公と、

皆々　應接めされ。

友之　玄宗帝より祿山どのへ、

重成　委任せられし事ならば、

友之　應接あつて、

友之
重成　然るべし。

〽臣下の勸めに吉備大臣、笏取直し座を進み、

ト吉備大臣笏を取り直し思ひ入れ、羯鼓入り、誂への合方になり、思ひ入あつて、

吉備　先達より申す如く、我が日本の安部ノ仲麿、凌雲臺へ押籠めて何故あつて餓死させしぞ、其の罪狀を問はん爲め、我帝王の命を受け此の北京へ渡りてより、屢々應接いたせども玄宗皇帝不例の

よしにて未だ謁見許されず、軍務の總督安祿山揚國忠を始めとして諸將等しく詞を揃へ、事を左右にかこつけて分明ならざる返答ゆゑ、時日を延して此の國に滯在なすも早や三月、餘りと申せば因循姑息、これまで數度の應接に病死と言へど仲麿が、奸計ゆゑに餓死せし事、其の臣羽栗吉滿が訴へに依り明瞭なり、日本よりの遣唐使を苛酷に殺害せられたる、其の譯逐一承はらん。

祿山　いや、今に始めぬその疑問、仲麿が臣羽栗吉滿日本帝土へ立歸り、如何なる事を訴へしや、我が大唐の玄宗皇帝仁慈の君にましますゆゑ、德行高く四海に溢れ、臣下に立てる我輩までも仁義を守る國なれば、遙々留學せられたる仲麿朝臣を殺すべき、謂れは毛頭なき筈なり。

國忠　よし又犯せる罪あつて食を與へず餓死なすとも、夫の仲麿は我が國の玄宗帝の寵を蒙り、名も朝衡と改めて藉をこの地へ移せしからは、取りも直さず支那人なり。

祿山　假令如何なる死をなす共、我が國人の朝衡を日本に於てかれこれと、疑問せらるゝ謂れはない。

吉備　いや、詞巧みに言はるゝとも、謂れなしとは申されぬ。

祿山國忠　何と。

吉備　抑も安部の仲麿は玄宗皇帝の寵愛厚く、既に左補闕の官を授かり、又秘書校書官に移り、天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かもと、我が詠み得たる名歌を譯し天地を感動せしめ

しより、又程もなく光祿大夫、右散騎常侍兼御史中尉北海郡の開國公と一時に昇進致せしを、奸臣共の妬により、簠簋内傳を讓ると僞り、凌雲臺へ捕りこめて、食を與へず餓死させんと、計りし事を自ら覺り、柱に觸れて憤死なせしは則ち臣下吉滿が訴へにより明白なれど、正しき證據あらざりしに、我が寳龜元年五月孫興進、秦拊期の二人の唐使來朝せし時、右大臣河麿が館に於て饗應なし、詞巧みに仲麿が横死の趣き尋ねしに、彼れ包む事能はずして事實を告げて共々に、賢明の臣が死を傷めり、斯かる證據のある上は最早免れぬ安祿山、まことを明して和を乞ふか、但しは戰議を決するや、心を定めて返答めされ。

〽詞淀まず吉備大臣、水を流せる辯舌に言ひまくられて安祿山、しばし默して控ゆれば、是を非に曲げて揚國忠、

ト安祿山ぐつと詰るを、揚國忠きつとなり、

國忠　如何にも御身が證據といふ、使節に立ちし兩人が事實と言ひしは是れ僞り、帝の命にて高官に立身なせし安部ノ仲麿、それを妬んで日本の人を何ゆゑ害さうぞ、左樣な小さな料簡で四百餘州の大國を預かることが出來ようか。

蘭金　波濤を越えて問罪に、ござる器量があるならば、

國輔　言はずとこれ等は知れたこと、無駄な議論をさつしやるな。
友之　やあ、應接なすは總督の安祿山、揚國忠、
重成　從者の身にて入らぬ口出し、失敬なるぞ。
友之重成　控へをらう。（トきつと言ふ。）
蘭金國輔　なに、控へいとは。（ト立ち掛るを、）
祿山　こりや〱兩人控へぬか、其方共が益なき爭論、
吉備　汝等とても同じこと、口出しいたさず控へて居よ。
友之　でも、餘りなる、
兩人　失敬ゆゑ。
吉備　はて、控へいと申すに。（トきつと言ふ。）
友之重成　はッ、（ト控へる。）
〽差し控ゆれば吉備公は、揚國忠に打ち向ひ。
吉備　某、公使の任を蒙り問罪の役に渡りしからは、斯く曖昧なる返答にておめ〱歸國せるらべきや
此の一條は支那日本兩國の安危存亡にも關係すべき一大事件、玄宗帝へ直に拜謁せざる其の中は

この席一步も退き申さぬ。
〽いふに總督安祿山、尻目に掛けてせゝら笑ひ、

祿山 吉備大臣は日本で、一二を爭ふ智者なりと、聞き及びしがまことしからず、此の程よりの應接にも動ともすれば兵端を開くなどゝ脅しかけ、今も今とて返答次第で我が支那國の存亡にかゝはるなどゝは傍痛し、高の知れたる小國の日本兵が押し來るとも何程の事あらんや、それを恐れて覺えなき無實の罪に服すべきか。既に先刻申せし如く仲麿ことは朝衡と名を改めて我が國の臣下となれば支那人なり、日本よりして兎やかうと言はるゝ事は當てなし、何時まで滯在せらるゝとも我が返答は是れのみなり、殊には皇帝御不例ゆゑ拜謁なすこと叶はねば、此の趣きを歸國あつて日本帝へ奏問めされ。
〽言はせも果てず吉備大臣、

吉備 やあ又しても愚な返答、假令仲麿朝衡と名を改めて皇帝の寵愛深く大任を、蒙りたりとも其の籍は我が日本の人なる事今更論ずるまでもなし、改め言ふに及ばねど日本支那は隣國にて豫て交り深ければ、仲麿籍をこの國へ編入しなば其の折に、なぜ通達をいたさぬぞ、然るに某この地へ來り始めて應接するに至つて、支那へ編籍したりし上は、支那人なりとあざとくも詞巧みに言ひくる

め、他國の公使にその罪狀問はるゝ道理これなしとは、近頃その意を得ざるなり、條約せざる國なれば通達せざるも理ながら、和親を結ぶ隣國にて、仲麿朝臣が其の國の人となりしを告げざるは、條理に合ふとは言難し。

祿山　むう。（トぎつくり思入、）

吉備　上邊ばかりの和親にて内實破約の鉾を磨ぎ、我が國人を慘殺せしか。

祿山國忠　さあ。

吉備　但しは、條約忘却せしか。

祿山國忠　さあ。

吉備　服罪なして和を乞ふか。

祿山國忠　さあ、

吉備　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

吉備　和戰の返答、如何でござる。

祿山國忠　むう。

〽肝を貫く吉備公が鋭き詞、兎かうの返事もあらざれば、

ト吉備大臣きつと言ふ、安祿山楊國忠顏見合せ無念の思入、吉備大臣これまでといふ思入あつて、

吉備　斯く交際を斷たれし上は、某直に歸朝なし、我が海陸の兵士を卒る天津、上海、諸州の港へ軍艦を向け應接なさん。（トむつとして立上り、）此の事玄宗皇帝へ、よろしく奏問いたされよ。

〽武威を顯はし立上れば、弱身を見せじと安祿山、

祿山　おゝそれこそは望む所、我れも軍略回らして四百餘州の大兵を、すぐつて手並を見せ申さん。

國忠　やあ、四百餘州の大兵を擧ぐるに及ばず此の場にて、我が手並をば見せてくれん。

蘭金　總督お手を下すに及ばぬ、

國輔　我々先鋒仕らん。（立ち掛る、これにて友之、重成もきつとなり、）

友之　やあ、最前といひ又候や、

重成　無禮を働く毛唐人、

友重　いで、我々が、

蘭金
國輔　こしやくな事を、

〽またも士卒が立かゝれば、流石は總督押し留め、

ト双方立ちかゝるを、吉備大臣と安祿山双方を留め、

祿山　揚國忠を始めとして方々逸まること勿れ、波濤を越して日本より唯一人にて使者に立し吉備大臣を討取るは、袋の鼠も同然なれど、今討ち取るは匹夫の勇、此の場は此の儘歸國を許し、(ト後にて殺さうといふ思入にて目配せなし)重ねて討つが武門の道。

吉備　我も此の場で勝負を遂げ、勇に誇つて死を輕んじ、大事を過ち國辱を世界中に輝す不開化國の公使ならず、歸朝の後に再會せん。

祿山　おゝ、歸國の上にて軍議を決し、又もや來年再會なさん。

吉備　愚や、軍は臨機應變、兵は迅速なるを貴む、月日を約して來らんや。方々さらば。

〽支那の不明に吉備公も和議とゝのはず立出る、折から後に聲あつて、

ト吉備大臣立上り、花道へ行きかける、此の時奥にて、

懷賓　やあ〳〵、遣唐使吉備大臣、暫くお待ち下されい。

吉備　日支の和睦整はず、歸國いたすを留められしは、

懷賓　大將軍吳懷賓、それへ參つて應接いたさん。

〽傍への純帳捲きあげて大將軍吳懷賓、悠々然と立出づれば、

ト これへ唐樂を打込み、正面の緞帳を捲揚げ、奧より吳懷寶、金の唐冠錦の唐裝束、誂への軍配團扇を持ち出來る、皆々これを見て、

祿山 思ひがけなき大將軍には、

國忠 何ゆゑあつて吉備大臣が、

吉備 歸國をお留めなされしぞ。

懷寶 お留め申すは餘の儀にあらず、先刻よりの此の場の應接逐一承知いたせし上、お留め申すは仔細あつて、まづ吉備公には元の座へ、

〽お直りあれと勸むるにぞ、詞に從ひ座に直れば、

ト 吉備大臣思入あつて元の椅子へかける、吳懷寶も眞中の椅子へ掛ける。

祿山 この程病死いたしたる安部ノ仲麿が事よりして、和戰の二つ言募り、

國忠 歸國を急ぐ吉備大臣、お留めあるは益なき事、

祿山 大將軍には捨ておきめされ。

懷寶 いや、捨ておき難き此の場の事件。

祿山 國忠 なに、捨ておかれぬとは、

懷寶　玄宗皇帝の命令なるぞ。
祿山　して、主命と、
兩人　言はるゝは。（ト唐樂になり、）
懷寶　おゝ、其の仔細餘の儀にあらず、先達てより御主君には御不例なるが御容態、日に增し重らせ給ふゆゑ、既に今朝某を御枕邊近う召され、日本公使吉備大臣朕に謁見なさんとて屢々應接せらるれど、重き病にかなひ難し、然るに朕が不例を聞き知り、四海を回る夷狄の蠻賊この大唐を窺ふ由、日本支那は隣國にて交り厚き仲なるを、此の應接より交際を破つて干戈を動かしなば、是れこの國の一大事、事穩便に計ひて双方睦み合ふ時は外には他國の防ぎとなり、內に國產を輸出して互ひに助くる富國強兵、必ず疎かにすべからずと、厚き勅諭に感涙の袖を浸して玉座を退き、歸朝せらるゝ大臣をお止め申せし吳懷寶、我が過りではござるまい。
へ物和らかく勅命を言諭されて安祿山、今更返す詞もなく、
ト吳懷寶よろしく思入にて言ふ、安祿山是非なきこなしにて、
祿山　國の勇氣を落さじと、飽くまで逆らひ應接せしも、
國忠　勅命なれば是非もなし、

祿山　して穩便の計ひとは、

懷寶　交り厚き日本支那、問はるゝ罪の有り無しも水に流して兩國の安堵を計る良策を、吉備公御賢慮下されい。

吉備　帝王不例に在する上、勅諭を以て懇篤なる吳懷寶公の信義の計らひ、某いかで承諾せざらん、安部ノ仲麿餓死なせしも元の起りは簠簋內傳、右の書籍に百萬圓貢金をお渡しあらば、仲麿横死を達せざる其の罪狀を消却なし、此の地の兵を引拂ひ兩國長く和親して、他國の侮りなからんやう、宜しく奏問いたすでござる。

懷寶　はゝ、寬仁大度の其の計ひ、如何にも公が賢慮の如く仲麿朝臣が苦心せし、簠簋內傳に百萬圓貢金をお渡し申し、目出度く歸朝を送り申さん。

〽言はせも果てず、

ト安祿山、揚國忠むつとなし、

祿山　やあ吳懷寶どの、お待ちなされい、我が帝王の御秘藏たる簠簋內傳を渡すのみか、百萬圓の貢金を取らるゝなどゝは、たはけたこと。

國忠　その二品を渡すに於ては、日本國へ從ふも同然、それより二品渡さずに戰爭なすに決定めされ。

懷寶　交際破れて兵端を開くに於ては數年來、泰平謠ひし億兆の民が塗炭の困しみなす、その艱難には替へられず、篚篋內傳に貢金を添へ、和議を結ぶも大切なる人命思ふ帝の御慈愛。
祿山　でも二品を渡しなば、
國忠　我が國辱になる事ゆゑ。
懷寶　假令國辱になればとて、仲麿橫死を日本帝土へ達せざるは、これその職の過りなり。
祿山
國忠　むう。
懷寶　それゆゑ事なく計へと、我が帝王の命令なるを、臣下の身にてもどきたまふか。
國忠　さあ、それは。
懷寶　民が塗炭の苦しみなすを、不便な事とは思はれぬか。
國忠　さあ。
懷寶　勅命背くか。
國忠　さあ、
懷寶　さあ、
兩人　さあ〳〵。

懷寶　如何でござる、總督どの。

祿山　然らば貴殿の、

勝手にめされ。

〽無念をこらへ控ゆれば、吉備大臣詞を改め、

吉備　斯く速かに和議成れば、猶この上とも兩國の信義を固むる條約の、書面をこれにて取交さん。

懷寶　その條約は望む所、誰そある料紙持て。（ト奥にて、）

下官　はあゝ。

〽はッと答へて別殿より料紙硯を持運べば、いざと互ひに紙取上げ硯の海も穩かに筆の直なる和睦の計ひ、書く條約は磨る墨の濃き交りに紙よりも厚き信義の支那日本、双方條約取交し、

ト此の內奧より小姓、唐裝束にて料紙硯箱を持ち出で兩方へ置く、吉備大臣吳懷寶よろしく條約を書く、吉備大臣印を押す吳懷寶同じく印を押し、安祿山に押せと言ふ、安祿山無念の思入にて、是非なく印を押す、これにて吉備大臣吳懷寶條約書を取り交し、思入あつて、

吉備　和議整ひし上からは、簠簋內傳、貢の黃金、揃ひ次第に歸朝いたさん。

懷寶　後より公の旅館まで、某持參いたすでござる。

〽和議整へば安祿山、胸に一物進み出で、

ト吉備大臣吳懷寶條約書を懷中する、安祿山思入あつて、

祿山　扨日本は文明國と豫て噂に聞き及びしが、測り知られぬ貴殿の才智、不明の我々及ばざるゆゑ一覽願ふ品がござる。やあ〳〵者ども、野馬臺の詩をこれへ持て。(ト奧にて、)

下官　はあ〻。

〽詞の下よりかき出す堆朱の臺を吉備公の、面前近く差し出せば、

ト唐樂にて奧より下官二人堆朱の臺へ、野馬臺の一軸を開き上へ錦の帛紗を掛け、是れを持ち出來り吉備大臣の前へ据ゑる。

吉備　して此の品は。

祿山　それぞ野馬臺の詩と名附し、則ち日本の未來記なるが、不明の我々讀み得ざれば、これにて讀み上げ、お聞せ下され

吉備　すりや、野馬臺の此の詩文を、

國忠　我々聽聞、

皆々　致したい。

吉備　如何なる詩文か兎に角に、檢分なしたる其の上にて。

〽覆ひし帛紗取退くれば、詞に違はぬ詩文の體、

ト右の二人帛紗を取ろ、吉備大臣これを見て、

これが日本の未來記とな。

〽ためつすがめつ見渡す文字。

ト吉備大臣ぢつと是れを見る、敵役皆々見顏合せ讀めまいといふ思入あつて、

祿山　なか〳〵不學の我々には、讀むこと難きこの野馬臺、

國忠　博學多才の吉備大臣、これ等の讀めぬことはあるまい。

蘭金　然し縱横分らざれば、

國輔　めつたにこれは讀めますまい。

〽尻目にかけて嘲笑へば、

吉備　我が日本の未來記と名附し詩文の此の野馬臺、文字に替りはあらざれど、直に讀みの下らぬは、

〽是れを讀まねば國辱なりと全身に、汗を浸して心の祈念、觀音薩埵の智力にて、忽ち傳ふ

さゝがにの蜘が教ふる紙上のたゞ中、文字に連れて金色の引く絲筋に自から解讀するぞ有難き、

ト吉備大臣ぢつと思入、此の内薄ドロ〳〵になり、仕掛けにて誂への蜘下り、野馬臺の上をつたふ、これにて吉備大臣讀み得る思入。

祿山　吉備公、詩文が讀めましたか。

吉備　如何にも、只今讀み得たり。

國忠　讀めたら、これにて、

皆々　承はらん。

〽吉備大臣は聲高く、

ト吉備大臣笏を構へきつと思入、誂への合方にてよろしく思入あつて、

吉備　「東海姫氏國。百世代二天工一。有司爲二輔翼一。衡主建二元功一。初興二治法事一。終成レ祭二祖宗一。本枝周二天壤一。君臣定二始終一。」（ト讀む。皆々びつくりなし、）

祿山　や、此の野馬臺が、

皆々　讀めたるか。（トこれより吉備大臣早く讀む、）

吉備 「谷塡田孫走。魚膾生羽翔。葛後干戈動。中微子孫昌。白龍游失水。窘急寄胡城。黃鷄代人食。黑鼠喰牛腸。丹水流盡後。天命在三公。百王流畢竭。猿犬稱英雄。星流飛野外。鐘鼓喧國中。靑丘與赤土。茫茫遂爲空。」

〽句々一言の淀みなく、懸河の如く讀み上げたり。

ト吉備大臣讀み終り、ホツと思入、皆々感心せし思入。

懷寶 博學多才の聞えある鴻儒も未だ讀み得ざりし、難詩を易々讀み得しは、凡人ならぬ吉備大臣、誠に感心いたしてござる。

祿山 とてもの事に詩の心を、我々會得いたすやう、これにて諭し下されい。

國忠 後學の爲、

皆々 承はりたい。

吉備 未來記ゆゑに末々は會得することならざれど、先づ初句よりして四五句までは、過去の事ゆゑ大略を說き聞かせ申すべし。

〽いふに人々座を進み、

祿山 然らば詩文の初句に、東海姫氏國と誌せしは、

吉備　我が日本は唐土より東方ゆゑに則ち東海、又日本國初の天子は天照皇太神と號し、しかも女帝にましますゆゑ、姫氏國と申せしなり。

國忠　して又、第二句目なる百世天工に代るとは。

吉備　百世といふは長久の御代を視せし大數にて、天工に代るとは天神七代地神五代、この十二代を神代と稱し、十三代神武天皇より人皇の御代になりしゆゑ、天工に代ると誌せり。

祿山　して〳〵、第三句目なる、有司輔翼と爲るとは。

吉備　神武天皇の臣下に天の種子の命、天の富の命、左右輔翼の臣となり、惡を懲らし善を擧げ、政を補ひたり。

國忠　して又、第四句目なる衡主元功を建つるとは。

吉備　厩戸の皇子聖德太子は、衡岳惠思の後身なりと云へるを以て衡主と言ひしが、又元功を建るとは則ち右の聖德太子、推古天皇の輔佐となり、冠位十二階を定め、憲法十七ヶ條を立て、天下治國の基を開く、故に元功を建ると言ふ、まつた第五第六は、初めは治法の事を興し、終りは祖宗を祀ることを成すと、兩句に云へるも太子の功し、これ等の句までは當今ゆゑ豫じめ解すれども、第七句より其末は謂ゆる未來の事なれば、我等如きの凡力にては、前知する事能はざるなり。

〽詩句の心を明かに說諭されて安祿山、揚國忠も詞なく赤面してぞ控へ居る。
ト吉備大臣疊みかけて言ふ、安祿山揚國忠おどろきし思入。呉懷寶こなしあつて、

懷寶　ほゝお、これまで解せぬ詩の心、會得なせしも聰明の吉備大臣に見えたればこそ、我が身に取りても大慶至極。

祿山　益なき詩文の講釋は、近頃御苦勞千萬なり。

國忠　せめてはそれを謝する爲め、やあ〳〵腰元ども、用意の品を早く持て。（ト下手にて）

腰元三人　畏りました。

〽かねて用意に次の間より侍女が携ふ酒宴の器、御前狹しと列ぶれば、
トこれへ唐樂を冠せ、奥より玉蘭女を先きに翠竹、菊花唐裝束侍女にて、唐めきし臺へギヤマンの瓶子、コツプ、しつぽくの器を持ち出來り眞中へ直し、

玉蘭　先刻仰せ附けられました、

翠竹　御酒宴の品々、

菊花　持參いたして、

三人　ございまする。（ト控へる。吉備大臣是れを見て、）

吉備　今日和戰の應接に兵士は今やと待ち居れば、旅館へ歸りて和議を告げ安堵させ度く存ずれば、これにてお暇仕らん。
祿山　御尤もにはござれども、和議整ひしは兩國の、此の上もなき幸ひゆゑ、
國忠　今暫くこれにあつて、目出度く一獻お過し下され。
吉備　忝なくはござれども、前申す兵士等が、旅館に歸りを相待てば、
國忠　ではござらうが吉備公の、才智に我々あやかりたければ、
蘭金　平に一獻お過しなされて、
國忠　お流し下しおかれませう。
懐賓　祿山はじめ諸臣等が、斯程にお止め申しますれば、
蘭金　しばしの御猶豫あそばして、
國輔　平にお過し、
三人　遊ばしませう。
吉備　左程までに言はるゝを、取上げざるも失禮なれば、
祿山　是非とも一獻、

國輔　お過しなされい。〽勸めに餘儀なく盃を、取り上げたまへば侍女共が、（ト吉備大臣盃を取上げる、）

玉蘭　どれ、お酌いたしませう。〽瓶子を取つて玉蘭女、夫に因の倭人、どうぞお命助けたやと心は千々にとつおいつ、手先き顫へてつぐ酒に、殺氣立ちしを不審しと、

ト玉蘭女瓶子を取り、どうしようかといふ思入、揚國忠早く〳〵とせきたてるゆゑ是非なく顫へながら酒をつぐ、薄くドロ〳〵のやうな風の音、吉備大臣これへきつと目を附け思入、

吉備　今この盃を手に取れば、おのづと殺氣の立ちたるは、

玉蘭　えゝ、

吉備　はて、心得ぬ。〽不審立つれば呉懷寶。

懷寶　貴人に物を參らするには、鬼役毒味をなすべき筈、合點行かざる瓶子の酒、揚國忠には毒味めされ。

國忠　え、如何にも毒味いたしたけれど、身共は酒が嫌ひでござる。

懐寶　常に大酒の聞えある、御身が嫌ひと言ふは不審し。
國忠　さ、それは、
懐寶　何ゆゑ毒味いたされぬぞ。
國忠　さあ、身共が毒味いたさぬは、實は斷酒いたしてござる。
懐寶　見れば舘に見慣れぬ女、給仕いたすは不審しゝ、其の方代つて毒味いたせ。
玉蘭　はツ、畏りましてござりまする。
〽毒味をなして吉備公を、救はんものと瓶子を取り、呑まんとするを押し止め、
ト玉蘭女瓶子を取るを、揚國忠あわてゝ留めて、
國忠　あゝこれ〳〵、それを呑んだら、ついころり、
懐寶　や、
國忠　いや、それは呑まさぬ〳〵。
祿山　はて、留め立てせずと、彼女に毒味を。
國忠　えゝ、めつさうな事いはつしやれ、外の者なら知らぬこと、此の玉蘭女にどうしてこれを。
玉蘭　いえ〳〵、疑ひかゝりし上からは、お毒味なして身の潔白。

〽止むる手先きを振拂ひ、ぐつと一口呑む酒が喉を通れば忽ちに、五體かなはず吐く血汐、
ト揚國忠の留めるを振拂ひ、瓶子の口よりぐつと呑む、安祿山揚國忠南無三といふ思入、玉蘭女は苦しみ白布へ血を吐く、翠竹、菊花介抱なし、

翠竹　やゝ、こりや玉蘭女には血汐を吐き、

菊花　正しく五體のかなはぬ樣子、

友之　扨こそ瓶子のこの酒に、

重成　鴆毒ありと覺えたり。

〽事の露見に安祿山、わざと女を引寄せて、（ト安祿山　玉蘭女の襟上を取り、ぐつと引附け、）

祿山　何故あつて此の瓶子へ、おのれは毒を仕込みしぞ。

玉蘭　いな〳〵何でわたくしが、お恨みもない吉備さまへ、斯樣なことをいたしませうぞ。

懷賓　然らば誰ぞに頼まれしか。

玉蘭　さあ、其の頼み手は、

〽言はんとなすを口を割り、又も毒酒をつぎ込めば虚空を掴んで七轉八倒、またも吐血のから紅、秋の紅葉の散るごとく果敢なく息は絶えにけり。

トこの内玉蘭女言はうとするゆゑ、安祿山南無三と瓶子の酒を口へつぎ込み突放す、玉蘭女よろしく苦しみばつたり倒るゝ、揚國忠惜しい事をしたといふ思入。

祿山　えゝ、見苦しい、取片附けい。

翠竹
菊花　はあゝ。（ト兩人玉蘭女の死骸を下手へ擔ひ入る。吉備大臣思入あつて）

吉備　何れの誰が娘なるか、我に代りし女が最期、思へば不便な事ぢやなあ。

友之　この毒藥を仕込みしものは、

重成　大概それと知れたれば、

兩人　いつそのことに。（ト立ち掛るを吉備大臣留め、）

吉備　和議調ひし上からはたゞ何事も穩便に、いや、今も申す兵士等が旅館に歸りを相待てば、最早退出仕つる。

懐寶　よしなき事で吉備公へ、支那の不明を御覽に入れ、耻入りまする儀でござる。

吉備　大將軍の御心中、某推察いたし居る。

懐寶　何れ後刻、簠簋內傳、貢の黃金持參なし、猶ほ後々をお約し申さん。

吉備　御入來、相待ち申すでござる。

〽信義を盡し立上れば。(ト吉備大臣立上る、安祿山揚國忠無念の思入にて、)
祿山　和議にならずば我が職掌、兵士が豫て操練なす手並を見せて海外へ、
國忠　支那の勇氣を示さぬが、まことにもつて殘念至極、
吉備　さはさりながら、此の儘に、波風立たで天の原、
懷寶　ふりさけ見れば春日なる、
吉備　三笠の山に出し月かも、
懷寶　替らで睦む、
祿山　支那、
國忠　日本、
吉備　五洲の外も穩かに、
懷寶　治まる御代の、
國忠　思へば〳〵、(ト立ち掛るを、)
祿山　これ、(ト押へて、)
三人　榮えぢやなあ。

〽和議を結びて百萬の黄金を得たる功しの譽は世々に、

ト吉備大臣吳懷寶辭儀をなす、揚國忠又立ち掛るを安祿山留める、吉備大臣愚な奴と笑ふ。この見得引つぱりよろしく、

〽輝やけり。

幕

ト波の音にてつなぎ直に引返す。

（吉備公旅館の場）——本舞臺三間の間高足の二重、朱塗り彫物の欄間、正面金張附彩色畫、屋體眞中に大きな卓子、この上に見事な花瓶に立花を入れ酒器を並べ、左右に椅子二つ直し置く、屋體三方とも錦と見える純帳を下し、屋體の上下後へ下げて石を積みし唐めいたる塀、よき所に松の立木總て吉備大臣旅館の體。平舞臺上手に前幕の友之、重成床几に掛け手帳を持ち金の員數をしるし居る、下手に○△□◎の下官四人、金箱を一ツづゝ持ち控へ居る、此の見得波の音にて幕明く。

○　これにて都合百萬圓。

△　帳面にお記しなされた、

□　員數をお調べ下さりまして、

◎　お受取り下さりませ。(トこれにて友之手帳を見て、)

友之　いかにも都合百萬圓、金の員數に相違ない。

重成　して大將軍吳懷寶公には、未だお入りはござらぬか。

○　お約定の簠簋內傳、御持參なされて此の所へ、

△　後刻おいでにござります。

□　憚りながら此の趣き、

◎　大臣さまへお傳へ下され。

友之　主人へ申し上げるでござる。

○　左樣なれば私共は、

△　これを波戸場へ積込みまして、

□　お役人へ員數を屆け、

◎　立ち歸りますでござりまする。

重成　數度の運送御苦勞にござる。

○どれ、一息に、
四人　積込みませう。(ト波の音にて四人金箱を擔ぎ下手へはひる。)
友之　いやなに、案じるより產むが易いと、いふのは今日の和睦の應接、先達より幾度となく談判なせど支那の因循、今日の明日のと期を延し、三月越しの延引もいよ／＼今日が手切れの應接。
重成　所詮和睦はむづかしく戰と覺悟いたせしも、主人が才智に言ひ負かされ、罪に服して簠簋內傳百萬圓の貢金、出させて和睦を結んだは此の上もない大手柄、
友之　流石貴き神國の諸神が御守護なされしか、縱橫分らぬ野馬臺の詩文をすら／＼お讀みなされ、危ふい毒酒の大難も、測ずお命助かりしは、まことに以て御高運、
重成　それに引替へ不運なのは毒酒を呑んで死んだ女、如何なる者の娘なるか覺悟いたして呑んだのは、何か仔細のある事ならん、どうか樣子を聞きたいものだ。
ト此の時下手へ、前幕の腰元翠竹菊花出來り、
翠竹　その仔細は、わたくし共が、
菊花　委しくお話し、
兩人　いたしませう。(ト前へ出る。)

友之　おゝ其の方達は最前の、酒宴に出でし腰元なるか。
翠竹　呉懐寳さまの仰せを受け、吉備さまの御歸朝を、
菊花　お祝し申すお持成に、これへ參りまして、
兩人　ござりまする。
重成　して最前毒味なし、非業に死せし、あの女は、
翠竹　はい、あの女子は賤しき者にて、名は玉蘭女と申しまするが、夫と申すは先達此の地でお果てなされました、
菊花　仲麿さまの御家來にて、吉滿さまとおつしやるお方。
友之　扨は羽栗吉滿どのが、この地で迎へし妻女なりしか。
重成　して〳〵、何ゆゑ死したるぞ。
翠竹　あの玉蘭女に總督の揚國忠が戀ひ焦れ、妾になれと口說しを是れ幸ひと從ひしは、勿體なくも吉備さまを、毒害なすと聞いたゆゑ、
菊花　妨げなしてお命をどうぞお助け申したいと、揚國忠の差圖を受けお酌の役に出でましたは、毒酒を吞んで死ぬ心。

翠竹　委しい譯を打ち明けて私共へ申したゆゑ、お持成の御旅館へ、

菊花　參りますこそ幸ひに、お知らせ申しますわいな。

友之　何か仔細のある事と我々共も思ひしが、扨は夫吉滿どのゝ因みによつて命を捨て、主人をお助け申せしか。

重成　男子も及ばぬ心ばえ、天晴烈女の鑑ゆゑ吉滿どのへは我々が、具にこの事告げ申さん。

兩人　どうぞお賴み申しまする。（ト花道揚幕の内にてラツパを吹き立てる。）

友之　樂器の音は此處へ、大將軍のお入りと見ゆる。

翠竹　お入りとあらば、わたくし共が、

菊花　お次へ參つて何かの支度を。

重成　左樣ござらば腰元ども、

翠竹　後程お目に、

兩人　かゝりませう。（ト唐樂にて下手へはひる、唐樂打ち上げ、純帳の内にて吉備大臣の聲にて）

吉備　我に代つて命を捨てしは、羽栗が妻でありしよな。

友之　や、あのお聲は。

重成　御前さま。

吉備　誰そあるか、純帳上げい。

奥にて　はあゝ。（ト床の淨瑠璃になり、）

〽武勇の譽れ高樓の錦の純帳捲きあぐれば、内には吉備公禮服に衣冠正しく座したまへば、

ト訛への唐樂になり、三方の純帳を捲き上げる。内に吉備大臣黑の裝束冠笏を持ち立つてゐる。

友之重成はツと辭儀をなし、

友之　すりや只今の、

重成　この場の、

兩人　樣子を。

吉備　おゝ測らず是れへ參り合せ、一伍一什殘らず聞いた。

友之　最前毒味いたせしは、仲麿公の御家臣たる、

重成　羽栗吉滿が妻なるよし。

吉備　安祿山楊國忠、彼れ等の如き佞人あれば、夫の因みに一命捨つる玉蘭女の如き烈女あり、善惡邪正は人の性來、支那も日本も替りはない。

友之　仰せの如くに、
兩人　ござりまする。
吉備　して支那よりの貢金、百萬圓は揃ひしか。
重成　員數を改め海岸へ、番士を附けて、
兩人　積み置きました。
〽いふに吉備公滿面に笑みを含みて打ち頷き。（ト吉備大臣思入、誂への合方になる）
吉備　如何なる今日は吉辰なるか、交際破れて戰爭と覺悟極めし應接も、呉懷寶が計ひにて事なく和議を結びしは、此の上もなき我が高運、そも日本を出帆なす其折和議が調はず兵端開かば我國へ、
〽再び生きて歸らじと心に誓ひし大願も、
實に神國の加護を受け、下萬民の塗炭の苦しみ免れしは嬉しやと、悦ぶ間もなく安祿山が我に耻辱を與へんと、讀むこと難き野馬臺の首尾分らざる詩文の表、南無三彼に計られしか、此の身の耻辱は日本の國辱ゆゑに信心なす、和州初瀬の觀世音へ心の内にて願ひしところ、
〽不思議や紙上に蜘蛛下り、歩むに連れて金色の、絲を引くゆゑ首尾わかりし、
詩文は五言二十四句、字數は一百二十字なるを易々讀みしは薩埵の利益、四百餘州へ我が功し殘

すは則ち、皇國の譽れ、

〽實にその時は思はずも嬉し涙にくれたりと、又も落涙したまひて御袍の袖を絞りける。

ト此の內吉備大臣思入あつて、

友之　仰せの如く我々も、所詮解讀あるまじと、思ひの外に野馬臺の、難詩をお讀みなされしは、

重成　不思議と思ひ居りましたが、薩陲の利益でござりましたか。

〽あら有難や尊とやと、東の方を伏し拜む、折しも馳せ來る番卒が、

ト兩人向うを拜む、ばた〳〵にて花道より番卒走り出來り、

番卒　はッ、申し上げます。

友之
重成　何事なるぞ。

番卒　大將軍吳懷寶どの、只今お入りにござりまする。

吉備　そのおいで待ち兼ねたり、

友之　直にこれへお通し申せ。

番卒　はッ。

〽はつとばかりに引返す。（ト番卒花道へ走りはひる。）

〽折しも樂器の音に連れ、大將軍吳懷寶數多の從者引連れて悠々然と入來り、

ト唐樂になり花道より前幕の吳懷寶、唐冠錦の裝束沓にて出來り、後より下官絹張りの傘をさしかけ、一人堆朱の箱を携へ、その外下官大勢附添ひ出來り、花道にて、

懷寶　先刻和議を結びし折、約定なせし簠簋內傳、只今持參いたしてござる。

吉備　我が旅館まで御入來下され、大慶至極に存じまする。

友之　何は兎もあれ、大將軍には、

重成　設けの席へ、

兩人　お通り下さりませ。

懷寶　然らば御免。

〽然らば御免と會釋なし、設けの席へ打ち通り一禮なして座を構へ、

ト懷寶舞臺へ來り、吉備大臣へ會釋あつて二重上手椅子へ掛ける。

先刻これへ積み送りし、百萬圓は御受納ありしか。

吉備　これなる兩人員數を改め、慥に受納いたしてござる。

懷寶　猶約定の簠簋內傳、お受取り下されい。

〽士卒が携ふ箱取りて、渡せばはつと押し頂き、蓋を取りのけ中改め、

ト呉懷寶下官が携へし堆朱の箱を取つて出す、吉備大臣押し頂き紐を解き中を改め見て、

吉備　世にも稀なる簠簋内傳お渡し下され大慶至極、嘸や仲麿朝臣にも彼世に於て悦ばれん。（ト傍の臺の上へ載せ懷寶より證書を出し、）二品受納いたせし證書、（ト出す。呉懷寶取つて中を改め、）

懷寶　御念の入りし此の證書、慥に落手いたしてござる。（ト懷中する。）

吉備　御落手ありし上からは、波戸場に積みし百萬圓、直ちに船に運送させよ。

友之　畏つてござりまする。

〽濱邊を差して走り行く。（ト友之下の方へはひる。）

懷寶　和睦整ふ上からは、なほ條約を固めの酒宴、申し附けたる饗應の用意よくば持參いたせ。

ト奥にて、

翠竹
菊花　畏りました。

ト誂へ唐樂になり、奥より以前の翠竹、菊花奇麗なるしつぽく、料理を運び出で、食机臺の上へ並べる。

翠竹　仰せ附けられました御献立、

菊花　持參いたしてござりまする。

懷寶　その方共は酌いたせ。

兩人　はツ。

懷寶　扨吉備公には此の程より、滯在中の御心勞、さこそと某お察し申す。

吉備　仰せの如く今日初めて、多日の苦心を忘れてござる。

懷寶　某一々毒味致せば、何はなくともお過し下され。

翠竹　いざ召上つて、

菊花　下さりませう。

吉備　忝なう存じまする。

ト誂への唐めいた唄になり、吳懷寶コツプを取り上げ兩女酌をなし、吳懷寶呑んで吉備大臣へさす、菊花酌をなし吉備大臣呑む。

懷寶　誰そあるか、肴いたせ。（ト下手にて、）

梅子　はあゝ。

ト梅子唐子髷唐裝束にて唐團扇を持ち出來り、右の唐めいた唄にて所作事あつて、翠竹菊花ちよつとからんで所作納まる。

下官
皆々　やんや〳〵。(ト梅子辭儀をして奥へはひる。此の内酒盛りよろしくあつて、)

吉備　かゝる手厚き饗應に、大いに酩酊いたしてござる。

懐寶　今一献お過し下され。

吉備　忝なうはござれども、最早乘船の刻限なれば、

懐寶　然らば君のお心任せ。

吉備　これより直に乘組めば、玄宗帝へ然るべく御披露よろしく頼み存ずる。

懐寶　帝王はじめ欣差大臣、官士一同の名代として、海岸まで見送り申さん。

吉備　近頃御厚志忝なし。

下官　左樣ござらば、

皆々　吉備大臣、

吉備　大將軍、

懐寶　いざ御同道。

皆々　仕らん。(ト皆々立上る。)

〽かゝる所へ宙を駈け、馳せ歸つたる伴の早雄。(ト以前の友之走り出來り、)

友之　その御乘船暫く〳〵。
重成　あわたゞしく、何事なるぞ。
友之　副總督の揚國忠手勢の兵を引率なし、我が日本の貢金百萬圓を奪ひ返さんと、數艘の船を沖へ出し日本船を取り圍みしと、海軍局より火急の注進、御用意あつて然るべし。
皆々　やゝゝゝゝ。
重成　扨は佞人揚國忠が、日本船を取り圍むとか。
○　事なく和約整ひしも、
△　副總督が暴動より、
□　再び交際破れなば、
○　これ兩國の一大事、
◎　毛を吹き疵を求めんより、
△　いで我々が、
皆々　鎭靜いたさん。
ト勢ひこんで立ちかゝるを、

吉備　やあ〳〵方々逸まられな、玄宗皇帝御不例ながら國事に心を痛めらるゝ其意に悖りて某も、干戈を動かす所存ならねば、これより乗船いたすまで支那海陸の大兵にて、四方を警護いたされよ。

懐寶　かゝる事件もあらんかと豫て五千の兵隊を海岸諸港へ出しおけば、歸路の御配慮あるべからず、さはさりながら揚國忠、勅命背くのみなるか軍令破りし上からは、公使に無禮あらざる内生捕つて、彼を炮罪に行ひくれん。

吉備　某とても其の氣色推察せしゆゑ時として、不慮の謀擧もあらんかと、舊友安部ノ仲麿が臣羽栗吉滿、此の身の防ぎに召連れ來り、蓬莱宮へ應接の出入毎に心を配らせ、車の馭者となしおきしがおッつけこれへ注進あらん。

〽詞も未だ終らぬうち、宙をかけつて羽栗吉滿、

とばた〳〵になり、花道より羽栗吉滿、好みのこしらへにて駈けて出來り、花道にて、

吉滿　御注進々々。

吉備　やあ待兼ねたり、いよ〳〵揚國忠が叛逆にて、我が出船を妨ぐるか。戰の樣子は如何に〳〵。

吉滿　はッ。

〽さゝへる兵士を投げのけ蹴のけ、御前間近く馳せ來り、

ト羽栗吉満立廻りながら舞臺へ來り、兵士兩人を投げのけ、きつとなり、

されば、海上にては和議とゝのひて、歸朝の知せに國旗を翻し、

〽千尋の底へおろしたる碇の綱を引揚げて、船の用意をなす折から、

揚國忠が命を受け、三千餘騎の海軍勢、お船を取巻き貢金を、

〽奪ひ返さんと犇いたり、

されども船にて豫ての手配り、少しも騷ぐ氣色なく、ひそみかへつて敵を近附け、

〽某ひそかに甲板へ突立ち上り短筒にて、諸軍を指揮する揚國忠、

しやごさんなれ能き敵と、覗ひすまして撃つ玉は、

〽急所の胸板打ち貫き、ぱつと立つたる血煙と共に死骸はまつさかさま。

海へざんぶとおちこちに、取巻く船も大將の、討たれしさまを見るよりも、

〽臆病風にさそはれて、

沖の鷗か、

〽むら千鳥、

むら〳〵ぱつと敵勢は、

〽艪櫂を立てゝエッシッシ、
數艘の船もちり〴〵に、
〽あと白浪と逃げ失せたり、
御安堵あつて御乘船。
〽汗押し拭ふ吉滿が、戰話しぞ勇ましき。
ト此の內吉滿兵士を相手に注進の立廻りよろしくある。

吉備 ほゝおあつぱれ〳〵、その船將の揚國忠こそ汝の主の仲麿を虐殺したる大惡人、今その方が討ちたるは、取りも直さず敵討ち。

懷寶 殊には國の軍令を犯せしゆゑに炮罪と、所刑極まる揚國忠、

吉滿 思ひがけなく亡君の、敵を討ちしも天の助け、

吉備 惡人滅び、善人の、

懷寶 榮える國は、

吉滿 萬々歲。

友之 いざ、我が君には、

皆々　御乘船。

吉備　今日ぞ碇の綱解きて、

懷寶　歸朝を賀する、

吉滿　諸船の祝砲。（ト此の時本鐵砲にて、どんと祝砲の一發を木の頭。）

吉備　目出度く凱陣。

トドン〳〵と祝砲を打ち、これへ喇叭の音をきざみに替へ、皆々引張りの見得よろしく

ひやうし　幕

吉備大臣（終り）

《附録》 主なる興行年表

酒井の太鼓

年月	座名	名題	酒井	彦右衛門	家康	善三郎	馬場	山縣	伏屋	東蔵	四郎左衛門
明治六年三月	村山座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	河原崎権之助	中村時蔵	坂東家橘	河原崎権之助	関三十郎	中村壽蔵	市川門之助	尾上菊五郎	河原崎権之助
明治十四年五月	新富座	世響太鼓功（よにひゞくたいこのいさをし）	市川團十郎	尾上菊五郎	坂東家橘		中村宗十郎	尾上梅五郎	坂東秀調		
明治二十五年五月	歌舞伎座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	市川團十郎	市川八百蔵	中村福助		市川権十郎	片岡市蔵	坂東秀調		
明治三十二年九月	同座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	坂東又三郎	市川新十郎	関花助		尾上菊四郎	市川正延次	岩井松之助		
明治三十四年五月	同座	世響太鼓功（よにひゞくたいこのいさをし）	市川團十郎	尾上菊五郎	中村芝翫	中村芝翫	市川八百蔵	尾上松助		市川八百蔵	片岡市蔵
明治三十九年九月	明治座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	市川猿之助	市川小團次	市川左團次	市川左團次					
明治四十一年七月	歌舞伎座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	中村吉右衛門	尾上菊五郎	守田勘彌	尾上榮三郎	中村駒助	市川新十郎	尾上芙雀		

年時	座名	名題									
大正三年十一月	明治座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	中村吉右衛門	守田勘彌	中村米吉	尾上榮三郎	中村東藏	中村翫助	尾上芙雀		
大正五年十二月	新富座	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	市川八百藏	實川延若	片岡市藏	市川猿之助	中村芝鶴	中村歌十郎	澤村源之助		
大正十年十一月	帝國劇場	太鼓音智勇三略（たいこのおとちゆうのさんりやく）	松本幸四郎	守田勘彌	澤村宗之助		澤村宗十郎	澤村長十郎			

ざんぎりお富

年時	座名	名題／役割	與三郎	おとみ	清七	お仲	久次	蝙蝠安	多左衛門
明治五年十月	守田座	月宴升毬栗（つきのえんますのいがぐり）	河原崎權之助	岩井半四郎	中村翫雀	岩井半四郎	市川左團次	市川小團次	中村仲藏
明治三十一年一月	明治座	延喜與三齋繭玉（えんぎよさたからのまゆだま）	市川左團次	澤村源之助	市川權十郎	市川莚女	市川左團次	市川小團次	市川壽美藏
大正五年五月	本鄉座	仇情戀路柵（あだなさけこひぢのしがらみ）	澤村訥子	澤村源之助	中村又五郎	岩井粂三郎	市川團右衛門	中村鶴藏	市川市十郎

夜討曾我

年時	座名	名題／役割	工藤	五郎	十郎	頼朝	鬼王	團三郎	仁田	虎
明治七年三月	村山座	蝶千鳥曾我實傳（てふちどりそがのじつでん）	河原崎三升	河原崎三升	中村宗十郎	中村宗十郎	關三十郎	中村時藏	坂東家橘	市川門之助

三人片輪

年時	座名	名題	仙右衛門	銀次	秋津	左吉	五郎七	おむつ	お咲	お園	六三郎
明治十四年六月	新富座	夜討曾我狩場曙	市川團十郎	市川團十郎	中村宗十郎	中村宗十郎	尾上菊五郎	市川左團次	坂東家橘	岩井半四郎	
明治十八年八月	中島座	蝶千鳥裾野曙		中村時藏		片岡我當			勝川又吉		
明治二十一年六月	新富座	夜討曾我裾野曙		市川團十郎	尾上菊五郎				中村芝翫	坂東家橘	
明治二十二年一月	明治座	夜討曾我狩場曙	市川左團次	市川左團次	市川權十郎	市川權十郎	中村壽三郎	市川小團次	市川壽美藏	市川升若	
明治二十九年六月	歌舞伎座	夜討曾我富士曙	市川團十郎	市川團十郎	尾上菊五郎	市川權十郎	尾上松助	尾上菊之助	中村芝翫	中村福助	
明治三十三年三月	同座	夜討曾我狩場曙	市川團十郎	市川團十郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川八百藏	市村家橘	市川八百藏	中村福助	
明治三十六年三月	東京座	夜討曾我狩場曙	市川左團次	市川左團次	市川小團次	市川猿之助	市川猿之助	市川莚升	市川荒次郎	市川升若	
明治三十六年六月	歌舞伎座	夜討曾我狩場曙		市村家橘	尾上梅幸	中村芝翫			市川高麗藏	中村芝翫	
明治四十年九月	市村座	十番切		片岡十藏	尾上榮三郎				坂東三津五郎	坂東秀調	
大正五年六月	帝國劇場	夜討曾我狩場曙	松本幸四郎	松本幸四郎	尾上梅幸	澤村宗十郎	尾上松助	中村吉右衛門	尾上幸藏	澤村宗之助	
大正九年八月	同座	夜討曾我狩場曙	大谷友右衛門	尾上菊五郎	澤村宗十郎		坂東三津五郎	市川男女藏	坂東三津五郎	市川男女藏	

年時	明治七年七月	明治十二年十月	明治十五年一月
座名	守田座	中島座	猿若座
名題	繰返開花婦美月（くりかへすかいくわのふみづき）	優咲開花演説會（かへりざきかいくわのよがたり）	三朝初湯注連繩（みつのあさはつゆのしめなは）
	尾上菊五郎	中村壽三郎	市川團十郎
	尾上菊五郎	尾上幸蔵	市川團十郎
	坂東彦三郎	中村重蔵	坂東家橘
	市川左團次	嵐桂子	坂東家橘
	中村芝翫	松尾猿之助	中村芝翫
	尾上いろは	澤村曙山	岩井紫若
	坂東秀調	澤村巴杖	岩井小紫
	坂東秀調	嵐徳之丞	坂東三洋三
	市川子團次	中村重蔵	中村福助

宇都宮

年時	明治七年十月	明治十四年十月	明治二十四年八月	明治三十七年十月
座名	守田座	春木座	市村座	歌舞伎座
名題／役割	宇都宮紅葉釣衾（うつのみやにしきのつりよぎ）	宇都宮紅葉釣衾（うつのみやにしきのつりよぎ）	宇都宮紅葉釣衾（うつのみやにしきのつりよぎ）	宇都宮紅葉釣衾（うつのみやにしきのつりよぎ）
本田上野	坂東彦三郎	市川權十郎	市川八百蔵	市川八百蔵
掃部頭	坂東彦三郎	市川壽美蔵	市川八百蔵	市川八百蔵
與四郎	尾上菊五郎	市川小團次	市川小團次	市村羽左衛門
越中守	尾上菊五郎	市川八百蔵	市川小團次	市村羽左衛門
靫負	市川左團次	市川壽美蔵	市川壽美蔵	片岡市蔵
八左衛門	市川左團次	市川權十郎	市川猿之助	
氏光	中村翫雀	市川小團次	市川新蔵	尾上菊五郎
お早	坂東秀調	岩井小紫	市川女寅	尾上梅幸
藤左衛門	中村仲太郎	中村鶴助	市川壽美蔵	尾上松助

吉備大臣

年時
座名
名題／役割
吉備大臣
呉懷寶
安祿山
楊國忠
玉蘭女

明治八年五月	河原崎座	吉備大臣支那譚（きびだいじんしなものがたり）	市川團十郎	市川權十郎	中村仲藏	市川團右衛門	尾上榮三郎
明治二十年八月	千歳座	吉備大臣支那譚（きびだいじんしなものがたり）	市川團十郎	市川權十郎	市川左團次	市川團右衛門	澤村源之助

大正十四年四月十八日印刷
大正十四年四月廿一日發行

著作權者印

上演、轉載等の場合は藏版者の許諾を得られ度候。

『默阿彌全集第十卷』
非賣品

補修　河竹糸女
校訂編纂者　河竹繁俊
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彥
印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地　堀江關武
印刷所　東京市小石川區諏訪町五十六番地　常磐印刷所
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂